

# ダンガンロンパ・フラ ワーズ

むらさき@ロンフラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

才能を持った高校生ばかりが通う学園に入学することになった鈴原椿。

しかし校門をくぐろうとした瞬間意識がなくなる。

気がつくとレトロな雰囲気の漂う遊園地・ヒストリエランドにいた。

同じように学園に入学した15人の生徒。

現れた首謀者と思われるクマと人面花によると「誰かを殺したら遊園地の外に出られる」らしい。

廃遊園地・ヒストリエランドにて絶望の種から、希望の花が咲き乱れる…。

pixivでも連載しております！

# 目次

ダンガンロンパ・フラワーズ プロ ローグ	1	章 4日目&事件発生	121
ダンガンロンパ・フラワーズ キャラ 紹介	40	ダンガンロンパ・フラワーズ 第1 章 非日常編―捜査	133
ダンガンロンパ・フラワーズ Cha pter 1「廃空楼獄遊園ヒストリエ」		ダンガンロンパ・フラワーズ 第1 章 非日常編―学級裁判	155
ダンガンロンパ・フラワーズ 第1章 1日目&2日目	70	ダンガンロンパ・フラワーズ 第1 章 非日常編―オシオキ	185
ダンガンロンパ・フラワーズ 第1 章 3日目(動機発表)	94	ダンガンロンパ・フラワーズ Cha pter 2「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」	202
ダンガンロンパ・フラワーズ 第1 章		ダンガンロンパ・フラワーズ Cha pter 2「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」	

6日目(探索編) ————— 230

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter

Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」非日常編—学級裁判(前編)

pter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」

336

7日目(動機発表編) ————— 257

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter

Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」非日常編—学級裁判(後編)

pter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」

362

8日目 ————— 278

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter

Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」非日常編—オシオキ ————— 395

pter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」

Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」特別編 ————— 429

9日目 ————— 293

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter

pter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」非

pter 3 「怪奇!悪夢の湯けむりナ

日常編—捜査 ————— 307

イトメアは実在していた!

Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	1	Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	1
0日目 (探索編)	—————	467	3日目 & 14日目	—————	590
Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	1	Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	非
1日目	—————	507	日常編—捜査	—————	627
Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	1	Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	非
2日目 (動機発表)	—————	536	日常編—学級裁判 (前編)	—————	677
Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	1	Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	非
2日目 (合法コンパ編)	—————	560	日常編—学級裁判 (後編)	—————	720
Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	非	Chapter 3	「怪奇! 悪夢の湯 けむりナイトメアは実在していた!」	非

日常編―オシオキ

773

Chapter 3 「怪奇！悪夢の湯

けむりナイトメアは実在していた！」特

別編

794

特別編

バレンタイン特別編くチョコレートハ

ウスの女子たちく

836

ホワイトデー？特別編くチョコレート

ハウスの男子たちく

856

# ダンガンロンパ・フラワーズ プロローグ



ダンガンロンパ・フラワーズ プロローグ

「彼女は始まりの楽園で眠っていた」



その学園は人々にとって、まさに「希望」の学園だった。

私立塞翁ヶ馬学園。

全国からあらゆる分野で一流とされる「超高校級」と呼ばれる生徒だけを集めた、政府公認の超特権的な教育機関。

そこを卒業すれば、将来を約束されたも当然……と言われるほどの学園だ。

実際、この学園の卒業生たちは各業界において超一流の人材になっている。

塞翁ヶ馬学園に入学する条件は2つ。

前も言った通り、あらゆる分野で一流であること。

一般的な入学試験ではなく、学園からスカウトされること。それだけだ。

もつとも、「幸運枠」と呼ばれる普通の高校生の枠もあるみたいだけど…。

わたしは、そんな学園の門の前に立っている。

わたしの名前は、鈴原椿（すずはら つばき）。

この塞翁ケ馬学園に「超高校級の天文学者」として入学することになった学生だ。

「超高校級の天文学者」といっても、実際には天文学者であり大学教授でもある父の仕事を手伝っていただけだ。

望遠鏡の整備をしたり、流星を観測してスケッチしたり…

最近は、お父さんとは喧嘩ばかりでやってないんだけどな。正直、市営の天文台のレストランのアルバイトの方が楽しいし。

この前調べてみたら、学園には他にも「超高校級の映画監督」「超高校級の科学者」「超高校級のラグビー選手」みたいな才能を持った人間の他に、

「超高校級のネットアイドル」「超高校級の提督」「超高校級の神父」みたいな人間たちも入学しているらしい。

はたして、そんな個性的な生徒たちとわたしなんかやっついていけるのか…不安になってくる。

「一緒に行こう、椿ちゃん」



隣で女の子の声でした。

わたしは彼女と共に塞翁ケ馬学園の校門を抜け…あれ？

この子、なんでわたしの名前を知っているの？

その瞬間。

大きく目眩がした。目の前に白と黒が広がる。

そしてわたしはうしろにないなきさけびくるしみきゆうさいされあんねいをえてまたう  
ばわれいかりくるい

そしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそして  
そしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそして  
そしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそしてそして

わたしは…黒へと落ちていった。

◆  
「あの一……」

声が聞こえる。

「あの一生きていますか？大丈夫……ですか？」

高い少年の声が聞こえる。どうやらわたしを軽く揺すっているのも彼らしい。

ゆっくり目を開けると……バスの中が見えた。要するにわたしは先程まで、バスの一番後ろの窓側の席で寝ていたらしい。

童顔で和装の少年がわたしの顔を覗く。わたしを起こしたのは恐らく彼だ。バスの窓は内側から黒いテープによって封鎖されている。辛うじてオレンジ色の明かりのおかげで、バスの中を見渡すことはできる。

「良かった、生きてるみたいだね」

「……ここは……バスの中かな？」

「そうみたいだね。でも、みんなさっき起きたばかりみたい。ほら」

わたしと少年以外にも乗客はいるようだ。

彼らも起きたばかりなのか、バスの中を見渡すもの、ここはどこなんだと疑問の声を

あげるもの、怯えるものなどがある。

そういうえば、わたしは塞翁ケ馬学園の校門をくぐろうとした瞬間に意識を失って、なぜかバスの中にいるんだった。

しかしなんでこんなところに。お気に入りの赤いコートの中に入れたはずのスマートフォンを探してみる。

しかし…スマートフォンがない。ということは、ここが何処なのか知ることができない。い。

と思った瞬間。

乗客の一人…一番前に座っていた長い銀髪の男性が、窓の黒いガムテープを剥がす。

「うっ…あの…いきなり剥がしても大丈夫でしょうか？」

男性の隣の通路側の席に座っていた、お団子頭の少女が声を掛けた。

それを気に留めることなく、銀髪の男性はガムテープを剥がした跡から漏れる外の光を見つめる。そして、口を開いた。

「このバスは、どこかのテーマパークの中に停まっているようです」

…テーマパーク？わたしたちは修学旅行にでも来ていたのか？

わたしも気になったので、窓のガムテープをゆつくりと剥がす。

観覧車、ジェットコースター…などの遊園地によくあるアトラクションが見える。

乗客の一人、ツーサイドアップの水色の髪の少女は立ち上がる。

「どんな所か、見てきてもいいかしら？」

ツーサイドアップの少女は可憐な外見からは想像もつかない大胆さで、バスの中を歩いていく。そして、ドアの前に立った瞬間……。なぜかドアは開いた。

自動ドアなのか？どんな所に停まっているのかわからないのに、何をされるかわからないのに、ツーサイドアップの少女はバスの外に出た。…そして、すぐに帰ってきた。

「地雷とか、侵入者を攻撃するマシンガンもないのね。つまらないわ」

「あの、自分の命…惜しくないのですか…？」

大きなリボンのピンク髪の少女が突っ込んだ。

「惜しくないわよ。あと、ここは日本にある遊園地…ヒストリエランドの園内みたい」

「…ヒストリエランドって？」 和装の少年が訪ねた。

「えーと…ヒストリエランドってのは日本にある所謂『ハイカラroman』をテーマにした有名な遊園地なんだよね。わたしは行ったことないし名前しか聞いたことないんだ」

「…ハイカラromanって？」

「明治とか大正とかに流行ったスタイル…と言った方がいいかな」

和装の少年はどうやら、ハイカラromanを知らないらしい…。わたしも詳しくないけど。

それよりも…外のことだ。スマートフォンをなくした今、ここでじっとしていても多分飢え死にしてみよう。

「ねえ、外に出た方がいいかな？」わたしは和装の少年に語りかける。

「うん、遊園地は初めてなんだ」

…遊園地は初めて？ 厳格な親だったんだらうか。

という訳で、わたしと和装の少年はバスの外に出ることにした。

他の乗客も立ち上がり、外へ向かおうとしている。

バスの外は、まさしくハイカラロマンな世界が広がっていた。

立ち並ぶのは、20世紀初頭のゴムナジウムのようなレンガの建物。

クラシカルな噴水、ブリキの看板、遠くに見えるのは青藍と海老色の観覧車…

異質なのは、園内は高いレンガの壁のようなもので囲まれていることだ。まるでどこ

かの漫画みたい。

ここは遊園地のエントランスのようで、天使たちの彫刻が集う白い大きな噴水がそそり立っている。

彫刻の天使の一人が、2時半を指す八角形の時計を持っている。

天候は晴れており、雲ひとつない…。ということ、今は午後2時半か。

バスの乗客が全員出たようだ。わたし含めて16人はいる。

「…でもさ、ヒストリエランドって…数年前に老朽化と経営不振で閉園になってたよな？」 バスの乗客だった、ヘッドフォンの少年が呟く。

「その時のノリと自己顕示で建てられた遊園地にはよくあることですわ」 長い黒髪の赤い和服の女性が返す。

「まさか、ハイジャック犯がデスゲームをさせようとしてるんじゃないでしょうね？」

また、ツーサイドアップの少女が物騒なことを言った。

「で、デスゲーム？まさか、鉄骨渡ったりするアレ？なら施設に爆弾とか仕込まれていたりしないよね!？」 お団子頭の少女が怯えている。

「…あの、すまない」

紺色の帽子を被った緑色の髪の青年が手を上げ、口を開いた。

「皆は…塞翁ケ馬学園の生徒ではないのか？」

「…そうだ。わたしは塞翁ケ馬学園に入学しようとして、校門をくぐろうとしたその瞬間に目眩がして…」

「アタシもだよ。母ちゃんにバイクで学園まで送ってもらって、校門をくぐろうとしてからの記憶がないんだよ」

「オレもじゃ…」 「わたくしもですわ」 「アテクシもなのです」 皆の声が上がる。

誰もが動揺したその時。

「皆、落ち着いて聞いてください」

銀髪の男性がなだめるように言った。周りが静かになる。

「このテーマパークは、恐らく封鎖されているようです」銀髪の男性が指差した先はヒストリエランドの出口…だったものがレンガで閉ざされている。

「ですが出口がここ以外にないとは限りません。まずはテーマパークを探索しましょう。一人ではなく必ず二人以上で行動するように。では、噴水前の時計が4時を指す前にはここに戻ってきてください」

銀髪の男性は踵を返すと、ゴーグルを付けた茶髪の少年の方向へと向かった。

「いっちゃん、相変わらず冷静だな」

「はい。私は貴族の部品です」

ゴーグルの少年は銀髪の男性と共にどこかへと向かっていく。

「ミーくん！この子怯えてカバン漁ってただけだよ、ちよつと一緒に行動した方がいいかな？」

「大丈夫！梨々もこの子も僕が守るさ！」

「あ、ありがとうございます…」

派手な格好の小さな少女と勇ましげな少年のカップルと思わしき二人の男女と、弱気なお団子で白衣の少女も。

「よっしや！ジェットコースター乗ろうかな！USJのジュラシックのやつは楽しいけどあそこのはもつと楽しそうやな！」

「さっきの男がここは古いつて言つてたよな!?やめとけよ！事故つたらゴミも散らかるだろうし！」

日に焼けた活発そうな少年も、箒と竹刀が合わさったような得物を背負った少女も。

「ふん、随分と南蛮好みの場所じやのう…：気に入った。後でオレがモノにしてやろう」

「モノにするつて？買取でもするつもり？」

マントを翻す髪を後ろに纏めた学生も、中性的な風貌の女性も。

みな、探索へと向かう。

「あの、探索…：しますか？」

和装の少年が話しかけてきた。

「まあね。出口もきつと見つかるだろうし」

少年の手を引き、歩こうとした瞬間、首あたりに違和感を感じた。思わず首元をさわる。

わたしは、ペンダントを付けているらしい。

しかも、3cmほどの大きさの、銅色の丸いロケットが特徴的なペンダント。なんで今まで気づかなかったのか。



中に出口の鍵でもあるかもしれないと期待し、ロケットの中を開けてみる。普段は写真が飾られている場所には何もなく、オルゴールの『きらきら星』の音色が鳴り響く。

きらきら星は、子供の頃から聞いてきた曲だ。

でも何だろう。この、とても落ち着くような感覚は。

届かないものに手を伸ばすような感覚は…

「きらきら星って、モーツアルトが作曲したんだよね？」和装の少年が訪ねた。わたしは我に返る。

「そうなんだ。わたし、知らなかったよ」

私はきらきら星を流すロケットを閉じ、少年と共に園内を歩き出した。



まずは、噴水近くに立てられていたヒストリエランドの地図看板を見てみよう。

左上には「第一エリア」と書かれてある…扇型の中には地図が描かれている。

地図によると、ここからはホテルが近い。まずは遠出よりも近所から攻略してみるべきか。

ホテルへ向かおうとしたその時。

「…あの」和装の少年が声を上げた。

「どうしたの?」

「あなたのお名前は？」

「そういや、自己紹介がまだだった。」

「私は鈴原椿。『超高校級の天文学者』なんだ」

「いい名前だね。改めて初めまして。ボクの名前は絹川蓮慈きぬかわれんじ。『超高校級の人形師』なんだ。」

「人形師？」

「人形は操ることもできるけど、作るのがメインかな？ 西洋のお人形から日本人形まで作れるよ。」

ボクの家は関東でも名高い人形作りの名家なんだ。

人間にほとんどサイズも形も近い人形を作ったから『超高校級の人形師』として塞翁ケ馬学園に入学することになったんだ。

という訳で…鈴原さん、よろしくお願いします」

絹川くんは、ペこりとお辞儀をしてくる。どうやら礼儀正しい少年のようだ。名家の人間だし。

それにしても、あちらこちらには監視カメラがついている。防犯目的だろうか？

しかし、廃遊園地なのに動かししておく必要はあるのか？ 歩道は誰も歩いてないし。



ホテルのエントランスの中に入る。ちょうどエレベーターからリーダー格と思わしき銀髪の男性と、ゴーグルを付けた少年が出てきた。

「まさか16部屋しか使えないとはな…早く休みてえ」

「もう少しの辛抱です、マユミくん。部屋には何もトラップは仕込まれていなかったの  
で大丈夫ですよ」

「あの…すいません、自己紹介しませんか…？」思わず敬語を使ってしまった。

「いいでしょう。マユミくん、この女性に自己紹介を」

「…はーい。いいよ。」ゴーグルの少年は面倒臭そうに言う。

「俺はまゆみじゆうべえ檀十兵衛。『超高校級の提督』って呼ばれてるよ。で、あんたの名前は？」

「わたしは鈴原椿…『超高校級の天文学者』だけど」

「ボクは絹川蓮慈です。『超高校級の人形師』だよ」

「そっか。じゃああんたはツバ吉で、そっちはレンきゅんでいいや」

「つ、ツバ吉!？」随分とおみくじみたいなあだ名だ。

「失礼、マユミくんは少し面倒くさがりな所がありました。では、改めて私から挨拶を。  
初めまして。」

私はイヴァン・ユグドラシルソン。アウリンコ共和国の由緒正しき貴族の部品。『超  
高校級の外科医師』です」

アウリンコ共和国？たしか北欧の、チーズとオーロラで有名な雪の小国…だったよね？

「いっちゃんアウリンコから来た留学生なんだ。俺もアウリンコへ留学した。で、いっちゃんからペンフレンドにならないかって誘われた訳」

「マユミくんはいつも戦艦ゲームの話題を書いてくれます。とても良い友人です。あとは、スナック菓子の長門エビセンや、今期のアニメは何を追うかとかの話題です」

「あ、長門エビセンはボクも好きだよ！」

絹川くんは嬉しそうに言った。

「あのさ、外科医師は大体予想つくんだけど、提督ってのは…？」「わたしは二人に訪ねる。

「マユミくんは留学中に、領海侵犯した海賊たちを駆逐艦1隻で撃墜したことがあるのです」

「…駆逐艦って、小型の軍艦だよな？それ1隻で？」

「駆逐艦ってもさ、今のモデルのはフリゲートよりは大きいやつがあるけど。駆逐艦適当に操ってたら撃墜したんだよね。」

「適当に!？」

「うん。『蒼海皇帝』ってゲームで覚えた。イージス艦とか操作しながら戦えるの。あれ、軍艦の操作のリアルさが売りなんだよね」

ゲームで操作を覚えるって…もしかして、所謂天才肌ってやつなのかな？

「私は外科医師でもあり、皆さんの救急箱でもあります。何か怪我をした時は是非私を使ってくださいね」

「うん！」

イヴァンくんは、絹川くんと仲良さげだ。でも、『私を使って欲しい』という、自分を道具としか見ていない発言に頷いていいのかな…？

その後は絹川くんとホテルのエレベーターに乗り、2階と3階を探索した。

使える部屋は2階と3階にある16部屋しかなく、どちらの階にも誰かしらの名前と似顔絵、植物の絵が描かれてあった。

例えば2階にある絹川くんの部屋のものと思わしきドアにはハスの絵が描かれていたし、3階にはツバキの絵のドアがある。

わたしたちの名前にちなんだ植物の絵を描いているんだろうか？

一瞬部屋の鍵がないことに驚いたけど、絹川くんがドアノブ下の黒い部分に触れると開いた。どうやら指紋認証らしい。

中身は何の変哲もないホテルの部屋である。けっこう広いし、机もテレビもケトルも置いてあった。

こここの遊園地がどうなっているのか知りたいので休むのは後にしておこう。

わたしたちはホテルのカウンターに載っていたパンフレットをそれぞれ一枚ずつ頂戴した。



ホテル近くのレンガ建てのレストランに入る。

ステンドグラスの窓とレコードプレーヤーから流れるジャズ。そして、会計下の食品サンプルを見つめている褐色肌に赤いマフラーを付けた小柄な少年は…。

「このオムライス、ヒヨコ何人分使ってるんやろうな！ビーフカレーも牛何頭なんやろ？」

「あーお腹空いてきた…シェフはいないんやろうか？ハンバーグもエビフライも食いてえなあ。で、そこの姉ちゃんはいでらんまると男の子は何が食べたいんや？」

「いや、今はお腹空いてないので…それより自己紹介しましょう」

わたしと絹川くんは少年に名前を告げる。

「自己紹介がしたいって？変やなー。レストランに来てご飯よりも自己紹介だなんて。

君が言いたいならいいや。僕は灰寺蘭丸はいでらんまる。『超高校級の探検家』やね！」

灰寺くんは親指を立てながら自慢げに笑う。

「僕は世界で一番大きい山・エベレストを最年少12歳で最速で登りきったんや。それからずっと探検家しとるんやで。」

洞窟の中で迷ったときはいつでも助けを呼んでほしいけんよろしくな!…なあ鈴原姉ちゃん和絹川、ところでこのレストランの従業員さん知らへん?」

「ボクたち以外には誰もいなさそうなんだ」

「そっか…なら、あそこにジェットコースターあるやん? 僕、一度ジェットコースターの路線を歩いてみたかったんや。絶対楽しいと思うんやけど…ダメ?」

「だ、ダメだつてば! 落ちたら死んじやうよ…!」 わたしは灰寺くんを阻止しようとする。

「大丈夫や! あそこのお土産屋には多分ロープとか売つてそうやからそれを使えば安全やし!」

「…お土産屋にロープ、あるのかな?」

レストラン内を竹刀と箒が合わさったようなもので掃く、黒髪のシヨートに赤と黄色のエクステの女の子も気になる…。

とりあえず、二人で自己紹介すると女の子に鋭い眼光で睨まれた。

「あ? 二人とも随分キレイで身なりの良さそうな服着てんなあ? オメーもこの遊園地にさらわれてきたのかア?」

「!?」 絹川くんが軽く怯える。

「あつ…ごめん。いつもの癖で…アタシは『超高校級の美化委員』二階堂にかいどうつつじ! よろし

くなー！」

「美化委員…わたしの学校にはなかったな」

「え？美化委員知らないの？まあ地味で真面目な生徒の役割らしいからね。アタシの学校、チンピラがワンサカいるところだったから。」

教室から建物の壁までゴミと落書きだらけ、授業中は罵り声が響き、弱肉強食でいじめられてる奴は人権すらない…

そんな学校の落書きを消したりしてるうちに『超高校級の美化委員』呼ばれるようになったんだよね。

アタシの父ちゃんと母ちゃん、どっちもワルなもんで。ヤクザとレディースやってたんだよ。

でも汚い部屋とか見るのなぜか嫌でさ、小さい頃からゴミ拾って掃除してた。

自分の部屋の掃除してえなら呼んでくれよ。この改造箒と『媚歌鬼奸』でマジキレイにしてやるからな！」

二階堂さんは改造箒を振り回す…と、あたりにはほこりが舞った。思わず咳き込みそう  
だ。

「うぎゃあ！またやらかしちまった！いつものチンピラどもと戦う時の癖で…！」

…一応、悪い子ではないと信じたい。



◆ レストランより北の方角のアスレチックへと辿り着く。普通のテーマパークと違わない普遍的なアスレチックだ。

「…ワンピースの女がゾンビに襲われて、アスレチックに登る。いい絵になりそうね。ちよつと経験してみようかしら」

先ほどの大胆なツーサイドテールの少女。彼女は縄でできたタワーの階段を登ろうとする。

「や、やめとけよー…そこに登ったらパンツ見えるだろー？健全な子供もいるんだしー？」

それを不安そうに見つめるヘッドフォンの少年。健全な子供とは絹川のことらしい。「…あの、自己紹介しませんか？」絹川が二人に告げる。子供扱いされたことは別に気にしてないのかな。

それを聞いた少女が縄の階段から戻ってきた。右目は青い髪で隠されている。

「あつ、鈴原椿です。『超高校級の天文学者』」

「絹川蓮慈です。『超高校級の人形師』です」

わたしたちが答えた後、二人はわたしたちに名前を告げた。

「私は黒木小百合。『超高校級の映画監督』よ」

「オレの名前は梅田純九郎<sup>うめだじゅんくろう</sup>。あだ名はスイカ言われてるけど梅だ。こう見えても『超高校級の図書委員』なんだよなー」

うん。梅田くんが着ているシャツは、明らかにスイカ模様だ。

「…ところで貴方たち、『灰色のフレデリカ』は当然知ってるのよね？」

「名前は知ってるけど詳細までは」

「なら教えてあげるわ。低予算で作られたラブコメホラーというニツチなジャンルでありながら邦画興行250億円の大ヒットを売り上げた、映画史に残る傑作よ。」

貴女も今度見てみたらどうかしら？主人公がヒロインのためにチェインソーを縛り付けたバイクで特攻するシーンは…天才的なカットと言われてるわ。全ての人間は私の映画にひざまづくのよ！」

随分と高飛車な人だ。で、梅田くんは…

「君たち、オレの本知らないかな？『僕と私の異世界探訪』ってライトノベル」

「…あの、ライトノベルってなに？」

…え？絹川くん、ライトノベルの意味も知らないの!?

「…漫画みたいな表紙の小説のことだ。知らないならいいや。オレ、いつもツイてなくて本無くすんだよなー。図書委員なのに。本探しの才能ならあるのに。」

図書館や本屋に置いてある本ならすぐに見つけ出せるんだけどさー、自分が持つてる

本はかなりの確率で無くすんだよなー。

お爺ちゃんからはいつも鞆に入れろって言われてるけど。なぜか無くす。鞆の底に入れても無くす。

転んだ時にどつか飛んでいくんだろーな…さて、本探すか。見つけたら教えてなー」

黒木さんは梅田くんをじつと見つめる。

「不運な図書委員ねえ。そういえば、塞翁ケ馬学園は『幸運枠』と呼ばれる一般的な生徒を入れるらしいけど。

いい映画の題材になると思わない？」

「…なるんじゃないかな」

アスレチックで遊んでいる暇はないので、次は少し東の場所にある洋館へ向かおう。



洋館。二階建ての建物は白く塗られ、まるで西洋の小さな宮殿のようだ。

「…うう…洋館自体は綺麗だけど…殺人事件とか起きないよね…」

この大きなシオルダーバッグをぶら下げた白衣で青いお団子髪の少女と。

「大丈夫だつて！いざとなったらミー君が助けてくれるつて！」

「集団で行動すれば君は大丈夫さ！安心したまえ！」

大柄な金髪の男性と、彼に抱きつく同じく金髪のツインテールの小柄な少女。ギャツプが激しい。

とりあえず三人に話しかけ、自己紹介を終える。

「えーと、あなたが鈴原ちゃん？えーと、メモ帳メモ帳…ポケットに入っていない…。」

あ、はじめまして！あたしは『超高校級のモデル』雨崎梨々あまざきりりって名前なの！

小柄なツインテールの少女、雨崎梨々の名前は聞いたことがある。確か、『Alice』ってモデル雑誌の読者モデルだったよね？テレビに出てたし。

そして大柄な男性は…

「初めまして！鈴原椿さんだね。僕は未隅実みすみみのる。『超高校級のラグビー部』さー！」

絹川くんがそんな雨崎さんと未隅くんをじつと見つめる。

「あの…ふたりは仲良しなんですか？」

わたしと白衣の少女が凍りついた。しかし…

「梨々は僕の恋人だ！同じ高校で出会ってきて、付き合った時からいつも一緒にいる。いつも僕を支えてくれる可愛い子だ！」

未隅くんは自慢するような大きな声で言った。どうやら恥ずかしくないらしい。

「あ、あの…私も自己紹介いいかな…？私は『超高校級の科学者』藍葉美郷あいはばみさと…って名前なの。」

えーと、何話したらいいのかな…まず、私の出身校の話とか？

いや、それじゃ自慢扱いされちゃうかな…？じゃあ天気の話とか？自己紹介じゃなくなっちゃうよね？」

藍葉さんは怯えるように言う。

「いや、どんな研究をしているのか知りたいんだ。科学者だから、やっぱり薬品とか作ったりするの？」

「わ、私の発明品ってことなのかな…？巨大戦車が踏んでも絶対割れないガラスちゃんとか、繊維だけを溶かすスライムちゃんとか、動くチヨコレートちゃんとか…

色々作ってるよ。」

藍葉さんはカバンを漁る。

「鈴原さんが好きそうなのは…あつた！超小型プラネタリウムちゃん！」

…出てきたのは青汁の缶だった。

「ま、また間違えちゃった!?昨夜持ち物リスト何回も確認したのに!?ひいひい！のど飴ちゃんあげるから…これで許してえ！」

藍葉さんはわたしに泣きついてきた。ものすごく弱気な子だ…。

白い洋館のドアは開かない。

仕方ないので、東のウォーターライドに行こう。

◆  
更に東のウォーターライドの前にたどり着く。丸太の急流すべり…ではなくブリキ色のドラム缶の急流すべりのようだ。こんなところまで徹底している。

入り口付近のベンチにはパンフレットをじっくりと読む紺色のシヨートヘアの女性が座っていて、

その近くでは笑顔の神父さんのような格好の青年が彼女に語りかけている。

「水は天の作りし神聖なもの。全てを流すが砂漠の水は旅人の救いにもなるのです」

「…あなた、鬱陶しいよ。似たような奴に街角でよく絡まれるんだよね」

話しかけてもいいんだろうか…？

「あの、あなたの名前を聞きたいんだけど、今は大丈夫かな？」

わたしが女性に語りかけると、女性はパンフレットから目を離し、ため息をつきながら告げた。

「…紅葉留架<sup>もみじるか</sup>。『超高校級のバスケット選手』。ポジションはポイントガードをやってる。よろしく。」

そして、神父風の青年も…

「新しき友よ、今日は。僕は蒲生公英<sup>がもうこうえい</sup>。『超高校級の神父』と呼ばれる者です」

わたしと絹川くんが後に自己紹介する。

「貴女の名前は…鈴原椿と言うのか。いい名前だ。大切にしなさい。

鈴原嬢は『超高校級の天文学者』なのです。天は全てを良き方向へと導きにならない。

例えば、ステラマリス…北極星は人々に北の方角をお教えするように。八芒星が賢者に救世主の誕生をお告げにならないように。

天が善をお救いするように、僕も天を愛しています。しかし…悪しき者には天はお怒りにならない。

貴女も罪深き言動には気を付けるように。さもなければ…天の裁きが下るだろう」

蒲生くんは整った顔立ちを持っていて、立ち振る舞いもまさしく神聖なものだ。

でも、どこか怪しい雰囲気も持っている。

一方、紅葉さんは…

「言つとくけど私、バスケ以外で他人と関わるの苦手なんだよね。あと、ファンサービスとか愛想振り撒くのも苦手。」

試合の時以外でパーソナルスペースに入られるのも正直嫌だからさ…今は話しかけないで。うん。」

…紅葉さんは、パンフレットを持ってどこかへ去っていった。

「…いつか彼女も、天の加護について知れるといいのですが」

蒲生くんは悲しそうに呟いた。



マツプ最北端の時計塔。ロンドンのそれほどではないが大きい。

こここの最上階に上がれば、いい眺めを展望できそうだ…

「ぎゃああああああつ!?!」

女性の悲鳴だ。悲鳴の方角を向くと、和服エプロンで黒髪の女性が、ピンク髪にリボンの眼鏡女性に追いかけて回されている異様な光景が…!

「うふふ…観念してくださいね?女嫌いな女ほどゆりんゆりんなんですよ〜?」

「こ、来ないでえ!私、女に触れると蕁麻疹が出てしまいますのおおお!」

「やかましい!貴様は死体慣れしてねえ兵卒か!」

必死に逃げる二人にキレているのは、灰色の髪を後ろにまとめた黒マントの青年。

「あ、あの。自己紹介よろしいでしょうか…?」

「あ?」「は?」「初めまして〜!アテクシはバニラ・キャンディ!あめだま星のプリンセスであり…『超高校級のネットアイドル』なのです!」

名前を言ってくれたのは、眼鏡の女性だけだった。

「あめだま星はソンブレロ銀河の隣に存在する、その名の通り建物の全てが飴でできた天然平和な国なのです。」



そこから訳あってこの地球にやってきたのです！

あめだま星へ帰る為の資金稼ぎとして、動画投稿サイトに踊ってみた動画とか投稿してるのです。

動画は大好評でなんと100万PV越え！ああ〜…かわいい女の子たちが見てくれるお陰なのです！」

アニメのキャラクターのような声で名乗るバニラさん。本当に本名なんだろうか？一方黒髪の女性は…絹川さんと仲良さそうに会話している。

「あらあら初めまして、私は『超高校級の<sup>いちのせあきほ</sup>大和撫子』であり『超高校級の女将』…」  
「<sup>い</sup>ノ瀬秋穂と申しますわ。どうぞご<sup>ご</sup>最<sup>最</sup>真<sup>真</sup>に」

「初めまして。わたしは鈴原椿。超こ…」

「あら、貴女はどうやら女なのですね？ズボンを履いているから殿方様だと思いましたが」

言葉を遮られた。

「ちなみに殿方様とは男性方のことですね。私、女に触れると蕁麻疹が出てしまいますの。だから近寄らないで…！」

本当に女性が嫌いなんだな。で、そのマントの青年は…

「貴様の名前は鈴原椿か。…首をポトリと落とされそうな名前じゃ。美しい名前でもあ

るがな。

オレは湖林右京こばやしうきょう…と名乗っておるがそれは仮の名前じゃ。本名は織田信長。あの天下人本人なんじゃ！

昔は大うつけそして第六天魔王、現代では『超高校級の歴史学者』と呼ばれておる！  
え？首を落とされそんな名前…？すごく落ち込む…以前に、織田信長？

「織田信長って、本能寺の変で死んだんじゃないの？あ、ボクは絹川蓮慈と言います」  
「フン。かつて織田信長は本能寺の変で自害したと思われた。しかし実際はこの現代にタイムスリップして赤ちゃんの姿になった。」

そして湖林右京として生きている…それが実際の歴史じゃ。現代では信長としての力を取り戻す為に歴史を学んだり茶器を集めたりしとる。その結果、ある歴史人物の遺産を見事見つけたのじゃ」

「そうなんだね！湖林くん、凄いや！」絹川くんは目をキラキラと輝かせている。

「あ、あのさ。もしかして、変な思い込みとかじゃな」

「あ？」湖林くんは凄い剣幕で睨んできた。

「貴様、オレを信長じゃないと疑うんか？どうやら強制的に切腹されたいらしいなあ。

それとも一銭切かあ？」

「す、すいませんでした」

「今回は許す。だが次に疑った時は容赦はせん。オレは本物の信長じや。いいな？」  
ものすごく唯我独尊な人だ。話しかける時は気をつけよう。

それにしても、立派な時計塔だが…入れるのかな？ドアはレトロな自動ドアのよう  
だ。

入ろうと必死に開けたが、ビクともしなかった。

◆ ウォーターライド近くのステージ。

レンガ色をしたそこは野外ライブやヒーローショーができそうな広さだ。

それ以外には何もないので後にしよう。

◆ 広場近くにあるのはお土産屋…だが、簡単なホームセンターのような場所だった。  
お土産はなぜかない。代わりにロープや仮面、ハンマーが置いてある。

レジ台には『モノモノマシーン』と書かれたガチャガチャがある。

◆ 回すにしてもお金はない。わたしたちを拉致した人間に奪われたんだろうか？

◆ 全て見回ったので噴水広場に集まることにした。

「このテーマパークにいるのは全て塞翁ケ馬学園の16人の新入生のようです。」

他には従業員も来客もいませんでした。そして、ホテルの指紋認証はここにいる16人全員が登録されているようです」

すっかりリーダー格になったイヴァンくんが言う。

「そういやここ、廃園になったんだよね？なぜか設備はボロボロ…じゃなくて綺麗だね」

「僕たちはきつとヒストリエランドの一日チケットをプレゼントされたんだろうね！多分！」

「もー！ミー君と遊園地行くの3回目なのにー！と言うか懸賞応募してないしー！」

雨崎さんと未隅くんは相変わらずイチャついてる。

「なあ…僕たちさ、なんか監視されてるような気がしない？この遊園地のあちらこちらに監視カメラみたいなのがあるし…」

灰寺くんが言う。防犯目的だと思っていたが、そうでもないのか？

それを仕組んだ人達は、何が目的なのか？

そう思った瞬間。

「あー、マイクテスト。マイクテスト。園内放送。園内放送です。」

ボクは一人と一輪で寂しいのでオマエラは園内のステージに集まってください。クマは寂しいと死んじゃうんだよねー。」

「くひひひ…楽しい楽しいショーが始まる予定なのだ。アナタラのご来場をお待ちしてますのだ。」

園内放送が流れた。特徴的な声と、微妙に明るい声の二種類の声が聞こえる。

「まさか、ここに連れてきた首謀者が？」

「いつちんも行くのか？めんどくせえな…何もイベントのない場所ですつと閉じ込められるのとどっちがマシなんだろうな。」

一体、何が起ころうとしているのか？

わたしたちは、確かめるためにステージへと向かった…。



ステージにたどり着く。その上には、大きな演台のようなものが置かれていて…。

「う。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。 全員来たようだね。」

「アナタラ、お待たせしましたのだ！」

声が二つ響く。その瞬間…

演台から何かが、飛び出してきた。

右は白く、左は黒い不気味なクマのぬいぐるみと、クマが持っている、植木鉢に植えられた花。

「ボクはモノクマ。荒んだ現代に蘇った一筋の闇であり…塞翁ケ馬学園の学園長なので

す！」

「そしてわーはカラフラなのだ！絶世の絶対運命美少女であり、塞翁ケ馬学園の理事長なのだ！」

学園長の威厳など全然なさそうな生き物と、美少女でもなんでもない花びらが5色のカラフルな人面花。

それが出現して、喋った。異様な光景に皆は動揺する。

「な、なんじゃあ…!? あんなもん戦国でも見たことねえ!?!」

「ひいいい…クマや花が喋るわけないし夢だよね!?! こう言うのは、催涙スプレーちゃんです…」

「落ち着け。こういうのは高度なAIを持ったロボットだと思えばいい。最近はずっとロボットとか流行りでしょ?」

紅葉が、藍葉をなだめている。

「さて、早速オマエラにプレゼントがあります。これは『電子生徒手帳』だよ。」

学園長を名乗るそれ…モノクマは、白黒の箱を演台から取り出す。そして、箱の中身を取り出す。

中身は…モノクマと同じカラーリングの薄いスマートフォンのようなものだった。

「これ、アタシのスマホじゃん！返して…って違う?」

「ナウでヤングな若者はスマホなんてオサレなもの持つてないで、もう少しこういうハイカラなもの持ちなよ」

モノクマはわたしたちに『電子生徒手帳』と呼ばれたスマートフォンを投げてきた。

電子生徒手帳には星の形のストラップが付けられ、画面にはわたしの名前が写っている。

『超高校級の天文学者 鈴原椿』

「どうやら電子生徒手帳には才能に合ったストラップがそれぞれ付けられているようだ。」

「モノクマ殿、貴方は一体何がしたいのですか？何か不埒なことを行おうとするのなら、天が罰を与えます！」

「そうですわ！陰湿な行為は警察の殿方様がお捕まえになられますわ！」

モノクマは、落ち込んだ様子で言った。

「あのね、オマエラは一生このヒストリエランドから出られないの。一生共同生活なの」「警察も動かない。政府もすつとぼけ。でもね。アナタラがもし出たいんなら……」

モノクマとカラフラは、声を合わせて言った。

「「ここに」いる16名のうち誰かを殺してください。そして、学級裁判を生き延びてね

！」

16人のうち誰かを殺す。

そして、学級裁判を生き延びる。

それは、予想もつかないワードだった。

「ねえ、その学級裁判って…どういう意味？」

「まさか…アタシらは殺し合わなきゃなんねーのか!?! そんな漫画みてえな設定ありかよ  
！」

「それがアリなのだ！ 例えればピサの斜塔のような不思議。例えればバタフライエフェクトのような偶然。それがコロシアイ遠足なのだ！」

「コロシアイ…遠足？」

わたしは、立って聞くことしかできない。

「そうなのだ！ では、わーから説明するのだ。

アナタラの間で殺人が起きた場合、生存しているメンバー全員には、必ず学級裁判に参加して貰う事になるのだ。

学級裁判では殺人を犯した『クロ』とそれ以外の『シロ』に分かれて、クロが誰かを



議論してもらい…

その後の投票でアナタラが一番多く投票したクロが正解だった場合は殺人を犯したクロだけが『オシオキ』され、

遠足は続行されます。ただし、アナタラが間違った生徒をクロとして投票した場合は

：

クロ以外の全員が『オシオキ』されてしまいますが、クロは見事このヒストリエラントから出られるのだ！」

「オシオキ？ どういう意味なのでしょいか？」

「オシオキ？ つまり処刑だよ。なんちやらタワーから転落死とか、なんちやらノートで心臓麻痺とかそんなところかな？」

…処刑？

まさか、人の命を懸けたデスゲームなのか？

「殺し方は問わないのだ。射殺や撲殺、爆殺や斬殺、毒殺感電殺溺殺墜落殺憤殺呪殺…

まあ、クロがバレなければなんでもいいですよ。死のバーゲンセールですからね。コロシアイってのは」

「い、嫌だよ殺し合いなんて…たすけてミー君…」

「梨々、きつと殺し合い以外にも助かる方法はあるはずだ」

「ねえ、一つ質問があるわ」

前に出た黒木さんが、モノクマに問う。

「貴方達の目的はどういうものなの？なぜ塞翁ケ馬学園の新入生ばかりが集められているの？」

「どうだろうね。今のところはお伝えできません。

まあ、これだけはボクから伝えておくよ。

ボクは、絶望と希望が見たい。それだけなんだ」

モノクマの尖った右目が光る。

それでも黒木さんは…冷静だった。

「そう。このコロシアイとやらが起こればわかるという事ね」

しかし、それでも生徒たちの動揺は収まらない。

「巫山戯んなこのクマあ！コロシアイ？学級裁判？そんなんあやつをブチ壊せばいい話じゃあー！」

激怒した様子湖林くんが、ステージ目掛けて突進しようとする。

しかし…

湖林くんの手を、握った少年がいた。

「待って！」

「な、何するんじゃない!?痛いんじゃない!?モノクマをやらんとあかんのじゃが！」

絹川くんだった。彼は、手首をわたしが見ていても痛いほど強く握りしめている。

「今は何が起こるかわからないけど…モノクマは多分、ボクたちが何もしなければ諦め  
ると思う。」

だから…今は静かにしようよ」

湖林くんは、絹川くんの手を振り払う。モノクマに突撃するのは諦めたようだ。

その様子を、呆れた目で見ていたクマと人面花がいた。

「あーあ、まあ見せしめなんてツマライナイからね。」

絶望と希望を共に作り上げるのがコロシアイ遠足。まあ、やりたくなければやらなくていいのだ。

一先授業もなんにもない遊園地から出られないのもある種の希望かもしれないのだ。さて、アナタの希望はどこまで絶望に勝てるのかな?くひひ…!」

カラフラは植木鉢ごどこかへと消えていく。

「はあ…カラフラつたらまたボクの台詞取っちゃってるよ…やつぱりガーデニング始めるなら近所のホームセンターだね。人面花なんて置いてない寂れた場所だし」

モノクマもどこかへと消えていった。

困惑する生徒たち。コロシアイ遠足。

それぞれが目を合わせる。まるで、誰かを疑うように。

現実を見たくない。疲れた。辛い。苦しい。理不尽。

負の感情が巻き起こっているのに、この場から去るものは誰一人としていない。

この時わたしたちは、これ以上の絶望が待っていることを知るよしもなかった。



ダンガンロンパ・フラワーズ プロローグ

「彼女は始まりの楽園で眠っていた」

END

生き残りメンバー

残り16人

・「オルゴールペンダント」を入手しました。

プロローグをクリアした証。

ロケットを開けるとモーツアルトの「きらきら星」が流れるペンダント。

鈴原がなぜかつけていた。銅色の丸い形がシンプルながらも美しい。

# ダンガンロンパ・フラワーズ キャラ紹介

鈴原椿（すずはら つばき）

【才能】超高校級の天文学者

【性別】女

【イメージ植物】ツバキ（控えめな素晴らしき）

【年齢（生年月日）】3月18日（精霊の日）

【血液型】A型

【出身校】霊清女学院

【好き】ロックミュージック

【嫌い】ピクルス

【身長】160 cm

【体重】52 kg

【バスト】84 cm

【イメージカラー】カメラア（#da536e）

【人稱】一人称はわたし。男子は「くくん」、女子は「くさん」と呼ぶ。

【ICV】日高のり子

【容姿】

濃い茶色の瞳に薄い茶色の髪。

サロペットとオーバーオールを混ぜ合わせたような服の上に赤いコートを着ている。

主人公。天文学者である父の影響で天文学を志しているが、最近はその父と不仲。

弱い人間を見ると助けずにはいられない性格。

それはロシアイの時でも例外ではなく、生徒達を嘲笑うモノクマにも立ち向かう。

ある人物と物語開始前に出会っているようだが…？

【台詞集】

「それは違うぞ！」

「その言葉、ぶった斬る！」

「これがわたしの推理だ！」

黒木小百合（くろき さゆり）

【才能】超高校級の映画監督

【性別】女

【イメーシ植物】ユリ（聖母に捧げられた純潔のシンボル）

【年齢（生年月日）】6月11日

【血液型】A B型

【出身校】九武陸（きゆうぶりく）学園

【好き】特急列車

【嫌い】おたく

【身長】161cm

【体重】47kg

【バスト】87cm

【イメーシカラー】アカデミーブルー（#428abd）

【人稱】一人称は私。男子は苗字呼び捨て、女子は「くさん」と呼ぶ。

【ICV】早見沙織

【容姿】

アクアマリンブルーの瞳に薄い水色のウェーブのかかったツーサイドアップの髪にリボンとカチューシャ。右目が髪で隠れている。

ワンピースの上にボレロを羽織っている。どちらも青系。白タイツ着用



邦画興行250億円のていよさん大ヒットホラーラブコメ「灰色のフレデリカ」の監督。

本人は高飛車なキャリアアウーマン思考であり、全ての人間は自分の撮った映画を見れば自分にひざまつくと本気で思っている。

コロシアイに關しては「黒幕にとってはある種のエンターテイメントかもしれない」という考えを持つ。

【台詞集】

「まるでバッドエンドみたいね？」

「その推理、カットするわ！」

「諦めなければ願いは叶うのよ！」

藍葉美郷（あいば みさと）

【才能】超高校級の科学者

【性別】女

【イメージ植物】アイ（美しい装い、あなた次第）

【年齢（生年月日）】10月23日

【血液型】 A B

【出身校】 阿見乃大学付属校

【好き】 脳トレ、安心

【嫌い】 シンナーの乱用

【身長】 159 cm

【体重】 51 kg

【バスト】 94 cm

【イメージカラー】 インディゴ (#0a0a2d)

【人稱】 一人称は私。男子は「く君」、女子は「くさん」と呼ぶ。

【ICV】 小倉唯

【容姿】

瞳は丸い水色の瞳。髪はグレーの入った水色の髪を2つのお団子にして分けている。

白衣の下にセーラー服と青いキュロットスカートを着ている。

実験道具が入った巨大な鞆を提げている科学者の少女。

慎重派で、いつもおどおどしているネガティブ思考の持ち主。

何かあれば薬や化学反応、発明品に頼ろうとする。

発明したものとしては巨大戦車が踏んでも絶対割れないガラス、繊維だけを溶かすス

ライム、動くチョコレートなど。

【台詞集】

「クロロホルムちゃんでは人は気絶させられないんだよお？」

「ええーと…汚物やコーラや硫酸やモノクマを混ぜたような…そんな感じなんだよねえ…」

「この後路地裏に連れ込まれてランチされた挙げ句服も脱がされてもつと酷いことされ…海外に臓器を売り飛ばされるんだ…！」

超高校級の女将 一ノ瀬秋穂（いちのせ あきほ）

【才能】 超高校級の女将

【性別】 女

【イメージ植物】 ススキ（心を通じる）

【年齢（生年月日）】 9月10日

【血液型】 A型

【出身校】 満月高校

【好き】 殿方様、温泉

【嫌い】 女ども、は虫類

【身長】 164 cm

【体重】 49 kg

【バスト】 89 cm

【イメージカラー】 茜色 (#b7282e)

【人稱・口調】 一人称は私。男子は「く様」、女子は苗字呼び捨て。

【ICV】 ゆかな

【容姿】

濃い灰色の瞳と黒髪ロング。口の周りにホクロがある。

着物の上に赤いエプロンを付けている。また、靴は草履である。

日本最大の売り上げを誇る温泉宿・一ノ瀬旅館の女将。

「超高校級の「大和撫子」を自称する黒髪長髪の乙女。

しかし惚れ癖があり、男性なら誰にでも惚れてしまう。

逆に女性は触ると蕁麻疹が出るほど嫌い。

【台詞集】

「ああ…今日も殿方様は素敵ですわ…」

「おもてなしが必要みたいですよわね！」

「知りませんわ知りませんわ…絶対女の仕業に決まっていますわ…」

## バナナ・キャンディ

【才能】超高校級のネットアイドル

【性別】女

【イメージ植物】バナナ（永久不滅）

【年齢（生年月日）】11月1日

【血液型】O

【出身校】小蔵女子高等学校

【好き】ビーズ、かわいい女の子

【嫌い】エグいバナナ広告

【身長】158 cm

【体重】46 kg

【バスト】88 cm

【イメージカラー】クリーム色（#fff3b8）

【人稱・口癖】一人称は「アテクシ」、たまに「私」。男女共に「く殿」と呼ぶ。「くのです」。

【ICV】悠木碧

## 【容姿】

瞳はピンク色だがカラコンで、本当の目の色は黒。赤いメガネをかけている。髪型はポニーテールのような濃いピンク色の三つ編み。

クリームイエローのブレザーとライムグリーンのスカート。

「自分はおめだま星のプリンセス」と自称する美少女。

おめだま星はどうやら天然平和な国らしく、ぶりっこのような言動が目立つ。

実は「かわいい女の子」が恋愛対象。

## 【台詞集】

「じゃあ藍葉殿！アテクシとその薬品をベッドで一緒に使」

「あなたはそう言ってばかりなのです。偉い人にはそれがわからんのですか？」

「あ、アテクシが密かに作っていたおめだま星への帰還チケットはどうなのですか!？」

雨崎梨々（あまざき りり）

【才能】超高校級のモデル

【性別】女

【イメージ植物】ナシ（愛情、木の場合は慰め、癒し）

【年齢（生年月日）】 8月5日

【血液型】 B型

【出身校】 女蜂ヶ丘高校

【好き】 スイーツ、キラキラしたもの

【嫌い】 水泳

【身長】 155cm

【体重】 48kg

【バスト】 82cm

【イメージカラー】 イエロー（#ffd400）

【人称・口調】 一人称はあたし。男子は「くくん」、女子は「くちゃん」と呼ぶ。未隅は

「ミークん」。

【ICV】 富田美憂

【容姿】

緑のつり目、赤いリボンカチューシャを付けた大きな金色のツイントール。

デニムジャケットにオレンジのネクタイ、赤いミニスカートに赤いハイヒール。

高校生に高い人気を誇るファッション雑誌「Alice」の人気読者モデル。

大きなツイントールに小柄な体格、甘え上手で気さくな性格で相手はメロリンQにな

る。

ただし、未隅実とは恋仲。

【台詞集】

「あたしとミー君は…ずっと恋だよ！」

「だってモノクマ、写真映えしそうな可愛いマスコットじゃないもん！」

「ごめん、ちよつとタンマー！」

紅葉留架（もみじ るか）

【才能】 超高校級のバスケット選手

【性別】 女

【イメージ植物】 モミジ（節制、非凡な才能）

【年齢（生年月日）】 2月17日

【血液型】 AB

【出身校】 酒吞童子学園

【好き】 菓子パン、寿司

【嫌い】 借金

【身長】 176cm



【体重】 58 kg

【バスト】 80 cm

【イメージカラー】 トワイライトスカイ (889cba)

【人称・口調】 一人称は私。男女共に苗字呼び捨て。

【ICV】 齋賀みつき

【容姿】

瞳は紫色で小さめ。髪は紺色のショート。

白いシャツに黒いズボンにネックレスを付けている。

高校生にして海外のチーム相手に完勝した女子バスケットチーム「ロマンシングオウガ」のリーダー。中性的な風貌の持ち主。

女子人気は高いが、本人は厭世家で試合以外では周りの人間と関わろうともしない。

ファンサービスや愛想を振り撒くのか苦手なのか、いつも無表情。

【台詞集】

「…これで超高校級なら呆れるよ」

「こんなことまでするなんて、君は本当に何者なんだい？」

「諦めろ、ここで試合は終わりだ」

二階堂つつじ（にかいどう つつじ）

【才能】超高校級の美化委員

【性別】女

【イメーシ植物】赤いアザレア（規律正しく）

【年齢（生年月日）】4月22日（清掃法制定）

【血液型】O

【出身校】荒野高校

【好き】100円シヨップ

【嫌い】壁の落書き

【身長】165cm

【体重】54kg

【バスト】78cm

【イメーシカラー】アザレアピンク（#FF3399）

【人稱・口調】一人称はアタシ。男女共に苗字呼び捨て

【ICV】東山奈央

【容姿】瞳はつり目だが赤く、髪は赤と黄色のメッシュの入った黒い外はねショート。

服は赤のスカジャンにオレンジのTシャツ、青のスカート。スパッツを履いている。

父親は元暴力団員、母親は元レディース…という犯罪者の家系なのに、なぜか綺麗好きで正義感に溢れた少女。

しかし不良のような乱暴な言動や暴言が目立つ。

常に竹刀を背負っており、部屋を荒らす者や着衣の乱れた者は必殺技「媚歌鬼奸（びかきかん）」によって叩かれてしまう。

【台詞集】

「持ち物検査の時間だ！ゴラア！」

「自分の部屋の掃除してえなら呼んでくれよ。この改造箒でマジキレイにしてやるから！」

「その推理、キレイにしてやる！」

湖林右京（こばやし うきよう）

【才能】超高校級の歴史学者

【性別】男

【イメージ植物】スギ（雄大、堅固）

【年齢（生年月日）】 5月12日（織田信長の誕生日）

【血液型】 A

【出身校】 宗易商業高校

【好き】 干し柿

【嫌い】 酔っ払い

【身長】 170 cm

【体重】 69 kg

【バスト】 88 cm

【イメージカラー】 えんじ（#B3424A）

【人稱・口調】 一人称はオレ。男女共に苗字呼び捨て。「オレはくじや！」

【ICV】 吉野裕行

【容姿】

瞳はピンク寄りの紫色のツリ目。髪は灰色の髪を後ろにまとめている。

黒い学ランの上に青黒いマントを羽織っている。中に着ているシャツは赤い。

とある歴史人物の遺産を発見したことで知られる歴史学者。

自分を「織田信長本人がタイムスリップして赤ちゃん頃に戻り、成長した姿」だと信じて止まない。

当然、性格は短気で唯我独尊な俺様タイプ。

【台詞集】

「うつけが。オレは知らんぞ?」

「天下天下唯我独尊!それがオレの真名・織田信長じゃあ!」

「:そうか。首をポトリと落とされそうな名前じゃ。美しい名前でもあるがな」

イヴァン・ユグドラシルソン

【才能】 超高校級の外科医師

【性別】 男

【イメージ植物】 トネリコ (偉大、服従)

【年齢 (生年月日)】 5月17日 (ノルウェーナショナルデー)

【血液型】 AB

【出身校】 ラーズグリース校

【好き】 白色

【嫌い】 夏の暑さ

【身長】 184 cm

【体重】 68 kg

【バスト】 90cm

【イメージカラー】 シルバーホワイト (#c d d 4 d 7)

【人稱・口調】 一人称は私。敬語を使うが独り言の時はそうでも無い。「治療」「軽症」ではなく「修復」「軽度の不都合」と呼ぶ。

男女共に「(苗字のカタカナ表記)くん」と呼ぶ。

【ICV】 速水奨

【容姿】

青い瞳と銀色のロングヘア持ち主。眼鏡をかけている。

ベルトの沢山ついた白いコートをいつも着ている。

北欧のアウリンコ共和国からの交換留学生。

王政時代から続く由緒正しき貴族の家の生まれであるが、次男であるために家を継げず、軍医の道を志す。

穏やかで落ち着いてはいるが、自分の言いたいことははっきり言う性格。しかし、自分や他人を人間として見れない発言と独り言が多い。

同じ留学生である檀とはいつも行動を共にする仲。

【台詞集】

「貴族であれ、こういう汚れ仕事もこなさねばなりません」

「軽度の不都合です。修復すれば問題ありません」  
 「何か怪我をした時は是非私を使ってくださいね」

梅田純九郎（うめだ じゅんくろう）

【才能】 超高校級の図書委員

【性別】 男

【イメーヂ植物】 ウメ（高潔、忍耐）

【年齢（生年月日）】 11月9日

【血液型】 O

【出身校】 蔦谷学院高校

【好き】 ヒーロー番組

【嫌い】 麦茶に砂糖を入れること

【身長】 175 cm

【体重】 65 kg

【バスト】 88 cm

【イメーヂカラー】 紅梅色（#DF828A）

【人称・口調】 一人称はオレ。「○○なんだな」とよく語尾を伸ばす。男女共に苗字呼

び捨て。

【ICV】 増田俊樹

【容姿】

ピンク色のタレ目に梅色の髪。ヘッドフォンをいつも付けている。

抹茶色のベストの下には半袖のスイカのようなシャツを着ている。ズボンは茶色。

生まれてすぐに両親を亡くし、書店を運営する祖父母の家へと預けられた過去を持つ少年。

本好きと好奇心旺盛な性格が転じて図書委員になった。

お調子者だが、不幸体質なのでよく痛い目に合ったり本を無くしたりする。

いつもハイテンション。

【台詞集】

「まさか、コロシアイでも起こっちゃまったのかー!？」

「いってー。死ぬところだったよー。」

「あーやっちゃまったー…本無くすとか最悪だ…いつものことだけど…」

絹川蓮慈（きぬかわ れんじ）

【才能】 超高校級の人形師



【性別】男

【イメージ植物】ハス（極楽浄土に咲く。清らかな心、雄弁）

【年齢（生年月日）】7月3日（誕生花が蓮）

【血液型】B

【出身校】無量光高等学校

【好き】七宝焼、折り紙

【嫌い】犬、大きな声

【身長】155cm

【体重】48kg

【バスト】70cm

【イメージカラー】萌黄色（#A9D159）

【人称・口調】一人称はボク。ゆったりとした口調。男子は「くくん」、女子は「くさん」と呼ぶ。

【ICV】蒼井翔太

【容姿】

青緑色の円らかな瞳と、緑のかかった鳶色の髪。

和風で萌黄色のセーラー服を着ている。また、手袋をしている。

東から西まで幅広い人形作りや傀儡師までこなす人形の名家で知られる絹川家の一人息子。

ほぼ人間に近い人形を作れるという才能を持っていたために塞翁ケ馬学園に入学した。

のんびり家な平和主義者であり、コロシアイも多分なんとかなると本当に思っている。

【台詞集】

「作ってたよ。ボク、人形に囲まれて暮らしてるんだ。だから、人形を作ると友達が増えたみたいで嬉しいんだ」

「大丈夫だよ。ボクが見張ってあげればいいんだよね？」

「綺麗な滝だね。あの丸いのに乗ったら面白いのかな」

未隅実（みすみ みのる）

【才能】超高校級のラグビー部

【性別】男

【イメージ植物】リンゴ（優先、好み）

【年齢（生年月日）】2月9日

【血液型】O型

【好き】ほうれん草

【嫌い】雑用

【出身校】女蜂ヶ丘高校

【身長】194 cm

【体重】98 kg

【バスト】90 cm

【イメージカラー】エバークリーン（#618724）

【人稱・口調】一人称は僕。男子は「く君」、女子は「くさん」と呼ぶ。

【ICV】稲田徹

【容姿】

緑色の瞳に金髪のオールバック。鷲鼻気味。

黄色いタンクトップの上に青いジャケットを羽織り、黄土色のズボンを履いている。  
シューズは黄色。

弱小ラグビーチームを全国トップにまで成長させた経歴を持つ筋肉質な高校生。

リーダーシップと自信に満ちた男であるが、天然なところもある。

雨崎梨々とは相思相愛の仲。

【台詞集】

「君のお陰で梨々が助かったよ！ありがとう、つまり感謝を君に伝えたい！」  
「ふふ、これは僕なりのスポーツマンジョーク！」  
「タツクルを食らうといい！」

檀十兵衛（まゆみ じゅうべえ）

【才能】超高校級の提督

【性別】男

【イメージ植物】マユミ（真心、あなたの魅力を心に刻む）

【年齢（生年月日）】12月22日（東郷平八郎の誕生日）

【血液型】A

【出身校】宵月海洋高等学校

【好き】美女、スナック菓子

【嫌い】努力、口うるさい奴

【身長】169 cm

【体重】58 kg

【バスト】85 cm

【イメージカラー】 貝紫色（#7F1184）

【人称・口調】 一人称は俺。他人をあだ名で呼ぶ。

鈴原↓ツバ吉、黒木↓さゆりん、バニラ↓バニー、一ノ瀬↓アッキー、雨崎↓りりりん、紅葉↓ルカ子、二階堂↓つつつ、藍葉↓ミサミサ

絹川↓レンきゅん、湖林↓信長もしくは信長もどき、未隅↓みのるん、イヴァン↓いちん、灰寺↓ランきゅん、蒲生↓タンポポ、梅田↓めうめう

【ICV】 松岡禎丞

【容姿】

クリーム色の三白眼。困り眉。ボサボサの茶髪。なぜかゴーグルを付けている。

紫色のパーカーによれよれのズボン。

海軍に最年少でスカウトされ、海士長の地位を授かった少年。

アウリンコ共和国に一度は行ったが、とある事情で帰国した留学生でもある。

しかし怠け癖がありいつもポテチを持ち歩いては食べている。そのためか、二階堂からはマークされている。

浪費癖があり女好き。

【台詞集】

「ツバ吉さ、お前何考えてんの？バカなの？轟沈すんの？」

「だりい…議論なんて勝手にやってろよ…」  
「…よし、撃沈だな。俺の勝ちだ」

灰寺蘭丸（はいでら らんまる）

【才能】超高校級の探検家

【性別】男

【イメージ植物】胡蝶蘭（幸福が飛んでくる、純粋な愛）

【年齢（生年月日）】1月28日

【血液型】O

【出身校】鎧高等学校森分校

【好き】綺麗な石

【嫌い】硫黄の臭い

【身長】156 cm

【体重】58 kg

【バスト】80 cm

【イメージカラー】サンライトイエロー（#ff9046）

【人称・口調】一人称は僕。方言が混ざった言葉を使う。男子は「く兄ちゃん」、女子は

「姉ちゃん」。

絹川、雨崎は呼び捨て。

【ICV】 山本和臣

【容姿】

褐色肌。瞳はベージュ色で髪は跳ねた茶色いショート。そばかすがある。

赤いマフラーに緑のパーカー、青い半ズボンを履いている。

エベレストを最年少12歳、最速で登山したことで知られる少年。

方言のような言葉を使う。小学生のような見た目だが運動能力は高く、本人曰く「かけっこが得意なんや」とか。

性格は子供っぽいが、子供扱いされると怒るので注意。

【台詞集】

「人の命を微塵とも思わねえ殺人犯らしいやり方やな！」

「しかしうめーじゃん！近所の洋菓子店のおばちゃんのケーキしか知らなかったけどうめーな！」

「よし！僕があそこへ登っちゃる！」

蒲生公英（がもう こうえい）

【才能】超高校級の神父

【性別】男

【イメージ植物】タンポポ（信託、真心の愛）

【年齢（生年月日）】4月29日

【血液型】B型

【出身校】聖アナスタシア学園

【好き】コーラス

【嫌い】複雑な家電製品の操作

【身長】178 cm

【体重】67 kg

【バスト】89 cm

【イメージカラー】ゴールド（#a37e00）

【人称・口調】一人称は僕。男子は「く殿」、女子は「く嬢」と呼ぶ。丁寧な敬語だがたまに崩れる。

【ICV】内山昂輝

【容姿】

アクアマリンブルーの瞳に明るい緑の髪、紺色の帽子を被っている。



紺色のカソツクを改造したものを着ている。紺色の帽子も被っている。ブーツの色は白。

いつも笑顔な青年。

献身的で誰にでも優しく、彼の行った慈善活動は世間では高く評価されている。

「天」と呼ばれる存在を信じており、どんな事件が起こっても「天の意思」と考えるので、かなり冷静。

【台詞集】

「天は言っている。この推理は間違っていると。そうだ。その通りだ。」

「天は全てを良き方向へと導きになられる。例えば、ステラマリス…北極星は人々に北の方角をお教えするように」

「安心して欲しい。天はモノクマに必ず裁きを下さだろう」

カラフヲ

【立場】新希望ヶ峰学園の理事長

【性別】？

【イメージ植物】なし

【好き】肥料

【嫌い】ネズミ

【身長】160cm（美少女時）

【体重】？kg

【イメージカラー】なし

【人稱・口調】一人称はわー。他人称はアナタラ。「くなのだ」

【ICV】高橋美紀

【容姿】

赤、黄色、緑、青、ピンクの髪。ツーサイドテールとポニーテールとアホ毛が混ざった髪型。

瞳は片方が灰色。眼帯を付けている。

美少女時は白と黒のブレザー、灰色のミニスカートを着ている。

理事長を名乗るしやべるカラフルな人面花。

動機を発表するときはテレビの中に入り、美少女化したあげく「カラ☆フラTV」と呼ばれる謎の番組の進行役になる。

【台詞集】

「モノクマ様のご意志なのだ！」

「超高校級のみんなく！息と文化してるく!?おはろんぱく！動機発表バラエティ『カラ

☆フラTV』の時間なのだ♪』

ダンガンロンパ ・ フラワーズ Chapter 1「廃空  
楼獄遊園ヒストリエ」

ダンガンロンパ ・ フラワーズ 第1章 1日目&2日目

ダンガンロンパ ・ フラワーズ Chapter 1

「廃空楼獄遊園ヒストリエ」

(非) 日常編

「塞翁ケ馬学園遠足実行委員会がお知らせします。

ただいま午後10時になりました！今から夜時間です！

ホテルの自分の部屋でゆっくり休むことを強くオススメします」

「部屋の鍵はしっかりかけて殺人鬼から身を守るのだ！」

モノクマとカラフラの放送を聴きながら、自分の部屋のベッドに座っていた。

スマートフォンのような形の電子生徒手帳を取り出し、電源ボタンを押すとメニュー画面が映る。

そして、2番目の項目の「校則」を指でタッチする。

①生徒のオマエラはヒストリエランドだけで共同生活を行ってください。共同生活の期限はありません。

②ヒストリエランドの搜索は自由です。行動制限などはございません。

③夜10時から朝7時までを「夜時間」とします。夜時間は立ち入り禁止区域がございますのでご注意ください。

④学園長と理事長への暴力を禁じます。

⑤監視カメラの破壊を禁じます。

⑥電子生徒手帳の貸し借り、生存者からの強奪、紛失、破壊などを禁じます。

⑦ヒストリエランド内で殺人が起こった場合、生存者による全員参加の学校裁判が行われます。

⑧学校裁判で正しいクロを指摘できた場合、殺人を犯したクロだけが処刑されます。

⑨指摘できなかった場合、クロ以外の全員が処刑されます。その場合、クロだけが卒業し、ヒストリエランドから脱出することができます。

⑩ 3人以上の生徒がクロに殺害された死体を発見した場合、「死体発見アナウンス」が流れます。

⑪ 一人が一度に殺害していい数は二人までです。

⑫ なお、校則は追加されることがあります。

：これが、塞翁ケ馬学園の校則らしい。わたしはゲンナリした顔をして、電子生徒手帳の電源ボタンを再び押した。

画面が黒に包まれる。

誰かを殺せばこのヒストリエランドから脱出できる。

そんなのは絶対に嫌だけど…それぞれに武器が配給されて血生臭い殺しあいが繰り広げられる訳ではないのが不幸中の幸いか。

それなら体力は人並みなわたしや小さい雨崎さん、絹川くんは部屋にたどりつく前に死んでいたことだろう。

いや、今この瞬間にも殺人を目論んでいる人間がいるかもしれないのだ。

：わたしに、その人を止めることはできるんだろうか？

部屋のクローゼットにはわたしの着ている私服と似たような服と、3枚分の浴衣が並んでいた。

浴衣に着替え、何も起きないことを祈り眠りについた。

モノクマ劇場

初めまして皆様。ボクはモノクマです。

ついに始まった16名の生徒による「コロシアイ遠足」。

舞台は廃空遊園地「ヒストリエランド」。

生徒のみんなはどんな絶望を見せてくれるんでしょうか。

どんなトリックを使ってくれるんでしょうか。

そして、そこから生まれる希望はどんな奇跡を起こしてくれるんでしょうか。

ワックワックの、ドッキドッキだなー！楽しみ楽しみー！

「塞翁ケ馬学園遠足実行委員会がお知らせします。

オマエラ、おはようございます！今日もハイカラ文化してるう〜？」

「第一エリアのレストランでスイーツバイキングを開催しているから朝食がわりに食べるのだ！

わーが実家の農園で作ったフルーツもあるのだ！」

…朝の7時。モノクマとカラフラの放送で目を覚ます。

それにしてもお腹が空く。レストランのスイーツバイキングでも食べようかな。

朝ごはんを食べるヨーグルトやバナナは確かにスイーツっぽいけど、朝からスイーツってお腹がもたれないのかな？

もし脱出口があるのなら、このヒストリエランドを探索して見るのもいいかもしれない。

わたしはレストランへと向かった。



レストランは朝に似合うジャズが相変わらずレコードプレーヤーから流れていて。

丸いテーブル4つに椅子がそれぞれに4つ…計16つある。ちょうど生徒たちの数と一致する。

入り口近くの席に座っているのは…

「ミー君、この緑の果物は何？」

「これはフィンガーライム！オーストラリアのアボリジニの人々の間で食べられている高級な果物さ。」

切って指で押すとキャビアのようなツブツブが出てくるんだ」

席に座り、半分に分けられていた緑の果実…フィンガーライムを食べる未隅くと雨崎さん。



未隅くんの席には大量のフルーツと一枚のパンケーキ、雨崎さんの席には1ホール分のタルトが置いてある。

そして二人の隣で見てるだけで胃もたれしそうなほどシヨートケーキを食べているのが灰寺くん。

「しかしうめーじゃん！近所の洋菓子店のおばちゃんのケーキしか知らなかったけどうめーな！

ふんわりしたスポンジに甘酸っぱいクリームに何よりでかい苺…これなら沢山食べられるな！」

「ねえ、この席に座ってもいいかな」

「ん？いいけど」

わたしは空いている席に赤いコートを掛ける。スイーツが並べられている台へと向かい、お皿を取る。

パンケーキにチーズケーキアイスを乗せ、カトラリーを取り、三人が座る席へと戻る。「鈴原さん！ビタミンの大量に含まれた果物はいいぞ。特にアセロラは100g中1700mgのビタミンの含まれた…」

「また解説が始まったー」

「よくわかんねーけど体にいいってことやな。でも僕はイチゴだけでいいや」

「灰寺君もさあ、フルーツを食べたまえ」

未隅くんがわたしの灰寺くんの皿にオレンジを乗せてきた。正直、少し押し付けがましい気がする。

「あ、ありがとう」

でも、戻すのも勿体無いから頂いておこう。

食べてみるとパンケーキとアイス、オレンジは中々の味だった。

「…よし、撃沈だな。俺の勝ちだ」

わたしたちの右側の机には、フライドポテトをトングで食べながらアナログゲームに勤しむイヴァンくんと檀くんがいる。

「バイキングの食物は全て毒味させてもらったが、毒や睡眠薬といった薬物は入っていないかった」

「あ、負けそうになるとまた独り言が出る」

「どうやらコロシアイの主催者…モノクマとカラフラは我々のコロシアイは強制しないようだ。強制するのなら殺戮衝動を起こす薬などを混入している筈」

「さ、殺戮衝動!？」わたしはパンケーキを口に運ぶフォークを止めてしまった。

檀くんがこつちを見てきた。

「ん？早く食べれば？」

それにしてもイヴァンくん、独り言を言ってる時は敬語じゃなくなるのか…。

「恐らく、コロシアイの『黒幕』は私たちの意思で殺しあってもらいたいのだろう。しかし…これでは殺人が起こらない。そうなると主催者はそのうち何か仕掛けてくるに違いない」

つらつらと独り言を述べるイヴァンくん。そんな彼に灰寺くんが話しかける。

「ねえイヴァン兄ちゃん、ショートケーキ分けようか？結構美味しいねん。イチゴは多分とよのかかな」

「フライドポテトも美味しいよ。それ用のトングもご丁寧に用意してあるし、あ、駆逐艦落ちた」

檀くんは大量にマスタードとケチャップがかけられたフライドポテトを口に運ぶ。舌、大丈夫かな…。

「モノクマとカラフラが出てきたステージがあるな。あそこにお土産屋の道具でSOSを作るべきか…」

それにしても、イヴァンくんの独り言はどうも気になる。

コロシアイの黒幕。なのに強制するようなことはしてこない。

…一体、黒幕は何をさせたいんだ？



朝食を終え、探索に出かける。まずはアスレチックからだ。

「畜生！ここにゴミを置いたのはどこのどいつだア？探し出して『媚歌鬼奸』で掃いてやろうかア！」

…二階堂さんが藍葉さんとゴミ拾いをしているが…今持っているのは『僕と私の異世界探訪』と書かれた、可愛い女の子の表紙の本だ。

梅田くんのじゃないか。

「あの、それ梅田くんのだと思うんだけどさ」わたしは二階堂さんに話しかける。

「ん？梅田のか？あいつ見かけによらずエロ野郎だったのか！中身うっかり見たけど水着の女が股開いてたぞ！」

「み、水着の女性！？進学校なら即退学レベルにだよそれ！」

…あの本、過激な描写が特徴的なライトノベルなのかな。

「じゃあわたしが預かっておくよ。後で梅田くんに返すからさ」

「ダメだ！梅田がこれ以上エロ野郎になったら逮捕されちゃうじゃねえか！」

「あの、犯罪者がエロ本を持つているとは限らないと思…あ、また言っちゃった…！」

藍葉さんは自分の失言に極度に怯えているようだ。

「仕方ねえ、梅田をアスレチックの頂上から探す！そして遠距離から改造箒を飛ばす！」

「二階堂さん！？流石に箒は置いたほうがいいよ！？アスレチックに引っかけたって落ちたら

死んじやうよ！」

「大丈夫だつて！地面は土だし骨折程度で済むつて！バイクに轢かれるよりはマシじゃん！」

二階堂さんはアスレチックの頂点を目指しながら登っていく。

「うう…：包帯ちゃん忘れたのに…：いざとなつたら白衣を破るべきかな…」

第一エリアの真ん中にある二階建ての白い洋館に入つてみる。中には誰もいない。

玄関には洋館の地図がある。一階には…：北西に多目的ホール、南西に応接室、中央にトイレ、北東にバスルーム、南東にキッチンがあるようだ。

なぜか、二階の地図は黒く塗りつぶされている。二階建てなのに。

全ての部屋を見回る。バスルームやキッチンなどの水回りには全て「消毒済み」の紙が貼られている。

恐らく誰も使っていないのだろう。

トイレの中を覗いてみる。「消毒済み」の紙は貼られていないが、トイレトペーパーは使われていないようだ。

多目的ホールに入る。アンティークのテーブルと椅子が中央に鎮座していて、テーブルの上にはガラスの吸い殻入れ。

飴色の棚には、本や様々な箱が置かれている。

そして壁には：アンティーク銃が飾られた、大きなガラスケース。長い銃は撲殺用の凶器に：つて何を考えてるんだろう。

応接室に向かう。やはり似たようなアンティークのテーブルと椅子があり、机上にはアンティークには似つかない現代風のライターが置かれていた。

部屋の隅には暖炉がある。炭は入っているが、使われた形跡はない。

応接室から出る。ふと階段の二階への階段があると思われる場所には：巨大な鉄の扉があった。

：二階には何があるのか？もしかしたら、黒幕のアジトだったりするんだろうか  
なんでこんなところにわたしたちを閉じ込めるのだろう。

なぜ殺し合わせるのか。なぜ縛り付けるのか。黒幕は鉄の扉の向こうにいて、今でもわたしたちを嘲笑っているんだろうか？

：そう思うと、必然的なのか怒りが湧いてきた。そして：  
わたしは鉄の扉を蹴り上げてしまった。

「畜生！」

その瞬間。

大きな音のアラームが鳴った。

鉄の扉のちょうど上から、銃がゆっくりと飛び出してきた。

まるで、鳩の人形が時刻を知らせるように。

「…え？」

これは本物の銃？もしかして、わたしは…撃たれるのか？

そんな。死ぬのは嫌だ。こんなところで。

体が勝手に動き出し、わたしは玄関へと向かう。素早く扉を開き、洋館の外へと脱出する。

その瞬間…

館の中から6つの大きく鈍い音が、響いた。

「はあ…はあっ…」

息をつきながら膝に手を当てる。その様子を偶然見ていた5つの人影がいた。

「だ、大丈夫ですかあ!？」

「まさか、コロシアイでも起こっちゃったのかー!？」

「アラームが鳴って銃声が響いたと思っただけ…何があったのかしら」

5つの人影は驚くバニラさんと梅田くん、怯えた様子の一ノ瀬さん、そして…動じない蒲生くんと黒木さんのものだった。

5人はわたしのいる洋館の玄関近くへと近寄ってくる。

「どうやら怪我はないようですね。天の祝福はまたあなたを守られた」

「うん。この洋館にはトラップがあるみたいなんだけど…」

「コロシアイが始まる前に生きていてよかったのだ！」

そこに、小さな台車に乗ったカラフラが現れた。

「か、カラフラ!?! どうしてここにいつ!?!」一ノ瀬さんが驚く。

「わーはカラフラなのだ。暇つぶしに散歩してたのだ」

「カラフラも女なのでしょう!?! あの女ストーカーは女とみればウサギまで狙うような生き物なのですよ!?!」

「残念なのです、あめだま星人にウサギに恋する趣味はないのです」

「そうなのだね。せっかくだからあそこの洋館の『警報装置』について教えるのだ」

「…警報装置とは何でしょうか」

「警報装置はただのトラップなのだ。無理矢理こじ開けようとしたり危害を与えたりすると発動して、アラームが6秒間鳴った後にドアの上にある銃撃装置から銃弾が発射されるのだ」

「ろ、6秒間? 流石に短くないかしら」

「外に猛ダツシユで外に逃げ込めば大丈夫なのだ。ちなみに一番近い生体反応を追って6発銃撃するのだ」

「ということ。ドアには銃創が残ってるんじゃないの…?」



「因みに洋館は床も壁も窓も全て防弾加工されているので銃創はつかないのだ」

「えーと…：ジウソウウって？」重曹ならわかるけど銃には詳しくない。

「知らないのかー？銃撃したら跡がつくじゃん。それだよ」

梅田くんが教えてくれた。

「コロシアイが起こらなくなったらモノクマがキレルから、ここにいる人以外には誰にも教えないでね！グッドラックなのだ♪」

カラフラを乗せた台車はどこかへと去っていく。

「警報装置ですか。僕は機械にはあまり詳しくないのですが…：とりあえず僕たちはこの洋館には近寄らない方が良さそうです」

蒲生くんが笑顔で口を開き、どこかへと去っていく。

一ノ瀬さんはいつの間にか消えていた。バナラさんが「あの着物の中には藍葉殿もびつくりんなプロポーションが…：」と呟きながら走っていった。

「あーあ、一ノ瀬さんも災難ね？」

「本を無くしたオレよりもひどいなー…：」

残されたのは梅田くん和黑木さんだ。彼らを残し、わたしはウォーターライドへと向かった。



「綺麗な滝だね。あの丸いのに乗ったら面白いのかな。」

ウォーターライドでは絹川くんが水を眺めている。絹川くんはウォーターライドを知っているだろうか？

あのブリキ色のドラム缶は乗り物だろうけど。

一緒に眺めていると…絹川くんは話しかけてきた。

「あの、この変なコイン、貰って欲しいんだ」

そうすると着物の裾から小さな円状のものを取り出してきた。モノクマの顔が描かれたコインのようだ。

「カラフラに聞いたらボクは使えないみたいで…鈴原さんしか使えないみたいなんだ」

なら貰うしかない。にしても、どうやって使うだろうか？まさか…お土産屋のガチャガチャ？

とりあえず、モノクマのコインは6枚あるようなので貰っておく。

ステージと時計塔には何もなかったので、お土産屋へと向かう。

そこには、怒っている様子の湖林くんが…

「鈴原…貴様、オレのグッズは知らんか？」

「え？湖林くんのグッズ？」

まあ、『超高校級』となれば知名度も高いし、グッズくらいはありそうだけだ。

「たわけが！織田木瓜の家紋やら圧切長谷部のキーホルダーやらが置いてらんのじゃ！観光地のお土産にはよくあるじゃろうが!?」

「そーいや湖林くん、自分を織田信長だと思ってるんだっけ…」

にしても、お土産屋にはキーホルダーも「○○に行つてきました」系のお土産はない。「でもヒストリエランドつてハイカラロマンがテーマの遊園地だよな?どこにでも売つてあるようなありきたりなお土産よりも、その遊園地ならではのお土産の方がいいと思うんだけど」

「オレが…ありきたりじゃと?」

「しまった!地雷を踏んでしまったようだ!」

「ストップ!ストップ!落ちついて湖林くん!それほど織田信長が有名つてことなんだよ!」

「…そうじゃ。いいこと思いついたぞ。なんなら作ればいいんじゃないや。」

「ハンドメイドには自信はないから後で雨崎あたりに教えてもらおうかのう」

「どうやら機嫌はなおつたようだ。よかつた…。」

「湖林くん洋館のことは教えない方がいいんだろうか。もし教えてしまったら…わたしはどうなるかわからない。」

「だから、身勝手な考えかもしれないけど今は内緒にしておこう。」

それにしても…モノモノマシーンと書かれてある巨大なガチャガチャが気になる。絹川くんから貰ったメダルはここで使うのかな。

わたしはポケットからメダルを取り出し、モノモノマシンのコイン入れに入れ、ハンドルを回す。

すると、モノモノマシーンからは大きなカプセルが出てきた。

そしてカプセルの中には…水の入った500mlペットボトルと、説明が書いてある小さな紙が出てきた。

『ミネラルウォーター』

水道水に満足できない現代人のために海洋深層水を加工した飲料。ミネラルが豊富で美味しい。

ガチャガチャに口に入れるものを入れて大丈夫なのか？

でも、何が出るのかわからないというのは実に楽しい。

…もう一度、いや、あと5回やってみよう。

『2. 5Dイヤホン』

立体的かつ薄っぺらな音響を提供するイヤホン。因みにカナル式で音量調節不可。

『ドローン手作りセット』

ドローンの仕組みを理解しながら作ってしまうキット。因みに完成しても高さ3m

までしか飛べない。

『フィギュア入り培養槽』

小さな培養槽の中にポリマーと一緒に入れられているフィギュア。部屋に飾ると人造人間をと一緒に居られる気分が味わえる。

『名画折り紙』

世界各国の名画が書かれた折り紙。なぜかダ・ヴィンチの名画が多い。

『プリキの兵士』

とある国で製作された銃を持った兵士のおもちや。ゼンマイを回すと歩く。

おもちやから実用的なものまで出てきたけど……誰かに渡してもいいのかな。

噴水広場。噴水近くのベンチで本を読む女性が一人。紅葉さんだ。

『愛のコラール』と書かれた表紙の本を黙々と読んでいる。お土産屋で買ったんだろうか？

今は邪魔しない方が良さそうだな。

探索も終わり、レストランで昼飯も食べたのでホテルの自分の部屋に戻る。

今のところは誰も死んではない。だが、洋館の警報装置や、お土産屋のロープのよ  
うな凶器は用意されている。

コロシアイを止める為にはどうしたらいいのかはわからないけど……とりあえず、今は

行動してみようかな。

さて、昼から何をしようか。



二階堂さんは、無言でホテルのエントランスを改造箒で掃除している。

エントランスには掃除道具が入っているとかわしきロッカーがあるんだけど、その中のものを使うことはないのかな。

「ん？どうした鈴原？にしてもここ結構綺麗だよな！アタシらを誘拐した奴らつてひよつとして綺麗好き？」

まあピカピカのホテルを見たら連中もいつか更生すつかもな！」

よし、二階堂さんと過ごそう。

というわけで、二階堂さんとモップで掃除をして過ごした。

二階堂さんと仲良くなれたようだ。

喉が渴いたと思うので、『ミネラルウォーター』を渡しておこう。

「おおっ！これ…掃除に使えるそうだな！多分これでサツシが綺麗になるぞ！鈴原、ありがとな！」

飲料として渡したんだけど…とても喜んでくれたようだからいつか。

「…」

相変わらず黙って掃除をしている。というか、掃除をしている時は黙っている。

「あの…話しかけていいかな？」

「? いいけど」

「二階堂さんさ、ここを掃除してて何か脱出の手がかりとか見つけた？」

「うーん…このエリアはほとんど掃いたんだけどさ、穴も全然見つからないんだよな。

出口は言わずもがなだし、マンホールも溶接されて閉ざされているみたいだし…」

「この『コロシアイ遠足』の黒幕の目的を考えれば当然だろうね…」

「でもさア！コロシアイとかよりもやっぱ掃除しろ！」

掃除はいいぜ。ずっと無くしてたものが見つかる、収納スペースも増える、

お客様がきても恥ずかしくない部屋になるでいいこと尽くしだ」

わたしは掃除は好きではないんだけど…その気持ちはわかる。

「あのさ、聞いてくれるか？」

「いいけど、どうしたんだ？」

「アタシの部屋見たんだけどさ…掃除道具がねーんだよ。改造箒は持つてるんだけど。

トイレのブラシしかねーんだよ！

トイレのブラシでどうやってお風呂掃除するんだよ！」

「ホテルってそんなもんじゃないかな。普通従業員さんが掃除するし。黒幕が綺麗好き

だとしたら多分彼らがやってるんじゃないかな」

「綺麗好きならちゃんとお風呂のブラシも置いてるだろうが！まあいいよ。」

なあ鈴原！いつか黒幕連中にカチコミ行こうぜ。この改造箒がありやモノクマやカラフラだつて一発だろ！」

「∴校則にはモノクマやカラフラに暴力を振るつてはいけないって書いてるけどいいの？」

「あ、そうだったね。でも殺されそうになった時のために得物は用意した方がいいぜ。」

新聞メリケンとか」

メリケンってことはメリケンサックかな？いや、武術の心得はないんだよな…

「木の枝を折って木刀を作る∴とかはアタシ的には邪道かな。遊園地の景観が乱れる」

「いや、大丈夫だよ。気持ちは嬉しいけどそこまでしなくていいよ！」

「鈴原、あんた殺し殺されの世界ナメてんだろ？強けりや生きて弱けりや死ぬ∴今はそんな世界にいるんだよな。」

聞きたいか？アタシの周りの人間の話」

∴それから、彼女の出会ってきた不良の話が聞かされた。

五流した不良、伝説の暴走族、100発殴られても立っていたヤンキー…。

どうやら彼女は、ものすごく過激な世界で生きてきたようだ…。



『美化委員の名の通りかなり綺麗好きな少女…なのだが同時に現役の不良でもある。カチコミやメリケンなどの物騒な言葉を使ったりする。』



夜7時。夕食の時間がやってきた。レストランのバイキングは普通のバイキングだ。味は結構良い。

梅田くと二階堂さんの姿がないが、前者は部屋で食べ、後者は6時には食べたらしい。

隣の席でグラタンを食べる雨崎さんが、1つわたしたちに提案してきた。

「あのさ、ここみんな花火大会しない？みんなの友好を深めようと思って」

「花火？そんなのどこにあるの？」

「お土産屋で見つけたの。手持ち花火とかの小さなやつしかなかったけど」

雨崎さんは2袋の大きな花火セットを取り出した。

「それは素晴らしいですね。打ち上げるタイプがないのは悲しいことですが。僕も参加してよろしいでしょうか」

「いいよ。参加は自由だから。花火に参加したい人手をあげてくださいー！」

「この生活の息抜きを見つけたのか、多くの人が手を上げる…例外除いては。」

「ごめん。花火はうるさくて苦手なんだ。小説読んでたいね」紅葉さん。

「昔花火で火傷したのがトラウマになっていきますの」一ノ瀬さん。

「燃えるのは本能寺の変で十分じゃ」湖林くん。

そして、意外な人物も断った。

「はあ…あのさ、この中に殺人犯がいるかもしれないのに呑気に花火大会？」

明らかに花火を使って犯行を起こす奴いるだろう？」

「では、マユミくんを考慮して私も欠席させていただきます」

檀くんと、イヴァンさんだった。

「結構欠席者多いんだね…まあいつか。梅田くんと二階堂ちゃんは後で誘おうと」

「仕方ないことだ。誰にでも事情はある。無理に参加させてストレスを溜める訳には

いかないからな！」

未隅くんと雨崎さんはお互いグラタンやらステーキやらを食べさせながら話す。

バイキングで取ってきたものを食べ終わったので、わたしはある人物に話しかけることにした。

「…灰寺くん、ちよつといいかな」

「んー？」

灰寺くんはピザにオムレツを乗せて食べている。イタリア人が見たら卒倒しそうだ。

「1つ、お願いがあるんだ。怖いお願いかもしれないけど…このヒストリエランドの壁

を登って欲しい」

「うーん…実は今日の昼登ろうとしたんだけどさ、登山用のハーケンが売ってないんや。それに壁はレンガ製なのにすごく硬いんや。ハーケンがあっても打ち込めへんと思う」

「そうなんだね…でもありがとう」

わたしは灰寺くんにお礼を言う。やはりヒストリエランドからの脱出は不可能なんだろうか。

最終手段…殺人と学級裁判のことを思い出す。いや、ダメだ。殺人というのは、人の人生を終わらせてしまう行為だ。

その人が生きてかかった道も、意思も消してしまっただ。だからロシアなんて、してはいけないんだ。

ホテルへ帰る途中、星空を眺める。星空はやはりヒストリエランドのある日本のものだ。

異世界へワープしたとかそう言うのではない。

生きているのに、日常の中にいるのに、日常から切り離された空間にいるような気がした。

## ダンガンロンパ ・ フラワーズ 第1章 3日目 (動機発表)

わたしたちがヒストリエランドに連れてこられてから、3日が経とうとしていた。

その日のレストランの朝食はカレーだった。朝からカレーだなんて重い。

「3日が経過したが、助けは来ない。それに朝に私がステージ上に作成したSOS信号は消失していた。

モノクマとカラフラの仕業だと言うのか…。」

イヴァンくんの独り言は相変わらずであり、檀くんは黙ってそれを聞いている。

「なあ、これって巨大組織どころか政府の陰謀じゃねえんか?」

湖林くんもカレーを頬張りながらイヴァンくんに尋ねる。

「政府、ですか。マフィアやギャングといった犯罪組織よりは現実味がありますね。

ですが、目的が不明だ。塞翁ケ馬学園の卒業生は各界に巨大なパイプを持つとはいえ、将来有能な人材となる我々をなぜ殺し合わせるのだろうか」

途中から独り言になってしまっているみたいだ…。それほど追い詰められているのか、それともまだ冷静なのか。

「ねえイヴァン。私の考えを聞いてくれないかしら？」

冷静な態度で、隣の席の黒木さんが言った。

「私たちが参加するこのコロシアイ。犯人を当てる推理ゲーム要素。

…これ、スナッフフィルムとして撮影されているんじゃないの？」

「え…？砂遊びビル？」灰寺くんは驚いた様子だ。

「裏社会で流通される、人が殺される様子を娯楽目的で撮影した映像作品。イヴァンなら知ってそうだけど？」

「存じ上げてますが…なぜそう思考されたのでしょうか」

スナッフフィルム…名前はある映画で知っていたが、まさか現存するとは思っていなかった。

黒木さんは電子生徒手帳を取り出すと、校則の項目をタッチし、わたしたちに見せつけてきた。

⑤監視カメラの破壊を禁じます。

⑦ヒストリエランド内で殺人が起こった場合、生存者による全員参加の学級裁判が行われます。

⑧学級裁判で正しいクロを指摘できた場合、殺人を犯したクロだけが処刑されます。

⑨指摘できなかつた場合、クロ以外の全員が処刑されます。その場合、クロだけが卒

業し、ヒストリエランドから脱出することができません。

「確かあいつらは言ったわよね? 『正しいクロを指摘するのが学級裁判』『指摘できなければクロ以外が処刑される』って。つまり犯人当てゲームなのよ、これ。」

私たちの様子は犯人当てゲームとして撮影されているの。監視カメラを破壊してはいけないのも撮影するためでしょうね。

芸能人たちが正解を答えるクイズ番組と同じく見世物にされてるのよ」

「スナッフフィルムなんかとクイズ番組を一緒にするのはどうかと思うなー……」

「あの……黒木さん……ちよつと思っただけど……」藍葉さんが手を挙げた。

「あら、どうしたの?」

「……犯人が誰なのか、正しい答えを黒幕自身を知る方法でもあるんじゃないかな……?」

藍葉さんの声は弱々しい声でもあったが、真実を言い当てる強さも持ち合わせている声だった。

「それもありますね。正しい解答を認知しない黒幕というのは、テスト問題の解答を所持していない教師と同じと思えばわかりやすいでしょう」

「私もそう思ってるわ。恐らくモノクマにルールが破られない限り、何もしていない人間をクロにすることはないと思うわ」

わたしたちの様子が、スナッフフィルムにされる。

思わずふざけるな、という声が出そうになる。わたしたちの命は見世物じゃないんだ。

綺麗事かもしれないけど、命の火は消したら終わるものだ。だから、人の命を自分の快樂のために消すことは決してしてはならないんだ…。

その時。緊迫した空気に似合わないチャイムと放送が流れた。

「えー…塞翁ケ馬学園遠足実行委員会がお知らせします」

「午前9時から『動機』をプレゼントいたしますのだ」

「生徒のオマエラは至急、全員第一エリアのステージにお集まりくださいー」

「集まらない人はなんちゃらコンバットよろしく脊髄引っこ抜かれて死んじやうのだー  
！」

モノクマと、カラフラの声だった。

「…え？動機って？」

「静かに。死を防ぐために今はモノクマの指示に従いましょう」

「僕はまだカレーは4杯目なんやけど…ステージに集まれって？」

「オレもカレー2杯目なんだけどー…」

嫌な予感しかしない。けど今はステージに向かうしかない。



ステージにたどり着く。演台には金持ちの家に飾られてそうな、巨大な液晶テレビが鎮座していた。

そしてモノクマは：リモコンを持って演台の中央に座っていた。

「モノクマ、君は僕たちをここに集めて何がしたいのか。今の僕には理解できない」

「えー？未隅くんさつき言ったじゃん。動機をプレゼントするって。

雨崎さんといちやついで聞いて聞こえてなかったの？まあいいや。

この『カラ☆フラTV』を見ればすぐに理解できるよ。

ってことで、カラフラー！でーておーいでー！！！！

モノクマがリモコンを押した瞬間。女性のシルエットが出てきた。

「アナタラ、美少女は好き？マスコットには飽きた？それならカラ☆フラTVを見るのだ。拒否は認めないのだッ！」

カラフラの声が鳴り響き：

液晶テレビには似合わないレトロな『カラ☆フラTV』のロゴが出たと思うと：

法廷風のセットと、白と黒のブレザーを着た、カラフルな髪の毛の、ポニーテールにサイドテールにアホ毛の美少女が出てきた。

「超高校級のみんな〜！息と文化してる〜！おはろんぱ〜！



動機発表バラエティ『カラ☆フラTV』の時間なのだ♪」

…え？これ…カラフラ本人なの？

「マスコットに飽きたアナタラの為にサブライズなのだ！超マスコット級のカラフラ・美少女フォームなのだ！」

超高校級のカラフラ？どういう意味なんだ？

というか何で美少女なんだ？何でも美少女にする萌えブーム？

「な、何をしているのでしょうか？カラフラは確か、花の姿をしていたはず…」  
流石のイヴァンくんも戸惑っているようだ。

「うーん、その外科医師くんには日本の萌え文化は理解できないようなのだ。」

それは置いといて早速動機発表なのだー！」

画面内の美少女カラフラはブレザーを脱ぎ出す。官能的に、胸部をアップにしなが  
ら…。

「な、何とやましいのですか！この番組では怒髪も天を貫きになられるだろう！」

「徹底的に媚びてますわ…ああ、吐き気がする…！」

蒲生くんと一ノ瀬さんの気持ちはわかる。というか、なんで動機発表で脱ぐのか。

だけどブレザーを脱ぎ終わった瞬間、美少女カラフラは白と黒の煙に包まれ…赤い色  
が眩しいミニスカサンタになった。

「くひひ、全部脱ぐと思ったー？残念でしたのだ！ちなみに今回の動機はなんと！初回特典で2つセットなのだ！」

「何がサンタクロースじゃ！そんなもん信じとらんわ！」

…織田信長のタイムスリップ説は信じるのに、サンタは信じてないんだ…。

って、動機が2つ？それって…

「1つは…季節外れのサンタクロースが、アナタラに希望をプレゼントするのだ♪

モノクマー！プレゼント袋持ってくるのだー！」

「はいはい…こういうのは妹とか息子とか娘とかの役目でしょ？ダルいなあ…。まずは雨崎さんからねー」

モノクマが液晶テレビの裏から、嫌々プレゼントを持ってくる。そして、オレンジのリボンに包まれた黄色い箱を持ってきた。

「あ、あたし？」雨崎さんはモノクマの方向へ向かうとプレゼントを受け取った。

「必ず自分の部屋で開けるのだ！動機がおぞましいものですね！すぐにコロシアイが始まらないようにね♪」

プレゼントは次々とわたしたちに配られていく。薄い封筒を受け取った者、巨大で重そうな箱を受け取った者…。

「次は鈴原さんね。どうぞ」

モノクマはやる気のない様子でわたしにピンク色の封筒を渡した。人面花カラフラのシールが貼られている。



ようやく全員分のプレゼントが配られたようだ。

しかし、動機発表はまだ終わらない。

「第2の動機を発表するのだ！では早速クイズ！クイズアナタラの身長と体重は何kg？」

「男女問わず人の体重を勝手に調べるなんて非常識だよー！」

雨崎さんは画面を睨みつける。

「私の全長は3cmほど増加しております。それが何か？」

答えたのはイヴァンくんだった。

「おっ！早速計った方がいるみたいなのだ！」

「ぴーん！」

モノクマの頭からなぜか○の描かれたプラカードが飛び出す。

「モノクマさん！どうぞなのだ♪」

「…ボクなんか答えていいのかな？」

いきなりクイズ番組になった。

「オマエラが黒幕に数年間の記憶を奪われちゃった…でいいのかな!」

どこからかピンポンピンポンという正解音が聞こえた。

「まあ、わかってただけどね!」

「そう! 詳しく言おうとアナタラはなんと…わーたちに塞翁ケ馬学園に入ってから一切の記憶を奪われてしまったのだ!」

…えっ?

わたしたちが、モノクマとカラフラに記憶を奪われた…?

茶番としか思えないクイズ番組だが…『黒幕に記憶を奪われた』という、明らかに残酷な真実を告げていた。



「…どういふことなの?」

「…記憶無くなってるのか…ってええええええええ!」

皆が呆然とする。

「そーいやオマエラさ、入学式の時、校門を潜ろうとした瞬間に不思議な目眩あったよね? あれからの記憶を消してるんだよね。」

記憶操作ネタなんてそこらのアニメかゲームの話だって思うでしょ?

でも、これが現実なんだよ。フィクションでもなんでもないんだよ!」

「ふざけんな！というか何年かってアバウトすぎるんじゃない！」

「うそでしょ……私たちの家は？家族は？」

「あ、アテクシが密かに作っていたあめだま星への帰還ロケットはどうなのですか!？」

「さあ、知らないなあ。そんなに答えを知りたいなら誰かを殺して学級裁判することだね」

「正解は『卒業』のあとでなのだ！」

カラフラは液晶テレビから消え、モノクマはどこかへと去っていった。

何年かの記憶を奪われた？どれくらい？まさかわたしたち、もう高校を卒業する年だったりする？

困惑する皆。そこに一つの声が響いた。

「みんな！落ち着こう！こういうときは深呼吸だ！」未隅くんだった。

「僕は親交を深めるために毎日の7時半と夜の7時には全員で集合する『食事会』を提案したい。」

なぜ朝の食事会が7時半からかって？皆寝起きだったり着替えの時間があつたりするだろう？

「食事による交流によってお互いを監視する。コロシアイを防ぐには最適ではありません

ね」

「ははははは！ 皆を纏めるのもリーダーの役割だからね！」

いつのまにイヴァンさんと未隅くんがダブルリーダーになっていて。そういえば夜の10時から7時までには『夜時間』だっけ…

この時間は、あまり出歩かない方がいいのかもしれない。



皆それぞれ部屋に帰っていき、わたしも部屋のベッドに座っていた。

カラフラのシールが貼られたこと以外は何の変哲もない封筒。残酷な真実でも、開けるしかないのか。

シールをゆつくりと剥がし、封筒の中身を取り出す。

「うわああああああっ!？」

思わず声が出てしまった。

封筒の中身は返り血のついた望遠鏡の写真。これは…明らかに自分が誕生日にプレゼントされたものだ。

思わず吐きそうになる…だけどこれはモノクマとカラフラの罠かもしれない。わたしたちを殺し合わせるための…。

…あれ？

よく見たら写真はもう1枚あるようだ。2枚目の写真を見ると…茶色い髪と黄色いワンピースが可愛い少女の写真だった。

しかも、カラフラそっくりで。なのに、赤褐色の髪で…。

…記憶にない女の子だ。誰かの動機と入れ間違えたのかどうかはわからない。なぜ望遠鏡の写真とセットなのだろう。なぜ彼女の写真があるのだろう。

思考を巡らせていたその時。頭痛と誰かの声があった。

「…ちゃ…ん…」

「つ………ちゃ………」

「あなた…は…ほんと………は……！」

「ううっ!?!」

一瞬、ストローが水に差し込まれるように何かを入られた感覚があった。

あの望遠鏡は何？お父さんとお母さんは今何をしているの？奪われた数年間の記憶って？

思わず、出たい…という欲求が深まってしまふ。でも、殺人だけはしてはいけないという意思で抗う。

…そういえば。

わたしには同じ天文学者のお父さんがいて、彼によく反発していた。それからか、天文台のレストランで働き始めた。

確か、レストランには人気メニユーがあったはずだ。

働いていた人たちの年齢層は…。

それ以前に…

お父さんと…なぜ喧嘩していたんだろう…？

…あれ？

わたしのお父さんとお母さんの詳細な性格。

レストランの内装。そこで働いていた人たちのエピソード。

通っていた学校の友達との思い出。住んでいた街での会話。

わたしが前に住んでいた世界の『設定』は思い出しても…『物語』はほとんど思い出



せない。

『お父さんに反発していた』こと自体は思い出せても、『原因や内容』がわからない。夢には出る。でも、中々思い出せないのだ…

身体が固まる。

モノクマが記憶を奪っていったのか、それとも…誰でもない第三者？

…動機の入った封筒を机の中に入れた。

望遠鏡に少女。気になることはあるけど、今は…脱出口だけでも探さないと。



蒲生くんは時計塔の前にいた。ベンチでいつも持ち歩く本を読んでる所が様になつてゐる。

「鈴原嬢ですね。共に天の書でも読めますか？」

どうしよう。今は蒲生くんと過ごしてみようかな？

蒲生くんの教えを聞くことにした。

蒲生くんと仲良くなった気がする。何かご利益がありそうだ…。

一緒に過ごしたお礼に『名画折り紙』をプレゼントすると、

「ああ、これもヒトが天へと捧げた奇跡か。ありがとう。今日の天への捧げ物としま

しよう。」

それなりに喜んでくれたようだ。

今の空は雨が降りそうな曇り空だ。わたしは蒲生くんに尋ねてみた。

「ねえ、傘は持ってる？雨が降りそうなかだけどき」

「大雨の時以外は持ちませんね。雨というものは天がもたらすものですので少しくらい濡れても天の恵みを授かったと考えます」

「じゃあ外出先で大雨が降って、そのとき傘を持ってなかったら？」

「流石に濡れすぎるのは困るので、近くの建物に入って天の書を読んだりしていますね。」

「それにしても、天の書って？蒲生くんが腰に提げている本のこと？」

蒲生くんは笑顔で答える。

「そうですね。天の教えが書かれた書物のことです」

「そもそも天ってどういう存在なの？」

「簡単なこと。『超高校級の天文学者』である鈴原嬢ならわかるはずですよ」

蒲生くんは上を指差した。

「えっと…おてんとさまってことかな？」

「太陽だけではありませんね」蒲生くんはきっぱりと言う。

「じゃあ…お空全体が神様ってことなのかな？」

「その解釈が近いですね。天は全てを創られた全能の創造主であり観測者。いつも僕や貴女たちを見られています。」

おっと、話が逸れましたね。天の書の教えに興味はありますか？」

宗教にはあまり興味はないけど、どういのが書かれてるのかは気になるな…。

蒲生くんは腰のベルトから天の書を外し、ページを開く。

「天の書には天の功績や人がなすべき事が書かれております。例えばなすべき事、『植物を育てよ』『猫とは常に友であれ』『常に微笑みを絶やすべからず』といったものや、『横断歩道の白い部分は必ず踏んで歩け』『生まれた日には3回回った後に砂糖水を飲め』…というものなどがお書きになられています」

「さ、砂糖水って!？」

わたしは思わず驚いてしまった。

「確かに変わった教えもあるでしょう。ですが、天の書には生きるに当たって大切なことが書かれているのです。」

例えば…『弱き者は助けよ』などが代表的なものです。

僕はそれを守るために、燃え盛る家の中に取り残された、一人の子供を救出したことがあります」

天の書。おかしな教えも書かれているけど、人に危害を与えるようなものは書いていない。

蒲生くんは、そんな天の書の教えを大切にしているのか。だから、命を張って人を助けることもできる。

彼が強い人であることをわたしは知った…。

『神父らしく、天と呼ばれる存在を大切にしている。』

彼の持つ天の書には善行の教えや変わった儀式の方法が書いてあるとか。』



黒木さんはお土産屋を物色している。

「ここで自主映画でも作ればいいんだけど…監禁下で作られたスリラー映画とか話題になりそうでしょ？」

こんな黒木さんだけど、一緒に過ごそうかな？

という訳で、黒木さんと映画のネタ探しをした。黒木さんと仲良くなれたようだ…。

インスピレーションが湧くかなと思いついて、『ブリキの兵士』をプレゼントすると…

「今度の新作は特撮にでもしようかしらね。あなたがプレゼントしたこれ、セットに使えそうだし」

結構嬉しいみたいだ。良かった！

黒木さんは、お土産屋で買ったと思わしきペンとメモ帳をいつも持ち歩いている。こんな状況下でもネタ探しは欠かせないんだな。

「そういえば『灰色のフレデリカ』ってどんな映画なんだろう？観たことはないけど……黒木さん、『灰色のフレデリカ』の製作秘話とか教えてくれるかな？」

「……あら？私の映画の話を知りたいのかしら？観たこともないのに？」

「そうだけど、観てからの方がいい？」

「ネタバレが怖くないのなら聞かせてあげるわ」

「別に怖くないよ。簡単なあらすじとか見どころとか、どこのカットがお気に入りとかそういうのでいいよ。観たくなったら後で観るから」

「わかったわ。『灰色のフレデリカ』はラブコメホラー映画なの。ゾンビと人間が殺し合いをする世界のお話よ。」

冴えない普通の青年が主人公で、ヒロインはゾンビ化しながらも正気を保ってしまったダンサーの女。

二人が出会って愛し合うけど、反ゾンビ組織にヒロインが狙われて……

それから黒木さんは、『灰色のフレデリカ』の簡単なストーリーを教えてくれた。

B級映画のお約束を守りながら純愛を描き、完璧でない二人が愛し合う過程は丁寧。

そして、完全なハッピーエンドではないが切なく衝撃的なラスト……

うん、結末ははぐらかされたが、なんだか観たくなくなってきた!

「…お色気要素もないこの映画がなぜ評価されたのか。それは脚本もあるけどカメラワーク、無名だったヒロイン役の演技。」

私だけでなく様々なキャストやスタッフ、スポンサーによって『灰色のフレデリカ』は作られたの」

「…そういうえば黒木さん、映画部には入っていたのかな?」

「そうね。『灰色のフレデリカ』は映画部員と演劇部員と制作したのよ。映画部員は私以外は男子しかいなかったから、

女性キャストは演劇部員の人を連れてきたわね。こうしてあの映画はその年唯一のレオナルド賞を受賞したの」

レオナルド賞? プロからアマチュアまで傑作と言われる一握りの映画だけが取れる、あの賞…?

「私は映画部と演劇部の人たちも『超高校級の女優』『超高校級の脚本家』とか言われてスカウトされても良かったと思うの」

黒木さんはなんだかんだで、自分だけでなく映画部や演劇部の部員のおかげで映画を作れたと思っているんだな。

…でも、塞翁ケ馬学園に入学するってことは、コロシアイに巻き込まれるってことだ

よね？

そこはどうなんだろう？

わたしはそれから、黒木さんと好きな映画の話をした…。

『代表作『灰色のフレデリカ』は映画部員や演劇部員と撮ったラブコメホラー映画。

黒木は自分の力だけでなく様々な人たちの力で評価されたと思っている。』

皆と過ごしつつ脱出口を探したけど、どうしても見つからなかった。

夜の19時なのでレストランに向かうことにした。



夕食はカラフラの作った海鮮丼だった。

「この海鮮丼、サーモンが天然モノですわね。脂が少ないですわ。個人的には脂が乗っ

ていた方が好みですよ」

一ノ瀬さんが海鮮丼に乗るサーモンに文句を言っている。

旅館などで出される刺身の味を分けられるのは流石『超高校級の女将』と言ったところ

か。箸運びも綺麗だし。

食事中。隣の席の絹川くんはなぜか席の近くに人形の入った鳥かごのようなものを

置いている。

もしかして…モノクマとカラフラの動機だろうか？わたしは食べながら聞いた。

「あのさ、絹川くん。あそこにある鳥かご……何なのかな?」

「……ごめんなさい。動機なんだけど、これが何なのかを言うのはモノクマから口止めか  
れているんだ」

絹川くんは元気のない表情で答える。

「そっか。聞いて悪かったね。海鮮丼、美味しい?」

「……わからない。天然モノのサーモンらしいけど……ボク、こういうの食べたことないか  
ら」

「海鮮丼、食べたことないの?」

「お刺身はあるよ。でも、食べてきたのは違うものだったから」

違うものって何だろう。

「僕がモノクマから渡されたのは何かのディスクだったけど……見なかったよ。割ってゴ  
ミ箱に入れたのさ!」

「僕のプレゼントは……聖母像の頭部の残骸でした。しかも、自分が育った蒲生教会のも  
のです」

向こうのテーブルでは未隅くんと蒲生くんが談話している。未隅くんは一見何とも  
なさそうに見える顔だが、

蒲生くんは疲れ切った顔だ。教会が何者かに襲撃されたショックは大きいだろう。



「私は……誰かに荒らされた学校の実験室の写真だったよ……ほら。こんなにグチャグチャだと有害ガスが発生しちゃうよ……」

藍葉さんはカバンから写真を取り出す。それを、雨崎さんが慰めている。

「大丈夫だよ。きつとミー君とイヴァンくんが脱出方法を見つけてくれるよ」

食事後、別のテーブルのイヴァンくんが立ち上がり、わたしたちに告げた。

「今日、洋館に潜入する機会がありました」

……え？洋館に入った？あのトラップの仕組みに……？

思わず洋館のトラップのことを言いかけるが、口を塞ぐ。

「その洋館の2階への扉は固く閉ざされていました。2階への潜入方法は今の所ゼロです。」

私はそこが黒幕の潜入場所ではないかと思っております。危険なので洋館には皆さん近寄らないように。」

イヴァンくんはどうやらトラップのことは知らないみたいだ。良かったのか悪かったのか。

「それから。夜の10時から朝の7時まで、ホテルの外へは決して一人で外出しないようお願いします」

真剣な目つきで訓戒するイヴァンくん。その横には頭の後ろで手を組む檀くんがい

た。

「そうやって時間が流れていくうちに夜の9時になった。雨崎さんが提案した花火大会の時間だ。」

◆ 1時間程度しかできないけれど、折角だし広場に行つて楽しんでこよう。

◆ こうして花火大会が始まった。

メンバーは女子はわたし、主催の雨崎さん、バナラさん、黒木さん、二階堂さん、藍葉さん。

男子は絹川くん、未隅くん、灰寺くん、蒲生くんだ。

二階堂さんは後に雨崎さんに誘われて来たんだとか。

花火は手持ち花火と噴出花火しかなかったが、炎の光はこの監禁生活を照らしているように見えた。

花火から放たれる鮮やかな色と煙の香りは、わたしたち。

「あー！灰寺くん二本持つたら危ないよお！」

「えー？僕のお父さんいつもこうやって持つてるけど？」

「火傷したら水で冷やして、ワセリンを塗つて、ラップを貼ればいいんだって…湿潤治療って言うの。」

ワセリンもラップも全部カバンの中にあるから何かあったら言うてね。そもそも火傷自体したら大変だけど……」

「あれ、黒木さん何持つて……って!?!」

恐ろしいことに、黒木さんがタバコの箱を持っていた。

「黒木さん! 流石にタバコは大人だけでなく子供にも危険だぞ!」

「それ、当たり前じゃないの……」

「タバコの副流煙で死んじやうよ!?!」

「タバコなんて危険なもの吸うわけないじゃない。私はまだ未成年よ? 見てなさい。」

黒木さんは涼しい顔で、緑色の箱からタバコを一本取り出し……置いてあった口ウソクで火を付ける。

すると灰色の煙……ではなくシウシウと音を立てながら金色の火花が出てきた。

「え? 火花……?」

「お土産屋に置いてあったものを改造してみたの。ネットのドッキリ映像の真似よ。あとタバコの中身は洋館の多目的ホールに捨ててきたから。」

洋館みたいな危険な場所にまた行ったのか……。命知らずな。

「黒木殿……これ、誰かが見てるかもしれないのですぞ……監督人生がどうなってもいいのですか……?」

バナラさんは冷や汗をかいている。

「ドツキりもひとつのエンターテイメント。それに直接吸ったわけじゃないから大丈夫だと思うわ」

黒木さんは、このコロシアイをエンターテイメントとして見ているのか？

少し恐ろしくなった…。

「まあ、みんな聞きたいことがあるんやけど」灰寺くんが聞いてきた。

「みんな、塞翁ケ馬学園にスカウトされる前の日常って、なんか覚えてるんか？」

日常。

それは、わたしたちが当たり前に過ごしていたもの。どんな人間にも存在するもの。

モノクマとカラフラによって奪われてしまった、わたしたちの日々…

「わたしは…お父さんとは毎日喧嘩ばかりで、レストランのバイトばっかしてたよ。

お父さん、仕事上手くいってなかったみたいでさ。みんなは？」

「僕は…信者の皆様の懺悔を聞いたり、暴力を受けていた女性の保護などを行なっていましたね」

「私？新作のアイデア練りで忙しかったのよ」

「アテクシはコスプレとお化粧の動画第二弾を作成してたのです！第一弾が50万PVを突破したので」

「毎日撮影とかロケとか友達とお買い物とかデートとか…」

「僕はアマゾンの奥地の探索の計画立ててたんや。あ、のが多くなった」

「毎日チンピラどもの落書き消すのに忙しかったな…」

「僕も忙しかったね。練習と練習と練習とデートでね！」

「実験と新作の発明…だったかな。脳を活性化させる発明品とか、神経を活性化させる薬品を作ってたの」

「じゃあ藍葉殿！アテクシとその薬品をベッドで一緒に使」

「バニラさん、流石に自重しよう！」

皆、日常があった。

それぞれの人生。それぞれの生活。それぞれの時間。

その日常が破壊されたと思うと…心が苦しくなる。

だから、コロシアイなんてものは許してはいけないんだ。

ふと、気になることがあった。

「絹川くんはさ、スカウトされる前は何をしてたんだけ？」

「…人形、作ってたよ。ボク、人形に囲まれて暮らしてるんだ。だから、人形を作ると友達が増えたみたいで嬉しいんだ。」

でも、こうやって人間とお話するのも…楽しいね」

人間とお話するのが楽しい…？

絹川くん、人間の友達がいらないのかな、と思ってしまった。

「ねえ、線香花火が余ってるから皆みんなでやろうよ」

雨崎さんが線香花火をわたしたちに渡してきた。

この夜みたいな日々が、ずっと続きますように。

そう考えた。

夜の9時50分になり、皆で帰ることにした。

朝、湖林くんがこのコロシアイを巨大組織の仕業だと言っていた。

…抗っても無駄なんだろうか。いや、違う。わたしたちは平和な時間を過ごせたじゃないか。

わたしたちは、モノクマやカラフラには絶対負けない。元の日常に戻ってみせる。

# ダンガンロンパ　・　フラワーズ　第1章　4日目&事件 発生

ヒストリエランド・4日目。朝食は2日目と同じくバイキングだ。

「なあ知ってるか？またイヴァンが毒味したんだってさ！よく食べるよな！偉い！」  
二階堂さんはハイテンションだ。いいことなんだけどさ。流石に元気すぎないか。

朝食を終え、部屋に戻ったけど……正直暇だ。

じっとしてないで、わたしはどこかへと向かうことにした。



雨崎さんは噴水に座っている。どうやら不機嫌なようだ。

「あー……洋服買いたーい……原宿行きたーい……チーズハットグ食べたーい……」

モノクマもカラフラも早くここから出してよー……」

雨崎さんは不機嫌そうだけど、一緒に過ごそうかな？

「あ、鈴原ちゃん！一緒に噴水で水泳でもする？冗談だよ。」

雨崎さんと一緒に過ごした。昨日の花火大会について語ってくれた。

少し仲良くなったようだ。

音楽でも聴くかなと思ひ、『2. 5Dイヤホン』を渡すことにした。

「すごいじゃん。これ、流行りのやつじゃん！持つべきものは友人じゃん！つてことで貰うねー。」

「そこそこ喜んでる…のかな？」

「あのさ、鈴原ちゃん。少し聞きたいことあるんだけどさ」

「…どうしたの？」

「鈴原ちゃん、そのサロペットとシャツとコートどこ買ったの？」

「え？バイト先近くのショッピングモールだったけど…店名は忘れたな」

「店名忘れるの!?普通アプリにメモっとくよね!?!」

「そういえば雨崎さんは『超高校級のモデル』だったような。」

「モデルだし、やっぱりファッションの研究はしとくものなのかな。」

「今度脱出したらしいアプリ教えておくねー。女の自分磨きは大切だよ」

「ファッション、あんまり拘りはないんだけどな。動きやすければなんでもいいし。」

「でもさ、ファッションに一番大切なのは流行とかじゃないと思うんだよね。」

「流行ってる洋服を無理して着る必要なんてないし。」

「もしかして、ファッションに一番必要なのは…服の値段、じゃない…」

「その人の個性、だったりする?」



「…ピンポン！正解！あたしが言いたいのはそのなんだよね。

たまに和服やそれをアレンジした服を着た女の人とかいるじゃん。かつこよくて尊敬しちゃうよね。

他にはロリータ系の人もいいよね。あたし男ウケいい服とかより、自分ウケのいい服を着てる女の人が好きだな」

言い得て妙だ。

「ところで鈴原さん、何か似合いそうな気がするんだよね」

「…何が？」

「うーん、ヴィジュアル系とか。十字架とか黒を基調としたやつ」

「ヴィジュアル系か…あれあんまり聞かないんだよね。ロックは好きだけど。一番好きなのは…ギターサウンドがメロディックなやつで…」

あ…しまった！音楽の話題になってしまった！しかも、長々と語ってしまった！

「あたしもあんまり聞かないんだけどね。洋楽やK-POPのが好きだし」  
良かった。というか邦楽ファンではないんだね、雨崎さん。

意外な一面が見れたようだ…。

『ファッションにおいて一番大切なのは個性だと信じている。

ちなみに鈴原に一番似合いそうなのはパンク系ファッションらしい。』

◆ 藍葉さんは自室で何かを研究していたようだ。

「今さっき、打ち上げ花火ちゃんを作り終えたばかりなんだよね。」

「昨日の花火大会が楽しかったから…。」

「ちよーどいい所だし、藍葉さんと一緒に過ごそうかな?」

「換気が終わったら一緒に話そう。火薬ちゃんを間違って吸い込まないように…」

「換気を終えるのを待ってから藍葉さんと会話した。」

「藍葉さんのことがわかった気がした…。」

「科学っぽいプレゼントとして『フィギュア入り培養槽』を渡した。」

「こ、これを私に!?!いいの?爆薬ちゃんとか入ってないよね!?!」

「…ありがとう!」

「笑っている。とても喜んでくれたみたいだ。」

「うう…どうしよう…私の研究室…大丈夫かな…」

「藍葉さんが何かを心配しているようだ。」

「そんなに心配しなくていいよ。一緒に脱出する方法を見つけよう?」

「…あの、言っ方がいいかな…?」

「?」

「もし脱出口が見つかったとして、そこにトラップがあつたら…鈴原さんはどうするの？」

脱出口が偽物だとしたら？マフィアが待ち構えていたとしたら？

私たち、脱出できずに捕まるか死んじやうよね…？」

「その時は、最善の方法を考えた方がいいと思う。あと、準備かな。」

「準備？護身用にゴルフクラブちゃんとか装備した方がいいかな？武器も作った方がいいかも。」

女性でも扱える銃みたいな飛び道具ちゃんとか、対マフィア用には必要だよね…？」

あと、脱出口までの道とかが迷宮みたいな道だしたら目印をつける用のペンキちゃんやテープちゃんもいるよね？

うう…またカバンに物が増える…」

何かに『ちゃん』を付けるのはともかく、彼女自身は石橋を叩くタイプ…みたいだ。

「もし物が多くなつた時はみんなで持った方がいいんじゃないかな」

「それもあるよね…でも雨崎さんや絹川君に重いものを持たせるのも…」

「そこまでは考えてなかつたな…」

「やつぱり未隅君や湖林君が先頭がいいかな？いや、力が弱い人が先頭の方がいいのかな？」

…ああ、また考えすぎちゃったよ…！イライラさせちゃう、よね…？」

…彼女は、考えすぎてしまうタイプみたいだ。というか、『石橋を鉄橋に改造してランマーで叩いてから渡るタイプ』だ…。

「やっぱりまた作るしかないのかな、アレ…」

「アレって？」

「体にかけると10分間だけ動けなくなる薬品ちゃんなの。水鉄砲がお土産屋にあったからその中に入れてほしいし。

昔暴漢に襲われたとき、カバンの中からそれを取り出してかけて警察に通報したんだ。」

随分とすごい薬品を作るんだな…その用心深さは、彼女の科学への関心にも繋がっているのかな。

「もし脱出できたとして…出所した暴漢が復讐しにまた来たら…その時はスタンガンちゃんか小型火炎放射器ちゃん持っていった方がいいかな…」

「火炎放射器は威嚇にはいいんだろうけどやりすぎなんじゃ…」

それからわたしは、藍葉さんをしつかり慰めた…。

『用心深く、石橋を鉄橋に改造してランマーで叩いてから渡るタイプの藍葉。

しかしその性格が彼女の科学への関心へと繋がった。』



夜の7時になった。夕食は朝のバイキングと同じのようだ。

モノクマとカラフラは料理のレパートリーがないのかな。

当然、生徒の皆も淀んだ顔をしている。

「壁は登れんしウォータースライダーは動かんし：アスレチックも飽きたし：お土産屋には難しそうなゲームしかないし：

何よりバイキングは朝と同じやし：」

灰寺くんに至ってはローストチキンにマヨネーズをかけたものをご飯に乗せて食べている。

気持ちにはわかる。助けも来ない、移動できるのは第一エリアのみ、そんな環境なら気分も落ち込むし、殺人だって：

いや、そんな身勝手な理由で殺人なんてしてはいけないんだ：。

でもわたしは何の行動も起こしていない。

イヴァンくんが独り言で言っていたが、今日はウォータースライダーの水の中をじつくり調べていたらしい。けれど、脱出口は見つからなかった。

外へ繋がっていきそうな排水口は人が入れる大きさではなかったようだ。

モノクマとカラフラの目的がわたしたちを閉じ込めコロシアイを強制することなら、

そりゃあそうだろうけど。

それなのにどうしてヒストリエランドについて調べるのが自由、ということにしていいんだろう…？

部屋に戻り、シャワーを浴び、浴衣に着替える。

気が付いたら夜の10時になっていた。思わず、星が見たくなったので窓を開ける。相変わらず知っている星空だ。でも、エピソードの記憶はない。

学校の友達。天文部の部員。他にも、いろんな人と星を見たのかな。

…動機として渡された、あの美少女カラフラそっくりの写真の少女。

彼女とも、この星空を見たんだろうか。

もう会えないのかな。ここに一生閉じ込められて、殺しあえて言われて。

…気がつけば、付けていたペンダントのロケットを開けていた。

オルゴール『きらきら星』の柔らかな音色が響く。聞いていると、落ち着く気がする…。

これも写真と同じく、黒幕から渡されたプレゼントなんだろうか。

何分か経った後、ロケットと窓を閉め、歯を磨き、わたしは眠りについた。

◆ 朝が来る。洋服に着替え、レストランへと向かう。

朝食はバイキング：…なのだが和風のバイキングだ。

「そこらのロケ弁よりは味はいいわね。ところでこの唐揚げ、ササミを使っているのかしら。」

皆が鬱屈としている様を横目に黒木さんは平然とした表情で唐揚げを食べている。

8時になつても食事会に來ない人がいた。イヴァンくんと檀くん、一ノ瀬さんだ。

「あの三人が遅刻とはね。おかしいと思わない？」

「イヴァン兄ちゃんなら毒味してくれるのにさ。」

「毒味とやらのしすぎでお腹壊してんじゃねーの？ 外科医師なのになー…」

「檀殿、まさか夜のセルフジョイのしすぎで朝起きれなくなつたとかじゃないでしょうな？」

皆の言葉が、わたしを恐怖へと導いていく。

まさか：…あの三人が…

『ヒストリエランド内で殺人が起こつた場合、生存者による全員参加の学級裁判が行われます。』

校則に書いてあつた文章が脳裏に浮かぶ。わたしは席を立ち、レストランの外へと飛び出して行つた。

違う。違う。違う。誰も死んでない。

そう頭の中で思っているけど、体は動き出す。

アスレチックへと向かい、3人を探す。

クビヨナワデツツテシマツタカモシレナイ。

…何を考えているんだ？違う違う違う違うチガウ…！

なのに、わたしは必死に誰かを探している。

…アスレチックを探しても誰もいない。

どこかへ向かおうとした瞬間、もう聞きたくもなかった声があった。

「死体が発見されました！一定の自由時間のあと学級裁判を開きます！」

ということとは。

…まさか。

わたしたちの中の、16人が。洋館で。

…死体？学級裁判？なんで？

どうして？どうして？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？ドウシテ？

どうして罪もない人が殺されなければならないんだ？

茫然自失していると、黒木さんと絹川くんが走ってやって来た。

「探したわよ。今すぐ洋館に行きましょう」



黒木さんは無表情。絹川くんは青ざめている。

込み上げてくる何かを抑えながら、黒木さんと絹川くんとで洋館へ向かった。

洋館の庭にはいない3人を除く生徒の皆が集まっていた。誰も、笑っていない。

誰も笑っていない。ダレモワラッテイナイ。

「…鈴原、来たんじゃない。洋館の扉を開けるときは覚悟するんじゃない」

わたしはゆつくりと、洋館の扉を開ける。

ゆつくり、ゆつくり。ユツクリ。

そして、玄関に入り、廊下を覗く。

廊下を……………



昨日まで生きていた『彼』は、仰向けで倒れていた。

床を共に血に染められたままで。無表情で。じつと。動かずに…。

その死体は。

『超高校級の外科医師』イヴァン・ユグドラシルソンのモノだった。

「うわああああああああああつ!!!」

わたしは、その場に膝をつき…。

絶望と恐怖、無力感が同時に襲いかかってくるのを感じていた。

ダンガンロンパ ・ フラワーズ 第1章 非日常編―捜査

目の前には、命乞いをする背広の男。

腹には、赤い花が咲いたような血が着いている。

「…ユルサナイ」

わたしが持っているのは、かつて暗殺にも使われた小型の銃か。

「…ごめんね………ちゃん………が愚かだっことは……わかってる…」

誰かの名を呼ぶ。誰の名かは知らない。

「でも………どうしても……許せなかつたから…」

そうか。あいつはわたしが…

わたしは、男に銃を向け、引き金を引く。

男の額には穴が開き、血が飛び出し、そいつはそのまま倒れる。  
そうか。

わたしは…



「…さん…！」

倒れている『彼』を目撃してから、どれほど経ったのだろうか。

「…きて…原さん！」

「……………ん！」

そういえば、『彼』の変わり果てた姿を見てそのまま気絶したんだっけ。

わたしの体を、誰かが揺すっている…みたいだ。

「鈴原さん…！」

「良かったわ、起きたみたいね」

目を開けると、童顔の少年と片目の隠れた少女の姿が見えた。絹川さんと黒木さんだ。近くには彼ら以外の生徒もいる。

どうやらわたしは気絶した後…暖炉のある部屋…応接室の椅子に座って寝ていたみ

たいだ。

「鈴原さん、廊下でイヴァンさんを見て倒れてたんだよ」

そういうえば、イヴァンくんは…この洋館で…血塗れになって、目を見開いて…死んでいたんだ。

どうして彼が殺されなければならないんだ。何の罪もない人間が、どうして。

「おはつくまー！鈴原さん、起きたー？」

「二度寝は体に毒なのだ！」

この場に似合わない能天気な声が聞こえた。モノクマと、奴が押している台車に乗ったカラフラが近くにいるようだ。

「お前が…お前らがイヴァンくんを殺したのか!？」わたしは、細い声で叫ぶ。

「違うのだ鈴原さん。ヒストリエランドを日々監視しているモノクマとわーが言うなら間違いないのだ」

「オマエラの中の誰かが、イヴァンクンを殺したんだよ？ヒストリエランドの最初の殺人なんだよ？」

監視。ああ、園内に仕込まれているカメラのことか。

そしてイヴァンくんは、わたしたちの中の誰かに殺されてしまった。

「あ、学級裁判は校則に書いてある通り全員参加なのだ！参加しないとオシオキされ

ちやうのだ。

ってことでアナタラの電子生徒手帳に『カラフラファイル』を転送しておくのだ」  
カラフラは平然とした態度で告げる。

「あのさ、カラフラファイルって……？」

わたしはコートのポケットから電子生徒手帳を取り出し、電源を入れる。

メニューには……『カラフラファイル』の項目が追加されている。

タップしてみると……イヴァンくんの死体写真と、死亡情報が表示された。

『カラフラファイル』

被害者はイヴァン・ユグドラシルソン。

死体発見現場は洋館の廊下。

死亡時刻は夜10時半ごろ。複数の銃創が見られる。』

これが……死の現実なのか。

ふと、メインメニューに戻り、『校則』をタップする。

⑦ヒストリエランド内で殺人が起こった場合、生存者による全員参加の学級裁判が行われます。

⑧学級裁判で正しいクロを指摘できた場合、殺人を犯したクロだけが処刑されます。

⑨指摘できなかつた場合、クロ以外の全員が処刑されます。その場合、クロだけが卒

業し、ヒストリエランドから脱出することができません。

⑩3人以上の生徒がクロに殺害された死体を発見した場合、「死体発見アナウンス」が流れます。

学級裁判。

誰か一人を犠牲にしなければ生き残れない、ゼロサムゲーム。

それ乗り越えるしか道はないのか…。

「傍聴席なんてのはないのだ。皆で話し合いクロを決めるのだ！つてことで捜査を頑張るのだ」

「そーいやカラフラ、ボクより先に喋ること多いよね？なんか生意気じゃない？」

モノクマはカラフラの乗る台車を押しながら、応接室の外へと去っていった。

「…あのさ、あたしたちはどうしたらいいの？」

「えつと…まずは、カラフラが言ってた『捜査』つてのをするべきじゃないかな？」

「学級裁判がどいうのかはわかんねーけど、それしかないようだな」

「まずはクロの隠蔽工作や第2の殺人を防ぐためにも、色々部屋に見張りを付けた方がいいわね」

「じゃあ振り分けは僕が決めよう！」

未隅くんの取り決めにより、部屋の見張りの振り分けが決まった。

応接室は紅葉さんと灰寺くん。バニラさんと蒲生くんが死体発見現場の廊下。藍葉さんと梅田くんがバスルーム。未隅くんと雨崎さんが多目的ホール。二階堂さんと湖林くんは檀君と一ノ瀬さんの捜索。

そしてわたしと黒木さんと絹川くんは様々な発見をするための所謂サポーターという役割だ。

ちゃんとわたしたちをまとめようとするなんて、未隅くんはやっぱり『超高校級のラグビー部』なんだなと思ってしまった。

だからわたしも努力しなければならぬ。

これは、誰かを殺すためじゃない。わたしたちが、戦うための捜査。そう思うことにしたんだ。

ただ、空元気でしか無いけど…。

後、1つ皆に言っておこう。

「…皆、わたしの話を聞いてくれないかな？」

「どうしたんだー鈴原？」

「間違っても洋館の鉄の扉には触れないでほしい。あそこに危害を与えたりすると、トラップが発動して銃で撃たれるんだよね。本当だよ」

「わかった。ここにいない檀や一ノ瀬にも伝えておくぜ」



「これ以上死人が出るほど悲しいことはありませんからね」  
「人が死なないほど安心なことはないからね…」

よし、伝わったみたいだ。じゃあ、捜査を始めよう。

わたしは椅子からぱつと立ち上がり、応接室を後にした。

◆  
【捜査開始】

まず、わたしたちはイヴァンくんの死体の捜査のために廊下へと向かった。

こと切れたイヴァンくんの死体は血に濡れている。見たくはないけれど、今は見るしかない。

…体からは血が抜けたのか、完全に青白くなっている。そして近くには、拳銃が落ちて  
ている。

全身血濡れ、というわけではなく、胴体には血がほとんど付いていない。  
逆に言えば、手足にしか血は付いていない。

「ねえ、鈴原さん。今…いいいかな？」 絹川くんがわたしに話しかけてきた。

「どうしたんだ？」

「イヴァンくんを…触ろうと思うんだけど、いいかな？」

絹川くんは、おそらく検死をしようとしているのだろう。『超高校級の人形師』なら、

人間の体の構造ぐらいはわかるだろうし。

「いいよ。でも、あまり動かさないうようにな」

「わかった」

絹川くんは手を合わせた後、廊下に座りイヴァンくんの身体を触り始める。

「…ごめんね、イヴァンくん」

検死中になふと思いい出した。

「黒木さん。パニラさん、蒲生くん。この前洋館でカラフラから聞いたよね？『警報装置は一番近い生体反応を追って6発銃撃する』…って」

「ええ、覚えているわ。それがどうしたのかしら」

「つまりイヴァンくんは…生きているうちに銃殺されたんだよね？カラフラの言った警報装置の説明が本当なら。」

イヴァンくんを殺した後に銃撃装置は発動しないだろうし」

「犯人がイヴァン殿を殺害した後に警報装置を発動させて、銃撃してきた時にイヴァン殿を盾にした…なども考えられますね」

「そんな恐ろしいことよく考えられるのです…そんなサイコパスが潜んでいるなんて、まさに悪夢なのですう！」

パニラさんはパニツクを起こしているようだ。

「大丈夫だよバニラさん。この裁判を乗り越えれば、きつと死なずに済むよ。そしたらまたみんなの集まりでも開こう」

「…そうなのです」

泣きそうな声で言う。それほど、死がショックだったんだろう…。

絹川くんが立ち上がる。どうやら検死が終わったようだ。顔は前ほどではないとは言え青ざめているが。

「…任せちゃってごめん、死体はどうだった？」

「小さな穴みたいな傷が手と足にあっただ。足にはそれぞれ1発ずつ、腕にもそれぞれ2発ずつ。」

それ以外には何の傷も骨折もなかったよ」

「合わせて6つの銃創ね」

「じゆうそうって…？」

「わたしも前は知らなかったよ。銃弾を受けてできた傷のことだよ」

「そうか、なら痛そうだね…何で両手足を撃ったんだろうね…。」

絹川くんは悲しそうな顔をしている…。

「警報装置と言えよ。カラフラが他にも言っていましたよね。無理矢理こじ開けようとしたら、危害を与えたら発動すると」

「後は…アラームが6秒鳴った後に銃撃が始まる…って言ってたのです」

蒲生くんとバナラさんが警報装置の仕様についてまとめている。

「そういうわたしと黒木さんとこの二人は、カラフラに警報装置について教えられたんだっけな…。」

あと、警報装置の仕様を知っているのは…



多目的ホールに入ると、未隅くんと雨崎さんが柵を捜査していた。雨崎さんが振り向く。

「あ、鈴原ちゃん？洋館に入ったって黒木ちゃんから聞いたけど…柵は漁らなかったの？」

…黒木さん、わたしに隠れてなんてことを言ってくれたんだ。

「柵は見えないよ。警報装置から逃げるのに精一杯だったからね」

「警報装置…?」

「いや、後で話す」

雨崎さんは警報装置について知らないのか。

机の上を見る。吸い殻入れと…柵から取り出したであろう救急箱が置いてある。

吸い殻入れにはカス以外は何も残っていない。

「確か、黒木さんが花火大会で使ったタバコのゴミを入れたんだっけ」

「そうだけど。何の目的で捨てたのかしらね？」

「あ、そういう救急箱の鍵が最初から鍵がかかってなかったんだよね。イヴアンくんが治療用に使ったのかな」

雨崎さんが救急箱の蓋を開ける。中身は包帯に消毒液の瓶、使い捨ての注射器が二本、絆創膏、軟膏の瓶、風邪薬、精製水の瓶…などがある。

「鈴原さん！みたまえ、世紀の大発見だ！」

「えーと…未隅くんどうしたの？」

「救急箱の蓋の裏をよく見たまえ！四角く大きなシールを剥がした痕があるようだ！」

本当だ。シールは少しだけ残っているが、何のために貼られていたのかはわからない。

多目的ホールを見回す。アンティークの銃が飾られているらしいが、ガラスケースには鍵がかけられており使用された形跡はない。

鍵を壊したわけでもなさそうだし…。

わたしたちは多目的ホールを後にし、応接室へと入った。

見張り役の紅葉さんは…現代風のライターを持って、それを見つめているようだ。

「何の変哲もないライターだよ。これで暖炉に火をつけたんだろうね。」

あるいは犯人に成人がいて、ここでタバコをふかしていたのかな」

…実際タバコがあるんだっただらそうだろうけど。

一方灰寺くんは火かき棒で暖炉の中の何かを突いているようだ。

絹川くんが彼に尋ねる。

「ねえ、暖炉で何を探しているの?」

「…うーん…針が溶けたモノに付いてるんやけど、この部屋には火バサミが無いんやな。持つて帰れたらいいんやけど」

「じゃあボクが持つよ。針はそのまま持つと危険って聞くし」

「ありがとう絹川。でも、熱く無いんか?」

「大丈夫だよ。手袋も付けてるし」

溶けたモノがある…ってことは暖炉は使われているんだな。

絹川くんは小さな手で、暖炉の前らへんに置いてある針と溶けたモノを取り出す。

「藍葉さんに渡して何か実験してもらったら? 科学捜査ならできるだろうし」黒木さんが提案した。

◆ でも、藍葉さんは科学捜査用の薬品とか持つてるのかな…?

バスルームへと向かう。絹川くんが藍葉さんに針を渡す。

「えつと…これが凶器だったりする？」

「わからないわ。大量出血死やショック死かもしれないし」

「藍葉さんは、何か操作に役立つ薬品とか持ってるかな？」

「い、一応…ルミノール反応キットちゃんなら持ってるけど…」

ルミノールちゃんと同酸化水素水ちゃんと無水炭酸ソーダちゃんと蒸留水を混ぜて、それを検査物に吹きかけると…青白く光って…血が付いているかどうか分かるの。検査の前に、部屋を暗くしてほしいな…」

よくわからないけど、すごい薬を持ってるんだな…。

「わかったよー。藍葉ー、他にも薬持ってるかー？」梅田くんは明かりを消す前に藍葉さんに告げた。

「後は…塗ると指紋が現れるクリームちゃんならあるよ…小さいし、一回しか使えないけど、いいかな？」

「じゃあ、イヴァンの近くに置いてあった拳銃に塗ってくるわね」

「…うん。大切に使つてね。」

藍葉さんはカバンの中身を探ると、それぞれの名前が書いてある3つの薬の瓶と蒸留水と書かれたプラスチック容器を取り出し、バスルームの隅に置く。

そして、クリームが入っていきそうな『指紋が出る薬』と書かれた小さなケース、朱肉

とメモ一枚を黒木さんに渡す。

朱肉とメモは恐らくイヴァンくんの指紋を撮取するためのものだろう。

藍葉さんが薬品を混ぜている間に拳銃にクリームを塗ってこよう。

「黒木殿が…藍葉殿からプレゼントを貰ったですと!?なんて羨ましいのですかアテクシは藍葉殿からキスすら貰ったことがないというのにやはりセクスイーな黒木殿の色仕掛けなのですか絶許の極みなのd」

「落ち着くように。クリームの上には『指紋が出る薬』と書いてあるでしょう? 捜査のためのものだと思うのですが」

「藍葉さんはバナラさんのことは嫌いじゃないと思うんだよね…」

蒲生くと絹川くんがバナラさんをなだめているうちに、黒木さんが拳銃の持ち手部分にクリームを塗る。

すると…赤い模様が浮き出てきた。誰かしらの指紋のようだ。

黒木さんはイヴァンくんの死体の指の部分に朱肉を付け、その後メモに指を押し当てる。

拳銃に出てきた指紋とメモ帳の指紋を比較してみる。正直、どれも同じに見える。

「…よく見たら、二種類あるね。指紋」絹川くんが言う。

と言うことは、拳銃はイヴァンくんの他に使った人がいるんだろうか?



バスルームに戻る。どうやら検査が終わったようだ。

「検査結果かー？針の先が一瞬だけ青白く光った。それだけだよ。」

梅田くんが告げる。と言うことは…あの針をイヴァンさんに刺したのか？

急所を突くため…じゃないよな…？

そういえばバスルームの水回りのあちらこちらには『消毒済』のシールが貼られている。

これ、使われてないってことだよな…？

トイレやキッチンも覗いてみたけど、使われた形跡はなく、『消毒済』のシールが貼られてあるだけだった。

これ以上洋館を捜査しても何も無い…と思うので、ホテルに行こう。



ホテルのエントランスに3人で行く。そのソファには4人の人物がいた。

「い…嫌ですわ…あんな女と裁判だなんて…！」

「でも仕方ねえんだよ。校則にも全員参加って書いてあっただろ？」

二階堂さんがうづくまる一ノ瀬さんの肩に触れようとして…避けられた。

「やめてくださらない!?私女に触れると蕁麻疹が出てしまいますのよ!」

死ぬ危険性のあるものにわざわざ突っ込むなんて…ああ…助けて湖林様…！」

湖林くんに泣きつく一ノ瀬さんと、その側で放心状態で座る檀くん。

「貴様は疲れてるみたいじゃな。捜査が終わるまで黙って寝てろ」

湖林くんは冷や汗をかいている。突き放してるのか慰めていいのかわからないな…。

「あのさ、二階堂さん…一ノ瀬さん、どうしたの？」

「一ノ瀬か？あいつさ、殺人犯と一緒に居たくないって言うんだよ」

「殺人犯って？」

「昨日の夜、外に棒のようなものを持った赤いコートの女を見たらしいんだよな」

…え？

赤いコートの女…？もしかして、私が犯人だと言いたいのか…？

窓を開けただけで、外には一歩も出ていないのに…？

その時。檀くんがさっと立ち上がり、エレベーターへ向かい、ボタンを押した。重く

冷たい鉄の扉が開かれる。

「どうしたんだ、檀くん!？」

エレベーターのドアはすぐに閉じていく。

「檀くんを追おう。待ってるよりも、非常階段から上に行こうと思うんだけどいいかな」

「じゃあ私は残ってるわ。あそこのロッカーを調べたいからね」

「ボクは付いていくよ」

わたしと絹川くんは、非常階段へ2階へと向かう。

2階には誰もいない……。でまた階段で3階へ登ることに。

そこにはわたしの部屋の前に立つ檀くんと……。カラフラがいた。

「いいよん。わーは性格がモノクマよりもマシな花だから……。け、けあるうー!」

カラフラが叫ぶと、部屋の鍵が開けられる音がどこからして……。檀くんは、素早くわたしの部屋のドアを開けて、中に入っていった。

「待ってくれー!」

わたしは絹川くんを置いて、部屋へと走っていく。閉ざされたドアの指紋認証をクリアすると、ドアが再び開かれる。



部屋に入ると……。檀くんがわたしの机の引き出しを開けていた。

わたしは必死に引き止める。

「やめてくれ、檀くん!」

「うるせえな!容疑者の部屋を調べるのは捜査の基本だろうが!それに……。お前らもあの洋館に勝手に入っただろ……。?」

一瞬、檀くんを殴りたくなったけど……。耐えなければならぬ。

「…わたしの部屋を漁っても無駄だ。そこの封筒の中の写真はわたしの記憶にないものばかりだったし、わたしは昨日の夜外には出ていない」

「口でなら嘘だつて言えるよね？」

檀くんは引き続き部屋の机から封筒を取り出し、中身を抜き出そうとする。

わたしは必死に檀くんを止めようとするが、振り払われる。そして…ついに封筒の中身を見られてしまった。

「…この写真が動機？」

謎の少女と、血のついた望遠鏡の写真…

「なんだ、これだけか」

「二枚ともわたしの知らない写真だ。見て満足したのなら…！つ取引しろ。わたしの動機を見たのなら、あなたの動機を見せてくれ。これでフェアだろう？」

檀くんは溜め息をついた後、こう言った。

「しようがねえな。今は動機を持つてないけど言っておくよ。いっちゃんに9mm拳銃を渡したのは俺だ」

9mm拳銃…？銃の種類、だよな…？それが動機…？

「あと、事件に使われた銃は銃口が9mm拳銃より少し小さいんだよね」

…犯行に使われた銃の銃口が、9mm拳銃より小さい？それってもしかして…死体の

第一発見者は…。

そう思考した時。悪夢を告げるチャイムが鳴った。

『ピーンポーンパーンポーン…』

「グッドモーニングエブリワーン？ 捜査は捗ってるかい？ 今から学級裁判始めちゃうよ  
O！ っつてことで、第一エリアの時計塔前に集合しちゃうってくださいーい！」

「来ないと股間のなんちゃらソードを殺してでも奪い取るのだ！」

…持っていない女子はどうするんだろう。

檀くんは無言で部屋から去っていく。

部屋の外に出ると絹川くんが待っていた。

「…置いていってごめん」

「鈴原さん、大丈夫だった？ 檀くんにかかひどいことされなかった？」

「…動機を見られたけど、代わりに動機を教えられた。それだけだよ」

「…そういえば女子の部屋、ドレッサーと赤いカーテンがあるんだね。男子の部屋はド  
レッサーはただのテーブルだし、カーテンも青いんだよね」

絹川くんはどうやら部屋をちよろつと見ていたようだ。正直恥ずかしい。

それよりも、学級裁判が始まるのだ。黒木さんの調査結果は時計塔で聞こう。

◆ 時計塔前には生徒の皆が集まっていた。…今回の被害者であるイヴァンくん以外はだ。

「ねえ、黒木さん…ロッカーはどうだったの？」

「ロッカーのこと？古いデザインの箒、無駄に明るい茶色のモップ、ちりとりしかなかったわよ」

ホテルなのにそのロッカーの中身はどうなんだ。

でも…これも重要な証拠になりそうだ。

やがて時計塔の扉が開かれる。中身は巨大なエレベーターとなっていた。

エレベーターの中には…台車に乗ったカラフラがいた。

「モノクマが待ちくたびれているから、みんな早く乗り込むのだ。3分くらいで裁判場に辿り着くのだ」

「…乗るしか、ないんだよね？」

「そうだね。自分の潔白や犯行に自信があるなら乗り込むしかないね」

怯える藍葉さんに、紅葉さんが声をかける。

わたしを含めた15人が、エレベーターに乗り込む。

全員が乗り込んだ後、重く冷たい扉が閉められる。

もう後戻りはできない、と告げているかのように。

エレベーターの乗り心地はあまり良いものではなかった。

無機質な箱はわたしたちを断頭台へと運んでいるかのようだ。

「ミー君…あたしたち、これが終わった後でも生きてられるよね…?」

「梨々。学級裁判とやらが終わったら、何か美味しいものを食べよう。一ノ瀬さんに頼めば作ってくれるよ」

抱き合っている未隅くんと雨崎さん以外は、誰もが無言だった。

終わった後には、この中の1人が死んでいるということを知っているのだから。

そして、チーンという音がした後、エレベーターの扉が開かれる。

裁判場にはよく見る陳述台が16つ、円状に並べられていた。

モノクマは陳述台の外の豪華な椅子に座っている。

「では、自分の名前が書かれた席に立ってくださいなのだ」

カラフラに言われた通りにわたしたちは、自分の席に立つ。

陳述台の液晶画面にはわたしの名前：『鈴原椿』と、ツバキの花のイラストが描かれている。

裁判場を見回す。イヴァンくんの席だけは遺影が飾られており、遺影にはメスで作られた×印、そして…リボンの部分にはヤドリギと思わしき木の枝が飾られている。

◆ 『超高校級の外科医師』 イヴァン・ユグドラシルソン…

皆を導き、誰よりも皆が助かることや脱出のことを考えていた男。

そんな彼を殺害した人間は…この中にいるのだ。

そう…わたしたちの中に。

1人、犯人が紛れ込んでいる。

犯人を暴き、処刑しなければ、私たちは生き残ることができない。

絶望を、希望の弾丸で、撃ち抜かなければならない…。

だから、わたしたちは信じ、疑うのだ。

…これは生き抜くか死ぬか、命がけの裁判なのだから。



ダンガンロンパ　・　フラワーズ　第1章　非日常編―学級裁判

コトダマ一覽

【モノクマファイルー】

「被害者はイヴァン・ユグドラシルソン。

死体発見現場は洋館の廊下の隅。

死亡時刻は夜10時半ごろ。複数の銃創が見られる。」

【死体の状況】

イヴァンの死体には銃創が右足に1つ、左足に1つ、右腕に2つ、左腕に2つある。

頭部や胴体に傷はなく、血もほとんど付いていない。

【警報装置の仕様】

洋館の2階への扉に付けられた装置。

扉を無理やりこじ開けようとしたり危害を与えると作動し、

アラームが6秒鳴った後にドア上の銃撃装置から銃弾が発砲される。

なお、警報装置は一番近い生体反応を追って6発銃撃する。

【拳銃】

イヴァンの死体の近くに落ちてあつた拳銃。

【消えたゴミ】

多目的ホールのテーブル上の吸い殻入れにはゴミが捨ててあつた。

それが何者かの手によって捨てられたようだ。

【救急箱】

多目的ホールの棚に置いてある、救急箱。

中身は包帯、消毒液、使い捨ての注射器が2本、絆創膏、軟膏、風邪薬、精製水が入っている。

【救急箱の剥がされたシール】

救急箱の蓋の裏に貼つてあつた大きなシール。

なぜか剥がされている。

【飾られていた銃】

多目的ホールのガラスケースに飾られていたアンティーク銃。

使用された形跡は見当たらない。

【ライター】

応接室の机の上にあつたライター。

【暖炉】

応接室の暖炉。つい最近燃やされたばかりらしい。

よくみると針のようなものが溶けた何かに付着している。

【使われていない水回り】

バスルーム・トイレ・キッチンに事件発生時に使用された形跡は見られない。

【藍葉の科学捜査1】

暖炉の中の針がルミノール反応を起こし、青白く光つた。

【藍葉の科学捜査2】

指紋が現れるクリームをイヴァンの死体近くの拳銃に付けてみたところ、

指紋はイヴァンのものと別の人間のものの二種類現れた。

【一ノ瀬の証言】

昨日の夜、棒状のものを持ってホテルの外を歩く赤いコートの女を目撃したらしい。

【部屋のカーテン】

男子の部屋のカーテンは青、女子の部屋のカーテンは赤。

## 【檀の証言】

檀はイヴァンに9mm拳銃を渡している。

## 【事件に使われた銃】

事件に使用されたのは経口が9mm拳銃より小さな銃のようだ。

## 【ホテルのロッカー】

ホテルのエントランスのロッカー。

古いデザインの箒や明るい茶色のモップ、ちりとりなどがある。



## 【学級裁判・開廷！】

モノクマとカラフラが説明を始める。

「まずは学級裁判の簡単な説明からです。学級裁判の結果はオマエラの投票により決定されます。」

「学級裁判の結果はアナタラの投票により決定され…。にぎやあー!」

カラフラがモノクマがどこから持ってきた鞭でカラフラを縛る。

「もー。カラフラー。ボクのセリフ取らないでよー。」

…説明の続きです。正しいクロを指摘できれば、クロだけがオシオキ。

もし間違った人物をクロとして投票した場合は、クロ以外の全員がオシオキされ、ク

口だけが見事卒業となるのです！

さて、そろそろ始めようか！まずは事件のまとめからだね」

議論が始まる。

何かおかしな点があれば、何かを発言していけばいいのかな。

怖いけど、命のかかった裁判だから。失言は許されないんだ…！

【ノンストップ議論（気づいたことについて）】

雨崎「…事件のまとめと言っても、何から話せば良いのかな？」

未隅「自分の気づきを話せば良いと思うぞ、梨々！」

絹川「まずイヴァンくんが見つかったのは、洋館…だったよね？」

紅葉「正しい表現だと、洋館の廊下だね」

蒲生「そういうえば、死体の近くには拳銃が落ちていましたね」

梅田「凶器はくその拳銃だけ＞だな、間違いねー！」

あれ、あの発言…おかしくないか？

アレが限定される可能性は低くないはず…。

【コトダマ：警報装置の仕様】

「…それは違うぞー！」

「ちよっと待って、梅田くん…凶器となり得るのは拳銃だけじゃないよ。

あの洋館には、2階への扉に付けられた『警報装置』もあるんだ」

「…警報装置?」

「雨崎さんは知らないみたいね。少し前に私たちが洋館の前を通り過ぎた時…カラフラから教えられたのよ。」

『洋館の2階への扉に危害を与えると発動して、銃弾が発砲される』って…」

「あーそっか。そのことすっかり忘れてたわ…ごめんな」

梅田くんは申し訳なさそうに謝罪する。

「一応電子生徒手帳にも書いてある事じゃ、確認はしっかりしろ」

湖林くんが梅田くんを叱りつける。

「じゃあ、次は何から話せばいいんだ?」

「また、自分の気づきとやらを探していけばいいと思うのです…!」

二階堂さんとバナラさんの提案により、皆は再び自分の気づきを言うことになった。



【ノンストップ議論（気づいたことについて）】

黒木「提案だけど…警報装置についておさらいしない?」

バナラ「えーと…さつきも言った通り<危害を与えたら発動する>のでしたよね<

?」

蒲生「アラームがく6秒>鳴った後に…6発だったような気がします」

黒木「く一番近い生体反応>…を追うんだったわよね？」

一ノ瀬「生体反応を追うと言うことは…アレで心臓をやられた>のですわね！」

梅田「いや、決めつけていいのー？」

【コトダマ：死体の状況】

「それは違うぞ！」

「…一ノ瀬さん、警報装置は心臓は狙っていないよ。」

イヴァンくんの死体には頭部や胴体に傷がなかったんだ。代わりに、手足に6発銃創があった。

絹川くんが検死してくれたんだ」

「き、絹川様が？」

「うん。イヴァンくんの死体は…骨は折れていなかったし、銃創以外の傷もなかったよ」  
「随分と高性能な銃撃装置だったみたいだね。腕に2発撃ち込んだのは攻撃を封じるためだろうし、

足にも銃撃したのは逃げられなくするため…なのかな」

藍葉さんが考察する。

「洋館の2階が仮に黒幕のアジトだとすれば、侵入者を生け捕りするために生かしてお

くためだろうね」

そんなこと考えたくもなかったが…こういう推測も一応は必要だろう。

「…なんて残酷な黒幕なのかしらね。その後老朽化したバスルームにでも閉じ込めるつもりだったのかしら」

また別のデスゲームに巻き込むつもりなんだろうか。

「つてことは、いっちゃんの死因は出血死つてことになるね」

少年の声が裁判場に響く。発言の主は…檀くんだった。

「…何を言っているの？檀くん」

「電子生徒手帳を見なよ。死因は書かれてないだろ？心臓破裂はもちろん、毒殺とも書かれてない。」

手足に6発も食らって動けなくなったら普通は血を流しながら死を待ただけだろ」

犯人の凶器は警報装置だとすれば…

【選択：イヴァンを誘導した】

「…もしかして、自分を庇うようにイヴァンくんを誘導したんじゃないのか？」

「恐らくそうだろうね。6秒もあれば廊下の隅まで移動して誘導するようにしただろうし。」

「いっちゃんは他人を盾にするような人間じゃない」



「確かに、脱出について考えてくれたし、SOS信号も作ってくれたしね……」

……彼は、全員が生き残る方法を模索してくれた。でも、事件に使われたのは警報装置だけじゃないはずだ……

だとすれば、あの証拠品は何のためにあるんだ……？



【ノンストップ議論（警報装置以外の凶器について）】

鈴原「あのさ、凶器は警報装置以外にもあるんじゃないかな？」

檀「ん？死因も書かれていないのに？」

絹川「今は鈴原さんの話を聞いてみようよ。きっとわかることがあるはずだよ」

雨崎「＜救急箱＞でガツとやったとか？」

灰寺「僕が暖炉で見つけた＜針＞じゃないよね……」

未隅「＜応接室に飾られていた銃＞で撃ったんだ！間違いない！」

藍葉「応接室のことはよくわからないけど……飾られている銃に弾は入ってないと思う……」

【コトダマ：藍葉の科学捜査Ⅰ】

「灰寺くんに賛成だ！」

「暖炉の中に放り込まれていた針……アレが凶器の1つであることは、藍葉さんが証明し

てくれた筈だよ」

「確かに…ルミノール反応は起きたけど…」

「あ、あのさ。ルミノール反応って何なんだよ？」二階堂さんが尋ねると…カラフラが口を開いた。

「うーん…ルミノール反応ってのは、簡単にいえばルミノールってのに過酸化水素水つてのを加えてーの、

血痕に振り掛けーの…で起きる反応なのだ。よく刑事ドラマとかで使われている奴なのだ。

一瞬だけ暗いところで反応するーの」

「あのさ、オマエは校長より下の理事長なんだよ？…つていうか古いネタ使うなよ！

宴会で一昔前のネタ使う課長かよ！」

「うぐう…」

モノクマがそう言うとかラフラは2枚の葉で口を塞いでしまった。

この2匹？の関係はどういうものなんだ…？

「さて、くだらない漫才はいい加減にやめて…あの針が何だったのか…わかる人はいるかしらっ？」

「…あのさ、あんたならわかるだろ？ツバ吉」

檀くんがわたしに解答を投げてきた。まだ、わたしを疑っているのだろうか？

もしかして、針に付着していたアレの正体って…

【選択：プラスチック】

「…プラスチック、だつたりしないよね？」

「プラスチックを溶かしたの!? 溶かしたら有毒ガスが発生して、大気汚染が起こって、環境保護団体も怒って…!」

「いや、そこまで怖がる必要はないと思うよ？」

紅葉さんが、藍葉さんをなだめている…。

「犯人はライターを使って火を起こして、証拠品を燃やすために応接室の暖炉に針とプラスチックを投げたんだ」

「証拠を隠すために燃やしたのはわかったけど、一体、何のために使ったのかな？」絹川くんが思考する。

…針とプラスチック…何かが出てきそうだ。

もしかして、あの針の正体は…

【閃きアナグラム：ちゆうしやき】

「…溶けた注射器なんじゃないかな」

「注射器!? まさかイヴァン殿は…毒殺だったのですか!？」

バニラさんは驚いているようだ。

「まだわからないけど…注射器は救急箱から持ち出されたものじゃないかな。それを示す証拠は…」

【コトダマ選択：救急箱の剥がされたシール】

「救急箱の蓋の裏にはシールが貼ってあったんだけど、なぜか剥がされた跡があったんだ。」

「え？なんで剥がしたんだろ？」

わたしは、雨崎さんに対して答える。

「あのシールは…救急箱の備品リストだったんだよ」

「そういえば救急箱の中の注射器は2本だったよね。2本は流石に歯切れが悪い数だとと思うんだ。」

「だったら注射器は…最初は3本あったと考えるのがいいよね？」

「確かにそうでしょうね。備品リストは暖炉で燃やせばいいことですし。私的意見ですが、もっとあったほうがいいとは思いますが…」

絹川くんの考察に、いつもの笑顔で蒲生くんが返す。

「わたしの考えだと、犯人は恐らく洋館にあった毒か何かを使って…」

「おもてなしが必要ですね！」

◆  
…え？一ノ瀬さん？何でこんな時に反論なんか？

「その容疑者から外れるために適当なことを抜かす雌豚！あなたが一番よく知っているでしょう？」

「し、知ってるって…何を？」

「注射器の中に入れた薬品に決まっていますわ！洋館の中に本当にあつたのかしら？」

一ノ瀬さんの反論…彼女を説得しないと、どうやら疑われてしまうみたいだ…！

【反論ショーダウン（注射器と共に使われた薬品について）】

「あの洋館に入らなかつた私が言う事ではないでしょうけど…殺人に使われそうな薬品があつたのかしら？」

もし洋館の外に毒を取りに行ったのなら、イヴァン様はその間に出血死してしまいますわ！

それなら暖炉の中の注射器は説明がつかなくなるでしょう？」

【発展！】

「注射器が犯行に使われたのは、藍葉さんの調査でわかつた筈だよ！」

「洋館の中では流石にく毒を作れなかつた？ですわよね？」

電子生徒手帳にもく毒殺とは書いていなかつたですし。

あと、く水回りの洗剤も使われていない。みたいでしょ？

注射器を使って毒殺したと言うあなたの推理は完全に的外れですわ！」

【コトダマ：消えたゴミ】

「その言葉……ぶった斬る！」

これで、一ノ瀬さんは説得できるはず……！

「いいや、毒は作れた筈だよ。応接室にあつたあるものを使えばね」

「は？まさか洗剤と洗剤を混ぜて毒を作ったとか言うわけじゃないでしょうね？なら藍葉が犯人になりますわよ！」

「大天使の藍葉殿が犯人なわけじゃないでしょう？犯人は毒を作る『超高校級の錬金術師』だったのですか!？」

なら人体錬成でイヴァン殿を生き返らせるべきなのです……！

一ノ瀬さんとバニラさんのツツコミをよそに、わたしは話を続ける。

「吸い殻入れのゴミだよ。あの中に入っていたものは……」

【選択：タバコの中身】

「タバコの中身だったんだ」

「タバコなんか？もしかしてイヴァン兄ちゃんは高校生じゃないとか？」

「ランきゅん、いっちゃんはちゃんとした高校生だけど？」

「ほら、花火大会の時に黒木さんが披露したタバコ花火のドッキリ、あつたよね？」

タバコの本来の中身、有害物質の入ったゴミは…多目的ホールの吸い殻入れに入れられたんだよ。

タバコの葉には有害物質のニコチンが入っているって言うだろ？それを注射したんだよ」

「…お待ちなさい」

蒲生くんが口を開く。

「…どうやって毒を作ったのでしょうか？タバコの葉をイヴァン殿の体内に入れた訳ではなさそうですし。」

タバコを水に浸せば有害な毒になる事は知っていますか…

そのための水は、どこから調達したのか。鈴原嬢はお分かりですか？」

…毒を作るための水。それはあそこにあつた筈だ…！

◆  
【ノンストップ議論（毒を作る用の水の調達方法）】

藍葉「そういえば、洋館のバスルームとかの水回りは全然使われていなかったね…」

黒木「＜洋館の外から調達した＞訳でもなさそうね」

二階堂「きつとくイヴァンの血を水代わりに使った＞んだ！」

雨崎 「＜多目的ホール＞には何もなかったよね？」

未隅 「口の中にタバコの葉を入れた…とかじゃないな」

湖林 「ここで明らかになる新事実じゃと？救急箱の＜包帯で絞め殺した＞…訳でもなさそうじゃ」

灰寺 「＜ライターのおイル＞やないか？」

蒲生 「それなら火をつけて燃やした方が効率的かと」

【コトダマ：救急箱】

「雨崎さんに賛成だ！」

「あたしの意見がどうかしたの？」

「多目的ホールの救急箱、その中に水はあった筈だよ」

救急箱の中にあつた、ニコチン毒を作るもの…

【スポットセレクト：精製水】

「精製水だよ！」

「え？聖水!?藍葉殿n」

「いや、そうじゃなくて。コンタクトレンズの洗浄に使う奴だよ」

「はい！精製水というのは様々な手段で濃度を上げた比較的純粋な水なのです。科学実験の溶媒に使用されますね。」



女性の間ではアロマスプレーを作る用途でも使われているようです」  
モノクマがまた蘊蓄を言っている。

「つまり、精製水を使って毒を作り、イヴァン殿に注射した。それが殺害方法になるのでしようね」

「でも、何故それを行う必要があったのかしら？ 出血死を待つだけなら、放置しても構わなかったでしょうに」

「犯人は…：自分が確実に殺したってことにしたかったんじゃないの？」

「檀？ まだイライラしてるなー？」

「…仕方ないよ。イヴァンさんと檀くん、いつも一緒に仲良かったし…：」

「あの警報装置が黒幕が用意したものだとして、警報装置に撃たれて出血死…：つてなつたら事故死扱いになるだろうし、いっちゃんを殺したのは黒幕になっちゃうよね。」

犯人はそう考えて、わざわざ毒でいっちゃんを殺すような真似をしたんだよね？」

檀くんは、弔うように言った。

「…でも、これだけじゃクロはわからないわよね？」

「…黒木さん？」

「タバコの葉を多目的ホールに捨てたのは私、なのはみんな分かっているでしょう？」

でも、タバコの葉を利用したのは誰か分かっているいでしょ？

アリバイの証拠も、少ししか集まらなかったし。

ね、一ノ瀬さん？」



「…は？私は…殿方様と違って何もしていませんのですよ？私がどうかしましたの？」  
何もしていない自覚はあるんだね。

でも、黒木さんが一ノ瀬さんを名指しした理由って、まさか…？

あの証拠品が関係しているのか？

【コトダマ選択：一ノ瀬の証言】

「一ノ瀬さんが証言したよね？赤いコートの女が、棒状のものを持って外を出歩いてい  
るって…」

「赤いコートの女といえば『学園の階段』シリーズの定番やな！僕は知ってるで！高校の  
図書館には置いてへんかったけど！

でも、それがどうしたんか？犯人は幽霊ってことなんか？」

「灰寺…犯人は幽霊でも悪魔でもなく、ここにいる人間なのよ。パニック映画の定番で  
しょ？一番怖いのは人間ってのは」

「つまり、犯人は鈴原…私の証言がここで生かされますのね！」

「…違う。わたしは…窓を開けてもあの夜、一步も部屋から出ていない」

「嘘のアリバイを言っても、私という証言者がいる以上無駄ですわ?」

「つてことは、犯人はツバ吉つてことなの? アツキー?」

「他人が証明するアリバイはその人自身の言うアリバイよりも信用できる…: こともあるしね」

わたしは、警報装置のこともタバコの中身の行方も知っている。

でも…: 嘘をついていない。わたしはイヴアンくんを殺していない。これは本当だ。

もし、このままわたしが犯人だと言われたら…: 犯人以外の全員が処刑されてしまう。

「待って。アリバイというのは、犯人を暴くのにそんなに必要な物なのかな?」

誰かの声でした。…: 絹川くんの声だった。

「ボク、思うんだ。他の人の視点だけじゃなくて、犯人の考えも重要だつて」

…: 犯人の考え。

普通なら誰かを殺さなきゃいけないとか、武器の調達のために何かをしなきゃいけないとか…: そう言うことじゃないかな。

もし赤いコートの女が犯人なら、何を考えただろうか。

どうして赤いコートを…:

赤い…コート…

…え？

赤い…といえは…？

これって…まさかね…

わたしは、あることを思い出し…

…ある仮説へとたどり着いた。



赤い証拠品と言えは…

【コトダマ選択：部屋のカーテン】

「…犯人は…部屋のカーテンを赤いコートがわりにしたんじゃないかな」

「…は？ そんなトンチキなトリック認めてもいいんか？ 千利休よろしく腹斬らりたいんか？」

「でも、男子部屋のカーテンの色は青だったよな？」

「そして女子の部屋のカーテンは赤い色だったから…犯人は女子に限定されるってことになるね」

「…女の子なら、背の高いイヴァンくんが重症を負っても、毒殺することは可能だよね」  
「女子が犯人？ 本当に…それだけの証拠で犯人と言えるのかな？」

「ねえ鈴原さん。犯人が変装したと言う可能性について…もうちょっと議論してみないかしら？」

黒木さんは、楽しそうに囁いている…。

【ノンストップ議論（犯人の変装について）】

黒木「鈴原さんの変装をしてカーテンを羽織れる人物…どんな人間なのかしらね？」

一ノ瀬「犯人は女」に決まっていますわ！」

蒲生「身長の問題」もありますしね」

バニラ「鈴原殿の身長は160cm。紅葉殿のような王子様系＜高身長女子は除外＞

されるのです!」

檀 「そう言えば…く髪の問題ももあるよね?」

絹川 「鈴原さんに近い髪の色の人、あまりいないからね…」

【コトダマ: ホテルのロツカー】

「その言葉…わたしが撃ち抜く!」

「檀くん、髪の問題はクリアできるよ。ホテルのロツカーにあつたあるものを使えばね…」

「私が調べたわ。ホテルのロツカーには箒にモップにちりとりがあつたわよね?」

「大切なのは、掃除道具の種類じゃない…色だよ」

「そう言えば、モップは明るい茶色…鈴原さんの髪の色に近いわね。棒状のものを持っていたと言う証言は、モップの柄を護身用に使っていたと言う事で話がつくしね」

「モップで変装!? そんなこと女にできる訳がありませんわ!」

「いや、コスプレイヤールとか女が圧倒的に多いじゃん?」

…それが…出来る人がいるんだ。

一ノ瀬さんが見間違えるほどの変装の達人…

あの夜、あることを語っていた…あの人ならできるかもしれない。



【人物指名：バナラ・キャンディ】

「あなたしかいないんだ…バナラさん！」

「…え？ええ？あ…アテクシが？」

青ざめたバナラさんの周りに、大量のハテナマークが見える。でも…わたしは知っている。

花火大会のとき、彼女が語っていたことを。

『アテクシはコスプレとお化粧の動画第二弾を作成してたのです！第一弾が50万PVを突破したので』

「確か、コスプレと化粧の動画が好評で、50万PVを達成したって聞いたよ。

バナラさんなら、カーテンをわたしのコートに、モップを髪に見立てて変装することもできるんじゃないかな」

「…そう言えば、バナラさんの才能は『超高校級のネットアイドル』だったわよね。メイクの人にしてもらう普通のアイドルならともかく、自分でやった化粧動画をアップしているネットアイドルなら変装もお手の物なんじゃないかしら？」

「そういえば。カラフラから洋館の警報装置について教えられ、凶器であるタバコの花

火を見た…彼女こそ、条件に当てはまりますね」

「少し無茶な推理かもしれないけれど…バナラさん、本当のところどうなんだ？」

「ぼ、ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ…」

その時。

バナラさんの青ざめた顔が、みるみる赤くなり…

「はあああああ!!? イキってんじやねえよ頭お花畑でお星様がよオ! アリバイもねーつつーのにどうしてこんな事言えんだよカス!」

目を見開き、思い切り机を叩くバナラさん。それはいつもの彼女とは思えないほどの変わり様だった。

「ぼ、バナラちゃん!? 大丈夫…だよね!」

「だいたい凶器がタバコっておかしいじやねえか! あの銃の可能性もあんじやねえかよ!」

「いや…それはさつき議論されたはずだ。あの6つの銃創以外に外傷は無かった。だからあの銃で脅すなんて事…」

「藍葉殿オ! あいつらアテクシを犯人扱いしてんだよオ! 確か近くに落ちてた拳銃イヴァンと別の奴だったよなア! 鈴原がイヴァンの持っていた銃で脅したとかそんなじやねえよなア!」



「いや…でも、あの銃は…」

敬語が崩れるほどの豹変…でも、藍葉さんは呼び捨てしないのか…。

と考えている暇はない。

「テメーこそ知ってんだろうがア！嘘なんか言わず行って見やがれゲロカス赤づくめエエエ!!」

彼女の主張は、真実の弾丸で撃たなければならない。

わたしたちの、希望のために…。

「あの銃に触れたのはイヴァンと鈴原だ！そうに決まってるウ!!!」



【コトダマ：檀の証言】

「これで、終わりだ！」

「ひぎぎやあああああああああつ！」

「あの銃は誰が触ったか…それを証明するのはわたしでも藍葉さんでもない。檀くんだけよ」

「は???檀なんか…証明できんのオ??」

「俺……か」

檀くんは続ける。

「俺はあの時ツバ吉に言ったよ。いっちゃんに9 m拳銃を渡したってね」

「つまり……あの拳銃は檀くんがイヴァンくんに渡したもので、イヴァンくんが元々持ってたものって事だね」

「ち、違う……ふざけるなア……アテクシをクロ扱いとか……アテクシのゴールドフィンガーでチビらされたいんかア!？」

バナラさんはわたしを指差し、大声を出す。

「鈴原さん、今からこの事件をまとめてみない? そうしたらバナラさんも納得するんじゃないかしら?」

黒木さんが楽しむ様に言う。なんだか怖いけれど……やるしかないんだ。

わたしたちが、生き残るためには……!

【クライマックス推理】

まず犯人はホテルのエントランスのロッカーの中の茶色いモップをウィッグ代わりに、自室の赤いカーテンをコート代わりにしてわたしに変装し……洋館へと向かった。

おそらく護身用のモップの柄も持ってね。

それを目撃したのは一ノ瀬さんだったけど、変装のせいで犯人ではなくわたしだと勘

違いしたんだ。

犯人はこの事件の被害者：イヴァンくんのいる洋館に入り、まず二階への扉に攻撃を加えたんだ。

そして警報装置が発動し：犯人はイヴァンくんが自分を庇うように誘導した。

こうして、警報装置から放たれた弾丸で、イヴァンくんは腕を4発、足を2発撃たれた。

イヴァンくんが動けなくなったのをいいことに、犯人は多目的ホールにあつた救急箱から精製水とプラスチックの注射器を取って：

吸い殻入れに入っていたタバコの葉と精製水で、毒を作ったんだ。

そしてその毒を注射器に入れて、イヴァンくんに注射して：殺害した。

自分が犯人になるために。

注射器と救急箱の蓋に貼られていたチエックリストは応接室の暖炉に捨てて、テーブルに置いていたライターで火をつけて燃やした。

しかし、注射器の針と溶けたプラスチックは残ってしまった：

犯人はホテルに戻り、ロッカーの中に組み立て直したモップを戻した。カーテンは部屋に再び取り付けてね。

「これが事件のすべてだと思う。『超高校級のネットアイドル』、バニラ・キャンディさん

…！」

「どうかな？間違っているところがあつたら、何でも言ってくれ」

「あ…あああああ…！アテクシは…うう…!!!」

大量の涙を流すバナラさんの顔はどこまでも白く。その表情には、一寸の希望も無かった。

「…カーテンを再び取り付けたとしても、取り付けが間違っていたりしたら間違いなく変装に使ったってことになるな。そこんところどうなんだよ？」

「モップに桃色の髪の毛が付着していたら、梅田くんかバナラさんのモノになるってことだけど、一ノ瀬さんの証言がある以上、女子のバナラさんであることは確定でしょうね」

檀くんと黒木さんは、バナラさんを見つめる。

バナラさんは、うつむいたままだ。

「もう…いいよお…そうだよ…。『私』が…殺したんだよお…」

バナラさんは、力のない声で言った。

「あー、そろそろ議論の結論が出たみたいなんで…カラフラァー？もう黙らなくていいよ。」

「はい。じゃあアナタラは液晶画面のクロだと思う人のボタンをタッチして投票するのだ!!」

あ、全員投票しなかったらなんちやらゲイトよろしく人生がここで終わっちゃうから気をつけてね!

では、アナタラお待ちかねの：投票タイム!グッドラックなのだ!」

陳述台の液晶画面に、16の顔と名前が表示される。当然、イヴァンくんの顔の部分は赤くなっている。

わたしは：無表情で、戸惑いながらバニラさんの顔のボタンを押した。

「投票の結果、クロとなるのは誰か?その答えは正解なのか不正解なのか!」

裁判場の天井から、巨大なスクリーンが降りてくる。

スクリーンには：得票数が映されていた。

『バニラ・キャンデイ 15票』

『全員正解』

スクリーンは、大型のルーレットを映し出した。

16の似顔絵が映されたルーレットは周り：白黒のツートンカラーのボールがバニラさんの顔の場所に落ちた。

そして、似つかわしくないほど愉快的ファンファーレが流れた。

「こんじゅらっちゅれーしょん！だいせーかーい！最初のコロシアイでイヴァンクンを殺したクロは…バニラ・キャンディさんでしたー！」

…わたしは、その場に立ち尽くすしかなかった。

【学級裁判・閉廷】

ダンガンロンパ　・　フラワーズ　第1章　非日常編―オ  
シオキ

「ううう…ひつく…うっ…」

バナラさんは、ひたすら泣いている。メイクは流れ出る涙で取れていて、ピンクの瞳からは光が失われている。

「なあ…本当にイヴァンを…バナラがやったのかよ…?」

「…もう…決まってるじゃん…私が…私が…うわあああああああつ…!」

その場に膝をつくバナラさん。そこにいたのは、いつものムードメーカーのような彼女ではなく、悲しみに暮れるただの少女だった。

「…バナラさん。わたしも、悪いんだよ」

「え？鈴原さんが悪いって…？」

「実はわたし…あの洋館の鉄の扉を、事件前に蹴ってしまつて…警報装置を発動させてしまつたんだ。」

わたしはすぐに逃げ出したから撃たれずに済んだけど…そこを通りかかったバナラさんたちが、カラフラの警報装置の扱い方を聞いてしまつて…」

「…それが…どうしたの…？」

「本当に、ごめん。あの時わたしが洋館に突入しなければ、こんなことにはならなかつたよね…」

わたしは、バナラさんに謝罪する。

「いや、違うよお…イヴァン殿を殺した…私が悪いんだよお…。イヴァン殿は…きつと私を…ゆ…許さないだろうね…みんな…ごめんなさい…！」

「謝罪合戦はどうでもいいけどさ、バナラさんがイヴァンクンをぶち殺した理由は一応あるでしょ？」

…モノクマは、お腹に手を当てて笑っている。

「では、早速バナラさんの動機について説明いたしましょう！こちらがバナラさんへのプレゼント…『おばあちゃんの映像のディスク』の映像になりまーす！」

スクリーンに、アナウンサーの女性からインタビューを受けるおばあさんの姿が映さ



れる。

◆ 『孫が小さかった頃、よくこの公園でアイスを食べピクニックごっこをしてたのよ。バナラ味が好物だね。』

キヤッチボールや、おままごともしたつけねえ。最近は会っていないけど、きつと元気にしていると思うわ』

おばあさんは、孫との思い出を話している。おそらくバナラさんの祖母なのだろう。

「私は…おばあちゃんと、お母さんと3人暮らしたんだ。でもお母さんは仕事で忙しくて…おばあちゃんが私の面倒を見てたんだよ。おばあちゃんが大好きで、塞翁ケ馬学園に入った後も毎日連絡取ろうと思ってたんだ…でも…あんなインタビューは知らない。」

それに…番組の放送日が入学より後だったんだよお…!」

スクリーン映像には、アナウンサーが日にちを読み上げているのが映っている。

これはわたしでもわかる。日にちが…わたしたちの入学よりだいぶ後だ。

「モノクマの言う『何年も経ってる』なんて信じてなかった!でも…こんなディスクを見せられたら疑わえなかった!」

…昨日の夜…たまたま外を見たら…拳銃に弾を込めてるイヴァン殿を見たんだよ。

まさか、人を殺そうとしてるんじゃないかと思って…

鈴原殿に変装するのは、カーテンを見たら思いついたんだ…。万が一のことを考えてね。モツプは二階堂殿が使ってるのを見てた。

変装して、イヴァン殿の後について行ったら…洋館にたどり着いたんだ。中に入ったら、ちようどイヴァン殿が多目的ホールから出てきて、それで…

「…警報装置を発動させたんだね…おばあちゃんに、会うために…」

紅葉さんは、無表情で言った。

「あのさ、バニー」冷たい声が裁判場に響く。檀くんだった。

「このディスクが捏造である可能性は考えなかったのかよ？家族に会うために、ツバ吉に変装していったちゃんを殺したのか？

「いっちゃんの命をあんな卑劣な手段で利用して、俺たちを殺して…それで良かったのかよ？」

「あ、あのさ檀くん…そんなに責めない方がいいんじゃない？」

「お前らも、バニーに殺されていたかもしれないの？」

「でも、ごめんって謝ってるじゃん…」



「ねえ、ちよつとわからないところがあるんだけど…」絹川くんが手を挙げた。

「で？何かバニーに質問でも？」

「どうして、イヴァンくんは洋館に行ったのか…みんなはわかるかな？」

「推測だけど、洋館の2階は黒幕のアジトとか…そう言うのじゃないかな。警報装置なんて物騒なもの、黒幕が付けたとしか思えないし…」

わたしは、推測を言う。でも、答えても遅いのだ。

イヴァンくんは死に、バニラさんは…罪を犯してしまったから。

「もう…いいのです。」バニラさんが、力無さげに言う。

「愚かなのはアテクシー人なのです。おばあちゃんの事だけじゃない。あめだま星のこととかフアンのこととか動画の配信予定とか、今でも頭の中に渦巻いているのです。」

動機は…『出たかった』と言う感情だけでいいのね！私はいつもそう！自分を着飾ることばかり！どうして！どうして！どうして！」

バニラさんは涙を零し、地面を必死に叩く。

「いやー、本当にそうだね！素直に出たいとかお金が欲しいとか衝動的な殺人でいいのに、家族の話？そんなのつまらないじゃん！

そろそろウジウジした茶番はやめてさ…早くオシオキの時間にしない？」

「それもそうなのだ。わーは見守ってるから、初オシオキをとつとと済ませてくるのだ」

「…え？」

オシオキって…まさか…処刑？

⑧学級裁判で正しいクロを指摘できた場合、殺人を犯したクロだけが処刑されます。

電子生徒手帳の校則を思い出す。まさか…バニラさんが？

「今回は、『超高校級のネットアイドル』であるバニラ・キャンディさんの為に、スペシャルなオシオキを用意しました！」

「しよ…処刑…？まさか…い…いやだ…死ぬのいやだ…ああああああつ！」

バニラさんは叫び、髪を振り乱しながら錯乱する。

「たすけてよ！誰かモノクマやつつけて！なんとかして！お願い！しんじやう！私…本当はこんなのいや！」

おばあちゃんにあいたいのに！まだやりたいこともあるのに！しにたくない！しにたくない！しにたくない！」

「では、張り切っていきましよう！オシオキタイム！」

モノクマの座る椅子の前に赤いスイッチが現れる。モノクマは、それをハンマーで押す。

『バニラさんがクロにきまりました。オシオキをかいしします。』

スクリーンには、モノクマに連れ去られるバナラさんのドットアニメが描かれている。

すると天井のいつの間にか開いていた穴から、首輪のついた鎖が飛んできて…バナラさんの首に付けられた。

「あいばさん…おばあちゃん…いやだ…！」

バナラさんに名前を呼ばれた藍葉さんは、何もできないまま立ちすくむばかりだ。

…そして、今回の犯人・バナラさんは。

「いやあああああああああつー！」

全ての希望を奪われ、漆黒と死の世界へと連れ去られていった…。



天井にはUFOが浮かんでいた。鎖はどうやらUFOから伸びていたようだ。

今回のクロ…バナラ・キャンデーを仕舞うと『連行中』のデジタル文字が書かれたUFOはどこかへと消えていく。

やがて…裁判場のスクリーンに、地球からUFOがワープで旅立ち、遠い宇宙へと旅立っていく映像が映される。

UFOはフィルムに包まれた飴玉のような星：『あめだま星』へとたどり着いた。

あめだま星の、お菓子でできたお城の前には、民衆が集まっている。

『人殺し』『犯罪者』『失望した』などのクツキーのプラカードを持った民衆。おそらくクーデターを起こしているのだろう。

バナラはそんな民衆の前で手を縛られ、仰向けでギロチン台に繋がれている。

『あめだま星クーデター勃発！叛虐のスカフィズム！』

超高校級のネットアイドル バナラ・キャンディ 処刑執行

あめだま星の兵士の姿のモノクマが蜂蜜の瓶をひっくり返し、バナラの全身にかける。

彼女の顔から、赤いメガネが落ちた。

蜂蜜が切れると：モノクマが隣の虫籠を開ける。虫籠の中には、ハチにクモ、ガにムカデなどの大量の虫たちが蠢いている。

尤も、あめだま星にいるようなカラフルな虫なのだが。

虫たちは：バナラの全身に群がる。彼女は足や頭、縛られた手を必死に動かし虫たちを払いのけようとする。

しかし虫たちは極上の餌に食らいつくように全身を覆っていく。バニラを覆う虫たちから血が吹き出ると、民衆の歓声上がる。

虫に覆われた彼女は蠢き、やがて動かなくなる。それでも…虫たちは餌を食らいつくす。

しばらくすると、虫たちは籠へと戻っていく。

ギロチン台には、大きなリボンを付けた白骨死体が乗っている。

民衆は、さつきよりも大きな歓声を上げる。

やがてギロチンの刃が落ち、白骨死体の頭蓋骨がどこかへと転がっていった…。



「ヒヤッホオオオオ！エクストリイイイイム！アドレナリンが染み渡るウウウウウ

！」

モノクマは、スクリーンの向こうの処刑を楽しむように笑っている。

そして、わたしたちは…

「あ…ああ…」

「な、な、な…何だよこれ…！バニラ姉ちゃんが…死んだ…！」

「なんて…むごいことをするんじゃない…」

それぞれの希望が失われていくのを感じながら、喚き叫んでいた…。

「アナタラもこの処刑がエグいって思うんだね。わーもそう思ってるのだ。でもこれは仕方ないことなのだ。」

だって…罪を犯したんだから。自分の罪は、自分で償う。それがこの世界のルールなのだ」

カラフラは、悟ったように喋る。

「ふざけるな…いくらルールだからって…！あんな残酷な殺し方はする必要はないじゃないか！」

わたしは、モノクマとカラフラへの怒りのあまり拳を握る。でも…怒りをぶつけることができなかった。

モノクマたちに怒りをぶつけてしまえば、わたしが警報装置をまた発動させたのと同じになってしまふから。

「そんなに殺されるのが嫌なら、ずっとここで共同生活を送るんだね。じゃ、バイナラ！ぶひゃひゃひゃひゃひゃ！」

「アナタラの希望がどうなるのか、楽しみにしてるのだ。グッドラックなのだ！」

モノクマはカラフラを連れ、どこかへと去っていく。

残されたわたしたちは…どうしていいのかわからなかった。

「…バニラさん…」 藍葉さんが呟く。



「私が…事件が起こる前に彼女に付き合っていたら…彼女に投票しなければ…死ぬ前の彼女に何か声をかけてあげれば…あんな悲しい終わり方はしなかったのかな…?」

藍葉さんは、床を見下ろしている。彼女はきつと自責しているのだ。バニラさんを救えなかったから…。

「イヴアンくんだったて、彼一人に任せつきりにしないで。一緒にいてあげればよかったかな…」

だが、どうしようもないのだ。2人は死んでしまった。それが、現実なのだ。

「今は泣いたっていいわよ。どうせいつかはみんな死んでしまうんだし」

黒木さんは藍葉さんに近寄り、笑顔で語りかける。

…どうして笑顔なんだ?この状況なのに…飄々としていられるんだ?



「前置きをしておく…イヴアンやバニラさんの死は、本当に悲しいわ。リーダー的存在とムードメーカーの少女が死んでしまったんだもの。」

でも、さっきのオシオキを見て一っだけわかったわ。二人の死は無駄ではなかったの。」

「…無駄じゃない?」藍葉さんは顔を上げる。

「そう…歪んだ娯楽性に溢れた、とても素晴らしいものだったわ」

黒木さんは、手を広げて言った。

「何言ってるのか貴様！オレらやイヴァン、バニラの命を弄ぶのを娯楽扱いじゃと!」  
怒る湖林くんを横目に黒木さんは続ける。

「何を言っているの?このコロシアイは、ただのエンターテイメントでしかないわ。なら、盛り上げればいいじゃない!私たちがこれを楽しめればいいじゃない!

人生なんて所詮死ぬまでの暇つぶし。静かに一人で死ぬよりも、視聴者の糧になって華やかに死ねればいいじゃないの。

それにもし盛り上げられたら、視聴者様のご機嫌も取れて生存者は見事脱出成功…つてなるかもねえ?」

∴黒木さんは、不敵に笑う。

なんで。どうして。人が死ぬ様を笑いながら見られるのか。

恐怖は、感じていないのか。それとも、狂ってしまったのか…?

「わ、私たちが死んでいく様を∴盛りあげろって∴!」 藍葉さんは怯え。

「何じゃ貴様!死を娯楽として楽しむ連中に媚びろってか!」 湖林くんは叫び。

「あんた大丈夫?バニラみたいに無様に殺されるのがいいってこと?」 紅葉さんは静かな憤りを見せた。

「どうせ私たちの悲劇も喜劇も笑劇も惨劇も何もかもが消費されるもの。

なら、視聴者のお望み通りに生きればいいじゃない。ロシアイという地獄を視聴者の天国に変えるの。

ユーザーの見たいいものを見せるのはエンタメの基本なのよ?」

「ふざけんなよ…あんた、タバコの件何も反省してねえつてことか!」

「君は積極的で勇敢な子だと思っていたが…愚かな人間だったようだね」

「狂ってますわ。人間の死が趣味だなんて…これだから女は嫌なのですわ!」

二階堂さんも、未隅さんも、一ノ瀬さんも怒りと恐怖を見せている。

「私のことはいつでも殺していいわ。ただし、つまらない殺し方はやめて、エンタメ性に溢れたものにしてね?」

黒木さんは、裁判場の外へと去っていった。

裁判を助けてくれた彼女は、どうしてロシアイを楽しめるんだろう。

「…ふざけるなよ…いっちゃんは…もう戻らないのに…バニーだつて…」

檀くんは、青ざめた声で悲痛な声を上げる。

「アタシたちは、どうすりゃいいんだ…助けだつて来ないのに…」

「下手したら殺されるかもしれないんだよ、モノクマや、カラフラのせいで…」

「皆さんは、何を信じればいいのかわからない状況でしょうね」

わたしだつてそうだ。迷っているし、悩んでいる。そして、疑っている。

どの道を行けばいいのかわからない状況だ。

「今は、疑うよりも…」

刹那。絹川くんの、優しい声が響いた。

「…2人の分まで『生きよう』と考えればいいんじゃないかな？生きていれば、なんでも考えられるよ。」

今日のご飯とか、自然が綺麗だとか、音楽を聴くと楽しいとか。」

「レンきゅん、随分とベタな綺麗事を言えるんだな…」

確かに綺麗事かもしれないけど…それが大切になる時もあるかもしれない。少なくとも、罵りよりはマシだ。

死んでしまえば、考えることすらできないんだ。

「…そうだね。じゃあさ…昼ご飯、何にするか考える？」 雨崎さんが提案する。

「食べるって、何をだよ」

「それを考えればいいんじゃないかな？例えば、うどんとかどうかな」

「私は、甘くないものがないな。さっきの処刑を思い出して吐いたらみんなに心配されちゃうし…」

「じゃあ、うどんが決まりだね」

他愛もない会話。でも、これも生きるための会話かもしれない。モノクマとカラフラ

に負けないための…。

わたしたちはエレベーターで地上に降り、時計塔の外に出た。

今は昼頃。けれど空は皆の心を映すように曇り空だ。

わたしたちは脱出のプランとか、夕ご飯の話とか、見ているテレビの話とかをしながらそれぞれの行きたい場所へと向かった。

◆ こうして2人の仲間が非業な死を遂げた事件は、幕を下ろした。

わたしはレストランで少しだけうどんを食べた後、部屋に戻った。わたしは、何もするともなく椅子の上に座っている。

「今は『生きよう』と考える、か…」

いつも付けているオルゴールペンダントのロケットを開ける。

モーツアルトの『きらきら星』の優しい音色が流れる。これを聴くと、とても落ち着く。

モノクマが用意したものかもしれないのに、どうしてなのだろうか。

時々思い出す、謎の記憶との関係は何なのだろうか。

わたしたちは、ここから出ることができるのだろうか。

それは、生きてみなきや、何もわからない。



ダンガンロンパ ・ フラワーズ Chapter 1

「廃空楼獄遊園ヒストリエ」

END

生き残りメンバー

残り14人

To be continued:

・「あめだまグラス」を入手しました。

1章が開幕した証。バニラ・キャンデーの遺品。

赤いフレームと厚いレンズが特徴的なメガネ。

本人曰く飴の素材でできているらしいが、実際は誕生日に祖母から貰ったとか。

# ダンガンロンパ ・ フラワーズ 第1章 特別編

【被害者 自由行動】

「モノクマと呼ばれる存在にはオーバーテクノロジーが使用されているのだろうか。N A S A か、それとも犯罪組織の陰謀か……」

独り言が多くても、表情があまり変わらないイヴァンくん。

そういえば、アウリンコ共和国の貴族の息子なんだっけ……

由緒正しき血筋だからこそ、冷静でいることを強いられてきたのかな……？

イヴァンくんと話すと、なんだか緊張するな。何を話せばいいんだろう？

「……アウリンコ共和国はオーロラで有名だよね」

「オーロラですか。私もよく母と観察しました。母は首都近くの山から見るオーロラが一番美しいと会話していたと記録しております」

「お母さんと仲いいんだね」

「母は政治家であり、故郷のホームレス達を救済していることでも知られています。アウリンコのことを思考する素晴らしき女性です」



「故郷といえは…アウリンコでは何かやっていたのか？」

「陸軍にて軍医として従軍しておりました。兵士たちの修復などが主な仕事でしたね」

…修復？普通は治療というけれど…

「ところでスズハラくん。貴女は…身体などの不具合はございますか？」

身体などの不具合？身体が悪い所って意味かな？

「特に無いよ。ここに閉じ込められて怖い時もあるけど」

「では、精神機能の安定のために深呼吸をしましょう。それでも安定しないのなら…精神安定剤があります。それを摂取しましょう」

「い、いや…深呼吸だけで大丈夫だよ！少し不安っただけで…お薬は大丈夫だから！」

「そうですか…副作用の軽い精神安定剤だったのですが…なら仕方ありません」

「でも、心配してくれてありがとう。優しいんだね」

「優しい…ですか。感謝の言葉だけでも、十分です。」

イヴァンくんは、とても紳士的だ。でも、自分だけでなく他人を人間と思っていないような気がする…。

過去に何かあつたんだろうか…？

イヴァンくんと別れ、部屋に戻ることにした。

『落ち着きのある、紳士的で穏やかなアウリンコ共和国陸軍軍医。しかし、同時に自分や

他人を人間扱いしていない言動が目立つ。』



「モノクマとカラフラからの食料の供給が途絶えれば、餓死の可能性もある。早く脱出手段を考えねば…」

相変わらず独り言が多い。何かわたしから話した方がいいかな…

「聞いていいかな？…アウリンコの観光名所とか、どんな所があるんだ？」

「それについて質問する理由は何でしょうか」

「いや、どんな国だろうなーって…単純な興味だよ。話題になった時によく名前を聞くけど、行ったことはないし…」

「では、発言しましょう。アウリンコ共和国は、ヴァイキングによって栄えた、太陽の美しい国と言われております。」

冬は雪の厳しい小国ですが、クリスマスにはヴァイキングの生首に似せた球を湖に蹴り飛ばし、どこまで遠くまで飛ばせたかを競う祭りが開催されます」

え？今生首って言った？それに似せた球を…蹴り飛ばす？

サッカーみたい…？

「アウリンコの初代国王を讃える儀式です。初代国王には中世で最強とされていたヴァイキングを制し、その首を湖に蹴り落とし神への捧げ物にしたという伝説が残っています」

それほどヴァイキングがひどいことをしたってことなんだろうけど…

「他にも、夏には観光客にサルミアッキを摂取させる祭りが開かれますね」

「えーっと、サルミアッキって…リコリスってハーブのお菓子だっけ？」

「その通りです。この国では馴染みのないお菓子ですが、アウリンコの子供達には親しまれています。

マユミくんはアンモニア臭のする、タイヤのゴムのような菓子と仰っていますが…私はよく摂取していますね」

檀くんにとっては苦手なお菓子みたいだな。でも、なんで夏に食べるんだろう？

「スープ皿に入ったサルミアッキを一番早く、全て摂取した観光客は、英雄として金一封が貰えるそうです。

スズハラくんもどうですか？マユミくんは、スプーン一杯分だけでリタイアしたのですが…」

「…わたしは、見ているだけでいいかな…」

…それからイヴァンくんは、お正月に藁で出来た馬に酒を飲ませるしきたりとか、

首都広場のヴァイキングの像目掛けてダーツして、目に当たったら旅行の時に危険な目に合わないおまじないの話をしてくれた。

案外、楽しく話していたような気がする…。

『アウリンコ共和国は小さな北歐の雪の国。鈴原の知らない奇妙なしきたりもあるらしい?』



「今日の朝食でも、檀くんと一緒にいたけどさ…いつ知り合っただんだ?」

「マユミくんですか? 彼は中学生時代からのペンフレンドですね。」

「中学生からなんだ。実際、ここに来るまで会ったこともあるの?」

「いいえ、対顔の経験はありません。しかし、この国の文化などを教示したりしてくれませぬ。」

例えば、海賊に出会った時の攻撃方法…」

「いや、攻撃よりも逃げの方がいいんじゃないのか?」

「攻撃は最大の防御、やられる前にやれ…というのが彼の持論だそうです」

ある意味すごく大胆な戦略だ…

「で、普段は一緒にどんなことして過ごしてるの?」

「主に…お土産屋にあつたゲームをしています」

ゲームって…ボードゲームとかかな?

「『蒼海皇帝』と呼ばれるゲームの最新作をプレイしております」

お土産、色々揃ってるんだな…。蒼海皇帝って、確か…

「海戦シミュレーションゲーム、だったよね?」

「その通りでございます。最新作『蒼海皇帝LegendX』はイメージス艦の操縦感のリアルさが売りと聞いておりますが、マユミくんによると子供のおもちゃのように現実からかけ離れているようです。」

近頃の『蒼海皇帝』はリアルさよりもグラフィックや演出を重視しすぎている、最高傑作はやはり初代だった…とも言われておりましたね。

それから、グラフィックにおいても前作『Legend』の方が遥かによかったとも…」

檀くん、そんなコアゲーマーみたいなことも言うんだ…

「しかし、マユミくんと実際に出会うまでは…わたしは私は他人とのゲームの経験はありませんでした。というよりも、国家の有料な部品となるための勉強に励む日々でした」

…そうか。

イヴァンくんにとっては、檀くんは多分初めての親しい友達なんだ。

ずっと勉強していたから、あんな風にゲームに誘ってくれるのも嬉しかったのかな…

「よろしければ、次回ご一緒されませんか？」

「ご一緒って、ゲームを？」

「その通りです。海戦ゲームのルールについて指南しましょう。私と共にプレイしていただく形となります」

「…ありがとう。軍艦についてはよくわからないけど…時間が空いた時に教えてくれたら嬉しいな」

最近のイヴァンくんは、とても楽しそうに話してくれてる…。

イヴァンくんと海戦ゲームの約束をして、解散した。

『ペンフレンドから実際に会う仲になった檀。国家の部品でしかない自分に親しく接してくれる彼を大切に思っているみたい？』



イヴァンくんと、海戦ゲームで遊んでいる途中。イヴァンくんがわたしに告げてき

た。

「スズハラくんに、兄であるセルゲイの事は伝えたでしょうか？」

「え？ 伝えてないけど……」

「そうですか。私の兄・セルゲイは家の跡継ぎであり、『車椅子の国会議員』と呼ばれる男です。体は弱くとも、頭脳は自分を上回る。時期首相とも言われるエリート。

無口であり滅多に笑顔の表情を見せない男。：私の目標でもあります」

「へえ……すごい人なんだね」

「かつては仲の良い兄弟でしたが……昔起こったある事故により、二人の関係には亀裂が入ったのです」

「……どんなことが、あつたんだ？」

「では、発言しましょう。私の幼少期の記録です。

幼少期から、兄は身体が弱いこと以外は何もかもが私より優秀な人間でした。

ある日のこと。私と兄は家の近くの凍った池で遊戯していました。

滑ったり、雪玉をぶつけあつたりしましたね……私はふと、兄を驚かせようと太い木の棒で凍った水面を叩きました。

兄には危ないと言われたのですが、何度も叩きました。そうすると、氷が割れてしま……私は池の中へと落ちてしまったのです。」

「あ、危ないじゃないか…」

「私は死を覚悟しましたが…兄が水の中へと入り、救出してくれたのです。しかし、そのせいでただでさえ弱かった身体が弱くなり、車椅子での生活を強いられることになったのです」

イヴァンくん、すごく後悔しているだろうな…

「私は後悔の感情を抑えきれなかったのか、兄含めた家族に何度も謝罪しました。僕が悪かった、だから許してほしいと。」

しかし父は『お前の余計な感情のせいで長男が死にかけた、今後一切感情を出すな』と告げ、ハイスクールに上がった頃には勸当されていたのです」

…ひどい父親だ、あれほど謝罪したのに…

いつも兄のことを考えていても、イヴァンくんには頭が回らなかったのかな…

「…それでも兄は、国会議員となるために努力しました。そして、選挙にて見事当選を勝ち取ったのです。」

兄は体は弱くとも精神は非常に強い人。しかし、そんな彼のことを考えると…脈拍が高くなるような感じがするのです」

そうか…イヴァンくんは…お兄さんにコンプレックスを抱えているのかな？

彼の悲しい一面が見られたようだ…



それからは海戦ゲームの続きをしていたが、残念ながら勝つことができなかった。彼より優れた兄は、本当にどんな人間なんだろう…？

『兄は家の跡継ぎであり、イヴァンにとって目標でもある。しかし、そんな兄とは悲しい因縁があるようだ。』



私は今、イヴァンさんとホットトサンドを食べている。イヴァンくんは手でホットサンドを食べる時も上品だ。さすが貴族の生まれ。

「スズハラくん。3つくらい発言したいことがあります」

「えーと…どんなことなんだ？」

「一つは…感謝の感情を伝えたいということです」

感謝って…わたし、話を聞く以外に何かしたっけ…？

「最近になって『自分は人間だ』と思えるようになったのです。これも、自尊心の向上と  
いうのでしょうか？」

おそらくここにいる生徒の皆さんの行動のお陰でしょうか。まずはスズハラくんに  
感謝を伝えたい。ありがとう」

「うん。どういたしまして」

「二つ目はいつか軍医の経験を生かし、アウリンコに総合病院を建てたいということですよ」

「…病院？どうして？」

「人は人によつて変えられる…ということに気づいたのです。私も同じ。

軍医として国を守るのもいいが、人々を癒し、変えるための病院を持ちたいと思考したのです」

イヴァンくん、目標ができたんだ。

それに、自分を大切にできるようになったんだ…！

「…今度、マユミさんと一緒にアウリンコに來訪しませんか？アウリンコはこの前も言った通りの素敵な国です。どうぞ來訪されてください」

「サルミアツキの撮取だけは勘弁してほしいけど、楽しみだな」

「なら仕方ありませんね。私を人間にしてくれる貴女との絆を、大切にしたいと思ってます」

話していると、すごく楽しい。これが、友達つてのなんだろうか。

『自分のことを部品ではなく人間だと思ってくれた鈴原に感謝の感情を伝えたイヴァ

ン。いつか自分の病院を持ちたいという夢ができたようだ。』

・「イヴァンのパンツ」を入手しました。

イヴァン愛用のパンツ。高級素材で作られている。アウリンコ共和国は布の名産地でもあるようだ。



【犯人 自由行動】

「あのさ、バナラさんが生まれたあめだま星って…どんな星なんだ？」

わたしがバナラさんに聞いたのは、2人でレストランの食事を食べている時だった。

バナラさんは、自慢げな顔で話す。

「あめだま星が気になるのですか？流石は『超高校級の天文学者』！では、お話ししましょう！

あめだま星は…この前も言った通り、ソンプレロ銀河の隣にある不思議天然平和な惑星なのです！

建物すべてが飴でできていて、生まれてくるあめだま星人は全て可愛い女の子ですが……クッキーマンのような風貌の女性もいます。

嬉しいことに、あめだま星のお菓子を食べても全く太らないどころか健康になっていくのです！

毎日が日曜日で働かなくてOK、学校の中に遊園地もあつて遊び放題。まあそんな国ですね」

どこかで聞いたことがある話だ……けど、夢のような国だな。

「ちなみに赤ちゃん……お母さんの口からチョコエッグが出てきて、その中から出てくるので繁殖も問題ないのです」

やっぱり聞いたことがある話だし、お母さんの口が甘くなったりしないのかな……

「ちなみにあめだま星人は体はマシユマロでできていて血潮はイチゴソース、心はゼリーで出来ている……」

とこののを唱えると固有結界を出せるらしいです。アテクシは試したことがありますせんが……」

……これも聞いたことがある話じゃないか！

「ちなみにアテクシが地球の学校に通うときは……ワープ能力を使うのです」

「……ワープ能力であめだま星に帰ればいいんじゃないか？」

「うーん、それが10kmぐらいしかワープできないのです。ロケットを修理するためのパワーと部品があればいいのですが」

「そんなに困ってるんだつたら…手伝おうか?」

「それでいいですか?じゃあ…今度動画配信のネタ集めを手伝って欲しいのです」

手伝うって…どんなことだろうな?動画のネタとロケットの修理、どんな関係があるんだろう?」

バナラさんの手伝いの約束をして部屋に戻った…。

『自称・ソンプレロ銀河の隣のあめだま星のプリンセス。あめだま星には女性しか住んでいないらしい。』



「そういえばロケット修理のためのパワーや部品を集めるためには、どうしたらいいんだ?」

「部品は地球にある材料で足りるのですが…問題は『あめだまパワー』なのです」

「…『あめだまパワー』?」

「あめだま星のロケットは『あめだまパワー』と呼ばれる宇宙の真理の力で動きます。」

そのためには…動画の閲覧数を上げる必要があるのです」

「『あめだまパワー』と動画の閲覧数…どういう関係なんだ?」

「『あめだまパワー』…それは感情を持った生き物のある力と同等のものなのです!」

もしかして、『あめだまパワー』って…

「…感情のことだよね?」

「その通りなのです!面白い動画を作ることと産み出される『すごい』『楽しい』というプラスの感情こそが…あめだま星のエネルギーの源、『あめだまパワー』なのです。

だからこそ、みんなが楽しめる動画を作る必要があるのです。

アテクシ、地球の文化のことを一生懸命勉強して…アテクシのテーマソングの作曲から歌唱までやったのですよ!」

作曲か…。やったことはないけど、難しそうなイメージがある。

それをこなすのは、よほどの努力家じゃないとできないことなんだろうな…

「まあ『あめだまパワー』や部品の他にも、家け…ロケット修理のための資金集めもやらねばならないのです」

今、家計って言った…? バニラさん、家が貧しいとかじゃないよね?

「他にもスポンサーとの面談とか、取材への対処とか…まあ、いろいろ大変なのですよ

…話が脱線してしまっただのです。改めて鈴原殿には…動画のネタの題材を一緒に探

して欲しいのです。

「ロシアイをネタにすればいいんじゃないかと言われそうですが、不謹慎だと炎上しそうですし…」

「確かにね。一緒に探そう…まず、ウォータースライダーにでも行く?」

それからわたしたちは、2人で動画のネタを探した…。

『ロケットを修理するためのあめだまパワー集め…ではなく、家計を助けるためにネットアイドルとしての活動を始めたらしい。』



動画のネタを探しに、購買部を物色している途中だった。

わたしたちはレトロなコンピュータゲームのカセットと本体を見つけた。

「こ…これは! 『マルコファイターズ』! アテクシがこの前実況したゲームの初代じゃないですか!」

「ゲーム実況か…どんなゲームの動画を配信してるの?」

「ゲームは家にあつたものをやスポンサーから頼まれたゲームを実況したり、スマートフォンでの対戦ゲームを配信しているのです。」

昔のゲームはかなり難しいですが…プレイ動画がきっかけでそのゲームを知り、買ってもらえるとすごく嬉しいのです

まあ炎上もあるのですが…」

動画でも百合キャラで売ってるんだな…そういや、百合営業つてのは…

「ファンのために自分は女の子が好きですってアピールすることだろ？」

「その通りなのです！ スポンサーの男の人に都会のカレーショップについて教えてもらったので許可をもらい配信した、

それなのに『バニラたんが辛いカレーを食べるわけがない』って考察班が現れ…お店にも大きな迷惑を掛けてしまったのです！」

「ネットアイドル、大変なんだな…」

バニラさんも、苦労を重ねてきた顔をしている…。

ちよつと会話をしていくうちに、70年代のアイドルの着せ替え人形を見つけた。

「これはこれは…おばあちゃんが好きそうなお人形なのです！ 持って帰っても怒られないですよね？」

…おばあちゃん？ 一体誰なんだろう？

「よし、今度の配信はレトロなおもちゃについて語るのです！」

「それも、いいかもしれないね」



バナラさんと一緒に動画のネタを探した…。

『慣れないゲーム配信を行ったり、彼氏疑惑で炎上したり、ネットアイドルの仕事はとても大変。』



「あのさ…あめだま星の人々とは通信とかやってるの?」

「毎日通信しているのです。そりやあいつも天然平和な会話をしているのです」

「ところで、どうして地球に来ようと思ったの?」

「まあ色々ありますですね…あめだま星の王家の血を引く者は修行のために宇宙を旅しなければならぬのです。」

その旅の途中で…富士山に不時着してしまったのです」

富士山…青木ヶ原樹海、じゃないよな…

「そこにいた心優しい老女に拾われ、彼女と…お母さんと暮らすことになったのです」

「お母さん? お父さんは…?」

「お父さんは、幼い頃にし…いや、何でもないのです。」

なんだか悪いことを言った気分だ…

バナラさんは、目を伏せながら口を開いた。

「…おばあちゃんには、あの人のおじいちゃんが残した大量の借金があるのです。

それを返せないかと趣味だったダンスの動画を投稿した所、今のスポンサーにスカウトされて、ネットアイドルとしてデビューすることになったのです。それが…アテクシのアイドル人生の始まりなのです」

そうか。バナラさんはおばあちゃんの借金を返すために、活動をしているのか…。

「最近稼ぐための条件が非常に厳しくて…まあ、100万PVくらいだとお金になるんですけどね。

スポンサーとの打ち合わせや取材で忙しいし、毎日バス通勤で交通費がかさむのです」

バス？この前言っていたワープを使えばいいんじゃないか…？

まあ、突っ込んでも野暮だからやめておこう。

「でも、おばあちゃんとの生活があれば毎日が楽しいのです。ゴールデンウィークは茶摘みの季節なのでおばあちゃんの手伝いをするのですよ」

「もしかして、バナラさんのおばあちゃんが住んでる所って静岡だったりする？」

「ビンゴ！ そうなのです！ アテクシは生まれも育ちも静岡…じゃなかった！ さっきのことは聞かなかったことにするのですー！」

顔を抑えながら、バナラさんはどこかへと去っていった…。

『実は静岡に住んでいるらしく、祖母と母親と3人暮らし。茶摘みの季節になるとおばあちゃんの手伝いをするんだとか。』



「動画の編集ができないのは残念なのですが、ネタについてはだいたいまとまってきたので。

とりあえず新作動画はレトロなおもちゃについての話をしたいのです！スポンサーも喜んでくれそうだし！」

レストランのテーブルの上には、おもちゃの絵とその説明と動画の構成について書かれたメモ帳が広げられている。

超合金のパチモンロボット、救急箱のままごとセット、初代リサちゃん人形…アニメのメンコ、塗り絵、ボクシングするサル…

これだけあれば長い動画にはなりそうだけど…

「その動画、長すぎて見てもらえない…つてことにならない？」

「いいや、面白ければ長い動画でも見てもらえるのです。じゃなかったら映画産業なん

てとつくの昔に寂れているのです

でも…レトロなおもちゃは電気を使わないシンプルな構造のものが多かったような気がするのです」

バナラさんは俯く。

「昔のおもちゃは素晴らしいんだねえ。私もゴテゴテしたケーキのようじゃなくて、こんな風にシンプルに生きれたら…」

口調がいつもと違う…もしかして、素が出たりしたのかな？

「…はっ！なんでもないのです！アテクシは…あめだま星のプリンセス！

美少女が大好き！象が踏んでも壊れないし、眼球だってアイスクリームののように冷たいのです！」

設定が増えるような…

「そうやって、設定を増やすのもいいけど、大切な人の前では素を出す…なんてのもいいんじゃない？」

「…え？」

「ほら、よくあるじゃん、正統派がギャップを出したら人気が出たとか…」

「でも、アテクシのキャラクターが崩れたら、去っていくファンのほうが多いような…？」

「それでもついていくファンを大切にすれば…もつと人気が出る。そんな感じもするんだ」

「えーと、素を出すつてことは…」

バナラさんは周りを確認し、わたしに耳打ちすると…

「アテクシの本名は…箱崎亜衣里（はこぎき あいり）という名前なのです」

…いきなり本名を出してきた!?

耳から口を離し、バナラさんは小声で言う。

「…さっき言ったことは、秘密にしてほしいのです。」

「うん。秘密にするよ」

「よし！EDMのCDのジャケットのようにゴテゴテしたレイアウトはやめて…シンプルな可愛さを追求するのです！

脱出したら、すぐ動画作成に取り掛かりたいのです！鈴原殿、協力感謝なのです！」

バナラさんは、笑顔で感謝の言葉を告げた。

友達と一緒に協力するつて、こういうことなんだろうね…！

「信じてるよお。この秘密、守ってくれるつて…」

『鈴原に教えた本名は箱崎亜衣里。アイスクリームのようにもつとシンプルに生きてみたいと考えるバニラであつた。』

・「バニラのパンツ」を入手しました。

バニラ愛用の縞パン。縞パンといつてもクリーム色。後ろには土星の絵が描かれてある。



【特殊イベント】

動機が発表された次の日のことだった。

レストランで昼食を食べていると、絹川くんに話しかけられた。

「あの…鈴原さん？」

「どうしたの？」

「…あんな動機見ちゃったけど、コロシアイを止める為には…みんなで仲良くしたほうがいいよね？」

その為に：広場で遊ぼうと思って、色んな人を誘っているんだけど：鈴原さんも来る？」

：そういうえば、購買部のモノモノマシーンで手に入れた『ドローン手作りセット』なるものがあつたな。

それをみんなで組み立てて遊ぼうかな：？

「いいよ、ちょうどいい遊び道具もあるし」

「いいんだねーじゃあご飯を食べ終わったら行こう！」

絹川さんの顔がばあつ、と明るくなる。こっちまで嬉しくなりそうだ。



噴水広場に絹川さんと向かう。

そこで待っていたのは：藍葉さん、イヴァンくん、檀くん、バナラさん、蒲生くんだった。

「さすがに遅いつての、レンキゅん。主催者が遅れてどうするんだよ」

檀くんが悪態をつく。わたしはとりあえず、『ドローン手作りセット』を取り出し、紙の箱を開けた。

箱の中身は、組み立てれば大きくなるであろうドローンの部品と取扱説明書が詰められている。

「うわあ…組み立てれば、すごく大きなドローンになるね!」

「…純国製の無人航空機。安全性は確かだが、組み立てが必須か…」

「えーと、これをみんなで組み立てれば多分すぐに飛ばせる…かなあ…?」

「ラジコン飛行機ですか。天に人類が作りしものを飛ばすとは…天に近づいたような感じですね」

「カメラ機能のないタイプのドローンなのですね!カメラさえあれば配信には使えそうですね…」

「バニー…なんでも動画の話に繋げるなよ…」

箱を覗く皆が、驚きの声を上げている。

「よし!藍葉殿と鈴原殿で青空の下裸の付き合いでみましょう!」

腕まくりをするバニラさんを無視して、蒲生くんが取扱説明書を取り出す。

「僕は機械には強くないので…指示を出す係をやらうと思えますがよろしいでしょうか?」

「いいよ。みんなは説明書を見てる暇はないと思うし…」

「ではアテクシは工具セットを持ってきたので…好きに使ってください!」



…という訳で、全員でドローンを組み立てることになった。



「ドローンとは無人機の全般を指す言葉。オスのミツバチという意味を持つ。」

3つ以上のローターを搭載した回転翼機はマルチコプターと呼ばれている…」

説明書を読み上げるような独り言をあげているのは、蒲生くん…ではなくイヴァンくんだ。

「…とここでこれ、ドローンじゃなくてマルチコプターだよな…？」無表情で、なぜか素早く組み立てる檀くん。

「そうだねえ…今組み立てているのはローターが4つあるクアッドコプター…つて言うんだ」解説する藍葉さん。

「なるほど。ドローンとマルチコプターは違うもの…自動で動く機体がドローンなのですね」勉強する蒲生くん。

「ドローンは自分で動けるんだ。放り投げるだけで飛ぶものもあるみたいだね」なぜか詳しい絹川くん。

「ローター…いや何でもないので」下ネタを呟くバナラさん。

そして、コントローラー部分を望遠鏡を手入れするように慎重に組み立てていくわたし。

こうして、20分ほどでドローン：いやマルチコプターは完成した。  
1mほどの大きさの赤と白の機体だ。



最初の操縦は、檀君がすることになった。

「さて、ちゃんと組み上がってれば空高く舞い上がるんだけどな」

檀くんがコントローラーを少し動かした瞬間：マルチコプターは舞い上がった。

ドローンは噴水近くをぐるぐると回っている。

「す、凄いね！ドローンも楽しそうだよ！」絹川くんは大はしやぎだ。

「これを空から見た人が何かに気づけばいいんだけどな…」

「遠くまで飛ばしていけば、誰かに気づいてもらえる…と思うんだけど」

「…いや、モノクマとカラフラにバレるんじゃないやねえの」

「それにしても、感無量と言ったところですね。人が天に近づくととは…」

「地球の科学力は世界一！なのですよ！」

ドローンは広場を滞空し、風を切りながら飛んでいる。

スマートフォンがないから空撮はできないのが残念だが、皆の記憶に残るのならきつと美しい思い出になるだろう。

いつかみんなで、あのドローンみたいに自由になれば…

ダンガンロンパ ・フラワーズ Chapter 2 「廻り  
空転スル黙禱ノ薔薇」

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter 2 「廻り空  
転スル黙禱ノ薔薇」 6日目 (探索編)

ダンガンロンパ ・フラワーズ Chapter 2

「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」

(非) 日常編

「椿。よく聞きなさい。ここにいられるのは……と……お父さんとお母さんのおかげなん  
だ。」

毎日真面目に勉強して、友達と仲良くして、大人になったらちゃんとして。そう  
やって生きているからこそ、お前の日常は守られているんだ」

お父さんから聞いた、昔話。

この世界の成り立ち。どうして平和な世界なのかの仕組み。

「そんな人間の居場所なんて、この世界のどこにもないんだ」

流石に心の中に留めておいたけど、納得いかなかった。

世界が平和なら、なぜ彼女はあんな危険に晒される必要があったのか。

「クラスメイトのあの子は、仕方なかったんだよ」

…仕方なかった？

なら…あんな仕打ちを許してもいいのかわたしは、怒ることもできない。

だつて、この世界は…

『退屈なほど平和な世界』だから…

◆

「ううっ…」

目を開けると、白い天井が映る。…どうやら、夢を見ていたようだ。

ヒストリエランド、いや、塞翁ケ馬学園に来る前の記憶の夢を見ていたようだ。

体を起こし、あたりを見回す。もう何日も泊まっているホテルの一室だった。

「昨日と、変わらないんだな」

起こってしまった殺人。皆を守るために行動して、無残にも散った導き人。学級裁判。それぞれが疑い合い、絶望の真実を追い求めた戦い。

処刑。大切な人に会うために人の命を奪って、黒幕に惨殺された悲しき少女。これらは全て、残酷な現実。二人の命が失われたという真実。

わたしたちは今、このヒストリエランドでコロシアイをさせられている。

「イヴァンくんも…パニラさんも、死んでしまった」

一瞬、目が虚ろになる。

身体が固まって、震えそうになった時…さっきの夢のことが頭に浮かび。

朝の放送が流れる。

「塞翁ケ馬学園遠足実行委員会がお知らせします。

オマエラ、おはようございます！今日も絶望ハイカラライフを楽しんで下さいね！」

「第一エリアのレストランでパンのバイキングを用意してあるのだ！」

パンはパンでもフライパンはないから安心してね！」

もう7時か。

お腹が空いてきた。色々考えるよりも、まずレストランへ向かうことにした。

外に出てみる。雲が太陽を覆い隠し、少し空気が湿っている…。

◆ フランスパン、食パン、クロワッサン、アンパン、クリームパン…

テーブルには様々なパンやドリンクが並んでいる。しかし、それを喜んで手に取ろうとするものはいない。皆は黙々と朝食を食べているようだ。

わたしは並べてあったトングとトレイ、コップを手に取ると、クロワッサン2つを掴み、コップに麦茶を注ぎ、皆の座っているテーブルへと向かう。

「檀くん、パンを何個か袋に入れてどこかへ行つたけど…何かやらかす気かしら」

狂気の豹変は何処へやら、黒木さんは平然とした態度でパンを口に運んでいる。

「蒸しパンか…ばーちゃんからは好き嫌いなく食べろつて言われてるけど、今は食う気になれねー…」

トングを持ちながら、バイキングを眺めている梅田くん。

無数の虫たちに喰い殺されるという、バナラさんの惨たらしい処刑を思い出す…。  
絹川くんと藍葉さんの座るテーブルの席に座る。

コーヒート共にかぼちやのパンを皿に置いたまま…うつむいている藍葉さん。

小さく千切られた食パンに、ナイフでバターを塗る絹川くん。

机の上には、鳥かごの中の人形…彼の動機のプレゼントであったものが置いてある。

「この前と違うのは、人形が服を着せられ、髪の毛の整った西洋人形になっていることだ。」

「絹川くん…それ、動機の人形を自分で修復したのか？」

「うん。材料集めは大変だったけど…揃えばなんとかなったよ。人形は綺麗にしなきゃね」

「みんなは…昨夜は眠れたのか？」

「ううん…全然眠れなかった。昨日のうどんも、食べられなかったし…」

藍葉さんはふるふると震えながら呟く。

2人の死を見た、しかもそのうち1人は自分にすぎり付きながら連行されていったのなら、弱ってしまうのも当然だ。

「やり方は簡単ですよ。1日に1回、この像を頭に乗せ、このカードを引くだけでいいのです。」

「悪いけどさ…像を乗せながらカードを引くって、普通に考えて難易度高くない…?」

わたしたち3人を横目に、セールの如く怪しい占いを困惑する雨崎さんに教えているのは…蒲生くんだ。

「アヒルの像では駄目でしょうか?では、このエメラルドの原石を転がして…」

「蒲生君! 梨々が困っているからやめた方がいいと思うぞ。梨々は普通のタロット占い



「以外は信じないからな！」

雨崎さんを庇うようにして未隅くんが告げる。強目だがまだ優しい口調だ。

「今はそのタロットカードも持ってないんだけどね……とりあえず、今は占いはいいかな」  
「そうですか。啓示を貴方たちにも経験して欲しかったのですが……いつか天の奇跡をご覧になれることを願っています」

引き下がった時も蒲生くんは笑顔だ。どうしたら彼みたいになっても笑えるようになるんだろう。

「雨崎、未隅。よく断った。蒲生の優しさには裏があるかもしれん」

そう言つて彼らの会話に割り込んできたのは……湖林くんだった。わたしたちや雨崎さんたちとは違う席で、緑茶と焼きそばパン3つを食べている。

「占いなんてのは、ハツタリじゃ」

焼きそばパンを頬張りながら雨崎さんたちの方へと視線を向ける湖林くん。

「運命はその時その時に必然的に決まる。矢が飛んでこようが、毒殺されようが、本人の行動自体で自由に決まるのじゃ。尤も、それを信じることは否定せんがな。」

「えーと、いきなりどうしたの？」

目をパチクリさせる雨崎さんの横を通り過ぎ、湖林くんは蒲生くんに語りかける。

「……蒲生。幸福の結末でも最悪の未来でも結果を盲信し、何も行動を起こさないないの

なら…それは愚行じゃ」

「湖林殿は…定めというものを信じないのでですね。哀れな」

席に座っていた蒲生くんは、目の前の灰色の髪の男に告げる。

「哀れじゃと？人間の結末なんてのはその人間個人でどうとでも変えられる」

「…では、悪しき者に洗脳され、鎖を付けられ、支配から逃れられないまま…殺される罪なき者がいるとしたら？彼らと彼女らに手を差し伸べるのが…天の定めなのです」

「その者自身が立ち上がるか…強き者が道を示せばいい。それに人間は強弱の差はあるが全員が心の底から愚かではない」

「…人の弱さを否定するのに、自分を含めた人というものを過信するとは…かえって同情してしまいますね」

ため息をつくも、いつもの笑顔で返す蒲生くん。

「すべての人間は、救われなければならないのです」

湖林くんは無表情だ。しかし、蒲生くんが気に食わないのはわたしでもわかる。

「…蒲生、貴様は…人の可能性とやらは信じておらんのかな？」

「ち、ちよつと待ってよ二人とも！朝から喧嘩はやめてっばー！」

お互いを睨みつける二人を仲裁しようとする雨崎さん。

「一ノ瀬！あいつら一緒に止めた方がいいってよー！」

梅田くんはパニック状態なのか、隣の席の一ノ瀬さんに語りかけるも…

「止めませんわ」

「…え？」

「だって…あの『覇権』の中に混ざり込むなんて…そんな愚行はいたしませんもの！」

…よく見たら、一ノ瀬さんは顔を赤くしながら、目を輝かせている…

「一ノ瀬ねーちゃん…どうしたん？」

灰寺くんは全く理解できていないようだ。いや、理解しない方がいい。

「灰寺様…あなたにもいずれわかりましてよ。女同士の喧嘩はただの薄っぺらいマウン  
ト争い。」

ただし殿方様同士の喧嘩はそのうちつきあう証拠なのですわ。御覧なさい。あの  
ベッドの上で口論しそうな二人…！」

要するに、腐っているのか。そうか。

「男に大きな感情を向ける男。それを笑顔であしらう男。まさにこれは覇権…！」

「…だから覇権って何?!」

「アナタラ、グッドモーニングなのだ！」

「オマエラ！アオハル繰り広げてる途中悪いんだけど、ちよつとボクの話聞いてくれないかな！」

レストランに入り込んできたのは…モノクマと、台車に載せられたカラフラだ。

「モノクマ!?何をしにきた!」

「鈴原さん…いきなり大きな声をあげてどうかしたの?クマのぬいぐるみを見るってそんなに驚くこと?」

「自分の意思を持つて動くクマのぬいぐるみと、喋るカラフルな花を見たら、誰でも驚くでしょうね」

黒木さんが一匹と一輪の方面をじっと見つめながら言う。

「ボクとカラフラが出てきた以上の驚きをオマエラに教えてあげようと思ったのにさ…  
例えば…」

『第二エリアに行けるようになった』とかね!」

「…第二エリア?このヒストリエランドの…?」

わたしは、目を見開いた。

「第二エリアも相変わらず壁に囲まれているけど、設備とかは綺麗だから安心してね!  
使えるようになるまでの『整備』には結構時間がかかったのだ!」

「…『整備』ってのはどう言うことなんだ?」

「ほら、ヒストリエランドって廃園からもう何年も経ってるでしょ?アナタラが仲良く  
コロシアイをするためには安全が必要なのだ!」

「ロシアアイに安全も何もないって意見は認めないからね！設備が錆びてて事故死とか正直つまらないし！」

「ってことで、オマエラの捜査頑張ってね！」

モノクマはカラフラの載る台車を後ろ手で引きながら素早く去っていった。

：ポケットの中からパンフレットを引き抜き、それを開く。

扇型が六つに分けられた地図。一番南の第一エリアの右にある第二エリア。確か、各エリアは巨大な壁で隔てられていたはずだ。そこへの扉が開いたと言うことかな。

「脱出の手がかりが見つかるかもしれないし、皆で行ってみるかい？」

「うん。朝食が終わったら行こうよ！気分転換にもなるだろうしね！」

「檀もあそこでだらけてるかもしれないねーからな！探してみようぜ！」

未隅くんに雨崎さんと二階堂さんが賛同する。

わたしたちは、雨崎さんの提案で第二エリアへ行くことになった。

これを考えるのは不謹慎かもしれないけど、きっと自由への道があるのかもしれない。  
い。



第二エリア。そこは、樹や花々が生い茂る街のエリアの中心に大きなメリーゴーランドが置いてあるエリアだった。

地図看板には「自然に触れて癒されるエリア」と書かれている。

メリーゴーランドはアコーディオン演奏をBGMにしながら、様々な色の馬や馬車をゆつくりと廻し続けている。

その中心部分は鏡張りだが、よく見ると人が一人入れそうな扉がある。

「脱出したら一ノ瀬旅館の庭に置きたいですわ。お兄様に頼むべきかしら…」

「それはただのリゾートホテルなのではないでしょうか？」

悩む一ノ瀬さんに、先ほどの彼女のセクハラなど忘れたかのように蒲生くんが突っ込む。

そうしていると、メリーゴーランドの中心部分の扉が開き、中から檀くんが出てきた。

「あ、檀くん？無事でよかったけど何をして…」

しかし、檀くんはわたしたちを無視し、どこかへと走っていく。

「む、無視された…」

あの扉は、普通に入れたのかな？わたしは馬たちを避けながらメリーゴーランドの中心の扉へと向かう。

中心に迫りつき、扉のハンドルを握り、ドアを押そうとするが開かない。

「一体、何の部屋なのかな、………」

よくみると、扉の近くには四角い枠がある。何かマスターキーがあるのかな？

◆  
メリーゴーランドより少し西南の牧場。動物はおらず、植物は整えられてはいるが寂しげな草原が広がっている。

牧場はトゲのついた鉄の柵で囲まれていて、柵の近くの看板には「感電注意」と書かれた看板がかけられている。

隅には扉の開かれたログハウスの納屋が建ててある。

納屋の中を覗いてみてもやはり牛や馬、鶏などの動物はいない。農具や固められた牧草などが置いてあるだけだ。

しかし、鋤もスコップも全部木製なんだな、ここの農具、腐らないんだろうか…。

「鈴原、何してるの？納屋には脱出の手がかりなんて無かったよ」

振り返ってみる。声の主は…紅葉さんだった。バスケットボールを脇に抱えている。

「…紅葉さん？あなたは一体何を…」

「ドリブルの練習だよ。お土産屋からボールを頂戴したし、じっとしてたら体が鈍る。電気柵にさえ気をつければ好きなかだけ走れるし、水飲み場もカラフラに聞いたら安全だって言ってたからね」

そう言うと、彼女はどこかへと去っていった。

…しかし、雨の日はどうするんだろう？

◆ 牧場のすぐ北には、屋根の丸い大きなガラス張りの温室があった。扉を開け、入ってみると様々な草花が栽培されていた。

ここは植物園か。中央には白い石造の噴水が置かれてある。

バジルやシソなどのハーブや、ブーゲンビリア、ランといったものが育っている温室。天井にはスプリングカラーが設置され、用具を入れるロッカーが存在し、その近くの長方形のガラス容器の中には3本の赤いバラが植えてあるプランターが入っていた。

ガラス容器を見つめているのは…黒木さんだ。

「黒木さん。そのバラがどうかしたのか？」

「触らないでね。下に注意書きが書いてあるでしょう？」

「そうだね…なんて書いてあるんだろう」

ガラス容器の下の注意書きを見てみると…

『このバラはケルブレムという品種のバラです。摘まれてしまうと数分ほどで周囲の人間の脳に幻覚作用が引き起こされます。依存性はありませんが、大変危険なので栽培係以外は絶対に容器に触らないでください』

と書かれています。

「美しいものにはトゲがあるというけれど、トゲだけじゃなくて幻覚作用まであるんだ



ね」

「何かのアニメ映画みたいね。ミュージカルシーン、あなたも知ってるでしょ？」

「…流石に割られたら危険だから、どこか人目につかないところに置かない？」

「どうせモノクマたちが元の場所に戻すわよ。あと、質問を質問で返すのはやめた方がいいわよ？」

黒木さんは、どこかへと去っていった。こういう時でも冷静だ…。

温室にあるもう一つの扉に気づく。開けて外に出てみると、レンガ製の1mほどの井戸がぼつん、と置いてあった。

井戸に近づき覗いてみるが、梯子のようなものが内側についてある以外は真っ暗でも見えなかった。ライト、持って来ればよかった。

◆ 植物園より北東のゲームセンター。

対戦格闘ゲーム、リズムゲーム、UFOキャッチャー、エアホッケー…本格的なアーケードの作品からメダルゲームまで置いてある。

「ミーくん…折角だからこれで遊んでいこうよ！」

雨崎さんが指差したのは、『ホッケーマニアセカンドメロディ』の筐体だ。二人でリズムに合わせてパックを打ち合うゲームだ。

わたしはやった記憶がないんだよね…。

「探索も終わったし、一回ならやってみてもいいな！エアホッケーなら僕は負けないぞ！」

「終わったって…結構早いな」

「結果は後で教えてあげるね！皆がいるところで教えたいから…」

…何かを見つけたんだらどうか？とりあえず、後で聞こう…。



東の釣り堀へ向かう。牧場には動物がいなかったのに、大きな四角の池にはなぜか魚が泳いでいる。

近くの看板には子供がクレヨンで書いたような文字で「ブラックバスやブルーギルなどのがいらいしゆしかおよいでません！モノクマ」とある。

…その看板を、二階堂さんと絹川くんが見つめている。

「ブラックバスか。腕が鳴るな。釣りなら父ちゃんに教えてらったことがある。父ちゃん、マグロやタイやらタイやらをよく釣り上げてたな。鈴原、絹川。今度釣りに行くか？」

「マグロやタイって…海の魚じゃないの？ボク、釣りはよく分らないんだけど」

「あーそうだったな！でも外来種を自然に放つような真似はやめろよ！「媚歌鬼奸」でぶっ飛ばしてやるからな！」

「…確か、この国古来の魚たちを食い荒らしてしまっただけ？」わたしは二階堂さんに質問する。

「その通りだ！ここで捕まえたらこの釣り堀ヘリリース！が基本だな！外来種に罪はねえんだしき！」

「うん。みんなを誘って釣りに行こうね。サメがいないから落ちてでも大丈夫だし」

…そういうや、サメは人間を餌として認識するんじゃないやなくて、イルカやウミガメとかの大きな獲物だと勘違いして襲うことが多いんだったよな。

この知識、どこで覚えたんだっけ…？



メリーゴーランドより東、釣り堀より南の小さな二階建ての建物。

錆びたブリキの看板にはそれぞれ赤い文字と青い文字で

『1F—喫茶店・アザミ』

『2F—写真館・八輪咲きのピオニー』

と書いてある。

一階はともかく、二階は店名にセンスがないような…？

喫茶店に入館すると、コーヒーの香りと共にシックな光景が広まっていた。

焦げ茶色の丸いテーブルとふわふわの椅子。テーブルに置かれた湯気を立てるコー

ヒー。

アールヌーボーの模様の壁。レストランにはない、大量のレコードが置かれた棚。吊り下げられた、ベッコウのシャンデリア。

よくみるとテーブルの上に紙が置いてある。

『コーヒー2はいぶん先ちやく2名さま きけんぶつ/Zero モノクマ』  
相変わらずクレヨンで書いたような字だ…。

ここにいるのは藍葉さんと湖林くんだが、二人ともコーヒーは飲んでいないようだ。

「…やつぱり飲まないんだね」

「コーヒーか。嫌いではないが、麦茶の方がオレの口には合うのじやよ」

「美味しいけれど、水分補給にはちよつとね…脱水症状を起こすんだよ…?」

それ以前に、わたしはモノクマの注いだコーヒーというのが信用できない。



二階に上がる。写真館に入るとスタジオには古めかしいカメラや撮影機材、壁には美少女カラフラの写真が大量に飾られている…。

『更衣室』『現像室』とプレートに書かれた部屋もある。

「エベゴンの写真ってねーんかなあ…?」

「あるわけねーと思うけどな…さすがモノクマの仲間、ナルシストの気配がするんだなー」

灰寺くんと梅田くんが、何やら話をしているようだ。

「灰寺くん、エベゴンって何なんだ？」

「鈴原ねーちゃん？、エベゴン知らんと？じゃあ僕が教えてあげるで！」

エベゴンってのは…エベレストで僕が発見した四足歩行の犬のようなUMAや！本当はエベレストだけじゃなくて近所の裏山とかアルプスとかにもいるんやけど、一応僕はエベゴンって呼んどる」

「UMAってのは…未確認生命体だっけ」

「そうだなー。ネツシーとかツチノコとかがいい例なんだなー」

「エベゴンは結構頭いいから、モノクマたちもエベゴンと同じUMAやな！間違いないでー」

いや、普通にロボットだと思うけど…

更衣室に入ると、ハンガーに沢山のドレスや男性用の正装などが掛けてあるのと、床に並べてあるモノクマコインを7枚ほど見つけた。

これ、やつぱりお土産屋のモノモノマシーンで使った方がいいのかな…

フィルムの引き伸ばしのための現像室の中へ。窓は当然黒く遮光されているので暗

く、様々な器具や大きな流し台が設置されている。

現像はお父さんがほとんどやってたような気がする…。



二階建ての建物の南には：怪しい建物が建っていた。

屋根も、窓も、壁もピンクのチョコレートで出来た建物。

ハートの看板にはもちろんチョコペンで

『chocolate house??』

とだけ書かれてある。

ふと、近くのホワイトチョコレートで出来た看板を見てみると…

『ここに来た人はあなたを理想の相手だと思つて妄想するようです』

『夜のバレンタインをどうぞ』

…? どういう意味なんだ?

中に入ろうとしても、鍵がかかってあるのか開かない。

一体どういうアトラクションなんだ? 中に入って仲良くチョコレート菓子を作るの

か?

考えても無駄だろうし、ここから去ることにしようかな。

第二エリアの全ての施設の探索が終わったので、レストランに戻る…前に、お土産屋でモノモノマシーンを回そう。



モノで溢れかえっているお土産屋。そのガチャガチャにモノクマコインを一枚ずつ入れ、ゆつくりと回していく…。

『塞翁ケ馬学園のバンブル』

塞翁ケ馬学園の校章と『人生万事塞翁ケ馬』と言う文字が刻まれた、黒みのかかったシルバーの腕輪。

『超技林 第55版』

様々なゲームの攻略法や裏技が書かれたシリーズ最新作。

最新ハード対応のゲーマー必須の書。

誰かに渡すのもいいが、持っているといい事がある。

『超合金イラナイロボ』

いわゆるパチモノのロボットのおもちゃ。大人の商魂で生まれ、プレゼントした子供には拒絶される悲劇の存在。

『サンゴ石』

サンゴの死骸でもあるが、これでも宝石。

3月の誕生石であり、七宝の一つだったりする。

『チュロス』

ヨーロッパ生まれの細長い揚げ菓子。遊園地や映画館で食べられる。プレーン味とココア味の二本が袋の中に入っている。

『おにぎるメーカー』

ご飯とのり、具を入れるだけで簡単におにぎりを量産できるマシン。ピクニックのお供に。

誰かに渡すのもいいが、持っているといい事がある。

『シンセ界より』

SF小説の文庫本。シンセサイザーで支配された世界を救う歌姫が主人公。なぜか数年前に絶版となっている。

本から宝石まで、様々なものが出てきた。

お土産屋に置いてあるビニール袋に入れて、レストランへ向かおう。

◆

「結局、脱出の手がかりはないみたいだねえ…」

レストランに檀くんと、彼を探しに行った未隅くん以外の皆が集まる。



メリーゴーランドの謎の扉や喫茶店のモノクマの置き手紙とかは気になるが、ただ行動範囲が広がっただけなのかもしれない…

「あの…実はゲーセンで、少し気になったのを見つけたんだよね」

雨崎さんが手を挙げる。

「一体何なの？モノクマの動機…とかじゃないよね？」

紅葉さんが腕を組みながら言う。雨崎さんは、テーブルの1つに黒く薄い一冊のファイルをさっと置いた。

ファイルの上中央には、白い文字でこう書かれてあった。

『第3次ゴフエル計画会議』

「ゴ…ゴフエル…計画…会議？なんやそれ？」

「ゴフエルという言葉は聖書に出てくるノアの箱舟の素材となった木のことね。ノアの箱舟は知ってるかしら？」

地上を滅ぼす洪水の際、ノアと呼ばれた人間の家族や様々な動物のつがいを乗せて生き抜いたとされる話よ」

灰寺くんと黒木さんが『第3次ゴフエル計画会議』のファイルを覗き込む。

ノアの箱舟の話は知っていた。しかしゴフエルという木のことは知らなかった。

「あのさ…このファイル、他にも気になることがあるんだよね…」

雨崎さんはみんなに見せつけるようにファイルを開く。そこには…切り取られた新聞記事が挟まれていた。

『謎の隕石群、ウィルス拡散か』

そう書かれた見出しと、隕石に覆われた空の写真。

「ウィルス…拡散？そんなニュースを報道していた記憶なかったぞー!」

「隕石つてさあ…ノストラダムスの予言とか、信じてないよお!」

「所詮は新聞記事じゃ。裏を見てみる。テレビ欄とかくだらん地元のニュースが書いてあるかもしれんぞ?」

おい雨崎、ファイルを少し借りるぞ」

怯える梅田くと藍葉さんを無視し、湖林くんはファイルを雨崎さんから頂戴し、新聞記事を外し、裏をめくる。

新聞記事の裏は、真っ黒だった。

流石の湖林くんも、驚きを隠せないのか目を見開いている…。

「…マジックで塗りつぶされているのか、黒い広告が載っていたのか。オレにもわからないのだが…これはひどい。」

謎を小出しにして何がしたいのじゃ?このコロシアイの黒幕は…」

「でも…モノクマたちが用意した嘘かもしれないよ?ほら、フェイクニュースってある

じゃん？SNSとかで流れる、虚構の報道とか…」

「フェイクニュースだがメイクアップだが知らないけど、それは違うよ！」

わたしたちの目の前に現れたのは…モノクマだった。

「モノクマ…何をしに来た！一体これはどういう事なんだよ！」

モノクマに怒る。しかし、奴は三回転して「クマー！」と言った後に口に手を当て言った。

「あのさ、このファイルや新聞記事に書かれてあることは事実なんだよね。」

オマエラの住んでいた世界は…謎の隕石をきっかけにすっかり変わってしまったのです！」

「…変わった？」

「そう。変わったんだよね。動機発表の時に言ったじゃん。オマエラが塞翁ケ馬学園に入学してからもう何年か経ってるって。」

その間に…うぷぷ。後の話を知りたいのなら…『卒業』する事だね！じゃ！」

モノクマは手を振ると、どこかへと去っていった。

世界の真実を知りたければ『卒業』しろ…。

つまり、生徒たちを犠牲にして生き延びる。

「ふ、ふ、ふ、げけるなよ…」

エリアが解放されても、何も変わらないじゃないか。

私は歯がゆい気分になる。

「…きつと…皆が生き残る方法があるはずだよ。だから希望を信じて生きよう」

絹川くんが心配してくれたようだ。

「あ、ありがとう…」

わたしは、そう言う事しかできなかつた…。

◆

夕食を終え、部屋に戻る。

シャワーの中で考える。

謎の夢。少女と望遠鏡の写真。失われた記憶。

ゴフエル計画。隕石。ウイルス。

考えてる途中で、黒木さんのノアの箱舟の話进行出す。

『地上を滅ぼす洪水の際、ノアと呼ばれた人間の家族や様々な動物のつがいに乗せて生き抜いたとされる話よ』

もしかしたら、わたしたち塞翁ケ馬学園の生徒が閉じ込められているのは…

隕石やウイルスからわたしたちを守るために…？

なら…なぜコロナイなんてことを強いるんだろう。

答えは出ない。出るとしたら…『卒業』後だろう。

いや、人の命は重い。だからこそ、仲間の命を奪うなんてこと絶対したくない。

シャワーを浴び、体を拭いている途中。ふと鏡を見る。

それを見たとき、体は温かいのに心は一瞬凍りついた。

「なんだよ……これ……！」

背中あたりに、5cmほどの傷跡があった。

わたしの記憶にはない。まさか、モノクマたちに奪われたのか。

◆  
寝巻きを着て、ベッドに潜り込む。

なかなか寝付けない。考えるのをやめてしまいそうになる。

わたしは、一体何者なのだろう。

わたしたちは、なぜこんなことに巻き込まれたのだろう。

◆  
モノクマ天気予報をお送りします。

今日の朝はとても快適。絶好のピクニック日和です。

でも昼からは実家からお母さんがやってきます。

そこでお母さんは叫ぶのです。

「なんでアンタのサンドイッチはタマゴオンリーなのよ！もつとレタスとか食いなさいよー！」

「でもさ、レタスって水っぽいし栄養価も高くないし誰得だよね。

タマゴのほうが絶対にいいよ。特にマヨネーズと混ぜ合わせた茹でタマゴがさあ！」

そう言ったらお母さんは少し考え、サンドイッチにハムを挟むんですよ。

オマエはハムは栄養価も高く美味しいけど…なぜタマゴを挟まないのか？ときつと思ってしまう。

以上、モノクマ天気予報をお送りしました。

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter 2「廻り空  
転スル黙禱ノ薔薇」 7日目（動機発表編）

：眠れずに、ベッドで横になっていいるうちに、時針は7時を指した。

過去の失われた記憶と背中への傷がきになるが、それでもお腹は空く。

ベッドから立ち上がり、いつもの服に着替え、レストランへ向かうことにした。



ジャズが流れるレストラン。4つのテーブルにはクリームを添えたフレンチトーストとレモンの輪切りの入った紅茶が14人分並んでいる。

わたしは未隅さんと雨崎さんの隣に座ることにした。

「なんてことだ、野菜がないじゃないか！このままではビタミンが不足して病気になるぞー！」

「ビタミンCなら紅茶の中のレモンがあるからいいんじゃないの？確かに野菜不足は気になるけどさ」

未隅くんは栄養の偏りに文句を言って、その横では雨崎さんが器用にフレンチトーストをクリームにつけて食べている。

いつも一緒にいる二人だけど、馴れ初めが気になる。ということでも…ちよつと質問することにした。

「そういえば…雨崎さんと未隅くん、どうして付き合い始めたのかな？」

「い、いきなりどうしたんだ…？」

「別にいいでしょ、鈴原ちゃんになら。話しても減るもんじゃないし」

雨崎さんがフォークとナイフを置き、未隅くんに告げる。

「じゃあ、僕が話せる範囲で言うよ、絶対に誰にも話さないでくれるかな？」

「わかった。誰にも言わないよ」

未隅くんは一息つき、話を始めた。

「あれは僕がとある事情で塞翁ケ馬学園の前の高校に転校してきた時だった。

僕はラグビー部に入部したんだけど、新入部員だったから雑用を手伝わされてたんだ。ドリンクを作ったり、ボールを運ぶ用意をしたりね。

仕方ないと受け入れる反面、自分が情けなかったよ。ボールに触りたいだけなのになんでこんなことばかりってね。

ある日、先輩から部室を掃除しろと言われてね。用具を取りに行こうと校内を歩いてね。

箒とチリトリを教室のロッカーから取り出して、さあ部室に向かおうとしてた所…廊



下で女の子に出会ったんだ。

女の子はチャアリーディング部の子でね、練習が休みだったらしくちようど帰ろうとしてた。

『どうして箒を持つてるの?』と言われたから部室を掃除しようと思ってたんだと答えたら、手伝うよと言われて:最初は別にいいよと断ったけれど『二人でやった方が早く終わる、余った時間で練習すればいい』と返してきた。

部室の掃除はすぐに終わった。感謝の気持ちを伝えて、僕は女の子に別れを告げた。

数日後、一人でボールを磨いていた時。前と同じ女の子がやってきて、雑用を手伝ってくれた。

磨き終わった後『SNSのアカウントフォローしていい?』って言われて、僕はフィードチャーフオンしか持っていなかったからメールアドレスを教えた。

最初はたまにメールを交換し合ったり、雑用を一緒にやるだけだった。でも、僕は女の子のことがだんだん気になってきたんだ。

それから4ヶ月後のある日。『あたしと付き合いませんか?』と言うメールが来た。

正直嬉しくて涙が出てきたよ。久々に流す涙だった。

返信はもちろんOKって返したね。こうして、僕と女の子は付き合うことになった。

その女の子が、今、隣にいる梨々さ」

「ミーくん、話長い…そこまで話さなくていいのに…まさかこんなことまで話すとは思わなかったよー！まああたしも悪いんだけどさあ！」

「す、すまない！話すぎたね」

雨崎さんが赤くなった顔を覆っている。いつもの大胆な様子からは想像もつかない。「鈴原ちゃん！あたしとミー君まだ手を繋ぐまでしかやってないんだよ！あたしがキスしようとしたらミー君早いつて怒るんだよー！」

ヒートアップしたのか、怒りだす雨崎さん。

…いつか、キスもできたらいいね。

隣のテーブルでは、湖林くんがナイフのみでフレンチトーストを優雅に食べていた。その隣の席には、「灰寺くんと、梅田くん、そして二階堂さんが座っている。

「灰寺。まさか森蘭丸の記憶もないとはな。信長に仕えた小姓でもあり、忠誠心が高く気の利いた美少年でもあったのじゃが…」

…森蘭丸？織田信長に仕えたって言う、あの…？

「僕は織田信長はともかく、森蘭丸は知らへん。社会の成績は2くらいだったし…」  
「じゃあ、武田信玄や石田三成は誰だか知ってるんか？」

「名前だけなら聞いたことあるけど…確か物凄くイケメンなことしか知らへんなあ」

湖林くんは驚きのあまり目を丸くする。

「マリア・テレジアやフリードリヒ2世とかは…知っているのか？」

「そういや、戦国時代の人だけじゃなくてヨーロッパの昔の人って…みんなビーム放つとつたんよね？ゲームで知ってる」

隣で紅茶を飲んでいた梅田くんが嘖き出す。

「い、いきなり世界史になってるぞー!？」

「安心しな。数学の証明問題なんてのは社会人になつたら多分ほとんど使わねえからな  
！」

レモンをかじりながら得意げに言う二階堂さん。

いや、知っておいた方がいいんじゃないか…？わたしも苦手だけど…

こうして、平和な朝食の時間は過ぎていく。

わたし自身とわたしたちが、監禁されていると忘れそうなくらいに…



朝食を終えた後、第一エリアの洋館へと向かった。

洋館の中は、惨劇が起こったとは思えないほど綺麗に整えられていた。

一瞬、イヴァンさんとバナラさんのことが脳裏に浮かぶ。

もうあんな悲惨な事件は起こしたくない。そのためには、希望を捨てないようにしよ

う。

わたしは手と手を合わせ、二人の冥福を祈った。

◆ 【自由行動】

丸いテーブルと鼈甲のシャンデリアの似合う喫茶店・アザミ。

梅田くんは椅子に座りながら、『後光殺人事件』と表紙に書かれた本を読んでいる。「おつ、鈴原じゃん。これが気になってるのかー？小栗虫太郎って推理小説家の書いた短編なんだよなー」

この事態に推理小説を読めるんだな…そんな梅田くんと一緒に過ごせるかな？

梅田くんのオススメの小説を読みながら過ごした。梅田くんと仲良くなったようだ…。

男の子だからロボットが好きかなと思ひ、『超合金イライナイロボ』をプレゼントした。「こう言うの好みなんだよなー！部屋に飾ろうかなー、ありがとうなー！」

結構嬉しいみたいだ。良かった！

「うーん…」

梅田くんは、あたりを懸命に見回している。何かを探しているようだ…。

「梅田くん、ちよつといいかな。何か探しているのかな？」

「そうなんだよなー。『スプリンターマン』って特撮番組のノベライズなんだけどきー。どこにも見当たらないんだよなー。」

このエリアに落としたはずなんだけどなー」

「えーと、『スプリンターマン』って何なんだ？」

『スプリンターマン』知らないのか？まあ35年前のやつだから仕方ないか。

どんな敵でも30秒で倒してしまう正義のヒーローでさ、スタイリッシュな演出が魅力なんだけど世に出るのが早過ぎたのか当時は受けなかったんだよなー」

…時代を先取りし過ぎたってやつか…

「でも最近再評価されてきてさー、ノベライズが出たんだよなー。お土産屋にあったから折角読もうと思ってたんだけどなー」

「そうか…とところで、表紙の特徴とか知らない？」

「青と赤と白のトリコロールが特徴のヒーローだなー。そいつがピンク髪のヒロインを抱っこしてるんだよなー」

トリコロールなヒーロー…まるで某ロボアニメみたいだ…

「わかった、一緒に探そう。ここに来るまでの道を思い出せばきつと見つかるはずだよ」と言うことで、二人でエリア内を探すことにした。

梅田くんが来た道を辿って、様々な場所を隅々まで見て…

ようやく、わたしがベンチの近くに落ちていた『スプリンターマン』の本を見つけた。  
「やったぜー!まさかこんな所に置いてるなんて…うわっ!」

…梅田くんは、何もないところで派手に転び…倒れてしまった。

「いたたたた…」

うつ伏せ状態の梅田くんを起こそうとする。

「大丈夫か?すごく痛そうだけど…絆創膏貸そうか?」

「いや、大丈夫だなー。意外なことにはげはないみたいだし。10mの崖から落ちたこともあるしなー」

「10m!?命に別状はなかったのか!」

「その時は足の骨折で済んだけど入院したなー。と言うか10mはプールの高い飛び込み台の高さだからなー」

それにしても…『スプリンターマン』に傷とか汚れとかなくて良かったなー」

…梅田くんは本を手に取り、大いに喜んでいる。彼は不幸体質みたいだけど、とてもポジティブだ。

わたしも見習いたいと思った。

こうして元の場所に戻り、梅田くんと一緒に本を読み漁った。

この時間で、梅田くんのがわかった気がする…。

『本をよく無くしたり、何もないとこで転んだりする不幸体質。それでも憧れの特撮ヒーローのように懸命に生きるポジティブな性格をしている。』

◆ 梅田さんと別れ、次の目的地へ向かうことにした。

### 【自由行動2】

様々なアーケードゲームが置いてあるゲームセンター。

メダルゲーム機の前に座っているのは…湖林くんだ。

「チツ…折角景品が取れそうなんじゃがな…おい鈴原、攻略法は知っているか？」

攻略法は知らないけど、一緒に過ごしてもいいかな？

湖林くんのメダルゲームを手伝った。

湖林くんとの仲が深まったみたいだ。謀反はしないようにしよう…

折角なので『塞翁ケ馬学園のバングル』をプレゼントすることにした。

「ほう。中々の逸品じゃ。貴様、オレの家臣にならんか？いや、冗談じゃ。本気にしなくてもいい」

良かった、結構嬉しいらしい。

湖林くんは、鋭いオーラを放ちながら佇んでいる。

話しかけても怒られないかな…？

「…そういやさ…前世の記憶はどれくらい持つてるんだ？」

湖林くんはこつちの方向を向き、こう告げた。

「教えてやろう。幼少期は信長の記憶を持つていなかった。じゃが、徐々に記憶を取り戻していった、それだけじゃ。」

あと、オレは信長の生まれ変わりなどではない。本物の信長じゃ…！」

わたしを睨みつけてくる湖林くん。少しビビってしまいそうだ…

「す、すみません…」

でも人が死ぬ前にタイムスリップして、赤ちゃんに戻るとかありえるのかなあ…？

「…信長が本能寺の変で寺に火を付けて、自殺したのは有名だよね…その時はどうだったんだ？」

「裏切られたことへの怒りと悔しさで一杯じゃったのう。実はその時のショックが由来なのか、小学生の頃不良にタバコを押し付けられたのかは知らんが…オレは火を恐れているらしい」

今、辛い過去をさらつと話さなかったか…？火を恐れている『らしい』と言ったけど、自分の弱さを認めたららないとか？

「ところで、湖林くんってさ、『超高校級の歴史学者』だったよね…初めて会った時に歴史人物の遺産を見つけたって言ってたけど、何を見つけたんだ？」



「貴様にしては中々面白い質問じゃのう。オレが見つけたのは…あやつの遺産じゃ。先ほど貴様が言った、本能寺の変にも関連する人物…」

「…明智光秀だよね？」

「正解じゃ！とある古文書を読み解き、光秀の遺産が眠っている場所を見事に見つけたのじゃよ。使っていた茶器、詠みあげた連歌…光秀はかなりの文化人じゃった。発見された時は、同じ歴史学者たちに高く評価されたのう」

「光秀、結構多趣味なんだね」この様子を見るに結構嬉しかったみたいだ…

「それに加え光秀は優秀な武将でだった。今や実在していないと言われている長篠の戦いの三段撃ちを提案したのは…光秀と言われておる。それと、側室を持たぬ一途な人間じゃったのう」

そうなんだ…光秀、裏切りのイメージが強いからなあ…

「湖林くんは…光秀に裏切られたこと、気にしてないのか？」

「光秀の裏切りは今でも許すことは出来ぬ。じゃが、裏切ったからと言ってそいつの全てを否定する気はない。

全てを否定するということは、その人間を信じてきた今までの自分を否定することでもあるからのう」

裏切られても否定しないなんて、情には厚い方なのかな…

「ところで、光秀が裏切った理由…湖林くんにはわかるかな？」

「そういうや、謎だったよな…」

「今のところはオレにもわからないのう」

「…わからないんだ。やっぱり…」

「じゃが、その歴史の真実を解き明かすのがオレの役目じゃからのう。ここから出て、必ず謎を解き明かしてみせてやろう」

光秀を嫌っていないんだな…少しだけ、湖林くんの印象が変わった気がする…

『短気で俺様、だが情には厚い自称・織田信長本人。明智光秀の遺産を見つけたりした功績ある歴史学者でもある。』

湖林くんと別れ、部屋に戻ることにした。



この日の夕食は肉じゃがが定食だった。普通なら副菜のはずの肉じゃががメインとなっており、小さなシヤケの焼き魚は脇役のようにお皿の上に置かれている。

相変わらずがつつく灰寺くん、本を横に置いて食べる紅葉さん、優雅にジャガイモを口に入れる蒲生くん…

檀くんは誘われたのか、雨崎さんや未隅くんの隣の席で食べている。尤も、黙々と食べている様子だが。

わたしはというと、二階堂さんと灰寺くんと一緒に席で食べていた。空いている席にも肉じゃが定食は置かれている。

料理の味付けは薄い方だ。こうやって健康に気遣っているのも、わたしたちに कोरोシアイをさせるためののかな…と勘ぐってしまう。

そういえば、空席に座っているはずの藍葉さんの姿がない。一体何をしているのかな？

「二階堂さん、藍葉さんはどこにいるんだ？」

「んー。キッチンにこもってるらしいな。カラフラに頼んで借りてるんだってさ。入ろうとしたら追い出されたよ。」

『超高校級の科学者』だし、何か実験でもしてるのかな。アンパンとかクリスタルとかは流石になさそうだけど」

「お、アンパンを作ってるんか？美味そうやなあ！」灰寺くんは目を輝かせる。

「いや、アンパンはアンパンでも毒以上に危険なやつだよ。一度やったら廃人になつて…」

「え、ダメなんか!? 昼ごはんにたくさん食べるんやけど! これじゃあ僕廃人になっちゃうなあ!」

何気ない話をしていく中、静かに時間が進んでいく。

わたしが焼き魚を食べている途中、ガスマスクを付けた藍葉さんがキッチンのドアから出てきた。相変わらずカバンは膨れ上がっている。

「藍葉嬢、お疲れ様です。何を作られたのですか？」蒲生くんが何を作ったか聞く。

「ごめんねえ。いつか、教えるから…」

藍葉さんはガスマスクを外すとカバンに仕舞い、食事の置かれた空席に座った。

あのカバンには一体どれくらい入るんだろうか…？

全員が食べ終わり、食器を片付けようとした時…。

その放送は、平穩の終わりを告げた。

「えー、園内放送。園内放送です！ところで肉じゃがにグリーンピースは不要だよね。ここは豪華にブロッコリーにしろって。

せっかくビーフシチューがルーツなんだから薄い肉じゃがなくて厚い肉入れるべきだよね。

ま、オマエラの食べている肉じゃがはグリーンピース入りの薄い肉を使ったものなんですよ！」

…モノクマの声だった。

一体、何を言いたいんだ…？

「という訳で、今から二つ目の動機を発表しようと思います！オマエラ、死にたくないののなら第1エリアのステージに集合してください！」

動機？また、殺人を引き起こしたモノが発表されるのか…？

「モノクマ、死にたくないのならステージに行行って言っただよね…だから、行くしかないよ。みんなが生きるためには…」

絹川くんが立ち上がり、皆に言う。

わたしたちは、とりあえずステージへ向かうことにした。



ステージの演台には相変わらず大きな液晶テレビと、大きなダンボールが置かれていた。

モノクマも、相変わらず演台の右端で退屈そうに座っている。

「また動機か？いい加減にしてくれる？」

檀くんが挑発的な視線を向ける。しかし、モノクマは聞く耳を持たないのかりモコンを持ちながら…

「みんな集まったみたいだね！じゃ、面倒だからさっさと始めようか！じゃなかった、ちやちやと終わらせようか！」

モノクマがリモコンのボタンを押すと、液晶テレビに『カラ☆フラTV』のロゴが出

現し…

「平和ボケしてるあいつにも鬨争ボケしてるあの子にも大人気！嘲りと空虚の動機テレビジョン・カラ☆フラTVが始まるのだ♪」

ロゴが画面から消え、法廷風のセットと美少女姿のカラフラが映し出される。

…彼女はこの前のような制服姿ではなく、ベージュ色のスーツとミニスカート、そしてメガネを付けて、陳述台の上に座っていた。

「アナタラー、ろんぱんわー！いつも今度も美少女スタイル！ただしゆるキャラには除外！

天気予報は雨が降る！女教師スタイル・カラフラなのだー！」

…なぜ、今回は女教師風なのだろうか？

「陳述台に座る法廷映画なんて見たことないわね。検事が頭打ち付けたり鞭を振り回したりする世界観でない限り流石にマナー違反よ」

黒木さんも流石に引いているようである。

「女教師といえど生徒とのアブナイ関係なのだ！放課後の保健室でドキドキの課外授業！根掘り葉掘り教えまくりでチョークもカチカチなのだ♪」

「流石に下ネタが過ぎるな…！と言うか、日本語間違ってるな…！」

「あら、梅田くんツツコミが激しいのだ〜！こうなったらウサミミ付ければ良かったの

だ。

いや、最近流行りのイヌミミが良かったかな？まあお花だからそんなの関係ねえ！なのだ！

と言う訳で、今日も楽しく動機発表と行くのだ」

カラフラは一回転し：懐から一冊の薄いB6サイズの本を取り出した。表紙をよく見ると、40年前ほどの少女漫画風のカラフラの絵が描かれてある。

表紙の上には『漫画でわかる真実』：し、真実？

「今回の動機は：ジャジャーナー・アナタラの知りたい真実を漫画で大発表！

初恋の相手の秘密から父親の愛人まで書かれた神漫画なのだ！

と言う訳でモノクマ、どんどん配っちゃってー！」

「しよがないなあ：面倒だからオマエラに投げるね！」

モノクマはダンボールからビニールで梱包された薄い漫画本を取り出し、ばら撒いて行く。

わたしは本を拾う。表紙はカラフラが持っているものと同じだった。

早速ビニールを破ろうとすると：

「あ、鈴原さんもだけどアナタラ、必ず部屋で読むのだ。バレたらつままないしね！」

思わず手が止まる。カラフラは漫画本を懐に仕舞い直し、腕を組む。

「自分の秘密が知りたいって言うのなら交換相手を探るか3日後を待つのだ。ま、3日経ったら全部真実をインターネットに公開しちゃうのだけどね！」

「それまでにコロシアイを起こせばネットには公開されないから安心してね！ぶひゃひゃひゃ！」

モノクマは下品に笑いながら、残りの漫画本をばら撒く。

そんな残酷な動機に抗議したのは：一ノ瀬さんだった。

「い、嫌ですわ！コロシアイだなんて…か弱い私には向いていませんわ…！こんなコロシアイとやらは…いつまで続くのですの!？」

画面の中のカラフラは、一ノ瀬さんの悲痛な叫びを聞いたのか、一回転しまた懐から本を出す。

今度は辞書のような厚さの本だった。

カラフラは本を広る。そこには、残酷な事実が書いてあった。

『新校則：コロシアイ遠足は、生徒が二人になるまで続けられます。』

「あ、新しい校則…?」

「あたしたち、結局コロシアイを続けなきゃだめなの!？」



「その通りだよ！じゃあ早速追加しておくからみんな電子生徒手帳を見てね！」  
ポケットから、電子生徒手帳を取り出すと：新しい校則が書いてあった。

⑫ コロシアイ遠足は、生徒が二人になるまで続けられます。

⑬ なお、校則は追加されることがあります。

「オマエラさあ…出たい出たいって言うけれどリスクは考慮してないんだね。昨日もこの世界はすっかり変わったって言ったじゃん！もし外の世界に出た瞬間に反乱組織から狙われて殺される…ってなったらどうするのさ！

いいか！何かをやりたいとかそう言うのには責任が付きものなんだぞ！」

「つてことでこれからも頑張つて欲しいのだ。ばいろんぱー！」

「…いやー、どうして理事長ごときがあんなに目立つんだらうね！うぷぷ…」  
カラフラはスクリーンから消え、モノクマはどこかへと去つていった。

わたしたちは、絶望と共にステージ広場に取り残された。

「畜生…またあんなことしなきゃならねえのかよ…」

二階堂さんが視線を下に向けながら呟く。わたしも気持ちは同じだ。

「大丈夫。今のところ、二つ目の事件は起きてないよ。だから、これからも事件は起きないんじゃないかな」

「けどよ、ネットに真実が流出するのを恐れた奴が人を殺す可能性もあるんだぞー？その真実ってやつが大変なものだとしたらどうするんだー？」

冷静な絹川くんに梅田くんが語りかける。

「人が死ぬのは、何よりも悲しいと思う」

絹川くんは、寂しげな声で囁いた。



部屋に戻る。ビニールを破き、6ページしかないのであろう漫画本を取り出す。

少女漫画風のカラフラは星のように瞳を輝かせながら、沢山のバラに囲まれている。

わたしは覚悟を決め表紙を捲る。1ページ目には、可愛らしい文字でこう書かれてあった。

『漫画でわかる一ノ瀬秋穂の真実』

…ページをまた捲る。

『一ノ瀬旅館は今年で300年を迎える高級温泉宿。』

初代オーナーである一ノ瀬銀杏によって建立され、豪勢な食事とサービスによってその歴史を紡いできました』

『著名な武士や文豪、総理大臣も宿泊し、そのおもてなしは好評だったと言われている』

『戦時中には空襲により建物が全焼しましたが、様々な人々の支援もあって不死鳥のごとく蘇ったとされています』

『誰をも癒す一ノ瀬旅館……これからも皆さんにおもてなしを届けていくでしょう』

『そんな一ノ瀬旅館のランチの新メニューは……有名スイーツ店監修のモンブランなのですー！』

……ページの最後には、四角いコマに書かれた文章とリアルで美味しそうなモンブランのイラストが描かれていた。

思わず、ページを閉じる。

なんでモンブランなんだろう。本当にこんなものでコロシアイが起きるのか？  
でも、もしかしたら……別の本の真実はとんでもないことが書かれているとか？

# ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter 2 「廻り空 転スル黙禱ノ薔薇」 8日目

わたしたちがヒストリエランドに閉じ込められてから、8日目の朝のレストラン。

今日は鮎の塩焼き定食。お盆の上にはふつくらと焼かれた鮎と半月切りのレモンが載せられた四角い灰色の皿、それぞれ卵焼きとほうれん草のおひたしが載つてある2つの丸いお皿。

白い陶器のお椀には炊かれたごはん、黒い木製のお椀にはワカメの味噌汁。

わりとオーソドックスで豪華な朝食だ。

わたしは紅葉さんと梅田くんと同じテーブル。

紅葉さんはもう朝食を済ませたのか食器は空であり、『夢色のコラール』と表紙に書かれた本を優雅に読んでいる。

梅田くんは：なぜかほうれん草のおひたしに全く箸をつけていない。嫌いなんだろ  
うか。

と思いきや、ほとんど食べ終わった後に食べ始めた。梅田くん、好きなものは最後まで取っておくタイプなのかな。

「湖林ってバイク乗れるんだな。意外じゃん。アタシなんて父ちゃんが免許取らせてくれねーんだよな！」

もし乗れたら、日本中ツーリングしながらゴミ拾いすんにさー！」

「僕はバイクよりも車の免許が欲しいなあ。大きくなったらの話やけど…」

隣のテーブルを見る。湖林くんと一ノ瀬さん、灰寺くんと二階堂さんが喋りながら朝食の時間を過ごしている。

…一ノ瀬さんは二階堂さんから視線をそらしながら、黙々と食べているが。

「なあ、湖林兄ちゃん！一つ質問したいんやけどさ…」

卵焼きを飲み込んだ後、湖林くんが声の方向を向く。

「何かあったんか？ついにオレの家臣となる決意を固めたんか？」

「銅崎吟子ってさ…どんな人なんか？僕、全く知らんのやけど…」

「…名前だけなら知ってるのう。クラスの男たちに人気のアニメの声優と聞いたことがある」

「じゃあ『魔法ハンターエル子』って知ってる？その主人公の声優なんだけど…その人、彼氏と添い寝フレンドの男がいるってほんとかいな？」

「オレはアニメはあまり見んが、名を轟かせる女は大抵恋人がいると思…って…え？」

湖林くんは何か気づいたのか、箸の動きを止める。

それと同時に箸を止めたのが：檀くんだった。

「こんな下らないことを、モノクマは真実にしてんのかよ…」

声優・銅崎吟子の秘密。

もしかして、それが漫画で書かれた檀くんの真実なんだろうか…？

「大丈夫。みんなの受け取った真実も、きつと大したものじゃないさ」

未隅くんは俯く檀くんの肩に手を乗せる。慰めているのだろう。しかし、すぐに檀くんは手を払った。

「…そいつにとつて大した真実じゃなくても、他の人間にとつては恐ろしいものかもしれない。みのるん、俺が受け取った真実を知りたいか？」

みのるん：…おそらく未隅くんの事だろう。

檀くんの言っていることはある意味正しい。わたしたち『超高校級』を16人も集めることのできる巨大な組織が黒幕なら、わたしたちの嗜好や隠し事の重要な情報もわかるのかもしれない。

…コロシアイを起こすための、残酷な真実も。

「待つてくれ檀くん：…恐ろしい真実なら、なんで皆に告げるんだ？」

わたしは席から立ち上がり、檀くんに言う。

「たいした情報じゃなくても、誰かが殺されるかもしれないのに…？」

「ロシアイが起きることで、エリア開放されるとしたら？」

立ち上がり、わたしたちの会話に入ってきたのは黒木さんだった。

「もしかしたら、次のエリアに進もうとしているだけかもしれないわね。パンフレットの地図を見る限り、ヒストリエランドのエリアの数は6つ：

後、檀は…単独行動が多いわ。常に何かを探そうとしているの。まるで黒幕への反撃のチャンスを手に入れたいが為に。

「…さゆりん…」

「それって、イヴァンの為なのよね？ロシアイを止めようとしてたイヴァンの死を…無駄にしたくないのよね？」

一瞬、黒木さんの目がギラギラと輝いたような気がした。

檀くんは拳を握り、黒木さんを睨む。

「…ざけるな…」

「檀くんは友人思いね。報われない彼の分まで、生きようとしているなんて。ロシアイを起こそうとしてるなんて」

「ふざけるなあっ！」

檀くんは逆上したのか、椅子から立ち上がり黒木さんに手を出そうとする。しかし…

彼を止めたのは…走ってきた絹川くんだった。

絹川くんは見た目からは想像できないほど強い力で、檀くんの腕を掴んでいる。

「は、離せレンきゅん！」

「イヴァンくんは、そんなこと望んでないでしょ…？」

「なんだよ…お前もいつちゃんのことで…」

「違う。ボクの意見だけど…イヴァンくんは…争いが起きることよりも、皆が生きることとを願っていたんだと思う…。」

だから、誰かに手を出したりなんてことはしないで…」

「…畜生…」

檀くんは、おとなしく椅子に座りなおす。

「それが皆の笑顔に繋がるかもしれないわね。ある意味理想論だけど」

黒木さんは相変わらず微笑んでいる。ちよつとは反省してほしいと思う。

「ごめん、僕のせいだ…みんなギスギスさせちゃったなあ…」

灰寺くんはしゅんとしている。

彼のせいではないと思う。悪いのは…このデスゲームの黒幕だ。





部屋に戻る。軟禁生活にも慣れたのか、いつもと変わらない部屋だなんて思ってしまう。

朝食会での騒動…その人にとっては小さな真実でも、最悪の事態につながりかねない。

それを食い止める為にも、まずは情報収集から始めようかなと考える。

わたしは身支度を整え、部屋から出ることにした。



【自由行動3】

様々な植物が生える温室。そこの噴水の石造に座っているのは…紅葉さんだ。

「…鈴原、どうしたの？用がないならなんでここにいるの？」

紅葉さんは顔を上げ、興味なさそうに言う。

こんな紅葉さんだけど、一緒に過ごしてみようかな…？

紅葉さんの隣で、風景を眺めながら過ごした。紅葉さんと仲良くなれたかな…？

そういえば紅葉さんは本が好きだったよな…。

『シンセ界より』をプレゼントすることにした。

「ふーん。結構いいもの持ってるんだ。受け取っておくよ」

それなりに喜んでくれたようだ。

「…」

「…」

紅葉さんは、文庫本をじつと読んでいる。

話を読もうにも邪魔だと思われたらどうしようかな…。

そう考えているうちに、紅葉さんは本を閉じて立ち上がり、どこかへと向かう。

「も、紅葉さん？どこへ行くんだ？」

…紅葉さんを追いかけていく。

辿り着いた先は、お土産屋だった。紅葉さんは遊具のコーナーを物色していく。

「紅葉さん…何を探してるんだ？」

「…ボールだね。できれば固めがいいな。バスケの練習をするの」

彼女はいつも、バスケ熱心で読書熱心なんだな。

「鈴原、一つ言っついていいかな？筋トレにランニング、シュートやドリブル、イメージ

トレーニング…

バスケの練習つてのは…一人でもできるんだよね、正直言っつて」

それ、それ、遠回しに邪魔つて言っつてるのかな…。あまり付いていかない方がよかつ

たな…？

固そうな桃色のゴム毬を見つけ、傍に抱えたと思うとわたしの方向を向く。

「でもさ、バスケの『試合』ってのは一人ではできないんだよね」

「…えっ？」

「バスケットするのは、自分や味方のチームだけでなく相手の動きを見ていかに勝利を掴むかのスポーツなんだ。

他の球技にだって言える。テニスもゴルフも、相手と点数を競わなければできない。例外はスカッシュやボウリングぐらいだと思うよ。だから、二人以上での練習も必要なんだけど…」

「もしかして…わたしに練習を手伝って欲しい…とか？」

「…別に。正直素人相手に練習なんて時間の無駄だし、一人での練習の方が気楽なんだよね…」

やつぱり、そう返すんだ…

「つてことで、私はどつかでドリブルの練習でもしとくよ。じゃあね」

紅葉さんはゴム毬を抱え、どこかへと去っていく。

本当に一人が好きなんだな、紅葉さん…

『バスケの練習は一人でもできる…』と言い張る紅葉。

しかし、バスケの試合は一人ではできない…というのも彼女の持論である。』

心をへトへトにしなながらも、次の目的地へと向かった…。

◆ 【自由行動4】

「…」

黒木さんは、釣り堀を眺めながらじっとしている。

映画のネタでも練っているんだろうか。そんな彼女と一緒に過ごせるかな？

「…鈴原さん、どうしたの？今、精神集中してたのよね」

彼女は無表情で振り返る。とりあえず、一緒に精神集中することにした。

黒木さんと少し仲良くなってしまったようだ…。

映画のお供にいいかなと思ひ、『チュロス』をプレゼントした。

「あら！鑑賞中に中々いい代物じゃない。ありがとうね♪」

かなり喜んでいようだ。こっちも嬉しくなるな！

「鈴原さん…一つ質問があるのだけど、いいかしら？」

「どうしたの？」

「…恋人はいる？」

恋バナか。彼氏はいないしいたこともないんだよね…

「いないけど…」

「私も恋人はいないわ。小学生の時に生徒10人くらいに手を出した担任の男や、体格のいい中学生に言い寄られたことはあるんだけどね」

…詳しいことは聞かないでおこう。

「ところで…好みのタイプはどんな人？」

「考えたことはないけど…常識のある人かな」

「じゃあ…その人と純粋に愛し合いたいと思う？」

「恋愛するならやっぱり好きな人になりたいとは思うけど…なんで純粋って強調するんだ？」

「では…『灰色のフレデリカ』は何を描いたか、鈴原さんは覚えているかしら？」

たしか『灰色のフレデリカ』は、冴えない青年とゾンビ化する女性の…

「…純粋な愛だったかな」

「その通りよ！怪物と化していく女を献身的に愛する男。反ゾンビ組織の攻撃にワクチンを探す旅…2人を隔てる様々な壁。」

それを乗り越え、『彼や彼女だからこそ愛してる』と一途に想いあつてこそ純愛なのよ」

たしかにラブストーリーには幸せな展開だけじゃなくて、色んな障害があつた方がいいよな…

「鈴原さんももし好きな人と愛し合うのなら、あらゆる壁を乗り越える感じがいいと思わない？ま、ヒロインに自分を重ねている訳じゃないけどね、ゾンビになったら映画を作れなくなるし」

もしかして、黒木さんは純愛に憧れているのかな。彼女の意外な一面が見れた気がする…

「あと、映画の恋愛要素は飾り程度にしか見ていないわよ。恋愛をメインにするのは好きじゃないのよね。『灰色のフレデリカ』は私の無名時代の作品だから『女の子らしい映画を撮りなさい』ってスタッフの意見を聞いて恋愛要素を強めにしたんだけど。」

最低映画賞で有名な『スイス手裏剣』からインスピレーションを得たから、できればゴア要素をもっと入れたかったわ！」

知らない映画だな…ゴア、つまり残酷要素ってことはもしかしてB級映画かな…？

とりあえず、ヒストリエランドから出たら観てみたいな。『灰色のフレデリカ』…『純愛に憧れる以外な一面あり？』

でも映画の恋愛要素は飾り程度にしか思っていない。』

黒木さんと別れ、部屋に戻ることにした。



ホテルに戻る前に、牧場の近くを通り過ぎる。

ふと牧場側を見ると、紅葉さんと…水筒を持った藍葉さんが一緒にベンチに座っている。

紅葉さん、こんな状況でも自主トレを欠かせないのだろうか。

「大丈夫だよ。この栄養ハーブドリンク、怪しいものは入っていないから…」

そう言つて藍葉さんはカバンから取り出したふたつのコップに水筒の中身を注ぎ、片方を紅葉さんの目の前で試飲する。

…何も起こらない。なんか安心だ。

それを見たのか紅葉さんは別のコップを受け取り、ドリンクを飲み干す。喉が乾いていたのか、それは一気に無くなった。

「味は悪くないね。ありがとう」

「これ、披露回復を早めるハイビスカスが入っているんだよね。ビタミンCやクエン酸が含まれててね…」

ハーブの解説を言いながら紅葉さんの身体をタオルで拭いていく藍葉さん。

「いや、そこまでしなくていいよ」

「汗で身体が濡れてたら風邪を引いちゃうかもしれないから、拭いておいた方がいいよ」

…わたしは二人の邪魔にならないように、その場から去っていった。

二人の時間がどうか平和に終わりますように。

◆ 夕食はビーフシチュー。ごろごろと切られた肉や野菜がルーと共に深めの皿に注がれている。野菜はともかく、肉は薄切りの方が好きなんだけど。

わたしは絹川くん、梅田くん、藍葉さんと同じテーブルに座っている。

「ついてねー…グリーンピース入ってねえタイプなのかよ…」

「グリーンピース、ほくほくしててボクも好きだよ。梅田くんも好きなの?」

「オレも同意見なんだな…あの食感と苦味が嫌いって奴もいるけど…そういやモノクマが今朝『皆の好き嫌いが多いせいでカラフラに食わせる残飯が増える』って愚痴ってたんだよな…」

…カラフラに少しだけ同情した。

こうしているうちに食事が終わり、わたしたちがホテルに戻ろうとした瞬間。二階堂さんが話しかけてきた。

「お前ら! 明日暇か? 一つ集まろうと思うんだけどさ…」

「予定はないけど…」

「明日さ、第二エリアの喫茶店で…『お茶会』しねえか?」

「…お茶会? あのお菓子や紅茶を食べながら、みんなで過ごすお茶会…?」



絹川くんは興味深そうに聞く。

「そうそう！あのお茶会だよ！雨崎と未隅も誘ってるんだ。スコーンってやつ作るんだってさ！」

ほら、せっかく喫茶店やハーブが植えてある植物園もあるんだからさ、おしとやかに…紅茶とか飲んで…さ…」

二階堂さんははしやぎながらも顔を赤くしている。

「参加するよ。ティーカップとかポットとかは用意した方がいいよね？」

「アタシが人数分用意するから手ぶらで来ていいぞ！服装もいつものOKだ！」

…少し不安だけど、二階堂さんに任せよう。

「じゃあボクも行くのかな。スコーン、どんな味かなあ」

「ハーブティーならオレが協力するぞー。昔モテたくてハーブティーの本読んだことあるんだよなー」

「…私も作ったことあるんだよね、ハーブティー…とりあえず、行きたいな…」  
席の全員が参加に同意した。

「よっしゃ、決まりだな！お茶会の時間は午後12時！終わったら釣りタイムだ！」

「釣りタイム!?!」

帰ろうとしていた灰寺くんが踵を返し、こっちに向かってきた。

「お茶会ってなんだかよくわからないけど、楽しみやな！僕も参加していい？」  
「勿論だ！大物釣りあげて魚拓でもとろうぜ！」

優雅なアフタヌーンティーの後に釣り…？雰囲気が変わりすぎてないか？

「大丈夫かな…釣り堀のお魚、確か外来種だったよね…？」

「今日は雲行きが怪しかったし、雨が降るんじゃない？」

藍葉さんとわたしはあたふたしながら告げる。

「食べるわけねーだろ！モノクマが電気ナマズとかフグとか入れてるだろうしな！あと雨が降ったら釣りはやめとく。あそこの釣り堀屋根とかねーもんな！」

その2匹は一緒に釣り堀に住めるんだろうか…

「うはー、期待してるで、お茶会！僕はレモンティーが好きやな！」

とりあえず、お茶会と釣りタイムの約束を皆でしながら解散した。

こうして、なんでもない時間は過ぎて行く。

わたし、いや、わたし含めた恐らく全ての人間が、これからも『なんでもない』ことを願いながら…。

ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter 2「廻り空  
転スル黙禱ノ薔薇」 9日目

9日目の朝。窓の外は曇り空。朝食はスープにサラダ、コーヒーにオムレツの定食だ。

わたしは…サラダを真つ先に食べる梅田くん、相変わらず行儀のいい絹川くん、オムレツを食べながら文庫本を読む紅葉さんたちと同じテーブルに座っている。

そうしているうちに食べ終わると、二階堂さんがわたしたちの席に寄ってきた。

「鈴原たちー、今話してもいいか？」

「いいけど…どうしたんだ？」

「藍葉とアタシ、ちよつと用事があるんで遅くなるかもしれない。まあ、出来るだけ早めに来るよ」

「そっか。お茶会の準備、遅くなる？」

「未隅と雨崎に先に話したら『二人で飲食物の用意しとくね』って言ったんだ。だから紅茶とか菓子とかはあいつらに任せて、アタシは食事が終わったら喫茶店の掃除しようと思ってる」

「手伝わなくていい？」

「大丈夫だって。あそこなら2時間ほどでマジキレイにできると思う！じゃあ、12時喫茶店に集合な！」

「二階堂さんはその場を立ち去って行った。」

「…一体、なんの用事だろうか？」

「大丈夫だよ。何かびっくりするようなものを用意してたりして。こういうの…なんだっけ？」

「サプライズだね。でも、藍葉さんがそう言うのを用意するとは思わないな…」

心配するわたしと絹川くんを横目に、紅葉さんは聞いていないのか食器を片付けている。

◆ レストランから立ち去る。今は8時半。まだ時間はある。どこか散策しようかな。

#### 【自由行動5】

レストランで退屈そうにしながら、コーラとスナック菓子を口にしながら、購買部から持ってきたゲーム機で遊ぶ檀くん。器用だ。

「あ、あのさ…一緒に何か話さない？」

「何を？」

「…こんな檀くんと…一緒に過ごせるかな？」

「…ゲームの邪魔すんなよ」

「…わかったよ」

檀くんがゲームをしているのを、じつと眺めた。

檀くんと多少は仲良くなったかな…？

『超高校級の提督』だから、海のものが好きかなと思いついて『サンゴ石』をプレゼントした。

「…へー。なかなかいいもの持つてるじゃん。部屋に置いてこうかな」

一応は喜んで、くれたかな…？

「…もぐもぐ」

檀くんは、『ヤングチップス』とパッケージに書かれたスナック菓子を一人で食べている。

「…欲しいの？」

それを眺めてたら、檀くんがチップスを一枚わたしに渡してきた。

「!?あ、ありがとう…」

「一枚だけだよ。これ、お土産屋に一袋しかなかったんだし」

スナック菓子を口に入れる。嘔むごとに芋とコンソメの味が広がる…。

「そういう檀くん、見かけたときはいつもスナック菓子を食べてるけど健康に悪くないのかな…？」

「あのさ、スナック菓子沢山食べて太りそうとか体を壊すとか…思ったことはない？」

「俺、あんま太ったことないんだよね。すごく痩せたこともないけど」

『『超高校級の提督』って、軍人みたいなもんでしょ？体は鍛えたりしてないのか？』

「たまーに筋トレする。月に1ヶ月、やるかやらないかかな」

…た、たまにしか鍛えないのか…彼が『超高校級の提督』と言われるのも、いわゆる天才肌ってやつのおかげなのかな…

「…檀くんは、何か努力したこととかないのか？」

「生まれてこのかたそんなのしたことはない。正直やればなんでもできたし、言えばお袋がなんでも買ってくれた。」

駆逐艦の操縦もゲームで似たようなのやってたからできたんだよね。

正直我慢なんてのも嫌なのに、親父がいつも我慢しろだの言ってくるし…そのせいなのかアウリンコへ留学させられたんだけど。

ま、金髪美女いるし飯は美味しいで結果オーライだったんだけどねー。ツバ吉さ、努力や忍耐なんて正直アホらしいと思わない？」

その時わたしは、檀くんに何かを感じたのか…

「あのさ、世の中には努力をやっても報われない人間や、努力すらできない人間が沢山いる。

努力ができる環境ってすごく大切なんだ。それが本気でできれば、達成感が得られるのも事実だ。

檀くんは、本気で何かをやったことないのか？」

あ、思わず口が開いてしまった。

場に沈黙が流れる。檀くんは心底嫌そうな顔でわたしを見つめる。

「…ツバ吉も親父と似たような説教するんだな。

努力も過程が間違ってたら水の泡になることあるし、達成感なんてのは成功すれば大體得られるもんだよ。じゃ」

檀くんは飲食物を持って、どこかへと消えていった…。

…もつと優しくすべきだったかな。

檀くんの考えが、少しわかった気がする…

『天才肌で努力、我慢といったものが嫌い。また、達成感の過程は彼にとって不要。説教はかなりの地雷。』

一人でじつとしていているのもなんだか退屈なので、とりあえず部屋に戻ることにした。

◆ 部屋の時計の時刻は午前11時を指している。窓を見ると、大量の雨が降り始めた。

お茶会前に雨、止むといいんだけどな。傘持ってないし。

とりあえず、持ち物の整理でもしておこう。

まず、クローゼットを開ける。私服であるシャツやボトムズ、コートの他に洋服用のブラシが吊り下がっている。

コートでもブラッシングしとこう。

何枚かのコートの埃を払っていくうちに、最後の一着になった。

…しかしこのブラシ、埃が取りやすいな。二階堂さんは使うんだろうか。

そう思ってるうちに、コートのポケットに何かが入ってることに気付く。

ポケットを漁るとチョコレート…ではなく、茶色いプラスチックで出来たような鍵が出てきた。

一体、誰が入れたんだ…？

「鈴原さん、それは『愛の鍵・バレンタインver』ってヤツなんだよ！」

「誰だ!？」

声の方向を向く。白と黒の小さなぬいぐるみ…モノクマだ。どこから入ってきたん



だ。

「な、何をしに来たんだ!? まさかこれも動機つてやつじゃ…」

「違う違うよ! これは夢の中で『チヨコレートハウス』に入れる不思議な鍵なんだ。

本当はメダルとか集めて手に入れる必要があるんだけど、小説媒体で必死にメダルを集める様子を読者に見せてもつまらないでしょ?

まあそのうちあの人の妄想やこの人の色んな妄想が見られるようになるからね!  
ハア:ハア:ファイト!」

モノクマは興奮した様子でクローゼットの中へと入っていった。

「待て!モノクマ!」

クローゼットを覗く。何も無い。どこかの物語みたいに異世界へと旅立っていったのか?

異世界へ追放されればいいのにと思いつつ、手のひらの上の『愛の鍵・バレンタインver』を眺める。

ゴミ箱に捨てるのも億劫なので、机の引き出しにしまっておこう。

そうしているうちに午前11時半になった。

ゲリラ豪雨だったのか雨は止み、雲から少しだけ太陽が覗いている。よかった。遅れないうちに喫茶店へ向かおう。

◆ レンガ造の喫茶店・アザミに辿り着く。

ドアを開けるとレコードからドビュッシーの作曲したクラシック曲『月の光』が流れる。目の前のテーブルには、10人分はあるであろう山盛りのスコーンと人数分の皿とティーカップ、陶器のポットが置かれている。

椅子に座っているのは雨崎さんと未隅くん、絹川くんと梅田くんだ。

「二階堂さんと藍葉さんは遅れるって言ってたけど……これなら待てるな。ところでスコーン、結構多いんじゃない？」

「うふふー、ミークんさ、誕生日の時はホールケーキを一人で食べるんだよ」

「特注のパイナップルケーキを食べるんだ！ ラグビーといえばパイナップルのトロフィーだからね！」

ちなみにスコーンの味はプレーン、パイナップル、紅茶、ベリー、抹茶だ。好きなだけ食べていいぞ！」

そうしているうちに誰かが喫茶店のドアを開けてきた。灰寺くん。釣り用具が入ってそうな大きなバッグをからっている。

「……これ、全部食べていいんか……!?!」

目をキラキラさせ、スコーンを前に固まる。

「今は一個だけならいいんじゃないかな。たくさん食べていいのはお茶会が始まってからだよ。でも、みんなの分も残してあげてね」

「今日はロイヤルミルクティーとハーブティーを淹れてるよ。お砂糖やミルクも沢山あるからね」

「オレがレシピを教えたんだよなー！」

絹川くと雨崎さんが笑いながら言う。灰寺くんも、もちろん嬉しそうだ。

「あわー！一個だけならいいんじゃないやなーじゃ、いただきますー！……もぐ……うん……う……」

う、うまか……近所のケーキ屋のショートケーキもビックリやー！お菓子の天下一武闘会で優勝できなあー！雨崎！未隅兄ちゃん！」

灰寺くんは満面の笑みでスコーンを味わっている。

「これ、2時間半かけて作ったんだよね。大量に作るの大変だったけど楽しかったよ！」

「はっはっは！梨々の作るスイーツは心が籠ってるからな！レシピ通り作るのも最高だ！」

未隅くんのそれ、褒め言葉になってるのかな……？

12時になった。お茶会がスタート……するはずなのに、二階堂さんと藍葉さんは相変わらず来ない。

「遅くなるって言うってたけど、流石に不安になつてくるな…」

わたしたちは椅子に座りながら二人を待っている。

「確かになあ…二人とも時間はきっちり守るタイプだと思っけん心配やな…紅茶、飲んでいいんかな？」

「いいけど、二人が来るまで待つておいたほうがいいよ」

「スコーンは冷めても美味しいお菓子だけど、紅茶は冷めると濁るって本にあつたんだよな…」

…5分経った。流石に来るだろうと思つていたが、音沙汰がない。一体何をしているんだろう。

「…あの子たち、探してきていいかな？」

雨崎さんは青ざめた表情で呟くと、席から立ち上がる。

「ミーくん、一緒に行こう！」

「わかった梨々。他のみんなはこの建物を搜索してくれ」

雨崎さんと未隅くんはドアをあ開け、外へと出て行く。

辺りに沈黙が流れる。

「お、灰寺はオレと二階を探そう！スコーンは後だー！」

梅田くんは焦ったような表情で立ち上がると、スコーンをこっそり食べていた灰寺くんの手を引き二階へと上る。

場に残されたのは、わたしと絹川くんだけだ。絹川くんは素早くキッチンへと向かう。

「絹川くん！」

わたしも後を追うようにキッチンへと向かう。中を見てみると、先ほど未隅くと雨崎さんが使っていたキッチン用具などが置いてあるだけだった。

絹川くんは冷蔵庫や棚を開けていく。

「…何もない……！」

わたしはキッチンから出て、喫茶店のカウンターや棚を調べる。食器が置いてあるだけでおかしな点は何もなかった。

「うわあああああつ！やめてくれええええつ！」

二階から悲鳴が上る。梅田くんの声だ。その直後に絹川くんがキッチンから出てきた。

「…二階へ上がろう！」

◆ わたしたちは階段を登り、写真館へと向かった。

「…助けてくれえ…」

写真館では、梅田くんがうずくまっていた。

「梅田くん、どうしたの!? まさか…」

「絹川…鈴原…オレは大丈夫だ…それより…棒を持った男が…更衣室に…!」

「大丈夫か!? 灰寺くんは…」

「すぐ…更衣室へ向かっていったんだ…」

わたしは更衣室へと向かう。灰寺くんがハンガーに掛けてあるドレスや正装を調べている。

「灰寺くん! 棒を持った男は見かけなかったか!?!」

「…え? 鈴原姉ちゃん、何言ってるんや? 僕以外の人は見かけとらんけど…」

わたしは呆然と立ち尽くす。その瞬間、絹川くんの声がした。

「…水が溢れてきたよ!」

何事かと思い、わたしと灰寺くんは更衣室から出る。

現像室へのドアは開かれていて、なぜかそこから写真館に水が流れ込んでいた。

絹川くんは後ずさりしながら、絶望したような顔でしやがみ込む。

「…みんな、気をつけて…!」

灰寺くんは真つ先に現像室へと入っていく。それについていくかのように、わたしも

ドアを覗き込む……

「……あ……………」

一瞬、時間が止まる。

チャイムが鳴った直後に……モノクマの濁声が響いた。

「死体が発見されました！一定の自由時間の後、学級裁判を開きます！」

……その場から、動けるはずがなかった。

現像室は窓が開かれており、天井には明かりがついている。

床は水浸しになっている。薬剤を洗う流すための蛇口から、水が出ているからだ。水が満杯になった流し台には、警棒のようなものが刺さっている。

流し台の中に……彼女は入れられていた。

幻であってほしいという願いも叶わず。

『超高校級の科学者』藍葉美郷さんが、眠るように死んでいた。



# ダンガンロンパ・フラワーズ Chapter 2 「廻り空 転スル黙禱ノ薔薇」 非日常編―捜査

「わーはモノクマと違って人の命を守るマスコット！捜査中に生きてる生徒が死んでしまったら元も子もないから助けるのだ！」

…現象室の窓から現れたカラフラの声が聞こえる。

「まず蛇口を閉めるのだ。で、次は水をこれで吸って…」

カラフラがどこからか掃除機のようなものを取り出し、床の水を吸う。

現象室のドアのすぐ近くでは、過呼吸状態の絹川くんがうずくまっている。

…その隣では、男がわたしに向けてナイフを向けている。

やめろ。

男は突進し、わたしのお腹にナイフを突き立てようとする。

やめろ…

体が勝手に動いたのか、男の攻撃を避け現象室から逃げ出す。

違う…

これは……………じゃない！

「…鈴原姉ちゃん！」

灰寺くんの声が聞こえる。彼は無事だろうか。

「灰寺くん…逃げるんだ…………が…！」

「鈴原姉ちゃん！ここには…………はおらん！」

灰寺くんがわたしに向かって叫んだと思うと、部屋を見渡し小さなゴミ箱を見つける。窓を開け、ゴミ箱の中身を捨てる。

「鈴原姉ちゃん！絹川！梅田兄ちゃん！大丈夫か!？」気がつけば、男は消えていた。灰寺くんが声をかける。

「さっきの男…一体何だったんだ…?」屈みこんでいた梅田くんは顔を上げ、そつと立ち上がる。

「おそらく…幻覚じゃないかな。ほら、温室に幻覚作用のあるバラがあったじゃん…」  
「それよりも…藍葉さんが…」

大分回復してきた絹川くんは、ドアが開かれた現像室の入り口を指差す。

死体発見アナウンス。流し台の中の白衣の少女。

これが意味するのは…

藍葉美郷の死。起こって欲しくなかった第二の殺人事件が起きたこと。わたしたちの中の誰かが、彼女を殺したということ。

「いやー、ついに2回目のコロシアイが始まってしまったのですね!」

…モノクマがどこからか現れる。

「いやー、まさか藍葉さんがねえ…着衣したまま濡れ濡れで棒を突っ込まれて…ハア…ハア…」

モノクマは両手に胸を当てて興奮している。まるで、藍葉さんの死を嘲笑するかのよう…。

「モノクマ、何を言ってるんだよ!お前のせいでまた殺人が起きたのに…」

「あのさ、恨むなら殺人を犯したクロか、殺人を止められなかった自分か、神様にしてよね。それより今大切なのはわかってるよね?

…ってことで、捜査の時のお約束アイテム!『カラフラファイル2』を電子生徒手帳に転送します!

ボクとカラフラは裁判の準備をしているから、ゆっくり捜査していつてね!うぷぷ…」  
モノクマはスキップしながらどこかへと去っていく。

「ふざけるな…!」

「落ち着いて。モノクマに怒るのはいいけど、それは後にしよう」絹川くんが話しかける。

それでも、仲間が死んでしまったショックとモノクマへの怒りが抑えられない…

ふと、オルゴールペンダントを握りしめる。少しでも落ち着いたような気がする…。

わたしはドアに近づき、もう一度床の乾いた現像室の中を見る。流し台の中のぐつたりした藍葉さんの死体が目に映った。

彼女の命の灯火が消えたことを、何度も突きつけられる。

またあの学級裁判に、参加しなければならぬのか…。

しかし、犯人を指摘できなければ犯人以外の全員が残酷に処刑されてしまう。最悪の事態を起こさないためには、裁判に挑むしかないのだ。

「藍葉さん、悲しげな顔だね…」

隣にいた絹川くんが手を合わせる。わたしも、ゆつくりと目を閉じ黙禱する。

「そうやな…藍葉姉ちゃんも無念やったんやろうな…」

「クロがこの場にいたら許せねーな…」

わたしとこの場にいた一同が、悲しげに動かない藍葉さんを見つめる。

藍葉さんのために、そして生きるために捜査しなければならない。

生きなければ、何もわからないのだから…。

## 【捜査開始】

捜査を始めようとしたその時、階段を登る複数の足音が聞こえた。

写真館の入り口には：黒木さん、湖林くん、一ノ瀬さん、蒲生くん、紅葉さんが集まっていた。

「しかしまたコロシアイが起こったとはね…さて、どうやって殺されたのかしら」

黒木さんは冷静に電子生徒手帳を取り出し、カラフラファイルを開く。

わたしもコートのポケットの中の電子生徒手帳を取り出し、メニューの『カラフラファイル』をタップすると、紅葉さんの死体の写真と、死亡情報が写る。

『被害者となったのは紅葉美郷。』

死因は感電によるショック死。

死体発見現場となったのは写真館内の現像室。

前頭部に殴打の痕が見られる。』

…あれ？

イヴァンくんの時の事件では書かれなかった死因が書かれている代わりに、死亡指定時刻が書かれていない…

時間が何か関係してるんだらうか？

「皆さん…一つ質問があるのですが…」

蒲生くんが手を挙げる。

「蒲生くん、どうしたんだ？もしかして時間について…」

「電子生徒手帳とは、持ち歩くものなのでしょうか」

「…えっ？」

「手帳つて持ち歩くためにコンパクトサイズなんですよ？生徒手帳ならなおさらだよ」  
紅葉さんは呆れた様子だ。

「僕の持っている『天の書』とは違い、電気製品なので…部屋に置いておくものかと思っ  
ていました」

「貴様はアホか？ズボンのポケットと頭におがくずが入ってるらしいな」

湖林くんは呆れた様子でため息をつく。

「すいません…裁判が始まる前に、少し取りに行こうと思います」蒲生くんは階段を降り  
ていった。

「そうね…単独行動は危険だから、紅葉さんが蒲生を見張っててくれなしかしら。あと、  
檀を探してきて」

「…私が？」黒木さんの突然の提案に紅葉さんは驚く。

「クロはどこにいるのか不明だし、一応ね？」

「仕方ない。あの二人、何やらかすかわからないからね……」紅葉さんはその場から立ち去っていく。

蒲生くんと紅葉さん、無事でいられるといいんだけど。

先ほど去っていった2人を除いた皆が、現像室に入っていく。

「藍葉は死体も媚び媚びなのですわね。濡れてる上に棒まで刺して……しかも通電だなんて……」

「一ノ瀬さん……この場に二階堂さんがいなくてよかつたね。箒で殴られてるところだったよ」死体を見つめる一ノ瀬さんを宥める。

それにしても、『感電によるショック死』って……もしかして、この棒のようなもので感電させたんだらうか？

【コトダマ：カラフラファイル2】

『被害者となったのは藍葉美郷。』

死因は感電によるショック死。

死体発見現場となったのは写真館内の現像室。

前頭部に殴打の痕が見られる。』

死体の第一発見者以外の皆が、証拠集めのために現像室から去っていった後。

「鈴原、絹川、ちよつといいかー？」

「…梅田くん？」

「一体どうしたの？」

「2人とも死体、調べるだろ？昔読んだ本に人が死んだらどうなるかがわかるコツ…みたいなのがあったんだよな」

「いったいどんなのなんだ？」

「人の体は血の巡りがなくなる…つまり死ぬと体の下になつて場所の表面に『死斑』つて痣のようなやつが出てくる。例えば仰向けの死体は背中に、首吊り死体は足あたりにとかになー。

あと、これで死亡推定時刻がわかることが多い。死斑は死後10分から20分ほどであらわれて2、3時間で大きくなるんだよな」

「こんな形で知りたくなかったけど、少し勉強になるな…ありがとう」

梅田くん、そんなことまで知ってるのか…『超高校級の図書委員』だからこそそういう知識も持つてるのかな。

「あと、絹川に一つ言いたいのは…『ピンチの時だけじゃなくて、自分の大切な人はいつでも守る』ってことだな」

「…守る？」

「そうすれば大切な人には信頼されやすくなるし、いざという時にスムーズに助けられ



る…爺ちゃんが言つてたな—」

「梅田くんありがとう。その言葉、大切にするよ」

自分の大切な人はいつでも守る。

確かに都合のいい時にだけ助けるのと、いつでも大切にするのは違うだろうな、と思つた。

でも、なんで絹川くんにだけ告げたんだろう…？

【コトダマ…死斑】

人間は死ぬと体の下になっている場所の表面に死斑が現れる。

死斑は死後10分から20分に表れ、2、3時間で大きくなる。

現像室を見渡す。遮光のために黒く塗られた引き違い窓は…大きく開かれている。

窓の下を見ると、細いコの字型のステンレス製の棒が落ちてあつた。

この形…タオル掛けかな？流し台の近くの壁を見ると、二つの穴が空いている。

犯人はこれを壁から外して、藍葉さんの頭を殴打したんだろうか？でも、血液は付着していない。

「つてことで、この現像室の監視はオレと灰寺がやるんだな—」

「わかつたで！まずは藍葉姉ちゃんが苦しくないようにあの変な棒を抜いて…」

「それはボクがやるね」

「…はい」

絹川くんは黒い棒を流し台から抜き、そのONになっているスイッチを切る。

「…何も起こらないなあ」

「壊れてるんやないかな？とところでこれ、一体何だろう…？」

「電気警棒かもなー。これは多分先に電流がバチバチつてなるタイプのやつだ」

普段は護身用で使われそうだけど、もしかして、これが凶器なのかな…？」

流し台の排水溝には蓋がされているが、カラフラが水を吸ったのか水は貯められていない。

【コトダマ：電気警棒】

流し台に差し込んであったもの。

死体発見時にはスイッチがONになっていた。

【コトダマ：現像室の窓】

遮光のために黒く塗りつぶされた引き違い窓。

死体発見時には大きく開かれていた。

【コトダマ：タオル掛け】

現像室の窓の下に落ちてあったステンレス製のタオル掛け。

血液のようなものは付着していない。

「ごめんなさい、藍葉さん…少し辛いだろうけど…」

絹川くんが頭付近を触り、その後は手と足をなるべく服が脱げないように見る。

「…頭が腫れているし、両手首に細いもので縛られたような痕があるね」

そういえばカラフラファイルにも『前頭部に殴打の痕が見られる』って書いてあったな…。

「鈴原さん、一つお願いがあるんだ…」

「どうしたんだ？」

「…藍葉さんを、少し脱がせて欲しいんだ」

「え」

「頭以外にも傷があるかもしれないし、梅田くんが言ってた死斑…もあるかもしれないし…ボクが脱がせたら、藍葉さんも辛いだろうから…お願いしていいかな？」

「だったらいいよ。男子のみんな…後ろを向いててくれなかな？」

「鈴原が言うんなら仕方ないんだな…」

「よっしゃ！後ろを向くだけでいいんやな！」

…こうして、わたしが藍葉さんの検死の続きをすることになった。

セーラー服を捲る。布は水で濡れているせいか重く冷たい。

お腹あたりに細いもので縛られたような痕がある。

後は：ポツポツとした赤紫色の斑点：おそらく死斑が身体中に現れているだけだ。

白衣のポケットも探る。片方には何もなく、もう片方には四つ折りにされた小さなメモが入っていた。

「終わったよー」わたしは藍葉さんの服を素早く整え、みんなに呼びかける。

「梅田くん、藍葉さんの身体中に、ポツポツした赤紫の斑点があつただけど：：どうやつたら出るのかな？」

「体の下らへん以外にそういった死斑があるなら、それは死体を運んだ証拠なんだなー」

死体が運ばれた？ ってことは：：殺人現場はもしかして：

【コトダマ：死体の縛られた痕】

死体の両手首と腹部に、細いもので縛られたような痕があつた。

【コトダマアツプデート：死斑】

人間は死ぬと体の下になっている場所の表面に死斑が現れる。

死斑は死後10分から20分に表れ、2、3時間で大きくなる。

藍葉の死体にはポツポツとした死斑が身体中に表れていた。

ポケットの中に入ってた紙を開く。『持ち物リスト』と書かれているが、ほとんど滲んでいない。耐水ペーパーなのかな？

リストの中身は…どんなのだろうかとうと見てみる。

- ・ライター
- ・ビーカー
- ・フラスコ
- ・ガラス棒
- ・塩酸
- ・電気警棒
- ・3号テグス
- ・50号テグス
- ・メモ帳
- ・文房具
- ・レシピ本
- ・折りたたみ傘
- ・フリーザーバック
- ・ライト

…こんなに入るのか。それにしても、藍葉さんの死体はいつも付けているカバンを身につけていない。一体どこに？

「あの、テグスの3号とか50号って…」

テグスこそ知っているが、釣りをした知識も記憶もないわたしは戸惑う。

「僕に任せてな。テグスってのは号数が大きいほど太くて、重いものを釣り上げられるんやな。」

50号ほどになるとカジキやマグロを釣るのに使われるんや。バス釣りとかで使われるのは3号やな」

「確かカジキやマグロって大きい魚だろ？どれくらいの重さなんだ？」

「例えば…クロカジキなんかは軽くて90kgくらいやな」

「解説ありがとう、灰寺くん」

「えへへー！なんかマグロのステーキが食べたくなって…って言うてる場合やないな」  
灰寺くんは我に返ったのか真顔になる。

現像室での捜査も終わったし、写真館へ向かおう。

【コトダマ：持ち物リスト】

藍葉の白衣のポケットに入っていた持ち物リスト。

リストに書かれていた持ち物は以下。

- ・ライター
  - ・ピーカー
  - ・フラスコ
  - ・ガラス棒
  - ・塩酸
  - ・電気警棒
  - ・3号テグス
  - ・50号テグス
  - ・メモ帳
  - ・文房具
  - ・レシピ本
  - ・折りたたみ傘
  - ・フリーザーバック
  - ・ライト
- 〔コトダマ：テグス〕

テグスは号数が大きいほど太く、重いものを釣り上げられる。

50号のものは90gもあるクロマグロを釣ることができ、3号のものはバス釣りに使われる。

〔コトダマ：消えた藍葉のカバン〕

藍葉がいつも身につけているカバンだが、死体は身につけていなかった。



写真館のゴミ箱を覗く。先ほど捨てられたのか、中身は空っぽだ。

「そーいや灰寺くんは…どうして中身を窓から捨てたんだ？」

「中に一本バラが入ってたんや、名前は忘れたけど。確か…」

「…ケルブレムだったね」

「梅田兄ちゃんたちがうずくまっているのを見て、温室に寄ってきた時に危険だ！って書かれてあったのを思い出したんや。もしかしたら、あのケルなんとかかもしれない」

ケルブレム。わたしたちに危険な幻覚を見せるバラ。あれを室内で使われては大変なことになる。ガラスケースの中に入れてあるのも当然だろう…。

と思っていると、見たくもない白黒の生き物と台車に乗せられた花がやってきた。

「おはろんぱー！つて今日はこんにんぱだったのだ」

「挨拶はどうでもいいだろうカラフラ！それよりオマエラにケルブレムについて悲しいお知らせがあります！」

「…おい、早めに済ませてくれ」

「この建物の近くに置いてあったケルブレムは…神が見えたら非常に危険なのでカラフラが火炎魔法で燃やしておいたんだよ。」

例えばファイ…ガーツ！つてね！」

「説明は以上なのだ。アナタラが死んでしまつたらわーのコスプレを見てくれる人がいなくなるから絶対に死なないでね！」

「じゃーバイバイクマー！」

一匹と一輪はどこかへと消えていった。藍葉さんは、魔法は信じないんだろうな…。

しかし、証拠品を燃やすだなんて。都合の悪いメモでもあったのか…？

写真館のケルブレム。閉じてあった現像室のドア。

現像室の窓さえ開いていれば密室になった筈。なぜこんなことを…？



【コトダマ：ケルブレム】

摘まれてしまうと数分ほどで周囲の人間の脳に幻覚作用が引き起こされるバラの一種。

なぜか写真館のゴミ箱に入ってしまった。その後、カラフラによって処分される。

◆ 更衣室にも入ってみたが、衣装が飾られているだけで変わった点は何もなかった。

窓も閉ざされている。梅田くんの見た男はやはり、幻覚だったのだ…。

◆ 後は…一階の喫茶店も見よう。

喫茶店。灰寺くんの私物である釣り道具が入っているバッグと、彼が少しだけ食べたおかげで減っているスコーンが置いてある。

紅茶も捜査のせいで冷めてしまい、ゆっくりと飲めないのが悲しい。

「…スコーン、勿体無いね」

絹川くんが山盛りのスコーンを見つめる。

捜査が終わったらまた食べられる…なんて無神経なことは言えない。だって、この下には藍葉さんの死体があるから。

キッチンも見てみたが、棚や冷蔵庫を見ても先ほど見たのと同じ様子だった。

◆ もうこの建物には用はないだろうから、行方不明の二階堂さんを探しに行こう。

もはや動物がいないのがお馴染みになってきた牧場。

牧場は「感電注意」と看板に書かれた電気柵で囲まれている。電気柵は雨が降ったせいか濡れており、触れただけで感電しそうだ。

納屋に向かってみると、驚きの光景が広がっていた。

「…誰だ？」

「わ、わたしだよ！つて…未隅くん？」

「鈴原さんか。怪しい人間じゃなくて良かったよ。そういえば二階堂さんが、ここで倒れてたんだ」

奥を見てみると…木製の椅子に座っている二階堂さんと、彼女を介抱する雨崎さんがいた。

二階堂さんは頭に包帯を巻いている。犯人にでも襲われたのか…？

「…ごめん鈴原。せっかくのお茶会、主催なのに台無しにしちまったみたいだな」

彼女は申し訳なさそうな顔をしながら言う。

「別にいいよ。ところで頭の包帯、どうしたんだ？」

「二階堂ちゃん、ここで倒れてたの。必死に呼びかけてたら起きたんだよ」

雨崎さんはケースに入れられた包帯を持っている。包帯は彼女のもののか。

「…実は10時45分くらいまで喫茶店と2階の写真館を掃除した後、11時に藍葉とここで出会って、それから色々話してたんだ」

「待ち合わせ…:会話の内容は思い出せるかな?」

「うーん…:アタシ、記憶力ねえからよく思い出せねえけど…:確か釣りとか大雨とか以外には…:『人に会いたい』みたいなこと言ってたような気がする」

人に会いたいって…:一体誰に…:?

「んで、藍葉と色々駄弁っている途中にさ、頭にすげえ衝撃が走って、それから目の前が真っ暗になったんだよな…:」

殴ってきたやつのもわからないなんて、『超高校級の美化委員』失格だよなあ。後は雨崎の言う通りだ」

なるほど。11時くらいに気絶させられて、1時間くらい気絶してたのか…。でも、襲った人物がわからないのと美化委員は関係ないと思う。

「後…:あたしとミーくんは9時半まで温室でハーブを摘んで…:その後喫茶店で9時半から11時半までスコーンを作ってたよ。後は、ハーブティーのブレンドと喫茶店の飾り付けかな」

「僕と梨々が証明しよう!喫茶店とそのキッチンが証拠だ!」

11時半までアリバイがあるのか。それから30分後にも

「もう一つ聞くけど……二階堂さんは、喫茶店で誰か入ってくるのを見なかったか？」

「未隅と雨崎以外は誰も入ってきてきてねえな。あいつらずっとキツチンに籠ってたし……」

これで、ここにいる人物のアリバイは証明できたみたいだ。

入り口近くの用具入れも見てみる。さまざま道具が入っている中、入っている木製のスコップが目につく。

整頓されている他の道具と比べて乱雑に置かれたスコップ。

もしかして、犯人はこれで藍葉さんや二階堂さんを襲撃したのか……？

【コトダマ：電気柵】

牧場を囲む柵。『感電注意』と書かれた看板が置いてある。

雨で濡れており、触れただけで感電しそうだ。

【コトダマ：二階堂の証言】

二階堂は10時45分まで喫茶店と写真館を掃除していた。なお、その間未隅と雨崎以外の人物は建物に入ってきていない。

11時に納屋で藍葉と出会い、会話している途中で襲撃され、気絶。

1時間後に未隅と雨崎に起こされた。

【コトダマ：未隅と雨崎の証言】

未隅と雨崎は9時半まで温室でハーブを摘み、

9時半から11時半まで喫茶店のキッチンでスコーンとハーブティーを作っていた。

【コトダマ：木製のスコップ】

牧場の納屋の用具入れに入っていた木製のスコップ。

用具入れの中に乱雑に置かれていた。



温室に入る。白い噴水が中央にあるが、相変わらず水は流れている。

ロッカーの隣にある赤く美しいバラ、ケルブレムが入っているケース。その中身は：

「…1本しかない…？」

2本のケルブレムが消えていた。

そのうち1本の茎はハサミで切られたのか整った断面をしており、もう1本は乱雑に積まれたのかぐにやりとした断面だ。

「そういえば、灰寺くんは幻覚を見せたのは1本だけって言ってたよね…」絹川くんが考察する。

「1本だけでも十分怖い幻覚が見れたんだけどね。それにしても、もう1本はどこ行っただんだろう…？」

【コトダマアップデート：ケルブレム】

摘まれてしまうと数分ほどで周囲の人間の脳に幻覚作用が引き起こされるバラの一種。

なぜか写真館のゴミ箱に入っていた。その後、カラフラによって処分される。

温室のケースの中に入っていたのは3本だけだったが、そのうち2本が行方不明に。



温室のもう一つの扉から外へ出る。レンガの井戸に近寄ろうとすると：

「うわ!？」

…井戸の付近はゲリラ豪雨のせいか、土がぬかるんでいるようだ。足跡がついてしまった：

と言うか、すでにたくさん足跡がある。

「だから気をつけろと…」声の方向を向くと、湖林くんだった。隣には一ノ瀬さんもある。

「あら？鈴原はあの雨が降っている途中部屋で美少年もののビデオでも見ていましたの？頭の中が痴態だらけで足元に気が付きませんでしたのね」

「違うよ。コートをブラッシングしてた」

「絹川様に会うために美少年でニタニタしながらブラッシング!? ふぎけないでくれます!?!」

「だから違う…」

一ノ瀬さんは置いといて。井戸付近にはチェーンソーと1mほどの大きさの看板が転がっており、井戸には木製のスキが立てかけてある。

「そのチェーンソーはコードレス式じゃ。なぜかスキと一緒にそこらへんに置いてあつたんじゃが…感電したら怖いんで触れとうない」

チェーンソーのスイッチは…よく見たら『ON』になつている。だが、動く様子はない。壊れているんだらうか?

湖林くんの言う通り、触れない方が良さそうだ。

木製のスキも外に放置されていたのか、濡れた状態で置いてある。牧場の納屋のスコップみたいに、ロツカーに置いてあるのが普通だよな…?

アルミ製の看板には可愛らしい緑の文字で『楽しいガーデニング』と書かれてある。「この看板も水たまりができてきているけど…なんでここに転がってるんだらう?」

とてもここに置いておくとは思えない看板だけど…?

井戸の中を覗く。梯子が付いてある以外は何も見えない。入るのは危険そうだからやめておこう…。

「そういえば、黒木がライトを持って中に入って行きましたわ。そのあと妖怪にでもなつて呪いのビデオに出演するんですわね？」

いや、あの女の場合はあっち系のビデオがお似合いですわ」

一ノ瀬さんが悪態をつく。

「そういえば黒木さんと檀くん、どうしているんだろう…？」

2人を心配する絹川くん。わたしも正直心配である。

【コトダマ：壊れたチェーンソー】

温室近くの井戸付近に落ちていたチェーンソー。

雨のせいか濡れており、スイッチが『ON』になっているのに動いていない。

【コトダマ：木製のスキ】

温室近くの井戸に立てかけてあったスキ。

雨のせいか濡れている。

【コトダマ：ぬかるんだ地面】

温室近くの井戸付近の地面はぬかるんでおり、歩くと足跡がつく。

【コトダマ：看板】

温室近くの井戸付近に落ちていた看板。



『楽しいガーデニング』と緑の可愛らしい文字で書かれてある。

【コトダマ：井戸の中】

井戸の中には梯子がついているが、中は真つ暗で何も見えない。

◆

井戸から離れ、釣り堀へと向かう。本当なら、ここで釣りをする予定だったんだけど……。

釣り堀を調べているのは部屋から戻ってきたであろう蒲生さんと紅葉さん、そして：黒木さんだ。

「黒木さん？確か一ノ瀬さんが言ってたよね、井戸の中に入っていったって……」

「そうだけど。それがどうかしたの？」

「鈴原嬢、実は」蒲生くんが何かを言おうとするが、黒木さんが口を手で閉ざす。

「ここから先は言わないでね。裁判、つまらなくなるし。紅葉さんもよ？」

「私も巻き込むんだね。映画監督だけにネタバレは禁句って奴？」

三人の他愛ない会話を聞いているうちに、絹川くんが釣り堀の対岸へと向かっていった。

そして、対岸にある物体……マンホールの蓋を少しだけ持ち上げる。

「鈴原さん……このマンホール、蓋が開くよ！」

絹川くんが大きな声を出す。黒木さんは、蒲生くんの口から手を離し固まる。

「…」

黒木さんは無言だ。いわゆる小さなネタバレをされたのが悔しかったのだろうか？

【コトダマ：マンホール】

釣り堀の近くにあつたマンホール。

蓋を開けることができる。

対岸にいる絹川くんが、マンホールの蓋をさらに持ち上げようとする。

その瞬間…。

『ピーンポーンポーンポーン…』

「にゃー。最近というか昔からネコが流行ってるんだってね。なんでだよ。クマは大統領もびつくりの可愛さなのにさ」

「モノクマ、それはネコの方が小さいからなのだ。小さくて愛くるしいモノクマやわーも愛されモテカワマススコットになれるのだ」

「ところで、なんでこのヒストリエランドにはボクのグッズがないんだろーね。つてことで、第一エリアの時計塔前に集まってきてくださーい！」

モノクマとカラフラの放送が流れた。

「どうしよう、まだマンホールの中に入っていないのに…！」

絹川くんは立ち上がり、諦めたような表情でこちらへと向かう。

マンホールの中身を見られなかったのは少し悔しいけれど……処刑を受けるかもしれないから、時計台へ急ごう。

◆ こうして、13人の生徒が時計台の前へと集まった。無論、捜査時に見かけなかった檀くんも含めてだ。

檀くん、一体どこへいたんだろう……？

こうして、時計塔の重く冷たい扉が開かれる。

「さあ！オマエラが大集合したところでいっちょよ裁判場へと向かいますか」

エレベーター内のモノクマとカラフラが呑気に声をかける。

わたしたち13人の生徒たちは、ある者は静かな足取りで、ある者は急ぐようにエレベーターへ乗り込む。

◆ 静かなエレベーターの中、二階堂さんがわたしに話しかける。

「アタシ、藍葉を殺した奴を絶対許せねえよ……こういう方法でしか藍葉の魂が報われねえのなら、せめて頑張つて、考えて、この裁判を生き残らせてえな……」

「……わたしも、生き残りたいよ」

しかしこの裁判を生き残るということは、犯人を見るも無残な『処刑』によって殺すこと。

「残酷なやり方でも、藍葉が望んでいなくても…アタシは、この裁判で勝ちてえんだ」

藍葉さんはわたしの友人だ。だから、わたしも犯人を許すことができないだろう。

でも、わたしたちを殺し合わせている黒幕は…もつと許すことができない。

絶望しない。それが、黒幕へのせめてもの反抗なのだ。

そう考えているうちに、エレベーターの扉が開かれた。



「では、自分の名前が書かれた席に立ってくださいなのだ」

16の陳述台が並べられた裁判場。

バナラさんと藍葉さんの席の遺影には、それぞれ花が飾られている。

「死んだからって仲間はずれにするのは可哀想なのだ！わーが特別に栽培した植物を

飾っているのだ！」

カラフラが得意げに言う。

どこまでも優しいのか優しくないのかわからないマスクットだな…。

『超高校級の科学者』藍葉美郷さん…

弱気だったけれど、いつも慎重派で、皆に優しくかった少女。  
彼女の命を残酷な手段で奪った犯人。

犯人を暴き、処刑しなければ、私たちは生き残ることができない。

絶望を、希望の弾丸で、撃ち抜かなければならない…。

だから、わたしたちは信じ、疑うのだ。

…これは生き抜くか死ぬか、命がけの裁判なのだから。

## Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」非日常編— 学級裁判（前編）

・コトダマ一覽

【カラフラファイル2】

『被害者となったのは藍葉美郷。』

死因は感電によるショック死。

死体発見現場となったのは写真館内の現像室。

前頭部に殴打の痕が見られる。』

【死斑】

人間は死ぬと体の下になっている場所の表面に死斑が現れる。

死斑は死後10分から20分に表れ、2、3時間で大きくなる。

藍葉の死体にはポツポツとした死斑が身体中に表れていた。

【電気警棒】

流し台に差し込んであったもの。

死体発見時にはスイッチがONになっていた。



に使われる。

【消えた藍葉のカバン】

藍葉がいつも身につけているカバンだが、死体は身につけていなかった。

【ケルブレム】

摘まれてしまうと数分ほどで周囲の人間の脳に幻覚作用が引き起こされるバラの一種。

なぜか写真館のゴミ箱に入っていた。その後、カラフラによって処分される。

温室のケースの中に入っていたのは3本だけだったが、そのうち2本が行方不明に。

【電気柵】

牧場を囲む柵。『感電注意』と書かれた看板が置いてある。

雨で濡れており、触れただけで感電しそうだ。

【二階堂の証言】

二階堂は10時45分まで喫茶店と写真館を掃除していた。なお、その間未隅と雨崎以外の人物は建物に入ってきていない。

11時に納屋で藍葉と出会い、会話している途中で襲撃され、気絶。

1時間後に未隅と雨崎に起こされた。

【未隅と雨崎の証言】



未隅と雨崎は9時半まで温室でハーブを摘み、

9時半から11時半まで喫茶店のキッチンでスコーンとハーブティーを作っていた。

【木製のスコップ】

牧場の納屋の用具入れに入っていた木製のスコップ。

用具入れの中に乱雑に置かれていた。

【壊れたチェーンソー】

温室近くの井戸付近に落ちていたチェーンソー。

雨のせいか濡れており、スイッチが『ON』になっているのに動いていない。

【木製のスキ】

温室近くの井戸に立てかけてあったスキ。

雨のせいか濡れている。

【ぬかるんだ地面】

温室近くの井戸付近の地面はぬかるんでおり、歩くと足跡がつく。

【看板】

温室近くの井戸付近に落ちていた看板。

『楽しいガーデニング』と緑の可愛らしい文字で書かれてある。

【井戸の中】

井戸の中には梯子がついているが、中は真つ暗で何も見えない。

【マンホール】

釣り堀の近くにあったマンホール。

蓋を開けることができる。

第二エリアマップ

【学級裁判・開廷！】

「まずは学級裁判の簡単な説明から始めます。学級裁判の結果はオマエラの投票により決定されます。」

学級裁判の結果はオマエラの投票により決定されます。正しいクロを指摘できればクロだけが、もし間違った人物をクロとして投票した場合は、クロ以外の全員がオシオキされ、殺人を犯したクロは見事卒業となるのです！」

「つてことで裁判頑張つて欲しいのだ。くひひ…」

「アタシ、あんま捜査できなかったから、議論には役に立たねえと思う…でも、藍葉の甲いのためにも…早く議論を始めようぜ」

「でも、さすがに早とちりすぎじゃないかな？あの処刑を見た、みんなの精神の状態を考

えると……」

二階堂さんが怒りの表情で叫ぶと、雨崎さんが困惑しながら彼女を宥めた。

……一瞬、バナラさんの残酷な処刑が目には浮かぶ。

虫にじわじわと喰われ、骨まで辱められた、無惨な最期……。

「みなさん落ち着くように。まずは……死体の発見現場を思い出しましょう。僕は、少ししか見られていないのですが……」

蒲生くんがいつも腰に付けている本を開き、声を和らげる。

わたしは陳述台の液晶画面を見て、『コトダマ』の文字をタップする。画面に藍葉さんの死体発見現場が映される。

水浸しの現像室。水の入った流し台の中、電気警棒を入れられぐったりとしていた死体。

不可解な状況ではあるが、その中に犯人を暴くヒントがあるかもしれない……！

【ノンストップ議論（死体発見現場の状況）】

蒲生「確か、死体発見現場は＜現像室＞でしたね……」

雨崎「あそこ、なんで水浸しだったんだろうね……?」

二階堂「確か、カラフラファイルってやつには＜感電＞して死んだって書いてるな……」

なんで感電させたんだ？」

湖林 「確かく殴打の痕＞なるものがあつたらしいのう」

灰寺 「殴打の痕があつたのなら、＜現像室にあつたやつで殴つて気絶させた＞んや。例えば、落ちてたタオル掛けとか！」

紅葉 「＜現場にないもの＞で殴つた可能性も高いよ？」

【コトダマ：タオル掛け】

「それは違うぞ！」

「…灰寺くん、現像室に落ちていたタオル掛けは…殴るために使つたんじゃじゃないと思ふよ」

「す、鈴原姉ちゃん!?ここまで緊張するの数学の授業で当てられた時以来な…」

「数学の授業は置いといて、鈴原さんの意見を聞きたいわね」

黒木さんが灰寺くんの言葉を遮る。

「このタオル掛けには、血液も何も付着していなかったからね。」

「でも、洗い流した可能性もありますわね。ステンレス製ですし、水滴は拭き取ればいいですのね？」

一ノ瀬さんは髪をかきあげるのを見ながら、わたしは続ける。

「一ノ瀬さんの言うとおりだね。でも殴るだけなら、わざわざ壁から外す必要なんてな

「い」

「あと、ただ一発頭を殴っただけじゃ血は出ないんだぜ。繰り返して殴っていけば出血するけどな」

「残酷な話ですね。ナイフで心臓を刺した方が一瞬で死を迎えられると言うのに」

二階堂さんの助言に蒲生くんが憂いのある顔で返す。そっちも残酷じゃないかな？

「そーいや梅田兄ちゃんと一緒に現像室のカメラの脚立とかも調べたけど、血の痕は全然付いておらんかったな」

「もしかしたら、電気警棒とかの藍葉さんの私物が…それなんじゃないかしら？」

「いや、それはねえよ！だってアタシがぶん殴られた時点じゃ藍葉はまだ立ってたんだぜ！藍葉のカバンから取り出せる訳ねえじゃん！」

「確かにそうじゃな。藍葉と二階堂は銃で狙撃された訳でもなからうしのう」

「銃とか、物騒なもの第一エリアにしかないと思いたいけど…」

雨崎さんは顎に手を当て、湖林くんに突っ込む。

「じゃあ、二階堂さんと被害者の藍葉さんは…どうやって襲撃されたのかな？」

「…」

わたしが疑問を投げかけると、二階堂さんは無言で拳を強く握り始めた…。

彼女の為にも、藍葉さんの為にも…次の謎を必ず明かすんだ！

【ノンストップ議論（被害者の襲撃方法）】

二階堂「アタシにわかることは少ないけど、これだけは言える…とにかく隙を見せてなかつたんだよな」

湖林「まるでく忍び＞のような犯人じゃ。犯人でなかつたら家臣にしたいのう」

蒲生「湖林殿も案外常識的なことが言えるのですね？」

二階堂「それ、蒲生の皮肉ジョークってやつか？」

未隅「喧嘩はやめておこう！僕の意見だけく何かトラップがあつた＞と思うぞ！」

黒木「襲撃された時にく二人がいた場所にあつたもの＞で襲撃したんじゃないかしら」

絹川「く犯人が持っていたもの＞の可能性も高いよ」

二階堂「畜生…一体何者なんだよ…」

【コトダマ：木製のスコップ】

「黒木さんに賛成だ！」

「納屋の用具入れの中を見たんだけど…中身は整頓されていたのに、木製のスコップだけ乱雑に置かれてたんだ」

「それがどう言う意味なの？」紅葉さんはわたしの方向を見る。

「藍葉さんと二階堂さんは…木製のスコップで襲撃されたんだよ。」

用具入れは入り口近くにあったし、二人に気づかれないうように取り出すのも難しくな  
いだらうね」

「でも、あのスコップに血液とかは付いてなかったよね…」雨崎さんは戸惑いながら発言  
する。

「やっぱり忍びじゃ。才能を偽って入学した『超高校級の忍者』でもいるのかのう？」  
「湖林兄ちゃん…忍者にこだわるのもどうかと思う…」

「でもさー。犯人はなんで現像室へ気絶した藍葉をわざわざ運んだんだろうなー？」  
「…襲撃現場と犯行現場は違う…」

絹川くんが言った。一体何を言うのだろうか？

「ボクの意見だけど…襲撃現場が納屋なら、犯行現場は現像室ではない…そう言う気が  
するんだ」

…でも、二階への侵入経路は限られているんだ…。

皆が証明しているから…。

【コトダマ選択：二階堂の証言】

【コトダマ選択：未隅と雨崎の証言】

「絹川くん。二階堂さんは10時45分まで喫茶店と写真館を掃除していて、未隅くん

と雨崎さんは1時半まで喫茶店のキッチンでお茶会の準備をしてたんだ…」

「…そう…なんだけどね」

「そういや、窓はどうだったかな？窓はアタシが掃除した時に開けたんだよな」

「窓は死体発見時にも開かれていた。あと、現像室の扉は死体を見つかる前は閉じてたんだよな…」

「現像室、すごく埃つぽかったんだよな。だからあそこだけ扉と窓を開けておいたんだ…」

二階堂さんの表情からは、強い罪悪感が滲み出ている。

「もしかしたら、侵入経路は現像室の窓しかない…と言いたいのでしょう。流石に藍葉嬢の死体を抱えながら二階の窓へ侵入できる人間など存在しないでしょうし…」

「でも、未隅と雨崎さんのアリバイが嘘である可能性も高いのよ？」

蒲生くんの考えに黒木さんが返す。

「それはないよ。今から行くのは難しいだろうけど、喫茶店のキッチンには2人がスコーンを作ったと言う証拠がある」

「あのさ」

声を上げたのは…檀くんだった。

「檀くん…この状況をガラリと変える推理でもあるのか!？」未隅くんは目を見開きなが



ら、檀くんに見えぬ。

「みのあるとりりりんがキッチンに籠っている隙を見つけ、死体を写真館に持っていくことも可能だよなあ？」

檀くんは眉をひそめる。

「そうやろうな。こつそり入った現像室で、藍葉姉ちゃんの持つていた電気警棒で殺害した…かもしれへんし…」

「でもあたしたちは喫茶店の飾り付けもやってたし、それはないんじゃないかな…正直、誰かが入ってきた形跡なんてなかったし…」

「いや、何かをハシゴがわりに使って窓から侵入することもできそうなんじゃが…」

「ちよつと待った！待った！待った！待った！待った！」

…誰か、と思いきや…モノクマの声だった。

「モノクマー？何を待ったんだー？」

「今、意見がモノクマの色よろしく…真つ二つに割れたのだ！」

「これは久しぶりの『変形裁判場』の出演ですね！」

変形…裁判場？

ここにはまた何かおかしな仕掛けでもあるのか？

「つてことで、今から『議論スクラム』を始めるのだ！モノクマ、レッツゴーなのだ！」  
混乱する生徒たちを後目にカラフラは、どこからか取り出した花の形の古めかしい鍵をモノクマに渡す。

モノクマはその鍵を、いきなり席の前に現れた台の鍵穴に差し込み：鍵穴を回す。  
わたしたちが立っている陳述台がそれぞれ、天井へ浮かび始める。

上がり終わると：円状に並べられていた陳述台はほぼ半分ずつに別れ、二つの一直線状になる。

並べられた席の隣には、当然のようにモノクマが鎮座している。

「今からオマエラには『議論スクラム』をやってもらいます！

簡単に言えば、真つ二つに別れた意見をぶつけ合つて、どちらが正しいか議論してもらいます。

正しい意見が決まるまで、元の席には戻らないからね！」

わたしたちの隣には二階堂さんや絹川くんなどの、別の場所が犯行現場だと考える人たち。

向かいには黒木さんや湖林くんたち：現像室を犯行現場と考えている人たち。  
大丈夫だ。さつきと同じようにやるだけでいい。

みんなで意見を出し合って、真実の星を見つけ出すんだ……！

【議論スクラム（犯行現場は現像室か？）】

現像室だ！（黒木、蒲生、湖林、一ノ瀬、灰寺、檀）

別の場所だ！（鈴原、二階堂、未隅、雨崎、絹川、紅葉、梅田）

黒木「どうやって窓から＜死体＞を運んだというのかしら？」

梅田くん！

梅田「＜死体＞の運搬方法はいくらでもあると思うんだよな」

檀「＜死亡推定時刻＞は不明だったんでしょ？ スコーンを作っている途中でも殺せたはずだよ」

未隅くん！

未隅「二階堂さんが襲われた11時から12時までが＜死亡推定時刻＞だと思うぞ  
！」

一ノ瀬「11時から？ あの時は大雨だから＜犯人＞は傘なしでは歩けませんわ！」  
雨崎さん！

雨崎 「＜犯人＞が歩いたことで喫茶店の床とか濡れているかもしれないよ」

蒲生 「しかし、喫茶店の床は濡れていませんでした。＜窓＞から気絶している藍葉嬢を入れた可能性も高いでしょう」

絹川くん！

絹川 「殺害してから＜窓＞に入れた可能性だつてあるよ」

黒木 「＜現像室＞の流し台にカメラでも投げ入れたというのかしら？」

わたしが！

鈴原 「＜現像室＞のものが凶器である可能性は限りなく低いと思うんだ」

灰寺 「藍葉姉ちゃんを電気警棒で＜感電＞させたんやな」

紅葉さん！

紅葉 「牧場を囲む電気柵も＜感電＞させることはできるよ」

湖林 「牧場にあつた木製の＜スコップ＞なら、感電した死体を回収することもできるじゃろうな」

二階堂さん！

二階堂 「＜スコップ＞はあんま濡れてなかったぞ。回収なんて不可能だ！」

この議論に終止符を打つには、この証拠しかない……!

【コトダマ：死斑】

「これが、わたしたちの答えだ!」

わたしは、発言を続ける。

「犯行現場は現像室じゃない……それは藍葉さんの体に現れた『死斑』が証明してくれるはずだよ。

死斑ってのはね、死後10分から20分ほどで体に現れるんだそれは死体の体の下になっっている場所の表面に出現する。

でも、身体中にポツポツとした死斑が現れると言うことは……死体が運ばれたと言うことなんだ」

「例えば宙吊りにされた死体の場合は、死斑は下半身に広く出現するんだな。死体を動かしまくれば……ポツポツとしたやつが出現するんだな」

梅田くんが助言をしてくれた。ありがとう、梅田くん。

「つまり、犯行現場は現像室ではないと言うこと。藍葉はどっかで敵襲され殺され、その後現像室に運ばれた……ということなんじゃない」

…やがて、陳述台が動き出し、元に戻る。どうやら意見を通すのには成功したらしい。「ですけど…なぜそんなブルーデーみたいに面倒なことをしなければなりませんの?」「恐らく、犯行現場の偽装の為だと思う。アリバイから犯行を暴かれてしまうからね。」「本当の犯行現場は一体どこなんや?まさか、不思議な秘密基地があつたとか…藍葉姉ちゃんなら作れそうやな!」

…秘密基地。

その言葉を聞いて、メリーゴーランドの中央部へと入っていった人物を思い出す。

檀くん。まさか、彼が藍葉さんを…

「すごいや牧場にさ、電気柵あつたよな。あれでミサミサを感電させたんじゃないの?」  
発言の主は、檀くんだった。

「檀…貴様はまともに捜査していなかったじゃろう?」

「捜査は一応したけど。信長もどきとかみんなに会っていないだけ」

「な、何じゃと…このオレを否定するつもりか!?首を切られたくなければ切腹しろ!」

檀くんは、やつぱりメリーゴーランドの中央部分に行つてたのかな…

話は置いておいて。檀くんの推理は間違っている。

それを証明してくれる人は…わたし以外には…

【人物選択：絹川蓮慈】

「檀くん。電気柵で感電させたなら、トゲで体に傷がついたり白衣が破けたり…なんてことがあるかもしれない。」

それを証明するのは、藍葉さんの死体を検死した絹川くんと…わたし自身だだよ」

「その通りだね。死体には死斑や縛られた痕、カラフラファイルに書いてあったところ以外は特に変わった所はなかったよ。」

もちろん、電気柵のトゲで傷つけたような傷もなかった…」

「…そっか。なら違うよね」

…檀くんはどこか、冷静すぎる。イヴァンくんが死んでしまった時とは違う…。

「要するに犯行現場が牧場である可能性も低いつてことなのね…」

「そうなる…：犯行現場は納屋と温室、ゲームセンターと釣り堀に限られますね」

「おや？ チョコレートハウスはどうしたのかい？」

モノクマが横に首を傾げる。カラフラは、相変わらず体を左右に揺らしている。

「理事長権限なのだ。その件については黙ってて欲しいのだ」

「あのお、学園長は理事長より1000パーセント偉いんだよ。某エンタープライズも言ってたじゃん」

「某って…？ 一部の読者にバレバレなのだ…？」

「オレと一ノ瀬は捜査の時、ゲームセンターについて調べたんじゃ。だが、荒らされた所は何もなかった」

「私が証言いたしますわ。釣り堀はどうなのですか？」

「釣り堀の近くに電気製品はなかったわよ。電源プラグも照明も当然なかったわ」  
「つてなると、怪しいのは納屋と温室になるな…」

二階堂さんは腕を組みながら考えている。

しかしどうやって感電させたのだろうか。本当の犯行現場とはどこなのか？

その答えは…わたしの中で、だいぶ絞れてきたはずだ。

自分で考えて…証明してみせよう！

【ギャラクシードリヴン スタート！】

Q. 1 本当の殺害現場は？

納屋 or 温室

A：温室



Q. 2 被害者を感電させた凶器は？

電気警棒 or チェーンソー or 電気柵

A : チェーンソー

Q. 3 どういったもので被害者の体を濡らした？

噴水 or 井戸

A : 噴水

「推理は繋がった……！」

「藍葉さんの殺害現場は……温室だよ。だって納屋にもその近くにも、電気柵以外に電気が通っていきそうなものはなかったからね」

「そーいや、納屋と温室に近い井戸だけが水を汲める唯一の場所だったのう……しかし井戸から落とした死体を回収することは難しいのじゃが……そこはどうか、鈴原？」

「電気柵が凶器の線は先ほど消えた。雨の中、濡らしてから電気警棒を当てるのも犯人

が感電する危険性がある」

紅葉さんはこの状況でも冷静だ。

「それはそうだね。でも、噴水のある温室なら…犯人は紅葉さんを安全に感電させることが出来るだろうね」

つまり、どうやって殺したのか…

【選択：噴水に入れてから殺した】

「被害者を噴水に入れてから…チェーンソーの電源を付けて、それを噴水に投げ入れて殺したんだよ」

わたしが推理について演述した瞬間…彼が叫ぶように反論した。

「タツクルを食らうがいい！」

…未隅くんの声だった。

「鈴原さん、そこまで考えてるのはいんだけど…待つてくれないか？犯人がチェーンソーを使って犯行を起こすことは不可能だ！」

「未隅くん…なんで、そう思うんだ？」

「裁判ではノーサイドで行きたいが…仕方ない。これは僕が挙げる…ゼブラカードだ！」

突然の反論。一ノ瀬さんの時みたいにな、頑張つて切り抜けるしかなさそうだ！

【反論シヨードウン（チェーンソーを動かす方法）】

「犯人はく雨でずぶ濡れ＞になつてゐる筈だ！そんな状態でチェーンソーに触れるのはとても難しいことだと思つてぞ！

何故なら先に自分が感電してしまふからな！」

【発展！】

「チェーンソーは何かを使つて動かすことも可能だ。ただ、安全な方法ではないだろうけどね」

「触れずに動かすことはく不可能に近い＞。それを証明できないのなら…君の推理は完全な間違いだ！」

【コトダマ…木製のスキ】

「その言葉…ぶつた斬る！」

「…チェーンソーに触れずに電源を付けて、噴水に入れる方法ならあるよ。」

井戸の近くに立てかけてあつた…木製のスキを使えばいい」

「ま、まさか愛の告白？未隅様に？まさかの略奪愛…!？」

「違ふと思つてぞ？」

雨崎さんは一ノ瀬さんに怒る。

「そっちのスキじゃない。農業とかに使う…木製のスキだよ。木なら電気を通さないから、感電することなくチェーンソーを動かせる」

「鈴原姉ちゃん、チェーンソーはそんなに簡単には動かせへんと思うけど…安全装置とかあるし」

「灰寺くん…実は温室のチェーンソーは初心者でも使いやすい、安心してスイッチ一つで電源を入れられる仕様なのだ！」

「殺人道具に使えないかと思つて改良ならぬ改悪したんだけど、防水機能がないからつて感電殺人に使われるとはね！」

「改竄したとか防水機能がないとか…そんなことまで言つて委員会なのだ！」

「カラフラ…おま言うなんだよなあ…」

モノクマとカラフラが重要なことを言つたが、漫才を混ぜていいのかな…？

「藍葉さんは…納屋で襲撃された後、温室の噴水に入れられ殺された。そこまでは分かつたけど…」

殺害方法は明らかになつたが、未だに犯人の手がかりはつかない。

「急かすこともないわよ」黒木さんが腕を組みはつきりと言う。

「だつて、私たちは世界を創造した全知全能の神様じゃないんだから。未だにわからないことがあつてもしょうがないじゃない。」

「黒木さん。わからない事って…」

「例えば…どうやって死体を運んだ、とかね。キャラクターの言動には全てそうなるであらう過程があるのよ。」

ほら、なんとなく殺したとかじやお話が盛り上がらないでしょ?」

黒木さんは、相変わらずこの状況を楽しんでいるようだ。

でも…彼女の言った『わからないこと』。写真館の現像室へと、死体を運んだ方法…

もしかして…

『あれ』が関連しているんじゃないか…?

【学級裁判・中断!】



【モノカラ劇場】

…カラフラは、何故か美少女の姿で膝に寝そべるモノクマの耳かきをしていた。

「裁判も盛り上がってきましたが、ここで雑学コーナーです。」

ヴァイオリニストとかがりサイタルでの演奏の時に読む楽譜をめくる人を『譜めくり』って言うてね、目立たないことが必要とされる役割なんだよ」

「縁の下の力持ちってやつなのだ」

「でもね、演奏者がフットペダルを踏むことで楽譜をめくることが出来る自動譜めくりマシーンもあるんだよね。」

「モノクマ、今度は自動耳かきマシーンが欲しいのだ！」

「いいよいいよー、耳かきのお札に買っちゃおうかな？」

まるで聞いてもいないのに知識自慢する中年男性と、そいつにおねだりする若い女性のようにだ。

「わーは美少女だから耳かきは不要なのだ。ほら、耳かきの部分をドリルに変えてされる側が油断した時に……」

「う。ぷ。ぷ。中々残酷なこと考えるんだねー今回のオシオキはそれにしちゃおっかなー」

「いや、もうとつくに決まっているのだ……」

カラフラは困惑している。正直、残酷な事を口走る彼女も彼女なのだが。

「……と……ここで朗報です！」

耳かきが終わると、モノクマは立ち上がりポーズを取る。

「なんと今の会話にはクロが誰なのか？というヒントが隠されているのです！多分！」

「え？今回のコロシアイには音楽棒がないの？ まさか『超高校級の耳かき師』とか？」

「多分って言ったじゃん。本気にしないでよー…」

「…」

どうやらカラフラは、これからもモノクマに振り回されるようだ。

## Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」非日常編— 学級裁判（後編）

・コトダマ一覽

【カラフラファイル2】

『被害者となったのは藍葉美郷。』

死因は感電によるショック死。

死体発見現場となったのは写真館内の現像室。

前頭部に殴打の痕が見られる。』

【死斑】

人間は死ぬと体の下になっている場所の表面に死斑が現れる。

死斑は死後10分から20分に表れ、2、3時間で大きくなる。

藍葉の死体にはポツポツとした死斑が身体中に表れていた。

【電気警棒】

流し台に差し込んであったもの。

死体発見時にはスイッチがONになっていた。





に使われる。

【消えた藍葉のカバン】

藍葉がいつも身につけているカバンだが、死体は身につけていなかった。

【ケルブレム】

摘まれてしまうと数分ほどで周囲の人間の脳に幻覚作用が引き起こされるバラの一種。

なぜか写真館のゴミ箱に入っていた。その後、カラフラによって処分される。

温室のケースの中に入っていたのは3本だけだったが、そのうち2本が行方不明に。

【電気柵】

牧場を囲む柵。『感電注意』と書かれた看板が置いてある。

雨で濡れており、触れただけで感電しそうだ。

【二階堂の証言】

二階堂は10時45分まで喫茶店と写真館を掃除していた。なお、その間未隅と雨崎以外の人物は建物に入ってきていない。

11時に納屋で藍葉と出会い、会話している途中で襲撃され、気絶。

1時間後に未隅と雨崎に起こされた。

【未隅と雨崎の証言】

未隅と雨崎は9時半まで温室でハーブを摘み、

9時半から11時半まで喫茶店のキッチンでスコーンとハーブティーを作っていた。

【木製のスコップ】

牧場の納屋の用具入れに入っていた木製のスコップ。

用具入れの中に乱雑に置かれていた。

【壊れたチェーンソー】

温室近くの井戸付近に落ちていたチェーンソー。

雨のせいか濡れており、スイッチが『ON』になっているのに動いていない。

【木製のスキ】

温室近くの井戸に立てかけてあったスキ。

雨のせいか濡れている。

【ぬかるんだ地面】

温室近くの井戸付近の地面はぬかるんでおり、歩くと足跡がつく。

【看板】

温室近くの井戸付近に落ちていた看板。

『楽しいガーデニング』と緑の可愛らしい文字で書かれてある。

【井戸の中】

井戸の中には梯子がついているが、中は真つ暗で何も見えない。

【マンホール】

釣り堀の近くにあったマンホール。

蓋を開けることができる。

## 第二エリアマップ

【学級裁判・再開！】

「黒木、さっきの話し合いの結果をまとめると、死体は運ばれて流し台の中に入れられたけどさー…」

犯行時刻だと思われる11時には凄雨が降ってたからって、他の生徒に死体を運んでいる所を見られることもあるかもしれないんだなー」

梅田くんは手を顎に当てながら思案している。

これは…わたしも気になっていた所だ。死体はどうやって、どのルートで運ばれたのか？

推測であるが…わたしには、もうわかりきっていることだ。

【ノンストップ議論（死体を運ぶには）】

黒木「死体を運ぶには。しっかり捜査していた人たちはわかるわよね？」

二階堂「バカにされた気分だなあ…」

雨崎「＜変装＞していて＜犯人だと気づかなかつた＞とか？」

二階堂「いいや、アタシの考えだけど…何か不思議なく抜け道＞があつたに違いねー！」

一ノ瀬「ややっぱり二階堂はバカでスカポンタンですわ！」

雨崎「えーと、とりあえず喧嘩はやめて！」

梅田「ぶつちやけ＜そんなの＞よな？あつたら異世界転生ものよりチートなんだなー」

湖林「犯人ではなく＜別人に死体を隠させた＞可能性も高いのう」

紅葉「異世界か…正直興味ないね」

【コトダマ：井戸の中】

「二階堂さんに賛成だ！」

「二階堂が適当に言った発言がどうかしましたの!？」

「いや、一ノ瀬さん。井戸の中には梯子があっただんだ。その中に入って行って、写真館まで死体を運んだ…と思うんだ」

「やっぱりか。確か秘密の抜け穴は反則って聞かされてただけだな…ありがたいな、鈴原」

「こちらこそありがたいがとう、二階堂さん。」

「井戸の中は暗く歩けそうにない。藍葉のことじゃ。あやつが持ち歩いているであろうライトを使ったに違いない」

湖林くんの発言を聞き、思い出す。

「そういえば藍葉さんの白衣のポケットに入っていた持ち物リストには、ライトがあった。犯人は井戸へと入り写真館へと向かった。つまり井戸の中身は…」

【閃キアナグラム：かくしつうろ】

「井戸の中身は…隠し通路だったんだよ。捜査中、黒木さんは井戸の中に入っていったよね、湖林さんと一ノ瀬さん?」

「それはそうですね…あら、しまったですわ!女如きに賛成してしまうなんて!」

「鈴原の言う通りじゃのう。黒木はあの走りづらそうな靴で、ライトを持って井戸の中へと入っていったんじや」

「では…井戸からどこに出ていけばいいのでしょうか？この様子だと、隠し通路はなさそうですし…」

蒲生くんは落ち着いた声で言った。

その答えは…黒木さんが証明していたはずだ。

わたしは、赤いコートのポケットからヒストリエランドのパンフレットを取り出し…第二エリアの地図のページを広げ、皆に見せつける。

「鈴原ちゃん!?パンフレットがどうしたの?」

「この第二エリアの地図を見て欲しい…井戸からどこへ向かったか、答えは一つしかないんだ!」

【スポットセレクト・マンホール】

地図に載っているマンホールを指差す。

「釣り堀近くのマンホール。捜査中に絹川くんがここを開けようとしたけど、時間切れで開けなかったんだよね」

「うん…だって隠し通路があるってわかったら学級裁判の楽しみがなくなっちゃうじゃ

ん……」

「大変なのだ！モノクマが落ち込んでるのだ！落ち込むオチだけは勘弁なのだ！」

…モノクマとカラフラが、また漫才を始めている。

「その通りよ。井戸は釣り堀のマンホールへと繋がる地下水路だったわ。地面は豪雨のせいか濡れていたけど、水路は魚が住めるほど綺麗だったのよ」

黒木さんは得意げな表情だ。

「ということは足跡も付かなかったということなんだな！」

「…そういうや、オレらが井戸の近くに来た当時、足跡は一切なかったのう。周りはあるにぬかるんでいたというのに」

未隅くんが笑い、湖林くんが考察する。

でも、井戸に近づき、そこに入るには周りのぬかるんだ地面を歩かなければならない。

なぜなら、地面に足跡が付いてしまうから。

足跡を消すのか？それとも元々なかったのか？

今から真実を、解き明かしていこう…！

【ノンストップ議論（足跡を付けず井戸に近づく方法）】

雨崎「どうやって井戸に近づいたんだろうね…？」



絹川 「足跡なんてく元々なかった可能性も高いよね」

灰寺 「元々くジャンプ力が高かったんや！例えば、カーンとかウツズみたいに！」

二階堂 「そいつらはサッカー選手とゴルフ選手だぞ？」

蒲生 「僕としては…くその場にあつたものは使えないと思えますね」

湖林 「どうせ犯人は忍びじゃ。くスキくを橋がわりにして渡ったんじやろうな」

黒木 「忍び…外国人に受けそうだから、一人くらいいてもいいのだけど…」

【コトダマ：看板】

「それは違うぞ！」

「鈴原嬢。どうかしたのですか？」

「蒲生くん、足跡を付けずに井戸へ近づくには…その場にあつたものを使えばいいんだ

よ」

「まさかあの看板がそうだというのですの？」

一ノ瀬さんは悔しげな表情でこつちを見てくる。

「そうだね。井戸の近くに落ちていたあの『楽しいガーデニング』の看板を井戸への橋代わりにしたんだ。だから足跡はついてない」

「でもさ、もし看板に足跡が付いてしまったらどうするんだろう…？」

「雨が足跡を洗い流してくれると思うぞ」

雨崎さんの疑問に二階堂さんが答える。

「二階堂さんの言う通りだろうね。足跡の付いた面が上になるように、看板をそこらへんに放り込めば足跡は消える…と思うんだ」

「じゃあ、井戸の近くにスキヤチェーンソーが置いてあったのはどうしてですか？木の葉を隠すなら森の中…と言うものですか？」

「ことわざの意味は違うよ。それらが噴水で濡れたと解らないようにするために…だと思います」

絹川くんは少し困った顔で一ノ瀬さんに突っ込む。

「…あのさ」

雨崎さんが手を挙げた。

「みんな。ちよつといいかな？あたし思ったんだけど…井戸の梯子を降る時、死体はどうやって背負ったのかな？」

死体には死斑や縛られたり、殴られた跡以外は傷がなかったんでしょ？

死体を井戸に落としたのなら、流星に骨折するだろうし…めつちや残酷な発想だけど…」

「死斑って傷なのかー？」

「梅田、貴様に案外わからないこともあるんじゃないか？」

もじもじしている雨崎さんに皆の視線が向く。

…待てよ？

犯人は…藍葉さんの持ち物リストにあった、あれを使ったんじゃないか…？

【発掘イマジネーション（死体を運ぶ際に使ったもの）】

◇◇◇◇

◇◇◇◇

◇◇◇◇◇◇

ライ◇◇◇

◇◇◇ス

◇り◇◇◇傘

ライ◇◇ー

テ◇◇ス

◇り◇◇み傘

ライター

テグス

折り畳み傘

【選択：テグス】

「そうか、わかったぞ！」

「藍葉さんの持っていた…テグスを使ったんだよ！」

「えーと、テグスって…ビーズアクセを作る時に使うやつだけ？」

雨崎さんは相変わらず疑問を出している。でも、それで真実がわかるんだ。

犯人を見つける、大きなヒントが…

「確かりストには、二種類のテグスが載っていたんだ。3号テグスと50号テグス。どっちを使ったという…」

【選択：50号テグス】

「50号テグスを使ったんだよ。テグスは号数が大きく、つまり太くなるほど重いものを吊り上げられる。」

50号テグスもあるなら、藍葉さんの死体も縛ることができるとも思えない。灰寺くんが教えてくれた知識だけだね」

「そうやな。50号テグスなら90kgのカジキマグロを釣れるのはみんなの常識やな。藍葉姉ちゃんなら簡単に吊り下げられるんちゃう？」

「常識…か？」

灰寺くんは二階堂さんがツツコミをいれる。

「こうして藍葉嬢の死体を、井戸の中へと下ろした、と言うことですね…」

「だから縛った痕が残ったんだな」

「ここまで来ると、例の建物の二階にあるはずの現像室に…どうやって死体を運んだのかもわかるはずね。隠し通路を通ったのはわかったでしょう？」

黒木さんの得意げな台詞を聞くと、一つの疑問が浮かび上がる。

そういえば、建物の一階…喫茶店は未隅くんと雨崎さんがいたから、そう簡単には入れないはずだ…

「どうやって二階へと入っていったんだ？どうやって二階に死体を運んだんだ…？」

「みんな、ちよつと言いたいことがあるんだ」

絹川くんが、少し大きな声で言った。

「レンきゅん、一体何なんだ？」

「ボクの意見だけど、『二階に入るやり方』じゃなくて…『二階に入ることができるやり方』って考えればいいんじゃないかな？」

「『入る』と『入ることができる』の違い？人が死んでるのに議論を長引かせて何がしたいの？」

「意見や証拠を出すだけじゃなくて、考え方とかも出していく必要はあると思う。発想を変えれば、見えてくるものもあると思うんだ…」

「…なんだ、ライフハックってやつ？怪しげな…」

檀くんのシビアな意見に、絹川くんが返す。

でも。

絹川くんの言葉で、一つ閃いたような気がする…

もしかしたら犯人は…

自分ができるやり方で、地上から二階の窓に侵入したのかもしれない…

まずは、あの人に…できるかどうか尋ねてみよう！

【怪しい人物を指定しろ！】

【人物指名：紅葉留架】

「紅葉さん。一つ、質問があるんだ…」

わたしは、ゆっくりと『彼女』を指差す。

しかし、紅葉さんは…表情一つ変えなかった。

「…どうしたの？」

たった一言、発しただけだ。

「変な質問かもしれないけど、地上から二階の窓に入ることはできるのか？例えば…」

【選択：ジャンプして侵入した】

「バスケには、あまり詳しくないんだ。でも、バスケットゴールって十分高いよね。

ジャンプして開いていた窓の下枠を掴んで、それから二階へ入ることとか…」

「…私を、犯人だと思っっているのね？」

紅葉さんはため息をつき、こちらを睨み付けてきた。

「鈴原。あのさ、いまだにわかっていないことがあるじゃない。

一つ。どうやって藍葉の死体を窓へ入れたのか。

二つ。身体能力の高い灰寺や未隅も、犯人候補に挙げることができる。

三つ。脱出方法。どうやって二階から脱出したか。

他にもいろいろある。けれど、答えられなければあんたの負けだ…

諦めろ！ここで試合は終わりだ！」

（やはり…反論してきたみたいだ…！）



「…疲れが見えてきたようだけど、どうやら一対一でやるしかないみたいだね」  
 (紅葉さんは全く焦っていない…仕方ない、彼女の発言をなんとか切り抜けるんだ!)

【反論ショーダウン(死体を入れる方法)】

紅葉「喫茶店から階段で二階に登るゝのは論外だね。雨崎と未隅がいるのはもう何  
 度も言われてきた。

あの二人が見張りだったとしたら発見される危険性があるんだよ?」

【発展!】

鈴原「それは認めるよ。でも、二人は何も見えていなかったよね?」

「窓へそのまま死体を放り投げたら…落ちた音のせいで一階の人物にくバレる可能性が  
 ある>。

さつき言った通りに犯人が外からジャンプして窓に侵入したとして、<死体を運搬で  
 きる方法なんてない>。

まさか死体を背負ってジャンプしたとか言わないよね?」

【コトダマ:死体の縛られた痕】

「その言葉…ぶった斬る!」

紅葉さんの反論を乗り切り、わたしは続ける。

「紅葉さん…死体を入れる方法ならあるよ。まず藍葉さんの手首を50号テグスで縛って、自分はテグスの端を持ってジャンプすればいい。」

次に窓の下枠を掴んで、自分から現像室へ入る。そして、50号テグスを引っ張って死体を現像室へと引き上げる。どうか、紅葉さん？」

「ふ…ふざけてるの？」紅葉さんは…少しだけ悔しそうな顔をする。

「どうやら凶星みたいね。その調子よ、鈴原さん！頑張って！諦めなければ願いは叶うのよ！」

スポーツの試合を見るかのように、黒木さんが応援してくる。

わたしは何とも言えなかった。人の命が関わっているのに…。

「そういえば、テグスの知識は灰寺が知っていたんだよね？灰寺が犯人かもしれない線はあるの？」

「灰寺にアリバイはある。10時半から11時半まではオレと一ノ瀬とでお土産屋でルアーを見ていたんじゃないよ」

「ですから…灰寺様が犯行を犯した可能性は薄いですわ。紅葉だか枯れ葉だか知らないけど、釣りという神聖な殿様様の領域を汚さないでくださる？」

湖林さんと一ノ瀬さんの二人が、灰寺くんの潔白を証明する。

「お土産屋はなんでも揃ってるね！まさに無料殺人道具の殿堂！激安は無料には勝てな

いのですー!」

「いや、今回の事件はカバンから起きた事件なのだ。お土産屋は1mmも関係ないのだ」  
「あと紅葉さん。仮に二階の窓から飛び降りたとして、やはり落ちた音でバレる…って話だけど、それはないと思うよ。」

現像室のある証拠が、あることを証明しているからね」

絹川くんの言葉。現像室に落ちていた、証拠。もしかして…

【コトダマ：タオル掛け】

「タオル掛け…じゃないかな？」

「ふーん…凶器でもなんでもないタオル掛け。それが一体どうなるの?」

「ボクの考えだろうけど…恐らく犯人は、紅葉さんの持っていたあるものと組み合わせることで脱出できたんじゃないかな…」

脱出の際に使った…紅葉さんのもの…

【選択：50号テグス】

「テグスを…正確には50号テグスを使ったんだ!」

「またテグス…それしか頭がないなんて、全く呆れるよ」

吐き捨てる紅葉さんに、わたしは続ける。

「その通りだよ。頭がないって言われると落ち込むけど…

テグスを当初壁についていたタオル掛けに巻きつけて、ロープがわりにして地上へ降りていったんだ」

「で、降りる際にタオル掛けが壁から外れてしまった…とかか？」

「恐らくそうなんだな。んで、タオル掛けは現像室の窓の中にポイっと…」

二階堂さんと、梅田くんの推測に肯く。

『超高校級のバスケ選手』である紅葉さんなら、外れたタオル掛けを二階の窓に投げ入れることも可能だろうな…。

「これで、紅葉さんが出した三つの謎は解けたけど…どう？もう言うことはない？」

黒木さんの発言に、紅葉さんは眉をひそめるだけだ。

「…そういうえば、まだ明かされていないことがあったよね？」

「しつこい女じゃのう。小田原評定にも程がある」湖林くんがうんざりしたような顔で腕を組む。

全ての謎は解き明かされたように見えるが、実はまだ残っている。

頼む、証明してくれ。

無実でもいい。残酷な真実でもいい。

みんなが生き残れる、希望溢れる未来なんてのは、嘘なのはわかってる。

それでも…終わらせたいんだ！

【ノンストップ議論（まだ明かされていない犯行について）】

紅葉 「一人の人間を追い詰めてお前が犯人だと罵るなんて、なんて馬鹿な連中なんだろうね…」

で、犯人のやったことはこれ以上は何もないんじゃないの？

<実は犯人は二人いる>とか？凶器は<チェーンソーじゃない>とか？

お大事なお仲間にくる変なものでも見せつけた？それとも<藍葉のカバン>には一切手をつけていないとか？

アリバイも何もない、発言の少ない<檀も犯人の可能性>とか？

さあ、何か言つてよ。愚問でも愚答でもいい。早く証明してみせなよ！

【コトダマ：ケルブレム】

「その言葉…わたしが撃ち抜く！」

「確か、12時過ぎ…わたしと絹川くんと梅田くんがね…写真館で藍葉さんの死体が発見される前に、あるものを見たんだ…」

「な、何を見ましたの？お前のような淫売…やはりお二人方と卑猥なパーティーでもしていましたの!？」

「一ノ瀬、少し黙つてろ」

「…」

「湖林の命令だと一生黙ったままだな…」二階堂さんは呆れている。

「幻覚だよ。お茶会が始まってからしばらくして、二階堂さんと藍葉さんが来ないから不安になって…それぞれで二人を探しているのに見たんだ。」

最初に幻覚を見たのは…梅田くんだった。確か『更衣室に向かう棒を持った男』のものであったね。

わたしもちろん見たよ。ナイフを持った男が襲いかかってくる』幻覚をね…」

写真館で幻覚を見てしまった、梅田くんと絹川くんが証人だろう。

「いやー、あれは見たときとうとう人生が終わるかと思つたなー…でも、幻覚じゃなければ更衣室の窓は開かれてなかっただろうなー」

「ボクは…あまり言いたくないんだけど…『複数の人間に囲まれる』ものだったなあ…」

絹川くんは、何かを恐れるような声で言った。

「怖かったのなら、そこまで言わなくていいよ。証明してくれるだけでも大丈夫だ」

紅葉さんは、悔しそうに拳を握っている。

「じゃあ…一体どうやって幻覚を見せたっていうの？」

「温室にあった、幻覚作用を持つ危険なバラ…ケルブレムだよ。捜査中、カラフラに燃やされてしまったから今は現物はないけれど…」

「確かケルブレムは数分ほどで周囲の人間に幻覚作用を引き起こすとか言われてたわよね？」

もしクロがケルブレムを温室で摘んでから運んだのなら、幻覚を見てしまつて大変なことになるわ。鈴原さん…なぜクロは平気でいられたと思う？」

黒木さんの疑問の答え。それは藍葉さんのカバンのものを使えばいいだけだ…。

【選択：フリーザーパック】

「温室で摘む際に、藍葉さんのカバンの中に入つていたフリーザーパックに入れたんだよ。そうすれば運ぶときに幻覚は見ずに済む。

恐らく犯人がケルブレムを使ったのは…わたしたちを混乱させて、捜査を滞らせる為だったんだろうね」

「…紅葉嬢はどうやら自分がケルブレムを使った、ということをつかり言つてしまつたようですね」

蒲生くんは相変わらずの笑顔で言う。

「…あのさー！一つ質問なんやけど…」

灰寺くんが高く手を挙げる。

「なんで犯人は、流し台の水を出しっぱなしにしといたんか？」

「アタシの考えだけどさ…雨で濡れた足跡を隠すためとか、脱出する時間がなかった…

とかじゃねえのか？」

二階堂さんの、普段とは違う真面目な声だった。紅葉さんは、相変わらず悔しそうな表情をしている。

これで、殆どの謎は明らかになった筈だ。

後は前の学級裁判のように：わたしたちが分かることを、まとめてみるだけなんだ。一人の無残な死か、それとも多数の絶望的な死か。

いわゆるわたしの中に残っていた数少ない記憶：『トロツコ問題』そのものだ。

それはたつた一人が生き残るために続けられるのか。最後の二人になるまで、終わらないのか。誰にもわからない。

…これが現実でも。この命は捨ててはならない。前に進む為には…！

### 【クライマックス推理】

☆ Act. 1

午前11時。犯人は納屋の中からある二人の人物の会話を聞いたんだ。

その人物は：二階堂さんと、今回の被害者である藍葉さんだった。

犯人は、用具入れに入っていた木製のスコップで二人に襲いかかって気絶させた。



スコップはその後、納屋の用具入れの中に乱雑に入れられた。犯人は藍葉さんを抱えて温室へと向かったんだ。

☆A c t . 2

温室に入った犯人は藍葉さんをまず噴水の中に入れて、チェーンソーを温室にあった木製のスキで動かして電源を入れた。

次に、電源を入れたチェーンソーも噴水に入れると、そのせいで：藍葉さんは感電死してしまった。

犯人は藍葉さんの死体とチェーンソーをスキで回収。その後、幻覚を見せることのできるバラ：ケルブレムを摘んで、フリーザーパックに入れた。

温室から出た犯人は先程のチェーンソーとスキを温室の外に放り込んだんだ。

豪雨の中だったから、この二つが濡れていてもおかしくないからね。

☆A c t . 3

温室から井戸までの道はぬかるんだ道だった。そこで看板を橋の代わりに敷いて渡つて：井戸の中に入る前に足跡の付いた面を上にして、そこら辺に放り込んだんだ。

橋代わりに使ったことを隠すのと、自分が渡った足跡を雨で消す為だね。

藍葉さんのカバンの中にあつた50号テグスで藍葉さんの体をしばりつけて、井戸の中に下ろす。

そして犯人も井戸のハシゴで降りていったんだ。

地下水路の中は当然暗い。ライトで照らして、死体を抱えながら進んでいったんだらうね。

☆Act. 4

マンホールから釣り堀に出た犯人は、二階建ての建物へと向かっていった。

二階の窓が開いていることを確認して、死体の両手をまた50号テグスで縛り直して、テグスの端を持ってジャンプした。

地上から二階の窓までは戸手もたかかったけど、犯人にはできたんだ。：ゴールにシユートするようにね。

窓の下枠を掴み、現像室へと入っていった犯人は、50号テグスで縛られた藍葉さんの死体を引き上げて、藍葉さんの持っていた電気警棒と一緒に流し台の中へと入れたんだ。

現像室の流し台の排水口に蓋をして、水を貯めていく。その結果水が溢れる、現像室が水浸しになったんだ。

☆Act. 5

現像室から写真館へと出た犯人は、ケルブレムをフリーザーパックから取り出して、ゴミ箱へと放り込んだ。

入ると幻覚を見る写真館の出来上がりだ。このせいでわたしたちは危険な幻覚を見てしまったんだ…。

現像室の窓から外へ出る時には、流し台近くのタオル掛けにテグスを巻き付け、ロープ代わりにして降りる。

しかし、そこでタオル掛けが重さに耐えきれず壁から外れてしまった…。

犯人はそれを好機と思ったのか、地面に降りた際にテグスを外し、現像室の窓に投げ入れたんだ。

これがこの事件の全貌。この犯行が出来たのは、彼女だけ…

高い身体能力を生かし、様々なトリックでわたしたちを混乱させた犯人…

「悲しい戦いはこれで終わりだ。『超高校級のバスケ選手』紅葉留架さん！」

「…」

紅葉さんは、目角を立てつつも何も言わない。

「…ない…」

「…紅葉さん？もしかして…推理に何かあったのかな？」

「鈴原。私を犯人にするには足りないものがある」

足りないもの？ 一体、何だろうか。

「決定的な証拠。バスケやってるからジャンプできるとかそうじゃなくて。指紋とかダ  
イニングメツセージとか。被害者である藍葉の科学捜査でわかるやつとかね。

出せないのなら…私は犯人にはならない。投票しても無駄だろうね」

…待って。

決定的な証拠なら…今は持っていないけど、『あれ』が証拠となるはずだ。

今からそれをぶつけなければ、この裁判は終わらないだろう。

最後の証拠で、彼女の反論を乗り切るんだ…！

【理論武装スタート】

☆Phase. 1

「どうして私ばかりを疑っているの？」

「証拠なんてない…だから犯行の証明は不可能だ」

「あなたの付度での推理なんて…そこらの落書きと何が違うの？」

「そんな犯行、絶対に認めない」

☆Phase. 2

「あんたは賢そうだと思っただけだ…間違いだつたみたいだね」  
「超高校級が聞いて呆れるよ」

「だからしつこい奴は大嫌いなんだよ」

「檀も灰寺も犯人の可能性があるのに？」

☆Phase. 3

「馬鹿の一つ覚えじゃないの？ふざけるな」

「動機もまだわかっていないのに？」

「身体能力が高ければ誰でもできるでしょ？」

「藍葉を殺したのは…絶対に私じゃない！」

「決定的な証拠なんてどこにもない。出せる？なら出してみなよ」

【れ】

【た服】 【ンと濡】

【カバ】

「これで、終わりだ！」

【カバンと濡れた服】

「しまった…そんな…！」

「…決定的な証拠ならあるよ…もし、紅葉さんの自室には、濡れた自分自身の服と…藍葉さんのなくなったはずのカバンがあるだろうね。」

今の紅葉さんの服は乾いている…けれど、あの豪雨の時に濡れているのなら…バレないようにホテルへ帰った後、自室で着替えていると思うんだ…

それに、わたしたちが見つけた時の藍葉さんの死体はカバンを付けていなかった。それも自室にあるだろうね」

「…」

「…うーん」

モノクマが、何かを考えたかのように声を出す。

「裁判も長引いたら流石に飽きるんだよねー。ボクって飽きっぽいことに定評のあるマスコットだからさー。」

では、紅葉さんのお部屋に突撃取材！してみましよう！」

「ま、待つてくれ！紅葉さんが認めてくれるだけでいいんだ！お願い…」  
無視されたのか、モノクマの背後にスクリーンが降りてくる。

そこに筋トレ用具と本棚が印象的な部屋が映し出された。紅葉さんの部屋だろう。

部屋の隅には、いつの間にかカラフラが入っていた。手代わりの葉っぱでクローゼツ

トを素早く開く。

クローゼットには…藍葉さんのカバンがかけられていた。

「檀クンが鈴原さんの部屋に突入した件があつたつてのに、部屋に証拠を置いていれば自分は疑われないと思つたんだらうねー！」

まあぼっちキャラに定評のある紅葉さんが、藍葉さんを殺したつて疑われる線なんてなかつたからね！ぶひゃひゃひゃひゃ！」

モノクマは腹を抱えて笑う。紅葉さんの顔は…青ざめていた。彼女は、しばらくして口を開いた。

「私の…負けだよ…」

「とうとう議論の結論が出たようですね！早く投票タイムと行こうじゃないですか！」

「さて、アナタラお待ちかねの！わつくわつくなお楽しみのみ…投票タイム！なのだ！」  
投票。

この事件の犯人を決めるための、取捨選択。

一体いつになったら、この地獄は終わるのだろうか。

液晶画面の紅葉さんの顔のボタンを、震えながら押す。

…やがて、スクリーンに得票数が映る。

『紅葉留架 13票』

『全員正解』

また、ルーレットが映し出される。白と黒の色のボールは、紅葉さんの場所へと落ちていった。

二度と聞きたくない、愉快なファンファーレが聞こえる…。

「まさか二回連続大正解とは思わなんだ、なのだ！」

「二回目のコロシアイで藍葉美郷さんを殺したのは、なんと紅葉留架さんでした！苗字が似てるから殺したんでしょうかねー？」

二人の笑い声以外に、声は聞こえなかった。

今回の犯人である紅葉さんは…いつもの無表情だ。

【学級裁判・閉廷】



## Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」非日常編―― オシオキ

「まさかまさかの…今回も大正解！なのだ！」

『超高校級の科学者』藍葉美郷さんを殺したのは…『超高校級のバスケット選手』紅葉留架さんでしたアアアア！

オマエラが正解するとは思っていなかったけど、オマエラを信じてよかったな…と思うよー！」

モノクマは両手で、カラフラは両手代わりの葉っぱでハイタッチしている。

「…正解、だったのか…」

一方のわたしたちは…どうしようもない、陰鬱なムードに満ちていた。

特に二階堂さんは、友人が殺された怒りに満ちているのか、体を震わせている。「おい…どうして」

二階堂さんは、紅葉さんに詰め寄り、身長が自分よりも高いであろう彼女に掴みかかる。 「どうして…藍葉を殺したんだ。何の罪もない人間をどうして…どうして…っ！」

揺さぶられているうちに、紅葉さんは沈黙を破った。

「…復讐だよ」

…復讐？ 藍葉さんが、紅葉さんに何かをしたのか…？

「えーと。それについては紅葉さんに語らせるのも何か物足りないので…ボクが教えましょう」

自分の席から立ち上がったモノクマが丸い両手を広げると、スクリーンに少女漫画風の美少女カラフラが描かれている表紙が映った。

「動機の漫画本!? これで事件が起きるのかー!？」

梅田くんが驚きの声をあげる。

「まずはこの『漫画でわかる紅葉留架の真実』をご覧くださいー!」

…スクリーンは、かなり初期の学年誌に載っているような、デフォルメされたギャグ漫画のような絵柄で描かれた、カラーの大きなコマを写す。

二階堂さんが紅葉さんから手を離す。紅葉さんは、全てを諦めたかのように立ち竦んでいる。

モノクマは、四角形の吹き出しに書かれたナレーションを読み上げた…。



『漫画でわかる紅葉留架の真実』

『紅葉留架さんは大都市で知られる〇〇都〇〇市生まれ。住宅街でも評判のバスケット少女。』

『生まれた頃から高い身体能力を生かし、様々なバスケット大会で優勝してきた幼き紅葉さん。』

彼女にはお父さんとお母さんと…何歳か年下の妹がいたのです』

幼少期の紅葉さんと思わしき少女が、両親や妹に囲まれバスケットボールを持っていくコマから始まる。

『妹は紅葉さんのようなスポーツの才能は微塵もありませんでしたが、頭が良く、幼少期から様々なことを学んできました』

妹の絵が大きくスクリーンに映る。紅葉さんに似た、青い髪だ。

『紅葉さんと妹は大変仲良しでした。才能は違えど同じ家族。二人は助け合って生きてきたのです』

妹は、どこかで見たことのある少女だった。

『ある雨の日。紅葉さんはいつも通りに家の中で筋トレを、お母さんはリビングでドラマ鑑賞を、妹はキッチンで何かを作っていました。ちなみにお父さんは職場です。

妹が何を作っていたかというところ：もうすぐ母の日だったのでしようか、それとも知的好奇心を満たすためのものだったのでしょうか。今となってはわからないことですが……』

三つのコマそれぞれに、腹筋をする紅葉さんとテレビを見る母親。そして、キッチンでガラス瓶を持つ妹が描かれている。

『しかし、悲劇は起こりました。アホなのかは知りませんが、妹は：何故か有毒ガスを発生させてしまったのです！

有毒ガスはリビングにいた紅葉さんとお母さん、そして妹を襲います』

漫画に描かれた母親と姉妹は、有毒ガスによってコミカルに大騒ぎしている。

『よほど強い有毒ガスだったのでしよう。お母さんが窓を開ける前にガスは家の中に充満し…三人は気絶してしまいました』

三人が、家の中で倒れているコマ。まるで死んでいるかのような、悪意のある描き方だ。

『夕方。お父さんが帰ってくると…家族が三人も倒れているのを見つけてしまいました』

父親が家の中で倒れている三人を見つけ、茫然としている。

『急いで救急車を呼ぶお父さん。三人は病院に運ばれました』

救急車が夜道を走る。

『三人は緊急入院しましたが、ガスが命まで取らないものだったのか。一命を取り留めたのです』

病院のベッドで寝ている、母親と姉妹。

母親の目に包帯が巻かれているのを見て…わたしは嫌な予感がした。

『しかし、またしかし。そこらの昼ドラよりエグいことに…』

姉妹はこれまでの記憶を無くしてしまい、お母さんは目が全く見えなくなってしまうのです！』

何かを探すように手を前に伸ばす母親と、姉妹が「？」の吹き出しを出しながら病院の医者と思わしき人物に質問されている…。

『こうして、紅葉さんの両親は色々あつて離婚を選び…紅葉さんはお母さんとその兄弟に、妹はお父さん側に貰われていきましたとさ』

紅葉さんとお母さん、妹とお父さん。その間には、雷のような亀裂が走っている。

『めでたしめでたし』



スクリーンが真っ暗になり、モノクマの乾いた拍手の音だけが聞こえる。

「その後の家族の行方は…わかるよね？笑えるよね？うぶぶ！まさか紅葉さんの大切なお母さんを失明させたのが妹だったなんて！」

「なるほど…紅葉は、本人の真実を受け取った訳なんじゃないか何かを察する湖林くん。」

「勘のいいやつならわかるだろうけど…藍葉は、あいつは…私の妹だったんだよ」

母親から光を奪った、妹を殺した。

その真実に、みんなは強いショックを受けているのか…何も言葉を発さなかった。

ただ一人、二階堂さんを除いては…。

「おい…もしかして、藍葉があんたの母ちゃん目の見えなくしたから…藍葉を、自分の家族を殺したのか!？」

「その通りだよ。私のお母さんは盲目だった。生まれつきのものだと思っていただけ、

まさか失明の原因が家族とは思わないでしよう？」

でも、今の彼女には疑問がある。わたしは、紅葉さんに尋ねた。

「紅葉さん、ちよつといいかな…」

「鈴原、どうしたの？」

「あの漫画だけじゃ『母親を失明させた原因が藍葉さん』ってことはわからないと思う。

あと、藍葉さんはあなたが自分の妹つてのを知ってたのか？」

「あの漫画を信じるのには時間は掛からなかったよ。私には小さい頃の記憶がなかった。」

妹が藍葉だと思ったのは…藍葉にドリンクを渡されたのと…今日、納屋に11時に来いと呼び出された時だね。

そして…納屋に来た時、ある会話を聞いたんだ…」

「それについては紅葉さんも説明するのは面倒だろうし、どうせなら襲撃当時の映像をオマエラにお見せしましょう！」

…モノクマの濁声だ。

何処かから持ち出したドラムを二つのバチでバンバン、と叩くと、スクリーンに再び映像が映し出された。





納屋の中で…二階堂さんと藍葉さんが話をしている。

「納屋なんか呼び出して…藍葉、ここを実験室にするから掃除して欲しいとかか？」

「違う。実は…ボディーガードになって欲しいの…」

「…アタシ、腕つぶしは強いしこちらの男には負けないつもりだけど…なんで？」

「お姉ちゃんが来てくれる。でも、今のところは…怒っているかもしれないから。今回だけは二階堂さんに守って欲しいの」

映像の中の藍葉さんは、嬉しそうにしている。

「あの人って…誰だ？何で姉ちゃんだってわかったんだ？」

「実は汗をタオルで拭いて、調合した遺伝子検査薬ちゃんです…!？」

「…っ!？」

その瞬間、二階堂さんは頭をスコップで殴られたのか、急に倒れてしまった。

気絶した彼女を踏み越え現れたのは…スコップを持った紅葉だった。

「あんたが…私の妹だったんだね…」

「…紅葉さん…!？」

後退りし、崩れ落ちる藍葉さん。その顔は恐怖で満ちていた。

「あんたのせいで…母さんが…どれだけ辛い思いをしたかわからないのか…？」

「や、やめて…」

藍葉さんはカバンの中を慌てて漁り、電気警棒を取り出す。スイッチが入ると、電流が警棒に流れた。

「違う…私は…お姉ちゃんに会いたくて…!」

「そうだ、あんたさえ…あんたさえいなければああああああっ!!!」

紅葉さんは、スコップを使い藍葉さんの頭を物凄い勢いで殴る。藍葉さんは、一撃で卒倒する。

そして、藍葉さんの持っていた電気警棒を奪い、スイッチを切った。

…映像はそこで終了する。



「悲しいがな、電気警棒じゃリーチが足りなかったのだ。攻撃力が高くてもリーチが足りなきや意味がないのだ」

カラフラは自らの花の部分の左右に揺らす。

「…これが、私の動機の全てだよ。私が真実を知ってからは、藍葉に復讐することだけを考えていた。

殺害場所を温室にしたのは…事件を複雑にするため。死にたくないって思ったんだ

ろうね。

今となつては、どうしようもないことだけど…」

「バカヤロー…」

二階堂さんが震えながら、背負っている改造箒に触れる。紅葉さんは、下を向いたまま無言だ。

「藍葉に命を…返してくれよおおおおおつ！」

「やめてよ、二階堂ちゃん！」

取り乱しながら改造箒を抜く二階堂さんを雨崎さんが止める。

「は、離してくれ藍葉！」

「所詮綺麗事だろうけど、復讐は復讐を生むだけなんだよ。あたしは誰にも死んで欲しくないんだよ！そんなことしても、藍葉ちゃんは喜ばないって！」

「藍葉が死んだのはアタシも悪いんだよ！アタシがお茶会なんて開くから！納屋で藍葉を守れなかったから！だからこれはケジメだ！頼む！一発でいいから…」

その瞬間。バチン、という音が聞こえた。

雨崎さんが、二階堂さんの頬を叩いたのだ。

「…悪くないのは、二階堂ちゃんだけじゃない。みんな、何も悪くないんだよ…悪いのは…」

「雨崎…もういいよ…アタシ…は…うう…」

改造箒を背中に戻し、二階堂さんは頬を抑え黙り込む。その目には、大粒の涙が浮かんでいた。

「思い出があるということとは、自分を動かしてしまうのと同意義でしょう」

「…蒲生、また何か屁理屈でも並べるのか？」

蒲生くんが、何かを考えるように言う。湖林くんを無視しながら。

「藍葉嬢は姉との思い出に動かされ、紅葉嬢は母との思い出に動かされた。

家族との思い出なら尚更…それが悲劇を招こうとも強いもの。思い出のお陰で…人は動くことができるのです」

蒲生くんは持っている本をパン、と閉じる。

「蒲生様、この御本には一体何が書いているのですの？」

「天の教え、とだけ答えておきましょう」

そして、好奇心からであろう一ノ瀬さんの答えを流す。

…わたしは。

殺人を犯した紅葉さんを許せないと感じて、責めることはできなかつた。

親しい人や希望を奪われた怒りは、容易く消えるものではない。

自分は『物語』の記憶がない人間なのに、なぜこんなにも、『紅葉留架という復讐者』

の気持ちか理解できてしまうのか。

それは…わたしにもわからなかった。

でも…一番責められるべきは紅葉さんじゃない。

わたしたちを監禁し、この悪趣味なゲームを仕込んだ黒幕こそが、一番の悪だ。

「ねえねえもう待ちくたびれたんだけどさあ。お涙頂戴な告白も終わったことですし、次のステージに移りましょうじゃないですか！」

モノクマが口には手を当て笑った。

「次のステージ!? また…あのオシオキってやつか!？」

「今回は、『超高校級のバスケット選手』である紅葉留架さんの為に、スペシャルなオシオキを用意しました！」

二階堂さんは愕然とした様子で叫ぶが、あの白と黒の狂気は一切聞き入れなかった。

「そこまでして欲しい訳じゃない! 頼む、処刑だけは、やめてくれ…!」

「もういいよ、二階堂。できるなら…最後にシユート、したかったなあ…」

紅葉さんは、力無さげにモノクマの方向へと向かっていく。

一瞬。

彼女がわたしの隣を通り過ぎる際。

赤いコートのポケットに、何かが入ったような気がした。

「…紅葉さん？」

紅葉さんは一瞬だけ別れを告げたいのか、こちらを向く。

「頼む…みんな…『美郷』の分まで…生きてくれよ…」

しかし、モノクマはハンマーを掲げながら。無邪気に笑っていた。

「では、張り切っていきましよう！オシオキターイム！」

スクリーンは、紅葉さんがモノクマに連れ去られるドット絵を映し出す。

その直後、紅葉さんの首に天井から伸びる鎖が付けられた…。

## 『GAME OVER』

モミジさんがクロにきました。オシオキをかいしします。』



…紅葉留架は、とてつもない長さの平均台の上に立たされていた。平均台の下には大量の針と、大砲が置かれている。

道の行き止まりには、白と黒に塗られたゴール。

紅葉は…両手に3分のカウントダウンを映し出す黒いバスケットボールを持っていた。

### 『BOMBER WOMAN』

超高校級のバスケット選手 紅葉留架処刑執行

### 『3:00』

ブザーが何処かから流れると、紅葉は走りながらボールをドリブルする。

常人なら歩くのが精一杯であろう狭い道の上でも、落ちることなくボールは平均台の上を跳ねていく。

### 『2:30』

途中。大砲からバスケットボールが飛んでくる。

避ける紅葉。ドリブルのペースは落ちることはない。

『2:00』

放たれるバスケットボールの数が増えていく。

疲れからなのかペースは多少落ちたが、ボールが平均台を跳ねる位置は正確なままである。

『1:45』

大砲からボールが飛ばなくなる。

代わりに…様々な実験道具が紅葉目掛けて飛んでくる。

フラスコ、塩酸の入った瓶、顕微鏡、ピーカー、リトマス紙、アルコールランプ…

紅葉の顔に動揺が現れた。実験道具は体々に当たっていく。

それでも…ボールが平均台から落ちることはなかった。

『1:00』

実験道具の飛んでくる量が少なくなった。

薬品、磁石、シャーレ、乳鉢、怪しい薬品の入った瓶、プレパラート、メスシリンダー、

試験管…。



避けていくが、紅葉の服は所々が割れたガラスで破れ、肌の一部は薬品で溶けていた。ボールが跳ねている位置が多少乱れてきた。

『0:30』

再びバスケットボールが、実験道具と共に大砲から放たれ、紅葉に当たる。

紅葉は弱ってきたのか、偶に落ちそうになり息も乱れている。

ゴールは見えてきた。ボールも紅葉も、平均台から落ちそうにない。

『0:08』

ついに、ゴールへとたどり着いた。

紅葉は薬品と障害物でボロボロになりながらも、狙いを定める。

シュートをすれば、『超高校級のバスケット選手』である彼女の最期の希望も叶うことだろう……。

『0:06』

しかし。

紅葉留架は、ボールを手から放つことができなかった。

『0:05』

何故なら。

『0:04』

彼女の妹であり今回のシロであるはずの『超高校級の科学者』藍葉美郷とモノクマが：ゴールの上にいた。

『0:03』

どうして、と紅葉は失意の表情を浮かべる。

『0:02』

紅葉の手から、ボールが落ちていく。

『0:01』

ボールは、地面にごとんと音を立てて落ちる。

『0:00』

その瞬間。

ボールから大きくブザーを鳴ったと思うと、大きな爆発音が起きた。

紅葉の身体は：爆発により、跡形もなく燃えていく。

『暫くして』

モノクマは爆風により吹き飛ばされたが、燃えてしまったマネキンを盾にしたお陰で

無傷で済んだ。

ゴールの下には、バラバラになった焼死体の一部。それだけが存在していた。



「あははははー！ やつぱりオシオキはサイコーだぜ！ フウーハハアアアア！！ いやー、人を殺した悪いやつを殺すと、気持ちいいなあ！」

モノクマは何かをやり遂げたような表情をしている。正直…見たくない。

「ひどい…女とはいえもうこんなコロシアイは嫌ですわ…！」

「紅葉さんの『超高校級のバスケット選手』のプライドすら、へし折ろうとするのか…!？」

「うう…：えらいこつちやや…：なんでこうなるんや…！」

一ノ瀬さんや未隅くん、灰寺くんなど、皆が絶望の叫びをあげる。

「畜生…！」

無念の表情の、檀くん。

「家族同士のコロシアイ…：なんて悲しいのかしらね」

メロドラマを見るかのように、処刑を眺めていた黒木さん。

「紅葉嬢…：天へと登っていったのですね。せめて、来世では幸福な人生があらんことを」

いつもの笑顔な蒲生くん。

そして。

「なんで…どいつもこいつも、平気で殺すんだよ…!」

大粒の涙を流す二階堂さん。

「紅葉さんはメンタルが弱かったのだ？それともただの家族思いだったのだ？復讐を後悔したのか、それとも果たしてスッキリしたのか…知る術は皆無なのだ」

「というわけで、今回の裁判はこれにて平和に終わったのです。つてことでオマエラ、次回のコロシアイもよろしくねー!バイバーイ!」

カラフラとモノクマは、裁判場からどこかへと消えていく。

二階堂さんは、糸が切れたように崩れ込んだ。

「二階堂さん、気を取り直して!」

「さつきは、おかしなこと言っちゃってごめん…」

わたしと雨崎さんは、彼女を心配そうな目で見つめながら慰める。

二階堂さんは俯いたままだ。

「アタシ、これからどうしていいのかわかんねえよ…」

後悔もあるのだろう。絶望しているのだろう。彼女は頭を抱えて、メッシュの入った黒髪をクシヤクシヤにする。

「雨崎。鈴原。誰かを憎んでも、裁判に勝つても、藍葉は報われないのかよ…？あいつは、もう生き返らないのなら…ううっ…！」

ふと。

あることを思いついた。

これで、二階堂さんが立ち直ればいいのだけど。

わたしは首に下げていたオルゴールペンダントを開ける。

ペンダントからは、『きらきら星』のメロディが流れた。

「鈴原…これは…？」

「…鈴原ちゃんそのペンダント、オルゴールだったのね。『きらきら星』じゃん。いい

感じの音色だけど…」

「…モーツアルトの作曲した曲だね。素敵なお曲でしょ」

「これ、モーツアルトだったんか？知らへんかった。ところでモーツアルトって戦士だったよね？」

「貴様、音楽家の偉業も知らんのか…？」

絹川くんが解説すると、湖林くんが灰寺くんに解説を始めた。

わたしは、ここにいる全ての人間に語りかける。

「みんな……ここまでの嬉しかった記憶も、悲しかった記憶も、どうか忘れないで欲しい。それこそが……わたしたちの歩むべき道を開く鍵と、死んでしまったみんなの弔いになるからね……」

「……忘れないことが、皆のためになる……？」二階堂さんが顔を上げる。涙でぐしゃぐしゃになっていた。

ただの説教みたいだし、恥ずかしいし、即興での励ましでしかない。しかし、これで残された皆が落ち着けるのなら構わなかった。

「記憶を、希望に変える。わたしたちができる……黒幕への叛逆だよ」

ペンダントを閉じる。『きらきら星』の音色は消えたが、皆は落ち着きを取り戻している。

「そうか……」

二階堂さんは、ゆっくりと立ち上がる。

「……なら、アタシは今日の事件を、絶対に忘れねえ」

「うん。あたしも友達のこと忘れちゃったら、悲しいもんね！」

「イヴアン君や藍葉さんだけじゃない。バナラさんや紅葉さんを忘れない、それこそが

道…なのかもしれないな！」

二人で手を組み合う雨崎さんと未隅くん。

二階堂さんは、こちらを向く。

「…ありがとうな。鈴原、みんな」

彼女の笑顔を見たのは、久しぶりな気がした。

こうして二回目の、二度と起きて欲しくない事件は終わった。

わたしには『過去の物語』の記憶はない。だが、この『ヒストリエランドでの物語』の記憶はある。

その記憶を武器にして、絶望と戦い抜く…わたしなりの、明日も、生き抜くための生存戦略だ。



【幕間】

ある人物が部屋に戻る。部屋にはカラフラがベッドで飛び跳ねていた。

「『あの場所』で作られたベッドはやっぱりふかふかしているのだ。今のわーが美少女だったら寝そべってグラビア写真撮りまくりなのだ」

カラフラは飛び跳ねるのをやめ、ある人物に語りかける。

「さて、今回の『生還者特典』も机の上に置いておくのだ」

「…カラフラ」

「グラビア写真集の発売日は未定なのだ…って何なのだ？」

人物は、トーンを落とした声でカラフラに聞く。

本当は、そんなことはしたくないのではないか。

あの子から作り出された筈なら、どうしてモノクマに協力するのか。

「かつてのわーはそうだったのだ。でも今はあのお方の『絶望』を叶えるために、日夜働いているのだ」

人物は、またカラフラに聞く。

そうか。今のカラフラは、黒幕に支配されているのか。

「支配って…全てを失ったわーが居場所を与えられただけなのだ。そんなどうしようもない言葉を放つのはやめるのだ」

人物は、啞然としている。



「でも、生還者さんには大いに期待しているのだ。あの人の希望を叶えられるように…  
頑張つて欲しいのだ！」

…人物は、何も言葉を話さなかった。



夕食を終え、ホテルの自室に戻る。

そういえば、紅葉さんが処刑の直前、何かをわたしのコートのポケットの中に入れた  
ような気がする。

ポケットの中身を探る。薄くて硬い感触がする。さっと取り出すと…一枚のIC  
カードがあった。

メルヘンな馬らしきもののイラストが描かれている。

馬。ICカード。もしかして…。

檀くんの入っていた、メリーゴーランドの中央部分。

そこに入るためのものなんだろうか。



夜時間になり、第二エリアのメリーゴーランドへと向かう。第一エリアで蒲生くんと出会うことはあったが、メリーゴーランドの回りには誰もいない。

木馬に当たらないように中央の柱に近づき、そこに付いている四角い枠にICカードをかざすと、扉が開かれた。

メリーゴーランドの内部へと、慎重に入っていく…。



部屋の壁には小型のモニターが大量に埋まっていた。電源が付いているのは1/3のモニターのみだ。

モニターに映っているのは洋館の内部、ホテルのエントランス、喫茶店、ゲームセンター…どれも見たことのある風景だ。

部屋の中央には机と…その上にはノートと4桁のパスワードで開かれるであろう正方形の金庫が置いてある。

ノートを拾い、ペラペラと捲る。罫線が引かれているだけで何も書いていないようだ。しかし…

「あれ？」

真ん中くらいのページに、文字が書いてあった。

『お姉ちゃん、生まれてきてくれてありがとう。』

『私が信じる人にプレゼントします』

：今回の証拠となった、持ち物リストの文字と似たものだ。藍葉さんの文字だろう。これは：遺書だろうか？それとも何かの暗号なんだろうか。暗号だとしたら：

ある考えが思い浮かぶ。

電子生徒手帳を取り出し電源を入れ、『プロフィール』の項目をタップ。目的の情報が載っているページへと向かう。

あつた。

『紅葉留架 超高校級のバスケット選手

死亡済

誕生日：2月17日

好きなもの：菓子パン、寿司

嫌いなもの：借金』

憶測だが。

『お姉ちゃん』『生まれ』と藍葉さんの文字で書いてあるということは…パスワードは紅葉さんの誕生日ってことだろう。

電卓のように数字が並べられた金庫のボタンを『0217』の順にゆつくりと押す。金庫は、カチャリという音を立てて簡単に開いた。

金庫の中には、赤い液体の入った5cmほどのガラスの小瓶が一つ入っていた。

小瓶を手にとってみる。白いラベルが貼ってあり、『思い出しドリンク』と手書きで書いてある。

ラベルを良く見ると、説明書きと原材料が四角で囲まれてある。説明書きをじっくりと読む。

『記憶を失った時にご利用ください。少しの出来事です但し思い出すことができます。一人一本のみ飲んで下さい。一人二本以上飲んだ時の副作用については保証致しません』

…材料の欄を見る。様々なハーブや薬品の他に、あのケルブレムが含まれていた。わたしたちに恐ろしい幻覚を見せたケルブレム。それが含まれているとなると少し怖くなる。

それでも、探求心からか、義務感からか。飲んでみたいという気持ちが出てきた。

もしかして、藍葉さんが調べていたのは、自分と姉との遺伝子検査薬の他にも思い

出しドリンクだったのな。

消えたケルブレムの二本のうち、一本を取っていったのは彼女なのか。

用心深い藍葉さんのことだ。遺伝子検査薬で鑑定し、思い出しドリンクで姉との記憶を思い出したのだろう…。

ノートの『私が信じる人』は…恐らく信頼できる人だと思う。

わたしは藍葉さんにどう思われているのかはわからないけど、彼女の遺志は継ぎたい  
と  
思  
っ  
て  
い  
た。

◆ 思い出しドリンクを頂戴し、メリーゴーランドの内部から去っていった。

◆ 部屋に戻る。

照明に照らされ赤く輝く思い出しドリンクをじっと見つめる。

「もしかしたら、わたしの失われた記憶も戻るのかも…」

一本しかないのが残念だし、怖いけれど。

自分の記憶を消したであろう黒幕に立ち向かうためには、記憶を取り戻すことも重要  
か  
も  
し  
れ  
な  
い。

それに、藍葉さんがこのドリンクを遺したのなら、仲間のために動いたであろう彼女

も信じたかった。

小瓶の蓋を空け、思い出しドリンクを飲み干す。  
独特の甘辛い味がした。

その瞬間。

「——っ！」

割れるような激痛が背中の中の傷と頭に走り、思わず声にならない叫び声をあげる。  
目の前の世界が、光で満ちていくような…

光が——

■ ■ ■ うの ■ ■ ■ は ■ ■ ■ わで ■ ■ ■ い ■ ■ ■ な ■ ■ ■ い

ぜ ■ ■ ■ うの ■ ■ ■ いは ■ ■ ■ んさ ■ ■ ■ かい

■ ■ ■ しは ■ ■ ■ かいに ■ ■ ■ らした

■ ■ ■ とはぜ ■ ■ ■ わ ■ ■ ■ は ■ ■ ■ を ■ ■ ■ つた

全ての人々が笑っている。

全ての人々が助けを求めている。

大切だった人々は別れを告げた。

あの幻覚のように、顔の見えない男が刃物をわたしに向けている…。  
どれも。写真のように断片的だった。

唯一、思い出せた…

くつきりとした記憶は。

満天の大空の下。

少女が隣に座っている。

「わたし、流れ星に願うんだ。みんなの願いが叶いますようにって」

少女の声だ。どこかで聞いたことがある。いや、わたしはこの声を知っている。

「じゃあわたしは…せめて、自由になりたいって願おうかな」

空には流星群。恐らくこの地域で一番空が綺麗な場所だ。

隣の少女は、誰だろう。

気がついたら倒れていた体を起こす。

「…ち…」

頭痛に耐えながら、机の引き出しの中から、それを取り出す。

「なんで…」



思い出した。

かつて、わたしの友達だった。

写真の少女。赤褐色の髪と、黄色いワンピース。

叶千華。

そういう名前の少女との、星空の記憶。

ダンガンロンパ ・ フラワーズ Chapter 1  
「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」

END

生き残りメンバー

残り12人

To be continued:

・「夢色のコラール」を入手しました。

2章にて模索した証。紅葉留架の遺品。

小説家・松笠楽海女の代表作であり青春小説の文庫本。紅葉の愛読書。

信心深い落ちこぼれの少年がバスケット部に入部し、成長していくシンデレラストーリー。

## Chapter 2 「廻り空転スル黙禱ノ薔薇」 特別編

【被害者 自由行動】

「うう…どうしよう…私の研究室…大丈夫かな…」

藍葉さんが何かを心配しているようだ。

「そんなに心配しなくていいよ。一緒に脱出する方法を見つけよう？」

「…あの、言っつていいかな…？」

「？」

「もし脱出口が見つかったとして、そこにトラップがあつたら…鈴原さんはどうするの？」

脱出口が偽物だとしたら？マフィアが待ち構えていたとしたら？

私たち、脱出できずに捕まるか死んじゃうよね…？」

「その時は、最善の方法を考えた方がいいと思う。あと、準備かな。」

「準備？ 護身用にゴルフクラブちゃんとか装備した方がいいかな？ 武器も作った方がいいかも。」

女性でも扱える銃みたいな飛び道具ちゃんとか、対マフィア用には必要だよね…？

あと、脱出口までの道とかが迷宮みたいな道だとしたら目印をつける用のペンキちゃんやテープちゃんもいるよね？

うう…またカバンに物が増える…」

何かに『ちゃん』を付けるのはともかく、彼女自身は石橋を叩くタイプ…みたいだ。

「もし物が多くなつた時はみんなで持った方がいいんじゃないかな」

「それもあるよね…でも雨崎さんや絹川君に重いものを持たせるのも…」

「そこまでは考えてなかったな…」

「やつぱり未隅君や湖林君が先頭がいいかな？ いや、力が弱い人が先頭の方がいいのかな？」

…ああ、また考えすぎちゃったよ…！ イライラさせちゃう、よね…？」

…彼女は、考えすぎてしまうタイプみたいだ。というか、『石橋を鉄橋に改造してランマーで叩いてから渡るタイプ』だ…。

「やつぱりまた作るしかないのかな、アレ…」

「アレって?」

「体にかけると10分間だけ動けなくなる薬品ちゃんなの。水鉄砲がお土産屋にあったからその中に入れてもいいし。」

昔暴漢に襲われたとき、カバンの中からそれを取り出してかけて警察に通報したんだ。」

随分とすごい薬品を作るんだな…その用心深さは、彼女の科学への関心にも繋がっているのかな。

「もし脱出できたとして…出所した暴漢が復讐しにまた来たら…その時はスタンガンちゃんか小型火炎放射器ちゃん持っていった方がいいかな…」

「火炎放射器は威嚇にはいいんだろうけどやりすぎなんじゃ…」

それからわたしは、藍葉さんをしつかり慰めた…。

『用心深く、石橋を鉄橋に改造してランマーで叩いてから渡るタイプの藍葉。』

しかしその性格が彼女の科学への関心へと繋がった。』



藍葉さんは、何かが書かれた紙を見つめながら、カバンの中身を探っている…。

「ちよつといいかな。今、何をしてるんだ？」

「…えーと、メモ帳ちゃんを探しているの…」

メモ帳か…。藍葉さんなら絶対に持ってそうだけど…もしかして、落としてしまったのかな？

「表紙の青い撥水性のものなの。ヒストリエランドで気づいたことかを書いてるんだけど…もしかして、落としたのかな…？」

藍葉さんはソワソワした様子で周りを見渡している。

「あの、その紙は…？」

「…カバンの中に何を入れたかを書いたリストなの」

「カバンの中、一体何を入れてるんだ…？」

藍葉さんは無言でリストを渡してきた。

ビーカーやフラスコ、リップクリームの入ったポーチ。

遭難した時の緊急連絡先を書いたカード、ビスケット。

五色ペン、英会話の本、ライト、マッチ、ソーイングセット…。

大きなカバンに、結構色んなものを入れているらしい。

「とりあえず、遭難したり誘拐されてもいいようになんでも入れてるんだよね…スマホや財布はいつも入れているけど、モノクマの取られちゃったし…」

「でも、備えあれば憂いなしって言うし、準備は大切だと思うよ。わたしも天体観測の時は防寒用のカイロとか色々持っていくし」

「鈴原さんもそうなんだね、安心したよ。クラスメイトからは考えすぎって言われるけど…」

「じゃあ、メモ帳を探しに行こうか？」

「あ、メモ帳ちゃんのことから話が脱線しちゃった…！探そうと思ってたのに…」

「思い出せたからいいよ、一緒にメモ帳探そうか？」

「いいよ。でも、絶対に離れないでね。単独行動は怖いから…」

それからわたしたちは、様々な場所でメモ帳を探した。

街路樹を揺らしたり、お土産屋を隅々まで見ているうちに…ウォータースライダーの近くで発見できた。

「ああ、メモ帳ちゃんだ！良かった！良かった！水の中に入ってたら濡れながら取りに行く羽目になって…それで風邪を引いて…そこを殺しを企てようとする人間に…うう…」

藍葉さんはメモ帳の中のページを確認すると、大切そうにカバンの中へと仕舞っていった。

本当に良かったけど、ホテルの部屋は指紋認証式だから、勝手に入る人はいないと思う…

「でも、方が一のためにトラップちゃんは仕組んでおこうかな…」

看病している人がうっかりトラップを踏んでしまったら大変なことになりそうだ…

藍葉さんが、これ以上物をなくさないことを願っておこう…。

『いつも持ち歩くカバンには実験道具だけでなく様々なものがいっぱい。』

コロシアイの時も怯えているのか、自室にトラップを仕込もうと考えている…。



「藍葉さん、天文学のことには詳しい？ 占星術とかが有名だけど…」

「…」

藍葉さんは、黙って嫌そうな顔をしている…。

「ごめんね。占いにはあまりいい思い出がないんだ…」

「いや、こつちこそごめん」

心配性だから占いには最低限頼ると思ってたんだけど、違うみたいだ…。

「実はお父さんがあるタロット占い師と仲良くなつて、この高校は悪魔の正位置とか言われて志望校を変えられそうになつた上に、



ラッキーカラーだからって全身黒い服を着せられそうになったんだよね。黒い服は夜道で事故や犯罪に遭いやすいのに……うう……」

こっちもお父さんと苦労しているんだな……そうなる……」

「お父さん……オカルトを信じやすかったりする？」

「そうなんだよね。お父さん、科学だけじゃなくてオカルトも研究しているの。」

親子揃って科学者なのか……

「例えばUMAにハマっていた頃は家中にびっしり怖いUMAの写真を貼ってたし、黒魔術にハマっている時は毎日鶏料理を食べさせられたんだよね……」

ニワトリを生贄にしたのかな。それにしても、儀式に使った動物を娘に食べさせるのか……

「色々あって、信じなくなっちゃったんだよね。オカルトも、占いも……。女の子向けの雑誌の占いすら怖くなっちゃった。」

そうしているうちに……結局、最後に追い詰められた時に信じられるのは私だけなんじゃないかと思えてくるんだ……」

「でも、それって自分を信じることができるってことじゃないかな？」

「自分を……信じる？」

「孤立無援の状態で自分すら信じられないのなら、もう誰も味方がいないのと同じだろ

うし。そういうの、ある種の強さだと思っただ…」

「そうなんだ…私の、強さ…」

藍葉さんは少し思考したようなそぶりをした後、こちらを向いて…

「ありがとう…気が軽くなったみたい」

「いや、それほどでもないよ。でも…安心できたようで良かった」

藍葉さんがこれからも、自分を信じることができるようになればいいな…。

『父との因縁ゆえか、占いなどのオカルトは信じない。代わりに自分を信じることはできるようだが…。』



「私…ペットボトルロケットちゃんを作ろうと思っただ…」

「ペットボトルロケット？確かにお土産屋にあるもので作れそうだけど…」

「救援メッセージを書いたロケットちゃんを壁の外に飛ばしたら、外にいる誰かに助けを呼べるんじゃないかなって思っただ…」

でも、モノクマやカラフラが怒らないかな…？」

「確かにそうだけど、やってみなければどんな物事も意味はない…と思う。良かったら手伝おうか？」

「ありがとう！じゃあ早速作ろうよ！」

それからわたしたちじゃロケットの材料をお土産屋で集め、レストランで作ることにした。

ロケットの部品を作っている途中、気になったことがあったので聞いてみることにした。

「どうして、ペットボトルロケットを作ろうと思ったんだ？藍葉さんなら気球とかも作れそうだけど…」

「お父さんから、ジェット機の飛ぶ高さまで飛ばせるペットボトルロケットちゃんの作り方を教えて貰ったんだ。」

ジェット機の高さまで…それならヒストリエランドの壁の向こうにも飛ばせそうだな。

「お父さんは優秀な科学者で、大学教授なの。何処か騙されやすかったり、様々な儲け話に弱い人だけど…」

頭良さそうだけど、明らかに残念な人っぽいな…。

「つい最近じゃ宝くじの当選番号を予測するマシンを買って見事に外したり、怪しげな団体の特殊な遺伝子操作で身体能力を上げるプロジェクトなどに投資してきたの。」

こうして借金を積み重ねてきたために、親子揃ってヤクザに追いかけて回されてきたんだ…」

そこまで酷い目にあってきたのなら、用心深くなるのも当然かもしれない…。

「ある日、お父さんが2日暗い帰ってこなくなったの。不安になったから100通もSMSを送ったよ。もしかしたら、マフィアや宗教団体に誘拐されたかもしれないと考えたんだらうね…」

お父さんは自分の研究所で残業していただけなんだけど。その後、メンタルクリニックを受診することになったんだ…」

メンタルクリニックは信じるんだね、藍葉さんのお父さん…。

でも、それだけ二人はお互いを心配しているってことなのかな。

そうやって話しているうちに、ロケットが完成した。

「ああ…日が沈む前に作れて良かった！これも鈴原さんのおかげだよ！」

その後、噴水広場でロケットを飛ばすことになったけど…突如現れたカラフラに止められ没収されてしまった。

わたしと藍葉さんは、少し落ち込みながら部屋に戻った…。

『父親は優秀だが、どこか騙されやすい大学教授。反面教師にしてきたと同時に、なんだ

かんで心配しているように見える。』



「あのさ、藍葉さんのお母さんはどうしているんだ？話を聞かないけど…」

「…記憶にないんだよね」

記憶にないって、どういうことだろう？

「でも、お母さんは生きています。私はそう感じるの…」

藍葉さんが根拠のないことを信じるとは思えない…一体どうして？

「家には倉庫があつて、その中に空気の抜かれたボールが入っていたんだ。

運動ができない私がボールを持つのかと思っていたんだけど…少し気になって、ボールに自作の遺伝子検査薬ちゃんをかけてみたら、自分の遺伝子と近い反応が現れたの。

だから、生き別れのお母さんかきょうだいがいるかもしれないと考えたんだよね…」

「お父さんにはそのことを話したのか？」

「話したんだけど…ボールを没収されて『このことを忘れなさい』と言われたんだ。

関心なさげな口ぶりだったけど、もしお母さんが一方的に私を捨てて、何処か行つてたらどうしよう…って、その時思つたんだ…」

相変わらず不安と恐怖が抜けていないけれど、ここは…励ますしかない。

「藍葉さんは自分の力や意志を信じている。信じて行動すれば、きっとお母さんには会えると思うよ。今の、藍葉さんならね…」

「…動けば、会えるかな？」

「そうだよ。大切なのは…実行することだと思う…それでも怖いのなら、わたしが手伝うよ」

「…ありがとう」

いつも不安げな藍葉さんが、優しく笑ったような気がした。

「探すことになったら万が一のために鈴原さんには、護身用のボウガンちゃんを持たせようかな…」

ボウガン!?物騒すぎないか!?

「お母さんがマフィアの幹部だったり、連れの悪い男がいるとしたらやっぱり不安だからね。」

大丈夫だよ。動けなくなる程度の痛みを与える、刺さらない矢だから…」

「どんなボウガンなんだ…」

まだ心配性なのが治っていないのかな…

でも、そんな藍葉さんだからこそ『信じる』ということが必要なのかもしれない。

そんな藍葉さんを助けたい。わたしは、そう思えたのだ…。

「鈴原さん。あなたといると、とても安心するよ。これからも頼って…いいかな？」

『実は生き別れの家族がいると考えている藍葉。ヒストリエランドを出る際には家族探しの手伝いをしようと約束する鈴原であった。』

・『藍葉のパンツ』を入手しました。

藍葉愛用の国産綿100%ショーツ。ズレにくいので心配性の人にも安心して履ける仕様になっている。安定の白いパンツ。



【犯人 自由行動】

「…」

「…」

紅葉さんは、文庫本をじつと読んでいる。

話を読もうにも邪魔だと思われたらどうしようかな…。

そう考えているうちに、紅葉さんは本を閉じて立ち上がり、どこかへと向かう。

「も、紅葉さん？どこへ行くんだ？」

…紅葉さんを追いかけていく。

辿り着いた先は、お土産屋だった。紅葉さんは遊具のコーナーを物色していく。

「紅葉さん…何を探してるんだ？」

「…ボールだね。できれば固めがいいな。バスケの練習をするの」

彼女はいつも、バスケ熱心で読書熱心なんだな。

「鈴原、一つ言っただいかな？筋トレにランニング、シユートやドリブル、イメージ

レーニング…」

バスケの練習ってのは…一人でもできるんだよね、正直言っ

それ、それ、遠回しに邪魔って言ってるのかな…。あまり付いていかない方がよかつ

たな…？

固そうな桃色のゴム毬を見つけ、傍に抱えたと思うとわたしの方向を向く。

「でもさ、バスケの『試合』ってのは一人ではできないんだよね」



「…えっ?」

「バスケットのは、自分や味方のチームだけでなく相手の動きを見ていかに勝利を掴むかのスポーツなんだ。」

他の球技にだって言える。テニスもゴルフも、相手と点数を競わなければできない。例外はスカッシュやボウリングぐらいだと思うよ。だから、二人以上での練習も必要なんだけど…」

「もしかして…わたしに練習を手伝って欲しい…とか?」

「…別に。正直素人相手に練習なんて時間の無駄だし、一人での練習の方が気楽なんだよね…」

やっぱり、そう返すんだ…

「つてことで、私はどつかでドリブルの練習でもしとくよ。じゃあね」

紅葉さんはゴム毬を抱え、どこかへと去っていく。

本当に一人が好きなんだな、紅葉さん…

『バスケットの練習は一人でもできる…と言い張る紅葉。』

しかし、バスケットの試合は一人ではできない…というのも彼女の持論である。』  
心がヘトヘトになりながらも、次の目的地へと向かった…。



『…』

「…」

紅葉さんは、今日も文庫本を読んでいる…。

「ちよつといいかな？ 一体何を読んでいるんだ…？」

「…これ？」

しおりを挟んでから本を閉じ、本を私に渡す。

「どうやら『アドニス の 季節』という小説らしい。宗教画のような表紙が印象的だ…。

裏表紙を見てみるとあらすじが書いてあった。

『気難しい美男子・青木と聖母のような女・三島、小悪魔的な少女・如月の三角関係を描いた悲喜劇！』

でも、本の帯には『爆笑ラブコメディ』と書かれてある。宣伝してる上で矛盾してもいいんだろうか…？

紅葉さんに本を返した後、ちよつと訪ねてみた。

「いつも本を読んでいるけど…どうして本が好きなんだ？」

「…長くなるけどいい？ 私の家は貧乏で、ゲーム機どころかトランプすら置いてなかつ

た。図書館で借りてきた本が数少ない娯楽だった。

それに本を読んでもいけば『所詮バスケットしか出来ない頭の悪い人間』って舐められることはなくなるからね…

うちの高校の女子バスケット部、あまりいい結果が出せなくて前の高校では冷遇されてたんだよね。

どれくらいかってと、練習も体育館の1/4しか使わせてもらえなかった」

「なんだか、酷い高校だね…」

『アドニスの子節』のページを開きながら紅葉さんは言う。

「バスケット部に入部した時は困ったけど…部員の間である女子向けのライトノベルが流れてることに気付いたんだよね。」

そこで思いついたんだ。マネジメント本や有名バスケット選手の伝記を皆に読ませれば、ある程度は上達するんじゃないかって」

読書でバスケットが上達する…のかな？

「難しいものだけじゃない。色んな本を読んで探して、部員の皆にも分かりやすくバスケットのようになる本を探したんだ。それをバスケットにも通じる本だから…って何冊か読ませて、練習にも応用させていって、チームを育ててきたんだよね」

本を読ませれば集中力も鍛えられるし、彼女は結構なマネジメント能力があるんだな

…

紅葉さんは本を膝に置き、わたしに語りかけた。

「話が変わるけどさ…私のバスケのポジションって、どんなのだったか覚えてる？」

「えつと…ポイントガードだったよね？ っていうポジションなんだ？ バスケ、パスとかシュートぐらいいし知らないんだ…」

「鈴原、ポイントガードも知らないんだね」

誰もが知ってる知識じゃないと思うんだけど…

「ポイントガードは簡単に言えば…チームの司令塔のような存在で、パスやコミュニケーションションなどで皆を勝ちへと導いていく…みたいな感じだね。」

「一番とも呼ばれててね。高い知能とリーダーシップ、状況把握能力が必要となるポジションだよ」

「そうか。本を部活で流行らせるほどのチームを纏める力があるから司令塔であるポイントガードを任せられているんだね。」

「これも『超高校級のバスケ選手』の才能なのかな…？」

「じゃ、これもそろそろ読み終わるし私は新しい本探してくる」

『アドニス』の本を持って、どこかへと消えていく紅葉さん。

ポイントガードであっても、マイペースなところはこのヒストリエランドでも変わら

ないようだ…。

紅葉さんのバスケの才能について、わかった気がする…。

『本好きであり、それをバスケに生かせるほどの才能の持ち主。』

だからこそポイントガードを任されている…のかもしれない。』



紅葉さんの筋トレと、ランニングが終わってからの休憩中。

彼女はそっと呟いた。

「安里…今頃どうしてるかな…」

「あんりって…誰だ？大切な人？」

「弟だよ。弟といっても、母さんの兄の子だけど」

「…母さんの兄ってことは…伯爵の『伯』、父親の『父』と書いて…伯父さんだったよね？」

「父母の兄がそうだね。…私は今、母さんと兄の伯父さん、そして伯父さんの子供の弟・

安里と住んでる」

「…紅葉さんのお父さんと、安里くんのお母さんは？」

「私の父さんは記憶にないし、多分死んでる。伯父さんの奥さんは安里を出産してすぐに死んだ」

少し憂いのある顔からして、聞いてはいけないこと聞いちやったみたいだ…

「…ごめん」

「いや、別にいい。父さんより母さんのが多分よっぽど深刻だから。母さんは目が見えないから娘の私と一緒に伯父さんたちの所に置いてもらってるんだ」

お母さん、目が見えないのか。そうなると、生活が結構大変そうだな…。

「だから内職くらいしかできなくて、伯父さんが安月給の工場で働いてる。そのせいかいつも学校でいじめられてるんだよね、安里…」

不安そうな感じの声だ。それほど安里くんを大切にしているのかな…？

「安里くんは、どんな人間なんだ？」

「…弱気で努力家な、寿司職人見習いだよ」

「寿司職人…？近い将来『超高校級の寿司職人』にでもなるのかな？」

「なれるといいんだけど。伯父さんがいつもクリスマスに買ってきてくれるお高めの寿司を気に入ってき、『将来お寿司を作る仕事に就きたい』って言ったんだ。」

最近はある青年寿司職人に弟子入りしてき。厳しい修行に耐えながら学校に通ってる。

でもその寿司職人、ある巨大寿司チェーン店から妨害受けててさ。例えば、貴重な海苔にガソリン撒いて燃やしたり、材料のエビを踏み潰したりとか……」

「燃やしたり……踏み潰したり!? 酷いじゃないか……警察に連絡したほうがいいよ!」  
「そうできたら苦労しないよ。あの寿司チェーン店、政界にも顔が利くからね。それでも、あの職人と安里は、なんとかしてあいつらに負けないように努力してきた。」

そして安里は、去年のクリスマスにかまぼこのお寿司を作ったんだ。塩味の効いたかまぼこと酢の味がマッチしてて、美味しかったな……

あいつは本当に成長したよ。泣き虫から、立派な寿司職人に……」

家族について話す紅葉さんは、とても安心したような、生き生きとした表情だ。

「紅葉さんは……家族の努力を認めることができる人間なんだね」

「……そうなんだ……」

少し顔が赤くなっている。本当のことだったのかな……?

『ヒストリエランドの外に置いてきた、大切な家族。』

目の見えない母親と伯父、寿司職人を目指す徒弟をいつも大切に思っている。『彼女が家族に早く会えることを願いながら、わたしたちは別れた……』



「ねえ鈴原、いいバイト知ってる？」

バイト？紅葉さんの家の経済状況のことはわかってるけど…どうしていきなり聞いてくるんだ？

レストランでのバイト以外は記憶にないぞ…。

「ごめん、わたしバイトのこと良く知らないんだよね…ここから出て、見つかったら教えてよ」

「ならいいよ、『あれ』より安全で稼げるバイトがあればなって」

『あれ』って一体…？」

「…暗黒バスケットだよ」

紅葉さんは少し間を置くと、真顔で言った。

「それって、裏社会のバスケットみたいな？」

「簡単に言うとうそだね。うちのチームがアメリカの高校のチームに完勝した際に、相手チームのコーチに誘われたんだ。

一勝ごとに100万から貰える…最初は半信半疑だった。でも、家の借金を返すためには何でもしようと思ったよ。

そして暗黒バスケットのコートにやってきた時は…正直驚いたね。だって、人体改造を施



した身長3m超えの選手相手の1on1だったしね」

：借金はともかく、3m超えの選手と戦ったのは本当の話なのかな…？いや、紅葉さんが嘘をつく筈がないし…。

「正直苦戦したよ。素早さも体力も見たことのない超人レベルの強さだった。

でも、どんな選手にでも弱点はある。そう考えて相手を必死に観察して、ギリギリで勝てた…そんな感じだった」

「勝ててよかったけど…それ以上の戦いには挑んだのか？」

「それでも借金は全額は返せなくてね。1on10とか、炎に包まれたコートでの試合もあつたよ。

負けないように挑んできたけど…一番きつかったのは観客がコートに刃物やら鈍器やらを投げってくる試合かな。流石に命の危険を感じたね」

観客まで危ないバスケット…選手側は楽しいのかな…？

紅葉さんが安全なバイトを望んでいる理由が、なんとなく分かった気がする…。

「借金はなんとか返せたけど。もう暗黒バスケットからは足を洗いたいし、次はまつとうなバイトをやりたいんだよね。」

もしお金が貯まったら安里と、新型ゲーム機で遊びたいな…」

自分のバスケットチームのために本を広めたことといい、家の借金を返すための暗黒バス

ケといい、紅葉さんは他人想いなのかな？

やりすぎな点は少し、不安になってくるけど…

「それにしても…どうしてゲーム機なんだ？」

「安里がゲームセンター好きでさ。数少ないお小遣いで色々遊ぶんだよね。格闘ゲームとか、パズルゲームとか。」

「紅葉さんが相手しているのか？」

「そうだね。勝ったり負けたりしてるけど…結構楽しいよ」

彼女は、命を賭けた勝負よりも、相手と楽しめる勝負を楽しんでいる。

わたしは、心からそう考えたのだった…。

『貧乏な家族のために、一家の大黒柱として暗黒バスケットに挑んだりしている。鈴原が不安になるほどの他人想いだったり？』



紅葉さんが、噴水広場でジョギングを終えた後のことだった。

「鈴原、練習手伝ってくれる？」

「練習？いきなりどうしたんだ？この前はバスケの練習は一人でできるって言ったのに？」

「それは前言撤回させてもらうよ。なんとというか、一人で練習するのもいけど…今は二人でできるやつがしたいんだよ」

…気が変わったのかな？ここでは紅葉さんの要望を聞いてみよう。

「いいよ。何をすればいいんだ？」

「まずパス練習からね。ボールをパスするからそれを受け取って、また私にパスするだけがいい」

よし…やってみよう。

紅葉さんはいつもの桃色のゴム毬を一直線に投げてきた。

ゴム毬は、凄いスピードを出してこっちへ向かってくる…！

バシッ！

…なんとか受け取れた。あまりにも力強いパスだったので、少し手が痛いけど…。次はわたしがパスする番だ。狙いを定め、ゴム毬を相手に一直線に投げる。

紅葉さんは、難なくゴム毬を受け取った。

「あんた、結構力はある方だね。もしかしてどこかで鍛えていたとか？」

「あまり鍛えたことはない…と思う」

これを何回か繰り返していくうちに、次の練習になった。

「じゃあ次はボールを前じゃなくて宙に投げて。私が受け取るから」

紅葉さんからボールを受け取り、それを高く宙に投げる。紅葉さんはジャンプし、ボールを片手で受け取る。

そのまま素早く、わたしにパスをしてくる。それを急いでキャッチする。

「ほら、ぼーっと立ってないで次は左か右に投げて。これを繰り返すよ」

立ったままがダメだったのかな。わたしは慌ててボールを左上に投げた。

紅葉さんは投げられたボールに手を伸ばし、それをまた手中に収め、わたしの方面に投げてくる。

わたしが右か左かに投げ、紅葉さんがキャッチし、それをパスしていき…

これを、何回か繰り返していく。

…数十分ほど経った後。

「じゃあ、休憩にしようか。ほら、スポーツドリンク二本持ってきたからあげるね」

ストレッチする紅葉さんの傍らには、スポーツ総合雑誌が置いてある。これもお土産から貰ってきたのかな…?

ドリンクを飲みながら、紅葉さんはわたしに話しかけてきた。

「さっきはありがとうね。いい練習になったよ」

「いや、こちらこそありがとう。紅葉さんは、バスケットに一生懸命なんだね」

「そっか。実は…練習や試合以外で他人とこんな風に接したこと、正直ないんだよね。あんたが初めてっていうか」

他人との関わりを嫌う紅葉さんが、心を開いている。

そうやってコミュニケーションをとってくれるとなると、こつちまで嬉しくなるな。

「こういうのを…アレって言うんだらうね」

アレって？えーと、こういうのは…

「ベストフレンドってことかな？」

「そうだね。正直、少し恥ずかしいけど…これからはそう思わせてもらおうよ」

…そう言ってる紅葉さんの笑顔は、どこか爽やかそうに見えた。

「じゃあ、あと10分くらいしたら練習再開するけど…あんたもついて来る？」

「いいよ。でも次はパスは弱めにしてほしいな」

でも、これが友達…いわゆるベストフレンドってことなんだろうね。

紅葉さんと、わかりあえて本当に嬉しい。わたしは、そう感じたのだった…。

「友達ってのも、やっぱりいいのかもね。あんたのお陰でようやく気づけたよ」

『珍しく練習に付き合ってほしいと告げた紅葉。鈴原をベストフレンドと認め、誰にも

見せないような笑顔を見せてくれた。』

・『紅葉のパンツ』を入手しました。

紅葉留架の履いているボーイレッグシヨーツ。男性の履いているトランクスに似ているが、意外と動きやすい。



### 【特殊イベント】

#### 【二章その1】

ヒストリエランドに来て、7日目昼のこと。偶然出会った雨崎さんに話しかけられた。

「鈴原ちゃん！ちようどいい所失礼するね！」

「…何かの誘いかな？」

「みんなでさー、ゲーセン女子会…しない？今の所二階堂ちゃんを誘ってるけど…」  
「いいよ。でも…何でゲーセン？わたし、ゲームセンターに行つた記憶なくて心配なだけ…」

心配そうなたたしに、雨崎さんは語りかける。

「大丈夫だよ！久々にゲームやりたくなつてさ。でも、ここは一人でやる家庭用のゲームなんて置いてないし、アーケードのゲームつて大勢でやった方が楽しいでしょ？」

…この前モノモノマシーンから出てきた『超技林 第55版』さえあれば、わたしでも楽しめるかな…？

「そういえば丁度お土産屋でゲームの本があつてさ。あれを読めばみんな楽しんでくれると思うんだ。だからみんなでゲーセンに行こう」

「分かった！じゃあ一時半にゲーセン前に集合ね！」

こうしてわたしたちは、ゲームセンターに行く約束をした…。



ゲームセンターの中には、雨崎さんと二階堂さんと…紅葉さん、黒木さんがいた。

「一ノ瀬ちゃんは女子会なんて論外って言うてくるし、藍葉ちゃんは怖いって言うて

断ったんだよね…」

「ところで、何で黒木までいるんだ…？」二階堂さんが少し焦っている。

「ゲームから映画になる作品なんて沢山あるからね。例えば、ファンタジーの入った原作がフルCGを使った完全なSFモノになったりとかね。作品のネタにならないかしら？」

黒木さんが優雅(?)に解説している隣で、紅葉さんはスポーツドリンクを飲んでい

る。

「今日の練習終わって暇だったし。こういう集まり、慣れてないけど…」

「この本があれば、初心者でもいい所まで行けるんじゃないか？」

わたしが『超技林 第55版』を休憩用のソファの上に置く。

「あー！これ父ちゃんが持つてるやつだ！えーと、この本に載ってあるアーケードゲームは…」

と、二階堂さんが横からパラパラと捲り…ある特集を指差した。

『ストラグルファイターZero』と呼ばれる対戦ゲーム。ゲームセンターの隅に筐体はある。しかし…

「このゲーム、無駄にグロくない…？」

「え？血が出たり、腕がちぎれたりって普通じゃないかしら…？」



「でも結構面白いって評判のゲームだぜ？誰かプレイするやついないか？」

一部以外はドン引きしている空気の中、手を挙げたのは…紅葉さんだった。

「こういうゲーム、家族が遊びたいってせがむんだよね…お金ないし月に数回やる程度だけど、結構楽しいんだ」

「マジか？紅葉もやるんだな！『超高校級のバスケット選手』だから絶対反射速度も強そうだけど…アタシは負けねー！」

数分後。

「二階堂ちゃんが負けた…!?というか、攻撃するスキが見当たらなかったよ!?」

「対策は十分だったのに!?コンボせっかく繋げそうだったのに!?」

二階堂さんが頭を抱えながら悔しがっている。結果は…紅葉さんの圧勝だった。

「パワーキャラとかこの本には書かれてるけど…扱うのにはテクニクが必要だったようだね」

「でも、紅葉ちゃん凄い！どうやって勝ったの!？」

スポーツ選手にインタビューするかのようには、雨崎さんは紅葉さんに勝利法について問う。

「私がいつもやってるバスケットと同じだよ。頭脳と敏捷性と状況判断能力が必要になる。じゃあ、自主トレの時間なんで席外していい？」

「いいけど、紅葉ちゃんはお土産とかいらない？」

「別に。これからは好きにさせて」

紅葉さんは椅子から立ち上がり、ゲームセンターの外へと向かっていく。

「うう…ダチと遊んでて負けたことなんてねーのに…よし鈴原！次はUFOキヤツチャーで勝負しようぜ！」

「わ、わたしが…？」

「自分が勝つまでやめないって、ギャンブルでやつちやいけないことなんじゃないかな…？」

雨崎さんは、わたしと二階堂さんを見て冷や汗をかいている。

それからわたしたちは、様々なゲームで遊んでみたりした。

黒木さんはクイズゲームで、映画の問題しか解かなかつたり。

二階堂さんと雨崎さんは、パズルゲームでなかなかいい所まで行き…

「凄いわ鈴原さん！このステージは正答率低いのに、見事な全問正解だなんて！」

わたしは黒木さんのプレイしていたクイズゲームで遊ぶことになっていた。

「まあ、天文学の問題だったからね…」

「でもコラプサーなんて単語、私にもわからなかったもの。ブラックホールの前の呼び

名と答えられるのは多分あなただけよ？」

「そうだろうね…。ここに来てお父さんから教えてもらった知識が役に立つとは思わなかったよ…」

「雨崎すげえじゃん！あのウサギのぬいぐるみを四回で手に入れるなんてな！」

「ぶつちやけミーくんの方が上手だよ。二回でもうちよつと大きなぬいぐるみ取ってるし。」

「…そういうえばこのぬいぐるみ、モノクマに似てるよね…色が真ん中で別れてる所とか」

「白とピンクだけど、モノクマよりは可愛いんじゃないか？ほら、赤い左目あたりが」

「目のつけどころが鋭いね…あと三個取れたら、みんなの部屋に飾ろうかな…？」

楽しい時間は、早く過ぎていくもの。

しかし、この思い出だけは決して失いたくない。どうかこの記憶が、希望に変わりますように…。

【二章その2】

動機が配られた翌日の、朝食が終わった頃。

灰寺くんが藍葉さんに話しかけているのを見かけると、灰寺くんが話しかけてきた。

「あ、鈴原姉ちゃん！ちようど良かったねん。湖林兄ちゃんや藍葉姉ちゃんとピクニックする予定なんやけど…行かへんか？」

「ピクニック？いいけど…どこでやるんだ？」

「メリーゴーランドやな。あれ、ずっと動き続けとるんやけど一時間に10分ほど止まることがあるんや。その隙を狙って馬車に乗り込んで一緒にお弁当とか食べれたらええなって」

「…どうして、メリーゴーランド？」少し疑問に思ってしまった。

「木馬もいいけど、馬車に乗って色々食べるのって…人類共通の夢ちゃうか？」

あと、馬車の部分よく見てみたら珍しくテーブルがあつたんや！貸し切りみたいやし、やってみたいねん…って言ったら湖林兄ちゃんがみんなが集まってピクニックしないかって…」

たしかに楽しそうだけど、人類共通の夢、なのかな…？

「でも、お弁当はどうするの？私は作ったことないし…」

藍葉さんは心配そうな素振りを見せている。

「大丈夫やって！燻製ならやったことあるけん」

「燻製は流石にメリーゴーランドが焼けちゃうかもしれないよ!」

この前手に入れた『おにぎるメーカー』さえあれば、おにぎりはなんとかなるかな…?

「あの…材料を入れるだけで手に触れずに、簡単におにぎりが作れる機械を持つてるんだ。よかつたら使おうか?」

「簡単におにぎりが、作れる…?なら正義の大発明や!これでみんなおにぎりたらふく食べれるねん!」

「正義じゃなくて世紀じゃないかな…?」

藍葉さんが静かにツツコミを入れる。

「ところで、どこでおにぎりを作るんだ?」

「喫茶店とかがいいんじゃないかな…あそこ、キッチンも炊飯器もあつたし。第二エリアだからメリーゴーランドからも近いし…あと、お箸は四人分持つていった方がいいかな…?」

提案する藍葉さん。

あの隠し部屋についての話題は、誰にも言わないでおこう…



喫茶店のキッチンへと入り、皆でおにぎりを作ることになった。

「明太子にスライスチーズ、おかかにつなにもヨネーズ、たらこ、鮭フレーク、生ハム、いくら…これ、全部食べられるんか!？」

灰寺くんが目を輝かせながら、テーブルに並べられた材料を見つめている。

「灰寺、全部は食うな。材料はレストランの冷蔵庫の中に入れてあるやつを頂戴した。」

あと緑茶も用意しておる。千利休のものほどの味はないが…おにぎりには合うじやろう」

「ご飯もちょうど炊きあがったし、『おにぎるメーカー』も洗ってセットしたし、そろそろ作り始めよう。」

『おにぎるメーカー』の中に材料を入れ、スイッチを押すと…

何秒か経った後に、見事な三角形のおにぎりが出てきた。

「えっ!?!これ、本当におにぎりなんか?こんな簡単に作れていいんか!？」

「じやろうな。良い世の中になったのう」

はしやぐ灰寺くんに湖林くんが答える。

次は…湖林くんがご飯とのり、ツナと鮭フレーク、チーズを入れる。

「チーズはともかく、他のは同じ魚介類だけどいいのかな…?」

「海鮮丼も同じ魚介類を入れるじやろうが。あと魚にマヨネーズはマグロ以外認めんぞ」

ツナって、マグロからできてなかったっけ…？

こうやって沢山のおにぎりが完成したので、全て弁当箱に入れてメリーゴーランドへ行くことになった。



止まっているメリーゴーランドの馬車に四人でわたしと藍葉さん、湖林くんと灰寺くんに分かれて座る。

やがてメリーゴーランドが回り始める。四人でいただきますを言った後、おにぎりを手に取って口にする。

…王道のツナマヨ味だ。マヨネーズの酸っぱさとツナのまろやかさが合わさりとても美味しい。

藍葉さんは箸でおにぎりをつまんで食べ、持参の皿に持っていた後に食べる。

「…やっぱりお米だよね…お茶にも合うし…パンもクルミさえ入ってれば健康にいいけど…」

「こーやって優雅におにぎり食べるのも楽しいなあ！ 貴族の気分？ つて言うんやろうか？」

灰寺くんはおにぎりを口いっぱい頬張っている。

「ほう。生ハムといくら、意外と合うのう…ほら、鈴原も藍葉ももつと食べんか。せつかく大量のおにぎりがあるんじゃからのう」

一応、3つは食べたんだけど…

わたしたちは、メリーゴーランドが止まるまでおにぎりを食べたり、ここから出たら何をしたいかを語り続けた。

この時だけはコロシアイの事も、あの隠し部屋のことも、忘れられるような気がした…。



ダンガンロンパ ・ フラワーズ Chapter 3 「怪奇！悪夢の湯けむりナイトメアは実在していた！」

Chapter 3 「怪奇！悪夢の湯けむりナイトメアは実在していた！」 10日目（探索編）

ダンガンロンパ ・ フラワーズ Chapter 3

「怪奇！悪夢の湯けむりナイトメアは実在していた！」

（非）日常編

【幕間】

薄暗い、何かの巨大な機械に囲まれた部屋。

中央部のシンプルながらも機能性に溢れた椅子には、和装を着た初老の男が鎮座して

いる

そして椅子の後方には…灰色のシルエットのホログラムが浮かび上がっている。

「……………」と言ったな。よくぞ来た。貴様が、私の『作品』を人間の道へ引きずり下ろしたのか」

声が出た。エコーのかかった、だが威圧のある初老の男のものだ。

椅子の男か、ホログラムの主かはわからない。

椅子のすぐ前には、顔の見えない人物が立っている。人物は何も言わず、持っていた小型の銃の引き金を引く。

バン、という銃声が響くと、椅子に座る男のこめかみは、赤黒い血を吹き出しながらぐったり、と倒れた。

「ふはははは…たかが銃ごときで私を殺すとは!愚かで惨めで烏滸がましいわ!報いをう…うううけけけけけけけkkkkk…」

ホログラムが乱れる。それと同時に、死んだと思われた椅子の男は痙攣し始めた。

部屋に置いてある機械は、赤や青などの色にランダムに点灯する。

「縋&縋セ縋エ縋オ縋偵@縋盗」縋輔 縋ゆ〰縋、縋後?縋難@縋盗d縋、縋エ縋ヨ縋九〰縋輔」

フードの人物は周りの機械にターゲットを改め、銃撃する。

耳障りなエラー音を立てる機械が止まる。

椅子の男は眼球を大きく回転させ、やがて、口から血を吐いてまた動かなくなった。

部屋に静寂が訪れる。反撃はない。

フードの人物が、小さな声を上げる。

「随分あっさりとしてるけど……これで、良かったんだ」



この無音の部屋で起きるのは、何日目だろうか。

恐らく、10日目くらいだろうか。

そう思考しながら、掛け布団に覆われた身体をゆっくりと起こす。

夢は見なかった。

それなのに身体は汗だくで、昨日の事件のせいかなだるさが残っている。

昨日：…そういえば。

紅葉さんが妹の藍葉さんを殺害して、藍葉さんが母親を失明させたことが明らかに  
なつて。

処刑寸前の紅葉さんに、藍葉さんが遺したであろうICカードを託されて。

メリーゴーランドの隠し部屋に行つて、藍葉さんが作った思い出しドリンクを飲んで。

そして…

『叶千華』と呼ばれる少女の記憶が蘇つたんだつた。

『わたし、流れ星に願うんだ。みんなの願いが叶いますようにつて』

一回目の、動機発表の時に配られた写真の少女。

わたしはこの少女について何も知らなかった。どうして、この記憶がピンポイントで蘇つたのだろう。

それほどわたしの大切な人の記憶だったんだろうか。

流れ星の記憶。

『じゃあわたしは…せめて、自由になりたいって願おうかな』

なぜ自由になりたいと願つたのか。何から自由になりたかつたのだろうか。

考えても、わからない。考察材料が足りない。

モノクマやカラフラに聞いても、きつと話さないだろう。

思考を巡らせているうちに、チャイムが鳴る。一度ではない。間を置いて二回目、三

回目。

わたしはもう起きているのに。一体誰だろう…?

もう朝だけど、そこまで急かさなくても…

「つて…朝…!？」

慌てた様子で時計を見てみる。8時。そういえば、食事は7時半…

30分も遅刻している…!

「しまった…!」

ベッドから飛び出し、クローゼットから服を取り出す。

鳴り響くチャイムの中、素早く私服に着替え、髪を梳かし、身支度を整えたら…部屋  
のドアを待ち人にぶつからないようにゆっくり開ける。

どうやら、チャイムの主は絹川くんと雨崎さんだったみたいだ。

わなわなと震える雨崎さんは、わたしの肩をいきなり掴んできた。絹川くんは、胸を  
撫で下ろしながらそんな様子を見ている。

「みんな心配してたよ!いつまで経っても来ないから…でも、無事みたいでよかった!」  
「鈴原さん!生きて…いや、起きてたんだ!大丈夫だった?」

「昨日のことでちよつと疲れてたみたいだ…ごめん、今行くよ!」

こうしてわたしたち三人は、急ぎ足でレストランへと向かうことになった。



レストラン。コーヒーと共に朝食セットのトーストをかじるわたしと…ドリンクバーのジュースを大量に飲む灰寺くん以外は、どうやら全員食べ終わったようだ。

みんなのお皿が空っぽになっている。

「灰寺、流石に飲みすぎじゃないか?」

「炭酸水とコーラを混ぜたら炭酸強くなると思つてやつてみたんや。でも味が薄くなつただけみたいやな。」

ザクロジュースと炭酸水の組み合わせは美味しかったんやけど…」

梅田くんがドリンクバーに通い詰める灰寺くんを気掛かりそうな目で見つめる。

わたしの隣に座る二階堂さんは、そんな彼らを諫めるように声をかける。

「灰寺、膀胱炎になるかもしれないねーからもうやめとけよー!多分膀胱がぼぼぼーんってなつて死ぬぞー!」

「お腹が減つとるねん。トーストだけじゃ足りへんかったし。あと人間は水と睡眠さえあれば2週間くらいは生きられるんや。野菜や果物ジュースを飲んでおけば栄養も偏らへん」

そう言いながら灰寺くんは『炭酸水』のボタンを押すと、彼の持つコップ半分くらいに透明な泡水が注がれた。

次に『ブドウ100%』のジュース。コップの水の色がみるみる紫色に変わっていく。「果物はともかく、さつきから野菜のジュースには手を付けてないような…?」

わたしの視点なので、もしかしたら既に飲んでいるかもしれないが。

二階堂さんは、少し不満そうに下を向いた。

「あーあ。力づくで止める訳にもいかねーし。あいつが…灰寺の状況を見てたらすごく心配したんだろうな…」

…それを聞いたのかコップを持ち、席へと向かおうとする灰寺くんの足が止まった。

「それって…藍葉ちゃんのこと…」

レストランにいる生徒たちが、機能のことを思い出したかのように静かになる。

イヴァンくんが報われない死を迎え。その事件の犯人であったバナラさんが処刑される。

藍葉さんが、実の姉である紅葉さんに殺害され。紅葉さんもまたモノクマによつて殺され。

それでもなお、わたしたちはヒストリエランドから抜け出せていない。

「結局、このコロシアイという惨劇は終わっていないのですね…」

「最後の二人になるまで終わらないのよ、このデスゲームは。それとも、視聴者が満足するか…」

蒲生くんと、向かい側の席の黒木さんが何か会話しているようだ。

「済まねえ。アタシのせいで暗くなっちゃった…」

「別にいいよ。わたしだって…まだ引きずっているし」

わたしは、二階堂さんを慰める。藍葉さんと、紅葉さんのことは忘れてはいけない。そう言い聞かせるしかないのだ。

「…もう二度と殺人事件なんて御免なんだな」

「…ここでは、誰かが死んでもおかしくないですわ。だからこそ、自分の身は守らないと…」

梅田くんも、一ノ瀬さんも何か思っているようだ。

…わたしが朝食を食べ終わってから数分後。

「やつぱりレモンジュースとの組み合わせが良かったなあ。ごちそうさまでした」

灰寺くんがジュースを飲むのに飽きたのか、食器の返却コーナーにコップを置く。

そろそろ自室へ帰ろうとした、その直後だった。

「オマエラ、グッドモーニング!ヒストリエランドは満喫できてますか?」

「マスコットのの中のマスコット・モノクマと…ただの…理事長カラフラ…なのだ」

コロシアイの主権である一匹と一輪が、レストランの中に入り込んできた。

くるくると回転しながら台車を押すモノクマと、台車に乗せられ目を回すカラフラ



だ。

「ぎゃあああああ！」一ノ瀬さんが叫ぶ。

「も、モノクマと…カラフラかー？ 一体何をしてるんだー？ まさか動機かー？」

「動機には…流石に早すぎるのだ。ゲーマーは…短気…だけどモノクマは…バオバブの木…全長より気が長いのだ…」

カラフラは手替わりの葉っぱで口を抑えている。

「まさか…新しいエリアの開放とかじゃないの？」

黒木さんが主催たちに語りかける。モノクマは、カラフラを放置しながら不気味な笑顔を見せる。

「オマエラみたいなスマホ世代は飽きっぽいし短気ですよ。では簡潔にお話します。

そろそろこのエリア二つにも飽きてきたでしょ？ という訳で…

ヒストリエランド・第三エリア…『知的好奇心とやすらぎのエリア』を開放致します  
！」

「もちろん設備は…揃って…いるのだ…例のゴムやロープ…動くこけし…もあるのだ…」

カラフラは青ざめた顔をこちらに向ける。回されまくったのか気持ち悪くなったよ  
うだ。

後半の発言は聞かなかったことにしよう。

「どつちらかの昼は夜…つてことで。カーモンベイビー!第三エリア!以上!」

「わーの渾身の下ネタ…スルー…され…」

カラフラは台車の上にはたりと倒れ、モノクマはくねくねしながら台車を引っ張りドアの向こうへと消えた。

「…モノクマと同じ船の旅人とは思いたくないのう」

湖林くんがぼそりと言う。同感だ。

でも。第三エリアが見つかったということは…脱出や奪われた記憶の手がかりもあるのかもしれない。

こうしてお皿を片付けた後、第三エリアへと向かうことになった。



レトロな時代を彷彿とさせるデザインの建物が並び立つ第三エリア。

入り口の地図看板にはモノクマが言った通り「知的好奇心とやすらぎのエリア」と書かれていた。

エリア中央部には、江戸時代のような和式のお城がそびえ立っている。

地図によると…どうやらお城は旅館らしい。

どうしてハイカラロマンがテーマなのに旅館は和風のお城なんだろう。

ヒストリエランド、絶対迷走してたよね…？

パンフレットの第三エリアの地図。その中央に旅館はある。

まずは、そこへ向かおう。



旅館に入り、エントランスの地図を見てみる。旅館は二階建てだ。

一階には厨房と脱衣所、倉庫。

二階にはカラオケルームとプレイルーム、事務所。

どちらの階にも大広間が一つ、客室が三つある。

エントランスのソファには、旅館のものらしきパンフレットとにらめっこする一ノ瀬さんが座っている。

「所詮は微妙遊園地のミニミニ旅館ですわ…内装はそこらのZ級キャバクラよりはまともですけど」

Z級キャバクラとやらで働いている人たちに失礼な気がする。

「ここは一ノ瀬旅館よりも狭いですわ。女がターゲットだから身体の小さい女に合わせ  
ているんですの?」

「…ところで、収穫あった?」

「身体の小さい女…まあ女児思考の殿方様なら…つてきやああああ!!」

一ノ瀬さんに話しかけてみる。彼女は驚いた様子で叫ぶ。

「部屋はSNS映えしそうな小綺麗なだけの部屋、温泉は人工、部屋は和洋ごちゃご  
ちや、プレイルームのゲームは古いものばかり…本当に客を呼ぶ気が見られませんでし  
たわ。全く、神の宿とも言われた一ノ瀬旅館を見習って欲しいですわ…」

「一ノ瀬旅館は日本一の旅館だったよね。比べてしまうのも無理はないよ」

「鈴原の意見は聞いていませんわ。ああ、広々とした一ノ瀬旅館が懐かしい…。極上の  
グルメ、様々な癒やしをくれる温泉、優雅なひととき…全てにおいてそこらの…醜女ど  
もが…うう…」

監禁のストレスでだいぶやられているんだらうけど…これ以上は聞くのはやめよう。

受付にあったパンフレットを一枚貰う。

パンフレットによると西には階段、北にはエレベーターがあるようだ。

まずは、一階から探索することにした。

厨房を覗く。広々としているが、なんの変哲もない調理室だ。

：包丁などの凶器になりそうなものも置かれているが。

大きな冷蔵庫を開けると、大きな魚や霜降り肉、野菜などよりどりみどりの食材があった。

どうしたらこういった食材を調達できるんだろう？

次に三つの客室を調べる。

南の客室。引き戸近くのプレートには達筆で『瑪瑙（めのう）の間』と書かれている。瑪瑙の間と書かれた客室に入る。ドレッサーとベッド、四つの椅子と大きなテーブル、棚が置いてあるフロアリングの洋室だ。

棚の上には：青い縞模様のプレートのような鉢物が立て掛けてある。これが瑪瑙か。テラス戸のおかげで燦々と輝く太陽の光がよく入る。

『水晶の間』の中へと入る。

そこは低いテーブルに座布団、床の間が特徴的な和室だった。新鮮な畳の香りが心地いい。

床の間には両手で持てるくらいの水晶玉が置いてある。

もしかして、瑪瑙の間みたいにそれぞれの部屋に由来した鉢物が置かれているんだろ

うか。

『琥珀の間』。水晶の間とはあまり変わらない和室だった。

黄色と茶色が混ざった鉱物の置物が床の間に置かれていることと、苛立つ二階堂さんの様子を除けば。

「なあ、鈴原…聞いてくれねえか?」

「何かあったのか?もしかして、恐ろしい仕掛けとか…」

「違うんだよ…」この部屋、どこもシャワールームがねえんだよ!アタシたちの泊まってるホテルですらあるのになあ!

身体キレイにしたきや温泉に入るしかねーってのが気に入らねえ!みんなに裸見せるのが恥ずかしい奴はどうしたらいいんだよ!」

恐らく、二階堂さんなりの正義で怒っているんだろうな…

大広間へ。靴箱が置かれたスペースの向こうは広大な畳の部屋だった。

前方にはステージ。その後ろの舞台裏には、照明をコントロールするための機械があった。

ステージがあるってことは、ここで手品大会でも開くのかな。

瑪瑙の間のすぐ隣にある倉庫。ワゴンには大量の備品が置かれてある。

替えと思われる布団やシーツ、楽器類、消火器、食器：旅館なんだしここまであつて当たり前だろう。

「…あつ」

ワゴンの隅にきらりと輝く円盤状の物体：モノクマコインを発見した。しかも四枚。これもモノモノマシーンで使うしかないんだろうか…？

温泉へと続く脱衣所。『男』と書かれた青いドアと『女』と書かれた赤いドアがそれぞれある。

どちらのドアにも筆で書かれた説明書きが貼られていた。

『脱衣所に入るにはそれぞれの性別に対応した電子生徒手帳が必要なのだ！』

よく見ると、二つのドアの近くにはそれぞれ何かカードを通す用の四角い枠がある。

：電子生徒手帳をかざすんだらうか？そういう機能、あつたのか？

『女』のドアの四角い枠に取り出した電子生徒手帳をかざすと、電子音が鳴る。

開かれたドアをゆっくり引き、中へ入ってみると。昼白色の光に照らされた、洗面台といくつかのロッカーが鎮座していた。

脱衣所にはもう二つドアがあつた。それぞれ『女湯』『混浴風呂』と書かれたガラスの

引き戸。

…女湯はともかく、混浴風呂に入る勇氣はない。

エレベーターは裁判を思い出す…ので階段で二階へと向かう。

客室は…翡翠の間は和室、珊瑚の間は洋室。一階と変わりない部屋だった。どちらもそれぞれの部屋の名前に因んだ鉱物が置かれている。

なぜか、同じ南にあるはずの瑪瑙の間と違い窓は小さい。

黄金の間も引き戸だが、力を入れようがなぜか開かない。蹴飛ばすのはやめよう。

「一体、どうしたら開くんだろう…」

「そんな鈴原さんにはこれなのだ!事務所から持ってきたマスターキーなのだ!」

場違いな明るい声がある。台車に乗り、鍵らしきものを持ったカラフラだった。

「か、カラフラ!?!何をしにきたんだ!?!」

「この鍵は脱衣所以外の旅館の全てのドアが開くというスグレモノ。黄金の間のオートロックも開くのだ」

「…もしかして、黄金の間だけオートロックじゃないよね?」

「その通り!黄金の間だけに許された権利なのだ。だってセレブご用達のお部屋だからね!」



他の部屋にはオートロックがないって、この旅館のセキュリティはどうなっているんだろう。

「貧乏人はただの鍵でも持つてるのだ。じゃあねー!」

カラフラはマスターキーを置いてどこかへと消えていった。

「ま、待てー!」

あまりにも早すぎる退場。一体何がしたかったんだらう?

気を取り直しマスターキーを拾い、黄金の間の鍵を開ける。他の客室より広めのオシャレな和室だ。

床の間には『常在戦場』と書かれた掛け軸と、大量の金塊がガラスケースの中に置かれている。金塊、盗まれないのかな?

個室には風呂場があった。二階堂さんが知ったら喜びそう。どうやら、ここはVIPルームのようだ。

プレイルームに向かう。一ノ瀬さんの言う通り20年前くらいのゲームが多い。

絹川くんがあるパズルゲームのゲーム画面をじっと見つめていた。ゲーム、やりたいのかな?

「…ねえ鈴原さん、これどうしたら画面が動くかな?」

「コインってやつが必要なんじゃないかな」

倉庫で見つけたモノクマコインをポケットから三枚ほど取り出し、ゲームの筐体の上に置く。

「機械の下らへんにコインを入れる場所があるから、そこに入れたら遊べると思う」

「いいの? ありがとう! じゃあ試しに一回入れてみるね」 絹川くんは嬉しそうな様子でコインを硬貨投入口へ入れる。

…が、何も起こらなかった。

それどころか、コインが音を立てて返却口に戻っている。

「…これ、使えないのかな?」

別のモノクマコインも何枚か入れてみる。やはり筐体には何も起こらず、コインは返却口に落ちる。

諦めた様子で絹川くんは三枚のコインを自分の手のひらに載せる。

「できないんだね。なら、返すよ…」

「…ぬか喜びさせちゃって、ごめん」

わたしたちは落ち込んだ様子でプレイルームを後にした…。

それにしても、絹川くんはアーケードゲームを知らない様子だった。なぜだろう…?

ドアの開かれたカラオケルームにも向かう。ミラーボールの光で照らされた薄暗い部屋の中、未隅さんと雨崎さんが何やら分厚い本を見ている。

「古いカラオケ屋さんってさー、こういう本の選曲リストが置いてあるんだけど、やつぱり古い曲ばつつかだよね…これじゃあ小さい子が楽しめないじゃん」

「僕はポップスのことはよく知らないけど、確かカラオケって般若神経とかも選べたよね?」

「え、お経まで入ってるの!?カラオケルームで幽霊出た時用!」

「そんなことはないと思うぞ!明るく優しい梨々には幽霊はきつと近寄らないさー!」

「み、ミーくん…!?そんな…!」

雨崎さんは顔を赤くしている。

この二人の間に入ってはいけなような気がしたので、カラオケルームから去ることにした。

事務所にも向かう。デスクとパソコンとウオーターサーバーが置かれたごく普通のオフィスだ。

監視カメラに繋がっているであろう、パソコンモニターには何も写っていないかった。

電源を入れようとしても同じだ。何も反応しない。

ここ、プレイルームより広いんだよな。設計どうなってるんだろう…。壁についたキーボックスが開いていたので、マスターキーを掛ける。キーボックスにはダイヤルがあるから安心だと思うけど…



旅館の西には高い崖がある。パンフレットには上に郵便局とログハウスがあるらしい。

崖の上に行くには…長い階段を登る必要がある。

わたしは今、旅館のとは比べようのない階段を登っている…が、疲れをあまり感じない。

それでも、登るだけの作業は精神的にきつい。

「エスカレーターくらい…つけばいいのに…」

ヒストリエランドが廃園した理由がわかった気がする。いや、廃園後も設置しなかったモノクマとカラフラも悪いんだろうけど…。

ようやく頂上に辿り着く。四つのログハウスと、ミントグリーンの木造の建物…郵便

局が建っていた。



郵便局には、普通なら野外に置かれるであろうポスト一つと、前方に置かれたカウンターテーブル以外は本当に何もなかった。

灰寺くんが開かれていたポストの中を覗きながら私に話しかける。

「このポスト、手紙一枚も入っとらんね…：そういえば鈴原姉ちゃんは、手紙出す人いるんか？」

「いないと思う…」

「…どうして『思う』って言うんか？記憶があやふやだったりするんか？」

両親との仲は悪いし、叶千華以外の人間はあまり思い出せない。だから『思う』なのだ。

悪いけれどこのことは、今灰寺くんに話すことではない。

カウンターの向こうの広いスペースへと向かう。

やはり何もない…：と思いあたりを見回した瞬間。

カウンターの裏側に黒いダンボール箱を発見した。ガムテープの封が貼られてある。

「灰寺くん、おかしなダンボール箱があったんだけど…」

それを聞いた灰寺くんがポストから素早くカウンター裏へと向かう。

「どうしたんか? 子猫でも捨てられてるんかね。捨てたやつ酷いなあ…」

灰寺くんがしやがみ込み、ダンボールをじっと見つめると、それを軽く揺らしたり叩いたり、持ち上げたりする。

揺らした時にゴトゴトという音がする事以外は、何も起こらない。

「動物じゃあらへんな、結構重いし。開けてみる?」

「じゃあ、確認してみよう。爆弾だったら怖いけど…」

彼はガムテープを剥がし、蓋を開ける。

中身は、大量に入ったA4サイズのポスターだった。

黒い背景に、地球を横断するようにペンの置かれた、大きい奇妙なロゴマークが印刷されている。

マークの下には、白い文字が書かれている。

『絶望郷の住民へ 一切の希望をかの者らへと捧げよ』

諸君は醜き絶望なり。歯車となって心を捨てよ』

「ぜ…絶望郷…?」

「なんやこれ…なんかの貼りもんか?」

絶望郷と、醜き絶望とされるその住民へのメッセージ。一切の希望を捧げるべき『かの者』。

メッセージが断片的すぎて、わたしも灰寺くんも意味を理解できなかった。

「歯車になるって……住民に言ってるのに、物になれって……意味がわからない……」

「絶望郷ってなんや？もしかして……このコロシアイを目論んでる黒幕は絶望郷からやってきたんか？」

灰寺くんの言葉でふと、コロシアイが始まった時にモノクマが言っていた言葉を思い出した。

『ボクは、絶望と希望が見たい。それだけなんだ』

モノクマが望んでいたのは希望と絶望。しかしあのコロシアイと処刑を見る限り、そこにあるものは絶望しかない。

あいつら……モノクマを操る黒幕は、本当に希望が見たいんだろうか。

絶望郷と呼ばれるわたしたちの知らない世界からやってきたのなら、彼らはより深い絶望を望んでいるんじゃないか？

「ごめん、鈴原姉ちゃん……頭こんがらがってきてもうた……ちよつと外の空気吸ってくる」

灰寺くんが立ち上がり、郵便局のドアから外へと出る。

わたしたちが知らない世界。

黒木さんの言っていたスナッフフィルムとの関係はあるんだろうか。  
少し気分が悪くなってきたので、外に出よう。

◆  
郵便局の近くには四つの木製のログハウスがあった。

窓はカーテンで閉ざされ、どの部屋のドアを開けようとも開かない。

…これ以上開けるのはやめておこう。

わたしは崖の長い階段を下り、エリア北の図書館へと向かうことにした。

◆  
威厳を感じさせる、白いレンガ建ての大きな図書館。

扉を開けて中に入ってみる。白く塗られた壁や様々な本が入った棚。図書館にはよくある光景だ。

高い棚に掛けられたはしごに登った梅田くんが、一冊の本を取り出している。



はしごの下には……大量の本が入った袋がある。

『超高校級の図書委員』である梅田くんだから、部屋に持って行って読むのかな？

梅田くんがはしごから降りてきて、本を袋の中へと入れる。

「梅田くん、この本どうするつもりなんだ？」

「……袋の中の本のタイトル見たらわかるだろうー、あとで燃やして捨てるんだよー」

袋の中身を見てみると……『殺人鬼大百科』『子どもが読んではいけない殺人の話』などの本が入られている。

「随分と物騒な本ばかりだけど……勝手に燃やしていいのか？」

「校則見てみるよー。そこには『監視カメラの破壊を禁じます』とは書いてあるけど、本を捨てたらいけないって書いてないんだなー」

本は大切にしたいんだけど、これに殺人の方法が載ってたら危け……うぎやあつ!!」

はしごが梅田くん目掛けて倒れてきた。避けることができなかつたのか、梅田くんにぶつかってしまった。

「大丈夫か!？」

「……うう……平気なんだな……ダイナマイト投げられた時よりはマシなんだな……」

梅田くんは頭を抑えている。ダイナマイトを投げられるってどういう状況なんだ……？

それにしても、梅田くんの言うことには一理あるかもしれない。

新書コーナーには本は一冊も置かれていなかった。

わたしたちが奪われた記憶と、何か関係があるんだろうか。

絶望郷のことも、書いてあるかもしれないのに…



象牙色に塗られた内装の、線香やタイヤを広告するブリキの看板が貼られた博物館に入ってみる。

エントランスには…外国製と思われる古いテレビ、天井にはシャンデリア、ガラスケースの中には火縄銃や動物の骨などが飾られている。

火災防止のために用意されているであろう消火器も隅に備えてられている。

「何でじゃ…」

そして、拳を握りながら苛立ちを見せる男…湖林くんもいた。

「なんで、何も置いてないんじゃ…!博物館のくせに、日本刀も!日本鎧も置いとらんのじゃ!」

「そりゃ仕方ないよ。だって、パンフレットにも書いてあるようにここ…ヒストリエラ

ンドはハイカラロマンがテーマだから、戦国時代のものは…」

「…火縄銃が置いとるじゃろうが。あれは戦国から江戸の末まで使われておった。

これならオレの宗三左文字、義元左文字、薬研藤四郎、圧切長谷部、長篠一文字もレプリカぐらいは置いとると思ったんじゃが…

「この責任者はどこにいるんじや!?クマでも花でもいいから出てこい!」

「はいはい!どうもオマエラの人生以外の責任は取つてあげるモノクマです!」

…扉から、スキップしながらモノクマが出てきた。

「おいモノクマ、なぜ戦国のものが火縄銃程度しか無いのか」

モノクマに凄まじい威圧をかける湖林くん。どれだけ戦国好きなんだ。

「湖林くんは頭そんなに悪くないよね?なら『驚異の部屋』だって知ってるはずだよ?」

「…15世紀から18世紀までのヨーロッパに実在した、博物館の原型じや。奇妙な絵画や化け物らしき生物の剥製、骨董品など珍しいものならなんでも置かれた…」

湖林くんがスラスラと答える。まあ『超高校級の歴史学者』なら当たり前だろう…。

「正解!さすがは自分を織田信長だと思いい込んでいる一般歴史学者だね!スケートやつたらっ?」

「…あ?」

湖林くんはモノクマを睨みつける。いかにも殺意の波動に目覚めそうな雰囲気醸

し出している。

「この博物館は『驚異の部屋』がモチーフなんだよ。火縄銃が置いてあるのはヒストリエランドの元園長の趣味で、深い意味はないと思つて欲しいなあ。じゃ、ボクはウサギ狩りで忙しいからじゃあね〜!」

モノクマは扉から外へと出ていった。ウサギ狩りって何なのか。

「逃げたか。ここから出たら蝦夷へクマ狩りでもしようかのう…」

蝦夷つて北海道だっけ…? 湖林くんのこととは置いておいて、博物館の中を探索しよう。

博物館には三つドアがあり、それぞれに『大』『中』『小』と書かれてある。

まずは中央の『中』の部屋へと入る。薄暗い部屋にはモノクマの言う通り、生物の剥製やホルマリン漬けが大量にあった。

それにしても、部屋が暗いの照明のスイッチすら無いのか…。

右の『小』の部屋は狭い部屋だった。古い地球儀やランプ、ドレッサーなどの骨董品が置かれている。

カーテンで閉ざされているのかやはり暗いし、照明のスイッチがない。

ランプは電源コードが繋がれている。電源をON、OFFと変えてみるが、全く付かなかつた。

左の『大』の部屋。油絵や白黒写真が壁に、1/2くらいの大きさの複葉機のレプリカ、巨大なデッサン人形がある。

やはりカーテンで閉ざされているのか暗い……と思った瞬間。明かりが付いた。

湖林くんがどつかにあるスイッチを押したのかな。

複葉機は何やら太い電源コードで繋がれているが、本当に動くんだらうか。

座席を見てみると、モノクマコインが三枚ほどあった。やはりモノモノマシーンをしなければならぬのかな。

博物館のエントランスに戻る。湖林くんは、姿を消していた。

出入口の付近をよく見てみると、『ON』に向けられたスイッチを一つ発見した。

スイッチを『OFF』にすると、シャンデリアの明かりが消える。これが、照明のスイッチかな。

それと同時に、『中』の部屋から誰かの「ぎやああああ！何者じゃ、何しとんじゃ!？」という大きな声が聞こえてきた。

これ、博物館の全ての部屋の明かりが付く仕組みなんだろうか。

「湖林くん、ごめん…」

スイッチを『ON』にした後、わたしは博物館からそそくさと出ていった。



占いの館と看板に書かれた、紫のレンガで出来ている建物。

棚にはロウソクやお香、羽ペンとインク、タヌキの置物や本などが並べられている。

これ、全て占いに使うのかな?それとも、ただの飾りなのかな?

「…タンポポ、どうして俺がやんなきゃならないの?」

「檀殿もどうぞ。天の声を聞くやり方で占ってみませんか?そうすることで、救われる  
こともありますよ」

檀くんと、蒲生くんの声がする。説得しているんだろうか。

「どれだけ願っても、どうせあいつは生き返らないんだ。なら別にいいよ」

蒲生くんの手を払い、去っていく檀くん。

「檀殿なら救済を信じてくれると思っただけですが…やはり初回特典が必要でしょうか」

初回特典でもダメだと思う…。

奥にある紫のカーテンの中を覗いてみる。テーブルに水晶玉と、タロットカードが置かれていただけだった。



一番南のお化け屋敷。入り口に大きな鳥居がある、蔦の生えた和風の屋敷だ。暗闇には慣れている。だから大丈夫だろう。

そう言い聞かせ、わたしはゆっくりとした足取りで入っていく…。

最初は明るい、廊下のようなエリアだった。

でも大量の西洋人形が散らばっている部屋、赤いクレヨンで『タスケテ』『イタイ』と沢山書かれた部屋、人の手や足が天井からぶら下がっている部屋…。

どの部屋も不気味な雰囲気醸し出している。

しかも、だんだんと暗くなっていく。ライト、持っていればよかったかな。

やがて、完全な暗闇の世界へと放り出された。

暗闇ばかりで何も起こらない、と思つた瞬間…

腹から内蔵を出した男と、首の取れた女の死体が…

赤いライトに照らされて。

その傍らで、全身血のついた包帯の小さな少女が。

「ユル…サナイ…」

大きな、痛々しい声をあげながら、笑ってこちらを見ていた。

「うわあああああああ!!!」

その瞬間。部屋の照明が明るくなった。

よく見てみると男女の死体も、包帯の少女もただのマネキンだった。

「あはははは! 大成功だわ!」

部屋の向こうのドアから一人の少女がニコニコしながら出てきた。黒木さんだ。

「大成功って…心臓止まるかと思つたのに…!」私は怒りを抱えながら黒木さんに語りかける。

「このお化け屋敷、ラストが微妙だったからちよつと改造してみたの。テーマについて知りたい?」

「いや、別に…あと、今の状況でさっきのは不謹慎じゃないかな?」



「まあ確かにね。でも全年齢向けのお化け屋敷にも、こういうグロテスクな仕掛けは必須よね」

本当に、必須なのかな…？

第三エリアで調べられる場所は全て調べた。レストランへ戻ろう。



レストランに皆が集合する。

「脱出についてのヒントは…どこにもありませんでしたね」

皆の様子を見る限り、前と同じくわたしたちの行動範囲が広まっただけ…みたいだ。

勧誘した所しか見かけてない蒲生くんが言うことじゃないと思うけど。

「旅館は隅々まで見てみましたけど…本当に酷かったですわ。冷蔵庫の食材以外は…」

一ノ瀬さんの言葉で思い出したが、食料はどこから来ているんだろう。

「まためんどくせえことになってきたみたいだな。ところでさ…絶望郷って知ってる？」

誰もが気だるそうな声に振り向いた。檀くんの声だった。彼は右手に丸められた紙

を持つている。

「…どうしたんだ、檀君!?何か脱出の方法でも見つかったのか!」

「見つかったてないよ。ただ…俺の知らない世界について、崖の上の郵便局にあったんだよね」

檀くんが紙をテーブルに広げる。わたしと灰寺くんがダンボールの中から見つけた、あのポスターだ。

『絶望郷の住民へ 一切の希望をかの者らへと捧げよ』

諸君は醜き絶望なり。歯車となつて心を捨てよ』

「ぜ、絶望郷?そんなの知らないよ!」

「オレも聞いとらん!学生のアート作品みたいじゃが…これが黒幕の手がかりだと言いたいんか!」

騒ぎの中、檀くんが続ける。

「絶望郷つてのはデイストピアとも呼べるな。理想郷、ユートピアの反対となるもの。簡単に言えば『秩序を守るために民衆の自由を奪つた世界』『極端なまでに秩序を守る世界』…」

よく個人が政府に監視されたり、逆らつたら殺されるSFあるよね?それがデイストピアの世界。この前モノクマも言つてたよね?オマエラの住む世界は、謎の隕石をきつ

かけにすっかり変わってしまったって…」

「何が言いたいんじや。黒幕はデイストピアの支配者、この世界は隕石のせいでデイストピアになったってことかのう?」

「多分そうだよ。信長もどきにしては理解が早いね」

「…誰が信長もどきじゃ! 巫山戯てるんか!」

湖林くんが、檀くんにキレている。今はそういうことじゃないと思うんだけど。

「デイスなんとかになったってことは…僕たち、逆らったら殺されるってことなんか!」  
「大丈夫よ、超高校級の才能を持つ私達ならきつと生きられるわ」灰寺くんを慰めたのは黒木さんだった。

「ここまでの黒幕の出したヒントをまとめてみると…私たちが記憶を無くした数年間のうちに謎の隕石が降った。

その後、世界は隕石から拡散されたウイルスで滅茶苦茶になった。そして世界は黒幕の支配する絶望郷になって、黒幕はコロシアイを起こした。そんな感じかしら?」

「黒木嬢の言う通り…かもしれませぬ。もしかしたら、僕達に逃げ場はないのでしようね…」

「そ、そんな後ろ向きなこと言うなよ蒲生! アタシたちが倒せばいいだけじゃねえか!」  
二階堂さんは焦っているようだ。

「でも…どうしてこんなコロシアイなんか起こしてるの…? 絶望郷つてのができたのはわかるけど、コロシアイを起こす目的について、なんか飛んでない?」

「コロシアイの目的としては…絶望郷の支配者がルール違反した住民を処刑するためにコロシアイを起こしてる…みたいな感じだろうね。デイストピア的に考えれば」

雨崎さんが震えた声で質問すると、檀くんが答えた。

コロシアイの目的。

あの裁判後のオシオキと、廃園した遊園地・ヒストリエランドを舞台にしたデスゲーム…。

わたしたちのコロシアイは、絶望郷の人々に見られているのだろうか…?

わたしたちは、反逆した絶望郷の人間なんだろうか?

それとも、本当は誰にも見られていないだろうか?

じゃあ…わたしが思い出した記憶の中の願い…『自由になりたい』ってのは…

絶望郷から自由になるってことなのかな?

「じゃあ、どうして超高校級の才能を持った高校生たちが集められたのかしら? 大人でも殺す人は殺すのに…ってあれ?」

考察話の主であった檀くんは、扉からどこかへと逃げていった。テーブル上のポスターを残して。

「檀くん！ちよつと待つてくれないか!?」未隅くんも彼を追いかけて出ていく。

「あいつは気まぐれだからな。図書館に置いてた保健の本読もうと思つたんじやねえの?」

「違ふと思う…保健の本、男子はそんなに好きなのかな…?」気を取り直した二階堂さんに語りかける。

「好きに決まつてるだろ。性について書いてあるページなんて少ねえのにな!」

「そういうえば、わたしの受けた授業つてどんなのだつたんだろう…?ほとんど記憶にな  
い。」

「それにしても、心を捨てるつて…心を持つてるからこそ人間なのに…」

絹川くんが、小さな声で呟いたような気がする…



夕方になった。暗くなる前に、気晴らしに第一エリアのお土産屋でモノモノマシーンを回そう。

相変わらずモノの殿堂と言うべきお土産屋。そのガチャガチャにコインを入れて回すと…。

カプセルが出てきた。さて、中身のアイテムは…。

『津田遠江長光・レプリカ』

織田信長が持っていた太刀。本能寺の変の後、明智光秀が奪い家老のものとした。そんなドラマある刀のレプリカ。

『ゾートロープ』

くるくる回しながら穴を覗くと、静止画が動いているように見える円筒形のもの。

『生命の輪』とも呼ばれる。

『スモークサーモン』

鮭の切り身に塩やハーブをまぶし、サクラのスモークチップで燻製にした食材。

香ばしさと中々の塩加減が癖になる。

『男と女のロマン』

見た目は黄色い桶だが、持っているとなぜかロマンを追い求めたくなる。

誰かに渡すのもいいが、持っているといい事がある。

『曲げわっぱ』

薄く切った木材を曲げて、木製の箱にした伝統工芸品。

弁当にすると中々風流である。

『怪人ポロリ・ニューヨークへ行く』

小学校高学年に人気の児童文学。

ブタの怪人がニューヨークのカジノに挑戦するというシビアなストーリー。  
誰かに渡すのもいいが、持っているといい事がある。

『ペンライト』

ペンの形をした懐中電灯。様々な色に光るタイプ。

アウトドアだけでなく、アイドルの応援にも使われる。

マシーンから出てきたアイテムは、袋に入れて全て持っていこう。



夕食のハンバーグ定食を食べ、部屋に戻る。

絶望郷と、コロシアイの目的。

考えても…答えは全く出ない。

シャワーを浴び、浴衣に着替えて、わたしは床に就いた。



南極の氷河の中から恐竜が発見されたらしいね。オマエラはどうする？

玉乗り仕込む？それともビスケットを増やす要領で叩いてみる？

動物愛護の観点から見ても叩くことはオススメしないなあ。

普通に考えたら恐竜つて叩いても増えないし。

ベストはメタルを聴かせることだね。ボクらしくないけど所謂平和的解決つてやつだよ。

泣いてる赤ちゃんもクラシックを聴かせればすぐ寝ちやうでしょ？恐竜もメタルを聞いたらきつと喜ぶよ。

「ヒヤッハー！プテラノドンなど（自主規制）してやるわー！」みたいになさ。

そしてテンションが上がるあまりペンギんたちを食い荒らすんだ。あまりの暴れっぷりにタロジロもびっくり！

…あれ、よく考えたら平和的解決じゃなくね？



## Chapter 3 「怪奇！悪夢の湯けむりナイトメア

は実在していた！」 11日目

11日目、閉じ込められている非常事態の中の、いつもどおりのレストラン。

今日は目玉焼きと程よく焦げ目のついたソーセージ、ほうれん草のソテー、そして野菜スープだ。

テーブル上にはソースやマヨネーズといった備え付けの調味料が置かれてある。

「絹川、お前目玉焼きには何もかけねえのか？」

「確かに美味しそうだけど、調味料をかけるのはお行儀が悪そうだし…それに食品のそのままの味が引き出されないしね」

「半熟の目玉焼きの黄身にソーセージやら野菜やらを付けて食べれば美味しいんだよな」

今日の同席は…二階堂さんと絹川くん、梅田くんだ。

「言われてみればそうだけど…塩コショウしか味付けしてないからなんか足りなくなっちゃうよね」

一方のわたしは、目玉焼きにテーブル上にあつたウスターソースをかけている。

「鈴原も案外味付け派なんだなー」

「まあ、醤油でもソースでもマヨネーズでも何でも美味しいよな。目玉焼きって!」

そういう二階堂さんは…目玉焼きにお酢をかけている。ポン酢や黒酢ならまだわかるけど、普通の酢をかけるって美味しいのか…?

「マヨネーズ…試してみようかな。どういふのかすぐく気になるし…」

絹川くんは机の上のマヨネーズを手にとると、蓋を開けて中身をちよつとだけ目玉焼きにかけ始めた。

目玉焼きのマヨネーズのついた部分を箸で切り、口に入れる。

「…味が、まろやかに変わった気がするよ…!」

絹川くんは目を輝かせながら味わっている。なんだか、マヨネーズの道へと進んでいつているような感じが…。

「ほうれん草はいいぞ!あと野菜スープもきつちりと飲めば病気の心配はないからな!」

檀くんは未隅くん、雨崎さんと一緒に朝食を食べている。

というか、未隅くんが食べながら、檀くんに一方的に話しかけられている。

「目玉焼きにはやっぱり蜂蜜だよな。今日は置いてないけど…」

蜂蜜と目玉焼き。雨崎さんの組み合わせはたしかにアリっぽいよなと思ってしまっ

た…。

一ノ瀬さん、湖林くん、灰寺くんのグループ。

「…ちそうさまでしたわ」

一ノ瀬さんが空になった食器の前で手を合わせる。食べるスピードが早い。そして、立ち上がりレストランの外へと出ていく。

「なあ、一ノ瀬姉ちゃんは一休どこへ行くんや?」

「あいつのことじゃ、掃除でも行っただんじやろう…どこをするかは知らんがな」

そういえばこの三人、一緒によく食べているような…

黒木さんは、恐らく図書館から持ち出してきたであろう本を読みながら朝食を食べている。

「黒木嬢、この本はどういったものなのでしょう?」

隣りにいる蒲生くんは、黒木さんの読む本が気になるのか質問を投げかける。

「これ? 冤罪で全てを失った男が怪しげな老人と共に復讐の道を歩む…そんな話よ。映画にもなったわ」

「なるほど。無実の男が罪を犯すお話…なのでしょうか」

「だいたいそんな話ね。最終的には主人公たちもヴィランも破滅するバッドエンドだけど、どこかカタルシスがあるのよね。蒲生も読む?」

「バッドエンド…救いのない結末なら、遠慮させていただきます」

…どうやら小説談義をしているらしいが、バッドエンドについて語る黒木さんの表情はなぜか生き生きとしている…。

そうしているうちに時間は過ぎ、朝食が終わる。

「鈴原!あのさ、ちよつと付き合ってくれねえか?」

レストランから出ようとしたその時、二階堂さんがやってきた。

「昨日温泉旅館が開放されたんだしさ、折角だし女子全員で温泉行かねえか?昨日温泉見に行ったら結構キレイに掃除してあつたんだよな!」

温泉…モノモノマシーンから出てきた黄色い桶のことが頭に浮かび上がる。

「女湯に入るならいいよ。ちようどいい感じの桶、持つてるし」

「ちようどいい感じの…マイ桶?鈴原、まさかの温泉マニアだったのか!?!まあ露天風呂から星空眺めるのって良さげだもんな!」

わたしは温泉に入った記憶がないが、露天風呂での天体観測はなんだか面白そうだ。

「じゃあ今日の夕方五時集合な!女子全員で裸の付き合いしようぜ!」

二階堂さんは笑顔でレストランから去っていった。

夕方の五時か。今日は、何事もないといいんだけど…。

◆  
ホテルのエントランスへと辿り着く。

「…鈴原、少し時間を貰うぞ？」

部屋に戻ろうかなと思つた瞬間：誰かの声が聞こえた。湖林くんだ。

「…何かあったのか？それともゴミが付いてたとか？」

「ゴミは付いとらんが…今日の正午、第三エリアの旅館一階の大広間に来い。一ノ瀬が『おもてなし会』を開くのじゃ。会席料理を振る舞うらしい。来れるか？来れるならアレルギーも教えろ」

「…」  
「少しだけ圧を感じる。一ノ瀬さん、あれほどあの旅館を酷評しといて結局は使うんだな…」

でも、『超高校級の女将』である一ノ瀬さんのおもてなし…ちよつと気になるな。

「じゃあ、行こうかな。アレルギーはないよ。時間がちよつと気になるけど…」

「12時30分迄には来い。オレと一ノ瀬が芸を披露する。『おもてなし会』の終了時間は二時頃じゃ。では、旅館で待っておる」

湖林くんはホテル外へ向かっていった。

『おもてなし会』。そこでの記憶も、いい思い出になるといいんだけど…。

今は午前の9時。12時半まで、少し時間がある。暇だから、誰かと過ごそうかな…?



### 【自由行動】

モノクマが『驚異の部屋』と呼んでいた博物館。

それぞれの部屋を物色していたのは、黒木さんだった。

「鈴原さん?何かインスピレーションを与えそうなものでも持つてるかしら?」

邪魔して悪いっぽいけど…黒木さんと過ごそうかな?

黒木さんと博物館を見て回った。黒木さんと仲良くなったようだ…。

電気いらずでアニメーションを見られるアイテム…『ゾートロープ』をプレゼントすることにした。

「これは…いいアイデアが浮かびそうだわ!ありがとう、鈴原さん!」

良かった、結構嬉しいらしい。

「ねえ今度、私の部屋で…映画を見ない?」

黒木さんと会話の途中、いきなり映画鑑賞に誘われた。

「映画? どうやって見るんだ?」

「お土産屋を漁っていたら、映画のディスクを何本か見つけたのよ。これがその一本よ」  
彼女はどこからかディスクのパッケージを取り出し、わたしに渡す。

裏面にはあらすじが書いてある。家族愛について描かれたファミリー向けの映画だ。  
見たことはないけど…。

「家族の話、か…わたしは喧嘩ばかりだから、こういう仲よさげな家族は少し羨ましいと思っちゃうな」

「私もね。うちにはお父さんが三人もいるし、お母さんはいつも違う男を連れてくるよ  
うな人だったの…」

え?…お母さんが違う男を連れてくるのも恐ろしいけど、お父さんが三人?

黒木さんは、なぜか元気そうな笑顔で話している。

「幼い頃、ワンルームのアパートに住んでてね、お母さんはいつも私を蹴り飛ばしてたのよ。」

お父さんもそれぞれいたわ。一人目のお父さんは幼稚園の頃は稀に会いに来ていたけど、お母さんを残して音信不通になって、

二人目は…小学生の時お腹に火の付いたマッチを押し付けたり、お母さんと一緒に私

をお風呂に沈めたりして。

三人目は、夜になったら私に『パパ様』って呼ばせて…」

「こ、これ以上は大丈夫だって…!」

あまりにも辛すぎる人生だ、なんでこういう酷い目に遭わなきゃならないんだ!

「あら、ごめんなさいね。でも、お母さんには感謝しているわ。だって、私に映画という選択肢をくれたんですもの」

…もしかして、お母さんがくれた選択肢って…

「…お母さんから、お小遣いを貰って…それで映画を見に行つたとか?」

「そうね。お母さんから月にちよつとだけお小遣いを貰つてたの。」

黒木さんは、思い出すような感じの笑顔を向ける。

「私の人生で初めての映画は、近所の小さな映画館で見た古いアニメ映画だったわ。」

「昼ごはんのパンを買いに行く途中、元気なキャラクターのポスターに一目惚れして見たくなったの。」

パンが買えなくてもいいから見てみたい、と思つてね。

作品のタイトルは失念してしまつたけど…主人公のお姫様が出会つた青年と共に冒険し、恋をし、魔女を倒し、ハッピーエンドを迎える。そんなストーリーだったわ。

お姫様が逆境に立ち向かうファンタジー。滑らかなアニメーション。壮大なマジッ



クのような演出…。

見終わった後、映画はいいものだと思ったわ。だって、フィクションの世界は…あんなに輝いているんですもの。

たった二時間での出来事なのに、永遠に続く美しい夢を見るような気分だったわ…」  
…もしかしたら、彼女がああ時みた映画が、黒木さんの数少ない救いだったのかな。黒木さんにとって映画は、灰色の人生に差し込んだ光だったんだね…。

「映画を見た後は幸せだったわ。その後はお金が余ったから駄菓子を買おうと思ったたら上級生にカツアゲされて、家に帰ったらお母さんに帰るのが遅いと怒られて、そして…」  
「だからこれ以上は語らなくても大丈夫だって…」

「ごめんなさい。けれど、折角いいものを見たからその時は死んでもいいと思ったし、今でもあそこで死んでも良かったかなと思ってるわ。」

…中学の時間にお母さんと二人目のお父さんが捕まって、施設に送られたからこそ、今の私があるのかもしれないけどね」

「…いまでも、自分が死んでいいと思ってるの?」

「思ってるわよ。ただし、素晴らしいエンタメを見た後ならね」

いいエンターテイメントを見たのなら、死んでもいい…

黒木さんはそう思っていたけれど、わたしはどれだけ感動したとしても死にたくはな

いし、誰にも死んでほしくない。

当然、目の前にいる黒木さんにもだ。

悲惨な過去を持つ黒木さんに同情できても、彼女の考えは、あまり理解できなかった。  
。。。

『何もいいことがない灰色の幼少期。母親からの数少ない小遣いで見た映画の魅力にとりつかれる。それは、いいものを見れたのだから死んでもいいと思うほどに…。』

時間が来たので、黒木さんと別れることにした。

そろそろ12時だ。早めに旅館へ向かうことにしよう。



第三エリア、相変わらず浮いている和風のお城のような旅館。

エントランスでは、一ノ瀬さんがお淑やかな笑顔で迎えてくれた。

「いらつしやいませ。す、鈴原…様。一階大広間へと案内いたしますわ」

深くお辞儀をする一ノ瀬さん。何かわたしの名前を無理に言ったような気がするが、気にせずついていこう。



「どうぞ、お入りになられてください」

大広間の前へと案内される。一ノ瀬さんは再びエントランスへと戻っていく。

ふすまを開け、靴を脱ぎ、広い畳の部屋へと入っていった先には…和室用の大きなテーブルに豪華な会席料理が並べられている光景だった。

サーモンからマグロまで、全てが宝石のように輝く刺し身。

エビや大葉などの貴重な食材を包むかのよう、しっかりと衣のついた天ぷら。

調味料が細部まで染み込んでいる、上品に飾り付けられた魚の煮付け…。

他にもあるが、これが12人分も並べられているのである。まさに極上と言える和食のフルコースだ。尤も、飲み物は缶ジュースだけ。

「ひ、一人で…全部用意したのか…？」

「鈴原、来たか。その通りじゃ。一ノ瀬が全て用意したんじゃよ」

「これ、全部食べていいんか…？」

「食べていいわけなからう、一人分だけじゃ、食っていいのは」

今の所席についているのは、誘ってきた湖林くんと、料理を前に恍惚の表情を受かべる灰寺くん。

「笑談する未隅さんと雨崎さん。まぜか漫画本を読んでいる檀くんだ。

テーブルには料理の他にもそれぞれ名前が書かれたカードスタンドが置いてある。とりあえず、『鈴原』のカードの席に座ろう。

それからすぐに、絹川くんと二階堂さん。時間を少し置いて黒木さんと梅田くん、最後に一ノ瀬さんに連れられて蒲生くんもやってきた。

わたしの前の席には絹川くん、右には雨崎さん、左には二階堂さんが座っている。

「…マヨネーズ、持ってきててもよかつたかな…?」

「いや、こういう場では持っていないよ…」

絹川くんはどうやら、マヨネーズの味が忘れられないらしい。

「皆が集まったようですわね。では、『おもてなし会』を開催致しますわ」

座っていた一ノ瀬さんが立ち上がり、ステージにたおやかな足取りで登っていく。

ステージの真ん中でゆっくりと一礼した後、スタンドに付いていたマイクを持つ。

「何か歌でも歌うのかしら?」

黒木さんがきよとんとしている。彼女がこうするのは珍しい…のかな?

「塞翁ケ馬学園の生徒の皆様、本日は私の主催致しました『おもてなし会』にお集まりいただき、誠にありがとうございます。」

この窮屈な遊園地に閉じ込められて、やや11日目が経ちました。

そんな中で、私がこの『おもてなし会』を開いたのは、この現状の中でもせめてこれ以上は殺し合うことのないよう…皆様に親睦を深めて欲しいという願いからござい  
ます」

一ノ瀬さんは楽しそうでも、冷やかすわけでもなく真剣な真顔だ。あれほどコロシアイに怯えていた一ノ瀬さんがだ。

「本日はどうぞ、一ノ瀬旅館の和食コースを再現した会席料理をお楽しみながら、様々なお話を語り合えればと思っております。」

それでは、乾杯の音頭を取らせていただきます。皆様は缶ジュースをお取りになられますよう、お願いします。」

わたしは慌てて、席に置かれたわたしの分のコーラの缶を持つ。

こういう集まりはよくわからないんだよな。こういう時は、乾杯した後すぐにジュースを飲めばいいのかな…?

「…死んでいった皆様への追悼と、今ここにいる皆様のこれからの生存をお祈りして…  
乾杯！」

「…乾杯！」

恐怖への逃避からか、生への執着からか。缶をぶつけ合う音が響き合う。

そのあとわたしは、持っていたコーラ缶のプルトップを開けてゆつくりと飲む。冷た

くも甘い炭酸の味が口内に広がる。

「今日は一ノ瀬の無礼講じや。毒は微塵も入つたらんから安心して食え!」

湖林くんがジュース缶を開け、豪勢に笑う。いかにもそれらしい仕草だ。

皆が食べ始めたので、わたしも食べてみよう。

まずは先付け：薬味を乗せられ、小さな深い白色の小鉢の中に入れてある、薄茶色のごま豆腐からだ。

器を片手で持ち、ごま豆腐を箸で挟み、一口大に切る。

切られたごま豆腐を箸で、ゆっくりと口に運ぶ：

「…っ!?!」

口内で：爽やかなごまの風味と、昆布だしの味付けが掛け合っていて。

それらとねっとりとしつつ滑らかな触感が、矛盾することなくハーモニーを奏でていて…。

要するに：美味しい!こんな美味しいごま豆腐、食べたことない!

「何から何まですっげえ味やな!じわーってなつてチユルってなってる!」

「このプリンなんてクリーミーで甘くて、あたしが特別な存在だと思えちゃうよー!」

灰寺くんががつがつと食べていて、雨崎さんも真つ先にスイーツに手を出していて。

「マグロの刺身、醤油だけでも結構いいじゃん!あと煮魚も醤油の味がしつかりとつい

てて…」

「たしかに魚はうめえけどさ、酢の物も食べたほうがいいんじゃないやねえの…?」

海の幸を味わう檀くんに、二階堂さんが酢の物を食べながら突っ込んで。

「この天ぷらはサクサクとした衣が野菜の味をよりよいものに仕上げていますし、何より油っぽさが無いのが良いですね…」

蒲生くんは、天ぷらに舌鼓を打って。

「おかわりはちゃんと用意していますわ。どうぞゆっくりお食べになられてください  
ね」

一ノ瀬さんも、マナー良く料理を吟味していて。

あちこちで、一ノ瀬さんの会席料理は称賛を受けていた。

それにしても、どの料理も本当にいい味だ。

煮物からおひたしまで、全てに料理へのこだわりがあつて、美味しくしたいという信念が伝わってきて…。

これも、『超高校級の女将』のなせる技なんだろうな!

「本当にいい味だけ…一ノ瀬さんは、どうしていきなり『おもてなし会』なんてやろうと思つたんだ?」

「す、鈴原の分際で質問だなんて! お酌なくていい分ありがたく思いなさい!」

「…いいから答えろ、一ノ瀬」

「うう…仕方ないので答えてあげますわ」

湖林くんに一ノ瀬さんが恐縮する。

「私が『おもてなし会』を開こうと思ったのは…『次回からは一日三食、カラフラの代わりに料理を作る』という決意表明ですの」

「それって、一日三食…じゃないよね?」

「ボクも手伝っていいかな?」

一日三食、12人分の料理を一人で作るというのが大変そうだったのか、雨崎さんも絹川くんも驚いている。

「大丈夫ですわ。私、料理を作るのには慣れていきますし、スピードには定評ありますし、食材は用意されてますし…カラフラの許可もちゃんと得ていますの。」

それに大切に作った料理で女含めた他人を殺そうだなんて思っていないせんわ。この会席料理の食材には低アレルギーのものを使っていますの。どうか、信じてくださってね」

ニコニコとながら一ノ瀬さんは語る。

「…最初は殿方様だけで『おもてなし会』を開きたかったのですが、昨日湖林様を誘ったから『お得意のおもてなしをするなら男だけでなく全ての生徒にしる』と言われましたの



…

彼女の根本は変わってない。けど、いかにも忙しくなりそうな決断を一ノ瀬さんが自分の意志で決めたことなのかな…

「一ノ瀬姉ちゃん！なんかお肉のおかわりあらへんか？」

灰寺くんが一ノ瀬さんに空になったお皿を差し出す。

「ごめんなさいね。お肉のストックはもうありませんの…でも肉の代わりにソイミートのハンバーグなら今から作れますわ」

「この旅館、ソイミートまで用意してあるんだな…」

「代わりでも肉つてのなら美味しそうやな！僕、楽しみにしておるで！」

一ノ瀬さんは、ソイミートを作り到大広間の外へと去っていく。

それからは灰寺くんがハンバーグを一口でたいらげたり、黒木さんが刺し身に大量の醤油をかけてみんなを驚かせてたり。

楽しい食事の時間は、だんだんと過ぎていって…。

…皆の食事が終わった後。マイクを持った一ノ瀬さんと、和服に着替えた湖林くんがステージに立つ。

「そういえば、何か芸を始めるって言ってたね…」

「一体何が始まるんだらうな?」

ざわめきの中、ステージ上の二人がお辞儀をすると、一ノ瀬さんがマイクを握る。

「…これより皆様にお見せしますは、織田信長が愛した舞の一つ『敦盛』でございます。『敦盛』は信長が名を上げたたとされる桶狭間の戦いの前夜、彼が一節を舞ったことでも知られております。

『人間五十年下天のうちを比ぶれば 夢幻の如くなり』のフレーズで知られるこの舞を、ぜひお楽しみください!」

一ノ瀬さんは後ろに下がり、ステージの後ろに置いてあつた鼓を持つ。

一方の湖林くんは和服の袖と片手に扇子を持ち、両手を広げ、『敦盛』を謡い始める。静かな大広間に、湖林くんの謡と、一ノ瀬さんの叩く鼓が響き渡る。

『人間五十年下天のうちを比ぶれば 夢幻の如くなり』

湖林くんは、扇子を広げ足踏みを始める。

わたしは『敦盛』の内容は知っているのだが、意味までは知らないような人間だ。それでも、舞から戦の世の悲哀は伝わってくる。

日本の伝統芸能らしくシンプルで、何よりも力強さを感じられる舞。

皆が、釘付けになっていた。

舞が終わり、ステージ上の二人が礼をすると。その場にいる皆が拍手をする。

「皆様、湖林様と私の芸を見てくださって…ありがとうございます…ございましたわ」

「かつてのオレが舞ったとされる『敦盛』…どうじゃったか？」

「うん、飾らない美しさ…と言ったほうがいいのか？『敦盛』のことを知っていたら、素直に凄いなって思えてくるよ」

「これをあの信長公が踊ったと思うと…なんと…うか、芸も得意だったんやな…僕、信長公のこと今川焼きの発明者ってことしか知らんけど」

「いや、今川焼きは発明しておらん。あと桶狭間の戦いで敗れ討ち取られたのは今川義元じゃ」

「ち、違ったんか!？」

灰寺くんのトンデモ知識に、湖林くんが突っ込む。

「貴様はもつと歴史を学ばんかい。義元は暗君と言われることも多いが…あやつは『海道一の弓取り』と言われるほどの男じゃ。決して無能ではない。ただ、相手が悪かっただけのじゃよ」

無能ではなく、相手が悪かった。

自分に負けた相手を、そう言えるのはある種の自信から来るものなのかな…

こうしてるうちに、一ノ瀬さんたちの旅館での『おもてなし会』が終わった。



今は午後の三時だ。

集合の五時半まで時間がかかるので…とりあえず、散歩に行こうかな。

### 【自由行動2】

光が様々な書籍に差し込む図書館。

湖林くんは、なぜか本を漁っていた。背表紙を見るに歴史や料理の本ばかりを集めているようだ。

「ここには良い資料が置いとらんろう。鈴原、貴様も探すか?」

料理の資料は一ノ瀬さんのために集めているのかな。一緒に探そうかな?

湖林くんと資料探しをした。

湖林くんと多少は仲良くなったかな…?

博物館に日本刀が置いていなかったことを思い出し、『津田遠江長光・レプリカ』をプレゼントした。

「これは…歴史に名を残す伝説の逸品！なんということじゃ！いつかお札をしてやるとしよう！」

結構嬉しいみたいだ。良かった！

「おい鈴原。貴様…歴史に関心や興味はあるか？」

湖林くんが、突然質問してきた。こつちも答えてみるとしよう。

「…一応、星座の歴史については知ってるよ。確か…学者のプトレマイオスが48星座を決めて、でも星座が増えすぎて、国際天文学連合が88星座を定めて…」

「じゃあ…アンティノウス座と呼ばれる星座が、誰をモデルにしているかは知ってるかどうか？」

「…アンティノウス座って確か、今は失われていて88星座には含まれない星座だったよね…たしか…ローマ皇帝のハドリアヌスが寵愛していた美少年の名前だっけ？」

「その通りじゃ！アンティノウスは謎が多い輩でう。川に落ちて若いうちに死んでしまいが、ハドリアヌスのおかげで星座が作られたのじゃ。」

死後は星座になっただけでなく、ハドリアヌスによって神格化され、ローマ中に石像が立ち信仰対象にされた…死後のエピソードのが濃い男なんじゃよ」

湖林くんは腕を組みながら、アンティノウスについて語っていく。

「ローマ皇帝も美少年にこれほど入れ込むなんて、案外愛とやらが深いんだな…」

「ローマ皇帝で愛が深いのは彼だけではない。ヘリオガバルスなんかは同性愛や女装を好んでいた。」

そして名高いネロは音楽や芸術を楽しみ、古代のオリンピックに音楽競技を無理やりねじ込み自らも参加したのじゃ。尤も、どちらも暴君として知られているがな」

そこまでは知らなかったなあ。わたしの前の学校の歴史の授業、あんまり覚えてないけど。

歴史について語る湖林くんはとても生き生きしている…。

「ところで鈴原、貴様は何を愛している?」

「い、いきなり!?何でそんな質問を!?!」

「…いつの時代もリーダーというものは愛がある。それが歪んだ形であれ、美しい形であれ、冷徹で何も愛さないリーダーなど存在せんのだよ。」

愛といっても人間同士の恋愛だけではない。友愛、親愛、自己愛、大切なものや人…様々な愛の形がある。

オレもかつては幸若舞や茶の湯を愛した。帰蝶と蘭丸という人間を愛した。もう一度聞こう。貴様が愛するものは何なのか?」

「今のところ愛してるのは…天文学とロックだなあ…」

趣味のことについてだけど、これでいいのかな…

「なるほど、鈴原は星とロックを愛しているんじゃない。愛があるというのはいいいことじゃ。」

オレは迷信の類は信じんが、ある日流れた彗星がオレに死をもたらしたというエピソードは有名じゃな」

「彗星が、信長に死を…？ハレー彗星の迷信みたいな…？」

「違うのう。そういう言い伝えが残っているだけじゃよ…」

その後、信長と死の彗星のエピソードについて長い時間聞かされた…。

『意外なことに星座や西洋の歴史にも詳しい湖林。愛のないリーダーなど存在しないと語る。』



約束の五時になったので、旅館へとやってきた。

「よし！鈴原に雨崎に黒木に…アタシが呼んだ奴は集まってきたみてえだな！」

二階堂さんは着替えの入っているであろう袋をぶんぶんと回している。

どうやら一ノ瀬さん以外の全ての女子が集まっているようだ。

「そういえばさつきミーくんが男子全員でお風呂に入るって言ってたよね。間違って混

浴風呂に入らないようにしないと…」

「大丈夫よ。混浴風呂、あまり広くなかったし。男子が変態ばかりでも7人も入ったらぎゆうぎゆう詰めになって男湯に戻るんじゃないの?」

心配する雨崎さんの隣で、黒木さんはなぜか温かい紅茶のペットボトルを持っている。

「じゃあお前ら!電子生徒手帳とタオル、着替えは持ったか!」

丸太を持つて戦いに挑む勇士たちのごとく、女たちは女子脱衣所へと入っていく…。



女湯はかなりの広さだった。大風呂はもちろん、打たれ湯にジャグジー風呂、炭酸泉に…なぜか一ノ瀬さんが入っている、赤い色のワイン風呂まである。

「ぎゃあああああつ!触らないでえ!わ、私に蕁麻疹が出ますわよ!」

わたしたちを見るなり叫ぶ一ノ瀬さん。

「やっぱりこの旅館、結構気に入ったんじゃないのか?」

「鈴原…私は気に入ってなんてないですわ!ただの偵察!こんなオンボロ旅館どうでもいいですわ!」



もしかして、一ノ瀬さんはこの旅館をどうにかしたいと思ってるのかな。

「それにしてもここの温泉、女湯にサウナがないのよね。男子たち、サウナで我慢大会して死んだら大事件よね…」

黒木さんはサウナに入りたかったのか、少しがっかりした様子だ。

「これ、ローズの香りのマルセイユ石鹸じゃん！結構いいもの置いてあるね！ここの温泉、またリピしちやおうかなー？」

まず身体を洗う私の隣で、全身を洗う雨崎さん。

「ねえ、鈴原ちゃんの使ってる石鹸はどんなの？色が違うけどさ…」

「リンゴの香りがするけど…やっぱりリンゴなのかな？」

「カモミールだってリンゴの香りなんだよね。あたしはどっちの香りかわからないけど…」

雨崎さんは右手で髪を、左手で身体を洗うという器用なことをやってのけている。

身体を洗い終わり、借りたタオルを黄色い桶に入れてから縁に置き、大風呂に浸かる。

「アタシ、温泉貸し切った際にはこうしたかったんだよね！父ちゃんが入れ墨入れてたせいで温泉行けなかったし！」

…二階堂さんがバタ足で泳いでいた。浅い温泉なのに、上手にクロールしている。安

全にできるといいんだけど。

「炭酸泉って一回入って見たかったんだよね!身体がいい感じに引き締まるー!」

隣りにある炭酸泉には、雨崎さんがストレッチしている。健康に良さそうだ…。

「ホラー映画じゃバスルームで女性が殺されることが多いけど、温泉ではまず人が死ぬイメージがないわよねえ…」

黒木さんは、身体にバスタオルを巻いて優雅にジェットバスに浸かっている。

縁に温かい紅茶のペットボトルを飲みながらだ。飲んでてのぼせないだろうか。

ふと、一ノ瀬さんがずっとワイン風呂に浸かっているのに気付く。

「……………様の……………なんて……………いん…すの…?」

というより、壁の方面を向いて、何か呪文のようにぶつぶつと呟いている。

一ノ瀬さんは立ち上がり、ニヤニヤとした表情でワイン風呂から出ていく。

…一体、何を見てニヤニヤしていたんだろうか。

…まさか?

…うん、そのまさか。

いけないことだとわかっていても、好奇心は抑えられない。

だってここは『知的好奇心とやすらぎの第三エリア』なんだ。

そう、わたしにはロマンがある…！

バレないことを願いつつ、お守り代わりの黄色い桶を持ってワイン風呂へ入る。

ワイン風呂の壁に近づくと…小さな穴があった。

音を立てないように、ゆっくりと覗きこむ…

「あははー！打たれ湯つてやっぱ面白いなあ！絹川はどこ打つんや？間違つても股間は打たんよになー！」

「これ、疲れた人が肩をマツサージするためのじゃないかな…？」

「別にいいんや！これでシャンプーとか流せたらきつと楽しいやろうなあ！」

「お湯が、泡だらけになっちゃうけどいいの…？」

打たれ湯で頭をマツサージする灰寺さんと、普通に肩を打たせる絹川くんが見えた。

「露天風呂さえあれば、もっと天と繋がれたのですが…」

炭酸泉には…マナーがいいのか、髪をバスタオルでまとめて湯に浸かる蒲生くんもいる。

「ははははは！こーやって裸の付き合いつてのもいいよね！僕はサウナに行つてくるよー！」大きく筋肉の付いた裸体の、サウナへと向かう未隅くん。

「未隅！後でサウナで我慢大会でもせんかのう！」シャワーで長い髪を洗う、別人のよう

な湖林くん。

一方、大風呂では。

「北欧のサウナってさー、やっぱり男女混浴だったりするのー?」

本が読めなくて暇なのか、入浴でハイテンションになっているのか、隣りにいた檀くんに語りかける梅田くんがいた。

「…いや、男女別が多いし、混浴でも水着を着るから…」

「え!?混浴入ったことあるのー?やっぱり美人多いのー?」

「入ろうとしたら親父といっちゃやんに…いやなんでもない。じゃ、ちよつと上がるね」  
檀くんは、少し困惑した様子で上がっていく。

その瞬間、梅田くんは硬直した。

「ま…檀…?」

梅田くんは、ただじつと下を見ている。

「…あれが…提督の…ド級戦艦レベル…?あんなの…入るのー?」

…檀くんの大切な部分を見てしまったのかな…。



こうして、わたしたちの温泉での入浴タイムは終わった。

：脱衣所から出ていった後、男子たちと鉢合わせしてちよつと気まぎれなだけで。夕食はやはり一ノ瀬さんの作ったシチューだった。肉と野菜の塊がごろごろしているが、どちらの食材にも程よく味のついたルーが絡んで美味しい。

食べている間、ずっとこのまま平和な時間がすぎればいいのになと思った。

しかし。平和は続かない。

翌日わたしたちは、更なる『絶望』を目撃することになる。

## Chapter 3 「怪奇!悪夢の湯けむりナイトメア は実在していた!」 12日目 (動機発表)

ロシアイ開始から、12日目。

今日の朝ごはんの支度はやはり一ノ瀬さんの担当。シャケの塩焼きがメインの定食。サラダと味噌汁が付け合わせだ。

カラフラの作ってきたであろう食事でも悪くはなかったが、『超高校級の女将』の作る料理は一級品。塩味がシャケの甘味を引き立てていてとても美味しい。

「マジで美味えな!超美味えっ!一生この定食でもいいくらい美味え!」

相席の二階堂さんも一ノ瀬さんの朝ごはんはんに舌鼓を打っている。そりやそうだろうな、と思う。よほどの偏食家か一ノ瀬さんに恨みを持つ人でない限り、彼女の料理を嫌いになる人はいないだろう。

「いやはや、どうしましょうか…」

レストランのキッチンから出てきたのは蒲生くん。いつもの笑顔ではあるが、あたふたとしている。

「蒲生、何かあったのか?なんか実験でもしてたのか?」梅田くんが聞いてくる。流

石に変な実験とかはしてないと願いたい。

「皆様：大変なことになりました。僕が暖かな飲み物を飲もうと、レンジを使っていたら、その中で：コップが割れてしまったのです…」

コップが割れた？爆発しないよりはマシだろうけど。

「…一応、一通りの使い方を教えたんだけど。一体何がいけなかったのかしらね？」

教えたのはどうやら黒木さんのようだ。様子から見て、怪しい使い方は何も教えてはなさそうだ。

「15分も温めていれば、丁度いい温度になるとは思っていたのですが、なぜか温めている途中で割れる音がして。まさかと思いきると割れてしまっていたのです…」

じ、15分：？流石に、温めすぎじゃないのか？

「…蒲生くん。もしかして、飲み物を入れたのはガラスコップじゃないの？」

前の席の絹川くんが、少しドン引きした様子で蒲生くんに話しかける。

「温めるなら、耐熱かどうかわからないガラスじゃなくてマグカップがいいよ。キッチンの食器台にもあるし。あと、もっと短い時間で温めるのがいいと思う…」

「そうですか。では、次はマグカップを10分くらい温めるとしましょう」

「いや、二分か三分くらいでいいよ…」

流石に次はちゃんと温めてくれることを願おう。

「一ノ瀬、別に凝った料理にする必要はない。流石に貴様にも自由な時間が必要じゃろうしな」

「ありがとうございます。でも、女将というのは皆様には皆様に尽くすもの。私のことは気になさらなくてもいいですわ」

「一ノ瀬姉ちゃん、シヤケのおかわり取ってきてくれへんか?」

「シヤケのおかわりは沢山ありますわ。どれくらいがいいのですの?」

「うーんと…三つやな!じゃあお願いするで!」

隣のテーブルの湖林くん、一ノ瀬さん、灰寺くんは和気藹々と食事をしている。一ノ瀬さんは灰寺くんの分のお皿を持ち、キッチンへと向かって行った。

それから数十秒経って、一ノ瀬さんが三つシヤケの並べられたお皿を灰寺くんの席に載せた。灰寺くんは目を輝かせながらシヤケを箸でつまんで口に運んでいく。

「やっぱいい味やん!これからもよろしくな、一ノ瀬姉ちゃん!」

「灰寺様だけでなく殿方様たち、どんどん食べて精力を付けてくださいね?」

「…男好きの一ノ瀬が精力って言う…:…なんか、アツチ系の気分になれるな…:」

「梅田…:もしかして、セクハラか?」

茶々を入れてきた梅田くんに対し、殺気を放つ湖林くん。

「ひいひいっ!許してくれ!」



「湖林様！これはセクハラではなくただのコミュニケーションですわ！最近はお触れたりすったもんだもセクハラになるらしいですわね！」

吸ったり揉んだりしたら普通にセクハラになるのでは…？一ノ瀬さんの性根は変わっていないらしい。

そんな会話をしているうちに、灰寺くんが三つのシャケを食べ終えたようだ。流石に早いがするが。

「あら、灰寺様はシャケはまだ食べられますの？無くなるまでいくらでも食べてかまいませんわ」

「んーと、じゃあ次は五つ食べようかな？」

「灰寺、貴様はよく動くから沢山食べてもいいかも知れんおう」

「よーし、シャケが無くなるか僕が腹一杯になるかの勝負やな！」

…どこか、本当の親子のような三人だ。

一方、檀くんは…未隅くん、雨崎さんと同じ席で、何かのライトノベルを読みながら朝食を食べている。

「檀くん！漫画もいいけど、集中して食べることも大事だぞ！」

「昔見た映画でご飯食べながら読書しているシーンあったし、食べ物をこぼしたりしなければいいんじゃないの？と言うかこれ、ライトノベルだよ」

「ライトノベル?光を当てると読める小説かな…?」

「いや、漫画みたいな挿絵のある小説…だったと思う…」

そんな二人の会話を横目に、檀くんは黙々と食事と読書のマルチタスクをこなしている…。

「…」馳走様でした」

皆が朝食を終え、何枚もの食器を一ノ瀬さんが器用に片付けていく。

未隅さんと雨崎さんは食後でも会話しているし、梅田さんと湖林くんは一ノ瀬さんを手伝おうとするも梅田くんが皿を割ってしまったせいで湖林くんは怒られている。

そんな日常だが、何か悲惨な出来事が起きるよりはマシだ。そう思いながら席を立ち、レストランの出口へと向かう。



…扉を開けると、奇妙な光景が広がっていた。

「…何…だよ…!?!」

千切られた段ボールが、バラバラにされて打ち捨てられていて。

「誰が、こんなことをしたのですの!?!」

奇妙なロゴマークの書かれたあの絶望郷のポスターが、何枚も散らばっていた。

「いや、なんでこれがここに!?!」

「…おい、これってこの前見た、絶望郷ってやつこのポスターじゃねえか!」

「どうしてこんな所に散らばってるんだ?しかし、いつ見てもビビるデザインのパスターだな…この前のやつと、変わりはないな」

二階堂さんと雨崎さんが戦慄している中、梅田くんがポスターを拾い上げる。

…ふと、散らばったポスターに混じって葉書サイズの写真を挟んだクリアファイルが落ちていっているのを見つける。

正直怖いけど…ポスターをかき分け、クリアファイルを拾い上げる。

「す、鈴原?何か見つけたのか?どうやら写真のようじゃが…」

写真はモノクロだった。様々な機械だらけの部屋の中心で、後ろを向いたフードの人物が写っている…という異様なものだ。

見たこともないワンシーンなのに、背筋が凍る。わたしはクリアファイルを裏返し、写真の裏を見る。

裏には黒い文字でこう書かれていた。

『超高校級の復讐者』

「なるほど復讐者か!そーういやなんでモノクロ写真何やろ…つてええええええええっ  
!?!」

横から写真を見ていた灰寺くんが驚きの叫び声を上げる。

「この人物が…もしかして、復讐者?」

思わず声が出る。写真に気づいたのか、周りの皆は写真を見ようとわたしの周りに集まってきた。

「あの段ボール箱の何に入ってた奴なんかな…」

落ち着いた灰寺くんが再び写真を見る。

写真の情報量は少なく、人物が何をしているかも、写された場所がどこなのかもわからない。

この人物は、『超高校級の復讐者』何だろうか…?

「また、ゴフェル計画とか絶望郷とかと同じ種類の謎か…?」

「復讐者があたし達と同じ超高校級つて…まさか、この中に紛れているの!?!」

雨崎さんが顔を青くしながら立ち竦むと、未隅君が彼女を抱えてくれた。

「落ち着こう梨々、みんな!ただのモノクマの嫌がらせかもしれない!」

しかし。

わたしには、これだけじゃない、一連の何かがただの嫌がらせや嘘とは思えなかった。

ゴフェル計画、隕石、ウイルス、絶望郷。

黒幕はヒストリエランドの外の世界の情報を小出しにしている。

それが嘘ならば思い出しドリリンクの断片的な記憶：『全ての人々が笑っている』『全ての人々が助けを求めている』不気味な光景はどうなのだろうか。

藍葉さんの遺してくれた思い出しドリリンクの記憶が、嘘をついているとは思えない。

その瞬間、持っていたクリアファイルが目前から消えた。

「写真が消えた…：ようですが…？」

「全く。『あの男』の出番はまだって言うのに。なんでやらかすのだ？ どうせならわーのグラビアをばら撒くのだ」

誰かの声をした…：目の前には、なぜかクリアファイルを写真ごと、持っていたゴミ袋に入れていくカラフラの姿があった。

「おい、カラフラ！ 返せよ！ 鈴原が見つけたんだから鈴原のもんだぞこれ！」

改造箒をいつの間にか持っていた二階堂さんを振り切り、カラフラは台車に乗りながらポスターを器用にゴミ袋の中に入れていく。

「この泥棒花が！ 貴様、何をしようとしている?!」

「ポスターも何で散らかしたんか!? 最初から散らかさない方がええやん！」

他の皆…湖林くんや灰寺くんたちもカラフラを捕まえようとするが、台車はハイス

ピードを出しながら彼らを避ける。一体どうやって台車を動かし、あの手代わりである葉っぱでポスターを回収しているんだろう。

「ま、待ってくれカラフラ! その写真は、外の世界の謎を明かす為のものじゃないのか!？」

わたしも必死に追いかけているが、カラフラに話しかける。

「鈴原さん。こんなこと言ったらモノクマが殺意の波動に目覚めそうだけど、とりあえず一つだけヒントを言っておくのだ」

わたしの質問を聞いたのか、カラフラを載せた台車が止まる。

「どうせ手短に済ませるんでしょうけど、それでもいいわ。このコロシアイが盛り上がるならね」

「黒木さんの言う通りに手短にすませるのだ。」

『超高校級の復讐者』は…元々絶望郷の人間ではなかったのだ」

…ええ？

絶望郷が何なのか未だにわからないのにな？

『超高校級の復讐者』が絶望郷の人間ではない…？

謎が謎を呼ぶ。カラフラは…一体何をしたいんだろうか？

そう考えた、その瞬間だった。

「ぎゃあああああ！復讐されるううううう！序盤で倒したスライムやゴブリンにスレイヤーされるううううう！」

…どこからか現れた、勇者のようなヘッドギアとマントを付けたモノクマが、実用性のなさそうな大きな剣をカラフラに向けてぶん回していた。

普通は、村を焼かれた勇者が魔王に復讐するものではないのか…？

「カラフラくんさあ…『あの男』に何か言いふらしたの？それとも何か命令したの？『あの男』が自分の意思で何かをやるとは思えないんだけどさあ…」

葉で頭（というより花）を抱え、怯えるカラフラ。

「ば、バレたのだ…!?!」

台車ごと後退りしていくカラフラ。今のうちにゴミ袋の中の写真を奪えそうだが、そんなことをしたらモノクマに何かされそうな予感がする…。

「大体ね、オマエはボクの下で黙々もつくりと働いていればいいんだよね。そりやもう、パン工場の労働者みたいにさ。」

と言うわけで塞翁ケ馬学園の理事長・カラフラにスペシャルなおシオキを用意しましたー！

…おシオキ？

まさか、バニラさんや紅葉さんのように、カラフラも…？

「おい、モノクマ…まさか処刑しようって言うんじゃないだろうな!」

…いつの間にか、モノクマを大きな声で糾弾していた。

カラフラの味方をするわけではないが、いくらロボットとは言えあのように残酷に処刑してしまってもいいのだろうか。そう言う、自分勝手な考えだ。

モノクマはこちらを向き、やれやれと言う仕草をしながらため息をつく。

「あのさ、学生である鈴原さんが学園長であるボクに逆らっていいと思ってるの?」

それにオシオキと言っても、今からやるのは命を取るわけじゃないよ。オシオキ名はなんと…キャロライナ・リーパー食べ放題!」

「…キャロライナ・リーパー。素手で触るのすら危険な、世界一辛い唐辛子の一種。有名なハバネロがまだ可愛く見えるほどの恐ろしい植物ね」

黒木さんが解説している。命を奪うより恐ろしいんじゃないだろうか…

「お、お許しを! せめてキムチ汁の海に沈めるとかにするのだ!」

「辛いのはどれも一緒でしょ? さあ、地獄を食らうがいい! アーハッハッハッハッ!」

モノクマはどこからか持ち出したロープでカラフラを台車に縛り、ゴミ袋を持ちながら何処かへと去っていく。

「全く、どこが勇者だよ…」

檀くんと同感だ。モノクマの態度は明らかに小物魔王にしか見えない。



「このポスター、モノクマが『あの男』って呼んで人がばら撒いたのかな…?」  
絹川くんが一枚だけ残された、絶望郷のポスターを拾い上げる。

謎と共に、黒幕外の世界のヒントがわかった。しかし、どう思考しても真実はわからない。

『超高校級の復讐者』。

カラフラにおそらく命令され、ポスターと写真をばら撒いた『あの男』。

「外の世界には…絶望郷の他に、何かがあるんですの!?!まさか…私たちの居場所なんて外の世界にはどこにもなくて…どれだけ助けを求めても無駄と言うことなの!?!」

一ノ瀬さんが愕然としながら頭を掻き巻く。

「落ち着くんだなー。きつと平和な世界もあつて、心が綺麗な人間たちもいて…なんこともあり得るかもしれないんだなー」

「…そんな人たちが、本当に助けてくれるといいんだけど…」

自分を奮い立たせようとする梅田くんに、絹川くんが答える。



その後わたしたちは解散し、それぞれの目的の場所へと向かつて行った。

わたしは…いつものように部屋に戻る。部屋にいと、少し落ち着く気がする。  
さて…今日は何をしようかな。



【自由行動3】

一ノ瀬さんは、レストランをモップで掃除していた。

「今日のお昼ご飯、湖林様は喜んでくれるといいですね…」

湖林くんのこと、そんなに気になるのかな。そんな彼女を手伝おうかな？

一ノ瀬さんに避けられながらも掃除した…。

一ノ瀬さんとの仲がちよつとは深まった…：らしいな。

何か料理の保存に使えるそうだと思います、『曲げわっぱ』をプレゼントした。

「まあ女にしては上出来なプレゼントですわね？インテリア程度にはいいかもしれませ  
んわ…」

一応は喜んでくれたようだ。

わたしと一ノ瀬さんは今、1.5mほど距離を空けている。

「蕁麻疹の事を考えたら空けたほうがいいんだろうけど…何かこつちから話したほうがいいのかな。」

「…一ノ瀬旅館のレストランとかのメニューで、好きなものとかある?」

典型的な質問だが、ないよりはマシ…かな?

「…はあ…やっぱりそうですのね。女は常にスイーツとか食べ物とか原始的なことしか脳味噌にない…スマートで現代的な殿方様のように最新のニュースの話でもしたらどうですか?」

最新のニュースといっても、閉じ込められてしまっているから話ができないんだよね…

一ノ瀬さんは、わたしを何か嫌そうな目で睨みつけている。えーと、とりあえずここは一ノ瀬さんの好きそうな…。

「…一ノ瀬さんの好みの男性のタイプって、一体誰なんだ?」

「い、いきなり恋愛話?! どうしていきなりこんな質問をしてくるのですの!?! やはり女という生き物は生殖で考える生命体なのですわね! これだから、下等生物は…!」

質問を質問で返してて、怒られないのかな…?

「大体、世の中の殿方様である方に嫌いなお方などおりませんわ。私の周りの殿方様は素晴らしい人たちがばかりですよ。」

優秀な一ノ瀬旅館のオーナーであるお兄様、新鮮な食材を見極め絶品グルメを調理する板前の皆様、顧客のニーズに合わせたサービスを考案する経営陣…

それに比べて中居はバカばかりなのか、接客、掃除やベッドメイクなどの低級な仕事しかできない…やっぱり、女は無能しかいませんわね」

「でも…お客様と接したりするのって、案外難しいよね。皆が満足するように、声掛けやメニューの準備とかするのって、以外と頭使うし…」

「そんなの当たり前ですわ。アッパッパー女同士の会話のように何も考えずに話したり、低能専業主婦のように手抜き料理を作るだけの事とは訳が違いますの。」

だから私は…仕事の時は常に頭をフル回転させていますの。例えば、お辞儀のタイミングやお客様ごとに出すメニュー、どうしたら客室が完璧に綺麗になるかなど。

…これを、男女問わずやらなければならないのが一苦労ですの」

…一ノ瀬さん、仕事の時は男女差別はしない性格なのかな? プライベートの時はともかく。

日本一の旅館と呼ばれる為に、お客様の居心地のいい空間を作り上げる。だからこそ、『超高校級の女将』と呼ばれてるのかな。

そんな一ノ瀬さんだけど、せっかくの着物に埃が付いている。どこかを掃除した時に付いたのだろう。

「あの、一ノ瀬さん。着物にゴミが…」

「す、鈴原!?ち、近寄って何を…やめて下さる!?!ひいいいい!こ…来ないでええええええええっ!」

鈴原が取ろうとした瞬間、一ノ瀬は叫びながらどこかへと逃げていった。

彼女、よほど女性が嫌いなんだな…。

『重度の女性嫌いで、頭の中には女性に対する偏見がいっぱい。そんな一ノ瀬とコミュニケーションを取るのに鈴原は悪戦苦闘。しかし、自分の仕事には真面目。』



昼食のミートソースパスタはトマトとひき肉の食感がマッチしているだけでなく、茹で上げたパスタと程よい感じに絡んでいても素晴らしい味だった。

「一ノ瀬さん、イタリアンも作れたんだ…って、絹川くん?」

…絹川くんがなぜか、備え付けの粉チーズを大量にパスタにかけている。

「おい絹川、粉チーズなんてかけすぎるとカロリー高くなるし机の上が散らかるしい事ねーぞ?」

「マヨネーズがないし、粉チーズがなんとか代わりになるかなと思つてね」

心配しているであろう二階堂さんに絹川君が答える。マヨネーズの代わりになるのかな、粉チーズ…。

レストランにいる皆が、そうやっているうちに昼食を食べ終えた。

一ノ瀬さんがキッチンで12人分のお皿を洗っているのを見て、頑張つて欲しいと考えながらレストランを出ようとした瞬間。

今の現状に似つかわしくないようで、ある意味お似合いなチャイムが、鳴り響いた。

「…!?もしかして、また…?」

「園内のオマエラへのお知らせです!このモノクマが丹精込めて作り上げた、出来立てホヤホヤ、国産の…三つ目の動機が完成致しました!第一エリアのステージにて振舞うから、今すぐ来てゆっくりりしていつてね!」

### 第三の動機。

悪夢の始まりを告げるであろうパンドラの箱。また、始まつてしまうのか?

「ちよつと待つてくださいる!?!お皿まだ洗い終えてないの!?!」

一ノ瀬さんがキッチンから飛び出してきた。手は濡れているが、今は拭いた方がいいと思う。

…もう行きたくないし嫌だけど、行かなければ処刑が待つている。

わたしたちは覚悟を決め、第一エリアへと向かった。



「人参と言ったらウサギとハムスターだけど、実はクマも食べるんだよね。オマエラー、食べるー？」

ステージには、なぜか人参を頬張るモノクマと、いつもの巨大な液晶テレビ、そして小さな箱が置いてあった。

今まで黒幕が用意してきた料理を食べてきたわたしが言うことではないと思うが、モノクマの食べている人参はなぜか食べたいとは思えない。

「どうせ動機と言っても大したものじゃなからう？ だったら早くオレらをここから解放せんかい！」

湖林くんがモノクマ相手に怒号を浴びせる。

「頭信長になつちやうと短気になるの？ と言うわけで、カルシウム代わりになんかテレビでも見てつてよ！」

モノクマは残りの人参を口の中に放り投げると、傍に置いてあったリモコンを押す。

「核の炎の渦中でも、お花畑のお花摘みの最中でも。超絶大絶賛放送中の感動チャンネル！カラ☆フラTVが始まるのだ〜♪」

液晶テレビにロゴマークが映されたと思うと…前回とは違う病室風のセットと、ピンクのミニスカナース…美少女姿のカラフラが映された。

「アナタラ、今回もおはろんぱく!エログロナンセンスな健全アイドル!カラフラ・ナー スコスなのだ!」

テレビの画面はくねくねと体を動かすカラフラの胸部や股間をローアングルで映している。何処か見えそうで見えない、なんとも危なっかしいカメラワークだ。

「テレビといえば視聴率が命なのだ。その限りではない番組もあるみたいだけど。ネット至上主義の今になっても視聴率にしがみつく上層部もいる今だからこそ、センシティブさとレモン1000個分並みに刺激たつぶりの脚本が必要なのだ!」

レモン1000個分って…さっき、トウガラシの刑にさらされてなかったか?

「こんなの、A i i c e に載つても人気でないようなコーナー、誰が得するんだろう…?」

流石の雨崎さんも呆れ顔だ。モデル雑誌にお色気、相性悪そうだもんな…。

「おい…流石に放送禁止レベルまで過激になつたら打ち切りになるぞ!父ちゃんの好きな『紙装甲水着ビーチバレー・ぶっかけもあるよ!』も苦情来て終わつたんだぞ!」

二階堂さんの父親の見てた番組、もしかして…いや、なんでもない。

「じゃあ、早速動機を発表するのだ。今回は思春期の男子女子の心を潤わせるワクワク



なものなのだ……くひひ、まずはこれを見るのだ♡」

カラフラはアップになった胸の谷間からゆっくりと……赤い三角形の紙を取り出した。

「合法コンパ、略して合コンを行うのだ♪」

……合コン？

あの男女が仲良くなるために行う、飲み会みたいなもの……？

「でも、男子七人、女子五人だと男子が二人余って惨め……だと思ったアナタ！こんなことがあろうかとモノクマがクジを用意し……」

「花粉撒き散らしそうでウザいカラフラの代わりに説明しておくね！まずこの箱から一人一枚、クジを取り出します。開くとAからDのアルファベットが書いてあるので、オマエはアルファベットごとの四グループに分かれてください！」

モノクマがカラフラに変わって解説する。どうやら小さな箱はクジが入れられているようだ。

これ、本当に合コンなのか……？

「四グループに分かれた後は……第三エリアのログハウスに一晩泊まってください！12人だからすぐ決まると思うので……」

「はい、三人組作って……！なのだ！」

カラフラがモノクマを邪魔するように大声を出した。しかも、画面は谷間の見える胸

部のアップ。流石にあざとすぎる。

叶千華も、自分に似たA-Iがこんなことされるとは思っていなかったんだろうな…と  
うんざりしてしまう。

?  
それよりもログハウスに泊まるってことは、普通のお泊まり会でいいんじゃないの…

「グッズの売り上げはボクの方がはるかに上なんだよね。つたく、生意気な口聞きや  
がつて…じゃ、オゲレツ番組はガン無視してオマエラは早めにクジをひいてくださいね  
!」

モノクマは全てを諦めたのか、クジをわたしたちの前に置く。

この一匹と一輪、本当に仲が悪いんだな。そう思いつつ、クジを引こうと前に進む。  
「二人組作るのにいい思い出がないんじゃないが…」

「私だっていつも先生と組んでいましたわ…やはり女のいじめ文化は陰湿ですわ…」  
わたしだけじゃなくて、他の皆もクジを引いていく。

赤い三角形のクジを開く。『D』と言う緑の手書き文字が書かれていた。

「僕と梨々は別々みたいだな…」

「本当は一緒が良かったけど、仕方ないよ。無事に終わるといいね」

未隅ちゃんと雨崎さんがそれぞれを心配しあっている。

皆がクジを引き終わった後、モノクマが懐から赤い鍵を3本取り出した。

「次はコテージの鍵を渡しちやうよ。まず、Aグループの人からね。愛くるしいボクのマスコット付きだから無くさないように！」

Aグループの三人が、モノクマから鍵を受け取る。

「合コンってよくわからんけど楽しそうやな！ゲームでもしたりするんやろうか？」

「ゲームなんてもの置いてなさそうだけどな…」

「うん、大丈夫だよね…」

楽しそうな灰寺くん、いつも通り気だるげな檀くん。そして、何処かぎこちなく歩く雨崎さん。

次に、Bグループ。

「このストラップ、本当によくできてるよね…」

「男二人に女一人!?夢がカムするバンドみてえだな！」

「まあ、よくある構図じやな」

絹川くんと二階堂さん、湖林くん。さつきと同じくストラップのついた、青い鍵を頂戴する。

Cグループ。

「二人とも！何かあったら僕を頼りたまえ！」

「…ホラーものだどジョックはすぐ死ぬけどね」

「殿方様が未隅様以外誰もいませんわ…私が保護しないと…」

未隅くん、一ノ瀬さん。そして黒木さん。三人が黄色い鍵を入手する。

最後にDグループ。

「これこそ、天の導き。そう思つて受け入れましょう」

「なんだか嫌な予感がするんだな…」

蒲生くんは冷静に、梅田くんはやや戸惑いながら緑の鍵を手に取る。

「どうやらアナタらはちゃんと鍵を受け取ったようなのだ。今からログハウスを全て解放するから全員それぞれのグループの場所に入つてね!明日の正午になるまではログハウスから出られないのだ!」

カラフラがびよんぴよん、と飛び跳ねながら笑う。

「で、出られねえのか!?お前ら、一体何が目的なんだよ!異性不純交遊か?」

二階堂さんがカラフラたちに話しかける。

「目的だつて?そんなの決まつてるじゃん。ボクはオマエラに仲良くなつて欲しいんだよ!例えば、ハブとマングース、シマウマとライオンみたいだね…」

それ、仲が悪いつてことじゃないかな?

…そんな中でも、モノクマの真の思惑は一切わからない。

それでも、生きるためにはこのふざけた合法コンパとやらを乗り越えるしかないよう  
だ。

わたしたちは重い足取りで、第三エリアのログハウスへの長い道のりを進んでいった  
…。

## Chapter 3 「怪奇!悪夢の湯けむりナイトメア は実在していた!」 12日目 (合法コンパ編)

…ログハウスのドアには、緑色の無地に『D』と書いてある貼り紙が貼ってあった。  
「えーと…このログハウスに一晩泊まって、明日の正午まで過ごすだけでいいんだな  
?」

梅田くんは戸惑いを隠せない様子で、ログハウスの周辺を見回している。

「モノクマとカラフラの用意した動機だからね…。ログハウスの中に何かあってもおか  
しくないよ」

「本当に何もなければいいんですけどね。では、入っていきましよう」

蒲生くんは鍵を開けると、挿んだドアノブをゆっくりと回し、中へと入っていく。

わたしと梅田くんも、続けてログハウス内へとお邪魔した。



ログハウスの中には掘り炬燵テーブルが中央にある、一つ窓の付いた大きな明るい

ビングと、それぞれ『キッチンルーム』『シャワールーム』『トイレ』とプレートに書かれた三つのドアがあった。

「至って普通のログハウスといった感じですね」

ただ異質なのは…リビングの左の窓際には教会の懺悔室にあるようなテーブルと椅子が二つ。

右の壁には、童話から図鑑、純文学やノンフィクションまで沢山の本が並べられた本棚。

そして掘り炬燵テーブルには…小型プラネタリウムと、三つずつメモ帳とペンが置いてある。

「才能に関係するものが、置いてあるのかな…にしても、このメモ帳は…」

「ここ、トイレとシャワールームが一緒じゃないし、エアコンまで常備してある！いい部屋なんだなー！」

感激する梅田くんを無視して、テーブル上のメモ帳を手取る。

モノクマのイラストの印刷してあるメモ帳の表紙には、小学生がボールペンで一生懸命書いたような文字。

『自分のひみつを、正午までにここに書いてね』

『Dグループの人には出前があるよ』

…出前があるってことは、食料には困らないとして。

自分の秘密を、このメモ帳に書かなければならないのか？

そう考えているうちに、キッチンルームを探っていた蒲生くんがドアから出てきた。

「極めて普通のキッチンでしたが、冷蔵庫…あれの中にはジュースなどの飲料しか入っていませんでした」

「食料なら出前が用意してあるみたいだし、大丈夫じゃないかな」

「そうなのか。まあ人間は水分がないと生きていけないからな。何も無いよりはマシだな」

それよりもメモ帳だ。正午までに書かなければおそらく処刑が待っているんだろうけど。

ログハウスに泊まるのはただのブラフで、これが真の動機なんだろうか…？



【Aグループのログハウスにて】

右側にはボルタリング用なのか沢山の突起の付いた壁と、その近くには大量の服や帽子のかかったポールハンガー。そして掘り炬燵のテーブルの上にはメモ帳とペンが三



つずつ、そしていくつかのあたしの知らない軍艦のプラモデルと工具一式。

…あたしたちの才能に関係あるであろうものが置かれた、珍妙なログハウス。

灰寺くんがどれだけ力を入れても入り口のドアは開かず、檀くんは早速プラモの包装を破り始めている。

「一体、どうすればいいんだろう…」

明日の正午までここにいろと言われても、やったこともないボルタリングとプラモの組み立てでは流石に退屈しそうだ。

ポールハンガーに近づき、かけてある服を一着頂戴する。たまに雑誌に載ってる、レトロ特集にあるような雰囲気のワンピースだ。

折角だし、これでなんかやってみようかな。男子二人が喜ぶかはわかんないけど。

「ねえ、檀くん。灰寺くん。今からファッションショー、やっていいかな？」

「…りりりん？どうかしたの？」

「ショーはわかるけど、ファッションショーって？」灰寺くんが質問してくる。

「わかりやすく言うと、モデルさんが色んな服を着てお客様を楽しませるショーのことなんだ。本当はステージ上で音楽を流しながらやるんだけど。ここには音楽を流す機械がないっほいから無音のファッションショーになるけど…いいかな？」

「…プラモ、組み立てながら見てもいい？」檀くんがやる気なさげな声で言う。

「別にいいけどさ…ちゃんと拍手はしてよね」

「拍手はショーの基本やし、ちゃんとやらんとな。楽しみやな!」灰寺くんはファッションショーというものが初めてなのか、ワクワクしているようだ。

雑誌がメインのモデルだからファッションショーに出た経験はあまりないけど…やる気が出てきたなあ。カメラもあつたら、後で写真をミーくんに見せたのにな。

「じゃあ、しばらく待ってて。これより雨崎梨々のファッションショーをいまいす♪」  
あたしは服と帽子をいくつかポールハンガーから取り、シャワールームへと向かった。

いつも着ている服を脱ぎ、向日葵の柄が特徴的な半袖のシャツワンピースに着替えていく。ヘアゴムとリボンを外し、一つ三つ編みを作って再びゴムで留める。それにしても、ワンピースのサイズがぴったりだ。

メイクができないのは残念だけど、お肌のコンディションは最高だから大丈夫!

…お色直しが終わったので、ドアを大きく開け、シャワールームから出ていく。  
ショーモデルのように背を伸ばして、手を振りながらリビングを歩いていく。

「あ、雨崎姉ちゃん、三つ編みになつとる!?!いつもとは違うし…すげーなあ!」

灰寺くんが驚きの声を上げながら拍手する。あたしはいつもツーテールだから、こう

言う姿を見るのは初めてだろうな。

檀くんもプラモを組み立てつつではあるが、一応は手を叩いている。

「どう？ 癖毛の人は三つ編みも様になるんだよー」

スカートがふわつとなるように一回ターンして、二人に笑いかける。ランウェイも派手な音楽もないけど、あたし自身が輝いているように見える。

しばらくして、またシャワールームに戻る。

次の服：紺色で無地の、どちらも大きな白いリボンの付いた帽子とワンピースに着替えた。

ヘアスタイルはフェミニンさが可愛いと評判のルーズシニヨンだ。

ドアを再び開き、早速ポーズを決める。

「すごく可愛い……って言えばいいのかな、これ！」

灰寺くんはもちろん、檀くんももはやプラモそっちのけで見惚れている様子だ。

他にも様々な服に着替えた。置いてあるの、なぜか全部ワンピースだったけど。

エレベーターガール風、フリルの沢山付いたロリータのようなもの、薔薇の花柄のワンピース……。

ポールハンガーにある全ての服をコンプリートした時点で、あたしのファッションショーは終わった。

「ファツションショー、あんなに小さいのに形になつてる所は凄かったね」

「檀くん、流石に小さい言われると傷つくなあ…」

「えーと、れんそーほー? つて。パーツ? どこにあるんかな?」

ショーが終わつた今、あたしたちはプラモデルを三人で手分けして組み立てている。

檀くん曰く敵の艦隊に囲まれて沈んでしまった戦艦…の2m越えのプラモだ。

軍艦にもプラモにも詳しくないあたしと灰寺くんとは違い、檀くんはテキパキと手を動かしている。

組み立てている途中、檀くんがあたしたちに話しかけてきた。

「あのさ…メモ帳の話なんだけど」

「…どうしたの?」

「表紙に『秘密を書け』なんてあるけど、一体誰が書くんだ? 自分の秘密なんて…」

…自分の秘密。どうしても言えない、人に軽蔑されるような秘密ならあるんだけどな。

でも、明日の正午までに書かなきゃいけないよね…。忘れないうちに、今書いた方がいいかな…?

「ねえ、ちよつと休憩して…先に秘密書いていいかな」

「いいけど、俺とランきゅんのは絶対見るなよ」

「わかったよ。でも…あたしのも何があっても絶対見ないでね」

「了解や。ところで檀兄ちゃん、このパーツは…」

二人がプラモ遊びに取り組んでいる所で、ペンとメモ帳を持ってキッチンへと駆け込む。

少し非常識かもしれないけど、テーブル代わりの調理台のあるここならあたしの秘密を書ける。

メモ帳を開き、文字を素早く書き込んでいく。

『雨崎梨々は生まれつき、味方のいない人やものの味方になる性質である』

書いている途中で、思い出す。

5歳くらいの頃だった。

あるテレビ番組にある悪役がいた。彼は主人公たちからはもちろん、部下からは慕われるどころか下に見られ、ボスからは役に立たないと判断されているような嫌われ者だった。

幼稚園の男子からも「あいつ嫌い」と言われてたような気がする。

やがて主人公たちに追い詰められた時は、ボスに「お前は用済みだ」と言われて無残

にも殺されてしまった。

でも、彼の最期を見ていると、何故か悲しくなり、涙を流してしまった。

悪の限りを尽くしてきたやつなのに、どうしてだろう。

あたしは彼が死んだ回の次の日、庭に咲いていた綺麗なお花を摘んでテレビの前に供えた。

パパに何をしたらんだと聞かれた時は「あの番組のあの人が、可哀想だったから」と返した。

「でも、あいつはテレビの中とはいえ悪いことをしたんだ。可哀想と思うなんて、ちよつと不思議だな」

∴それが、パパの返事だった。

小学生になって、友達も沢山できた。

でもクラスには、同級生一同から嫌われて、文房具を壊されたり、すれ違いざまに殴られる女の子がいた。

ある日彼女が一人で泣きながら下校しているのを見て、彼女と一緒に帰ることにした。

自分でもどうしてかはわからない。また可哀想、と思ったのかもしれない。

でも彼女は、普通なら暖かく迎え入れてくれるはずの家に帰れば殴られ、悪口を言われるような境遇の子だった。

こうしていつも一緒に帰っているうちに仲良くなった。

遊ぶ時に部屋には呼んでもらえなかったし、成績も良くなって体も痣だらけの、一緒にいて楽しいとは言い難い子。

それでも、あの子の明るい笑顔を見てみると「あたしがこの子の味方で、本当に良かった」と思えた。

でも、あの子を救うことはできなかった。

夏休みの途中、自宅の風呂場にてカミソリで首を切つて死んでいるのが発見された。

先生から「〇〇さんが亡くなりました」というお知らせがあった後、クラスの間からは「あいつが死んでくれて良かった」「清々した」みたいな声があがった。

クラスの間にはあの子の机にゴミや虫の死骸を置くなどして笑っていた。あたしがそれを片付けて机を綺麗に拭いたのを見られた時は、「〇〇菌持ち」とか言われて……あたしへのいじめが始まった。

葬式は行われず、墓参りに来て花を供えたのは、あたし一人だった。

色々あって『Alice』の人気読者モデルになってからも、人気の低いブランドの

衣類を着ていた。そのブランドの商品が奇跡なのかヒットしてからは、『超高校級のモデル』と呼ばれるようになった。

クラスの嫌われ者の友達になっていく。ボランテアで人気のない猫を飼う。酷評されている漫画を全巻揃えていく。

：そうしているうちに、やがてあたしは、味方のいない人やものを見ると助けなくなる性分なんだと気づいた。

ふと思った。

あたしは生まれつきの狂人なんだろうか。愛されないものを好きになるって、おかしいんだろうか。

そんなことを考えたある日、思わず泣きそうになった。

もしかしたら、あたしの本性を誰かに知られたらきつと嫌われるかもしれない。

そう思ったのか。ガラケーしか持っていない、親しい仲の男子にこういうメールを送った。

『愛されない何かを愛するって、おかしいですか?』

少し自由帳に書くような詩みたいで恥ずかしかった、でも、受け入れてくれることを



期待していたかもしれない。

そうしているうちに、メールが来た。

親しい仲の男子からの返事は、こうだった。

『何かを愛することにおかしいことなんてないよ』

思わず、涙が出た。

そうやって、あたしは彼：ミークんに惚れていったんだろう。

その日は、少しだけあたしが報われたんだなと思った。

「雨崎姉ちゃん？寝てるんかー？」

「…は、灰寺くん!?!ごめん、すぐ戻る!」

…回想しているうちにキッチンのドアを開いて、灰寺くんが呼びかけてきた。

過去をつらつらと書いてしまったメモ帳を閉じてから持って、キッチンから出ていく。

「…もう15分もキッチンに籠ってたけど、どうしたの？」

「いや、なんでもない…」

檀くんも少し心配そうな顔をしている。

「雨崎姉ちゃんが無事みたいで良かったなあ。折角だからプラモデルは休憩して、僕も檀兄ちゃんもメモ帳に秘密書いたんや。でも、さっきの約束通り見せるのは禁物や。じゃ、プラモデルの続きやろ!」

「…そうだね」

プラモデルの組み立ては、実は初めてだけど凄く楽しい。  
今夜は、なんとか乗り切れそうだと思います。



「Bグループのログハウスにて」

「この刀と鎧は…源義経のものじゃな。見てみればわかる」

「いや、見ればと言われてもわかんねーよ!それにしても、キレイな部屋だな。あのモノクマとカラフラが健気に掃除したのか?」

ボクたちは今、日本刀を装備した日本鎧が飾られてて、ロッカーがリビングの床に置かれていて…

真ん中のテーブルに、お内裏様とお雛様が飾られているログハウスにいる。

テーブルには三セット分、メモ帳とペンもある。表紙には、

『自分のひみつを、正午までにここに書いてね』

『Bグループの人には出前があるよ』

って書かれてるけど…秘密を書くのが、また動機になるのかな。

忘れないうちに書いてしまおうと、さつさとメモ帳とペンを取る。すると横から二階堂さんに取り上げられた。

「絹川、早とちりは流石にやめとけ」

「…ごめん、二階堂さん。早く書いた方がいかなと思つて…」少ししゅん、となる。

「こういうのは、めっちゃ大事な秘密を書けばもしかしたら黒幕連中にバラされるかもしれないねえんだぞ？」

二階堂さんは注意するように言う。

「でもそうなら、どんな秘密を書けばいいんだろ…？」ボクは疑問に思う。

書かなければ、モノクマにひどいことされるかもしれないし…。

「こういうのはさ、朝食を抜いたことがあるとかカプトムシをこっそり飼ってたとか、バラされてもいいようなどうでもいい秘密でいいんだよ」

「うむ、確かにメモ帳には『重要な秘密を書け』とは全く書いておらん。どうでもいい秘密でも、案外なんとかなるかもしれないのう」

どうでもいい秘密…ということとは、バラされても大丈夫な秘密を書けばいいのかな。

「じゃあ、早速どうでもいい秘密つてのを書いていいかな?」メモ帳を開いてみる。

「いいけど。個人情報を書くなよ!」

ボクはペンを握り、メモ帳に書き始めた。手紙を書くように、ゆつくりと丁寧に、記憶を辿りながら。

そして…それを二階堂さんと、湖林くんに見せつけた。

「き、絹川!?!」

「いきなりどうしたんじゃ…つて、何じゃこりや。『実は料理ができません』つて?」

「秘密を、ここにいろみんなで共有したいんだ。でも、誰かに言ったら怪しまれそうだからここだけの話だよ」

さっきまで驚いていた二人は、少しほっとした顔をしている。

「しっかし、料理ができないつてそんなの奴沢山いろじゃねえか。アタシのクラスメイ  
トの親だつて料理ができなくて毎日ピザとか出前頼んでるし」

「随分と金持ちな一家じゃな…」

ところで、メモ帳にも書いてある…出前つて何だろう?

「ねえ、出前つていうのはそんなにお金がかかるものなの?」

「金がかかるのは作る手間もかからず料理が来るんじやから当たり前じゃ。金で時間を  
買つとるんじやよ!」

「絹川：お前、出前頼んだことねーのか？」二階堂さんは、こつちを覗き込んだ。

「：ボク、出前っていうのがよくわからないんだよね：頼んだら、料理が出てくるものらしいけど…」

そう言うと、二人は一瞬目を丸くした。

「あんだ、出前、知らねえのか：？」

「うん。お金を出さなくても、料理って出てくるものなんでしょ？」

「そうじゃないのう。出前というものは、ピザやラーメンや寿司などの料理をメニューの中から『これが食べたい』ってやつを自分で決めて、店に電話で注文したら家に持ってきてくれる：そんなシステムじゃ。プロの料理人が作っているから極上の美味しさじゃ」

出前がどういうものか、大体想像は付く。でも、ボクの知らない世界のものだ。

ボクの場合は料理人が食事を作ってくれる。自分でメニューを決めることとはできないけど、栄養バランスは良かったので特に嫌だな、と思うことはなかった。

「絹川は育ちよさそうだし、料理に関してはうるさそうだと思うけど。出前、いつかは頼めるといいな」

：恐らく、叶わない願いだと思う。だって、ボクの家は…。

それからボクたちは、自分たちのどうでもいい秘密について語った。

湖林くんは小学生の頃、暴力教師とやらに水鉄砲とやらで立ち向かったこと。

二階堂さんはバレーボール部に所属していて、誤ってボールを割ってしまったこと。

そうやって語り合っていくうちに夜が来て。チャイムが鳴ったと思うと、ドアが開い

た。二階堂さんがドアの前に出る。

「えっ?まさか…脱出できるのか!」

「違うのだ。脱出したら即オシオキなのだ。というわけで…カラフラ印のピザ・マルゲ

リータなのだ」

平べったい箱を三つ抱えたカラフラの声だった。どこか無理しているような声だ。

二階堂さんが箱を受け取ると、カラフラはさっさとドアを閉めた。

「何だピザか…でも、何も無いよりはマシかな」

少し落胆しながら箱を抱え、テーブルの上に置く二階堂さん。

「…これも、出前なのかな…」

「自分で選ぶことができないのは残念じゃが…安心な食べ物じゃと信じたいのう」

もし叶うなら、平和な世界での出前も頼んでみたい。

ボクは、少しだけそう思った…。



【Cグループのログハウスにて】

テーブルの上にはラグビーボールに台所道具一式、秘密を書けという指示と『ご飯は自分で作ってね』と書かれたメモ帳セット三人分。

リビングの隅にはディスク再生機能の付いたテレビに、キッズアニメ映画のDVDが置かれている小さな棚。

一ノ瀬さんはキッチンで夕食の支度をしていて、黒木さんは映画に釘付けになっている。

僕以外の二人がそうしているうちに、もう思い出したくもない秘密を書き終えた。

そうだ、書いてしまっただけでいいんだ。後は、自分のメモ帳を誰にも見られないように明日の正午まで隠しておくだけ。

メモ帳を閉じ、服の胸ポケットに素早く仕舞う。

：テレビ画面には、主人公と思わしき少年が斧で魔物の首を刎ねているシーンが写っている。

『エドガーと恐怖の村』というタイトルの映画らしいけど、とても子供向けとは思えない残酷さだ。

黒木さんは様々な映画を作ってきたからこそ……こういう映画も観れるんだろうな、と

考えた。軽蔑でも、尊敬でもないけどね。

しばらくして、映画のスタッフロールが流れる。

冷蔵庫に入っていたコーラ瓶を飲みながら黒木さんがいいものを見た、という表情でこつちを向いた。

「未隅。この映画、あなたは どう思った?」

突然の質問だ。僕はメモ帳に書くのに集中していたので、映画の内容はあまり覚えてない。

「少し、怖い映画だと思ったな」

当たり障りのない答えだ。けど、それしかなかった。

「…そう。私はこの映画、痛快な復讐劇って感じで好きだけどね。」

脚本もある程度の王道は守りながら、少し予想外の展開を入れていて中々楽しめたわ。

映像はあの年の映画にしてはよく頑張ったって感じだし…」

黒木さんの映画感想が始まった。映画はテレビスペシャルと梨々にせがまれて行った恋愛映画ぐらいしか観ないので、聞くことしかできない。

あのシーンの演技が良かった。あの悪役は少し詰めが甘い。あの音楽のシーンが臨場感あって好きだ。



映画について語る黒木さんはいつも目をキラキラさせている。まるで、クリスマスにプレゼントを貰った少女のように。

…全てを語り終えたであろう時、だった。

「そういえば、聞いたことある話なんだけど…」

あなた、中学は中高一貫校だったわよね？」

思わず…思考が止まった。

「確か、数年前の話なんだけど。ある学園のラグビー部が大きな大会で優勝して、その祝賀会が部員だけで開かれたの」

何を、言っているんだ？

「その際先輩たちは、当時雑用係だった部員に「家にジュースの入ったカバンを忘れたから持ってこい」と言って持って来させた。

そして、雑用係はそれを中身も確認せずに先輩の家から学校に持ってきた。…カバンの中身はお酒だったんだけどね。」

「どうして…そのことを…？」

「お陰で祝賀会は大盛り上がり。いつもハブられがちな雑用係を除いてね。」

でも、お酒の飲み過ぎはハメを外すこともある。先輩たちは…無免許なのにワゴン車に乗ってしまったの」

「…ろ…」

「そして、歩道を歩いていた学生の子を…」

「…めろ…」

「その子は二度と歩けなくなって、家族は絶望して遠いところに引越してしまつて…」

「…やめろ…」

「なのに先輩たちの親は権力者揃いだから、お咎めなしで今でも青春をエンジョイしてて…」

「やめろやめろやめろやめろやめろおおおおおおおおおっ!」

思わず、大きな叫び声を上げてしまった。黒木さんは一瞬驚いたようにビク、とする。でも、すぐにニヤリとしながら話を続けた。

「雑用係…あなたは罪悪感からか、家より遠い場所の高校に転校してきたのよね?」

「もうやめてくれ!一体どこからそれを知ったんだよ!二つ目の動機なのか!?!それとも映画スタツフからの又聞きなのか!?!」

僕はブルブルと震えながら、黒木さんを指差す。

「…そんな噂話、沢山転がっているでしょう。でも、私も踏みにじられた側の人間として

許せない話と思うわ」

「だったらどうして…こんな話をしてくるんだ…？」

「だって、こんな動機じゃゲームが盛り上がり上がらないじゃない」

氷のように冷たい言葉と、恐ろしいほどの真顔。

僕は、最悪の感情を想像した。

「まさか…第三の事件を起こそうと…？」

「まあ、そんなものね。正直誰が誰を殺そうが構わないけど。そんなにあなたの過去も知っている私が嫌なら、私を殺すか。」

雨崎さんに生きて脱出して欲しいなら、彼女をクロにすればいいじゃない」

「そ、それだけはダメだ！僕は梨々には本当に生きてて欲しい…！」

でも、殺人は悪いことだ。殺された側の人生は終わってしまうし、殺した側の人生も変わってしまう。

それに、外の世界に絶望郷があるとしたら、もしかしたら梨々は絶望郷に…」

罪というものは、傷になる。

罪悪感を持たない外道のような人物でない限り、加害者にも被害者にも付くものだ。

そんなもの、僕だけじゃない。絶対梨々にも付けたくない。

「ふーん。殺すことも、殺させることもできないんだ。このコロシアイの中で。」

もう四人も死んでるのに、未だに殺したくないとか言ってるの?」

そんな黒木さんは、こっちに近付いたと思うと…絡みつく鳶のように抱きついてくる。

それはまるで、梨々にもされたことないがなような…おぞましい介抱だった。

「だったら…墜ちる所まで堕ちてみる?」

「!?…く…く…ろきさん…?」

抱きしめる強さを強め、背中に手を回してくる。

僕の脳裏に梨々のことが浮かぶ。

もしこのことが、梨々に本当に知られたら…。

「あなたも奴らと一緒になればいいじゃない。何も生み出せないクズになればいいじゃない。偽善者のままでいるよりは、あなたのことなんか上っ面しか見ない人よりはマシよっ。」

…何もできない。

「梨々は…僕を愛してくれているんだ…彼女の想いを…否定するわけには…」

「そうやって罪を隠して、自分の仮面に恋をする女と付き合って…そんな愛なんて、8 m mファイルムより薄いわよ」

やがて、梨々のことで頭がいっぱいになる。

その瞬間。僕は叫び声を上げて…

「うわああああああっ!!」

蛇のように纏わりついていて、黒木さんを突き飛ばしていた。

彼女は大きな音を立てて壁にぶつかり、力なくその場に倒れ込む。

「はあ…はあ…はあっ…」

気分が悪い。こういう時は、外の空気を吸いたい気分だ。

でも、ドアも開かないのならできるはずがない。まさに袋小路だ。

「…痛いわね」

黒木さんは立ち上がり、服を手で払った後。何事もなかったかのように映画のディスプレイを替える。

『フェアリーマンZ』と呼ばれるアニメ映画だ。

直後、一ノ瀬さんがお玉を持ってキッチンのドアを開けてきた。

「未隅様ー？先ほど大きな音がしたようですけど…何かありましたの？」

「…なんでもない、黒木さんが大きく、転んだだけだよ」

「未隅様が言うなら仕方ありませんわね。では、再び調理に参らせていただきますわ」

一ノ瀬さんは颯爽とドアの向こうへと戻っていった。

やがて、夜が来た。

その後僕たちは、一ノ瀬さんお手製の豪華な洋食フルコースをなんとか食べた。

なぜか味がしない。梨々の作ったバレンタインチョコプレートを食べた時は、あれほど美味しいと思えたのに。

一ノ瀬さんはせっかくだから殿方様たちとバーベキューしたいとか、ドラマは刑事物がいいとか僕だけに話しかけてきて。

黒木さんは黙々と料理を食べながら、なぜか棚にあつた映画のパンフレットを見ていた。

二人が寝ている時。

僕は：トイレに籠り、料理を吐き出してしまった。

一ノ瀬さんには申し訳ないけど、あの事件のことを知っていて、更に誘惑してくる人と一緒にいたら吐き気がする。

頼むみんな、梨々には何もしないでくれ。

僕はそう思いながら床についたが、一睡もできなかった…。



【Dグループのログハウスにて】

「突然ですが、なんでも相談室でも開きましようかね」

「え…？いきなり？」

「懺悔を話し、天に許しを乞うのは人の営みです。では二人は悩みや疑問、心配事などをどうぞお話し下さい」

…そんな蒲生くんが懺悔室のテーブルに座っている。なんとというか、神父らしく様になっっている。

ここに明日の午後までいなきやいけないので、退屈なのはわかるけど。

「とりあえず、オレからいいかー？」梅田くんが椅子に座り、自分を指差しながら言う。彼は一呼吸して、少し切なげな口調で蒲生くんに相談した。

「小学生の頃、父ちゃんと母ちゃんがダンプに轢かれて死んでさ。父方の爺ちゃんと婆ちゃんに育てられたんだよなー。

二人ともいい人たちだったし、生活にも全く困らなかつたんだけどさ。クラスメイトからはよく『婆ちゃん子だから甘やかされてる』ってからかわれてたんだよなー。

それ、オレの運が悪いのかなー。オレの運が悪くなかったら、両親は死なずに済んだのかなー……」

…すごく重い相談事だ。

たとえ家族から愛されていたとしても、社会から見てみたらおかしいと思われればおかしいのだ。

そう思われるのも、梅田くんの不運の一つなのかな…。

蒲生くんは、いつも通りニコリと笑いながら梅田くんの肩を持った。

「梅田殿。貴方自身は何一つ悪くありません。しかし、運が悪いと言うことは、何か悪いものが取り憑いていると言うことだと思えます。」

大丈夫ですよ。今から天から授かりし御祓方法を…」

「いや、いいんだなー。ところで鈴原には何か悩みがあるのか?」

梅田くんが答えをスルーしてこちらを向き、立ち上がった。少し蒲生くんが可哀想だけど。

折角だから、わたしも何か相談してみよう。

テーブルの前の椅子に座り、瞬きした後思いついた悩みを述べる。

「わたし…お父さんと仲、悪いんだよね。いつも喧嘩ばかりで。早く家から出たいんだとすら思ってる。」



：ヒストリエランドから出られて、家に帰れたとして。お父さんとは仲良くした方がいいのかな…って」

不仲の原因がわからないので、梅田くんのものより簡潔な質問になってしまった。

それでも、蒲生くんは口角を上げて答える。

「たとえ肉親だとしても、合わない人とは仲良くする必要はありません。しかし、親から離れたいと言う場合は自分の力で立つことも必要だと思います。あるいは信用できる何かを頼るのもいいでしょう」

誰かに頼る、か…。蒲生くんらしくない回答だ。

でも、少し危うい人々がいても、ここには信用に値する仲間がいる。

その人たちの力を借りれば、ここから出られて自由になれるんだろうか。

「ありがとう、蒲生くん。頼ったって、いいんだね」

「いえ。と言うわけで明日教会特製の聖水を…」

「ところで、メモ帳に秘密は書いたか？」梅田くんがメモ帳を持ち、話を遮る。

…秘密。そう言えば、書いていなかった。

「こういうものは、黒幕に再利用される可能性があります。誰かに知られてもいい秘密の方が、ロシアアイが起きる可能性も低くなるでしょうね」

それもそうかもしれない。わたしも立ち上がり、テーブルに置かれているメモ帳を開

いた。

秘密。

一瞬、何を書けば…と思う。

ここは記憶がないことや、叶千華のことを…いや、やめておこう。

ペンを走らせ、わたしのちよつとした秘密を書いていく。

『鈴原椿は、元気をくれるメロディや歌詞がある曲が好き』

…秘密になってないけど、これでいいかな。

秘密をそれぞれ書いた後。することもないので、わたしたちは棚にあった本を読むことにした。

『新説世界の神話』と書かれた本のページを捲る。マイナー所まで抑えた、学者が喜びそうな本だ。

梅田くんは緑一色のカバーが特徴的な『事故の原因大全』をパラパラと、蒲生くんはやはり林檎の写真の表紙の『赤い林檎入門』の本をじっくり読んでいる。

「ねえ、ここにある本…部屋に持っていいのかな？」読書の途中、二人に聞いてみる。

「いいんじゃないのかー？ログハウスの物を持ち出してはいけないとはどこにも書いて

なかったしな〜」

「それがいいのなら僕は、色々な写真集を持っていきましようかね。文字の本もいいですが、たまには絵の載ってある本も読みたいですしね」

「もうコロシアイは怒らないと思いたいけど、念のためにこれを持っていこうと思うぜ〜」

梅田くんが、ページが開かれた『事故の原因大全』の表紙をわたしたちに見せつける。「わたしは…あの星座図鑑を持っていこうかな」

本棚の、星座図鑑が置いてある方向を指差す。

図書館にはいい星座の本がなかったし。というかモノクマとからふら、色々な本を図書館からログハウスに持っていったのかな…。

こうして出前のピザを食べたり、本をまた読んだり、プラネタリウムを見たりして、時間は進んでいく。

誰も死なず、誰も絶望せず。そんなことを願いながら…。

Chapter 3 「怪奇!悪夢の湯けむりナイトメア  
は実在していた!」 13日目&14日目

小鳥の囀りは聞こえないけど、太陽の光がログハウスに差し込む朝。

ゆっくりと目を開けると、天井のシーリングファンが回っているのが見えた。

身体を起こし、辺りを見回す。梅田くんは床でまだ寝ているし、蒲生くんは掘り炬燵テーブルに伏せている。

…どうやら、このログハウスにいる人たちは全員無事なようだ。

「二人とも、おはよう…」

「鈴原嬢、おはようございます。ところで、今の時間は…」

挨拶をすると、それを聞いたのか早速蒲生くんが頭を上げた。

壁に掛けてある時計を見てみると…短針は『11』の数字を、長針は『28』を指している。

「…え?も、もうすぐ11時半!?!」

思わず大声をあげた。本、深夜まで読みすぎちゃったな…。

梅田くんも驚いたのか、目を開き大きなあくびをしながら起き上がる。

「マジか!?早く朝食取らないと昼飯に間に合わな…」

その瞬間。ガチャ、という音がドアの方面から鳴ったような気がした。

ドアの方向を向くと、カラフラが三人分とは思えない山積みのパンと缶コーヒーの入ったバスケットを持っているのが見えた。

「おはろんぱー!カラフラ印の朝食なのだ。全員起きるまで待つてたのだ」

…カラフラは、バスケットを玄関に置くとドアを閉めて去っていった。

「パン、みたいだけど…急いで食べようか?」

「…そうだね。何も無いよりはマシだし」

わたしたちは、バスケットに大量に積まれたパンを急いで食べていく。

食べれば食べるほど口の中が乾く。缶コーヒーがいくつあっても足りない。これじゃあ朝食と昼食が一緒になってしまいう気がする…。

ただ、蒲生くんだけはゆっくり咀嚼しながら食べていた。まあ、急ぎすぎるのも大変だしね…。

わたしたち三人がパンを食べ終えたのは正午ギリギリの時間。

ドアからまた音がしたと思うと、カラフラが顔を覗かせてきた。

「パン、美味しかったのー?」

「…そこそこ美味しかったけど、あんな量を持つてくるとは思わなかったよ…」

胃がパンパンになりそうなのを抑え、カラフラに苦言を呈す。美味しいものをたらふく食べられるのも考えものだ。

「作りすぎちゃってごめんなのだ。さて、今の時間は正午。なので：ログハウスから出てもいいのだ!」

「：本当に、いいのカー!?読んでない本があるのは心残りだけど、出られるのは安心なんだな—!」

梅田くんがガッツポーズを決め、玄関に早速駆け込み外へ出ていく。

やっと外の空気を吸える。わたしはそう思いながら、ログハウスの外へと出ていった…。



「ミーくん、久しぶりってか一日ぶりだね—!」

「僕も梨々が無事で良かったよ。怪我はないか?」

「女二人に殿方様一人の空間なんて、気味が悪くて早く逃げ出したかったですわ。さて、お掃除でもしてきますわね」

「その女には自分も含まれているんじゃないが、気付かんのか：?」

「今の所は、みんな大丈夫みたいだね。ロシアイも起きてないし…」

皆がそれぞれ、再会と無事を喜んでいる。絹川くんも、辺りを見回してほっとした霧囲気だ。

「さて、みんなログハウスから出たみたいだしそろそろ解散しようか。僕は梨々と一緒にいるけどね！」

未隅くんは皆をまとめるかのように手を叩く。笑顔が少し、無理矢理作ったような感じはするけど。

まあ、監禁状態にあったしそうなるのも仕方ないよね…。

こうしてわたしたちは、それぞれの場所へと散らばっていった。

…折角だから、園内の空気を吸いながら散歩してみようかな。



#### 【自由行動4】

檀くんは、旅館のプレイルームの筐体の画面をじっと見つめながら…ポテチを食べていた。

「レゲーのOPPってどっかシニール感あるよな…格ゲーのやつとか本編に出てないキャ

ラいるし:」

「そういうモノクマコインじゃこのゲームはプレイできなかつたんだよな。

檀くんも暇そうだし:一緒に過ごしてみようかな?」

「あー、ツバ吉?何やってんの?」

檀くんとゲームの画面を見ながら過ごした。

檀くんと少し仲良くなったが、相変わらず機嫌は悪そうだ:。

非常用に使えるかなと思ひ、『ペンライト』を渡した。

「タダでこういうの、貰っていいの?いい時代になった:のかな?」

それなりに喜んでくれたようだ。

檀くんは相変わらずポテチを食べながら、漫画本を捲っている。いつもこうなのかな?」

漫画の表紙は:『レベル99・5の最弱魔術師に転生した元落ちこぼれニートの俺、美少女エルフ賢者に弟子入り&婿入りします』。中央の金髪の耳の尖った巨乳の美少女と、隅にいる主人公と思わしき黒髪の男の子のイラストが表紙だ。

努力嫌いのはずなのに、なんで賢者に弟子入りして修行するような小説を:?

「これ、気になるの?」檀くんがこつちを向いて聞いてきた。



「ストーリーが気になるだけだよ。あらすじはタイトルでなんとなくわかるけど、弟子入りするってことは、魔術師がちゃんとレベル100になるまで修行する話…だよな？」

「修行シーンなんでないよ。ずっとレベルは99.5だし、賢者が主人公に魔力を注入するだけで古代呪文が使えるようになるからね。んで、その魔力注入方法がベッドで毎晩…」

「いや、あらすじはこれ以上言わなくていいよ…」

読者の親から抗議出ないのかな…。そういや、檀くんの読んでる漫画のジャンルって…

「…これ、異世界転生ものってやつだよね？」

「そうだよ。最近の俺の中での流行りなんだ。死んだやつがチート能力与えられて、異世界に生まれ直して、現地人相手に無双するやつが異世界転生。」

最初から現代知識とチート能力があるから努力しなくていいし、敵は弱い雑魚ばかりだからストレスあんまり溜まらないんだよな」

二次元の世界でも努力が嫌いなんだな。それにしても、敵が弱いのもって話として成り立つのか…？

「女の子キャラもみんな主人公に惚れる美少女ばかりだし、彼女らでハーレム作れるし。」

現実ではモテたいなら努力しろとか言うやついるけど、異世界転生ものではそんなやつは全く出てこないんだよね」

「美少女のハーレムが好き…つてことは、恋愛ゲームとかも好きなの?」

「そんなに好きじゃないな。デレるまでの過程がかかるし、ヒロインが余るのが当て馬って感じがして嫌だな」

当て馬って、主人公にフラれちゃう人のことだったよね。ハーレムなら主人公の隣にいられるから、

なんだかんだで幸せに感じるのかな…

檀くん、意外と女の子のことを考えられる人だったりするのかな…?

「…ギャルゲーっていいなと思ったキャラが攻略できなかつたりするのも嫌だよな。あと、元カレ持ちだったりとかするとキレそう」

元カレがいるだけでキレるのか…。これも、檀くんの一つの考えなのかな…?

『二次元好きで、最近のマイブームは異世界転生もの。ハーレムも好きだったり。ギャルゲーは当て馬が出るので好きではないらしいが…。』



ふと図書館の近くを通ると、梅田くんが中に入ろうとしているのが見えた。

「梅田くん！昨日みたい、また沢山本を読もうと思ってるのか？」

「まあ図書館だしなー。ログハウスみたいな狭い空間より、広い空間で読む本がいいよなと思ってるなー。折角誰もいなさそうだし、朗読でもするぜー！」

梅田くんは腕まくりをすると、図書館の中へと入っていった。

図書館のドアの前にずっと立っているのも滑稽なので、立ち去ろうとした瞬間。

ゴンツ、という床に打ちつけるような大きな音が聞こえた。

「…何があったんだ!？」

心配になり、ドアを開き図書館の中へと入っていくと…梅田くんが、うつ伏せで倒れていた。

「いつてえ…！」

「大丈夫か、梅田くん!?!怪我は…って、うわっ!？」

そこに着物姿の女性とは思えないほどの猛スピードで、一ノ瀬さんが走ってきて…梅田くんをわたしから引き離した。

「ちよつと鈴原!そうやって梅田様に触れて、誰でも助けちゃうアピールするつもりはやめてくださる!?!梅田様待つてくださいな…私が早く治療をして差し上げますわ!！」

一ノ瀬さんが急いで袖の下を探っている最中、梅田くんは足を抑えながら立ち上がった、苦笑いを浮かべた。

「いや、ただの打撲だと思っし、転ぶのには慣れてるからそこまでする必要はないんだな……」

そう言う梅田くんだが、右膝をさする様子はどこからどう見ても痛そうだ。

「あれほど硬い床にぶつかつたのですわ。まずは打撲した場所を湿布で冷やして……」

「……何か騒ぎが起きていますようですが……どうかしましたか?」

近づいてきた人影から、何やら声がした。どこからどう見ても蒲生くんだ。『子供でもわかる! レンジの使い方』と書かれた本を持っている。

「が、蒲生様! 大変ですわ! 梅田様の膝の骨にヒビが入ったかもしれないですわ!」

一ノ瀬さんが梅田くんの右膝に湿布を貼りながら叫ぶ。打撲から骨折にグレードアップしているが、大げさに言っついでいいんだらうか。

「これはただの打撲だとおもうのですが……。打撲なら、まずは湿布の前に冷水や氷のう、冷却剤などの冷たいもので患部を冷やしてきてください。次にテープ類で患部を固定しましょう。一ノ瀬嬢、包帯やテープなどは持たれてますか?」

蒲生くんが応急処置について説明する。

「包帯ならありますわ! 鈴原、氷のう持ってきてくださる!?! どのでもいいですわ! 早

く！さあ！」

いきなり命令された。でも、梅田くんの様子を見てみると放っておけない。

「わかった、持ってくるよ！」

わたしは図書館を飛び出し、旅館へと向かった。目的は旅館の厨房、冷凍庫の中にあるであろう氷もしくは冷却剤だ。そういや応急処置も知ってるんだな、蒲生くん…。

「みんなありがとうな…打撲はまだ痛いけど」

応急処置が終わった後、梅田くんは図書館のソファで寝転がりながらしばらくの間安静にして過ごすことになった。

周りに本が沢山あるとはいえ、まともに本も読めない梅田くんは少し退屈そうだ。

わたしは今、『怪人ポロリ・ニューヨークへ行く』という本を持っている…どうしようかな？

「皆、提案があるんだけど…本を自分で読めない梅田くんのために朗読会を開こうと思うんだけど、いいかな？」

「賛成ですね。このまま梅田殿を無視して解散するわけにもいきませんし。では、僕が朗読してもよろしいでしょうか？」

「いいよ。わたし、朗読にはあまり自信がないし…」

「鈴原ごときの意見に賛成するなんて嫌ですけど…蒲生様の素晴らしいであろう朗読が

聴けるのなら別にいいですわ」

蒲生くんは『怪人ポロリ・ニューヨークへ行く』の本を渡す。児童文学だが、梅田くんは満足してくれるだろうか？

「これ、怪人ポロリシリーズだろー？オレ、結構好きなんだよなー！たしかそれ、ブタの怪人が相棒を助ける為にニューヨークのカジノに挑戦するやつだろ!？」

はしやぐす前だったのか梅田くんが立ち上がりそうになるが、まずいと思ったのかすぐに横になる。

「料理研究のリフレッシュにもなるでしょうし、楽しみですわ…」

一ノ瀬さん、図書館で料理の本でも読んでたのかな。随分と勉強熱心だ。

でも『怪人ポロリ・ニューヨークへ行く』ってタイトル。

ブタなのに『怪人』って、なんか矛盾してる気がするな…。

「…ポロリは自分の背丈ほどあるマシンガンを、今にもキレそうなマフィアたちに向けます。『腐ったカスども！蜂の巣か犬の餌になりたくなきや武器と100万ドルを離しな!』」

蒲生くんはゆったりと語りかけるように、優しい声で物語を朗読する。

「…ネコニーの場所を突き止めたポロリ。ケージタワーの頂上、ドン・コケッコーのアジ

トへと盗んだジェット機で走り出します」

台詞のある所は感情は箆ってはいるが、それでも朗読の雰囲気は崩れないのが凄い。「蒲生様の声はとても澄んでいて、どんな話でもいいお話になっていった。ああ、これが耳が浄化されるということなのですね…」

「二応、朗読中は静かにしといた方がいいと思うんだけどな…」

語りに魅入られる一ノ瀬さんと、彼女を小声で注意しながらもしつかり聞いている梅田くん。

「お互いにメンチを切るポロリとコケッコー。ポロリの手には44マグナムが握られています。コケッコーの得物は大きな大きなガトリング砲です。はたしてポロリはファイアのボスに勝利し、相棒のネコニーを助けることができますのでしょうか？」

そして、途切れることなく本を読み続ける蒲生くん。

蒲生くんの朗読は、一ノ瀬さんの言うとおりに確かに凄くと思う。

あんな殺伐とした話なのに、優しい世界の牧歌的なストーリーに思えてくる。読み方次第でも、こんなに違ってくるなんてね。

『超高校級の神父』だから、やっぱり教会の子供たちに読み聞かせとかやってるんだろうか…？

「ポロリとネコニーの旅は、これからも続くのでした。おしまい」

…朗読が終わる。しばらくして、わたしを含めた三人の拍手が鳴った。

「すごくいい朗読だったよ、蒲生くん。ストーリーに夢中になれたし、聞くだけで優しい気持ちになれる…そんな感じがしたな」

「感涙もののストーリーでしたわ!ハードボイルドなのにどこか情には熱いポロリが、マフィアの幹部に人質にされた少年は殺さずに、

幹部の頭に数秒で風穴を開けるシーンは『無関係な奴は殺さない』という信念を貫いたんだろうなと思うと…胸が熱くなりますわね!

ネコニーとの種族を超えた絆もまさに美しいプロロマンスでしたわ!」

「原作の面白さもそうだけど、蒲生のお陰でここまで聞きやすい語りになってるのも凄いいよな」

それぞれ称賛の声をあげるわたしたち。

「皆さん、ありがとうございます。少し読みづらい残酷なシーンもありましたが、そう感想を述べられると天もお喜びになられると思います。この本をお選びいただいた鈴原嬢にも感謝します」

蒲生くんは、ニコニコしながらわたしに感謝の言葉を述べる。

「どういたしまして。蒲生くんも楽しんだみたいで嬉しいよ。」



こうして図書館から去っていった後も、わたしたちは朗読会の余韻に浸っていた。この思い出が、いつまでも残ったらしいな。わたしは心からそう思った…。



部屋に戻ろうかな、と思つた瞬間。博物館からガシャン、という割れるような物音が聞こえた。

…また、誰かが転んだのかな？それとも、事件？そう思い、博物館へと向かう。



博物館に入る。エントランスのシャンデリアの明かりはついていて、誰かがスイツチを入れたんだらうか？

「ごめん、はしやぎすぎた僕が悪かった…」

「どれも貴重なものじゃが、壊してしまったものはどうしようもない。反省もしているようじゃし…」

『小』の部屋から、灰寺ちゃんと湖林くんの声がある。

「一体何があつたんだ?皆…」

部屋に入ると、落ち込む様子の灰寺ちゃんと彼を宥める一ノ瀬さん。そして、床に落ちて割れたであろういくつかのランプとガラスシェードを見つめる湖林くんがいた。

ランプはどれも電球式で、電源に繋がれているのかどれも明かりが付いたままだ。

「鈴原姉ちゃん?どうしてここに…」

「物音がしてさ、一体何があつたんだろうなつて」

「オレたち三人が博物館を見学していたんじやが、灰寺がうっかり棚の上にあつたランプを割ってしまったんじやよ」

床には割れた色とりどりのガラスが散乱している。もし誰かが怪我をしたら危ないから拾っておこうと思ひ、ガラスを一枚拾い上げる。

「掃除でもするのか?別に構わんが、怪我したら危険じや。それにむき出しの電球は火災の可能性があるからな。気をつけろ」

湖林くんは割れたランプの電源を抜き、部屋の隅にあつたゴミ箱へと入れる。

「そーいや、素手でガラスを拾うなんて危険すぎる行為だよな…」

「鈴原はともかく湖林様と灰寺様が怪我をされたら危険ですわね…じやあ、私が旅館から箒とちりとりとゴミ袋、紙とペン、セロハンテープを持ってきますわね」

「掃除道具はともかく、紙にペン…？旅館に置いてるの？」

「あら、やっぱり鈴原はバカですわね！『ワレモノノ注意』と書いてゴミ箱に貼るんですよ。旅館には事務所があつて、そこに筆記用具は置いていますわ。」

それに、危険物の入ったゴミ袋に注意を書くのは当たり前のことですよ」

「一ノ瀬、そこまで念入りにしなくてもいいんじゃないが…」

「ガラスに気づかず殿方様が怪我をしてしまったたら大変ですわ。私は全ての殿方様の味方ですからね」

一ノ瀬さんは部屋から立ち去つて行つた。それにしても、彼女にとっては旅館は色々揃つてる所なのかな…

『小』の部屋は割れずに棚に載つたままのランプが光を放っている。よく見ると、油式のランプまで置いてある。

一ノ瀬さんをしばらく待っているうちに『小』の部屋の割れていないランプの光が全て消えた。

何が起きたんだ、と思つてエントランスに向かうと…スイッチを前にして困惑する蒲生くんがいた。

「蒲生兄ちゃん、ここで何してるんや？」

「天を飛べる機械があると聞いて、ここに来たのですが…」

「それ、『大』の部屋の複製機じゃないかな。」

「複製機という名前なのですね、あれ。名前だけなら聞いたことがあります、『大』の部屋で実物を見られるのですか?」

「レプリカっぽいから動かないと思うし、動かせたとしても大惨事になりそうだけど… それにしても、なんでスイッチを押しただ?」

「まず機械に慣れれば、少しは天に近づける…天がそう申されたからです。そのために、これがどういうものか調べていました」

スイッチを指差す蒲生くん。彼、機械について何も知らないんだな。電子生徒手帳、持ち歩いていないらしいし…。

「檀殿にも動かし方について聞いてみたのですが、無視されるので。自分で調べることにしたのです。ところで…貴方たちはなぜここに?一ノ瀬嬢が先ほど、博物館から出て行かれたようですが…」

「僕と湖林兄ちゃんと一ノ瀬姉ちゃん、博物館の色んなもの見てたんや。でも、僕がうっかりランプを壊しちゃってな。」

壊れたランプや電球は火災の原因になって危険らしいし、みんなで片付けようって話になったんや。」

灰寺くんはまた少し落ち込んだが、すぐに元に戻った。

「三人はいつも一緒のようですね。仲睦まじい友を持つことは良いことです」

「湖林兄ちゃんは一見偉そうに見えるけど、一ノ瀬姉ちゃんや僕とかの面倒をちゃんと見てくれるねん。最初はなんか怖かったけど、絡んでるうちにだんだんいい人だっと思えてきたんや」

「ははははは！灰寺、貴様も本当のことを言えるようになったな！」

湖林くんが、灰寺くんの肩を組む。本当に自分が大好きなんだな、湖林くん…。

「…他人を導くことができる。それも、才能のひとつでしょうね」

蒲生くんは、そう呟くと博物館の外へと去っていった。

一瞬、彼の笑顔が消えたような気がしたけど、何を考えたんだろう…？

またしばらくして。一ノ瀬さんが大きな袋を持ってきた。

「お待たせいたしましたわ！箒、ちりとり、ゴミ袋、紙、ペン、セロハンテープ…の一式ですわ！」

箒とちりとり、それからゴミ袋を取り出し、さっさと床のガラス片を片付けていく。

「…一ノ瀬姉ちゃん、僕も手伝っていい？」

「こういう雑用は女の仕事。私一人だけで片付けられますわ」

「じゃあ、わたしも手伝っていいかな?」

「なら鈴原は紙に『ワレモノノ注意』と大きく書いてゴミ箱に貼ってなさい。早く」

一ノ瀬さんが冷淡に命令してくる。仕方ないので、大きな袋からペンや紙を取り出し注意を書いて、ゴミ箱に貼る。

やっぱり女嫌いは変わっていないんだな。



こうして片付けが終わったので、自分の部屋に戻ることにした。

けど夕食までには時間がある。何をしようかな…?



【自由行動5】

お化け屋敷から、灰寺くんが出てきた。湖林くんとは一緒にないらしいけど…。

あんなに恐怖を煽る演出だったのに、彼自身はなぜかピンピンとしている。

「裏山に出た猪のがよっほど怖いと思えたんやけどなあ。あ、鈴原姉ちゃん!一緒に入

るか？」

「こんな灰寺くんだけど…一緒に過ごそうかな？」

灰寺くんとお化け屋敷に一緒に入った。

相変わらず元気な灰寺くんと仲良くなれたようだ…。

『スモークサーモン』を渡す。そういや燻製つてアウトドアで作る定番だったよね？

「これ、探検のお供にええやん！貰つとこ！遭難した時の非常食にもなるしな！」

かなり喜んでいるようだ。こっちも嬉しくなるな！

「どれも奇跡的に虫が付いてないし、味も苦いけど少し甘みがあつてええなあ…」

灰寺くんはわたしと一緒に、ジュースを飲みながら優雅におやつタイムを楽しんでい

る。

…普通のおやつと違うのは、どこかで見つけてどこかで調理した沢山の木の实を食べ

てるつてことだけだ。

ヒストリエランドに植えてある街路樹の木の实だけど、本当に美味しいのかな、毒が

入つてたりしないかなと思つてしまう。

「ところで…灰寺くんは木の实好きなの？」

「うん！栄養分もあるし、調理は大変やけどやりがいはあるし。というか嫌いな食べ物

なんてあらへん。ニワトリじゃない鳥の肉も野生のキノコも、毒さえ入つてなければ食

べられるしな」

「もしかしてアウトドア、好きだったりする?」

「アウトドアって、野外活動のことか?それなら大好きやな!小さい頃から裏山で遊んだり、川で魚釣ってキャンプしたりしてたんや。他にもクマの巣に泊まったり、湖の大きなハスの上でお昼寝とか…」

「…もしかして灰寺くん、どこでも寝れたりするの?」

「大体そうやな。ハスの上で焼いたカモの肉食った時は美味かったなあ」

怖いもの知らずなんだな、灰寺くん…。そういう子だからこそ『超高校級の探検家』になれたんだろうな…。

「鈴原姉ちゃんも、ジュースだけじゃなくて木の実も食べへんか?これなんてシンプルな味やし柔らかくて初心者にも食べやすいと思うんやけど」

「いいの?ありがとう。じゃあ一口だけ食べようかな…」

好奇心が勝ったのか、それともチャレンジ精神が目覚めたのか。こんがり焼かれた木の実に手が伸びていく…。

灰寺くんの言った通り。シンプルながらも甘みがあり、程よく柔らかかな味だ。

「どうか?美味しいんか?」

「…中々いい味してる。こういうの、食べたの初めてだけ…」



「そうなんか!? 鈴原姉ちゃんも木の実の良さわかってくれたんか!」

「そこまでじゃないけど…結構美味しいと思う」

「やったー! 木の実の美味しさ、わかってくれたのは鈴原姉ちゃんだけや!」

「灰寺くんは万歳のポーズを取りながらはしゃぐ。わかってくれたのはわたしだけっていつたけど、どういう意味なんだろうか?」

「よく天然の木の实拾って調理して、高校のクラスメイトにも食べさせようかなーって思っても『こういうのは小学生のうちに卒業した方がいい』とか言われてな。なんか、距離置かれたりしてるんや…」

そんなことを言う灰寺くんは、先ほどとは違い少し落ち込んだ様子だ。

「だから友達そんなおらへんし、アウトドアのこと話しても理解されへんのや。…鈴原姉ちゃんはおわかってくれるんかな?」

「天体観測は最近はやってないけど、それもアウトドアの一つだよ。それも結構楽しい…と思うし、脱出できるならやってみたいと思うんだ」

「わかるんやな! じゃあ、今度はここのみんなで天体観測しような! 僕、夜空を見るのは好きやしな!」

「灰寺くんは大はしゃぎだ。わたしも、ここから脱出できたら天体観測したいなって思ってるし。」

それからわたしと灰寺くんは、木の実を食べながら様々なことを話した。脱出方法、美味しいジビエ料理の話、天体観測でバーベキューしたいとか…そんな話。いつか、本当にアウトドアができたらいよいよね…。

『どこでも寝れるし、木の実から野生動物の肉なんでも食べれるアウトドア派。そんな彼だが、意外なことに友達作りは苦手だったり?』



もうすぐ夕食の時間なので、レストランへと入る。そこには先客がいた。湖林くんと灰寺くん、未隅くんと雨崎さん。

一ノ瀬さんが夕食の載ったトレイを一人分ずつテーブル上に並べている。ゆがいた薄切り豚肉と温野菜、小さなお皿に入った特製ソース。ご飯と味噌汁。それからデザート。の定食…豚しゃぶ定食だ。

「一ノ瀬ちゃん、折角湖林くんやミーくんが手伝おうとしても拒否するんだよね。毎日三食作ってるんだし、遠慮する必要はないのに」

「彼女なりの意地があるんだろうね。まあ筋トレにも休暇は必要だし、たまには休んで

もいいと思うけどね！ところで梨々は今日は何やってたんだ？」

「二階堂ちゃんと混浴風呂入ってたんだー！女湯よりは狭かったけどさー！」

雨崎さんと未隅さんの雑談が聞こえる。一ノ瀬さんは過労で倒れないか相変わらず不安だけど、他の人たちが手伝うのを拒否しているのはプライドの高さからなるものなのかと思う。

やがて生徒全員が揃い、夕食を食べ始める。ちょうどいい感じの茹で加減の豚肉と野菜が中々いい感じだ。

同じ席の絹川くんは、備え付けのマヨネーズを豚しゃぶにかけようとしている。マヨネーズの虜になったのかな…。

「絹川、マヨはかけすぎると体に悪いぞー」

「え？マヨネーズ、体悪いの…？」

「カロリーがめっちゃ高くて太りやすくなるんだなー。あとトランス脂肪酸も含まれてるから悪玉コレステロールが増えるんだなー」

「そうなんだ…じゃあ我慢した方がいい？」

梅田くんの注意を聞き、絹川くんがマヨネーズをテーブルに置く。我慢しろとは言っていないと思うけど…。

「にしてもこの特製ソース、豚肉に合うなこれ！一ノ瀬が作ったのか？マヨネーズも混

ぜると結構いいだろうな!」

豚しゃぶに特製ソースをかけながら、がつついていく二階堂さん。それを聞いたのか、絹川くんがマヨネーズを特製ソースに入れ、箸で混ぜる。

「まさかマヨ中毒になったのかー!?!」

「いや、一ノ瀬さんはマヨネーズ禁止とは言ってないし、別にいいんじゃないかな。流石にかけすぎたらダメだと思うけど」

わたしと二階堂さんの言葉を聞いたのか、絹川くんはマヨネーズと混ぜた特製ソースを豚しゃぶにかけて口へと運ぶ。味わう彼の目はとても輝いていて…。

「まろやかで、すごく美味しい…」

「…」

絹川くんを見て、少し呆れた様子の梅田くんだった。

「ねえ、鈴原さん」

夕食が終わり、皿を片付けようとすると、絹川くんに話しかけられた。

「一体どうしたんだ?」

「今夜、少しかけ空を眺めて、お話ししたいんだけど…鈴原さんも一緒にいいかな?」

…絹川くんは、天体観測をしたいようだ。

でも、彼一人で夜の外にいるのも危険だし、わたしも最近夜空をじっくりと見てな

いし…。

「いいよ。ちょうどいい星座図鑑も持つてるから、それを見ながら見よう」

「…ありがとう！じゃあ、今が7時45分だから…30分後の8時15分集合でいいかな？」

いきなり時間を決められた。まあ、準備もあるからね。ゆっくりやっていこう。



部屋に戻り、星座図鑑を持って、また外に出る。夜空は雲ひとつない満月だった。そのおかげで星はとても明るいものしか見えない。

星座図鑑には月の観測方法は載っている。双眼鏡さえあれば、大きな月は見られるかな。

お土産屋に入り、双眼鏡を探す。安価だが性能の良さそうなものが三つあったので、二つ分頂戴する。

そういえばドアに貼ってあったけど、お土産屋、10時以降は立ち入り禁止なのか…。



午後8時15分になった。第一エリアの噴水広場にて、双眼鏡を使って絹川くんと満月を観測することに。

「星、全然見えないけど…」

「こういう時は、満月を見るといいらしいよ。クレーターとか、影とか見るとお餅をついているウサギに見えるって言うし」

「ボクは…女の人が龍に跨っているような感じに見えるんだ…」

…その発想はなかった。

天体観測用の望遠鏡さえあればもっと大きな月が見れたけど、空にポツンと孤独に浮かんでいる月もいいものだ。

「ねえ…ひとつ、聞きたいことがあるんだ」

「どうしたの?」

「鈴原さんの元々いた街のこと、教えて欲しいんだ…」

元々いた街。

それらの『設定』の記憶は、おそらく黒幕によって消されている。

もし記憶喪失や、『思い出しドリンク』で叶千華や断片的な記憶を思い出したことが知られたら、誰かに疑われるかもしれない。

絹川くんのことには信じているが、どうしても話す勇気がなかった。だからと言って、嘘を話すのも嫌だ。

「わたしのいた街は…なんか、とても綺麗でみんながいつも笑っている。そんな街だったかな。天文台もあつたんだよ」

「…天文台って、星を見るところ？」

「そうだよ。そこにはレストランもあつて、ここにくる前はそこでアルバイトをやつたな」

「アルバイトって、どういうのなの？」

え？アルバイト、知らないのか…？思わず驚いてしまうが、ここは教えた方がいいかもしれない。

「えーと、確か…学生さんとかがお金を稼ぐために働くことだよ」

わたしはアルバイトの定義については考えたことはなかったので、適当な答えになつてしまった。

「働く…それって、面白いのかな？」

「大変だけど、生きてるって実感がして楽しいと思うよ」

「生きてる、実感…」

絹川くんが、胸に手を当てる。働くという行為が、どういふものなのかも知らないの

かな……?

「ボクの街も、鈴原さんと同じような感じだったよ。みんな優しい人たちばかりだった。でも、あるものが流行っててね。それを楽しんでいる間は狂ったように喜んで。正直、乗り気じゃなかったんだよね……」

優しい人たちの間で流行ってた、あるものって? どうしてほかすんだらう。でも、これ以上は聞かない方がいいかもしれない。

「あと、もう一個質問していいかな。あなたは、ここに閉じ込めた黒幕のことはどう思ってる?」

「決して許すことはできないね。わたしたちを閉じ込めて、殺し合わせて、どんな犯人でも残酷な方法で処刑するなんて……わたしに力があれば、すぐにでも倒してしまいたいよ」

過去の事件と処刑を思い出しながら、そつと呟く。

「…鈴原さんは、どうやって黒幕に立ち向おうと思ってるの?」また、絹川くんが聞いてくる。

「せめて絶望しない。記憶を希望に変えるつてのが、わたしなりの抵抗かな」

「そうなんだね。記憶も命も、絶対大切にしてく。たとえば、どんなことがあっても……」  
絹川くんが願うように言う。



「わたし、思ってるんだ。みんなが希望を持てば、ロシアなんてしないって…。

まずは、自分から希望を持って、そこから伝えていきたい。…理想論かもしれないけど、これができたらいいなと思ってる」

理想論。そう言ってしまうえば現実を見ろ、と言われそうだけど。

人に道を示すのが現実なら、人に翼を与えるのが理想。わたしはそう思っている。

どっちかが優れていると言う訳ではない。それでもわたしは希望という理想を持って、絶望に立ち向かっていきたい。

ふと、絹川くんの方を見つめると…少しだけ涙を浮かべている。

「どうしたんだ？気分悪かったりする…？」

「ううん。少し、事件のことを思い出してたんだ…」

事件。あんな悲しい殺し合いが二回も起きれば、悲しくなるのも当然だろう。

ハンカチ、持ってくれば良かったかな。あと、防寒用のブランケットも。

「ところで、今は寒くないのか？」

「大丈夫だよ。夜の冷たさも、こうやって話してるのも、生きてるって感じで好きだから」

涙を拭き、絹川くんは優しい笑顔を浮かべる。



こうしているうちに9時になる。わたしと絹川くんはホテルへと戻り、別れた。部屋に戻り、シャワーを浴び、ベッドへと潜り込む。せめて、希望が皆に伝わっていますように。そう思いながら目を閉じ、眠りについた。



しかし。

『現実』は冷たく苦しいモノだ。



目が覚める。時計を見ると、7時45分だ。いつもは朝の7時に起きるんだけど、昨日の疲れからだろうか。朝のアナウンス、聞かないで寝てたな。

この前、8時に起きた朝よりはマシだけど。皆に心配されちゃうかな。身体を起こし、髪を整えようとした瞬間…。

「死体が発見されました！一定の自由時間の後、学級裁判を開きます！」

思わず固まる。ただの、夢ではない。これは、現実なのか？

そう思いつつも、早めに着替え部屋を飛び出す。

部屋から出た瞬間、同時に別のドアから蒲生くんと、絹川くんが出てきた。

「死体発見アナウンズが流れたようですが…何か起きたのでしょうか…？」

「みんなで手分けして探そう！わたしは第一エリアの…」

「…二人とも待つて！」絹川くんが探索しようとするわたしたちを止める。

「二回目の事件は第一エリアの洋館、二回目の事件は第二エリアの納屋で起こったよね。もし次に死体が見つかるとしたら、第三エリアだと思う。」

だから、第三エリアを重点的に探した方がいいんじゃないかな…」

根拠はわからないが、可能性は高いし、疑っている暇はない。第三エリアはここから遠いけど、別のエリアを探しているのならそうしているうちに、また犠牲者が増えるか

もしれない。

「わかった。第三エリアへ向かう！」



第三エリアへと向かう途中の道のり。二人の人影に出会った。湖林さんと、灰寺くん  
だ。

「ねえ、さつき死体発見アナウンスが流れたけど…何かあったのか!？」

「…貴様、電子生徒手帳は持っているか? そうなら覚悟を決めて、旅館の混浴風呂へと向  
かえ」

湖林さんの顔は青ざめていて。灰寺くんは俯いたまま、何も言わなかった。



走って第三エリアの旅館に入る。『女』と書かれた赤い、混浴風呂へと繋がる脱衣所の  
ドアの前に立つ。

ドア近くの四角い枠に電子生徒手帳をかざす。電子音と共に、ドアの鍵が開いたので

中に入っていく。

女湯と混浴風呂の、二つの引き戸。思わず女湯の引き戸を引きそうになる。

…恐怖と、現実と向き合うのが怖いのか？そんな考えが、脳裏によぎる。

いや、ただの間違いじゃないのか。でも、握っている金属の冷たさは本物だ。

そんなことを考えながら、女湯の引き戸の取っ手から手を離し、素早く引き戸を開け、混浴風呂へと入っていく。

混浴風呂は、この前入った女湯よりは少し狭めだった。

女湯と同じように様々な風呂があるが、その中でも目立つ、血で赤く染まった手前の大風呂。

無念の表情と、見開いた目をしながら…

『超高校級の女将』一ノ瀬秋穂さんは、何も答えず、静かに浮かんでいた。

「一ノ瀬さん…どう…して…!?!」

一ノ瀬さんの死を直視できなかったのか、他の人たちが死んでいないことを確かめるためののかはわからない。

わたしは瞬発的に、外に駆けて行った。



そう思った時。

「死体が発見されました!一定の自由時間の後、学級裁判を開きます!」

思わず、体が固まる。

どうして、こんなことに。

…辺りを見回す。占いの館から、檀くんが出てきた。

「…畜生…」

まさか。もう一人、犠牲が…?」

その顔に表情はない。偶然通りかかった蒲生くんがどうしたのですか、と檀くんに話しかけるが、無視する。

「蒲生くん、占いの館へ行くこう!」

「ですね。檀殿は何も言っていないませんが、そこで何か起きたのでしょうか」  
紫のレンガの占いの館へと、足を踏み入れていく…。



占いの館。そこには奇妙な光景が広がっていた。

館の奥のテーブルに、紫の布のかかった箱のようなものが置いてある。

「そういえば、奥を覆うカーテンが見当たりませんか」

「あの箱にかかっているのが、紫のカーテンじゃないかな…」

そう話しながら、紫のカーテンを取ろうとする。

…どこかで見たような、ガラスケースが目に入る。

そして、絶望を見る。

傷ひとつないが、身体はとても白く。

髪にも、服にも一切の乱れはなく。

それでも、自分が死んでいることを明らかにしながら。

『超高校級のモデル』雨崎梨々は、手を組みながら、ガラスケースの中で倒れていた。

まるで、童話の白雪姫のように、永遠の眠りにつきながら…。



# Chapter 3 「怪奇！悪夢の湯けむりナイトメア は実在していた！」 非日常編―捜査

占いの館で、呆然としている中。

みんなの足音と、誰かの大きな声が聞こえてくる。

「梨々…ねえ、起きてくれ…目を…覚ましてくれ…！」

…ガラスケースを揺さぶりながら叫んでいる未隅くんの隣で、檀くんが何も言わずに彼の肩に手を置いている。

「まさか、雨崎まで死んでるのか!？」

「雨崎さん…昨日まで元気だったのに、どうして…！」  
二階堂さんと絹川くんの声だ。

ああ、そうか。

一ノ瀬さんと、雨崎さんは…死んでしまったんだ。

冷たく苦しい現実を見せつけられ、思わず拳を握る。

「はいはい!まさか第三、第四のコロシアイが始まるとは思わなんだ!ところでライトノベルで思わなんだと出てくると、なんだか堅苦しい雰囲気になるよね!」

ガラスケースの載せられたテーブルの隅から、モノクマが出てきた。

「まさかまさかの五回目は、マンネリ打破のダブルキル!今回の犠牲者は、女嫌いのお嬢様女将・一ノ瀬さんとリア充チビモデル・雨崎さん:まさかの女子が五連続で死ぬとはねえ:流石に男性読者がキレルんじゃない?」

相変わらずの、一ミリも笑えないモノクマのトーク。

「:モノクマ、ふざけるのもいい加減にせい!」

湖林くんがため息をつく。顔が疲れているように見える。親しかった一ノ瀬さんが、あんな殺され方をしたんだから無理もないだろう。

「男性キャラ代表?の湖林くんも唯我独尊男子から、他人の気持ちを慮れるように成長したんだね!そんな湖林くんだけじゃなくて、ここに生きているオマエラに朗報!捜査に役立つ『カラフラファイル3』アーン!『カラフラファイル4』を電子生徒手帳にプレゼントします!」

すぐにポケットから電子生徒手帳を取り出し、カラフラファイルを開く。

被害者である二人の情報、それぞれ別に書かれている。

『被害者となったのは一ノ瀬秋穂。』

死因は心臓を刺されたことによる大量出血死。

死体発見現場となったのは旅館一階の混浴風呂。』

『被害者となったのは雨崎梨々。

死体発見現場となったのは占いの館。

目立った外傷などは見られない。』

少し、気になる所がある。

「ねえ、モノクマ。一つ聞いていいかな？」

「鈴原さん、ボクのTバックが見たくなかったの？思春期だから？それとも寂しい夜の過

ごし方を知りたいとか？」

どれも全然違う。わたしが聞きたいのは…

「藍葉さんの事件と同じで、どっちのファイルにも死亡推定時刻は書かれてないよね。

あと、雨崎さんのファイルに至っては死因が書いていないけど、どういふことなんだ？」

モノクマは口に手を当て、うぷぷと笑いながら答えた。

「勘のいいガキだと思われるほどなかなか理解が早いね！とりあえず、ボクが言いたい

のは…『捜査してみればわかる…』と思うよ？』ってことですね。ゲームー女子もそう言

うと思うよ！」

「モノクマみたいな奴を除いたら、そんな不謹慎なことを言う人はいないと思う…」

流石の絹川くんもモノクマのジョークは笑えないようだ。

「あと一つ、質問があるんだけど…」

黒木さんが、手を挙げる。一体何を聞くんだろうか？

「どしたの黒木さん？今日のボクは朝から女子高生にモテモテで困っちゃいますね！」

「もしも、の話だけど…二つの死体が発見されたとして、二人のクロクがそれぞれの被害者を殺していたとしたら…どちらのクロクに投票すればいいのかしら？」

黒木さんらしいスマートではあるが、まるでゲームを攻略するかのような質問だ。

「二つの事件がほぼ同時に起こった場合って事でいいのかな？そのケースだと…先に殺人を犯した方が無罪放免になりますね！」

…え？

無罪、放免？どうして？

「そして…後ほど殺人を犯した方が、投票対象となり処刑されます！電子生徒手帳の校則にも書いておくから、オマエらはちゃんと確認してよね！」

「ってことで、ボクは伝説の木の下で待ち合わせするが如く…裁判場で待つてるよ！また会いましょう！」

「待て、モノクマ！」

モノクマは再び、テーブルに隠れて消えていった。

電子生徒手帳の『校則』をタップし、新しく追加された文章を目で追う。

⑬. 2つの殺人がほぼ同時に起こった場合は、後に事件を起こしたクロクが投票の対象となります。

⑭. なお、校則は追加されることがあります。

…仲間を殺しても大丈夫だなんてなんて理不尽な校則だ、と思う。

これが、現実なのか。

「梨々、梨々…ああ…起きてくれ…もう朝だぞ…」

「みのるん、随分とシヨック受けているみたいだな…」

「しつかりせい。雨崎も貴様の落ち込む姿は見たく無かろう。灰寺、貴様はどうするか？」

がくりとした様子未隅くんを、檀くんと一緒に外に連れていこうとする湖林くん。

そうしていると、俯いている灰寺くんが二人に告げる。

「湖林兄ちゃん…僕、ここを見張っておくけん。本当はまだ辛いけど…落ち込んだままだったら一ノ瀬姉ちゃんがもつと悲しむから…」

「貴様もちゃんと何かを言えるようになったな。オレは未隅を連れ出した後、一ノ瀬の現場を見張っておくかのう」

未隅くんを抱え、湖林くんと檀くんは去っていった。

「じゃあ、アタシもここを見張っておくぜ。雨崎が死んだのは、アタシの責任かもしれないからね……」

二階堂さんが拳を作り、力強く言う。

「ボクは検死だね。死んでしまった二人の為に、本当のことを知りたいんだ」

「では、何かおかしなものがないか見てきますね」

「誰も近寄らない場所にこそ、ヒントはあるかもしれないわね」

「ヒントって……ゲーム気分で作るのはどうかと思うんだな……」

わたしと絹川くん、見張りの為に残った灰寺くんと二階堂さん以外が、捜査の為に占いの館から出ていく。

皆が真実を突き止めるために、立ち上がろうとしている。

わたしも、真実を明かす為に……立ち上がらないと。

「……ちゃん、どうか、生き延びて……」

一瞬、頭の中で誰かの声が響く。

声の主はわからないが、なんだかわたしに勇気をくれそうな気がした……。

## 【捜査開始】

【コトダマ：カラフラフアイル3】

被害者となったのは一ノ瀬秋穂。

死因は心臓を刺されたことによる大量出血死。

死体発見現場となったのは旅館一階の混浴風呂。

【コトダマ：カラフラフアイル4】

被害者となったのは雨崎梨々。

死体発見現場となったのは占いの館。

目立った外傷などは見られない。

まず、死体のおかしな箇所を知るにはガラスケースを開けなきゃいけない。

「灰寺くん。ガラスケース、一緒に持ち上げていいかな？」

「ええで！割れないようにゆっくり持ち上げちやる！」

：わたしと灰寺くんがガラスケースの端を死体が傷付かないよう持ち上げ、占いの館の空いているスペースにゆっくりと置く。

ガラス越しでない雨崎さんの死体は、やはり傷一つない。カラフラフアイルに書いてある通りだ。

「それにしても、占いの館には水晶玉やタロットカードはあっても、こういうガラスケースはなかったよね。どこから持ってきたんだろう?」

「別の場所から持ってきたんじゃないかな。後、あの玉は水晶玉じゃなくて大きなガラス玉だと思うよ」

絹川くんがちよつとしたツツコミを入れたので、少し恥ずかしい。

それにしても一体、何の目的でガラスケースに死体を入れたんだろう…?

【コトダマ：ガラスケース】

占いの館にあった、雨崎の死体を入れていたもの。

鈴原たちが発見した時は占いの館のカーテンで覆われていた。

「雨崎さん。少し、触れるね」

絹川くんが手を合わせた後、検死を始める。

そうしている間に、周りを捜査してみよう。

辺りを見回す。左には壁が、右にはものすごく高い…恐らく3mほどの紫に塗られた棚がある。

タヌキの置物、羽ペンとインク、怪しげな本たち…つてあれ?

「探索した時にはあつたはずの、ロウソクやお香がなくなってる…?」

「所詮は飾りだと思つてたけど、こう言うのが何か重要になつてくるんだよな。例えば、



本を取ったら隠し部屋とか」

二階堂さんが柵の本を一個取って、戻してみる。そんなドラマみたいなこと、あったりするのかな？

よく見ると、柵の一番下に何か瓶が転がっているのがわかる。

タヌキの置物を振ってみたりする二階堂さんの邪魔にならないよう、しゃがんで瓶を手取る。

瓶のラベルには：『気絶薬』と書かれていた。封と思われるシールが取れていて、中はほとんど入っていない。

「なんだこれ……ドラマでもこう言うの見たことねえぞ」

飾りであろう本型の箱を開いている二階堂さんがラベルを覗き込む。

これで、被害者を抵抗しないように気絶させたんだろうか？

他にも柵の中を見て探してみたけど、封が貼つてある未使用と思われる瓶や、『恐怖の都市伝説』『こっくりさん』などのオカルト方面の本などが置いてあるのが見えた。

【コトダマ…占いの館の柵】

3 mほどの高さの柵。

柵にあったはずの蝋燭やお香が消えており、『気絶薬』と書かれた瓶が封が取れた、空の状態で置かれていた。

「なあみんな。あそこになんかギラギラしてるやつあるんやけど…取ってきた方がいいんか?」

灰寺くんが柵の一番上を指差す。見てみると、照明のおかげで光っているもの。そういうえば、あそこは調べてなかったな。

「別にいいけどさ、梯子もねえのに登れるのか…?」

「僕、ああいう所に登るのはかけっこ並に得意なんや。じゃ、取ってくるでー!」

心配する二階堂さんに灰寺くんが答えると、彼は柵板を梯子代わりにして登り始めた。

素早く柵の一番上まで登り、そこに置いてあつた細長い『何か』を手取る。

その『何か』は…長さ2mほどの、反つた刃が特徴的な、金属製の薙刀だった。

「これ、下に落とすで。怪我に気をつけてなー!」

「わかつた。みんな、離れてくれ」

わたしと二階堂さんがその場から離れ、灰寺くんが薙刀を下に放り投げると、カランという音を立てて倒れた。灰寺くんはすぐに降りていく。

薙刀を手を取ってみる。拭き取られたただけだろうけど、血の痕は見当たらない。

「これ、結構重いね。なんでこんな」

「柵は高いし重いし、普通の男がここにあるテーブルに乗つても薙刀を取ることは出来

んやろうなー」

灰寺くんの言う通りだ。これが、一ノ瀬さんを殺した凶器なんだろうか…？

【コトダマ：薙刀】

占いの館の棚の一番高い場所に置いてあったもの。

2 mほどの長さを持つ。金属製で結構重い。

「死体、調べ終わったよ。カラフライフアイルに書いてある通り、傷は全くなかったんだけど…少しおかしな所があったんだ」

絹川くんがわたしたちの方向を向く。検死が終わったらしい。

「一体何があったんだ？ 傷もなかったのに…」

「首あたりを調べたら、何か紐が見つかったね。少し引つ張ってみたらペンダントだったんだ」

「…ペンダント？」

雨崎さんの首付近を見てみると…茶色い紐と、青くて丸いガラスのトップが特徴的なペンダントが見える。一体どこで手に入れたんだろう？

「見たことあるぜ！ これ、正真正銘雨崎のペンダントだ！」

「二階堂さん…わかるのか？」

「それが…動機が発表されるちよつと前に雨崎が付けてるのを見たんだけどさ、聞いて

みたらさつき未隅と一緒に選んだって言ってたんだ。

けど、事件前の夕食の時には付けてなかったから『うっかり付け忘れたのか?』と言ったらシヨック受けてさ……」

次の瞬間、二階堂さんは悲しそうな顔をしていた。

「アタシ、事件の前日：ログハウスから出られた記念に雨崎と温泉入ってたんだよな。入浴時には付けてなかったし、そこで失くしちゃったんだらうな……」

もしかしたら、雨崎さんはペンダントを取りに行こうとして犯人に……。

【コトダマ：雨崎のペンダント】

雨崎の死体に付けられた、青くて丸いガラス製のトップが付いたペンダント。

動機発表前にお土産屋で、未隅と一緒に選んだもの。事件の前日の夜、付け忘れたことを二階堂に指摘されている。

因みに雨崎は二階堂と事件の前日に温泉に入っており、そこで落としてしまったのかもれない。

「この捜査も終わったやろ? 二階堂姉ちゃんを見張つとくわ。二人とも、頑張つてな」  
「わかったよ、次は、一ノ瀬さんが見つかった現場を見にいくね」

占いの館から出て行く。次は旅館へと向かおう。



「アナタラー！ 捜査デート中失礼するのだ！」

旅館に入り、脱衣所に入ろうと電子生徒手帳を取り出すと…カラフラが後ろから話しかけてきた。思わずビクツ、とする。

「か、カラフラ!? どうしたの!？」

「流石の絹川くんもビックリだなんて…わーはアナタラの日常に折角溶け込めたと思っただのに…」

…後ろから不意打ちで話しかけられて驚かない人なんていないと思う。

「カラフラ…要件は一体何なんだ？」

「あそこの脱衣所についての話なのだ。本当なら入るのには電子生徒手帳が必要なんだけど、むしやくしやしたので…今はロックを解除して、電子生徒手帳なしでも男女両方の脱衣所に入れるようにしたのだ！」

むしやくしやしたから脱衣所のロックを解除？ 意味がわからないけど、電子生徒手帳をわざわざかぎさないでいいのは面倒じゃなくなっただけのことか。

「じゃ、用件は…ここまで。グッドラックなのだ。心の中の自分を見失わないでね！」

カラフラは高くジャンプすると、わたしたちを飛び越え何処かへと消えていった。

わたしは電子生徒手帳を再びポケットに入れる。

「男子でも女子脱衣所に入れるんだろうけど、流石に抵抗があるから…男子の脱衣所から混浴風呂に入ってもいいかな?」

「…そうだね。じゃあ、女子の脱衣所に入ってくるよ」

それぞれに配慮し、わたしたちは別々の脱衣所へ入っていった。



温泉から引き上げられ、タオルの敷かれた床に倒れて死んでいる一ノ瀬さんの側には、無表情の湖林くんが立っていた。

「鈴原と絹川か。浸かったままの一ノ瀬が気の毒に思えて引き上げたんじゃが…」

「ありがとう、湖林くん。調べやすくなったよ」

「早速調べさせてもらうよ。失礼するね、一ノ瀬さん」

絹川くんはしやがみ、手を合わせてから検死を始める。

「そういえば、ヒストリエランドに監禁された初日さ。一ノ瀬さん、女性に触ると蕁麻疹が出るって言ってたよね」

「それは本当じゃ。バナラも一ノ瀬も生きてた頃、一ノ瀬の全身が赤いぶつぶつだらけ

だったんでどうしたと聞いたら『バナラに思い切り抱きつかれた』とか言ってたんじゃ。あの女、もうバナラの近くには寄りたくないと言いついて泣いていたのう」

昔話を語る湖林くんは、どこか悲しそうな目をしている。

「しかし、一ノ瀬の体にはそう言ったものは見当たらなかったのじゃ」

そう言われ、一ノ瀬さんの死体に視線を向ける。肌には赤いぶつぶつは無い。

これが、犯人の手がかりになるのかな…？

【コトダマ：一ノ瀬の蕁麻疹】

一ノ瀬は女性に触ると全身に赤い蕁麻疹が出てしまう。

しかし、死体にはそれらしきものは出ていなかった。

「ねえ、一ノ瀬さんの着物の袖から、少しおかしなものが見つかったんだけど…」

しばらくして、絹川くんが顔を上げた。検死が終わったらしい。

「おかしなもの？あちこちを触ったらしいが、まさか一ノ瀬の身体を…」湖林くんから殺気が放たれる。

「違うよ！そこまではしてないよ！と、とりあえず、ボクの話聞いて！」

「湖林くん！まずは落ち着いて信じてくれ！」

慌てる絹川くんを前に、キレそうになる湖林くんを抑える。

「…死体の様子を説明するね。一ノ瀬さんの死体は一回、細長いもので深く刺されただ

けだよ。両手に縛られた痕もある。

そして袖の中に、こういうものも入ってたんだ…」

絹川くんの手には、折り曲げられた濡れているメモ用紙。

無理矢理開いたら、破れてしまいそうだ。そう思った瞬間…。

「みんなを見守る自称理事長・カラフラの登場なのだ!」

脱衣所のドアの方面を向く。混浴風呂に入ってきたのは、カラフラだった。

「カラフラ、貴様は何をしに来たのか?」

湖林くんがカラフラに怒声をあげる。まずは話を聞いてあげて。

「その手紙、読めなくて大変らしいのだ。流石に破れたらおしまいなのでわーが読めるように乾かすのだ!」

「本当に乾かせるの?不正は流石にしないよね?」少し疑問に思ってしまう。

「そこは某軍もびつくりの世界いや銀河一の科学力で修復するのだ!じゃ、早く手紙を渡すのだ!」

「…わかったよ、カラフラ。それ以外は、何もしないでね」

絹川くんが持っているメモ用紙をカラフラに渡す。

「ありがたいなのだ。今日のアナタラの金運は五つ星。じゃあ、絶望に負けないでね!」



カラフラは再び、混浴風呂から出ていった。

あのメモ用紙を手紙と言っていたけど、黒幕の立場だからわかるのか…？

「しかし、なぜ犯人は混浴風呂に一ノ瀬を投げ入れたんじやろうかのう」湖林くんが呟く。

「犯人が男子か女子か、わからなくするためじゃないかな。例えば、女子が犯人だとして、男子しか入れない場所で人を殺せば、まず男子に疑いの目は向かうだろうし…」

絹川くんの考察は確かにそうかもしれない。しかし、本当にそれだけなんだろうか？

…脱衣所に入るには、その人の性別に合わせた電子生徒手帳が必要だった。抜け道はどこかにありそうだ…。

【コトダマ：絹川の検死結果】

一ノ瀬は心臓を細長い刃物で一回深く刺されている。

また、両手に縛られた痕跡あり。

【コトダマ：一ノ瀬の持っていた手紙】

一ノ瀬が着物の袖の中に入れていた手紙。

濡れているせいで読めない。

【コトダマ：脱衣所のロック】

男女に分かれたそれぞれの脱衣所に入るには、その人の性別に合わせた電子生徒手帳

を脱衣所のドアの四角い枠にかざす必要がある。

「おい、二人とも。オレの話を、聞いてくれんか。裁判の証拠には、役に立たないじやろうが…」

混浴風呂から去ろうとした時、湖林くんに引き止められた。

「なんでも聞くよ。何?」

「…昨日の夕方、一ノ瀬に突っぱねられたんじやよ」

男性に従順な一ノ瀬さんが、男性である湖林くんを突っぱねる? 一体どうして…?

「レストランで、一ノ瀬が一人で夕飯の支度をしておつて、少し倒れそうになってたんじや。」

「じゃから支度を手伝おうとしたら、凄まじい剣幕で『私一人でも夕食の支度は出来ますわ』と叫んできてのう。」

「ちようどレストランにいた未隅と雨崎、梅田もビビってたほどじや。オレも驚いた。あれほど男に甘い一ノ瀬が、手伝いを拒否するとはな。」

「…あの女は、一人でなんでも出来ると思ひ込んでいたのかのう…」

「そう語る湖林くんいつもの覇気はない。一ノ瀬さんは結局、一人で抱え込んでしまったまま死んでしまったのか…」

「湖林くん。どうか、彼女の側にいてね…」

「…ああ」

一ノ瀬さんの死体を見守る湖林くんに見張りを頼み、わたしと絹川くんは混浴風呂を後にした。



旅館の厨房に入る。一ノ瀬さんを刺し殺したであろう凶器なら、ここにあるはずだ。ど…って、あれ？

作業台の上に、溶けて小さくなった氷や野菜や肉などの食材が並べて置かれていた。

台が水浸しになってるし、このままでは食材が台無しになってしま…と考えている場合ではない。

絹川くんが大きな冷蔵庫に立ち寄り、ドアを開ける。あるはずの食材がどこにもない。

「大きなドアにも、小さなドアにも食べ物がないね。もしかして、台に乗ってるのが冷蔵庫の中身だったりするのかな」

確かにそうだろうな…と思い冷蔵庫に寄ろうとすると、何かが金属音を立てて足にぶつかった。

ぶつかつたものを、拾い上げてみると…。

「…水で濡れた、包丁?」切れ味の良さげな、木製の柄の出刃包丁。血も何も付いていないけど、これも薙刀と同じく凶器候補になりそうだ。

血は水で洗い流したのかな…? と思い、流し台の方向を向く。『消毒済み』の紙が貼られていて、しかも濡れていない。

「この包丁が凶器ならどうやって血を洗い流したんだろう?」

「血が付かないように包丁にビニール袋を被せたんじゃないかな」

「普通にビニールが破けて、血が付くと思う…」

絹川くんのビニール袋の話も、一応は頭に置いておこう。

【コトダマ：厨房の様子】

作業台の上に冷蔵庫の中身が全て出されており、水浸しになっていた。

また、水で濡れている木製の柄の出刃包丁が作業台の下に落ちていた。

流し台には『消毒済み』の紙が貼られていたので、使われた様子はないようだ。



倉庫を物色してみる。モノクマコインを見つけた場所だが、ワゴンに置かれている

シートも食器も、使われた痕跡がない。でも…

「これ、少し水滴が付いてるけど…」

絹川くんがワゴンの下の方から見つけたのは萎んでいる、それなりに大きいであろうゴムボートだった。ポンプが近くにあるから空気を入れるのは容易いだろう。

「ちよつと膨らませてみる？」

「いや、ここは狭いしやめた方がいいと思う。でも、確かに所々水滴があるし…温泉にでも浮かべたのかな？」

わたし自身のちよつとした考えを言ってみる。温泉に浮かべて、薙刀か包丁で刺したのかな。目的はわからないけど…。

【コトダマ：ゴムボート】

旅館の倉庫に置いてあった大きなゴムボート。

少しだけ水で濡れている。



旅館はまだ見ていない所が沢山ある。客室も見ていく事になった。

まず、客室の一つ・琥珀の間に行く。

畳とテーブル、座布団と床の間。何の変哲も証拠もない部屋だが、上をよく見るとエアコンが設置されている。

「エアコンに何かあったりしてね…」

そう言つて、壁に付けられたコントロールパネルを見てみる。スイッチはOFFになつているが、ボタンを押し電源を入れてみると…

『冷房』

『設定温度 24度』

『タイマー 2時間』

という表示が、エアコンからの涼しい風と共に出てきた。

「…これ、エアコンだよね?」絹川くんがコントロールパネルを見つめる。

「そうだけど、なんでタイマーが初期状態のままが付いているんだろう?」

「いや、エアコンつて、タイマーを付けるのかなと思つて」

…絹川くん、エアコンは知つていてもタイマーが付いていることは知らないのかな? よく見ると、コントロールパネルに貼られたシールには青い文字で『冷房・暖房にプラスして除湿除菌消臭機能あり!』と書いてあつた。

しかし、部屋の中はそこまで暑くもないのになんで冷房に…?

水晶の間、瑪瑙の間も見てみたが、エアコンの設定がどの部屋のものも同じなこと以外は特に変わりはなかった。

階段で二階に行つて、その客室も見てみよう。



旅館の二階。珊瑚の間に入つてみる。やはり窓が小さい以外は瑪瑙の間と変わらない洋室なのだが…。

テーブルの上に、誰かの電子生徒手帳が置いてある。扇子のストラップ付きだ。

「扇子つてことは…一ノ瀬さんのものかな？」

「ボクが一ノ瀬さんを調べた時は、こういうのどこにもなかったけど。まさかこんな所にあるなんて…」

電子生徒手帳を手に取り、電源を入れてみる。

『超高校級の女将 一ノ瀬秋穂』

やはり、一ノ瀬さんのものなのか。壊れてはならない。

そういえば、校則には電子生徒手帳について書かれてたよな…。

⑥電子生徒手帳の貸し借り、生存者からの強奪、紛失、破壊などを禁じます。

この校則と、落ちている電子生徒手帳が示すもの。それってまさか…。

【コトダマ：一ノ瀬の電子生徒手帳】

旅館二階、珊瑚の間に落ちていた電子生徒手帳。

壊された訳ではなさそうだ。

ついでに珊瑚の間のエアコンと翡翠の間も調べたが、やはり状況は一階の部屋と同じだった。

黄金の間の引き戸には何かが書かれた張り紙が貼つてある。

『説明が面倒なので捜査中はオートロックは外しておくのだ カラフラ』

…つまり、マスターキーなしでも開くってことなのかな。

黄金の間に入ってすぐの場所に、何やら光る物が落ちていた。刃物…ではなく、事務所  
所のキーボックスにかけてあるはずの…。

「…マスターキーだね、これで黄金の間のオートロックが開くはずだけど」

「オートロックだったんだねここ。たくさん金塊が置いてあるからかな」



それもそうだけど、多分VIPルームだからだと思う。

このエアコンも、やはり24度の冷房と二時間タイマーが設定されていた。

全ての部屋のエアコンが同じ設定。その機能に何か証拠があるのかな？

【コトダマ：客室のエアコン】

旅館の客室にそれぞれ設置されたエアコン。冷房・暖房機能と共に除湿除菌消臭機能が付いている。

どの部屋のものも二時間タイマーが設定されており、設定温度は24度だった。

【コトダマ：マスターキー】

旅館の脱衣所以外の全てのドアが開く鍵。

黄金の間のオートロックも開く。



次に、事務所に入る。モニターが光っているものが一つある。普段は電源が切れているであろうパソコンに電源が入っているようだ。

そのパソコンの本体には、先程と同じように張り紙がある。

『パソコンスキルゼロのオマエラの為にヒントを一つだけあげますね！代価としてたい

焼きとシヤケも頂戴ね モノクマ』

モノクマも出てきて説明するのが面倒になったのか、と思いつつも、画面を覗く。ウインドウに『脱衣所・入場記録』と書かれている。その下には…

『0:29 F 7:45 M 7:45 M 8:13 F』

…この数字とアルファベットは何なんだろうか。

「えーと。数字は時間で、FとMはそれぞれ女性と男性を表してるんじゃないかな?」  
「確かにそうだろうな。ということは…Fは女子脱衣所、Mは男子脱衣所って事になるね。そう考えると、7時45分に脱衣所に入ったのは死体を見つけた湖林さんと灰寺くん、8時13分のはわたしってことになるね」

「じゃあ、深夜に入った女子は誰なんだろう…」

犯人、あるいは一ノ瀬さんの死体を混浴風呂に投げ入れたのは女子の可能性が高くなる。

そこは慎重に考えなければならぬけど…。

【コトダマ：脱衣所の入場記録】

旅館二階、事務所のパソコンに記録されていた。

『0:29 F 7:45 M 7:45 M 8:13 F』と書かれている。

他にもゲームコーナー、プレイルーム、一階と二階の大広間も見てきたが、証拠となるものはなかった。

旅館の捜査は終わった。次の場所へ向かおう。



お化け屋敷に入る。廊下は相変わらず明るい、それでもこれから向かうであろう不気味な部屋のことを考えると怖くなる。

「お化け屋敷、入ったことはないけど、本当に怖いのかな…」絹川くんがそわそわしながら呟く。

またライトを忘れてしまったな。でも、裁判の為には進まなければならぬ…。

やがて、西洋人形が大量に散らばる部屋にたどり着く。人形の一つを持った黒木さんもいた。

「黒木さん。誰かと捜査はしないのか？」

「捜査？別に一人でもできるわ。あとそこら辺を歩いている未隅を励まそうしたら、どこかへ逃げていったわね…」

黒木さんの事だから碌でもない励まし方だったんだろうな…。

「ここのお化け屋敷は何度も見てきたけどね。今回見た時は部屋に落ちてる西洋人形がいくつかなくなっていたのよ。それ以外はお化け屋敷に変化はないわ」

よく見ると、第三エリアの探索の時に比べて人形の数が減っている気がする。数えてはないので、いくつかはわからないけど。

「コトダマ：消えた西洋人形」

お化け屋敷に置かれた西洋人形がいくつかなくなっている。

「ここにはこれ以上怪しい所はないようなので、別の建物に行こうとした瞬間…。」

「鈴原さんと絹川、ちよつと待つてくれるかしら? 多分重要な証言があるんだけど」

「…どうしたの?」

黒木さんに引き止められた。それなら、先に言うべきだと思っただけ…。

「昨日の夜の証言よ。ちよつと、おかしな事があったのよ…。」

彼女は殺人事件が起きたばかりとは思えない笑顔を作り、口を開く。

「昨日の深夜、中々眠れなくてホテルの非常階段で読みかけの本を読んだり、階段を上り下りしたりしてたのよ。冷たい場所で暇を潰しているとインスピレーションが浮かんでくるしね」

「冷たい場所だと、逆に集中力途切れない?」

「絹川、世の中には色んな人がいるのよ? 話を続けるわ。そうしていたら、一時くらいに

誰かの階段を登る足音が聞こえて来たの。

折角だから荷物を片付けて部屋に戻って、ベッドに潜ったわね。それでも眠くならなかったから二時くらいに、外に散歩に行こうと思って部屋を出たの。

するとホテルのエントランスのソファに……蒲生が横たわっていたのよ」

「……蒲生くん？犯人にでも襲撃されたのか……!？」

「怪我とかの状況はよくわからなかったけど、一応カラフラを呼んで部屋に連れて行かせたわ。私には運べそうにないからね。カラフラ、花のくせに眠そうだったわね」

深夜なのに、ホテルのエントランスで倒れていた蒲生くん。一体何が起こったんだろう。

「というか、夜に咲かない花の方が多いんだし、眠くなるのも当たり前じゃないかな……。」

「ねえ黒木さん、一つ言いたい事があるんだけど……どうして時間がわかったの？」絹川くんが疑問を投げかける。

「電子生徒手帳を付けてればわかるでしょ」

「そういえばあれ、現在時刻が隅っこに映るタイプだよ。大体のスマートフォンやパソコンはそうだけだ。」

【コトダマ：黒木の証言】

午前一時頃、ホテルの非常階段にいと誰かの足音が外から聞こえた。

午前二時頃、ホテルのエントランスに行くとソファに倒れている蒲生を発見する。その後、カラフラに運ばせた模様。

「重要な証言も聞けたし、次は博物館にでも行こうかな」

「そうだね。ここの部屋、人形の扱いが可哀想だし…」

絹川くんの人形師らしい台詞を聞きながら、二人でお化け屋敷の外へと向かっていった。



「…」

博物館のドア付近に立っている未隅くんは顔を青くして、何も言わない。

今のところはそつとしておこう。

博物館のエントランスに入ると、床には火縄銃が散らばっていた。こういうのはガラスケースに入っているはずだけど…。

って、ガラスケース？

「そういえば、展示品を入れる為のガラスケースが一つ見当たらないね……」  
「本当だ。もしかして、占いの館のあれも……」

雨崎さんの死体を入れたガラスケースも、博物館のものとはほぼ同じものだった。誰かに拭かれたのか、少し綺麗にはなっていたけど。

【コトダマアップデート：ガラスケース】

占いの館にあった、雨崎の死体を入れていたもの。

鈴原たちが発見した時は占いの館のカーテンで覆われていた。

本来は博物館にある、展示物を飾るためのもの。何者かが占いの館に持ってきたよう  
だ。

そう考えているうちに、『大』の部屋のドアが乱暴に開かれる。出てきたのは、檀くん  
だった。

「檀くん、ボクたちここを調べていたんだけど一体何が……」

「……『大』の部屋と、『小』の部屋だけ見ればいいよ」

檀くんはそう言い放つと、わたしたちの横を通り過ぎて博物館から出ていく。相変わ  
らず単独行動が好きだな、と思ってしまう。

じつとしている訳にもいかないので、『大』の部屋に向かおう。

『大』の部屋に入ると、複製機もどきに壁に貼られた絵や写真がある。

以前と全く変わりはないが…。

「カーテンが少し破れてる…?」

破れてるだけじゃない、一部分なくなっていた。これも証拠になるのだろうか。

【コトダマ：『大』の部屋の破れたカーテン】

博物館の『大』の部屋のカーテンが、破られて一部なくなっていた。

エントランスに出て、次は『小』の部屋に入ろうとする。と、絹川くんが床に小さな三角形の物質を見つけたようだ。

「これは…ドアストッパーだよね?」

「ドアに挟むと、動かないように固定できるやつだね。ドアが開かないようにすることもできる」

本来の用途は、換気や掃除のためなんだろうか。

【コトダマ：ドアストッパー】

博物館のエントランスに落ちていた。

これを使えばドアを固定できる。



ドアを開け、絹川さんと一緒に『小』の部屋へと向かうが…目に入ったのは惨状だった。

「なんで、こんなに焼けてるの…!？」

部屋の奥半分が黒焦げになっていた。部屋のカーテンに至ってはほとんどが燃えている。

「昨日の夜、ボクたちの知らない所で火事があったのかな…?」

「そうなる」と事件が起こったのは…夜の九時以降になるな。被害者も犯人も、わたしたちに見つからないように第三エリアに向かったんだろうし…」

床をよく見てみると、円柱型のずっしりとした物体…消火器が落ちている。上半分が緑色で、下半分が赤いものだ。

拾いあげ、ラベルの説明書きを読んできると…『二酸化炭素消火器』と書いてある。

どうやら特殊な消火器みたいだ。安全栓は抜かれているので恐らくは使用済み。軽く振ってみたが、中身はどうやら空のようだ。

【コトダマ：二酸化炭素消火器】

博物館の『小』の部屋に転がっていた消火器。

中身が入っていない、使用済みのもの。

上が焼け焦げた柵も調べてみる。油式のランプがいくつかあるが、よく見ると全部燃

料タンクが開けられていて、オイルも入っていない。

そういうえば昨日見た時、この油式ランプには油が入っていたような…?

【コトダマ：燃えた『小』の部屋】

博物館の『小』の部屋の半分がなぜか黒焦げになっていた。

また、『小』の部屋に置いてある全ての油式のランプからオイルが抜き取られている。

窓も見てみると、狭い窓台にひび割れ、黒焦げになったランプが電源コードに繋がれて二つ置かれている。

「昨日壊れたランプじゃないかな、このランプ…」

「え、昨日ここで何かあったの?」

絹川くんは昨日博物館で起きたこと、知らないんだっけな。

「…あったよ。昨日湖林くんと一ノ瀬さん、灰寺くんが博物館を見ていたんだけど、灰寺くんが誤ってランプを床に落として壊しちゃったんだ。」

結果、この部屋のゴミ箱にランプを捨てることになったんだよね」

そう言いながらゴミ箱を覗いてみる。割れたランプはやはりなくなっていた。

「もしかして…それが火災の原因なんじゃないかな?」

火事の中では電気火災に分類されるんだろうな、と思う。

【コトダマ：黒焦げの壊れたランプ】

博物館の『小』の部屋の窓台にひび割れ、黒焦げになったランプが置かれていた。

電源コードに繋がれている。恐らく、『小』の部屋が燃えた原因と思われる。

「あと、博物館について絹川くんにつづいて教えたい事があるんだけど、いいかな」

「いいよ！どんなこと？」絹川くんは興味を持ってそうな表情で見つめてくる。捜査の為とはいえ、話すのは少し緊張する。

「エントランスの出入り口にスイッチがあるんだけどさ、それを『ON』にしたら博物館の全ての明かりが付いて、『OFF』にすると逆に消える仕組みになってるんだ」

「便利な仕組みだね。でも、部屋の一つずつにスイッチを付けた方がもったいないと思う」「なんで、あんな仕組みにしたんだろうな…」

湖林くんの入った部屋を暗くしてしまったことを思い出す。ブレーカーとは少し似たものとはいえ、博物館の設計者にはもうちよつと何とかしてほしかった。

そうしたら火事も、起こらなかつたと思うから…。

【コトダマ：博物館の照明スイッチ】

博物館のエントランスの出入り口付近に付いているスイッチ。

『ON』にすると博物館全ての明かりが付き、『OFF』にすると全ての明かりが消える仕組み。

博物館も調べ終わったし、情報収集のために図書館へ向かおう。



博物館から出て、図書館へ向かおうとした途端。

「ねえ、死体発見アナウンス：あれが流れたタイミングはどうだったのかな？」絹川くんがいきなり聞いてきた。

「えーと：わたしは二人の死体を見ているんだけど、どっちも見つけた時には流れなかったよ。」

一ノ瀬さんの時はわたしが第三エリアに向かう時にすれ違った、湖林さんと灰寺くんが見た瞬間に恐らく。

雨崎さんの時は多分、檀くんが死体を見つけた時に流れた：はずだった気がする」

「校則じゃ確か：三人以上の生徒が死体を見つけると流れるんだよね」

「ということは、被害者二人の死体を最初に、朝に見つけた人以外が見ていると言うことなのか。」

じゃあ、二つの死体の第一発見者は：？

【コトダマ：死体発見アナウンス】

三人以上の生徒が、死体を発見することで流れるアナウンス。

今朝一ノ瀬の死体が見つかった時は恐らく湖林と灰寺が発見した時に流れ、雨崎の時は檀が発見した時に流れた。



そんなことを話しながら、絹川さんと共に図書館に入っっていった。

「やっぱりあそこ、普通の火事は流石に起きてないよなー…」

梅田くんが図書館の中の椅子に座りながら、ログハウスの中から頂戴した本…『事故の原因大全』を読んでいる。

博物館で起きた火事については知っているみたいだ。

「梅田くん、図書館におかしなところとかはなかったよね？」

図書館に異変はないか聞いてみる。

「一つだけあるんだな。ここのはんはいつも綺麗に並べられてるけど、これだけはなぜか返却ポストに入れられてたんだな」

梅田くんはテーブルに置いてある一冊の本を差し出す。『暮らしと火災の危険』と書かれているが…？

「これなら、あの火事のこともわかる…はずだよな？」

この本で博物館で起こったであろう火事について知る為に『暮らしと火災の危険』の、電気火災についてのページを探して開いてみる。

火災が日常でどのようなようにして起きるのか、ということについて書かれた本らしいが……。

『使用中の照明器具は高い熱を発します』

『電球や器具を布や紙などの可燃性のあるもので覆ったり、近づけたりして使用しないように気をつけましょう。火災の危険性があります』

こんな記述が、わかりやすい図付きで書かれていた。

「紙製のランプシェードが燃えにくいのは、電球と紙の間にちゃんとした距離があるからなんだろうね」

「そんな感じだなー。紙の火なしで発火する温度は450度、白熱電球の表面の温度は最高で180度くらいだけど、だからと言って近づけたら燃えるからなー。絹川と鈴原も気をつけるんだなー」

紙の発火点については知らなかった。梅田くんは結構博識だな。

【コトダマ：『暮らしと火災の危険』】

図書館の本。火災が日常でどのようなようにして起きるのかということについて書かれている。

この本によると、照明器具に可燃性のあるものを近づけると火災の危険性があるとのこと。

なぜか図書館の返却ポストに入れられていた。

「そういえば、少し気になることがあったんだよね」絹川くんが、梅田くんに見せる。

「博物館の『小』の部屋に使用済みの二酸化炭素消火器って書いてあるものが落ちてたんだけど、使い方とか、どういう用途で使われているかとか書いてある本はないよね？」

「…絹川。流石に自分で調べた方がいいんだな。何でも他人に聞くと何もできない人間だと思われろぞー」

「もしかして…梅田くんも消火器についてそこまで詳しくないのか？」

そう突っ込むと、梅田くんはギクリとした様子で苦笑いを浮かべた。

「うう…オレだからって何でも知ってるとは限らないんだな…仕方ない、オレは消火器について書かれた本を探してくるんだな」

梅田くんは立ち上がり、並木のように立つ沢山の本棚へと向かっていった。

…手がかりがあるであろう『事故の原因大全』まで持っていかけた。

待っておくわけにもいかなないので、他の場所も捜査しようとしたその瞬間…。

「見つかったんだな！消火器のカタログ一冊だけどこれでも大きな収穫だと思ろぞー」

梅田くんが早速薄めの本を持って走ってきた。

広い場所で探しているのにこんな一瞬で見つけるなんて、やっぱり『超高校級の図書委員』なんだなと思う。

図書館で大声出したり走るのはタブーだと思うけど…。

「ありがとう梅田くん。このカタログで、色々わかるといいんだけど…」

…カタログをテーブルの上で開き、緑と赤のカラーリングの『二酸化炭素消火器』の紹介ページを開く。

『二酸化炭素消火器は、噴出された二酸化炭素で酸素濃度を薄くして、消火するタイプです』

『汚れもなく、電気火災の消火に適しています』

『主に博物館や美術館で設置されています』

「…というか、消火器って色々な種類があるんだな。キャラクターとコラボしてるやつも売ってる」

「投げることで火を消す瓶みたいなものもあるんだね」

「二人とも、捜査時間過ぎるからカタログに夢中になるのもほどほどな」

梅田くんの一声で我に返る。カタログもいいけど、もっと調べておかないとな…。

【コトダマアップデート：二酸化炭素消火器】



博物館の『小』の部屋に転がっていた消火器。

中身が入っていない、使用済みのもの。

カタログの情報によると、噴出された二酸化炭素で酸素濃度を薄くして消火するタイプ。

電気火災の消火に適しており、汚れも出ない優れたもの。

「そういえば梅田くん。この本に、どこか引つ掛かる情報はあつた？」

『事故の原因大全』について尋ねてみる。すると梅田くんは咳払いし、口を開いた。

「これの知識だけど、二酸化炭素は火を消せたりはできるけど、温暖化の原因になるだけじゃなくて結構危険なんだなー。

濃度の高い場所にいると数分で頭痛や眩暈や吐き気がして、しばらくしたら死ぬとか……そんな感じだった気がするんだよなー。

大量のドライアイスがある密室とか結構危険だから換気には気をつけろよー」

「結構覚えてるね、梅田くん。すごいね！」

「あはは、絹川も知っておけば損はないんだよなー！ドライアイスで遊ぶ時とかなー！」  
そんなやりとりをする絹川くんと梅田くんはまるで兄弟、いや家族のようだ。

【コトダマ：『事故の原因大全』】

梅田がログハウスから持ってってきた本。様々な事故の原因や対策について書かれてい

る。

この本によると、二酸化炭素の濃度の高い場所にいると数分で体に様々な異常が起り、しばらくしたら死亡してしまうとのこと。

「あの、皆さん…少し気になるところがあったのですが…」

話しているうちに誰かの声がした。蒲生くんだ。

「蒲生? どうしたんだ? ネズミやピラニアの死骸でも落ちてたのか?」

「ここに水槽はなかった筈ですが…まず、僕について来てください」

蒲生くんは踵を返し、どこかへと向かう。犯人の手がかりになるかもしれない見えてみよう。

目的地にたどり着く。図書館の隅の、少しだけ扉が開いた小さなショーケース。

中には…虫に食われてボロボロの一枚の古文書が入っている。

「開いてるけど…まさか捜査時に開けたとかじゃないよな?」

「僕がこの古文書を見つけた時は何故か開いていたんですね。どうやら日本語で書かれていますようですが…証拠になりますか?」

「異常事態が起こった時以外、こういうショーケースが開いているとは思わないし…とりあえず解読してみる?」皆に提案する。

「じゃあ、ちよつと取り出していいかな? ケースに入ったままだと読みづらいだろうし

…」

「それに賛成。ねえ、誰かメモ帳持つてる人はいる？」

「カウンターにあつたメモ用紙とペンなら一応は持つてるんだな。じゃあオレがメモしていくんだな」

絹川くんはショーケースを開き、ゆつくりと古文書を両手で摘んでケースの上に乗せる。

読もうとしても…文字が、虫食いと汚れで所々読めない。それでも梅田くんは、メモ用紙にペンを走らせていく…。

『■■■■の■■■き』

ガラスの■■■けに■■■させるも■■■れる

まんげつ■■■かりが■■■くはいるへやで■■■

あ■■■ろうそくにひをつけおこう■■■、だいのうえにおく

い■■■とに■■■うをだいのうえ■■■せる

■■■じはじゆ■■■え、■■■ものは■■■のし■■■やり■■■さす

■■■えは■■■、いけ■■■かべる

■■■せるものはか■■■け■■■いれたまま、し■■■せい■■■しよにおく

に■■■からこ■■■した■■■きは■■■』

「読める所は読めるけど、何の文章なんだー…?」

ほとんどがひらがなで書かれた古文書。

事件時にショーケースから取り出されたとしたら、この古文書は犯人にとつてどういうものなんだろうか?

『ろうそく』や『おこう』は…もしかして占いの館から失われた蠟燭やお香だったりするのかな?

### 【古文書】

図書館の隅の小さなショーケースに入れられていたもの。

虫食いと汚れで一部分が読めない。

「■■■■の■■■き」

ガラスの■■■けに■■■させるも■■■れる

まんげつ■■■かりが■■■くはいるへやで■■■

あ■■■ろうそくにひをつけおこう■■■、だいのうえにおく

い■■■とに■■■うをだいのうえ■■■せる

■■■じはじゆ■■■え、■■■ものは■■■のし■■■ぞ■■■やり■■■さす

■■■えは■■■、いけ■■■かべる

■■■せるものはか■■■け■■■いれたまま、し■■■せい■■■しよにおく



ということが嫌でもわかる。

「梨々、なあ……どこにいるんだ……答えてくれ……」

張り詰めた空気の中、未隅くんだけは虚ろな表情で雨崎さんを探している。

そうしていると、カラフラが台車に乗ってやってきた。

「あ、鈴原さん!例のアレが読めるようになったのだ!」

カラフラがくるくる回りながらわたしに紙を渡す。一ノ瀬さんが持っていたあの手紙を乾かしたんだろうか。

「これ以上無くしても代替品はないのだ。人間の心のようなものだから大切にしろのだ!」

手紙を受け取り、早速読んでみる。ボールペンの文字で、こう書かれていた。

『午後十時、博物館の『小』の部屋で待つ 湖林』

思わず固まってしまった。

一ノ瀬さんを心配していた湖林くんが、彼女を博物館に呼び寄せたのか……?

【コトダマアツプデート：一ノ瀬の持っていた手紙】

一ノ瀬が着物の袖の中に入れていた手紙。

『午後十時、博物館の『小』の部屋で待つ 湖林』と書かれている。

「梨々はどこにいるんだろう?あの喫茶店で紅茶でも飲んでいるのかな?」

「…未隅殿。大丈夫ですよ。裁判が終われば、天が幸福を運びます」  
独り言を繰り返す未隅くんを、蒲生くんが慰める。

「…蒲生。貴様は天というものをやたら信じているらしいが、天にまつわるもんならなんでも構わんわけか？ 貴様は…：自分自身の頭で考えたことはないのか？」

湖林くんは、少し嫌そうな態度で蒲生くんに話しかける。

「天の祝福を信じぬとは。それを受ければ、誰もが救われる…：僕はそう思います」

湖林くんの方向を向き、微笑む蒲生。それはまるで、何かを完全に盲信しているかのような顔だ…。

「全てを幸せにするものなど、どこにも存在しない。だからこそ…：人間は、自分で考え、幸せを掴まなければならんのじゃよ…」

二人は密かに火花を散らし、お互いを凝視する。

「湖林兄ちゃん！ 流石にここで喧嘩するのはやめるんや！」

「そうだ！ 二人ともここで争つてもどうにもならないんだよ！」

わたしは灰寺くんと共に、二人の間に入って仲裁する。湖林くんがハツとした表情を浮かべる。

「蒲生。貴様とは、やはり相性が悪いようじゃ」

「…湖林殿、貴方が考えることこそ至高と言うのなら…：僕も、天と共に考えてみたいと思

います。」

蒲生くんは目を閉じて笑ってみせる。

「あいつは天とやらのことしか考えとらんのか…さて、その天は果たして蒲生を本当に救うのか…」

少し不安げで、苛立ちを隠せない湖林くん。

そのうち、時計塔の扉が開かれる。わたしたちは、エレベーターの中に入ってしまった。



上がっていく鉄の箱の中にて。

「さつき蒲生が天とかなんとか言ってたけど。本当に怖いのは神とか超常現象とかじゃなくて、人間かもしれねーな…」

梅田くんが、虚空に話しかけるように言う。

「それでも、ボクたち人間にしかできない事はあると思う。だからボクはみんなを信じていこうと思う」

そう返したのは絹川くん。皆を信じたい。それも理想だ。

ここから出るには、惨たらしい処刑を誰かが受けるといふ現実に、『信じる』という理



想で立ち向かわねばならないんだ…。



裁判場に辿り着く。

前回の犯人だった紅葉さんと、今回殺害された一ノ瀬さんと雨崎さんの席には植物や花が飾られた遺影が置いてある。

命が、どんどん失われている事を痛感する。

「三回目だし、裁判には慣れたよね？つて事でボクはダラダラしながら待ってるので…オマエラは自分の席にお立ちくださいさーい！」

相変わらず豪勢な椅子に座るモノクマが寝そべりながら笑う。

わたしは悔しさと怒りを堪えて拳を握りながら、自らの陳述台に立った。

『超高校級のモデル』『雨崎梨々さん…』

いつも明るく気さくで、そして恋人の未隅くんを誰よりも想っていた女の子。

そして、『超高校級の女将』『一ノ瀬秋穂さん…』

悪態はついていたけど献身的で、やることには一生懸命だった女性。

この二人にあんな仕打ちをした、最悪の犯人は…わたしたちの中にいるのだ。

犯人を暴き、処刑しなければ、私たちは生き残ることができない。

絶望を、希望の弾丸で、撃ち抜かなければならない…。

だから、わたしたちは信じ、疑うのだ。

…これは生き抜くか死ぬか、命がけの裁判なのだから。

## Chapter 3 「怪奇！悪夢の湯けむりナイトメア

は実在していた！」 非日常編—学級裁判（前編）

・コトダマ一覽

## 【カラフラファイル3】

被害者となったのは一ノ瀬秋穂。

死因は心臓を刺されたことによる大量出血死。

死体発見現場となったのは旅館一階の混浴風呂。

## 【カラフラファイル4】

被害者となったのは雨崎梨々。

死体発見現場となったのは占いの館。

目立った外傷などは見られない。

## 【ガラスケース】

占いの館にあった、雨崎の死体を入れていたもの。

鈴原たちが発見した時は占いの館のカーテンで覆われていた。

（コトダマアップデート後）

占いの館にあった、雨崎の死体を入れていたもの。

鈴原たちが発見した時は占いの館のカーテンで覆われていた。

本来は博物館にある、展示物を飾るためのもの。何者かが占いの館に持ってきたよう  
だ。

【占いの館の棚】

3 mほどの高さの棚。

棚にあったはずの蝋燭やお香が消えており、『気絶薬』と書かれた瓶が封が取れた、空  
の状態で置かれていた。

【薙刀】

占いの館の棚の一番高い場所に置いてあったもの。

2 mほどの長さを持つ。金属製で結構重い。

【雨崎のペンダント】

雨崎の死体に付けられた、青くて丸いガラスのトップが特徴的なペンダント。

動機発表前にお土産屋で、未隅と一緒に選んだもの。事件の前日の夜、付け忘れたこ  
とを二階堂に指摘されている。

因みに雨崎は二階堂と事件の前日に温泉に入っており、そこで落としてしまったのか  
もしれない。

## 【一ノ瀬の蕁麻疹】

一ノ瀬は女性に触ると蕁麻疹が出てしまう。  
しかし、死体にはそれらしきものは出ていなかった。

## 【絹川の検死結果】

一ノ瀬は心臓を細長い刃物で一回深く刺されている。

また、両手に縛られた痕跡あり。

## 【一ノ瀬の持っていた手紙】

一ノ瀬が着物の袖の中に入れていた手紙。

濡れているせいで読めない。

## 〔アップデート後〕

一ノ瀬が着物の袖の中に入れていた手紙。

「午後十時、博物館の『小』の部屋で待つ 湖林」と書かれている。

## 【脱衣所のロック】

男女に分かれたそれぞれの脱衣所に入るには、その人の性別に合わせた電子生徒手帳を脱衣所のドアの四角い枠にかざす必要がある。

## 【厨房の様子】

作業台の上に冷蔵庫の中身が全て出されており、水浸しになっていた。

また、水で濡れている木製の柄の出刃包丁が作業台の下に落ちていた。

流し台には『消毒済み』の紙が貼られていたので、使われた様子はないようだ。

【ゴムボート】

旅館の倉庫に置いてあった大きなゴムボート。

少しだけ水で濡れている。

【客室のエアコン】

旅館の客室にそれぞれ設置されたエアコン。冷房・暖房機能と共に除湿除菌消臭機能が付いている。

どの部屋のものも二時間タイマーが設定されており、設定温度は24度だった。

【一ノ瀬の電子生徒手帳】

旅館二階、珊瑚の間に落ちていた電子生徒手帳。

壊された訳ではなさそうだ。

【マスターキー】

旅館の脱衣所以外の全てのドアが開く鍵。

黄金の間のオートロックも開く。なぜか黄金の間に落ちていた。

【脱衣所の入場記録】

旅館二階、事務所のパソコンに記録されていた。

『0:29 F 7:45 M 7:45 M 8:13 F』と書かれている。

【消えた西洋人形】

お化け屋敷に置かれた西洋人形がいくつかなくなっている。

【黒木の証言】

午前一時頃、ホテルの非常階段にいと誰かの足音が外から聞こえた。

午前二時頃、ホテルのエントランスに行くとソファに倒れている蒲生を発見する。その後、カラフラに運ばせた模様。

【『大』の部屋の破れたカーテン】

博物館の『大』の部屋のカーテンが、破られて一部なくなっていた。

【ドアストッパー】

博物館のエントランスに落ちていた。

これを使えばドアを固定できる。

【二酸化炭素消火器】

博物館の『小』の部屋に転がっていた消火器。

中身が入っていない、使用済みのもの。

（コトダマアップデート後）

博物館の『小』の部屋に転がっていた消火器。

中身が入っていない、使用済みのもの。

カタログの情報によると、噴出された二酸化炭素で酸素濃度を薄くして消火するタイプ。

電気火災の消火に適しており、汚れも出ない優れたもの。

【燃えた『小』の部屋】

博物館の『小』の部屋の半分がなぜか黒焦げになっていた。

また、『小』の部屋に置いてある全ての油式のランプからオイルが抜き取られている。

【黒焦げの壊れたランプ】

博物館の『小』の部屋の窓台にひび割れ、黒焦げになったランプが置かれていた。

電源コードに繋がれている。恐らく、『小』の部屋が燃えた原因と思われる。

【博物館の照明スイッチ】

博物館のエントランスの出入り口付近に付いているスイッチ。

『ON』にすると博物館全ての明かりが付き、『OFF』にすると全ての明かりが消える仕組み。

【死体発見アナウンス】

三人以上の生徒が、死体を発見することで流れるアナウンス。

今朝一ノ瀬の死体が見つかった時は恐らく湖林と灰寺が発見した時に流れ、雨崎の時



は檀が発見した時に流れた。

『暮らしと火災の危険』

図書館の本。火災が日常でどのようなようにして起きるのかということについて書かれている。

この本によると、照明器具に可燃性のあるものを近づけると火災の危険性があるとのこと。

なぜか図書館の返却ポストに入れられていた。

『事故の原因大全』

梅田がログハウスから持ってきた本。様々な事故の原因や対策について書かれている。

この本によると、二酸化炭素の濃度の高い場所にいると数分で体に様々な異常が起り、しばらくしたら死亡してしまうとのこと。

【古文書】

図書館の隅の小さなショーケースに入れられていたもの。

虫食いと汚れで一部分が読めない。

『■■■■の■■■き』

ガラスの■■■■けに■■■■させるも■■■■れる

まんげつ■かりが■くはいるへやで■■

あ■■ろうそくにひをつけおこう■■、だいのうえにおく

い■■とに■■うをだいのうえ■■せる

■■じはじゆ■■え、■■ものは■■のし■■ぞ■■やり■■さす

■■えは■■、いけ■■かべる

■■■■せるものはか■■け■■いれたまま、し■■せい■■しよにおく

に■■■■からこ■■した■■■■きは■■■■■■』

【学級裁判・開廷!】

「まずは学級裁判の簡単な説明から始めます。学級裁判の結果はオマエラの投票により決定されます。

学級裁判の結果はオマエラの投票により決定されます。正しいクロを指摘できればクロだけが、もし間違った人物をクロとして投票した場合は、クロ以外の全員がオシオキされ、殺人を犯したクロは見事卒業となりますのです!」

豪華な椅子でふんぞり返るモノクマの、相変わらず変わってない説明。

「という訳で、議論を始めて欲しいのだ。さあ、早くするのだ!クロに勝てたらわーの抱擁が待っているのだ」

「別にいらん。虎にでも噛まれた方がマシじゃ」

「そっか…濃姫様レベルの美女のわーでも無理なのだ…?」

「貴様ごときと帰蝶を一緒にするな」

カラフラと湖林くんが、口論を繰り広げている。帰蝶つて濃姫様だっけ…?

「ところでさ…被害者つて、一ノ瀬と雨崎の二人だよな?どつちから議論すりやいいんだ?」

「二階堂さん。まず一番最初に見つかった人の事から、話していけばいいんじゃないかな」

「絹川という通りであれば…オレと灰寺が先に見つけた一ノ瀬からになる。雨崎の時は、後にアナウンスが流れたからのう」

皆がそんな話し合いをしているうちに、一人だけ光のない目をキョロキョロさせている人物。

「うう…梨々、いつまで寝ているんだ…?一ノ瀬さんの裁判が始まったのに…」

未隅くんは、雨崎さんの死を未だに認められないようだ。

そんな未隅くんだけど、彼の為にも真実を暴き、悪夢の裁判を終わらせなければならぬ…!

【ノンストップ議論（一ノ瀬の死体の状況）】

梅田「とりあえず、一ノ瀬の現場の状況からだな…」

絹川「ボクが一ノ瀬さんの死体について調べただけど…刃物か何かで…心臓を刺されていたよ>」

黒木「どうして…混浴風呂に浸かっていた>のかしら?」

湖林「血を拭う為、証拠の隠滅の為…ということも考えられるのう」

二階堂「犯人の<性別をあやふやにした>か?」

未隅「もしかしたら、一ノ瀬さんに恨みのある<女子が犯人>…かもしれないよね、梨々>」

檀「未だに狂ってんのか、みるん…」

モノクマ「愛って本当にいいものですかあ!」

【コトダマ：一ノ瀬の蕁麻疹】

「未隅くん、それは違うぞ!」

「…鈴原さん?僕、何かおかしいこと言った…?」

「一ノ瀬さんは、女性に触れると蕁麻疹が出る体質なんだ。もしも犯人が女子なら、彼女の身体に出ていたかもしれないね。」

でも、死体にはそれらしきものは一切なかったんだ。だから、犯人は男子の可能性も高いんじゃないかな」

「そう、か…。ということは一ノ瀬さんは多分梨々には触れられないよなあ…」

口を半開きにしながら、未隅くんは下を向く。彼が愛していた雨崎さんの無念は、絶対に晴らしたいものだ。

「じゃが、凶器はどうなる。弓などで触れないように殺すことができるのであれば蕁麻疹が出ることはないじゃろうに」

被害者の命を奪った凶器。確か、候補となるものは二つあったな…

【コトダマ選択：薙刀】

【コトダマ選択：厨房の様子】

「占いの館の薙刀と、旅館の厨房にあった包丁…その二つが凶器候補だと思う」

「薙刀…これだったらリーチもあるし、女が使っても一ノ瀬に蕁麻疹は出ねえかもな」

「素人が使えるか、バレないように忍ばせられるかなら包丁の方が上だと思うけどな」  
薙刀は女性を使うイメージが多いが、あの薙刀はとても重く、女性でも余程力のある人でないと持てないだろう。

包丁は軽いが、至近距離で使う必要がある。どちらも、一ノ瀬さんを殺すには十分な凶器だけど…。

「ところで、凶器に付いた血はどうやって拭き取ったのかな。どっちも血は付いていなかったよね」

絹川くんの発言で、ふと思い出す。

「包丁が見つかった旅館の厨房の作業台の上には、冷蔵庫から出された氷や食材が置いてあったよ。お陰で台は水浸しになって、下に置かれた包丁まで濡れてたな」

「そうやって、血を洗い流した…という事なのね」

「厨房ということは、流し台で洗うこともできたのでは？」

蒲生くんの考察は、はつきり言っただけ。

「厨房の流し台には濡れていない『消毒済み』の紙が貼ってたんだ。だから、流し台が使われたってことはないんじゃないかな」

「だったら、凶器は温泉の水で洗えばいいんじゃないの？」

温泉で血を洗い流す。

それだと、凶器は限られてしまうだろう。

片方の凶器候補には、殺人におけるある致命的な欠点がある。それは…

【閃きアナグラム】

の い

え も せ

く

も  
く  
せ  
い  
の  
え

【もくせいのおえ】

「梅田くん、包丁はこの犯行には使えないよ」

「……え？包丁は錆びるからダメってかー？」

「包丁は柄が木製で出来ているんだ。温泉で洗ったとしても、柄に付いた血は染み付いて流しにくいと思うよ。」

金属で出来た薙刀なら、血は洗えば落ちる。だから、凶器は薙刀じゃないかな。

厨房に落ちていた包丁と、厨房の冷蔵庫の中身を全部出したのは……犯人が用意したフェイクだよ」

「そうなんだなー。しかし犯人、回りくどいことするんだなー」

梅田くんという通り回りくどいフェイクだけど、一ノ瀬さんの事件の謎を一つ解くことができた。

「じゃあ…次は雨崎の死体の状況についての話だなー。少しずつわかっていけばいいんだけどなー…」

「少しずつ、か。一気に片付けるのもいいが、二回も事件が起こった今回は、ゆっくり紐解いて行くやり方がいいかもね。」

「雨崎さん…なんで殺されたのか、どうやって殺されたのかもわかってないけど…」

「その瞬間…どこかからか反論の声が聞こえた。」

「その推理、天に返しなさい」

「蒲生くんが、反論してきた？」

「鈴原嬢。反論というよりも…僕の考えを、少しだけ聞いて欲しいのです」

「いいけど、何か気付きとかあるのか…?」

「僕が捜査した結果わかった、雨崎嬢の殺され方についてです。どうぞ、ご静聴あれ…」  
「いつもの神聖な雰囲気醸し出してはいるが、蒲生くんは一体何を言うつもりなんだろう?」

【反論ショーダウン (雨崎の殺人について)】

「捜査の時間、占いの館を少しだけ調べさせてもらいました。〈気絶薬〉があり、〈使用



済みだっただようです。＜他に薬品は使われていなかった＞ようですね？」

【発展！】

「確かに他の薬品は使われてなかったよ。犯人にとっては使うのは気絶薬だけで良かったんだろうけど…」

「気絶薬の瓶のラベルには全量使い切れれば誰でも気絶させられると書いてました。つまり…雨崎嬢は＜何者かに誘拐＞されて＜第三エリアで殺された＞…と思われます。僕等の、些細な考察ですが…」

【コトダマ：雨崎のペンダント】

「その言葉…ぶった斬る！」

「雨崎さんは誘拐されたんじゃないかと自分で第三エリアへと向かったんだよ」

「梨々が、第三エリアに…お化け屋敷が、好きなんだろうな…うふ、えへへ…」

未隅くんが少しずつ壊れてきている。

「理由は、事件の前に無くしたペンダントを探すためだよ。ペンダントは動機発表の前、未隅くんと一緒に選んだものなんだ。

二階堂さんに指摘されて、それを探す為に第三エリアへ行っただよ」

「ということは…雨崎さんは、夕食から深夜までの間に殺されたってことになるね。昨日の夕食の時は付けてなかったみたいだし。二階堂さんが証明できると思う」

「絹川の言う通りだな。あれ、隠すように付けてたけど照れ隠し、ってやつなのかな…」  
「モデルなら熱狂的なファンもアンチ多そうだし、彼氏疑惑が出たら炎上しそうよね」  
「そんなアンチなんて、ぶっとばしてやりたかったぜ!」

…わたしも、雨崎さんを傷つけた人間は許すことはできない。

「…次は雨崎の死因についてでいいんだよね?カラフラファイルには何も書かれてねーし…」

「そうしましょう。そこから見えてくることも、あるはずですよ」

雨崎さんの死因。明らかにはなっていないけど、証拠ならあるはずだ…!

【ノンストップ議論 (雨崎の死因)】

灰寺 「何か紐みたいなの使って…<首を締めた>んやないかな?」

黒木 「首を絞めたら痕が残るはずよ。何か<薬品を飲ませた>とかじゃないかしら?」

湖林 「薬品なら占いの館に沢山あったのう…。毒薬もあったはずじゃ」

檀 「ぶつちやけ、りりりんは<何かのガス>を吸って、死んでしまった…んじやないの」

灰寺 「檀兄ちゃん珍しいなあ!のど飴ちゃん持つてるけど…一粒舐める?」

檀 「喉は、大丈夫だよ…」

【コトダマ：『事故の原因大全』】

「檀くんに賛成だ！」

「梅田くんがああのログハウスから持ってきた本…『事故の原因大全』に、雨崎さんの死因に関係するかもしれない記述があったんだ。」

『二酸化炭素の濃度の高い場所にいると、数分で体に異常が起こりしばらくしたら死んでしまう』…そんな文章だった」

本は持っていないけど、わたしはなんとか覚えてられていた。

「要するに…二酸化炭素中毒でしょ？酸欠になるやつ」

檀くんは頭の後ろで手を組み、こちら側に語りかける。

「ほら、ドライアイスみたいな二酸化炭素の塊は換気した場所で使えとかよく言われているし、ガスの仕業だと思ったんだよね。」

それに、りりりんの死体には目立った傷も痕もない」

「二酸化炭素中毒の話、オレが言いたかったんだけどな…」

梅田くんは残念そうにしている。

雨崎さんを死に追いやったであろう二酸化炭素中毒の原因。もしかして、あれを使つたんじゃないか…？

【コトダマ選択：二酸化炭素消火器】

「雨崎さんを殺した凶器…それは消火器だよ」

「え? 消火器で雨崎殴ったってことか? カラフラファイルに異常ありって奴か?」

「二階堂さん、話はちゃんと聞こう…」

絹川くんが少し心配するような声で注意する。

「図書館にあつた消火器のカタログに載ってたんだ。赤と緑の、博物館の『小』の部屋に落ちていたもの…つまり二酸化炭素消火器だ。」

「ガスを噴出することよって消火するタイプのもので、汚れも出ないんだ」

「汚れが出ないということは、雨崎の死体に何も付いていないのも、それを使ったから…  
ということか」

「と言うことは…第三エリアに来た雨崎嬢を気絶させ、ガラスケースの中に入れ、消火器のガスで殺す…という方法も可能なのでしょうか?」

「また気絶押してるのが気になるのは置いといて…やっぱり占いの館で殺されたかもしれないんだな?」

雨崎さんは、占いの館で殺された。

しかし、これでは『あの場所の異常』の意味がなくなってしまう。

【コトダマ選択：燃えた『小』の部屋】

「占いの館で雨崎さんが殺された可能性は低いよ。博物館の『小』の部屋が、半分黒焦げ

になっていたんだ。だから、消火器はここで使ったものだと思う。

誰かが消火器を使っていなければ、『小』の部屋は完全に燃えていたんだと思うよ」  
「要するに…雨崎が死んだのは『小』の部屋ってことなのか？」

「…そうだと思う。雨崎さんの死体には、焼け焦げた跡はなかったけど、二酸化炭素消火器を使ったのならそういうのが無かったのも当然だと思う」

「…火種になったものは、何だと思う？」絹川くんが皆に話しかける。

昨日起きたある出来事と、二酸化炭素消火器が消すのに向いている火災から考えると  
：

【発掘イマジネーション（火災の火種について）】

◇◇◇◇◇

◇◇◇◇◇

◇◇◇◇◇

◇房の◇◇

◇◇り◇葉◇

壊◇◇ラ◇◇

◇房の◇丁

瓶◇り◇薬品

壊れ◇ラン◇

厨房の包丁

瓶入りの薬品

壊れたランプ

【選択：壊れたランプ】

「そうか、わかったぞ!」

「火事の火種になったものは：壊れたランプだよ」

「：まさか、灰寺が割ってしまった、あのゴミ箱に入ったランプ連中かのう?」

「その通りだよ、湖林くん。犯人はそれらのランプのコードをコンセントに繋いで、火事が起きる仕組みを作ったんだ」

「折角なんでオレが言っておくんだな。図書館にあったある本には、照明器具に布や

紙とかの…」

学生たちに語りかける教授のように説明する梅田くん。しかし…

「燃えやすいものを近づけると、火事が起きるんだろ？」

…檀くんが、話に水を差した。

「説明は最後まで聞いておくんだな…」

梅田くんは残念そうな顔をしている。全く、人の話は邪魔するものじゃないな。

「多分、僕も悪いんやろうな」

…そんな話の途中。暗い顔になった灰寺くんが、ぼつりと呟いた。

「ランプをゴミ箱に入れるだけじゃなくて、ちゃんと処分しとけばよかつたんや。いや、

最初から割らなきゃ、こんな火事は起こらなかつた…うう…」

「…灰寺」

湖林くんが、腕を組みながら語りかける。

「ただの持論じやが、刀鍛冶と刀を使った辻斬り。どちらが悪いと言われれば…辻斬りの方じゃ。だから自分ではなく、事件を起こした犯人だけを恨めばいい。貴様は今、何ができるかを探すべきじゃ」

「湖林兄ちゃん…ありがとう。少し、気分が良くなった」

灰寺くんに、少しだけ明るさが戻った。

「それにしても、壊れてしまったランプか。それだけでは火災は起きると思えんのう。比叡山焼き討ちも、墮落という火種があつたからと思ふのじゃが。まあアレは、奴らもオレも正直やりすぎたとは思ふ」

この国の歴史に残る有名な事件、湖林くんはどっちもどっちだつて思つてみたいだ。

：『小』の部屋の火事を起こす際に使われた火種。もしかして、別の部屋のものを使つたんじゃないか…？

【コトダマ選択：『大』の部屋の破れたカーテン】

『大』の部屋のカーテンが、少しだけ破かれて無くなつてたんだ。それが、火種じゃないかな」

「それを壊れたランプに被せれば、恐らくは燃えるだろうね。犯人は多分、『小』の部屋のあるものを使って炎が燃え広がるようにしたんだと思ふよ」

絹川くんが言う、『小』の部屋にあるものつて…

【スポットセレクト：カーテン】

：カーテン、じゃないかな」

「またカーテン？正直ゲシユタルト崩壊を起こしそうだわ…」

「そう言う意味もあるんだろうけど、それに燃え移るように仕組んだんじゃないかな。」



油式のランプから出したオイルを撒けば、十分な火災源になる」

油式のランプの中からオイルが抜き取られていたと知った時は驚いたけど、今となつては火事を起こす為だったんだな、と思う。

「もし火種に『小』の部屋のカーテンを使えば、破れているのを見た被害者が仕掛けに気づいてしまふかもしれない。

それに、ランプを窓台に置けばカーテンで隠せる。『大』の部屋のカーテンをランプに被せる用に使つたのはその為なんじゃないかな」

絹川くんが、わたしの説明に付け加える。

「仕掛けを作つた後は、博物館の照明スイッチを『ON』にして壊れたランプに電気が流れるようにすれば…そのうち火災が起きる、と言うことか。

あの火事は、やはり仕組まれたことだったんじゃない」

それを照明する証拠ならある。議論して、言葉をぶつけ合つて、正解を見つけていこう。

【ノンストップ議論（仕組まれた火災について）】

絹川「あの火災がく仕組まれたことゝなら…被害者が逃げ出さないように仕向ける必要があるかもね」

黒木「絹川も恐ろしいこと考えるのね…」

灰寺 「『小』の部屋には<鍵はかかってた>んやっけ?」

湖林 「そんなものはなかったのう。全く、刀も何もない博物館じやった」

梅田 「鍵がかかってなきや<被害者が逃げてしまふ>んじやねーの?」

湖林 「<縄で縛る>必要がある。しかし、一ノ瀬はともかく雨崎にそんな痕はなかったぞ」

未隅 「梨々に酷いこと…あはははははは!許せないなあ!残酷だなあ!」

「コトダマ:ドアストッパー」

「梅田くん、それは違うぞ!」

「鈴原…被害者が逃げ出さないようにする方法があるのか?」

「それならあるよ。ドアストッパーを使ったんだよ。まず被害者を『小』の部屋に入れた上で、ドアが開かないようにすれば…閉じ込めて焼き殺すこともできるだろうね」

「だとしたら、被害者を誘い出す方法が必要じゃ…」

…待てよ?

今の湖林くんの言葉で、何かを思い出した。

もしかして、『小』の部屋で殺される予定だった人は…あの証拠品が証明しているので  
は?

【コトダマ選択：一ノ瀬の持っていた手紙】

コートの中に入れておいた紙を取り出し、皆に見せつける。

「これを見て欲しい。一ノ瀬さんが袖の中に入れていた、濡れて読めなかつたけどカラフラが乾かしたおかげで読めるようになった手紙だよ」

『午後十時、博物館の『小』の部屋で待つ 湖林』

「…なんじゃこれは。オレはそんな手紙、書いておらんぞ。大体、文字が禍々しい」

湖林くんは首を傾げる。もしかして、この手紙のことを知らないのか？

「湖林くんは手紙について知らないんだね。これで誘い出されて、『小』の部屋に閉じ込められて、火事で殺されそうになったのは…一ノ瀬さんだつたんだよ」

「成程。ということは、手紙は火事を起こした人物が書いたことになるのかのう。あいつは男じゃつたら誰でも信用しそうじゃし…」

皆がどれだけ後悔を重ねても、一ノ瀬さんは帰つてこない。

だからこそ、裁判を生き抜かないといけないんだ。

「…話が飛んでしまいましたね。次は雨崎嬢がなぜ、消火器による二酸化炭素中毒で死んでしまったのかを話したいのですが…よろしいでしょうか？」

蒲生くんが冷静に述べる。彼は裁判に消極的な人間ではないのだが、今回はやけに話を進めたがる。

「失くしたペンダントを取りに行った時、博物館の火事を見てしまったのかな?」

「それを消す為に、消火器を使ったんだろうな」

疑問を投げかける絹川くんに、二階堂さんが答える。

「と言うことは雨崎は閉じ込められた一ノ瀬の命の恩人つてことになるな。でも、女を平気で差別するような一ノ瀬をタダで助けるとは思っか?」

意見を出す梅田くん。しかし…。

「雨崎梨々は生まれつき、味方のいない人やものの味方になる性質である」

声の主は、檀くんだ。一体何を言ってるんだ…?

「…ログハウスのメモ帳にはそれだけ書いてあったよ。本当だと思う。あのりりりんが嘘を書くとは思えない」

秘密を書くためのメモ帳に書いてあった…雨崎さんの秘密?

「雨崎の秘密を、こっそり見ていたのじやな。流石に久永でもやらんと思うぞ…」

「おい檀!勝手に女の書いたメモ帳覗くとか最低じゃねーか!あのな、女の秘密つてやつは大手銀行の金庫の中身よりも重要なもんなんだよ!プライバシーの侵害だぞ!」

ドン引きする湖林くんと二階堂さん。檀くんの行為は確かに最低だ。けど、雨崎さんの死の謎も恐らくわかるだろう。

捜査時に、あの人が言っていたことが鍵になる！

【人物指定：湖林右京】

「捜査していた時、湖林くんが言っていたんだ。『事件の前日、レストランで湖林くんが一人で夕飯の支度をしていた一ノ瀬さんを手伝おうとしたら、突っぱねられた』って。そしてその場には梅田くんと未隅くん：雨崎さんがいたんだ。

憶測だけど：雨崎さんはそれを見て、一ノ瀬さんのことを『味方のいない人間』と感じたんじゃないかな？」

「ツバ吉の言う通りだろうね。だから、りりりんはアツキーを助けた。

アツキーを火事の現場から逃した後、二酸化炭素消化器を使って『小』の部屋の火事を消した。

でも、消化器を使いすぎたせいで二酸化炭素中毒で死んだ：そんな感じじゃないの？」

一ノ瀬さんは、雨崎さんにいい印象は抱いていないであろう。

それでも『味方のいない人間の味方』である雨崎さんが、殺されそうになっていた一ノ瀬さんを助けようとする。それは当然のことだ。

「人の命を奪おうとした炎を消す為に、雨崎さんは…事故死した。誰かが起こした、火事のために…」

絹川くんが悲しげに呟く。

「しかし。雨崎が誰かが意図的に起こした火事を消そうとして死んでしまったのなら。火事を起こした奴が犯人になる…ということなのかのう」

「湖林くん、そこら辺はボクもカラフラも決めてないんだよね。でも、雨崎さんはある意味自分で死に行つたようなものです。死に急ぎ野郎つて奴ですな!」

と言うことで、哀れな雨崎さんは事故死…と言うことにおきましよう」

口を開いたのはモノクマだ。あまりにも命の扱いが軽いが、思わず怒りそうになるのを抑える。

「ここで感情をぶつけたとしても、裁判は進まないだろう。」

「…モノクマ。殺されようが事故死だろうが、人の死というのは平等じゃ。覚えておけ…」

湖林くんも、拳を握っている。

「人の死は平等…命は平等、じゃないんだね。さすがは第六天魔王ですなあ〜!そういう割り切った思考は嫌いじゃないよ、ボク」

モノクマは謎のセクシーポーズを取る。あいつは、花が舞いそうなほどのほほんとし

ている。人の命が関わる裁判中なのに…。

「…では、オレの考えを言わせてもらおう。」

オレに成りすまして一ノ瀬に手紙を出した奴も、火事を起こした奴も、同一人物かもしれない」

その可能性は高い。『小』の部屋の火事で一ノ瀬さんを殺したいのなら、手紙を出して誘い出すのが手っ取り早い。

共犯者がいて、その人に手紙を書かせたりすることも可能なんだろうけど…。

「つまり、二人を殺した犯人も…そいつになるんか？」

「それはわーにも分からないのだ。クロというものは、決定的な証拠がなければ証明できないのだ」

灰寺くんに、カラフラが答える。相変わらず揺れてばかりだ。

「ねえ、鈴原さん。一つ、疑問があるのだけど」

黒木さんが、こちらを見る。まるで何かを知っているかのような表情だ。

「二回もクロを暴き、裁判を勝ち抜いてきたあなたが、どうして決定的な証拠を放っているのかしら？」

…決定的な、証拠？

なんで黒木さんが、このタイミングで？

もしかして、彼女と関係のあるあの事を言っているのかな…?

【コトダマ選択：黒木の証言】

「…黒木さんが、言ってたんだ。確か昨夜の午前一時くらいに、非常階段にいたら登る足音を外から聞いたって」

『彼』のことは疑いたくはないが、黒木さんの証言が決定的な証拠になるなら…。

「そして午前二時、黒木さんがホテルのエントランスに行ったら…ソファに倒れてる蒲生くんを、見つけたんだ」

蒲生くんが、事件に関わった可能性も高まるだろう。

「…僕が、怪しいというのですね」

笑顔を崩すことなく、こちらに語りかける蒲生くん。

「黒木嬢が言うに、僕は午前二時にエントランスのソファに倒れていたのですね。それだけで、僕を疑うのですか？」



僕は午後十一時に寝ます。その前は牛乳を飲み、二十分ほどストレッチで体をほぐせば熟睡：そんな夜を毎日過ごしているのですよ」

「なんだか蒲生がますます怪しくなってきたな…この調子だとモナリザにも興奮するんじゃないの…?」

二階堂さんは、蒲生くんについては何か思うことがあるようだ。

「蒲生くんは夜のアリバイだけじゃなくて、他の時間にも証拠はあると思う。蒲生くん、知っていることを教えて欲しいな」

絹川くんが言う、他の時間の…証拠?

なら、あの証拠についても知っているんじゃないか?

…蒲生くんに、聞いてみるしかない!

【ノンストップ議論（蒲生は事件に関与したか?）】

蒲生「僕が事件に関わっている。しかし、証明できなければ…ただの虚言になります」

「僕に＜ランプを扱えたという証拠はない＞し、アリバイはあるでしょうけど…」

「その＜アリバイが偽物＞である可能性も高いです。」

黒木「…」

蒲生「僕は天の導きにて人を救う。そういつた役割を与えられたもの」

「天と共に生き、共に死ぬ。＜二人を手にかける＞ことは、恐らくできないでしょ

う」

「それでも、僕を疑うのですね。僕の希望も否定して、それでいいのですか?」  
蒲生くんは余裕を見せているけど…

たった一つ、証拠ならある!

【コトダマ:『暮らしと火災の危険』】

「その言葉…わたしが撃ち抜く!」

「少しいいかな。図書館の返却ポストには、ある本が入れられていたんだ。さつき梅田くんも言ってた『暮らしと火災の危険』って言うんだけど…

そこには火災の原因についてわかりやすく書かれてたんだ。例えば、使用中の照明器具は高い熱を出すとか。

電球とかを燃えやすいもので覆ったり、近づけたりして使用すると、火災が起きやすいとか…」

「これなら、機械が苦手な蒲生くんにも…わかるはずだよね?」

「…!」

わたしと絹川くんの言葉に、蒲生くんが少しだけ動揺する。

これまでで生き残ってきた生徒たちの視線が、彼に向けられる。

「レンジすら扱えん貴様の事じゃ。本の力でも借りんとランプを付けることができない

ようじやのう?」

特に湖林くんは、嫌そうなものを見る目で蒲生くんを見ている。

「僕は何もしていません。それだけで僕を犯人だと決めつけるのは…」

「そういや昨日、僕が蒲生兄ちゃんに『壊れたランプは火災の原因になる』って言っちゃったやん。それをヒントに、一ノ瀬姉ちゃんを焼き殺そうとしたんか?」

僕も不用心やったけど…：火事を仕組んで、一ノ瀬姉ちゃんを殺そうとするなんて…人の命を微塵とも思わねえ殺人犯らしいやり方やな!」

「違いますよ…：火事を起こした証拠はどこにあるのですか…?」

汗だくの蒲生くんの顔が強張っていく。

「藍葉がやったみたいなのに、証拠品から指紋を取ればわかることだろ? おい! モノクマでもカラフラでもいいから指紋わかんねえのか?」

灰寺くんも、二階堂さんも…：蒲生くんを犯人だと思ってる。

「しょうがないなあ。捜査時間は過ぎちゃってるけど…：いつも頑張ってるアナタラには特別ボーナスをプレゼントするのだ!」

モノクマとカラフラが、どこかから落ちてきた何かをキャッチする。

それは博物館に落ちていたあのドアストッパーと、ホテルの個室にあるようなペン、そして…『指紋採取キット』と書かれた袋だった。

「モノカラ三分DIY! 証拠のドアストッパーと、蒲生くんの部屋にあったペンから…指紋を取りたいと思います!」

「ちよつとだけ時間かかるけど、指紋を取り終えるまで明日のご飯について考えておくのだ!」

「や、やめて下さい!」

道具を袋からさつと取り出すと、ドアストッパーとペンをパウダーの付いたブラシで擦り、それぞれに四角いテープを貼る。

蒲生くんがモノクマとカラフラの方面に向かおうとするが、どこからか現れた緑のロープ状のものに拘束されてしまった。

一匹と一輪は嘆願する彼を無視し、指紋の付いたテープをシートに挟んでいく。

「…ふう、あつという間だね!これならカラフラだけにやらせれば良かったよ!」

モノクマは、二枚のシートをわたしたちに見せつける。

どちらのシートにも、同じような指紋が付いていた。

「嘘…だ…」

蒲生くんは拘束を解かれるが、その表情からは…笑みが消えていた。

「これはひどい!ドアストッパーとペンの指紋が一致してしまったのだ!」

「このシートが表す真実は一つ…一ノ瀬さんを『小』の部屋に閉じ込め、焼き殺そうとし

たのは…蒲生くんだったのです！ぶひゃひゃひゃひゃ！」

モノクマは満面の笑顔を浮かべ、シートをカラフラの方面と放り投げた。カラフラはシートをキャッチする。

「指紋は体の脂みみたいなものなので、燃えれば消えるものなのだ。正直あの壊れたランプから指紋が取れなかったのは残念だったのだ。

でもドアストッパーに蒲生くんの指紋があったと言うことは、それを使って人を閉じ込めた証拠にもなり得るのだ」

カラフラは虚無を感じさせる声を出しながら、ゆらゆらと揺れる。

「う…あああああああああつ!」

蒲生くんは大声をあげたと思うと、その場に崩れ落ちた。いつもの余裕はどこにも見られない。

「これで、決まったのか…?」

「まあな、ある意味雨崎は蒲生が殺したようなもんだしな」

二階堂さんと梅田くんが、錯乱状態の蒲生くんに視線を向ける。困惑と、無慈悲の目だ。

「あ…ああ…天よ、どこに行かれるのですか…?僕は…昨夜の…事は…本当に知らない…わからないのです…!」

蒲生くんは頭を押さえながら、声を震わせている。

「ある意味因果応報じゃ。さあ、話を聞かせてもらおうか。一ノ瀬を殺したのは…貴様なんじゃな?」

湖林くんが怒りの表情で問う。

蒲生くんは一ノ瀬さんを殺そうとし、彼女を助けた雨崎さんの命を奪ったようなものだ。

「知らない…知らない…! 違い…ます…」

後は、一ノ瀬さんを殺したことについて追求するだけなんだ…

「でも、本当にそれだけでいいの?」

誰かの凜とした声がした。絹川くんだ。

「モノクマ連中は指紋の主が蒲生だつて証明してるし、あいつは散々否定しているけどそれが真実とは限らないんだな…」

「みんな、蒲生くんをあまり責め過ぎないで。あの人は…『昨夜の事は本当に知らない』つて言っているよ。」

それにモノクマとカラフラは、蒲生くんが犯人だと一言も言っていない。だから蒲生く

んを…少しだけ信じてあげた方がいいんじゃないかな」

「…し、信じる…？」わたしは、ちよつとびっくりしてしまった。

「ボクの考えだけど。許さない事と信じる事は本当に違う。でも、この二つの考えを持つのはおかしくないと思うんだ。

嫌いでも、悪い事をしたとしても、とりあえず許すんじゃないかな、  
る事をやればいい…それでいいんじゃないかな」

絹川くんの言葉には、優しさと強い意志があつた。

「絹川くん…」

そんな言葉を聞いたわたしは赤いコートのフードを被り、冷静に思考する。

許さないけど、信じる。

とりあえずは、自分に出来る事をやってみる…。

難しい、理想かもしれないけど…

「鈴原、フードなんか被つてどうしたんじゃない？」

「何も言わずに黙つてるけどな…」

「梨々、鈴原さんが瞑想してるみたいだよ…ひひひ…」

しばらくして、フードを脱ぎわたしは皆に伝える。

「少し聞いてくれないか。あいつの事は何も信じられない。何をやっても無駄…つて言うのは過度の現実主義だし、ある種の現実逃避だと思う。

皆を信じたいとか、そんな理想を持ってもいいんだ。

今は蒲生くんを一ノ瀬さん殺しの犯人だと決めつけるより、仲間として信じてあげた方がいい。

まだ見つかった証拠は残ってる。これらの真実を解明していこう」

少し恥ずかしいが、皆を奮い立たせる為には必要な言葉だと思う。

「…間違えた犯人を指名したら、雨崎と一ノ瀬の命を蔑ろにするかもしれないからね。少し落ち着けたぜ、ありがとうな」

二階堂さんが両手で頬を叩く。どうやら奮い立ってくれたようだ。

「二人の言う通りかもしれない。真実を探って犯人を探すが、すっかり抜け落ちていたのう…」

「死んでしまったみんなの為にでもあるかもな! 僕頭悪いけど…やれることならなんでもやるねん!」

「…オレ、何回か深呼吸して考えるべきだな。頭でっかちになったこと、少し反省するぜ」



「指紋の流れの時から疑問に思ってたのよね。こんなに簡単に犯人が見つかったのかって」

「信じるってさ！梨々！いい言葉だよね！あはははは！」

「許さないけど信じる…そういう思考もあるんだね。ま、感情論で責めるよりはいいかもね」

わたしの想いは、皆に伝わったようだ。ショックを受けている未隅くんにも、いつもは単独行動な檀くんにも。

「じゃあ、蒲生くん。本当のこと、もっと話して欲しいな」

絹川くんが、黙り込む蒲生くんに話す。

「…天…ああ…お助けください…僕は…わからないのです…」

蒲生くんは、ひたすら独り言を言うだけだ。何だか申し訳ない気分になった、その時…。

「時すでに遅し、責められ過ぎて否定厨になったみたいね」

蒲生くんの隣の、黒木さんだった。手にはなぜかハンカチと薬品が入っているであろう瓶を持っている。

「黒木さん？それは…？」

「そーいや、蒲生がソファに寝そべってた時に少し違和感あったのよね。いつもの清廉

で盲信的な雰囲気はなくて。裁判に参加してて、もしかしてと思ったけど…蒲生が本当に『覚えてない』のなら…これを使う手もあるかもね」

瓶を開け、中の薬品をハンカチに染み込ませる。蒲生くんの顔に被せると…彼はその場に崩れ落ちた。被っている帽子が外れる。

「ひ、ひどいよ黒木さん…!」

「おい、一体何の目的で蒲生くんを…」

「安心して。殺してないわ。少し、本性を暴きたかっただけ」

モノクマとカラフラは何も言わない。ただ、薬品を嗅がせただけなのか? 何の目的で?

そう、思っているうちに。

「ヒヒ、ヒヒヒヒヒヒ…」

誰かの笑い声が聞こえた。一瞬誰かと思ったが、蒲生くんの声に似ている。倒れていた蒲生くんは、ゆっくりと立ちあがる。

「……偉観。偉観でありますなあ。驚嘆するほどに偉観ですなあ」

どこか恐ろしく、どこか神々しい雰囲気の男は、手を広げ語りかける。

それは…わたしの知る蒲生くんではなかった。

「目もあやな、周章狼狽の面様の各々方」

解かれた緑髪は長く、瞳は悍ましいほどに赤く、口角は裂けるように上がっている。

「チツポケな民草諸君。お目目にかかるのは初であります」

蒲生くん…いや、蒲生くんの姿をした『彼』は、狂気的な笑みを浮かべ、わたしたちに見ただけで固まってしまうような視線を向けてきた…。

「蒲生…何が、あつたんじゃ…？」

【学級裁判・中断】

【モノカラ劇場】

美少女姿のカラフラは、タンバリンを鳴らすモノクマと共にカラオケで歌っていた。

歌い終えた後、一人と一匹はテーブル上のピザを食べる。

「曲を分厚い本で選ぶタイプのカラオケ店、最近無くなったのだ」

「そうやってカラオケのスタイルも世代交代していくんだらうね。世代交代といえば、

ボクが出てくる作品もすっかり減ってきたけど、正直寂しいなあ」

「原作キャラよりオリキャラのが動かしやすい人もいるのだ」

そんな雑談をしているうちに、ピザはあつという間に無くなった。

「そういや今回の裁判のことだけどき、二人を殺したクロは犬派と猫派、どっちだと思う？」

「裁判に関係あるようでない王道の質問なのだ…とりあえずわーはモルモットと答えておくのだ」

「因みにこれは心理テストだよ。そこらのサイコパス診断よりも正確なやつなんだ。

犬派と答えたオマエらは、バンドマンとか美容師とは付き合う事は勧めません」

「…これにバーテンダーと舞台役者を加えれば、付き合ってはいけない4Bになるのだ」

「では、回答です。猫派のオマエらは…ギャンブルに気をつけましょう。子供の通う学校の前で生徒の親の悪評を流すようなクズと化します」

「借金取りがマトモに見える様になるのだ…」

モノクマは曲を入力し、マイクを持ってポーズを決める。

「あと、モルモット派のオマエらは吉日大安サービス…モノクマファンクラブの入会をオススメします！」

今流行りのサブスクで月額一万円！入会者にはモノクマのタピオカミルクティー飲

み放題！

ボクはナウでヤングな言葉を使える、新しいマスコットなんだよ！

という訳で一曲歌います！『有名なネズミに喧嘩を売る方法』！」

「ナウでヤング以前に、月額が高すぎるのだ…」

なお、モノクマのカラオケの点数は29点だったとき。

# Chapter 3 「怪奇!悪夢の湯けむりナイトメア は実在していた!」非日常編—学級裁判(後編)

・コトダマ一覽

【カラフラファイル3】

被害者となったのは一ノ瀬秋穂。

死因は心臓を刺されたことによる大量出血死。

死体発見現場となったのは旅館一階の混浴風呂。

【カラフラファイル4】

被害者となったのは雨崎梨々。

死体発見現場となったのは占いの館。

目立った外傷などは見られない。

【ガラスケース】

占いの館にあった、雨崎の死体を入れていたもの。

鈴原たちが発見した時は占いの館のカーテンで覆われていた。

(コトダマアップデート後)

占いの館にあった、雨崎の死体を入れていたもの。

鈴原たちが発見した時は占いの館のカーテンで覆われていた。

本来は博物館にある、展示物を飾るためのもの。何者かが占いの館に持ってきたよう  
だ。

【占いの館の棚】

3 mほどの高さの棚。

棚にあったはずの蝋燭やお香が消えており、『気絶薬』と書かれた瓶が封が取れた、空  
の状態で置かれていた。

【薙刀】

占いの館の棚の一番高い場所に置いてあったもの。

2 mほどの長さを持つ。金属製で結構重い。

【雨崎のペンダント】

雨崎の死体に付けられた、青くて丸いガラスのトップが特徴的なペンダント。

動機発表前にお土産屋で、未隅と一緒に選んだもの。事件の前日の夜、付け忘れたこ  
とを二階堂に指摘されている。

因みに雨崎は二階堂と事件の前日に温泉に入っており、そこで落としてしまったのか  
もしれない。

【一ノ瀬の蕁麻疹】

一ノ瀬は女性に触ると蕁麻疹が出てしまう。  
しかし、死体にはそれらしきものは出ていなかった。

【絹川の検死結果】

一ノ瀬は心臓を細長い刃物で一回深く刺されている。  
また、両手に縛られた痕跡あり。

【一ノ瀬の持っていた手紙】

一ノ瀬が着物の袖の中に入れていた手紙。  
濡れているせいで読めない。

【アツプデート後】

一ノ瀬が着物の袖の中に入れていた手紙。  
「午後十時、博物館の『小』の部屋で待つ 湖林」と書かれている。

【脱衣所のロック】

男女に分かれたそれぞれの脱衣所に入るには、その人の性別に合わせた電子生徒手帳を脱衣所のドアの四角い枠にかざす必要がある。

【厨房の様子】

作業台の上に冷蔵庫の中身が全て出されており、水浸しになっていた。



また、水で濡れている木製の柄の出刃包丁が作業台の下に落ちていた。流し台には『消毒済み』の紙が貼られていたので、使われた様子はないようだ。

【ゴムボート】

旅館の倉庫に置いてあった大きなゴムボート。

少しだけ水で濡れている。

【客室のエアコン】

旅館の客室にそれぞれ設置されたエアコン。冷房・暖房機能と共に除湿除菌消臭機能が付いている。

どの部屋のものも二時間タイマーが設定されており、設定温度は24度だった。

【一ノ瀬の電子生徒手帳】

旅館二階、珊瑚の間に落ちていた電子生徒手帳。

壊された訳ではなさそうだ。

【マスターキー】

旅館の脱衣所以外の全てのドアが開く鍵。

黄金の間のオートロックも開く。なぜか黄金の間に落ちていた。

【脱衣所の入場記録】

旅館二階、事務所のパソコンに記録されていた。

『0:29 F 7:45 M 7:45 M 8:13 F』と書かれている。

【消えた西洋人形】

お化け屋敷に置かれた西洋人形がいくつかなくなっている。

【黒木の証言】

午前一時頃、ホテルの非常階段にいと誰かの足音が外から聞こえた。

午前二時頃、ホテルのエントランスに行くとソファに倒れている蒲生を発見する。その後、カラフラに運ばせた模様。

【『大』の部屋の破れたカーテン】

博物館の『大』の部屋のカーテンが、破られて一部なくなっていた。

【ドアストッパー】

博物館のエントランスに落ちていた。

これを使えばドアを固定できる。

【二酸化炭素消火器】

博物館の『小』の部屋に転がっていた消火器。

中身が入っていない、使用済みのもの。

(コトダマアップデート後)

博物館の『小』の部屋に転がっていた消火器。

中身が入っていない、使用済みのもの。

カタログの情報によると、噴出された二酸化炭素で酸素濃度を薄くして消火するタイプ。

電気火災の消火に適しており、汚れも出ない優れたもの。

【燃えた『小』の部屋】

博物館の『小』の部屋の半分がなぜか黒焦げになっていた。

また、『小』の部屋に置いてある全ての油式のランプからオイルが抜き取られている。

【黒焦げの壊れたランプ】

博物館の『小』の部屋の窓台にひび割れ、黒焦げになったランプが置かれていた。

電源コードに繋がれている。恐らく、『小』の部屋が燃えた原因と思われる。

【博物館の照明スイッチ】

博物館のエントランスの出入り口付近に付いているスイッチ。

『ON』にすると博物館全ての明かりが付き、『OFF』にすると全ての明かりが消える仕組み。

【死体発見アナウンス】

三人以上の生徒が、死体を発見することで流れるアナウンス。

今朝一ノ瀬の死体が見つかった時は恐らく湖林と灰寺が発見した時に流れ、雨崎の時

は檀が発見した時に流れた。

『暮らしと火災の危険』

図書館の本。火災が日常でどのようなようにして起きるのかということについて書かれている。

この本によると、照明器具に可燃性のあるものを近づけると火災の危険性があるとのこと。

なぜか図書館の返却ポストに入れられていた。

『事故の原因大全』

梅田がログハウスから持ってきた本。様々な事故の原因や対策について書かれている。

この本によると、二酸化炭素の濃度の高い場所にいると数分で体に様々な異常が起り、しばらくしたら死亡してしまうとのこと。

『古文書』

図書館の隅の小さなショーケースに入れられていたもの。

虫食いと汚れで一部分が読めない。

『■■■■の■■■き』

ガラスの■■■■けに■■■■させるも■■■■れる

まんげつ■かりが■くはいるへやで■■

あ■ろうそくにひをつけおこう■、だいのうえにおく

い■■とに■うをだいのうえ■せる

■じはじゆ■え、■ものは■に■のし■ぞ■やり■さす

■■えは■、いけ■かべる

■■■せるものはか■け■いれたまま、し■せい■しよにおく

に■■■からこ■した■■きは■■■』

【学級裁判・再開！】

「あははははははは……あははははははは！これが我が崇拜者の知る者たちですか！誰もが硬直し、唾然とされている！なんとという奇観でしょう！」

蒲生くんの様子がおかしい。

彼は血のように赤くなった瞳を見開き、こちらに笑いかけている。

「…おい、蒲生がどうにかしちまったぞ?! 笑い方も口調もおかしいし、あそこまで偉そうな態度は取つてなかつたじゃねえか…!」

二階堂さんが、蒲生くんに釘付けになっている。

当たり前だ。だって彼は、先程のように指紋を取られた時はともかくいつもは冷静な青年で、笑顔もあそこまで恐ろしいものではなかつた。

あれは蒲生くんではなく、別の誰かなんだろうか……?

「うん。やっぱり、私の考えと見積もりは妥当だったみたいね」

こんな中でも様子を変えないのは黒木さんだ。

「あるスタツフから聞いた話だけ……ある宗教団体は拷問にも等しい過酷な修行や儀式により『天の人格』を宿した人間を、教祖として崇め奉るらしいの」

拷問のような修行で、『天の人格』を宿す? 人々を幸せにするのが宗教なのに、どうしてそんな恐ろしい事が出来るのか……?

「もしかして、そこにいる蒲生は……その宗教の『超高校級の教祖』だったりしないかしら?」

蒲生くん……いや、『誰か』は、手を合わせて黒木さんの方向を見つめる。

「教祖……ですか。真であり審らかです。我はその泡沫の女の仰る通り『超高校級の教祖』。真名をヒミナム……と申します」

ヒミナム。

『超高校級の教祖』であり、蒲生くんの別の人格の名前。

泡沫の女と呼ばれたのは……黒木さんだろうか。檀くんみたいに人の名前を呼ばないんだな……。

「我が崇拜者から学級裁判と呼ばれる所業のことは聞いております。人の命運を賭け

た、運命の甲論乙駁、そして出される死の判決。うむ。確かに皆が皆、気を引き締めておられるようですねえ。特にその、赤い外套の女……」

…わたしのこと？あとさつきから言ってる我が崇拜者って…蒲生くんかな？

「いかにも人を刺し、奪う事に慣れてる…ただ、人の灯火を何よりも考えてきた…そういう情調と貫禄ですなあ」

「人を殺すのに、慣れてる…？」

絹川くんも流石に戸惑っているようだ。

「にしても…あの蒲生が詩的で難しい表現使いまくつてるとか、そりゃあ蒲生の時の記憶ねーのも当たり前だろうな…」

「耳のない男、安堵なさい。我と崇拜者の関係は特別なものでして」ヒミナムが、梅田くんに視線を向け語りかける。

「崇拜者は私のことは憶えてはいませんが、我は崇拜者の記憶を有しています。しかし、崇拜者と我はいつの時も精神の中で通じ合うことができるのです」

「…蒲生はヒミナムが自分の別人格とは気づいてなくて、『天』と呼んでいる。そんな感じかしら？」

「その通りですなあ！泡沫の女は中々聡いようです」

…黒木さんが、冷静な態度でヒミナムと会話している。

「あと、崇拜者についてですが。あやつが林檎色の女を弑しようとしていたことは認めましょう」

「林檎色の女…?し、しいしよう…?」

「一ノ瀬を殺そうとした、じやろうな。しかしヒミナム。あんなにあっさり蒲生本人の犯行を認めるのか?」

「ですが崇拜者がそうだったのは…その燃えるような悪魔のお陰です」ヒミナムは手を広げる。

要するに、湖林くんが悪い…?どういうことなんだ?

「その話は後でしましょう。今は、犯人すなわちク口を暴けばよろしいんでしょう?」

「…話をはぐらかそうとするんじゃない…」

普通なら、殺人だけじゃなくても自分の犯行は認めないはず。特にここでは命に関わってくるし、たとえば生き残れたとしても仲間からの信用を失ってしまうかもしれないからだ。

ヒミナムは、この裁判を楽しもうとしているのだろうか…?

こんな空気だけど、わたしはヒミナムを信じたい…そう考えていた。

たとえばヒミナムになっても、蒲生くんは蒲生くん、そんな理想を貫きたいと思つている。そんな理由だ。



こんな絶望的な世界じゃ、ただの、綺麗事だろうけど。

「ところで。学級裁判とやらは初めてなのですが。クロの証拠、と呼ばれるものがありますよね？例を言うところ：沐浴者を監視するもの。それによって、クロは分かるのではないのでしょうか？」

ヒミナムの言っていること、もしかして…

【コトダマ：脱衣所の入場記録】

「それって旅館の事務所にあった、脱衣所の入場記録のことだよな？脱衣所近くの四角い枠に電子生徒手帳をかざすことで、時間と利用者の性別が記録されるんだ。記録には『0時29分』の横に『F』の文字が映ってたんだけど…」

『0：29 F 7：45 M 7：45 M 8：13 F』

「性別は男子はM、女子はF。これを見る限り午後12時29分に脱衣所に入って、一ノ瀬さんの死体を混浴風呂に投げ入れたのは…女子かもしれないんだ。」

でも、ここは…ある方法を使えば、女子じゃなくても使えるようになるんだ！

【ノンストップ議論（脱衣所に入る方法）】

ヒミナム「林檎色の女を湖に入れるために、電子生徒手帳とやらが使われたのですか

…

まことに周りくどいすなあ」

梅田「変な言い回じやなくて、普通の名称を言えよなー…」

絹川「ところでみんな、脱衣所に自分とは別の性別で入る方法は…わかるかな?」

灰寺「<透明人間>になればいいんやろ!」

二階堂「流石に非現実的すぎるだろ…」

未隅「そりゃあ、<鍵を壊してしまえば>…きつと開くはずさ!ね、梨々!」

湖林「<誰かの手を借りれば>…入ることもできるかもしれないのう」

二階堂「<犯人の野郎が性別を偽ってた>…つてのはやつぱりねーよなあ!」

ヒムナム「あはははは!やはり非現実的で非科学的ですなあ!」

【コトダマ：一ノ瀬の電子生徒手帳】

「湖林くんに賛成だ!」

「旅館二階の珊瑚の間には、壊れていない一ノ瀬さんの電子生徒手帳が落ちていたんだ。

それを使っただよ」

「電子生徒手帳…あれ、確か校則貸し借りはいけないうって書いてなかったか?」二階堂さ

んが疑問符を浮かべている。

「皆、校則を見てほしい。『⑥電子生徒手帳の貸し借り、生存者からの強奪、紛失、破壊

などを禁じます。』って書いてあるけど…『死者からの強奪』とはかかれてないよね。

殺した一ノ瀬さんの電子生徒手帳を奪い、脱衣所にそれを使って入場すれば…入場記

録には『女性』として記録されるんだよ」

「校則の穴ってやつを使っただね。要するに、犯人は男の可能性もある…ってことかな？」

檀くんが髪を指に巻きながら考察する。裁判に積極的なのか消極的なかわからないな…。

「あのお、客室に落ちていたものといえば」絹川くんが白い手袋の付いた、小さな手を挙げる。

「黄金の間の入口近くに落ちてたマスターキー…あれは一体なんだったんだろう？」

「犯人がポイ、と投げ入れたとか、そう言うのじゃねえの？」

二階堂さんの推理は違う。一ノ瀬さんの行動に関係するものだとしたら…。

【選択：一ノ瀬が逃げ込んだ場所】

「一ノ瀬さんが、犯人から逃げるために入ったのが黄金の間なんじゃないかな？あそこにはオートロックがあるけど、マスターキーで開くことができる。旅館の設備を隅々まで見ていた一ノ瀬さんならわかるはずだ。」

黄金の間の一ノ瀬さんを誘い出して、気絶薬を使った後に殺害した…そんなことができるのは…男子だけだろうね」

「男性の声さえ聞こえれば、一ノ瀬さんは安心する…というのもあるんだろうね」絹川く

んが付け加えてくれた。

「成程成程。林檎色の女はそうやって弑されてしまったのですね。あの乙女は、崇拜者にとつては殺しやすかったと記憶しております」

それが、蒲生くんが一ノ瀬さんを殺そうとした理由なのか…?

「ねえ、ヒミナムくん…一つ質問があるんだけど」絹川くんだ。

「…殻の影法師。一体どうなされたのですか」

そう呼ぶと、ヒミナムは彼にギロリとした視線を向ける。

「ヒミナムの教団って、儀式をしているんでしょ?…なら、図書館にあったある物のことも、わかるのかな?」

図書館にあったある物。それって…。

【コトダマ…古文書】

「確か、梅田くんがメモしていたやつだったよね?」

「嗚呼。図書館のガラスの牢に入れられた、あの古びた紙ですか」

ヒミナムの赤い瞳が、ギョロギョロと動いている。ガラスの牢って、ショーケースのことかな…?

「アレは、我と我を崇め奉るごく一部人々のみに伝えられた、禁忌の書…の一つです」  
赤い瞳孔はやがて停止し、梅田くんを狂気の視線で見つめる。

「え？オレなのかー？まあ、メモしてるのはオレだけど…」

梅田くんは苦笑しながら、ズボンのポケットからメモを取り出す。

「それにしても、どうして禁忌の書なんかがこの図書館にあったんだろう…？」

「そんな些細なこと気にしなくていいのだ！」

カラフラが飛び跳ねながら、絹川くんの素朴な疑問に答えてくれた。

「じゃあ、みんなに見せてやるからなー。二階堂、これを見た後は湖林に回してくれねえか？」

梅田くんがメモ帳の古文書の内容が書いてあるページを開き、隣の二階堂さんに回そうとする。

…が、その直後にモノクマの背後に何かが映されたスクリーンが降りてきた。

ポカンと口を開けながら、梅田くんは硬直する。

「ぶっちゃけ梅田くんのメモ帳は短小サイズで見づらいんでね、古文書の内容を大画面で見れるようにしてみたんだ。どう？ボクってデキるクマでしょ？」

「残念ながら修復する時間はなかったけど、特別に見せてあげるのだ。くひひ…」

モノクマが妙なポーズを取り、カラフラは左右に揺れる。

「お、これで見やすくなったし、こつちのが時間がかからないからいいな！」

「…オレのメモ、全部無駄だったのかー…？」

嬉しげな二階堂さんの隣の梅田くんは、メモを落としてしまった。

「梅田くん、大丈夫だよ…メモ帳はいつか役に立つと思うからさ…」

必死に慰めるも、梅田くんは悲しげな表情のままだ。

しかし、今回のモノクマは妙に協力的だ。簡単に犯人がわかってしまいそうだけどいいのか…?

古文書が映ったスクリーンを見る。あの時発見したものと同じ文章が書かれてある。

『■■■■の■■■き

ガラスの■■■けに■■■させるも■■■れる

まんげつ■■■かりが■■■くはいるへやで■■■

あ■■■ろうそくにひをつけおこう■■■、だいのうえにおく

い■■■とに■■■うをだいのうえ■■■せる

■■■じはじゆ■■■え、■■■ものは■■■のし■■■ぞ■■■やり■■■さす

■■■えは■■■、いけ■■■かべる

■■■せるものはか■■■け■■■いたまま、し■■■せい■■■しよにおく

に■■■からこ■■■した■■■きは■■■■■■』

「虫食いと汚れはあるけど、隠れてない文章から推測すれば一部のものはわかりやすそうだね。ねえヒミナム、なんて書かれているかわかる?」







池に浮かべる…温泉に浸かった一ノ瀬さんの死体が脳裏をよぎる。

古文書の内容と、現場や証拠とは少し違うことはあれど、どんなことが書かれているかはわかってきた…。

「しつかし、槍を突き刺すとか満月の明かりとか蠟燭とか出てくるけど、これつてさ…」  
 「何かの儀式、つ言いたいんでしょ？つてことは、『し』『せい』…あの言葉は…」

黒木さんが檀くんの言葉を遮る。

『し■せい■しよにおく』

「『しんせいなばしよにおく』じゃないかしら？『神聖な場所』は占いの館でもあるわね」  
 髪をかき上げ答える黒木さん。

「みんなの考えをまとめると…一ノ瀬さんは儀式の生贄にされて、殺されてしまった…つてことでもいいのかな」

何の儀式かはわからないけど、これが犯人の手がかりになるんだろうか？

「あのさ、古文書には『蠟燭に火を付けお香を焚き、台の上に置く』つて書いてあるけど…何か引つかからない？」

檀くんがいきなり投げかけるように言ってくる。この文章が間違っている…訳ではなさそうだけど。

「梨々…蠟燭の光と空、すごく綺麗だね…まるで、ウエディングケーキみたいだ…」

未隅くんが、虚空を見つめて呟く。

「大丈夫だよ、未隅くん…雨崎さんの分まで、なんとか頑張ろうよ」

わたしが語りかけても、返事は帰ってこなかった。

未隅くんや皆、そしてわたし自身の信じるという理想の為に。希望は絶対に捨ててはいけない。

〔ノンストップ議論 (古文書について引つかかる点)〕

鈴原「檀くん、古文書におかしな箇所はないのかな？」

ヒミナム「ああ、秘法が書かれてあるアレですか！何一つく誤謬はありませんなあ！  
！」

灰寺「ひ、ヒミナムが久しぶりにしゃべったあああ!？」

檀「そののタンポポもどきには聞いてないよ…」

ヒミナム「やあ、すいませんねえ…」

二階堂「そのヒミナムは置いて…く台が怪しい>んじゃねえの?どこが怪しいかはわかんねえけど」

檀「わかんないのに適当に答えるんだね…」

黒木「もしお香を使ったとしたら、く匂いが部屋に残るくかもしれないわね…」

絹川 「何かく代わりの物を使った＞可能性もあるのかな…」

梅田 「…今なら未隅の気持ち、わかりそうだなー…」

【コトダマ：客室のエアコン】

「黒木さん、それは違うぞ！」

「…私の発言がどうかしたのかしら？」

「儀式に使ったであろうお香の匂いの消し方ならあるよ。旅館の客室の…エアコンを付けるだよ」

「ということとは、事件が起きたのは客室になるんじゃないかな…」

湖林くんの言う通りだ。わたしは、更に続ける。

「旅館の客室全てのエアコンで、二時間タイマーと24度の温度設定がしてあったけど、そのエアコンには冷房と暖房と一緒に除湿除菌消臭機能が付いているんだ。つまり、お香の匂いも消せるってことだよ」

「儀式がどこで行われたかも隠蔽したと言うことなんじゃないかな」

「…お香の匂いなんてすぐに消えそうだけだなー…」

梅田くんが、力を出さない声を出す。

「早めに死体が見つかったり、座布団とかに匂いが移るかもしれない可能性を考えたんじゃないかな」

「そうか絹川…オレと違って成長したな…」

未隅くんと一緒に、早く立ち直ってくれればいいんだけど…。

「事件が起こった場所をわからなくする為のものは、まだありそうだね…例えば、血が付かないようにしたりとかできないかな?」

絹川くんは話を続ける。血が付かないってことは、旅館に置いてあったものを使うんだらうか…?

【コトダマ：ゴムボート】

「旅館の倉庫に、ちよつと濡れたゴムボートがあつたんだ」

「えーと、それに一ノ瀬姉ちゃんを乗せたんか…つて、ああ…そーゆうことなんやな!」

灰寺くんが驚いたのか手を叩く。

「儀式の際、気絶した一ノ瀬さんをゴムボートに乗せれば刺してしまつても床に血が付くことはないだろうね。水滴が付いてるのは、温泉で血を洗い流しただろうな」

「川キャンプの必需品であるゴムボートをそんな風に扱うなんて…人の命を微塵とも思わへん殺人犯らしいやり方やな!」

腕を振りまわし、ぶんぶんと怒る灰寺くん。案外、物を大切にする子なんだな…。

「今、殺害現場が客室つて分かつた訳じゃが…古文書にある通り『満月の明かりが多く入る部屋』が、儀式の行われた場所、つまり殺害現場なんじゃな?」

「闇に耀く灯が必要ですが：円らな形でなければならぬという決まりがあります」  
「そうか。貴様の頭にも円らな風穴を開けてやりたいのう」

ヒムナムは余裕の表情で湖林くんに語りかけるが、湖林くんに睨み返されてしまった。大事にならなきやいいんだけど…。

それにしても、満月の明かりが多く入る部屋って…。

『超高校級の天文学者』であるわたしなら：殺害現場はわかりそうだ。

「みんな。わたしにちよつと考え事をさせて欲しいんだ」

「どうかなさいましたか？赤い外套の女はいつも前に進もうとしているのですねえ」

ヒムナムがこつちを覗き込む。

「古文書のお陰で：一ノ瀬さんの死亡推定時刻と殺害現場が分かるかもしれない！」

「え？そこまでわかるってことは鈴原姉ちゃん、エスパーなんか？」

「よろしいでしょう。さて、貴女の思惟はどうなのでしょいかねえ…」

自分の記憶を希望に変えて：真実を解き明かすんだ！

【ギャラクシードリヴン スタート！】

Q. 1 今回の事件に関係があるのは?

南中時刻 or 月の出の時刻

A: 南中時刻

Q. 2 満月の南中時刻、そこから割り出される一ノ瀬の死亡推定時刻は?

夜9時 or 夜10時 or 深夜12時

A: 深夜12時

Q. 3 これから分かる儀式が行われた場所、いわゆる殺害現場は？

琥珀の間    o r    瑪瑙の間    o r    黄金の間

A : 瑪瑙の間

「推理は繋がった……！」

「一ノ瀬さんが殺されたのは……南中時刻の深夜12時だと思うんだ」  
「な、なんちゆう時刻……鈴原、いきなり関西人にもなったのか？」

二階堂さんが戸惑うが、説明を続ける。

「南中時刻は太陽や月といった天体が、ちょうど真南に来る時刻のことなんだ。新月は昼の12時に、満月は深夜の12時の南中するんだよ。多少のずれはあるかもしれないけどね。…つまり、深夜12時には南側に窓のある部屋に満月の光が多く入るんだよ」

「そういうことか…理解できなくてごめん」

「二階堂さん、別にいいよ。南側に窓のある部屋…この条件を満たす客室は、旅館一階の南にあつて太陽の光が多く入る瑪瑙の間だけだ。同じく南にある二階の翡翠の間と珊瑚の間は窓が小さかったんだ。だから月の光もあまり入らないだろうね」

「わかりやすい説明じゃ。しかし、そこまでして瑪瑙の間が殺害現場だと気付かれるのが嫌だったんじゃないか」

「…その通りですなあ!」

湖林くんが呆れていると、突然ヒミナムが大声を出してきた。

「ひ、ヒミナム…?まさか、犯行を…」

「我が全てを行つたは認めましょう。禁忌の書の儀式の内容は我にしかわかりませぬしねえ。そして総ての客室に空調が付いていたのは…殺害現場を誤認させる。その為です」

儀式も殺人も証拠隠蔽も、ヒミナムが全てを一人で行なつたのか?



「でもヒミナム、主人格の蒲生ってレンジすら使えないほどの機械音痴じゃなかったか？ エアコン動かせるとは思えねえんだけどな」

「多重人格者の主人格が出来なかつたことが、別人格にできた…よくある話よ。梅田は聞いた事はないみたいね」

いつの間にか立ち直っていた梅田くんが頭を傾けると、黒木さんが答えてくれた。

「あのさ、共犯者がいる可能性とかないの？」

檀くんが、何かを疑うような素振りを見せる。確かにそうだ。あれだけの規模の犯行なら、共犯者がいてもおかしくない。

「共犯…ですか。これは全て私の犯行なのですよ？」

「思ったんだけど…殺人を犯してここから出られるのも、暴かれて処刑されるのも…殺した犯人だけなんじゃないかな？」

絹川くんの発言で、ふと思った。

校則には『殺人を犯したクロだけが処刑される』と書かれているし、今日追加された新しい校則にも『後に事件を起こしたクロが投票の対象』とある。

それをわざわざ強調しているってことは、殺人を犯さず犯人の手がかりとなる証拠を隠蔽したりした人は投票の対象にならない…つまり、裁判に勝ってここから出たり、処刑される事はないって事なのかな…？

「共犯者が関わっても、メリットはあんまないってことか…モノクマ、確認してえんだけど…」

「…うーん、絹川くと二階堂さんにしては中々鋭いねえ。まあ、一言で言えば…『そんな感じ』だと言っておきましょう!今日のボクは気分がいいんでね!」

モノクマが耳を動かしながらふんぞり返る。『そんな感じ』ってどういう事なんだ…。「共犯者の可能性…まあヒミナムみたいのなら、奇跡の力であつという間に準備はできそうやけどな…」

「じゃが。『超高校級の教祖』の才能を持っているのなら、言いくるめを使った可能性も…」

「今日は意見がお買い得ー!」

誰の声かと思いきや、モノクマだった。

「あーあ。今回も意見が分かれてしまったのだ。これは『変形裁判場』の出番なのだ」

「つてことで…学級裁判のサビであり盛り上がり所『議論スクラム』を開始しまーす!」

議論スクラム…またやるのか?二手に分かれて、意見を出し合うやつを?

そう考えているうちに、モノクマが迫り上がってきた台に鍵を差し込み回す。

陳述台がゆっくりと浮上し：それぞれ二つに分かれていく。

：いつの間にか目の前には、ヒミナムのニヤリと笑う顔があった。わたしとは違う意見ということか。

相変わらず慣れないけど、命が掛かっている議論だ。意見をぶつけ合うしかない！

【議論スクラム（蒲生公英&ヒミナムの他に共犯者はいるのか？）】

存在しない！（ヒミナム、黒木、灰寺、未隅、二階堂）

存在する！（鈴原、湖林、梅田、檀、絹川）

未隅「共犯者にはあんまりいい事はないみたいだよ」

湖林くん！

湖林「共犯者」にメリットが少ない事は、さつきモノクマが言うまでわからんかったじゃろ！」

二階堂「ヒミナムが全てやったってのは嘘じゃないだろ！」  
檀くん！

檀 「あいつは裁判を楽しんでるみたいだし、〈嘘〉についてもおかしくないよ」

灰寺 「さつき黒木姉ちゃんが〈別人格〉にしかできないことがあるって言ってたやん  
!」

絹川くん!

絹川 「逆に言えば、その〈別人格〉にもできないことはあるってことだよな?」

黒木 「できないこと…〈儀式〉の準備なら、男一人でもできそうだけど」

梅田くん!

梅田 「〈儀式〉に使うガラスケースは二人で持った方がいいと思うけどなー!」

ヒミナム 「言ったでしよう。我が全て悪いと。〈古文書〉を始終理解できるのは我一人…」

わたしが!

鈴原 「その〈古文書〉にこそ事件のヒントが書かれているんだ!」

この議論に終止符を打つには、この証拠しかない…!

【コトダマ：古文書】

これが、わたしたちの答えだ！

「古文書の話題に戻るけど…『心臓に槍を突き刺す』と書いてある行を見て欲しい」  
議論スクラムが終わり陳述台が戻った後も、スクリーンはなぜか古文書を映し出している。

『■■■じはじゆ■■■■■■え、■■■■ものは■■■に■■のしんぞうにやりをつきさす』

「この記述を見ていれば、二人でやる作業である…つてことがわかると思う。『じゆ』から始まる行動をする人物と、『もの』で終わる心臓に槍を刺す行動をする人物は違うんだ」

「ふ…あははははははは!!素晴らしい!そこに気がつくとは!」ヒミナムはケタケタと爆笑する。

「あのさ、古文書の内容をすぐに理解できるのはヒミナムぐらいしかいないよね?」

「ほほう。しかし禁忌の書にあつた槍ではなく、薙刀を使つておられるというのが現実。様々な物が替えが利くつまり…儀の形さえ成していれば、一人で行うことも可能なのですよ!あははははははは!」

「すげえ屁理屈なんだな…あれで本当に教祖なのか…?」

梅田くんが冷や汗をかいている。

ヒミナムは凄まじいオーラを放っているが、共犯者の証明ならまだできる。

…古文書の他には、あの証拠が使えるはずだ!

【ノンストップ議論 (共犯者がいるという証拠)】

ヒミナム「共犯者の証明…赤い外套の貴女にできるのでしようか?」

絹川「鈴原さんならできる、そうボクは信じたいんだ!」

ヒミナム「証拠となるモノ。この<世界のルール>でしようか?この<人々の憎しみ>?この<天体の構造>?それとも…貴女が<林檎色の女を殺めた>というのでしようか?」

湖林「ヒミナムになっても、言ってる事は相変わらず阿呆じゃ。真実はいつも、貴様のような愚か者を破滅させるのじゃよ」

ヒミナム「燃えるような悪魔。いい加減なさい。それはやがて、貴方にも降りかかります…」

【コトダマ:死体発見アナウンス】

「それは、この世界のルールだ!」

「ヒミナム。あなたの言う『ルール』:死体発見アナウンスが証拠だよ」

意味がわからないヒミナムの言葉を理解できた。それだけでも良かったと言える。

「一ノ瀬さんの時は、湖林さんと灰寺くんが見つけた時に流れてたよね…二人とも」

「鈴原の言う通りじゃ。んで、雨崎の時は…」

「檀くんが発見した時に流れたよね。つまり…誰か二人が、檀くんより先に死体を見つけているってことだ」

「…まあ、見つけたのは俺だよ。あの時は…信じられなかったし、どうしようもないと思っただけだ」

そんなことを言う檀くんの顔は、イヴァンくんが殺された時のように悲しげだった。

「所でさ、死体発見アナウンスが流れる条件って三人以上の生徒が見つけたら流れるよね。ふと思っただけだ…それに犯人は含まれるんだよね？」

「檀くん、いい質問なのだ！えーと、ぶっちゃけ含まれな…むぎゅ!」

質問に答えようとするカラフラの口に、モノクマがガムテープを貼る。

「黙っててよカラフラ。理事長は所詮、学園長の下なんだよ？」

カラフラが少し気の毒だ。

「この様子を見るに…犯人はアナウンスの人数には含まれんようじゃのう」

「湖林くん、そうみたいだね。雨崎さんの死体は儀式を行ったヒミナムと、もう一人が見つけているかもしれないんだ」

絹川くんの考察に、心の中で同意する。

「儀式もヒミナムともう一人によって行われているってことは…もしかして一ノ瀬さん

は、そのもう一人に……」

「哀矜懲創といたしましょうか!」

裁判場に、ヒミナムの不気味な声が響く。

「いやはや、皆々様も、赤い外套の女も。どうやらわからないようですねえ……という訳で、反駁の時間です」

まさかのヒミナムの反論なんだろうか……?

「云ったでしょう? クロは我一人だと。愚かしい貴女に、少しわからせてあげましょうか」

【反論ショーダウン (犯人の可能性について)】

「金の雌羊の亡骸がく我と共犯者とやらに見られた。そう仰るようですが……先程、あの奇花がくクロはアナウンスに含まない」と語っておりましたね?」

【発展!】

「金の雌羊……雨崎さんのことだよな? 殺す前なら、犯人が発見者の一人になる可能性も高いよ」

「ではでは、二人がかりで儀式が行われたとして。殺められる寸前の林檎色の女が……



金の雌羊を拝覧した>としたら？アナウンスは儀式の際に流れてしまいますねえ！」

【コトダマ：占いの館の棚】

「その言葉……ぶつた斬る！」

「一ノ瀬さんが雨崎さんの死体を見なかった理由ならあるよ……占いの館の棚にあった、気絶薬を使ったんだよ。それを使ったせいで、一ノ瀬さんは死ぬまで気絶してしまっただんだと思う……」

「赤い外套の女。そういう事ですか。クロが発見者である可能性もあると……」

ヒミナムから、悍ましいほどの笑顔が消える。

「なんだが、嫌な予感がする……」

「雨崎さんが死んだことを確認する為に、一ノ瀬さんが博物館の『小』の部屋に見に行つた可能性はないのかしら？」

「一ノ瀬のことじゃ。恐らくは……女の死体を見るのも怖かったんじゃないかな……」

「覇気を失つた湖林くんがいるのと同じ空間で、黒木さんはいつも通り平然と笑つてる。」

「人らしい感情が欠けているのではないかと思えてくる……」

「それにしてもさー、証拠はほとんど出揃つたと思うんだなー。死因はどつちの事件のも判明してるし、古文書の内容だって儀式つて解つてるし、人形とかの不可解なもの

みんな用途があるし」

「…梅田くん。じゃあ、考え尽くされたことから掘り起こせばいいんじゃないかな?」

絹川くんの声だ。胸に手を当て、話を続ける。

「建物の設備とか、凶器とか、図書館の本とか。それに、古文書にはまだわからない所があるよ」

そう言われて、わたしたちは思案を巡らせる。

「設備…例えば、エアコンは証拠を隠す為に使われて、照明のスイッチとランプは蒲生くんが火事を起こす際に使われたよね。事務所のパソコンは、犯人の性別を隠すものだったし」

「凶器は、雨崎の時は博物館の消火器。一ノ瀬の時は占いの館にあった槍代わりの薙刀だったよな」

「図書館の本は『暮らしの火災と危険』に『事故の原因大全』…これ二つからはタンポポがりりりんを死に追いやったことが明らかになったよね」

二階堂さんや檀くんと一緒に考察していく。この中で、一番証拠になるものは…。

「おい、鈴原」

湖林くんが何か気づいたような表情で、わたしに声をかける。

「一つ、思い付いた。凶器の置いてあった施設ではなく…場所についてじゃ」

凶器の場所に、何かあるのか？

…どちらかが正解だとすれば…

【選択：占いの館の棚の薙刀】

消火器は違う。二酸化炭素を振り撒く他にも鈍器として使うことはできる。しかし、被害者の二人には殴られた痕はなかった。

薙刀は…3 mほどの高さの棚の一番上にあっただし、持ってみたらかなりの重さだった。

そんな薙刀を持ち出せた人物は…。

…

目を閉じ、考えていくうちに。

「…そんな…」

『彼』しかないという事実には、辿り着いてしまった。

【怪しい人物を指定しろ!】

【人物指名：未隅実】

「え？僕と梨々が…どうしたんだ？」

指を差した後、未隅くんは正気のない目で笑っている。

「…赤い外套の女。なぜ、鷹の男がクロだと思料されたのでしょうか」

「ヒミナム。あなたの言う鷹の男…未隅くんの身長は電子生徒手帳には194cmって

書いてるよ。普通の人ならテーブルに乗っても届かない、棚の3mの高さにも届くと思う。それに、重い薙刀を持ち出すには相当の筋力が必要だと思う。だから…犯人…は…」

すらすらと出ていたはずの聲が、なぜか一瞬で出なくなる。

「でも、未隅兄ちゃんだけじゃなくて、僕も薙刀を持ち出せたやん…僕は、疑わないんか？」

「灰寺。貴様はオレと一緒にアナウンスに含まれておる。じゃから犯人からは除外される」

湖林くんという通りだ。アナウンスについては先程議論した通り。

しかし、真実に辿り着けるのはもうすぐなのに…なぜか解き明かそうとすると進む足が止まってしまう。

…わたしは、未隅くんが犯人だと認めたくないんだらうか？

こんな学級裁判という残酷な舞台で、壊れてしまった男の心を救える。

みんなが納得して、推理と真実を受け入れてくれる。

そんな希望を抱いたわたしが、甘かったんだらうか？

「おい未隅…あんたが、一ノ瀬をぶち殺しやがったのか？ 雨崎を見殺しにした、あいつへの復讐だったのか？」

「二階堂さんが未隅くんを追及する。」

「まさか、雨崎が死んでるのを見つけて…あなたはトチ狂っちゃったのかよ!」

「二階堂さん。何を、言っているんだ?」

未隅くんは、優しく微笑むと。

懐から『それ』を取り出した。

「梨々なら…ここにいるじゃないか」

『それ』は、金髪に二つ結びの、ウエディングドレスを着た人形だった。

「み…未隅くん…?これは…雨崎さんの…!」思わず、声が出る。

「みんな見てくれよ。綺麗な梨々だろう?『天』のお陰なんだ。天が梨々と幸せになりた  
いって願いを叶えてくれたんだ」

口から涎を垂らし、空虚な瞳を人形に向けながら未隅くんは笑う。

『天』つてことは…まさか、ヒミナムが…?

「ミーくん。あたし、天のお陰でこうなれたんだよ。あたし、今すつごく幸せだよ。うふ  
ふふふ…」

未隅くんは雨崎さんのような裏声を出しながら、人形の手を動かし始めた。

「何やってんだよみのるん…あんたは…どうして…」

「貴様…人形を雨崎だと思ひ込んでいるのか…？」

檀くんも湖林くんも…青い表情で『現実』を目の当たりにしている。

「おや。鷹の男がややご乱心の様子。民草諸君。誰が金の雌羊をこのようにしたのか…解りますかな？」

ヒミナムが、こちら側に笑いかける。

…答えは、解りきっている。

儀式をヒミナムと行い、一ノ瀬さんを殺したのは…未隅くん。

それが、この裁判の結論。

そして、未隅くんが持っている『それ』は…

【ノンストップ議論（未隅の不可解な行動について）】

未隅「ミーくん。このウエディングドレスにあつてるでしょ？」

「うん！とつても似合ってるよ！」

湖林「ヒミナム…未隅になんという仕打ちを…」

ヒミナム「仕打ち？我が奇跡を見せたただけですよ。」

「しかし金の雌羊は…なぜあのような姿になられたのでしょうかねえ?」

「<無から有など生まれては来ませぬ>。<魑魅魍魎が集う場所>には何もありません」

「全ては<天から降り注いだモノ>なのです」

黒木「ねえ、鈴原さんが青いけどさ…あなたと私なら、どういう意味かわかるわよね?」

未隅「今日は正装じゃなくてごめんね…梨々…愛してるよ…」

「コトダマ…消えた西洋人形」

「それは…違う…」

ヒミナムの言葉は難解だが、全く意味のない言葉という訳ではない。

「魑魅魍魎の集う場所、それは…お化け屋敷だよね」

声が震える。たとえヒミナムでも信じようと、理解しようとした結果がこれか。

「そこに落ちてた人形がいくつか無くなってたんだ。未隅くんが…持ってたの?」

「もう、人形言わないでよ鈴原ちゃん!いつものあたしじゃん!」

「ところで梨々にプレゼントしたネックレス、無くしたら新しいから新しいものを選ぶように思うんだ!」

壊れた人間の、壊れた台詞。未隅くんに希望は、伝わらなかったのか…?



「ねえヒミナム… 一ついいかな。古文書に書いてた、台の上に乗せるものって… 人形でしょ。儀式には、人形が必要だったんだよね」

「そうすなあ。ここまで来れば、民草諸君には理解できる筈。林檎色の女はなぜ殺められたのか、そして、我と鷹の男が執り行った儀式の目的について…」

絹川くんの力の籠ってない言葉に、ヒミナムが返す。

彼はもう、未隅くんの犯行を認めるのか。

なぜ偽りの幸福を与えてしまったのか。わたしが愚かだったのか。

儀式の目的。

それは、『ある幻想』を見せつける為だろう。

### 【理論武装スタート】

☆Phase. 1

「民草諸君、解っているでしょう？ 我の目処が」

「林檎色の女が弑された理由とは…」

「なぜ贄にしたかが解っていましたよね？」

「彼女もまた、我によって救われるでしょう」

☆Phase. 2

「理想を貫くということは煩わしいこと」

「であれば、正しき幸福を見せる他ありません」

「我が崇拜者もきつと悦ばれることでしょう」

「金の雌羊は結ばれ、愛されているのですなあ…」

☆Phase. 3

「鷹の男は美しき奇跡へと辿り着いたのです」

「赤い外套の女も、燃えるような悪魔も、いずれは救われるでしょう」

「貴女に私の秘術を教えましょうか?」

「さあ、この地獄を認めれば極楽浄土を魅せることができますなあ?」

「鷹の男はクロだとすれば、真の動機は何になるのでしょうか…?」

【儀】

【活の】 【式】

【復】

「これで…終わりだ」

【復活の儀式】

「それで…いいのです！」

「…未隅くんは、雨崎さんを生き返らせる為に…ヒミナムと共に、儀式で一ノ瀬さんを、殺したんだ…」

声を絞る。どうして逃げるんだ、現実から目を背けるんだと自責してしまふ。

「あはははは…！赤い外套の女の言う通り！我は我のやり方で金の雌羊を蘇生させ、永遠の楽園を見せてあげたのです！」

「…」

救われたのに、未隅くんはこれから死ななきやいけないんだ。

「ねえミーくん。天以外はみんな暗い顔してるけど、どうかしたの？」

未隅くんが人形を動かす。もうやめてくれ、と嘆願しようとも何もできない。

「鈴原さんがいつもと違って落ち込んでるみたいね。ここにいる人たちが納得するようにな、私が事件をまとめるしかないみたいね」

誰かと思つたら黒木さんだった。何事もないように、裁判を楽しんでいるような様子だ。

この裁判は、最悪の結末へと向かっている…。

進むしかないのか。現実からは、逃れられないのか…？

【クライマックス推理 ver. 黒木小百合】

○Act. 1

事件の発端となったのは、蒲生が図書館で『暮らしと火災の危険』を読んでしまったことね。

それを読んだ蒲生は犯行を決意。博物館の『小』の部屋に油式ランプのオイルを振り撒いて、『大』の部屋のカーテンを破いて…

壊れたランプに被せて、それを『小』の部屋のカーテンで隠したの。

蒲生は、一ノ瀬さんに湖林と偽って手紙を書いたわ。「午後10時に『小』の部屋で待つ」と書かれたものをね…。

午後10時になって、博物館を訪れた一ノ瀬さんは『小』の部屋で湖林を待ち続けたわ。

それを見た蒲生は、ドアストッパーで一ノ瀬さんを閉じ込めたわ。先程仕組んだ電気火災で、彼女が焼け死ぬようにね。

## ○ Act. 2

火事に気づいたのは、クロからプレゼントされたネックレスを探しに来た雨崎さん。雨崎さんは一ノ瀬さんを逃して、博物館のエントランスの二酸化炭素消火器で火を消したのだけど……小さな部屋で使ってしまった為に、中毒を起こして死んでしまったわ。一ノ瀬さんは旅館に逃げ込んで、マスターキーを使って黄金の間に閉じこもったわ。しばらくして、クロも雨崎さんを探しに行つて……博物館の雨崎さんの死体を発見したの。

そこに現れたのは蒲生……いや、ヒミナムだった。ヒミナムはクロを説得して、復活の儀式を共に行うよう仕向けたの。

## ○ Act. 3

儀式は旅館一階の瑪瑙の間で行われたわ。

準備として……博物館から雨崎さんを入れるガラスケース、お化け屋敷から人形、占いの館からは蠟燭に気絶薬にお香に槍代わりの薙刀。

図書館からは古文書、そして旅館の倉庫からゴムボートを用意したわ。

薙刀は重いしかなり高い所にあつたから、背が高くて筋力のあるクロしか取れなかつたの。

クロは黄金の間にいた一ノ瀬さん呼び出して、気絶薬で気を失わせたわ。

一ノ瀬さんはこの時、マスターキーを落としたり。瑪瑙の間に連れて行かれた一ノ瀬さんは手を縛られて、ゴムボートの上に乗せられたわ。

○ Act. 4

午後12時。儀式がスタート。

瑪瑙の部屋には月の光が多く入ったわ。大きなテラス窓の部屋だし、月の南中時刻に儀式は行われたからね。

ヒミナムは『じゅ』から始まる行動を行なっている最中：クロは一ノ瀬さんの心臓を薙刀に刺して殺害。

その後一ノ瀬さんの電子生徒手帳を奪って、被害者を血塗れのゴムボートに乗せたまま彼女の手帳で混浴風呂に侵入。死体を風呂へと投げ入れたわ。

○ Act. 5

儀式の後片付けとして、まずガラスケースは雨崎さんの死体を入れたまま占いの館に置いて、紫のカーテンをかけてそのままにしたの。

占いの館でクロは血を拭いた槍を棚に戻して、それから午前一時くらいに人形を持ち帰ってホテルへ帰ったんでしょね。

ここからはヒミナムの出番。蠟燭とお香を捨てて、古文書は図書館に戻しに行く。凶器をわからなくする為に、旅館の厨房にある冷蔵庫の中身を全て出して、作業台に

置き…その下にフェイクの凶器である包丁を置いて。

殺害現場を隠す為に、全ての客室に空気清浄機能のあるエアコンをタイマー付きで作動させたわ。

片付けを終えて、ヒミナムは午前二時にはホテルに戻ったわ。その時に蒲生に人格は交代していたんでしょね。

これがこの事件の現実よ。

狂気で狂人を惑わせた教祖と、悪夢に囚われ天を求めた男。

そんな二人の共犯事件の実行犯は、ただ一人…。

「愛に囚われ壊された殺人者…『超高校級のラグビー部』未隅実よ!」

「どう?まとめてみたんだけど。中々言えてたでしょ?私、こういうの一回やってみたかったのよね」

「…黒木さん。そう、なんだね…」

黒木さんに全てを論破された未隅くん。人形を持ったまま、なぜか真顔で立ち竦んで

いる。

「あはははは! 梨々! 僕たち、今度旅行に行こうか! 温泉がいいかな? それとも、都会でシヨツピングしようか? お土産ならなんでも買ってきてあげるよ!」

「ミーくん! あたし、ピクニック行ってみたかったんだよね! サンドイッチ作るのもいいかも!」

「いいよね! 花のたくさんある公園とかどうかな? ネモフィラとか写真映えしそうだよね!」

…現実から逃避しているのか。それとも、完全に心が壊れてしまったのか。

未隅くんは、いないはずの雨崎さんと共に再び笑い出した。

「誠に僥倖でございます。我のお陰で、救われたモノがおられるのですから…」

裁判場の生徒たちの視線は、もう一人の暗躍者に向けられていた。ヒミナムだ。

「貴様…罪を認めたとはいきや、反省すらないのか…?」

湖林くんは怒りに満ちた目でヒミナムを睨む。しかし、ヒミナムは笑っているだけだ。

「リアルファイトが発生する前に…さっさと投票しましょうよ奥さん」

「さて、全世界が待望した…ワクワクドキドキなお楽しみ…投票タイム! なのだ!」

液晶画面に、16人の顔が写っている。制限時間が来る前に、ボタンを押す。



いつの間にかスクリーンには、得票数が表示されていた。

『未隅実 8票』

『蒲生公英 2票』

『一部正解』

ルーレットが始まり、未隅くんの場所にツートンカラーのボールが落ちる。

醜悪なまでに明るいつアンファールが鳴り響く。

「マジかよーマジなのかよ……不正解者がいるとはいえ、三回目も正解とは思わなかったのだ！」

「今回、一ノ瀬秋穂さんを殺したのは……未隅実くんでしたあ！因みに雨崎梨々さんの件は事故死として片付けておきますので、そこはご了承下さいね」

「ところで投票を間違えた人がいるみたいだけど……湖林くんと、鈴原さんみたいなのだ。一歩間違ったらクロ以外は全員死んじゃうから、今後は気をつけてね！」

……選択を、間違えてしまった。現実を、認められなかった。

「……畜生……」

湖林くんは、悔しそうに口を結んでいる。

そして、今回の犯人……未隅くんは。

「そうだ!結婚式を挙げようか。南の島でもいいけど、森の結婚式でもいいかもね!」  
…処刑を待つだけでも関わらず、幸せそうな笑みを浮かべている。

未隅くんは、雨崎さんはもういないという真実から逃れ、生き返ったという幻想に  
縋って…本当に良かったのか?

【学級裁判・閉廷】

# Chapter 3 「怪奇！悪夢の湯けむりナイトメア は実在していた！」 非日常編―オシオキ

「えへへ。えへへへへ。えへへへへへへ…」

今回の犯人である未隅くんは、死んだはずの雨崎さんそっくりの人形を大切そうに抱きかかえている。

「み、未隅…マジでブツ壊れちゃったのかよ…！」

「一体どうしてこうなったんだな…？流石のオレも引くぞー…！」

「目を覚ましてくれへんか…？雨崎姉ちゃんは、もう死んでるねん…！」

周りの人間が、どれだけ未隅くんを心配しても。

「そういうえば昨日は満月だったらしいけど。月が綺麗だねって愛の告白らしいね！」

「ミーくん。あたし、お星様の方が好きだな。だって流れ星とかロマンチックだもんね  
！」

本人は聞こえていないのか、それとも聞こえないと思っ込んでいるのか。ぶつぶつと  
独り言を続けている。

そんな中、今回の元凶であるヒミナムは。

「やあやあ。これは完全に救われていますなあ。美しき愛故と云える鷹の男の結末。これも私の功罪でしょうか」

何食わぬ顔で、未隅くんの周りをうろろと歩いている。

なぜ彼は、未隅くんは救われたと考えられるのだろうか…?

「…なあ、ヒミナム…」

力の無い、震える声でヒミナムに呼びかけて。

「赤い外套の女。顔色が優れないようですが…何かございましたか?」

「どうして…未隅くんにあんなことをさせたんだ」

そして、彼を責めるように叫ぶ。

「あなたのせいで一ノ瀬さんも、雨崎さんも…死んでしまったんだぞ!」

ヒミナムはそう言われると、赤い目をさらに大きくする。

「…そうですか。貴女が真実について知りたいと云うのなら…崇拜者と、私の悲喜劇を…民草諸君に教えてあげましょう。まずは、我が崇拜者について…」

惨状の中、目の前にいる男は手を広げ語り始めた。

【ヒミナムの語り】

我が崇拜者は一つの苦悩と、妬みの心を持たれていました。

苦悩。とある要因が切欠で、他人をよすがとすることができずにいたこと。

妬みの心。周りに自ずと人が集まってくるように見える、燃えるような悪魔に嫌悪と劣等を抱いていたこと。

これらの負の心を抑えきれずにいた崇拜者は、ある計画を思いつきます。

それは、燃えるような悪魔の大切な人間：林檎色の女を弑することでした。

崇拜者は計画を練り、自分を偽り、女を焼こうとしました。

仕掛けを作り、女を部屋に閉じ込めた後。一旦は寢床へと帰ります。

しかし。計画に不安があったのか。崇拜者は、また第三の領域へと戻られました。

博物館にて。崇拜者は安らかに眠る金の雌羊と：その隣で泣き叫ぶ鷹の男を見附ます。

崇拜者は弑し損なつたと感じたのか。また林檎色の女を探そうとしますが：この時点で心が崩れていた鷹の男に呼び止められます。

なんと、鷹の男は：恋人を殺したのは崇拜者だと思案なされたのです！

男は崇拜者に消火器を持ち殴りかかりますが、そこで帽はふわりと舞い、結われた髪も外れてしまいます。

その時です。我がこの世界に出てきたのは。

我が最初に見たのは、倒れたはずの輩がまた立ち上がった事に驚きを隠せぬ大男と、ちいさい少女の亡骸でした。

鷹の男は雰囲気が違う、おかしくなったのかと再び叫びました。

我はまず混迷する鷹の男を必死に宥め、慰め：説教致しました。

過去から逃れられず、希望に縋り続けた愚かで弱い男と云った後は。

貴方は何も悪くない。辛かっただろうに。もう逃げたかっただろうに…。

そうやって心を抱擁するだけで、鷹の男はすっかり天を信じるようになりました。

我は云います。愛する金の雌羊とまた会いたいと云うのなら。我が手助けをしましょうと。

鷹の男は大いに参画します。そして、我らは『復活の儀式』を執り行いました。

こうして鷹の男は再び、金の雌羊を蘇らせたのです…。

「…これが、この悲喜劇の真なる事実です」

最悪の事実を語ってもなお狂気を放つヒミナムは、ローブをつまみお辞儀する。

誰も、何も言わなかった。

未隅くんは、雨崎さんが死んだ時点で弱っていた。そして、そこをヒミナムにつけ込

まれたのだ。

「雨崎がネックレスを探すのに、アタシが同行していれば…」

下を向き、二階堂さんは自責する。その言葉に普段のような元気は見られない。

「ほら、みんな見てご覧よ。可愛いだろう？これ、僕らの愛の結晶なんだ」

懐から三体の西洋人形を取り出す未隅くん。

「ミーくとあたしの子供なんだよ。みんないい子なの。この子がまどかちゃんで、この子がだいきくんだね、この子があいりちゃんなの…」

「子宝に恵まれて本当に良かったなあ。マイホームが欲しいな。三階建ての洋風の家にしようよ」

どれも、金髪の子供の人形だ。恐らくお化け屋敷にあったものを取ってきたのだろう。

偽物の幸せに囲まれながら、虚ろな目で笑っている。

…それが、今の未隅くんだ。

「…あれ？」

その時。誰かが、未隅くんを駆け寄り、彼の肩を強く掴んだ。

「…未隅い！」

…湖林くんが、未隅くんを強く揺らす。そのせいか、未隅くんの腕から女の子の人形

が一体落ちる。

「自分から逃げるような、そんな人間ではなかったはずじゃ!なぜ現実が見えない!雨崎はもうどこにもいない!貴様のガキだったただの妄想じゃ!」

湖林くんは、凄まじい剣幕で怒鳴り込む。

「貴様は一ノ瀬の人生を奪ってしまっただんじや!だったらそれを受け入れろ!泣き叫んでもええ、悔いてもええ!自分の運命にさっさと蹴りを入れてしろ!」

湖林くんが認めたくない、絶望への慟哭。

それは未隅くんと、さつきまで蒲生くんに票を入れていた自分自身に対して怒っているように見える。

未隅くんが、一瞬無表情になる。

「湖林くん……?でも……」

その後湖林くんから離れて……再び笑顔を浮かべる。

「……一ノ瀬さんをあの儀式に参加させて、僕が天の楽園へ連れて行ったんだ。だから、今回不幸になった人は誰もいないよ。みんな天によつて救われたんだ!」

床に落ちた人形を拾い上げ、埃を払って再び抱き抱える。

「ごめんよ、まどか。怪我はなかったかい?……そっか。良かった」

「あたしとミーくんの子供は本物だよ。今は寝てるけどね。天からの授けものだよ。」



大切に育てていけないとね」

「梨々、そうだね。一人の人生を壊してしまつた僕に幸せになる価値なんてないと思つてたけど、今は違う。これからはあの子の分まで……沢山幸せにならなきゃね！」

青ざめる湖林くんの手から、力が抜けていく。

「何を言つても……無駄ということか……？」

湖林くんの横で、ヒムナムが諳んじるように語る。

「鷹の男もまた強き者であろうとする理想に縛られていたのです。強き理想は人を蝕む鎖のようなもの。それに、彼に爪痕を残す記憶……トラウマは絶望の血肉となります。それらから解放し、救うのが我……即ち天なのです」

……違う。

今の未隅くんは『雨崎さんと共に幸せになる』という理想に囚われている。

これが、理想？人に翼を与えるというものなのか？

例え強い希望を伝えたとしても、どうしようもないのか？

未隅くんは、こうするしかなかったのか？

そんな彼に、自分の希望を押し付けてきた私が愚かだったのか？

「おーい、オマエラー！こんなファッション絶望大会とかやつてる暇ないでしょ？そろそ

ろお待ちかねのアレやりたいんだけどー!」

「モノクマ、今回は流石に早すぎるのだ…」

「今回は『超高校級のラグビー部』である未隅実クンの為に、スペシャルなおシオキを用意しました!」

モノクマが、未隅くんの運命を宣告する。

「ああ、行かれるのですね、鷹の男」

ヒミナムは平気そうな様子で、手を振っている。

「死イコール無とは救いではありません。泥の中で生きるよりも、花の咲く世界で笑う方が良きこともあります。未隅殿が天に召されるといいうのも、また希望なのです」

自分が救った人がこれから死へと向かうのに、どうして『希望』だなんて言えるんだ…?」

「さようなら、天の祝福があらんことを」

モノクマはハンマーを持ち、前に迫り上がってきたボタンを叩く。

「では、張り切っていきましよう! オシオキターイム!」

「ずつとずつと、愛してるよ。梨々…」

「あたしも好きだよ、ミーくん…」

「うふふ。うふふふふふふ…」

そうやって笑う未隅くんに首輪が付けられる。  
彼は人形と共に、天井にぼつかりと空いた穴へと引つ張られていった…。

## 『GAME OVER』

ミスミくんがクロにきまりました。オシオキをかいしします。』



晴れた空。穏やかに流れる、川の近くの原っぱ。平和という言葉が似合うBGM。  
未隅実は、恋人の雨崎梨々と子供…いや、彼女たちそっくりの人形と共に日向ぼっこしている。

レジャーシートの上で、花占いをしながら結果に一喜一憂。そんな、幸せな日常。

『ふぞろいの家族』

超高校級のラグビー部 未隅実処刑執行

未隅は長男と共にラグビーボールを投げ合っている。

将来は世界チャンピオンだな、と言いながら長男の投げるボールを受け止める。

未隅もまた、まだまだボールを落としてしまう年の長男を気遣いながら楽しくキャッチボールしている。

…実際は違う。

不穏な曇り空に、魚たちの死体が浮かぶ汚れた川。

男の子の人形が寄りかかる枯れた木に向かい、焼けた金属のボールを投げているだけ。

未隅の手は焼け爛れているが、それでもボールを取り投げる手を止めない。

家族とレジヤシートの上でランチを食べる。

おにぎり、卵焼き、タコさんウィンナー…雨崎手製のお弁当を家族と食べる。

子供たちは美味しい料理に大喜びだ。未隅もまた、好物のほうれん草の野菜炒めを

口に運ぶ。

…実際は違う。

人形と共に食べるお弁当箱に入っているものは、料理ではなくただのゴミに石ころ。角ばった石のおにぎりや腐った野菜を、口から血を流しながら食べている。

ランチが終わり、原っぱを散歩する。

パパとママは疲れてるでしょ、と言う長男と長女が代わりに次女の乗るベビーカーを押している。

雨崎は今度レストランに連れて行ってあげるね、と笑う。未隅は奮発するぞ、と宣言する。

…実際は違う。

未隅の口からの血で汚れたベビーカーには、四体の人形が乗っている。

そして未隅の手は…完全に灰となったのか見当たらない。腹でベビーカーを押しているのだ。

ふと、遠くを見てみる。美しいマリーゴールドのお花畑があった。

みんなで見にいこう、と未隅。

歩いてお花畑に辿り着くと、早速長女は次女を抱えて向かう。長男もワクワクしながら入っていく。

∴実際は違う。

お花畑は、針の山。見えない糸で動いている子供の人形たちは針でズタズタになって  
いる。

足が千切れ、顔はポロポロ。しばらくして動かなくなる。

未隅は、雨崎とお花畑で追いかけてっこしている。こっちおいでと可愛らしい声をかけ  
る雨崎。

∴串刺しになり、血を流しながらも、穴だらけの金髪の人形を追いかける。

雨崎をようやく捕まえる。彼女は後ろを向き、凄いなミーくん、と笑う。

∴捕まえられるはずがない。

未隅はようやく、自分の手がないことを知った。

目の前には、針に刺さった恋人そっくりの人形。そして自分も、身体を痛めつけられてきたことに気付く。

未隅の目の前で、雨崎の人形は引き裂かれながらどこかへと消えていく。

血塗れで人形を追おうとするが、足に刺さった針が抜けず歩けない。

未隅は痛みという現実から逃れようと動く。それでも、針は彼を傷付けるばかり。腕を刺され、顔を刺され、胴体を刺され…。

…やがて、雨が降り出した。

血に塗れた針の山には…動かぬ大きな肉塊と、バラバラのガラクタが刺さっている。



「オッシオキ！オッシオキ！オッシオキってサイコー！今回のクロも中々の死につぶりでしたなあ！因果応報はあるってはっきりわかんだね！」

モノクマはハイテンションになっているのか、座ったままハンマーを宙に投げ、落ちてきたそれをジャンプして取る。

…未隅くんの、むごすぎる処刑。

そこには、一切の救いがなかった。

助けたかった仲間は苦しみ抜いて死に、貫きたかった信念も粉々に砕かれた。

記憶があつたとしても、自分を蝕むようなものならどうしようもなかったんだ。

希望も、理想も。信じていても、どうにもならないのか。

「ここにいる人たち何故か暗くなつてるけどさ、さっきの未隅くんは明日のオマエラと言つても過言じゃないからね」

ハンマーをどこかに捨て、モノクマは立ち上がる。

「明日は我が身つてことで、死にたくないのなら殺人を犯さないようにしとくのだじゃ、グッドラックなのだ!」

「辛いならボクのぬいぐるみで癒されてなよ。それではオマエラ、明日も頑張ろうね!」  
裁判場からモノクマとカラフラが消え、再び静寂に包まれる。

「ここは…裁判場でしょうか?」

先程まで狂気を放っていた帽子の青年が、顔をあげる。

「雨崎嬢が亡くなつてからの記憶がないのですが…一ノ瀬嬢と、未隅殿の姿も見えませ  
んね」



蒲生くんは辺りを見回す。恐らくヒミナムから戻ったのだろう。

「遅いわよ。一ノ瀬さんも未隅も、死んだわ」

現実を突きつける黒木さん。それでも蒲生くんは、何事もなかったかのように笑みを浮かべている。

「…そうなんですわ」

ここにいる生徒たちの視線が今回の元凶に向けられた…その瞬間。

蒲生くんには誰かが飛びかかり、胸ぐらを掴んだ。

…その人物は、檀くんだ。

「タンポポ…あんたのせいで！アツキーもりりりんも、みるんも死んだんだぞ!」

怒りを露にする檀くんいつもの緩い雰囲気はない。そこにあるのはただの殺気だ。

「すいませんが。僕の中の天は、どうやら皆救われたと仰っているようですが…」

「ここで生きている人間は、タンポポ以外誰も救われてないだろ!?!全部あんたのせいだ

…ふざけんなあ!」

「…ねえ、これ以上はやめてよ!」

絹川くんが二人の元に駆けていき、檀くんの片腕を強く掴む。

「い、痛…!?!」

檀くんが手を離す。蒲生くんは、その場に倒れ込む。

「ごめん。でも、これ以上仲間で喧嘩しても、事件が起きるだけかもしれないから」  
絹川くんのやり方は少し乱暴な気がするが、檀くんは少し落ち着いているよう  
な気がする。

「俺、また冷静になれなかったよ。いっちゃんも流石に怒るかな」  
俯き、ため息をつく檀くん。

…一方の蒲生くんは、ゆつくりと立ち上がり穏やかな笑みを浮かべる。

「とりあえず、何が起きたかは存じ上げませんが。また、天が人を導いたということですね」

そう言つて、裁判場のドアから立ち去つていった。

「救いようのない奴め…」

彼を厳しい目つきで睨みつけているのは、湖林くんだった。



長く煩い、帰りのエレベーターの中。ふと考える。

昨日の夜、ペンダントを探す雨崎さんを見つけていたら。

燃える博物館から、雨崎さんと一緒に一ノ瀬さんを助け出していたら。

不安な未隅くに、気付けていたら。

こうすれば良かった。ああすれば良かった。

罪悪感で、自分自身を突き刺していく。



エレベーターが止まり、扉が開かれる。皆が外の世界へと歩き始めると、誰かが優しく話しかけてきた。

「鈴原さん」

振り向くと、澄んだ瞳と雪のような肌の少年が見えた。

「絶対に、あなたのせいじゃない。だから、何があっても生き延びてね」

顔は笑っていないかった。奮い立たせる為に言っただらうか、とも思う。

それでも、少し救われたような気がした。

「…ありがとう」

感謝を告げる。そして、エレベーターからゆっくりとした足取りで出ていく。

空はオレンジ色に染まっていた。恐らく今夜は、満月に近い月が見られるだろう。

今はそういった気分ではないけど。いつかは、穏やかな気持ちで夜空を見られるんだ

ろうか。

こうして、三回目の裁判は終わりを迎えた。  
大きな絶望と、小さな希望を残して…。



【幕間】

とある暗闇の場所、とある時刻。

モノクマは豪華な飾りの椅子に座り、けん玉をカチカチと振りながら、大皿に玉を乗せたり刺したりして遊んでいる。

「今回の事件は、オマエにとってはどうかだったの? かなり絶望的な終わり方だったと思うけど」

モノクマの話し相手である人物は、質素なパイプ椅子に浅く腰掛けている。

「絶望はあった。でも、まだ足りない」

人物はそう呟く。それを聞いたモノクマがけん玉を振ると、けん先にぶつかった玉が落ちていく。玉は糸に吊られ、ぶらぶらと揺れる。

「そっか。じゃあますます『転校生』である君の協力が必要になるね」  
『転校生』と呼ばれた人物。

死んだ金色の瞳は、玉の付いた糸を強く振り回すモノクマをただ見つめている。

「ところで、あのお方って誰？」

転校生が掠れてはいるが、落ち着いた声でモノクマに質問する。

「いずれ分かるはずだよ。とりあえずは安心しといてね、あのお方はオマエの性質はちゃんと理解してるから」

けん玉の糸が切れ、玉が外れる。それは壁に大きな音を立ててぶつかった後、床に転がっていく。

「後でこの箱の中のプレゼントを受け取りなよ。つてことで、明日くらいにはかわいいかわいい生徒たちに……挨拶よろしくね！」

「…承認しました、『マスター』」

転校生の少年は、何かを望むようにニヤリと笑った。

ダンガンロンパ ・ フラワーズ Chapter 3  
「怪奇!悪夢の湯けむりナイトメアは実在していた!」

END

生き残りメンバー

残り9人

+?人

To be continued...

・「黄金のトロフィー」を入手しました。

3章を痛感した証。未隅実の遺品。

頂点に。パイナツプルの像が付いたラグビー全国大会の優勝トロフィー。

なぜか未隅はあまり触れなくなかったらしい。理由は不明。

# Chapter 3 「怪奇!悪夢の湯けむりナイトメアは実在していた!」 特別編

【被害者1 自由行動】

わたしと一ノ瀬さんは今、1.5mほど距離を空けている。

蕁麻疹の事を考えたら空けたほうがいいんだろうけど…何かこっちから話したほうがいいのかな。

「…一ノ瀬旅館のレストランとかのメニューで、好きなものとかある?」

典型的な質問だが、ないよりはマシ…かな?

「…はあ…やっぱりそうですね。女は常にスイーツとか食べ物とか原始的なことしか脳味噌にない…スマートで現代的な殿方様のように最新のニュースの話でもしたらどうですか?」

最新のニュースといっても、閉じ込められてしまっているから話ができないんだよね…

一ノ瀬さんは、わたしを何か嫌そうな目で睨みつけている。えーと、とりあえずここ



は一ノ瀬さんの好きそうな…。

「…一ノ瀬さんの好みの男性のタイプって、一体誰なんだ？」

「い、いきなり恋愛話?! どうしていきなりこんな質問をしてくるのですの!?! やはり女という生き物は生殖で考える生命体なのですわね! これだから、下等生物は…!」

質問を質問で返してて、怒られないのかな…?

「大体、世の中の殿方様である方に嫌いなお方などおりませんわ。私の周りの殿方様は素晴らしい人たちがばかりですよ。

優秀な一ノ瀬旅館のオーナーであるお兄様、新鮮な食材を見極め絶品グルメを調理する板前の皆様、顧客のニーズに合わせたサービスを考案する経営陣…

それに比べて中居はバカばかりなのか、接客、掃除やベッドメイクなどの低級な仕事しかできない…やっぱり、女は無能しかいませんわね」

「でも…お客様と接したりするのって、案外難しいよね。皆が満足するように、声掛けやメニューの準備とかするのって、以外と頭使うし…」

「そんなの当たり前ですわ。アップパー女同士の会話のように何も考えずに話したり、低能専業主婦のように手抜き料理を作るだけの事とは訳が違いますの。だから私は…仕事の時は常に頭をフル回転させていますわ。例えば、お辞儀のタイミングやお客様ごとに出すメニュー、どうしたら客室が完璧に綺麗になるかなど。これを、男女問わず

やらなければならないのが一苦労ですの」

…一ノ瀬さん、仕事の時は男女差別はしない性格なのかな?プライベートの時はともかく。

日本一の旅館と呼ばれる為に、お客様の居心地のいい空間を作り上げる。だからこそ、『超高校級の女将』と呼ばれるのかな。

そんな一ノ瀬さんだけど、せっかくの着物に埃が付いている。どこかを掃除した時に付いたのだろう。

「あの、一ノ瀬さん。着物にゴミが…」

「す、鈴原!?ち、近寄って何を…やめて下さる!?!ひいいいい!こ…来ないでえええええええっ!」

鈴原が取ろうとした瞬間、一ノ瀬は叫びながらどこかへと逃げていった。

彼女、よほど女性が嫌いなんだな…。

『重度の女性嫌いで、頭の中には女性に対する偏見がいつぱい。そんな一ノ瀬とコミュニケーションを取るのに鈴原は悪戦苦闘。しかし、自分の仕事には真面目。』



「二ノ瀬旅館は大丈夫かしら…中居どもはともかくお兄様などの殿方様が心配ですわ…」

一ノ瀬さんはどこか不機嫌そうにため息をついている。やっぱり中居はどうなってもいいのかな。

「それに学業も怠ってしまいますわ！このままでは…将来の旦那様が逃げていきますわ！」

「学業…一ノ瀬さん、勉強も頑張っているんだね」

「!?ひ、ひいつ!?鈴原、ここにいましたの!?!」

わたしの存在に気づいていなかったのか。少し傷つくな…。

「いや、ずっとここにいたんだけど…」

「空気がみたいになっていればいいのに話しかけるのはよして欲しいですわ…ところで要件がありそうな顔ですわね、一体何のですの?」

「一ノ瀬さん、前の学校は何してたのかなって。気になるだけだよ」

「前の学校?それなりに勉強して、部活は帰宅部。昼休みは図書館で料理本などを読む…それだけですわね。成績は少なくともあなたよりはマシだったと思いますわ」

確かに『それだけ』と言ってもおかしくない学校生活だ。やっぱり旅館での仕事が大

事なのかな。

「こう見えてもそこらの醜女よりは同じクラスの殿方様にモテていましたの。オカルト研究部の眼鏡が魅惑的なお方、40代のお方、制服の下にアニメのTシャツを着られているふくよかなお方:みんな、断ってしまいましたわね:」

明らかに微妙な案件だらけだ。でも:。

「みんな断った?一ノ瀬さんにしては意外だね。将来心に決めている人でもいるの?」

「本当は殿方様なら誰でもいいのですけど。それには深い事情がございまして。昔中三の時に目の上に黒子のついたお方に告白されて、もうこれ以上ないくらい尽くして来たのですが:ある日のデートの待ち合わせ中に、行方不明になりましたの:」

行方不明:!?なんかの事故や事件に巻き込まれたのか!?

「大規模な捜索にも関わらず、あのお方は見つかりませんでしたわ。私は嘆きました。デートに誘わなければ良かったと:。でも、その後はお兄様が更に優しくしてくれるようになりましたわね:」

「優しいお兄さんだね:」

「お兄様は言いました。『学校の男子からの告白は全て断るんだ、君にはもつと相応しい人がいる』と。それから、告白は断っていますわ。悲しげな殿方様の顔を見ると心が痛みますが、これも将来の旦那様の為でもありましてよ:」

…前言撤回だ。付き合ってた男子を消したのは、お兄さんなのではないかと思えてくる…。

「じゃあ、男友達はいるのかな？」

「学校に友達はいませんわ。お兄様が『大和撫子は友達を作らない』と言ってますもの。お兄様の言いつけはきっちり守らないと…」

一ノ瀬さんは、なぜか恍惚の表情を浮かべている。

明らかに怪しいお兄さんの本性、早めに気付けるといいんだけど…。

少しモヤモヤした感情を抑えながら、ホテルへと戻った。

『学校ではモテているが、告白は全て断っている。一ノ瀬旅館のオーナーである兄の言いつけを守っているが、彼女の元彼を消したのはもしかしたら…？』



「鈴原…どうしてまたここにいますの？」

「一ノ瀬さんが少し、不安になってきてね。学校じゃ友達いないみたいだけど、旅館でも上手くやっているのかなって…」

「まあ、それなりにやってますわね。中居どもには嫌悪感を抑えながらも喋れていますし。ただ、義理の母と姉がちよっと…」

「義理のお母さんと、お姉さん…何かあったのか?」

「あの雌豚どもは私の草履に乗せたり、着物を汚したりして虐めて。お兄様には毎日毎日媚びへつらう。この世のヘドロを詰めたような、悍ましい邪悪生命体ですの」

「苦虫を噛み潰したような顔で義母と義姉を語る一ノ瀬さん。よほど酷い迫害を受けてきたんだろうか。」

「そのうちドバイで暮らされているお父様も食い物にするつもりなんですわ…」

「お父さん、海外にいるんだね」

「娘たちを放っておいて、ドバイにいるってのはどうかなと思うけど…」

「あのお方は、お兄様曰く救世主レベルでかなりの人格者ですの。一ノ瀬旅館の元オーナーですけど、私が物心つく頃から全く家に帰らずに送ってくれるのは写真付きの手紙だけ。そんな人も、きつといいお父様に違いありませんわ」

「風景とか、出会った人たちの写真かな?」

「…お父様と、彼に纏わりつく女が4人ほどですの。あいつらも財産目当てに違いありませんわ…」

「また嫌そうな顔をしているけど、ドバイに住んでることを考えると、一ノ瀬さんのお

父さん、もしかして…。

「ハーレムを作ってるのかな？」

「そんな感じですよ。でも、お父様も被害者ですよ！実の妻があんなのだったら、殿方は誰もが家から出て行きたくなるのも仕方ありませんわ」

実の妻。一ノ瀬さんのお母さんかな。

「イケメンとの不倫を繰り返して、お兄様は可愛がるのに私には『女将ならきつちりしろクズ』と言つて、修行に失敗したら蹴る殴るの暴行を加えてきて、私が十歳になった時に失踪して…ああ、これ以上は何も言いたくないですよわ！」

…。　　そうか。彼女が女性嫌いになったのつて、お母さんの虐待のせいでもあるんだろうな

「そんな私の唯一の味方がお兄様でしたの。あのお方は一人ぼっちで泣いている私に『何かあったら誰かに頼るんだ』『本当に助けてくれるのは男しかいない』と言つてくれましたわ。本当に、素敵なお兄様ですの…」

お兄さん、やっぱり怪しいな…？一ノ瀬さんを思い通りに育てようとしている気がする。

「あと、お兄様はいつでも助けてくれますの。この前は配膳していてうっかり中居にぶつかつて…お兄様がすぐに駆けつけてきてくれて…」

一ノ瀬さんのお兄さんの自慢は、まだ続きそうだ…。

『義母姉の迫害や、幼い頃の実母からの暴力のせいで女性嫌いになってしまったようだ。それでも兄や父などの男性のことはいい人だと信じている。』



「ああ…時雨が不安ですわ…」

一ノ瀬さんが心配している『時雨』という名前の人物。もしかして、彼女の友達だったりするのかな…?

「中居はともかく、勤勉なお兄様なら餌をあげていると思いますけど…」

「一ノ瀬さん。時雨ってペットみたいだけど…」

「う、うぎやああああ!!鈴原、考え事してる途中に話しかけないでくださる!」

どつかのギャグ漫画のツッコミヒロインみたいに大口を開け、飛び出た目を見開く一ノ瀬さん。

「ごめん…次からは気をつけるよ」

「やはり女ってのは非常識ですわね…時雨みたいに黙ってぶかぶかと浮かんでいればい



いものを」

…黙ってぶかぶかと浮いている。それができる女性はそこまでいないだろうなと思う。

あと、一ノ瀬さんの飼っている時雨がどういう子かはなんとなくわかる。

「時雨って…ペットの魚だよね？」

「あ、当てたア!？」

一ノ瀬さんがよろめく。ここまで驚いてる彼女は珍しい。

「うう…超能力でも使ってるんですの？とりあえず言っておきますけど時雨は…私の、唯一の友達の金魚ですわ」

和風が似合う一ノ瀬さんだから、金魚を飼っているのは割とイメージ通りだけど、友達でもあったのか。

「時雨は私が縁日で貰ってきたランチユウですの。メスだけど人間の豚女と違って陰口も叩かないし、ネチネチとしたいじめもしない。毎日話を聞いてくれる。ある意味理想の大和撫子のような子ですわ。世話は大変ですけど」

人間の豚女という矛盾めいた言葉はともかく、一ノ瀬さんの数少ない話し相手なんだろうな、時雨…。

「メスってことは…世話する時の蕁麻疹は大丈夫なの？」

「なぜか起こらないのですわ。もしかしてメスじゃなくてオスカと思って、金魚に詳しい殿方様のお客様を呼んで診てもらいましたけど、何もなかったですし…」

少しがっかりするように俯く一ノ瀬さん。ペットの性別に拘っていいのかな。

「でも、自室で時雨の世話をしているのが私の数少ない安らぎですの。ゆつたりと泳いでいるのを見ると、本当に癒されるのですわ…美しい日本庭園の風景と共に、素敵な時間を過ごす…これが私の休日の過ごし方ですわ」

「自室から綺麗な日本庭園が見えるのか。少し羨ましいな…」

「当たり前ですよ。私の自室…三階の白鷗の間は昔客室でしたが、古びた上に狭く誰も取らないような場所だったので貰いましたの。窓からお父様の残された風流な庭園が見えて、これがとても綺麗ですよ…」

何かを懐かしむようにうっとりとする一ノ瀬さん。

普段は罵倒の多い彼女だけど、綺麗なものや一ノ瀬旅館を愛する心はとても強いんだな。

『ここから出られたら一ノ瀬旅館に泊まりに行ってもいいかな、日本庭園がどんなのを見たいし』と言ったら、流石に激怒しそうだけど。

『唯一の友達は一ノ瀬旅館で飼っているメスの金魚・時雨。父の残した庭園の見える自室で世

話したり、眺めるのが彼女の癒しの時間なんだとか。』



「鈴原。一つお願いがありましたよ」

「お願いって…どうかしたのか？」

「最近私に馴れ馴れしく話しかけているようですが、正直迷惑だから…間違っても一ノ瀬旅館に泊まらないで欲しいですよ」

ある意味一ノ瀬さんらしい頼みだけど…それ、逆に困るんじゃないかな？

「私の目指す一ノ瀬旅館は、世の殿方様たちを癒す宿ですの。お兄様が困るから仕方なく泊めてますけど、本当は女人禁制にしたいくらいですわ」

「でも…一ノ瀬さんはこの前男女問わずお客様と接する時は頭をフル回転させる…みたいな事言ってたよね」

「えっ…」

一ノ瀬さんの体が固まる。

「どれだけ嫌いな相手にも、しっかりおもてなしする…それが女将なんじゃないの？」

「…ええっ?!?!?!」

大きく仰け反り、よろけそうになる一ノ瀬さん。

「あ、危ない!」

わたしは倒れる一ノ瀬さんの手を、しっかりと握り…。

「えーと、大丈夫? 怪我とかは流石にないかな…」

「…あ…あれ…う…さつき女に…触れて…!…って、あれ…?」

なんとか起き上がった一ノ瀬さん。その白い手にも、身体中にも…蕁麻疹は出ていない。

「う、嘘でしてよ!? あれほど強い握力で掴まれたのにどうってこともない…夢でも見ていますの!」

頭を抱え、落ち着かない様子で混乱する一ノ瀬さん。

正直言葉にするのが難しいけど、ここは言うしかないみたいだ。

「女性に触れても蕁麻疹が出なくなった…みたいだね」

「そんな…もし私がこのまま女に慣れていったら、やがて薄っぺらいバカ女の輪に入る羽目になって…大和撫子どころか安っぽいアホ売女になってしまいますわ!」

「…慣れてもいいんじゃないかな」

ゆらゆらしていた一ノ瀬さんの体がピタリ、と止まる。

「たとえば女性が嫌いじゃなくなっても、一ノ瀬さんの何かを大切にすることはなくならな

いような感じがするんだ。自分が変わっても、自分がなくなる訳じゃないと思う」  
「…は？今になって説教ですの？」

一ノ瀬さんは自分の体を抱え、こっちに恥ずかしそうに赤くなつた表情を向けてくる。

「あなたはそこらの女よりは少しだけマシつてだけですわ。覚えておきなさい、鈴原……！」

そんな言葉を吐き捨て、一ノ瀬さんはダツシユでどこかへと去つていった。

彼女と本当に友達になれる日は、まだ遠いだろうけど。絶対に来ないつてことはない。そういう予感がするんだ……。

『女性に触れると出る蕁麻疹が、鈴原に掴まれた時は全く出なくなっていた。一ノ瀬が女性に慣れ、鈴原と本当に友達になれる日はきつと来る……はず。』

・『一ノ瀬のパンツ』を入手しました。

一ノ瀬愛用の赤いストリングパンツ。男性受けを重視した結果こうなつた。

その他にもTバックやバックレースなどのセクシーパンツも持っているようだ。



## 【被害者2 自由行動】

「あのさ、鈴原ちゃん。少し聞きたいことあるんだけどさ」

「…どうしたの?」

「鈴原ちゃん、そのサロペットとシャツとコート、どこで買ったの?」

「え? バイト先近くのショッピングモールだと思うけど…店名は忘れたな」

「店名忘れるの!? 普通アプリにメモっとくよね!?!」

「そういえば雨崎さんは『超高校級のモデル』だったような。」

「モデルだし、やっぱりファッションの研究はしとくものなのかな。」

「今度脱出したらいいアプリ教えておくねー。女の自分磨きは大切だよ」

「ファッション、あんまり拘りはないんだけどな。動きやすければなんでもいいし。」

「でもさ、ファッションに一番大切なのは流行とかじゃないと思うんだよね。」

「流行ってる洋服を無理して着る必要なんてないし。」

「もしかして、ファッションに一番必要なのは…服の値段、じゃない…」

「その人の個性、だったりする?」

「…ピンポン！正解！あたしが言いたいのはそのなんだよね。たまに和服やそれをアレンジした服を着た女の人とかいるじゃん。かつこよくて尊敬しちゃうよね。他には口リータ系の人もいいよね。あたしは男ウケいい服とかより、自分ウケのいい服を着てる女の人が好きだな」

言い得て妙だ。

「ところで鈴原ちゃん、何か似合いそうな気がするんだよね」

「…何が？」

「うーん、ヴィジュアル系とか。十字架とか黒を基調としたやつ」

「ヴィジュアル系か…あれあんまり聞かないんだよね。ロックは好きだけど。一番好きなのは…ギターサウンドがメロディックなやつで…」

あ…しまった！音楽の話題になってしまった！しかも、長々と語ってしまった！

「あたしもあんまり聞かないんだけどね。洋楽やK-POPのが好きだし」

良かった。というか邦楽ファンではないんだね、雨崎さん。

彼女の意外な一面が見られたようだ…。

『ファッションにおいて一番大切なのは個性だと信じている。ちなみに鈴原に一番似合っているのはパンク系ファッションらしい。』



「うーん、どうしたら喜んでくれるのかな…」

雨崎さんが何か悩んでいる。いつもは元気な彼女だけど、何かあったのかな？

「あ、鈴原ちゃん!ちよつと聞いてくれる!？」

「いいけど…未隅くん関連かな」

「そうなんだけどさ、お土産屋見てたら映画のディスクとか色々見つけて、せっかくだからミーくんと二人でお部屋で見ようかなと思っただけど…」

頭を抱える雨崎さんは話を続ける。

「ミーくんの好きな映画、青春スポーツモノなんだけど…なぜかディスクが一つもなかったんだよね」

雨崎さんと未隅くんのことだから映画デートには行ったことはありそうだし、映画の好みも知ってそうさ。

それにしても、何でも揃ってそうなお土産屋にもないものってあるんだな…。

「他にミーくんの好きな映画って何かあるのかな。やっぱり黒木ちゃんに教えてもらった方がいいかな…」

なんとなく、黒木さんはB級映画を紹介しそうな気がする。



「だったら…ヒーローアクションもの、とかどうかな。スポーツと同じで体を激しく動かすことが多いし、ストーリーも単純明快で面白いのが多いし」

「…確かにそうだね！後で借りに行く！ミーくん、楽しんでくれたらいいな！…そうだ、鈴木ちゃんも来る？」

ということ、お土産屋に向かうことにした。

『『スーパースード』って面白いのかな？なんかヒロインとのラブストーリーが展開される、って書いてあるけど…』

お土産屋で雨崎さんが、映画のパッケージを持つてはしゃいでいる。

「あ、この前テレビで見たやつだ！面白かったけどミーくんの好みじゃなさそうだなあ…」

「雨崎さんと未隅くんって、デートの時はどうしてるんだ？」

雨崎さんがこちらに振り向く。

「まずはコミュニケーション用のアプリじゃなくてメールで待ち合わせかな。ミーくん、ガラケー使ってたアプリ使えないんだ」

意外だけど、ラグビーに集中するとかそういう理由でもあるんだろうか。

「んで次はショッピングかな。男子用のアパレルショッブとかも行くんだ。ミーくんはファッションには疎いんだけど、今着てるミーくんの服はあたしがコーディネートした

やつなの」

「どおりで爽やかなファッションだなと思った。他にはどこに行くんだ?」

「カフェでお茶したり、映画見たりゲーセンで遊んだり…あたし、ゲーセンの『ホツケーマニア』で全然勝てないの。でも、ミーくんと一緒にいるととても楽しい、つて思えてくるんだ」

そんなことを話しながら、映画を選ぶ雨崎さんはとても幸せそうな笑顔だ。

これが、愛つてもものなのかなと思えてくる…。

ようやくディスクを選んだ雨崎さんと分かれ、自室に帰った。

『恋人・未隅実とはかなりの仲良し。映画やショッピンングにデートに行ったり…。未隅の爽やかなコーディネートは雨崎が担当しているんだとか。』



雨崎さんと他愛のない話をしている途中のこと。ふと気になることがあったので、彼女に聞いてみることにした。

「雨崎さんは…なんで読者モデルになろうと思ったんだ?」

スナック菓子を夢中で食べていた雨崎さんがこちらを向く。

「読モになったきつかけ…？何で知りたいと思ったの？」

「いや、フアツションとかポートルートとかに興味があったのかなって」

「えーと、鈴原ちゃんの言う通り服に興味があったのもそうだけど…実は、中学生の時の友達のおかげなんだー」

友達のおかげ？モデルになることを後押ししたとか、そんな感じかな？

「ありがちな話だけど、数少ない友達が勝手に『A l i c e』に手紙を送ったんだ。『梨々ちゃんを読者モデルにしてください』みたいな感じで」

確かによくありそうな話だ…。

「でも、あたしあの時ちよつと太ってたんだよ！そのせいで罰ゲームで告白されたり、靴箱に呪いの手紙送られたりしたの。友達がああやった時も最初は嫌がらせだと思ったんだよ！」

雨崎さんがぶんぶん怒っている。本当の友達だったのかな、その人…。

「そのおかげで『このままじゃダメだ、読モみたいな女の子になろう』って思って、ダイエットするきつかけになったのはいいんだけどね。成功して可愛くなつて、読モとして正式に認められた時は嬉しかったなー」

自分のダメな所を省みて痩せられる、努力できる人間。それが雨崎さんなのかな。

「ところで、読モって…仕事はどんなことをするんだ？」

「仕事?普通に雑誌でトレンドのファッションとかメイクとか紹介したり、写真とか撮ったりするよ。それが結構好評なんだー」

左手で二つに結ばれた髪を指に巻きつける雨崎さん。

「普通のモデルと、一緒の仕事が多いのかな?」

「そんな感じかな。ギャラはプロモデルのが多いけど。あと、SNSの更新とかも読者には必須なんだ。応援のメッセージもあるんだけど稀に『こういうのは好きじゃない』とか『ださい』とかのリプライも来るの」

批判のコメントまで相手にしなきゃいけないなんて大変だな…。

「でも、ファンからの手紙やリプライとか読んでると結構嬉しくなるよ。『雨崎ちゃんらしくてかわいい』って声が一番多くてね。読モって少し個性があっても人気出ること多いんだ」

「モデルって…個性があったらダメなのか?」

「個性があるからこそ人気なんだよ。読モって言うのは一般の人から選ばれるから『読者と同じ、リアルな女の子』が多いの。身長が高くなかったり、スマートじゃなくても選ばれるし、恋愛や日常について語っても許される。だから、読者の子たちが共感できるんだよね」

雨崎さんは、自分らしさもトレンドも大切にしているんだな。リアルな女の子だからこ

そ、持てる視点があるんだなと思った。

「あたしらしきなんて、大したことじゃないけどね…」

一瞬、彼女から笑顔が消えたような気がするけど、どうしたのかな…？

それからは、二人でスナック菓子を食べながら過ごした。

『読者モデルになったきっかけは中学生時代の友人のおかげ？個性やリアルさあってこそその読モだと語るが、どうやら自信がないらしい…』



「…」

噴水広場のベンチ。いつもは明るく元気な雨崎さんが、今日はどこか暗く大人しげだ。

「あたしが…馬鹿なのかな…」

そう呟く雨崎さんの手をよく見ると整えられた爪が土で汚れている。ガーデニング…ではないようだけど。

「なあ、手が汚れてるみたいだけど…」

「…実は…助けられなかったの」

わたしの言葉を遮るように、雨崎さんは眩き、街路樹の下を指差す。

掘り返された跡のある土の上には、手の平に乗るぐらいの石と小さな花が供えられている。

もしかして、「雨崎さんがやっていたことって…」

「墓を、作ってたのか?」

「そんな感じかな…ヒストリエランド、壁が高いのになぜか鳥が迷い込んでくるんだよね。ウォータースライドの近くで小鳥がカラスの群れにいじめられて、何とか引き離して小鳥を助けようとしたんだけど…近づいてきたら、もう動いてなかったの」

悲しげな声を出しながら、目を瞑る雨崎さん。

「だから、墓を作ったんだけど…モノクマが出てきて『群れからはぐれただけの落ちこぼれを助けて悼むなんて、君はおかしいんだね!普通なら病原菌気にして助けないでしょ』って言ってきたの…それだけなんだけど、正直悲しかった」

彼女の閉ざされた瞼から、一粒の涙が出てくる。

「あたし、やっぱりおかしいのかな。弱ってる子は手を差し伸べるよりも…助けない方が、普通なのかな」

「…助けること自体は、絶対におかしくないよ」

わたしは、雨崎さんの肩に手を乗せる。

「何かを『助けたい』と思うのは普通だし、それを実行に移せるってことは…雨崎さんは、とても優しい人なんだと思う」

「…鈴原ちゃん…?」

「それに、あの小鳥はきつと嬉しかったんじゃないかな。こんな状況でも寄り添ってくれる人がいると、きつと感じられたんだから。雨崎さんは決して馬鹿なんかじゃないよ」

雨崎さんが、こちらの方向に顔を向ける。その瞳には涙が溜まっていた。

「う…うう…」

そして…わたしに泣きついてきた。

「うわああああああんっ！そんなこと言ってくれる人、ミーちゃんと鈴原ちゃんくらいだよー！」

泣き声混じりの高い声で叫ぶ雨崎さん。

「あたしの個性はおかしいとか、そんなことずっと言われてきたのに…ここまでめっちゃ肯定されるとなんか…ううっ…!」

「後で、ハンカチかティッシュ持ってくるね」

「大丈夫だよ…ハンカチはあるから…ありがとう、鈴原ちゃん…」

雨崎さんは、涙を枯れるまで流し続けていた…。

モデルらしく未隅くんを引つ張っている雨崎さんだけど、そんな彼女の意外な一面がわかった気がする…。

『助けたかったものを救えず、モノクマの心ない一言に傷付く。鈴原に慰められた彼女は思わず泣き叫んでしまう。強く肯定されることには慣れていないようだ。』



「そうだ！折角だし、あたしの部屋で二人で菓子パしようよ！」

菓子パって…お菓子パーティーのことだっけ。

「いいけど…雨崎さんってモデルなのに、お菓子食べて大丈夫なのかな…」

「少しくらいは大丈夫でしょ！いざとなったらミーちゃんと筋トレすればいいし。さ、まずはお土産屋を物色だー！」

「あ、雨崎さん…!?!」

雨崎さんはわたしの手を引つ張り、お土産屋へと向かっていった。

…お土産屋から大量のお菓子類を頂戴した後、雨崎さんの部屋に入る。

そこにはファッション雑誌が置かれた本棚や女優が使いそうなドレスサー、服を掛け



る為のトルソーなどが置かれてある。

まさに『超高校級のモデルの部屋』といった感じだ。

「すごい…雨崎さんの部屋、中々豪勢だね…」

「あたしの部屋、最初からこうなってたんだよね。鈴原ちゃんのはどうなの？」

「なぜか天文台のポスターが一枚貼られている、それだけのシンプルな部屋なんだよね

…」

「え？望遠鏡もプラネタリウムもないの!？」

本当だ。わたしの部屋と比べてみると、インテリアが貰える雨崎さんが少しだけ羨ましく思えてくる。

「そうだ！今度モノクマとカラフラにインテリアが少なすぎるって抗議しない？」

「それもいいかもね…」

「ミーちゃんと映画を見たんだけどさ…本編も結構面白かったし、話も盛り上がったんだよねー」

チョコレートやグミなどのお菓子を食べながら、雨崎さんと会話していく。

「ねえ、鈴原ちゃん…今、ちよつと真面目な話していいかな。突然かもしれないけど、あなたにしか言えないことがあるんだ」

雨崎さんのグミを食べる手が止まり、彼女はこちらを真剣に見つめてくる。

「実はあたし、どうやって人を愛すればいいのか分からなかったの。詳しくは言えないんだけど…ミークくんが好きでも、もしかしたら愛し方が間違ってるんじゃないか、ミークん側は迷惑なんじゃないかと思うレベルで不安だったんだ」

人を愛する方法がわからない…雨崎さんにしては意外だ。

「でも…色々考えてたら、気づいたの。あたしの愛し方も、誰かに寄り添うことも、間違っていないって。そう気付けたのは…鈴原ちゃんのおかげだよ」

わ、わたしのおかげ…?

「なんか止まってるけど…鈴原ちゃんがあたしがおかしくないって言ってくれたから、自分に自信を持てるようになった。それだけの話だよ!」

雨崎さんは、太陽のような笑顔で語りかける。

「それなら…良かったかな。雨崎さんが立ち直ったみたいで嬉しいよ」

「えへへ、じゃあ菓子パ再開ね!」

それからわたしと雨崎さんは、お菓子を食べながら幸福な時間を過ごした。

友達と過ごす時間が、とても楽しい。わたしは心の底からそう思ったのだった…。

「あたし、これからは自分を肯定していけると思うんだ。自分らしく生きるのも…いい道なのかもね!」

『雨崎の不安は解消され、いつもの元気な彼女が戻ってきた。そのきっかけをくれた鈴原に感謝し、自分に自信を持てるようになったとか。』

・『雨崎のパンツ』を入手しました。

雨崎愛用の青色のショーツ。女子高校生に人気の下着ブランド『ラブスタイル』の限定品。

フリルと装飾によつて女子力が大幅にアップするタイプのパンツ。



【犯人 自由行動】

「ところで鈴原さん。君は…体を鍛えてるかい？」

未隅くんがいきなり質問してきた。わたしの学校の体育の授業がどうだったのかは忘れたし、筋トレとかはやってないんだよね。

「あまり鍛えてはないかな…」

「筋トレが面倒なら、軽いストレッチや散歩から始めてみよう。疲れも取れるし、ストレ

「又解消にもなる。体を動かすことは何よりも重要だぞ!」

いきなり運動についてアドバイスされた。

「じゃあ、ストレッツチだけでも取り入れてみようかな」

「ははははは、その調子だ! 梨々も毎日しつかり体操やってるからね!」

雨崎さんが体操? それって運動大会にあるような、本格的な体操じゃなくて…

「…ラジオ体操だよね?」

「その通りだ! 誰でも手軽にできる、それがラジオ体操! 一日に男性なら五回、女性なら三回やれば運動量は補えるんだ。鈴原さんもやってみるかい?」

「ラジオ体操か…。内容はあんまり覚えてないんだけど、どこかに映像とかないのかな」

「じゃあ僕が教えてあげよう! という訳で、噴水広場に行こうか」

…未隅くんと噴水広場でラジオ体操することになった。

「やはり体を動かすと楽しいな! 今なら十回、いや百回はできそうだ!」

ラジオ体操三回分が終わった。少しだけ体が温かくなったような気がする。

…運動といえば、どうして未隅くんはラグビーを始めるようになったんだろう。

「いきなりかもしれないけど未隅くん。ラグビー部に入ったきっかけって何なんだ?」

「きっかけ? そりゃあ僕自身が体験して『楽しい』と思ったからさ!」

「体験入部して、楽しかったのかな?」

「そう！実は僕は昔から結構流され気味でね。誰かの影響で何かを好きになる…そういう人間だった。僕はそんな自分が嫌でたまらなかつたんだ」

未隅くんは一瞬真顔になるが、話を続ける。流されやすいなんて意外な一面だ…。

「でも、高校に入学したての時。ラグビー部の勧誘を見ていたらふと『楽しそう』と感じたんだ。体験入部したら…これが中々面白いスポーツだった！肉体も頭脳もフル稼働させて、体をぶつけ合い戦術を練っていく…いいスポーツだと確信したよ。僕が初めて自分の意思で『楽しい』と思えたからね」

スポーツについて語る未隅くんの目はとてもキラキラしているし、ハキハキとした、大きく元気な声がある。

「ラグビーはどんな体格の人でもできるスポーツだけどね、僕の大きな体格も活かせるような気がした。それもあるんだよね」

流されやすい未隅くんが、自分の意思で楽しいと感じたラグビーを始める。

それもまた、一つの自立なんだろうか。わたしは心の中でそう思っていた。

ラジオ体操を続ける未隅くんと別れ、自分の部屋に戻った。

『ラジオ体操が何回も出来ると言い張るレベルでスポーツが大好き！そんな彼だが流されやすいことにコンプレックスを感じていた…らしい。』



「梨々が喜ぶもの…梨々が喜ぶもの…」

未隅くんは腕を組みながら悩んでいる。雨崎さん関連の事だろうか…?

「…何か雨崎さんのことで、悩み事でもあるのか?」

「うわあつ!つて鈴原さんだったね…」

驚く未隅くんだが、わたしを見るとすぐに冷静になった。

「梨々がこの監禁生活で少しだけ不安になってるから、プレゼントか何かをして励ましてあげたいと思ったんだ。鈴原さんのオススメは何かあるかい?」

恋人にプレゼント、か。雨崎さんみたいな女子が喜ぶものといえよ…。

メイク用品は人によって当たり外れが激しいし、服もサイズ合わせが大変だし…。

「アクセサリー…はどうかかな?」

わたしの言葉を聞いた未隅くんは、どこか『わかった』と言いたげな顔をしている。

「…ああ!それだよ、それ!梨々の喜ぶもの…流行りのアクセサリーだ!」

好きな人が喜ぶものが、ついさっきまでわからなかったのか…。

「思い出したけど僕はここに監禁される前、梨々に蝶のイヤリングをプレゼントしたん

だ。大人ぼくて可愛い、って喜んでたよ」

「要するに、大人っぽいものが好きなのかな」

「梨々は身長が低いからね。確か大人びた感じのアクセサリーが好きだよ」

未隅くんと話していると、雨崎さんの事までわかる気がする。

「あと、梨々はスイーツも好きなんだ」

確かに雨崎さんは甘いもの好きそうな人だけど。未隅くんはスイーツ、好きなのかな？

「食べるのも作るのも楽しいって言ってる、よくプロテイン入りのクッキーやケーキを焼くんだよね」

「プロテイン入りって…それ、美味しいの？」

「梨々の作るものだから当然美味しいさ！あと、プロテインは誰でも飲みやすいように甘い味が多いぞー！」

雨崎さん、未隅くんの事本当に考えてるんだな。

「じゃあ…カフェとかスイーツバイキングとか行ったことある？」

「勿論！アフタヌーンティーとやらにも行った事あるぞー！」

アフタヌーンティー…紅茶を飲みながら、スタンドに乗せられた軽食やお菓子を頂くやつだよな。

「この前、梨々とアフタヌーンティーで有名な『ロザリンドベビー』ってお店に行くことになったんだ。上品なお店だから正装で行こうと考えて…家にあるやつで一番高級な白いスーツを着て行ったら、梨々に笑われたんだ…」

軽食に行くのに正装? まあ、マナーが厳しそうだし間違ってはなさそうだけど…。

「少し恥ずかしかつたけど、店に入ったら梨々がアフタヌーンティーのマナーを教えてくださいましたから楽しめたよ。あの時のスコーンやカップケーキは美味しかったなあ…」

雨崎さんがマナーについて教えてくれたのならよかつたけど。

「その後お店を出て別の場所でショッピングしてる時に、大学生くらいの男二人に梨々が付き纏われたんだ。あんな奴よりも俺らと遊んだ方がいいってね」

嫌なナンパ男達を追い払ったのかな…?

「梨々が危ないと思って近づいたら、彼らは僕を見て怖いものを見たような表情で…『すいません!』って一万円札を渡してきたんだ! 『別にいらぬ』と言ったら、一万円札を置いてどこかへ逃げて行っただよ!」

未隅くんのガタイの良さが怖くて逃げ出したのかな…? 未隅くんの意外な一面が見られた気がする。

「梨々は僕に『来てくれてありがとう』って言うてくれたんだ。あの時の梨々、最高に可愛かつたなあ…」



恋愛自慢は、まだ続きそうだ…。

『恋人・雨崎梨々とはかなりの仲良し。有名なお店にデートやショッピングに行ったり…。愛の秘訣は未隅の一途で天然なところにある?』



「あの子達、今頃何してるのかな…?」

未隅くんがまた悩んでる。『あの子達』って誰だろう?

「あの子、また悩み事でもあるのか?」

「…それがね…家族の話、鈴原さんは大丈夫かな?」

今度は驚いていない。それどころか、至って冷静な様子だ。しかし、家族の話か。デレケートな話なんだろうか。

「別に構わないよ」

「わかった。実は僕の家…五人家族で、弟が二人いるんだ」

未隅くんのことだ。年下の人の扱いには慣れてるんだろうし、弟がいてもおかしくはないけど…。

「二つ下のカケルって生意気な弟と、生まれたばかりのシヨウって弟。反抗的で中々家に帰らないカケルはともかく、シヨウがとても不安なんだ…」

いつもは活気に溢れた未隅くんでも、弟に対して『反抗的』と呼ぶことはあるんだな…。

「シヨウくんが、どうかしたのか?」

「母さんが小説家でね。仕事で忙しいからベビーシッターを呼んでるんだけど、その人がちよつと変わった人なんだ。会うたびに姿がコロコロ変わってる」

お母さんは凄い人なんだろうけど、シッターがどうかしたのか? かなりファッショナブルな人なのか?

「稀に化粧用のコンパクトを取り出して、何か呪文みたいなものを唱えたら次の瞬間に別の姿になってるんだ…」

非現実的だが、未隅くんに嘘の気配は見当たらない。

「ある時は小学生、ある時はセーラー服の美少女。ある時は肉弾戦で戦いそうな女の子、ある時はウエディング姿…。その人はシッターとしてはとても優秀だけど、変化しすぎてシヨウを泣かせることが多いんだ」

「信じられないけど…すごく、マジカルなシッターさんなんだね」

「母さんも『泣きやまないのは辛いけど、懐かしい気分になれるし、起きてる時の育児は

ともかく寝かしつけが上手いから中々解雇できない』って言ってるんだよね。根は悪い人じゃないから、僕もあの人を責められないんだけど…やっぱり、僕自身が面倒見た方がいいのかな」

「…そんなベビーシッターを雇っているという事は、それほどあの人を信用しているってことなんだと思うよ。今は優秀なシッターさんに任せて、未隅くんは自分自身のやりたいことをやればいい」

しまった…思わず、意見を言ってしまった。

「自分自身の、やりたいことか…」

未隅くんが、考えるように腕を組んで目を閉じている。

「やっぱり、探していくしかないのかな…」

小さな彼の声が聞こえた気がする…。

「あと、父さんが家にいないのも心配なんだ」

「未隅くんのお父さん…どんな人なんだ？」

「署内の検挙率No. 1のエリート警察官で、僕の憧れの人。どこまでも不正を許さない正義の人なんだ。昔はよく家においてボール遊びとかしてくれたけど、最近は夜遅くにしか帰らないんだよね。休日も部屋に閉じこもってばかりだし…」

警察官なら確かに忙しいだろうけど、家に中々帰ってこないってのもどうかと思うな

…。

わたしだったら…お父さんに面と向かって『少しは家の事を考えろ』って言うだろう。「やっぱり、言いたい意見はちゃんと伝えた方がいいのかな…」  
普段は自信に満ちた未隅くんが、こんなにも悩んでいるとは。  
わたしが彼に、できることはあるだろうか…？

『警察官の父、小説家の母、そして二人の弟との五人暮らし。マジカルなシッターを雇う母に正義の仕事人間…少し変わった家庭環境に悩みがち?』



「はあ…」

未隅くんがため息をついている。心配なので、どうしたのか聞いてみることにした。  
「…何か嫌なことでもあったのか?」

「鈴原さん、聞いてくれるかい?…実は梨々の部屋に呼ばれて、僕は…一緒にいただくための飲み物とお菓子を持ってきたんだけど…それから…うう…」

恥ずかしそうに顔を赤くしているけど、部屋で何かあったのか?

「梨々の部屋のベッドを、汚してしまつて…」

ベッドを汚した。何か不埒な予感がする…。

「いや、何を言つてるんだ！断片的に言つちや駄目だ！僕は…飲み物を飲んでる最中に、床に飲み物の入つたコップを落として、ついでにベッドも汚してしまつたんだ！」

…不埒だつたのはわたしの方だつたみたいだ。

「しかもコップが割れて梨々が足を怪我するし、救急箱とシーツを持ってこようと部屋を出たら二階堂さんに梨々に酷いことしたと勘違いされて、箒で叩かれそうになつて…」

頭を抱え、話を続ける未隅くん。

「ようやく梨々の部屋に戻つて、応急処置したりシーツを敷いたりしたんだ。でも梨々は、全く笑つていなかつたよ。それどころか『ありがとう。ちよつと二階堂ちゃんに弁解してくる』つて言つて部屋を出ていつて…」

トラブルのせいで雨崎さんとすれ違つた…そう思い込んでるのかな。

「僕のせいで、梨々が不機嫌になつてしまつた…僕が、ミスを犯したから…梨々は僕のこととを…！」

「雨崎さんは、未隅くんを決して嫌いになつた訳じゃないと思う」

「…え？」

「自分を助けようとして救急箱やシーツを持ってきた人を、雨崎さんは嫌いにはならないよ。それに、彼女が部屋を出ていったのは、悲しんでる所を見られたくなかったのと、二階堂さんに『誤解しないで欲しい』って言いに行つたんじゃないかな」

「梨々が、僕を許してくれるのか…?」

「まだ許されないか心配なら、雨崎さんに実際に会つて自分の気持ちを伝える…それがベストだと思う」

少し説教っぽくなってしまったけど、未隅くんは何にでも自分の責任を感じてしまうような人だ。

だからこそ、こうやって励ましていくのがいいんじゃないかと思う。

「ごめんとか、許して欲しいとかでもいいのかな…?」

「大丈夫だと思うけど…土下座とか、やりすぎなことは流石にやめた方がいい」

「分かったよ。じゃあ早速梨々に『この前の事は本当にごめん』って伝えてくるよ。だって僕は…スポーツマンだからね」

立ち上がり、その場を後にする未隅くん。

彼の後ろ姿には、持ち前の明るさが戻ってきている。そんな気がした…。

『いつもは愛し合う未隅と雨崎の悲劇のすれ違いが発生? 鈴原は仲を取り持とうと相談

に答える。果たして仲直りすることはできるのか……?』



「ははははは！ やっぱり背筋はいいな！ 心が豊かになつていくぞー！」

…前までのネガティブな雰囲気は消え、未隅くんはスポーツマンらしいご機嫌さを取り戻している。

「雨崎さんとは、仲直りできたのか……?」

「その通りさ！ 君のアドバイス通りに梨々に自分の気持ちも伝えたんだ。『僕が誤ってコップを落としてしまったから、梨々にも二階堂さんにも迷惑をかけた、本当にごめん』ってね」

ニコニコと笑いながら、未隅くんは胸に勢い良く手を当てる。

「梨々は『少し不機嫌だったあたしも悪かった』って謝ったけど…最終的にはお互い許しあおうってことにしたよ！」

「良かった…仲直りできたんだね」

「君のお陰だよ！ ありがとう、鈴原さん！ 今度部屋でデートする時は、ジュースが溢れないようにペットボトルのものを持っていくことにするよ！」

自分が仲間の元気を取り戻せたのはいいんだけど、お礼とデートの時のジューズに話の脈略はないんじゃないかな…?

「あと、もう一つ君にお礼を言いたいんだ」

お礼? わたしが未隅くんにしたことはそんなない筈だけど…。

「僕の『夢』を決めてくれたのは、君が『自分自身のやりたいことをやればいい』って後押ししてくれたからだよ」

「ラグビー選手になりたいとか? それとも、他に夢があるのか?」

「違うよ。実は僕、大学を卒業したらラグビーを辞める予定なんだ。ラグビーが嫌いになったんじゃないかって、もっとやりたいことがある。引退したら…あの人のような職業に就きたいんだ」

未隅くんの言う『あの人』。思い当たるのは彼しかない…

「お父さんと同じ、警察官?」

「その通りだ! 父さんは『危険な職業だ』って反対するけど、弱さという罪を償ってケジメをつける為に、人助けもできる道を進んでいきたいんだ!」

…罪を償う? 何か引つかかるけど…あまり聞かない方がいいみたいだ。

「さっきまでは少し迷ってた。父さんの言う通りにするか、自分の夢を叶えるか。でも、君の言葉を聞いて自分の意思を持つことは何よりも大切、と思えてきたんだ」



「…なら、応援するよ。自分の夢、大切にしてくね」

「わかったぞ！じゃあ、明日の為の一步だ！ジョギングしてこようかな！」

夢への意思を持ち、自分の夢の為に進んでいく。

それこそが、未隅さんの歩むべき道なんだろうな。

友達の悩みが解消されていくと、こっちまでいい気分になっていくな…！

「過去は変えられないだろうけど、未来は決められる。そんな感じがするんだ！」

『雨崎と仲直りし、父と同じく警察官になりたいという夢を見つけた未隅。自分の夢の為に生きることを決め、スポーツマンは今日も道を進んでいく…。』

・『未隅のパンツ』を入手しました。

未隅愛用のスポーツブリーフ。伸縮性と吸水性に優れている。赤い色なのは未隅の母親とカタログで選んだからというのはいここだけの話。

## 特別編

バレンタイン特別編～チョコレートハウスの女子たち～

「…」

乙女の部屋に置かれているだろうファンシーな家具と、ピンクのハートがプリントされた壁。

座っているのはふわふわのハート型のソファだし、板チョコの模様のテーブルクロスが敷かれた丸いローテーブルもある。

そして、後ろには菓子を作る為であろうカウンタークitchen。

そういうえばこのチョコレートハウスじゃ、相手はわたしを理想の相手だと思いつむんだよな…？

チョコレートハウスにいるみんなには、わたしはどう見えるんだろう…？



「ねえ、最新作の主演の件なんだけど…」

最新作：黒木さんが監督した最近の映画のことかな？黒木さんが撮ったんだから、主演はかなりの演技力の持ち主なんだろうな…。

「あなたの演技：最高だったわ！感情の出し方から台詞の言い方まで全てが完璧！これなら大ヒット間違いなしね！」

主演、わたしだったのか？わたしはいつから女優になったんだ？記憶にない。

「まあ、沢山の人に見てもらえたらいいよね。みんなに見られて初めて名作になると思うし」

「だからこそ観客がみんな楽しめる、そんな面白い映画の主演にはあなたが必要だったのよ？ね、私の白馬の王子様♡」

「…白馬の、王子様…!？」

「ネタ切れとかスランプとかから救い出してくれて、主演も引き受けてくれて、おまけに笑顔がとても似合う…そんな素敵な人、あなた以外にいないじゃない？」

黒木さんの理想の相手。映画制作に最高の形で携わってくれる人ってことなのかな…。

「ねえ…鈴原さん」

黒木さんがこっちに近づいたと思うと、自分の片手をわたしの片手と組み合わせてきた。

「これからも、私の映画に出演してくれる？」

潤んだ視線で、こっちを見つめてくる。そうされたのなら…答えは一つしかない。

「…いいよ。わたしも、黒木さんの側にいたい。与えられなかった分は与えたいし、貰ったのなら貰いたい」

「ふふ…」

そう笑うと黒木さんは、鮮やかなアイシングが塗られたチョコクッキーの入った袋を取り出してきた。

「はい、どうぞ。作るの大変だったのよ」

「そのクッキー、わたしに？」

そういえば『夜のバレンタインをどうぞ』とは書いてあったけど…本当に今日はバレンタインになってるんだな。

「ありがとう、黒木さん」

袋のリボンを解き、中のクッキーを口に入れる。

…あれ？

ににに…苦い!?

お菓子なのにどうしてこんなに苦いんだ!?

ピーマンとゴーヤ、隠し味に魚の肝を濃縮したような…そんな風味がする!

「クッキー、どうかしら？一応味見もしてみただけど美味しい？」

味見しておいて、この苦さはどうなんだろう。でも、食感はそこまで悪くない。それなりに相手のことを考えて作ったんだだろうな。

「作ってくれてありがとう…黒木さんの味がするよ」

「こちらこそ、私を救い出してくれてありがとう。そんなあなたには、もつと…私の人生に関わってほしいの。現実でも、映画でも…」



バナラさんのバレンタイン。何だか、大変なことになりそうだ…。

「鈴原殿、地球であなたと知り合ってから…今日で4年なのです」

あめだま星のプリンセスを自称するバナラさんだけど、わたしとは4年前のバレンタインに出会った設定なのかな…。

それにしても、バナラさんは緊張しているようだ。

「アテクシが不時着した時に警察の目を盗んで墜落現場から連れ出してくれたり、おばあちゃんが病気の時に看病を手伝ったり、動画の為にパワースポットに一緒に行ったり…色々な思い出があるのです」

わたしとバナラさんの思い出、一杯あるんだね。どれも記憶にないけど…。

「そんなアテクシを愛してくれるあなたに…プレゼントがあるのです…。あめだま星には、結婚したいと願っている人に対してお菓子とアクセサリーを送る風習があるのです」

バナラさんを、愛しているのか…って、いきなりプロポーズ!? 4年も仲良しだったのなら当然なんだろうけど…。

わたしが目を丸くして驚いていると、バナラさんは顔を赤くしながら、ピンクのリボンに包まれたハート型の箱を取り出した。

「だから…これは、アテクシからの…心からのプレゼントなのです!」

「ありがとう…早速、開けていいかな?」

「いいのです! 因みにアクセサリーを目の前で付けたら、送った人のフィアンセになるということになるのですよー!」

フィアンセって婚約者の意味だったよな。

「わかったよ。どんなものか楽しみだ」

リボンをゆつくり解き、箱を開くと…可愛らしく包装されたマカロンと共に、白い指輪のケースが入っていた。

まず、包装を外してチョコレート色のマカロンを食べる。カカオとアーモンドが混

ざった味が口の中に広がっていく…。

「…美味しい…！」

「アテクシの手作り、喜んで貰えたのですね！ありがとうなのです！」

バニラさんは笑顔ではしゃいでいる。指輪ケースを開けると…小さな宝石が飾られた、金色のリングが鎮座していた。

「これは…アテクシが配信で稼いだお金で買ったものなのです。地球では婚約指輪を送るのがプロポーズと言われているので、それに合わせてみました」

バニラさんの目の前で、ケースからリングを外し、自分の指にはめていく。赤い宝石が光に照らされ輝く。

「婚約指輪をはめてくれたということは…アテクシのフィアンセになってくれるのですね!」

「そうだね。もう4年も付き合っているなら、考えてもいいと思う」

「ああ…これが幸せということなのです！あめだま星の住民も、おばあちゃんもきつと喜んでくれるのです！」

恍惚の表情を浮かべるバニラさんが、わたしを強く抱きしめる。

「…これが、愛というものなのです！アテクシ、幸せなのです…！」



「鈴原様…私の初恋のお方…」

一ノ瀬さんが声を掛けてくる。というか、初恋の人？一ノ瀬さんが好きになるのは男性だけじゃな買ったよね…？

もしかして、今の一ノ瀬さんにはわたしは男性に見えるってことなのかな？

「幼き頃に出会った時から、あなたとずっと愛し合いたいと思っていましたわ。それが今日、叶えられるとは…私、とても幸せですよ」

一ノ瀬さんがこっちに顔を近づけてくる。わたしを男性だと思い込んでいるとはいえ、このままじゃ彼女に蕁麻疹が出てしまうかもしれない…！

「…流石に、結婚もまだなのに一線を超えてしまったらダメなんじゃないかな。こういうのは、大切にとっておくべきだも思う」

…思わず声が出てしまった。

「あら。鈴原様は自分を大切にできるお方ですね。私、ますますあなたにメロリンですわ！お兄様も、きつと気にいるはずですわ！」

一ノ瀬さんが顔を離すが、それでも表情はうっとりとしていいる。

「そういえば…今日はバレンタインでしたわね。これは私からのプレゼントですわ」



彼女は袖の中に手を入れ、青い紙製の上品そうな箱を取り出した。

「私を知る限りの最高級のチョコレートを包んだ特製大福が入っていますわ」

「最高級って、どれくらいかかったの？」

「一粒5000円ですわ。美味しくなるように様々なレシピを熟読し、二週間前から試作を重ねついに完成させた逸品ですの…」

5000円。

けれどただお金や時間をかけただけじゃなくて、ちゃんと食べてくれる相手の事を考えて作っているからこそそのチョコ大福なんだろうな。

「じゃあ、早速食べてみるね」

箱を開け、中に一個だけ鎮座している大福を箱の中にある和菓子用の太い楊枝で一口分に切る。

切られた大福を口に入れ、和の感触を味わっていく…。

程よい柔らかさの餅、ぎつしりと詰まっているチョコレート…一ノ瀬さんの作ったお菓子だ、当然の如く美味しい！

「ありがとう、今まで食べたことないくらい美味しいよ！」

「喜んでくれるのですか？そう言われると私もとても…嬉しくなりますわ！鈴原様、お茶はいかがですか？今すぐ用意いたしますが…」

「遠慮なく頂こうかな。このチョコ大福に合うやつがいいな」

「了解いたしましたわ。しばしお待ちを」

一ノ瀬さんは立ち上がり、キッチンの方へと向かっていった。

しばらくして。

お盆にポットと緑色の飲み物が注がれたカップを載せて、一ノ瀬さんが戻ってきた。

「和菓子に合う、煎茶を入れてきましたわ。熱いので火傷には気を付けてくださいませ」

「煎茶…一ノ瀬さんが入れてくれたものだから、きつといい味なんだろうな」

一ノ瀬さんは顔を赤くし、煎茶を啜る様子を見つめてくる。

「いつも麗しく、優しい鈴原様。そんなあなたに、私の本当の愛を授けます…♡」



雨崎さんの妄想か…。

彼女には未隅くんがいるけど、どんな事になるんだろうか。

そう思っているうちに、元気のない様子の雨崎さんはこちらを向いてきた。

「ねえ、今日も相談いいかな？鈴原ちゃんにしか言えない事なんだけど…」

ということとは、今のわたしは相談役ってことなのかな？

「あたし、ミーくんの事で読モ仲間と喧嘩しちゃったんだよね。『あんたの彼氏は体育会系だし何かやらかしそう』だとか言われたの。耐えられなくなつて『やめてよ』つて言つたら驚かれたり、おかしいつて言われたりして…」

話を聞いてるとなんだか、凄く悲しい気分になつてくる…。

「あたしが、あの子に強く当たつたから悪いのかな。人を好きになるつて、そんなに悪いのかな…」

雨崎さんは落ち着いていないのか、組んでいる手を動かしている。

わたしは、雨崎さんの手を優しく握る。

「相手が誰であろうと人を好きになることは、いい事だと思う。限度はあるけどね」

「いい、事なの?」

「…それに、言い返した事は何も間違つてないよ。悪口を言う人が正しいと考えてたら、雨崎さんの個性や自分らしさはなくなるかもしれない。酷い事を言ってくる人とは、しばらくは距離を置いた方がいい」

自分なりの回答だけど、雨崎さんの役には立つかな…?

「そうなんだ。鈴原ちゃんに相談して、本当に良かった」

雨崎さんが少しだけ微笑んだ。

そうやって、雨崎さんの淹れたお茶を飲んだりしているうちに。

「あ、今日はバレンタインだったね。鈴原ちゃんの方も持ってきたの！」

元気を取り戻した雨崎さんが、マスキングテープで口を留めた黄色い袋を差し出した。

アラザンやトッピングで飾られた、カラフルなピックの刺さった丸いチョコが三つ入っている。

「友達の証のチョコポップだよ。本命のミークんのはまた別にあるんだ！」

「ありがとう。お茶と一緒に頂いていいかな？」

「うん！結構自信作なんだ」

雨崎さんから貰った袋を開けて：桃色のピックが刺さっている、星が散りばめられたチョコポップを取り出し食べる。

チョコに包まれているのは、どうやらスポンジケーキらしい。中々の味だ。

：全て食べ終える。テーブルの上には、三色のピックが黄色の袋の中に入っているのが置かれている。

「結構美味しいね。ケーキは自分で作ったのか？」

「ううん、市販のスポンジケーキだよ。自作した方が良かったかな…？」

「大丈夫だよ。見た目は映えるくらい可愛かったし、これでも十分な友チョコになると思う」

雨崎さんの顔がパツと明るくなる。

「こつちこそありがとう！ねえ、写真撮っていいかな？」

どこからかスマホを取り出す雨崎さん。折角だし、ここは記念に撮っておこう。

「やっぱり、鈴原ちゃんはミーくんと同じくらい大切な人だよ！だから、これからも仲良くしてほしいな……！」



一人を好む紅葉さんだけど、どんな妄想が待ってるんだろう……？

「練習で忙しいのに、誘いに乗ってくれて……ありがとうね」

いつもの紅葉さんからは想像できない、大人しげでたじたじとした態度だ。

「別にいいけど、一体何の用件なんだ？」

「正直、あなたにはいつも感謝してるんだよね。練習の後マネージャーを手伝ってくれ  
るし、試合の時にはいつもメールを送ってくれてる。応援部の部長活動で忙しいだろう  
に」

今のわたしは、応援部の部長か……。

「あなたの声を聞いてると……私には頑張れるんだとか、負けられないって気持ちになっ  
た」

てく。だから、一回話がしたかった…んだけど」

紅葉さんはテーブルの上にあった紙袋から何かを取り出す。

「こんな陳腐でつまらないチョコじゃ、どうせ喜んでくれないよね…」

彼女の両手には、四角いチョコ菓子が入れられた小さい透明な袋が一つ。

「ふ、袋は100均のものだし…材料三つぐらいしか使っていない生チョコだけじゃないの？」

紅葉さんは頬を紅潮させる。

「いいよ。…他人を思いやれる紅葉さんの事だから、きつと美味しい気がする。だから

…貰おうかな」

左手を相手の肩に乗せると、彼女は一瞬だけビクツとした。

「私が、他人を思いやれる…?」

更に顔を赤くしていく紅葉さん。

「じゃあ受け取ってくれるの? 味見は一応したけど、不味かったら、ごめん」

ボールをパスされるように、袋を渡される。

早速、生チョコをキツチンにあったフォークで頂く。

…甘ったるいミルクチョコレートと、苦いココアの味が調和している。

うん、いい生チョコだ。紅葉さんは料理もできるのかな、と思う。

「…どう？ココア、入れすぎちゃった気がするけど」

「ありがとう。美味しいよ」

「そうなんだ…これ、たまに作ると家族が喜ぶんだよね」

安心したような表情を見せる紅葉さん。

「本当はプロテインチョコレートってやつを作ろうとしたんだけど、正直イロモノすぎて引かれるかなと思ったんだ」

プロテインチョコ…運動やダイエットをしてる人にはいいんだろうけど。

「ねえ、何か話でもしない？何か読み応えのある小説とか、筋トレのメニューの話とかがいいのかな」

「じゃあ、小説の新刊の話でもする？」

「新刊の話、ね…あんたが好きそうな話といえば『鉄琴と暁』とか？あんたと同じ、応援部の部長が主人公の学園ラブコメなんだけど」

「紅葉さん、もしかしてラブコメが好きなの？」

「!?う、ううう…恋愛だけじゃなくて、サスペンスとかミステリとかファンタジーとかも読むのに…」

紅葉さんは再び顔を赤くする。

「いや、紅葉さんの『鉄琴と暁』の感想が聞きたいのもあるんだけど…」

「だから…そういう所だよ！もう！」

彼女は腕を組み、わたしから目を逸らす。言い方が悪かったのかな…。

「私の気持ち…気づいてくれるよね？鈍感で真っ直ぐだけど、私は…そんなあんたが本当は…」



「せ、先輩…」

ソファに座っていると、隣にいる二階堂さんが話しかけてきた。というか『先輩』つて…？

「生徒会書記のお勤め、お疲れ様です！」

いきなり大声をあげてきた。妄想の中では、わたしは生徒会の一員なのか？

「…二階堂さんも、いつも美化委員として頑張ってるよね。ところで、用件は…」

「知らないんですか？今日はバレンタインじゃないですか！アタシ、先公の目を盗んで持ってきたんですよ！」

そういえば今はバレンタインという設定だったな…。

二階堂さんは普段はタメ口なのに、目上の人に敬語を使うなんて意外だ。



「学校をキレイにするのが忙しくて、バレンタインには作れなかったんですけど…先輩、どうぞー！」

二階堂さんが取り出したのは、チョコ菓子『カカオタイフーン』20個入りの箱。

しかも、『GABAとカフェイン入り！ヤングでナウな若者に大人気！』と書いてある。

「これなら気軽に食べられるし、GABAやカフェインが入ってるから授業中や会議中にも眠くならないだろうし、と思って買ったんですが…」

「中々元気が出そうなチョコレートだ。今食べてもいいかな？」

「いいですよ！ただ、カフェイン中毒と食べかすには気をつけてくださいね」

箱から『カカオタイフーン』を取り出し、包装を外す。丸い渦型のチョコレートを口に入れる。

…これ、クッキーが少しだけ入ってるのか。二階堂さんの言う通り、食べかすが出さうだから一口ずつ食べなくてよかったと思う。

「体にも良さそうだし、一口サイズで食べやすいし、これを選んでくれてありがとう」

「せ、先輩！どういたしまして！」

二階堂さんがいきなり頭を下げてきた。

「やっぱり先輩は、強くて優しいですね…」

「強くて、優しい…?」

「この前掃除したら体罰野郎の先公の不倫。パパ活の証拠を見つけちゃって、色々あってそいつに殴られそうになった時に必死に庇ってくれましたよね」

パパ活する体罰教師って。二階堂さんの学校ってかなり治安悪いんだな…。

「さっきのは、その時のお礼です。こんなんだけど、ずっと前から渡したかったんです」「いいよ。酷い事するような奴には罰が下るのは当たり前だ。それに、あのチョコは美味しかったよ」

「ありがとうございます。先輩は、とても紳士的ですな…」

二階堂さんが人差し指を合わせ、顔を赤らめる。

「先輩…MINEのアドレス、交換しませんか? 日常とか宿題のお話でいいんで、先輩と話し合いたいです」

「わたし、SNSはあまりやらないんだけど…いいの?」

「暇な時で大丈夫です。アタシ、先輩と繋がれるだけで幸せ…って! 何恥ずかしいこと言ってるんだよアタシ!」

二階堂さんは自分の頭をぼかぼかと殴る。

「自分で自分を責めない方がいいと思うよ…」

わたしの声はそんな彼女に届いていないみたいだ。

「先輩と一緒にいるのに、なんでこんなに恥ずかしいんだよ…ちくしょー！」



藍葉さんのバレンタインの妄想は、どんなものなんだろう…？

「鈴原さん。こんな私の、実験にいつも付き合ってくれてるよね…」

妄想の中でわたしは、藍葉さんを手伝っているのか。

「時々ミスしてピーカーちゃんを割ったり、実験用の塩と砂糖を間違えたりするけど。私が思いつかないような凄いアイデアを思いつく」

…どれだけドジなんだ、わたし。それに、アイデアを出すのが得意なんだな。

「挑戦が怖い私の背中を押して、どんなことがあっても信じてくれる。そういうあなたに、今日はありがとうの気持ちを伝えたいんだ…」

「今日はバレンタインだから、チョコレートなのかな？」

「そうだよ。喜んでもらえるかな…？」

相変わらずの慎重派だけど、彼女の事だからチョコを忘れる…ということはなさそう  
だ。

藍葉さんはカバンの中に手を入れ、リボンと包装紙でラッピングされた赤い箱を取り

出す。

「鈴原さん、ごめんね。最初は自分で作ろうと思ったんだけど、埃が入るかもしれないと思ったら怖くて、結局市販のチョコレートちゃんになっちゃったの…」

「いいよ、気持ちがかもつていれば」

「うん…都心部の高級チョコレートショップで50分並んで買えるか買えないかのものだけ」

…そんなレアなものをプレゼントしようとしてるのに、謙遜した態度を取るのか…。「でも、藍葉さんが50分も並んだってことは、わたしに美味しく安全なものを食べて欲しいってことなのかな。そういう気持ち、大切にされた方がいいと思う」

「そうなんだね。一応毒は入ってないと思うから…食べて欲しいな」

藍葉さんが箱を差し出してくる。受け取り、ラッピングを外し、箱を開ける。

金と銀のアルミに包まれた、一口サイズの丸いお菓子が入っていた。

「ありがとう。じゃあ、食べるね」

アルミを外し、丸いチョコレートを口に運ぶ。中にクリームが入っているようだ…。

「うん。美味しい」

「…よかった…鈴原さんが喜んでくれるなんて、こっちも嬉しくなるなあ」

幸せそうな笑顔を浮かべる藍葉さん。どうやら安心しているようだ。

「ねえ、鈴原さん…」

藍葉さんが見つめてくる。プレゼント以外に何かあるのかな？

「万が一の場合、もし私がどこかで道を間違えていたとしたら…あなたはどうするの？」  
大切な人が、間違えるとしたら…わたしは、ちゃんとした方向へと導けるんだろうかと考える。

「たとえば藍葉さんが誰かにとつての間違いを犯したとしても、わたしはあなたの味方だよ。だから、安心してほしい」

「私の味方になる…あなたのこと、信じてもいいの？」

「大切に思うってことは、そういう事だと思う」

そう言った直後。藍葉さんは、わたしに近づいたと思うと。

「…!？」

いきなり、抱き締めてきた。

「鈴原さん…私も、あなたを信じていいかな？」

思考が停止するが、わたしは無意識に藍葉さんを抱き返す。

彼女の体温が、コート越しに伝わってくる…。

「全力で、私を安心させてね。私も、鈴原さんを安心させるから…」

# ホワイトデー?特別編くチョコレートハウスの男子たち

く

「…」

乙女の部屋に置かれているだろうファンシーな家具と、ピンクのハートがプリントされた壁。

座っているのはふわふわのハート型のソファだし、板チョコの模様のテーブルクロスが敷かれた丸いローテーブルもある。

そして、後ろには菓子を作る為であろうカウンターキッチン。

そういうえばこのチョコレートハウスじゃ、相手はわたしを理想の相手だと思いつむんだよな…?

チョコレートハウスにいるみんなには、わたしはどう見えるんだろう…?

◆

「…」

いつも純粋な絹川くんだけど、どんな妄想をしてるんだろう…？

「鈴原さん。今日は、勉強はお休みみたいだけど…」

わたしは絹川くんの妄想の中じゃ、勉強を教えているのか…？

「ボクにいつもみたいに、色んなお話を聞かせてほしいんだ」

絹川くんはわたしの話を聞きたいらしいけど、何を話せばいいのかわからない…。と  
いうことで、質問してみよう。

「どんな話が聞きたい？話せる事といえば…星座に纏わる神話とか、世界の珍しい風習  
とか、古典文学のあらすじとかそんなのしかないけど」

「じゃあ…神話の話がいいな。これならお父様にも怒られないだろうし」

…怒られないって？絹川くんのお父さん、結構厳しいのかな？

それでも絹川くんが目を輝かせて待っているみたいなので、早速話そうかな。

「まずはアルゴ船の探検隊の話でいいかな？おひつじ座やヘルクレス座の由来でもある  
んだけど…」

「ヘルクレスって確か、凄い英雄なんですよ？楽しみだなあ！」

「…その王様の娘が、イアソンのことを好きになっただよね。そのおかげで…」

絹川くんは、目を輝かせながらわたしの語る神話を聞いている。

わたしは記憶を辿り、本で読んだ英雄たちがどんな活躍をしたのか、どうやって空に

輝く星々となったのかを口述していく。

「メーディアの弟さんは、なんで殺されちゃったの?」

「そこがわかってないんだ。時間稼ぎの為なんじゃないかとは言われてるけど…」

「どんな理由でも…弟さんが可哀想だね…」

感情移入しているのか、しゅんとした表情をしている絹川くん。

時に登場人物の成功を喜び、死を悲しみ、活躍を楽しむ。

話しているうちに、絹川くんが本当は感情豊かな人間だということがとてもよくわかってきた。

覚えている限りのアルゴ探検隊の話を終えた後。

「鈴原さんのお話、本当に面白かったよ。そう言えば今日は、チョコレート…を送る日だよね?」

絹川くんが、いつの間にかテーブル上に置かれていた紙袋から、小さな黄緑色の正方形の箱と。

もう一つ、10cmほどの大きさの亜麻色に塗装された木箱を取り出してきた。

「ありがとう。この二つには一体何が入っているの?」

「開けてからのお楽しみ!お菓子の方は作るのは初めてだし大変だったけど、鈴原さんが喜んでくれたらいいなと思ってるよ」



プレゼントされた箱を開けてみよう。まずは正方形の箱を開ける。

…中には、ココアが振りかけられた小さな四つの丸く茶色いお菓子と、白い楊枝が入っていた。

「これはチョコ餅。味見は一応しているからね。気に入ってくれたら嬉しいな」

「早速頂くね。絹川くんだし、きつと美味しくできてるよ」

楊枝でチョコ餅の一つを刺し、口に入れる。甘く柔らかな感触を噛み締め、飲み込んでいく…。

「…甘くて美味しいね。残り三つも食べていいかな？」

「いいよ！鈴原さんの為に作ったし…もつと沢山、作れば良かったかな？」

残りのチョコ餅を全て食べた後、プレゼントされたうちのもう一つの箱を開けることにした。

木箱の蓋を開けると…梱包材に包まれた陶器の人形があった。

壊れないように取り出してみる。背中には白い翼が生えており、大きな星を両手で抱えながらわたしたちに優しく微笑みかけている。

「天使の…人形？」

「うん。…利益のある粘土を使って、焼いたんだよ」

陶器の感触は硬く冷たいが、それでも絹川くんの想いと熱が伝わってくる。

「鈴原さんがこれからも、幸せに生きていられるように。そんな願いを込めて作ったんだ。気に入ってくれるといいんだけど…」

「相手の幸せを願って、作られた人形だもの。わたしは嬉しいよ」

「…本当?ありがとう!」

絹川くんは顔を赤くしながら、わたしを優しく抱きしめる。

「ひゃつ…!」

つい驚いてしまう。でも、すぐに抱き返す。こうして、わたしたちはお互い笑いあう。「鈴原さん。これからも一緒に側にいて、一緒に色んなことをお話して…一緒に生きて欲しいな」



湖林くんの妄想は…どういったものなんだろう?

「…おい、濃姫。貴様は現代に随分適応しているようじゃのう」

湖林くんがわたしの肩に手を乗せてくる。そういえば濃姫って、帰蝶とも呼ばれている織田信長の正室だよな。

彼女もまた、彼の中では赤ちゃんの姿でタイムスリップしてきた設定なんだろうか?

「まだ記憶が戻っておらんようじゃ。まあ、ゆっくり思い出せばいい」  
「でも、濃姫まで都合良く現代に来るとは思えないんだけど…」

湖林くんがこつちを見て、ため息をつく。しまった。ここは妄想に合わせるべきだったかな…？

「そのはつきり言う態度は相変わらず、mamushiに似てるのう」

「…mamushiって？」

「斉藤道三じゃ。恐らく様々な武将を殺していき、油売りから大名にまで登りつめ、梟雄と美濃のmamushiの異名を与えられた男。貴様の父親でもある…そんな武将じゃ」

妄想のわたしは、そんな下克上に定評のある人の娘なのか。

「教えてくれてありがとう。ところで、濃姫って帰蝶とも呼ばれてるんじゃない？」  
「帰蝶は江戸時代の『美濃国諸旧記』に出てくる名前じゃ。正直、オレにとつてはしつくり来ん」

…後から付けられた名前だから、しつくり来ないのかな。

「ところで、今日はバレンタインだったのう。喜んでくれるかどうかはわからんが…」

湖林くんはテーブルに置いてあった茶色い手提げ袋を手に取り、わたしに渡す。

「駅前で売ってたチョコのかりんとうじゃ。一応手を拭く用のやつも用意しておる」

手提げ袋の中身は…殺菌ウェットティッシュと、甘い油の香りがする白い紙袋が入っ

てあった。

「湖林くん、ありがとう」

感謝を述べた後、紙袋をゆっくり開けると…褐色で棒状のお菓子が大量にあるのがわかる。

「こんな既製品しか用意ができなかったんじゃが、食べてくれるかのう?」

「湖林くんが用意したものなら、きつと心はこもってると思う」

そう言うと、湖林くんの顔が少し嬉しそうな雰囲気になった。

わたしはまずウェットティッシュで手を綺麗に拭き、かりんとうを取って一口食べる。

甘く優しくコーティングされたチョコレートの味と、揚げたてのかりんとうのサクサクとした食感が口の中に広がっていく…。

「…チョコがいい感じに絡んでる。結構美味しい」

「そうか。貴様が喜んでくれたのなら良い。もつと食え」

お言葉に甘えて、更に食べることにした。

「ねえ…湖林くんはかりんとう食べないの? こういうのは、一緒に食べた方がいいと思うよ」

「なっ!?!」

そんなことを聞かれた湖林くんは驚いた後、少し照れくさそうに顔を赤くする。

「そうきたか濃姫…貴様は積極的じゃのう。戦国の世も、現代でも変わらん」

「でも今は分かち合ったり、理解したりしていく時代だからね。こうやってお菓子を食べるのも同じだと思う」

湖林くんは紙袋に手を入れ、中のかりんとうを取って食べていく。

「確かに、貴様の言う通りかもしれないのう…」

紅潮した顔を、恥ずかしそうに背けながら…。

「たとえ時代が変わったとしても…オレは貴様には、決して勝つことが出来んのじゃよ…」



未隅くん、どんな妄想をするんだろう。雨崎さんという大切な恋人がいるけど…。

「鈴原さん。今日は話がしたくてここに呼んだんだけど…」

未隅くんは真剣そうな顔でこちらを見つめてくる。

「弁護士のお娘である、正義感の強い君なら…あの件について言えると思ってるんだ」

妄想の中のわたしは、弁護士の子供なのか？それにしてもあの件って？

「どんな話なんだ?聞けるならなんでも聞くけど…」

「そうか。ありがとう…。実は僕が教えている後輩が、この前の他流試合で…ペナルティを沢山犯してしまったんだ」

後輩のミスか。責任感の強い未隅くんだから、自分のことのように苦しんでいるんだろうな。

「ハイタツクル、コラプシング、アクシデンタルオフサイド…。後輩は上級生たちに責められて落ち込んだ。でも、その日は僕も調子悪かったし、監督不十分だったのも悪いんだらうね…」

…ラグビー用語はよくわからないけど、頭を抱えているのを見ると未隅くんの本心と後悔が窺える。

深呼吸し、未隅くんに語りかける。

「責任を感じているんだね。後輩が落ち込んだってことは、ペナルティについてはそれなりに反省しているんだと思う」

「鈴原さん…」

「後輩と一緒に反省できる未隅くんはちゃんと頑張ってる。だからこそ、育成を任せられたんだらうね」

ラグビー部の現場を知らないわたしの言葉が正しいかどうかはわからないけど。

未隅くんには冷酷なアドバイスではなく、励ましの言葉が必要だと思う。

「梨々も、許してくれるかな…」

彼が雨崎さんが好きなのは相変わらずだ。少し安心した。

「雨崎さんはしつかり悔いているあなたを、嫌いになることはないと思うよ」

それを聞いた未隅くんは、ちよつとだけ笑顔を取り戻している。

「…ありがとう。心がなんだか軽くなつたよ」

わたしも安心する。落ち込んでいる未隅くんを見ると、なんだか辛くなるから。

色々相談を聞いていくうちに、未隅くんが懐から何かを取り出してきた。

「これは、話を聞いてくれたお礼だよ。チョコレートじゃないけど」

渡されたのは、ラムネ菓子が入っている青いアルミの袋だった。ご丁寧に『ブドウ糖

85%』と大きな文字で書かれてある。

「小説家の母さんがいつも食べているんだ！ブドウ糖は集中力を与える脳の栄養になる

唯一の栄養素だからね。これを食べて、頭からスツキリ！筋肉もスツキリ！」

未隅くんが、いつもの元気を取り戻している。

「（こちらこそありがとう。じゃあ、食べていいかな？）」

「構わないさ！リフレッシュは全てのスポーツマンに必要なものだからね！」

わたしはスポーツマンではないけど…。まあいいや。

青い袋のチャックを開け、中の小さなラムネ菓子を口に放り込む。爽快感とパンチの効いた味が、口の中で溶けていくような…。

「うん。これを食べると、力が湧いてくるような気がする」

「ははははは!母さんは懐かしい気分になれるって言ってたけど、鈴原さんはみなぎってくるんだな!」

懐かしいかどうかはわからないけど、未隅くんの楽しい様子を見るとこっちも嬉しくなってくる。

「ところで…雨崎さんにはバレンタイン、何か渡す予定とかある?」

「梨々とかい?渡すというより、少しお高めのアフタヌーンティー?を予約しているよ!梨々が喜んでくれるといいんだけど…」

雨崎さんのことだから、きつと喜んでくれると思う。

わたしは未隅くんがこの部屋を出ても、雨崎さんと二人で上手くやっていけることを願った。

「君は僕の数少ない、信頼できる友達…そう思ってるぞ!」





「…」

檀くんが、じつとこつちを見ている。どんな妄想が始まるんだろう…？

「ヴルカーン…あんた、人間になって上手くやれてる？」

早速人間になった、と言ってきたけど…ヴルカーンって誰なんだ？

「アウリンコ海軍が誇る、スピードの速さと対艦に特化した能力がウリのミサイル駆逐艦…」

もしかして今のわたしは…そんなハイスペックそうな駆逐艦が擬人化した存在なのか？

「一応は、なんとか生活できてるよ」

「そっか。元は駆逐艦だから妹系みたいな感じかなと思ってたけど、どっちかって言うのと、同級生タイプだな…」

同級生、まあ確かにそんなものかもしれないけど。駆逐艦だから妹系ってどういう事だろう。

「檀くんは、妹系が好きなのか…？」

軽く質問してみる。檀くんは、ビックリと驚いてから顔を赤くする。

「いや、妹系は流行りだけどさ、妹でも姉でも遊んでくれる人の方が個人的には好きだな…」

「……ここで何かで遊んでみる?」

「だね。そういうやヴルカーン、テレビゲーム好きでしょ?一応携帯ゲーム機は持ってきてるんだよね」

即答だった。今のわたしはゲーム好きか。檀くんはテーブル上の紙袋から二つ分の携帯ゲーム機を取り出した。

しかし、ヴルカーンと出会って長そうだし、あだ名では呼ばないんだな…。

早速ゲームで遊んでみることにした。対戦アクションものだ。わたしが慣れていないせいか、それとも檀くんが強すぎるのか中々勝てない。

防御して隙を突こうとするのが精一杯だ。

何回目かの勝負の後に、檀くんがわたしに語りかけてきた。

「あんたを操縦して海賊連中を撃破した時、凄く扱いやすい艦だって思った。けど、人間のあんたは違うみたいだ」

…いきなりどうしたんだ。そういうえば檀くん、海賊を駆逐艦一隻で倒したって言うってたよね。

「勝つために何度でも必死に足掻いて、突破口を見つけ出そうとする。それが人間の姿のヴルカーン…な気がする」

「そうだね。わたしはアウリンコの英雄とも言える存在だから。操縦させる為の柔軟さ

と軍の勝利の為にむしやらになることがわたしのモットーなんだ」

「いつでもアグレッツシブなんだね、ヴルカーン。やっぱすごいや」

目をキラキラさせている檀くん。：彼の理想、これでいいのかな。

「そーいや今日はバレンタインだったね。本当は女の子が男の子にチョコ送る日だけ。これ、買ってきたよ」

檀くんはまた紙袋から爽やかな青色の箱を取り出し、わたしに渡す。

「檀くん、ありがとう」

箱を包む『j e g s k a l s e n d e d e t t i l d e g.』と書かれた金色のリボンを外し、蓋を開けると：赤や黄色、オレンジの綺麗な色のマカロンが入っているのがわかった。

「アウリンコ出身の人気パティシエが作ったやつなんだ。ヴルカーン、今すぐ食べる？」

「じゃあ、遠慮なくいただこうかな」

オレンジ色のマカロンをそつと手に取り、口に入れる。

チョコレートがサンドされた、爽やかなオレンジの味がする…。

「…結構美味しい。流石アウリンコの血を引くパティシエだ」

「気に入ってくれて良かった。俺も食べていいかな」

「いいよ。こういうの、二人で食べた方が美味しいと思うし」

「相変わらず人たらしなんだね。じゃあ一個だけ頂くよ」

人たらし?そんな事を言われると少し驚いてしまう。檀くんは、嬉しそうな様子だけど…。

「元の姿に戻っても、俺のこと忘れないで欲しいな。俺もあんたとの思い出、絶対忘れないからさ…」



「今日は親しい人間に菓子類を贈与する日と言われているが、どのような菓子が正解となるだろうか…?」

イヴァンくんが相変わらず独り言を呟いている。

彼の妄想のバレンタインは、どのようなものなんだろうか…?

「アウリンコとこの国を結ぶ親善大使である貴女が、私と相識してからだいぶ経ちますね。ツバキ」

いきなり名前で呼んできた。それにしても、わたしが親善大使…?

「最初は留学生の一員だと思わしていましたが、様々な会話や交流を重ねていくうちに、共にいるだけで心臓が早鐘を打つようになって…そこで認識したのです」

少し人間らしきのない口調は、いつものイヴァンくんだけど…。

「…貴女が、誰よりも大切な存在である」と

イヴァンくんは、真剣そうな眼差しで見つめてくる。

「やがて私は『ツバキと婚約したい』と思考するようになりました。私は、幼少期の時以来に父に意見しました。どうか、婚約させてほしいと」

…わたしがイヴァンさんと婚約？なんだかキラキラした漫画みたいな展開だ…。

「ところで、返事はどうだったんだ…？」

「『お前の連れてきた人間にろくな奴はいない。諦めろ』という回答が返ってきただけです」

冷たい親だな。イヴァンくんは確か貴族の生まれだから、お父さんも厳しいだろうな…。

「そこで、私は考案しました。『駆け落ち』という行動を取ればいいと」

か、駆け落ち?! 思わずソファから立ち上がる。

「イヴァンくん、どこでそんなことを知ったんだ?!」

「外国のテレビドラマです。交際を承認されない人間同士が共に逃避することだそうです。ツバキは、駆け落ちしないのですか？」

…ここはイヴァンくんの妄想に合わせた方がいいよな…。

「無論、駆け落ちするよ。わたしのお父さんも割と厳しいから婚約に反対してた。でも、この時が自分の親に反抗できるチャンスだと思ったんだ。荷物も詰めて家出しちゃった」

「…反抗、ですか。実にツバキらしい行動ですね」

「だからイヴァンくんも一緒に、どこかへ逃げよう。旅は大変だろうけど、二人一緒にいればなんとかなると思う」

イヴァンくんに手を差し出すと。彼は大きな手を、わたしの掌に乗せる。

「賛同します。では、次の飛行機が到達するまではここに隠伏しましょう」

手袋に包まれた手からは、熱が伝わってきた。

「そういうえば、今日はバレンタインでしたね。ツバキは、アレルギーなどは有してますか？」

「アレルギーはないよ」

「了解しました。では、私からの贈与品であるガトーシヨコラです」

イヴァンくんは、透明な箱の中に入れられた茶色いカップケーキを渡してきた。

「スプーンと紅茶も一応は用意しています。摂取されますか?」

「ありがとう!じゃあ、飛行機が来るまでゆっくり食べようかな」

箱を開け、スプーンでケーキを掬い口に入れる。

しつとりとした、ほろ苦いビターチョココレートの味がする。

「美味しいね。これ、自分で作ったの？」

「インターネットで検索したレシピに記載されたものを参考に調理しています。ビタミン剤も混入していますが…貴女の評価が高いのなら光栄です」

通りで少し酸味があると思っただけ…まあ、体に良さそうだからいいかな。

「そろそろ、飛行機が到達する時間ですね。空港に向かわれますか？」

全てを食べ終え、わたしとイヴァンくんはソファから立ち上がる。

「いいよ。まず二人でどこに行く？遠い所がいいかな？」

そう言ってチョココレートハウスのドアを開ける。わたしたち二人は、眩い光に包まれていく…。

「ツバキと二人なら、どこまでも行けそうな気がします。貴女は、私の翼です…」



「あ、鈴原姉ちゃんやん…こういう所にいるなんて珍しいなあ！」

灰寺くんの妄想、どんなのなんだろう…？

「灰寺くん、今日はどうしたの？」

「どうしたって何も…今日はバレンタイン、好きな人とか友達とかにチョコ送る日なんやないの?」ってことでチョコ、渡しとくけん」

灰寺くんはいきなり、大きなチョココレートの一つ入った青い透明の袋を渡してきた。中のチョココレートは星型だ。

「何かナッツみたいなのが入ってるけど…」

「これ? マテバシイやな。ドングリの一種で食べられるんやで」

食べられるものなら安心だけど、実に灰寺くんらしいチョココレートだな…。

「…ドングリの入ったものか。じゃあ、早速食べていいかな」

「よかよ! 味見もしつかりしてるからお腹は壊さへんと思うで!」

袋を開けてチョココレートを取り出し、食べる。癖の少ないドングリと甘い風味がマツチしている。

「なかなか美味しいね。ありがとう」

「やったー! マテバシイ見つけるの大変だったけど、そう言われると嬉しくなるねん!」

「そういえばさつき、『こういう所にいるなんて珍しい』なんて言ってたけど。一体どうしたの?」

「鈴原姉ちゃん、こういう都会みたいない場所にいることあんまないやん。いつもはテント張って、椅子に座って焚き火してるし。釣りとかカヌーとかもやってるし」



妄想の中のわたしは、アウトドア好きの女子なのかな。

「君に会ったのは…確か裏山の森で昆虫採集とかバードウォッチングとかしてた時やったな。雨が降って、川辺の洞窟で雨宿りしようとしたら中からなんか声がするなーと思ってたんや」

灰寺くんは、少し困ったように話す。

「それで洞窟の奥に入っていったら足を怪我してる君がいて…大変だ、と思つて。雨が止んだ後君を抱えて下山したねん」

灰寺くんは、わたしの命の恩人なのか…。

「それから鈴原姉ちゃんにはお世話になってるな！しっかりとしたテントの張り方とか、森の中で飲むコーヒーの美味しさとか。僕にも分からんことを教えてくれて、本当感謝してるねん」

テントを張った記憶はないけど、灰寺くんも、わたしの恩人なんだな。

「灰寺くん」

わたしは楽しそうに話す灰寺くんを見つめる。

「…え？鈴原姉ちゃん？」

「わたしも、あなたに出会えてよかったって思つてる。あの時洞窟にあなたが入らなかつたら、わたしは今ごろここにはいなかっただろうし」

灰寺くんは顔を赤くしたまま硬直する。

「だから、これからも一緒に森の中でアウトドアやっていこうね」

「…そう、やな…」

例え妄想の中だとしても、目の前にいる灰寺くんは灰寺くんだ。

だからこそ彼を尊重したいし、彼らしさを肯定したい。

夢から覚めても、そうやっていきたいと思つた…。

「鈴原姉ちゃん。やっぱり、一緒にいたいんやろうか。僕も…同じかな…」



目の前の蒲生くんは、いつも通りの笑みを浮かべている。こんな彼だけど、どういう妄想をしているんだろうか。

「今日も、天が輝いていますね…」

優雅に本を読み、チョコレートハウスのプレッツェルのような窓をうつとりと見つめる蒲生くん。

「ねえ蒲生くん。今読んでいる本はどういうものなんだ…?」

「知らないのですか、シスター。これは天の書うちの一書。天の言葉が書かれたもので

す」

わたしは蒲生くんの信じる宗教のシスターなのか。それにしても、蒲生くんの信仰の深さは凄いな…。

「確かシスターは、インターネットで見た広告で天について知られましたよね？」

インターネットでも広告やってるんだな、蒲生くんの宗教。

「そして、アイドルのオーディションを受ける感覚で蒲生教会にやってきて…書斎の天の書を読み漁って…見事天を信じるようになられた」

なんてアグレッシブな入信の経由なんだろう。

「貴女は天の書を読み、こころ申されました。『天は美しく、厳しく、そして嘘をつかぬもの』だと。天の素晴らしさに目覚めてシスターとなられたのですね」

確かに天気予報はともかく天候は正直だ。雲の動きで雨が降るかが分かるし。

それに、雨の日も晴れの日もある。天の書に書かれていることは…ってあれ？

なんでわたし、天の宗教に共感しているんだろう？これが妄想の中にあるという代償なのかな？

「ところで、今日はバレンタインですね」

蒲生くんが懐から、取っ手のついた正方形の紙箱を取り出してきた。

「天も『大切な日、親しき者には甘いものを捧げよ』と申されています。これは、僕から

のギフトです」

渡された紙箱を早速開ける。茶色い、チョコレートのかかったリング状の揚げ菓子……ドーナツが三つ入っていた。

「ありがとう。蒲生くんの手作り?」

「はい。天の教え通り、国産のグルテンフリーの小麦粉と揚げ油に米油を使っていますね。因みにチョコレートは指定産地のものです」

天という存在は健康や産地にも気を使っているんだな。随分と現代的な宗教だ……。

「じゃあ、いただきます」

手に取ったドーナツを一口食べる。しっとりとしているし、味がチョコレートといい感じに共生しているのが良い。

「結構美味しいね。蒲生くん、料理できたりする?」

「機械を使わなければ作れますね。ミキサーなるものを使おうとしましたが、なぜか故障してしまったのでやめました」

ドーナツ作るのってミキサー必要だったっけ……?

「シスター。一つ、お願いがあります」

蒲生くんが、ドーナツを全て食べ終えたわたしに声をかけ、手を握ってくる。

「例え貴女にどのような不幸があつたとしても、どうか天と……僕だけは裏切らないでく

ださい」

「…いきなり、どうしたの？」戸惑いを隠せないあまり、口をぽつかりと開けてしまう。「天はいつも貴女を愛しています。天の言葉は貴女に光を与えます。そして、僕は貴女を導きます。だから、いつまでも信じていてください」

こんな状況でも蒲生くんは笑顔を絶やさない。

蒲生くんも天も、わたしの信仰を試しているのかな。

考えているうちに蒲生くんの握る手の力が強くなっていく…。

「貴女の心を、天は信じています。そして僕も貴女の心を、守りますからね…」



梅田くんの妄想は、どんなものだろうか。

わたしには想像がつかないけど…。

「二年C組の、鈴原椿…だったよなー?」

一年生?わたしはそれよりは少し上だけど、妄想の中では梅田くんの後輩なのかな。

「今度の日曜、遊びに行つて見ねえか?新しいブックカフェが出来たんだよなー」

いきなり遊びに誘われた?!?目の前の梅田くんはモジモジしながら会話をしている。

「いいけど…どうして誘ったんだ?」

「…いつも図書館で本読んてるから、読書好きなのかなと思っただよな。それにあった、オレと同じ図書委員だし」

「図書委員の後輩か。やつぱり、いつも行動を共にしてるのかな。」

「折角だしいい感じのブックカフェと一緒に読書したいな、と思ってるんだよな」

「そうか。わたしの趣味、知っててくれてありがとう。日曜日、二人でブックカフェに行こうね」

梅田くんのお願いなら、断りきれないな。

「…やったぜー!あそこにはいろんな本あるらしいし、楽しみだな」

万歳する梅田くん。それほど妄想の中のわたしと、一緒にブックカフェ行きたかったんだな…。

「あと、今日はバレンタインだったよな。これ、食べねえか?」

梅田くんがいつの間にかテーブルに置かれた紙袋から、箱を取り出した。

箱は美しい幾何学模様が表紙に書かれた本のような形をしている。

「ありがとう。結構センスある本の箱だね」

「こつちこそな。オレもこの箱、気に入ってるんだよな」

蓋を開けると、ナッツやココアパウダーなどで飾られたトリュフチョコレートが入っ

ていた。

高級店か百貨店で買ってきたのかな。そう思いつつ、早速一つを手にとって食べる。ココアによって引き立てられた、生チョコレートの柔らかい味がする…。

「結構、美味しいね。もつと食べていいかな？」

「OKなんだなー。これ、あんたの為に買ってきたしなー」

梅田くんが胸を張る。わたしは次のトリュフを口に入れ、味わっていった。

「そういう鈴原、髪型変えたのかー？」

「わたしの髪型が、どうかしたのか…？」

「いや、いつもの三つ編みじゃないんだな…」

髪を結ぶのは得意じゃないんだけど、妄想の中ではわたしは日常的に三つ編みなのかな。

「その…解いてるのも、いいなって…」

はにかみながら梅田くんに褒められた。なんだかこっちまで緊張してくる。

「三つ編みじゃない方が、風呂呂に入る時にわざわざ解かずに済むって知ったんだ。似合ってるって言われたなら…嬉しいな」

「ううっ…！」

わたしが感想を述べた直後、梅田くんが胸を押さえたと思うとソファにドサリと倒れ

た。

「大丈夫か!?なんか水、持ってきた方がいいよな!?!」

必死に起こそうとするが、梅田くんは多幸感に溢れた表情のまま目を閉じている…。

「今、なんだか胸が熱いんだな…オレでも上手く言葉にできないけど、これが…ああ…」